THE KAIZO

改造

新年號

1922

有島武郎譯

ホヰットマン詩集

（譯者裝幀）

四六版天金
表紙見返共
總布

◎定價壹圓九十錢
◎送料八錢

彼れわ恐らく完成者ではない。然し彼は確かに創始者だ。健全な胚子、自由な泉源、それは彼れ。彼れを識り、彼れを味へ…………譯者

柳宗悅譯

ブレークの言葉

（四六二倍版 挿畫卅六）

◎定價四圓
◎送料六錢

こゝに異常な畫家であり詩人であるブレークの言葉が譯出された。十幾個の彼の書翰は彼の深い靈の生涯の貴重な記錄である。又殆ど彼の凡ての散文から拔粹せられた彼の言葉は宗教に關し藝術に關する彼の鋭い智慧を語つてゐる。吾々は是等の言葉を通して未見の世界を見、未知の世界を知る喜びを得る事が出來る。未だ世に多く現はれない四十枚に近い挿繪、及び其各々に附せられた詳細な解說は、ブレークの心を更に一層讀者の前に現はすであらう。出版者は此譯書が多年ブレークの研究者を以て知られた人の手によつて譯された事を讀者に注意したい。

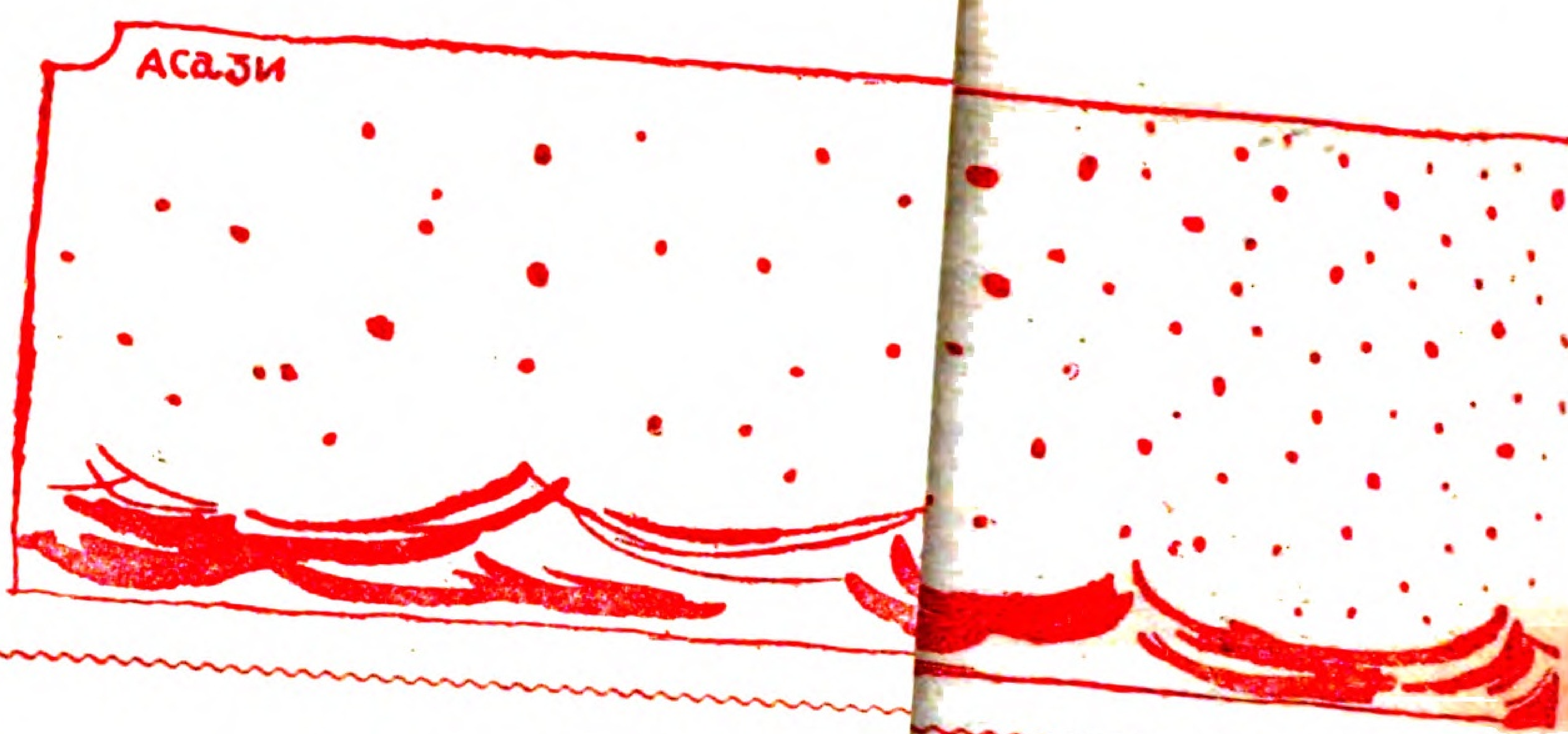
東京牛込神樂町二　叢文閣　電話番町四八一二　振替東京四二八八九



改造新年號目次

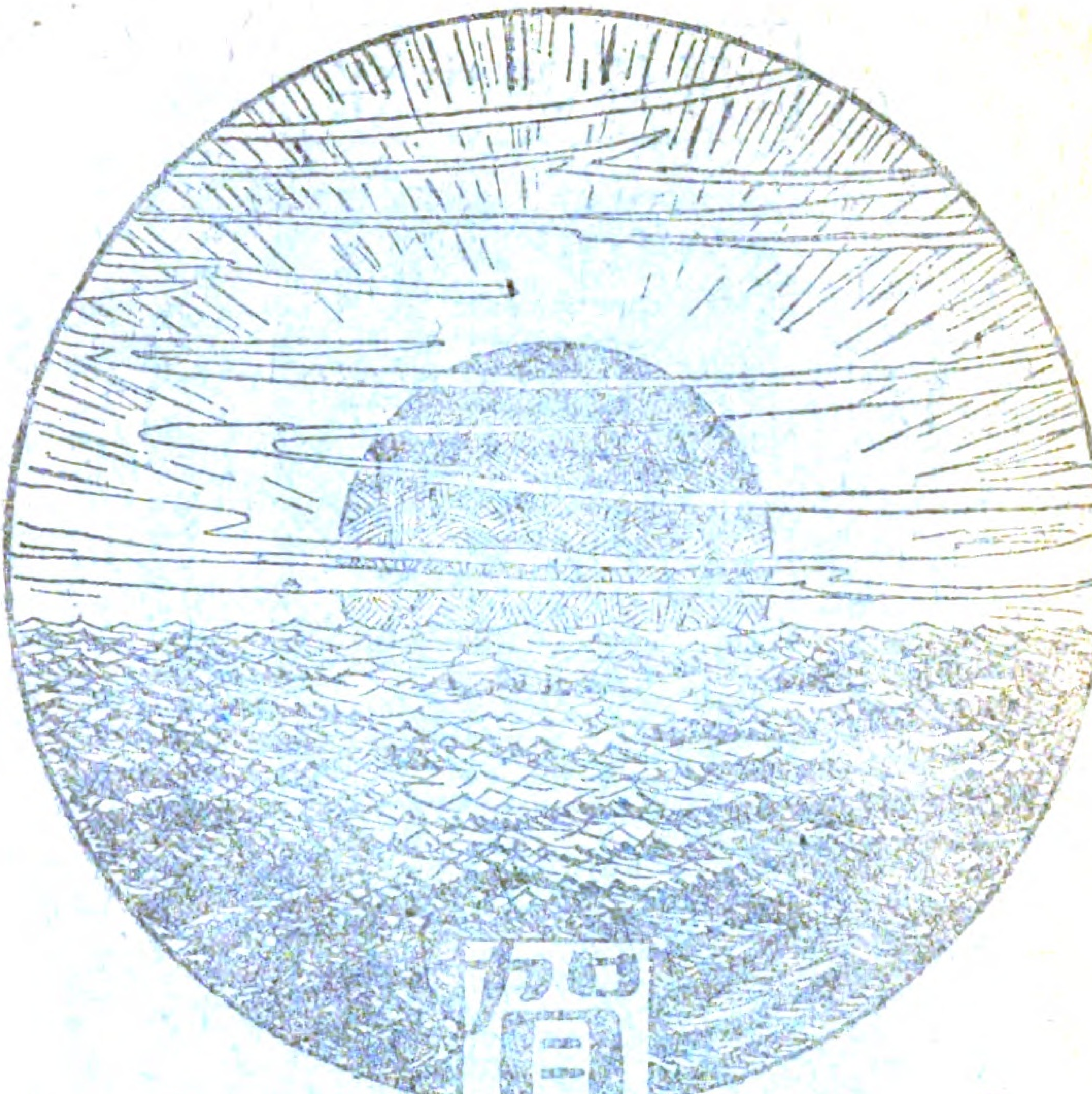
「一九二二年以後の人々」

一個の悲壯史劇の大作たる以上に、現代の思想と生活とに向って投ぜられたる靈的の一大照明彈也。



著名	書名	裝幀	定價	郵稅
興文社編	少年叢書 漢文學講義（全廿六冊）	菊版 和綴本	各一、三〇錢	一二錢
芳賀剛太郎	漢和大辭書（大形縮刷）	四六版 三六版	大 六、〇〇 小 三、〇〇	三〇 一八
芳賀剛太郎	增補訂正 漢和大辭林（大形縮刷）	四六版 三六版	大 三、三〇 小 二、三〇	二四 一二
伊東敬一	增訂 實用電信學	菊版 上下二冊	上 二、五〇 下 二、四〇	各一二
駒井春吉	農家副業全書	菊版 美本	二、五〇	一八
岡村愛藏譯	スキントン氏 英文學詳解	四六版 千百頁	四、五〇	一八
繪畫研究會	南宗畫法	菊四倍紙 繪畫二百	四、〇〇〇	五四
平渡緒川	書畫鑑定法 印譜落款集（全三冊）	菊版 二千餘頁	二三、〇〇	四八
不折 滿谷 大下 河合 吉田 中川 孟郎 未醒 高村 柏亭	瀨戶內海 十人寫生旅行	四六版 美本	四、〇〇	一二
石川 大下 渡邊 河合 吉田 中川 小杉 滿谷	瀨戶內海 寫生一週	四六版 美本	四、五〇	一二
川合春充	心身強健術 附椅子運動法	四六版	二、五〇	一二
川合春充	強い身體を造る話	四六版	三、〇〇	一八
山下信義	一事貫行	四六版	一、八〇	一二

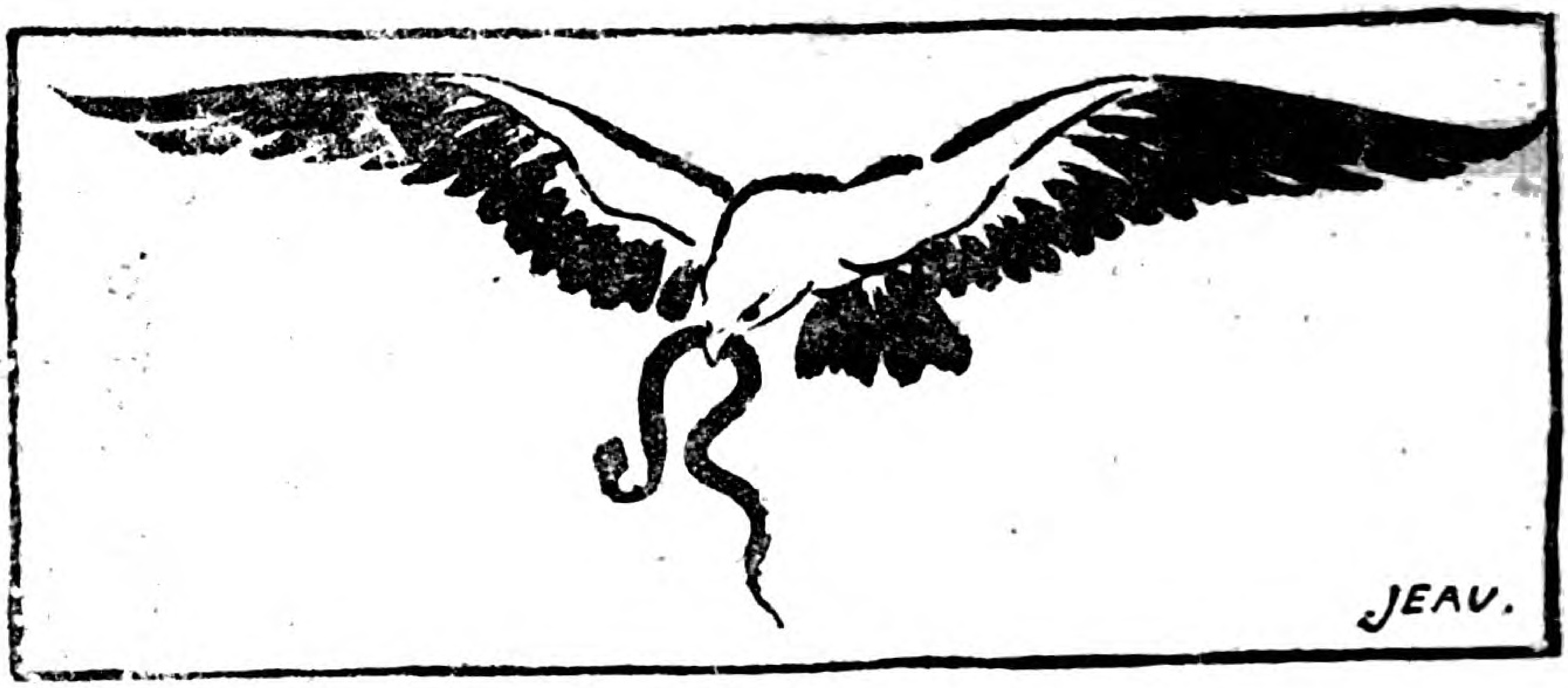
發行所 東京日本橋區馬喰町四番 振替東京一八四四番（電話神田 八六番 八七番） 株式會社 興文社



賀正

大正十一年
一月一日

株式會社
秀英舍



＝（改造一月號）＝

南國の哲人に與ふる書

一九二一年は平凡に去つた。今ごろは又南國の空が戀しい、過ぎし日の椰子の葉蔭の事が思はれて涙と共に追懷の情に堪えないものがある、私は貴國のガンデー氏は未だ一面の識もない、しかし氏の非協同運動がいかに根抵あり、そして氏の哲學の體系と見るべき「眞理の把持」がいかに印度の人々の心を領しておるかを知つておる、ガンデー氏の神の如き人格も仄聞して今ごろそんな偉人があつたかと驚かされる、私は新年匆々から血腥い獨立運動なぞの話をするのは好まない、しかし氏の個人の片影について偲ぶことは一向差支あるまい、私は氏を以つてリンコルンのモツト情熱ある者だと思ふ、プラトオのモツト政治的に、人研熱を加へたものだと思ふ、現代の人で云へばレーニン氏へモツト哲學的背景を與へ、モツト人道的神彩を加へた英雄だと云ひたい、本年は日本も哲學上の議論がなか〳〵盛んになるだらうと思はれる。アインスタイン氏の研究も一層深刻を加へるだらう、しかしそれよりは、日本の若き人々はガンデー氏の神の如き人格や、その三年來高唱し來れる「眞理の把持」について深い研究を進めるだらう。

お互に色が黑いとか、茶褐色だとか退けものにさるれば、退け者同志で親みを持つのは天地自然の情である。二億奴隷の父として彼の阿父さん振りは天下一品だ、私は年頭匆々あなたの國の哲人を廣く我國へも紹介したいと思つておる。今までは印度の文化は我國に比し一段も二段も後れておるものとのみ信じていたが、あなたの通信によりて、私は穴へも這入りたい恥しさを感じました、どうして我國へは偉人といふやうなものが生れないのでせう、コセ〳〵して島國的であるから矢張り徹底的の大眞理が出されぬのでせう。徹底的の事業が遂行されぬのでせう。ガンデー氏のやうな人は歐米にも比肩する對象は見つかりませぬ、これから先き、氏の運動はどうなりますかネ、英國の官憲は氏の事業に對していかなる手段をとるでせうね。あなたも、隨分體を大切にして下さい、南國は隨分瘴癘が多いと申しますから、若き哲人の情死沙汰も變ですからネ。

レニンの國家理論（其一）

福田德三



（一）

レニンの國家理論なる着題は、レニン自らに言はせれば一のノンセンスである。何となれば、彼れは決して自己創出の國家理論を有つものでなく、單にマルクス及エンゲルスの國家理論を忠實に祖述するものであると、自ら主張しつゝあるものである。レニンに取つては、レニンの國家理論なるもの丶存せぬこと、猶ほレニンの餘剩價値理論なるものの存せざるが如くである、レニンは云ふ。『歷史上、革命的思想家並に解放鬪爭に於ける奴隸的階級の指導者の學說に就て行はれると同一の事が、マルクスの學說に就ても行はれて居る。奴隸的壓迫者階級は大革命家が生きて居る限りは、

絶間なく之を窮追し、最も獰猛な激昂、最も狂暴的な憎惡、最も不可解な虚言や中傷を以つて、其學說に對抗する。然るに大革命家の死後になると、彼等を無害な偶像となし、彼等を神聖化し、彼等の名に、或種の榮譽を與へて、被壓迫階級を慰撫し、誘惑する爲めに、革命的學說の內容を曲解し、其學說を化して其の革命的鋭さを緩和せんとする試みが行れる。マルキシズムを此くの如く修正せんとの試みに於て、現在事を共にして居るものは、一方にはブルヂオアジーで他方には勞働運動中に於ける御都合主義者である。彼等は、マルキシズム學說の革命的方面、其の革命的精神を忘れ、打消し、逆轉しつゝある。彼等は、マルキシズムの中から、ブルヂオアジーに取りて受納れ得るもの、受け納れ得ると見へるものを選り出して、之を軒頭に表榜する。かくて凡ての社會ショーヴヰニストは、今日では、(臆面もなく)マルキシストを以て任じて居る。戯談ではない！、而して昨日までは、マルキシズムの撲滅を以て其能事として居つた獨逸のブルヂオア學者中には、マルクスは、獨逸國家的であつた、而して獨逸の勞働團體を此の盗賊的戰爭の續行に爾く美事に教育したものだと主張する者が段々に殖へて來る。此くの如き有様で、マルキシズムの曲解が前代未聞の流行を爲して居るに鑑みるときは、吾人の任務は何よりも先に、國家に關する眞正なるマルクス學說の回復を爲すことに存する』と。（一九一七年リヒトシュトラーレン版『國家と革命』第五頁）否、獨り國家理論のみではない、レニンに取りては――ボルシエヴヰズムなるものは元來はないものである、彼れに取りては、唯一マルキシズムあるのみである、マルクス及エンゲルスの說いた共產主義あるのみである、其外別にボルシエヴヰズムと名く可き異つたものはないのである。然るに現在マルキシズムの外にボルシエヴヰズムがあるのは、今日傳へられるマルキシズムは、曲解せられ逆用せられたものであつて、其れに對して眞正なるマルキシズムの立場を明かにする必要があるからである。其眞正なるマルキシズムの事を假りにボルシエヴヰズムと名けることは差支ないとレニンは言ふ。而して其曲解、逆用の最も著しいのは、

マルキシズムの國家理論に關してゞある。其理由は、マルクスもエンゲルスも、其國家理論を一ケ所に纏めて秩序的に開示したことなく、種々なる機會に於て成された片言雙語を拾綴する外、彼等の國家理論は、之を知るに由なきが爲め、不知不識の間に誤解、獨斷の起ることを免れぬ、況んや有心故造的に之を曲用逆用しようと思ふものには、誠に都合がよいのであるとレニンは云ふ。故に眞正なるマルキシズム恢復の企としてのボルシエヴヰズムに取つて、最も重要な學問的仕事は、眞正なるマルキシズムの國家論の全面目を展示することと是れであると爲すのである。故にレニンは其『國家と革命』に附題して『國家に關するマルキシズムの理論及び革命に於けるプロレタリアの任務』と云ひ、更らに副題して『プロレタリアの獨裁政治』となして居るのである。從つて其國家理論は、レニンの國家理論であつてはならぬ、若しも然うならば、其は寧ろ權威なきものたること、曲解せられたるマルキシズムの其れと同一なる可きである。レニンの國家理論は單にマルクス國家理論共ものでなければならぬのである。唯だ虛僞なるマルクス國家理論が流行つて居るから、それと相分つ爲めに眞正なマルクス國家理論と云ふ可きであつて、レニンの國家理論は、其れを便宜上言ひ換へた丈けのものでなければならぬのであると云ふ。乍去、筆者は初めから此事を許容するものではない、筆者は、レニンの國家理論とは單に眞正なるマルクス國家論の異名なるに過ぎないが、其れとも兩者の間に異同が存するかを吟味せんと欲するものである。レニンの國家理論が眞正なるマルクス國家理論であつたとて、其は國家理論として正しいと云ふことには無論ならぬ、其は別箇の考究を要する問題である。（筆者の國家と社會と近刊拙著『社會政策と階級鬪爭』序論に於に關する根本見解は其の要領を開陳してある。參照を乞ふ。）筆者は今本文に於ては此第二の問題を論究せんと欲するものではない。本文に於ては筆者は、レニンの國家理論とは如何なるものであり、眞正なるマルキシズムの國家理論と全く同一物であるか否かの考察を試みんとするに外ならぬものである。

（二）

『國家と革命』の第一章は題して『階級社會と國家』と云ひ、節を（一）階級對抗の不可越性の產物としての國家、（二）武裝人類の特殊部類、牢獄其他（三）……………………（四）……………………四に分つて居る。

レユンは先づエンゲルスの『家族、私有財產及國家の起源』から次の句を引いて立論の出立點として居る。『國家は決して外部から社會に强制せられた權力ではない、其れと共に、國家は、ヘーゲルの主張するやうな「倫理觀念の現實」「理性の肖像及現實」たるものではない。國家は一定の發展階段に於ける社會の一產物である。國家とは、社會が、其自らに對して解け難き矛盾に陷り、妥協し難き衝突に分裂し、之を驅逐す可く無能なることの表現である。乍去、此の衝突、相爭ふ經濟的利害關係を持つ階級が、其自身並に社會を、無用なる鬪爭に消磨し去らざらんが爲めに、一見社會の上に立つ底の權力が必要となつたので、此權力は、此の衝突を緩和し、「秩序」てふ埒內に保つのである。此く社會から發生し乍ら、社會の上に立つて、段々其自らを社會から離隔し行く權力が、取りも直さず國家である』（第六版及第十一版一七七八頁）レユン卽ち附言して曰く『此一節こそ、國家の歷史的役目と重要とに關するマルキシズムの根本思想を完全なる明瞭さを以て言明したものである。（約して云へば）……………、……………。……………、……………、……………、……………、……………。……………、……………、……………』…。『國家と革命』（第六頁）マルクスの言を藉れば『國家とは、……………、……………、……………、……………、……………『…』……………。然るに、マルキシ

ズム僞造者等は、此主要なる出立點に關し二個の僞造を敢てして居る。第一は、マルクスは、國家を以て階級協調の機關と認めたと爲す僞造である。第二は巧く露骨な僞造を爲さないで、遙かに巧妙に考へ出した僞造であつて、其れは、カウツキー等によつて爲されて居るものである。其は何であるかと云へば、マルクスが、國家を以て階級支配の機關なりとし、階級衝突なるものは不協調的なものであるとしたことは、『理論上』は否認す可からず」するも、次の點を閑却し、又は僞造して居るのである。即ち國家なるものは、「……………………………………、……………………、……………………、……………………、……………………、……………………、……………………、…………。『理論的に自明なる此結論は、革命の任務に關する具體的、歴史的研究に基いて、マルクスは最も斷定的に之を下して居るのである。然るに、カウツキーは之を忘れ且つ僞造して居るのである』と。（同上八頁）

（三）

カウツキー以下の學徒は果して、マルキシズムを僞造したものであるか否か。此點を檢する爲めには、國家の死滅に關するマルキシズム―殊に此事を詳しく說いたエンゲルス―の說に就て其の學說を吟味して見なければならぬ。レニンは即ち此問題を『國家と革命』第一章の第四節に於て取扱つて居る。レニン云ふ『國家の死滅に關するエンゲルスの言は甚だ普く知られて居り、甚だ屢ゝ引用せられて居て、マルキシズムを御都合主義に丸め込まうとする企ての眞想を暴露するに甚だ適した一節であるから、其一節を特に詳かに考へて見よう。之はエンゲルスの著『排デューリング論』の（第三版三〇一―三〇三頁（第六版亦同じ）に載せてある。曰く『プロレタリアは國家權力を獲得し、而して、先づ生産要

具を國家財産に移す。然し之れと共に、プロレタリアはプロレタリアとして、自らを廢絶し、一切の階級差別と階級對抗とを廢止し、而して其れと共に、國家としての國家を廢止する。從來の、自ら階級對抗の間に、運動して居る社會は、國家を必要とした。即ち、其時々に於ける絞取り階級が、其外形的生産條件を維持する爲めの組織、就中、現在の生産方法によつて定められて居る壓抑の條件、(奴隷、體僕制度、又は從屬制度、賃銀勞働制度)に於て、被絞取り階級を實力的に押へ付ける爲めの組織を必要とした。國家は、全社會の公的代表者であり、社會を一の見ゆ可き團體に結合するものであつた。然し其れは、國家が、自ら自己の時代に對して、全社會を代表して居た階級であつた限りに於て、然るのである。即ち古代に於ては、奴隷を所有する國家臣民の國家であり、中世に於ては封建諸侯の國家であり、現代に於ては、ブルヂオアジーの國家である限りに於て然るのである。………、………、………、

………、………。………、………、………

………、………、………、………

………、………、………、………

………、………、………。………

………、………、………、………

………。………(………)………、………

・。………『………』………、………(………)………。此點から、彼の『自由なる、民國家』て

ふ套語を判ず可きである。其の暫時的煽動的根據と、其最終的、學問的當否を檢す可きである。又た此點から、所謂…

………、………、………、………』と。レ

ニン乃ち云ふ、我々は、一の謬に陥ることなくして言ひ得る、此の段に思慮に留めるエンゲルスの考察中、現代の社會主義諸思想の現實的共同財產となつたものは、唯だ一つ、即ち、「…………、…………、…………、…………。「マルキシズムを全く解することは、之を一の御都合論と同一視する所以である。何となれば、此くの如き解釋を取れば、唯だ一の漸移にして、均一的、漸次的なる變化、飛躍なく、激動なく、一の革命なき、曖昧なる地盤が殘るのみである。」

…………、…………、…………、…………、…………

…………。而して此種の解釋は、あらゆる限り皮相的な、ブルヂオジーのみに取りて都合よき、マルキシズムの曲解であつて、其れは、エンゲルスの明言に含まるゝ最重要の事情及考察を無視することから起るものである。即ち第一に、エンゲルスは、如上の一節の最初に、プロレタリアは、…………

…………。此一句が何を意味するかを熟考することは、今日は流行しないのである。從つて此一句は、全く無視せられるか、又はエンゲルスの病たる『ヘーゲル的弱點』の一種なりと解釋せられる。處が、實際は、此の一言中に、プロレタリア革命の最大の一たる千八百七十一年の巴里コムミューンの經驗が簡潔に言表はされて居るのである。(其證明は後段に掲げあり)事實として、…………、…………、…………

…………、而して其の死滅とは、社會主義的革命の後に起るプロレタリア國家の殘物に就て云ふて居るのである。…………、…………、…………。第二に、エンゲルスは、國家は『…………』であると定義して居る。エンゲルスは、此く輝ける而して最高度に於て内容に富んだ定義を、此一節に於て、考へ得られる限り最大の明瞭を以て與へて居るのである。而して此定義からして、生ずる結論

は、……………………………………………………………。…………………『……』(………………)………。……。……………………………………………………。此れが又た『社會の名に於て生産要具の占有を獲得』するてふ『行爲』に當るのである。…………………。……………………………………………………………………………。…………………………。…………………『…』…………。……………………………………。……。

（四）

第三に、エンゲルスが『死滅』と云ふのも、又たより婉曲にして色彩ある『眠に落つ』と云ふのも、共に、社會の名に於て、(國家が)生産要具の占有を獲得した後、換言すれば、社會主義的革命の後の時期に就て云ふものなることは明々白々である。我々は、凡て知る、此くの如き時期に於ける『國家』の政體は、最完全なる、デモクラシーであることを。然し乍ら、マルキシズムを憶面もなく曲解しつゝある御都合主義者は、一人として、エンゲルスが、右の言に於て。抑もデモクラシーなるものゝ『眠に落つること』『死滅すること』を意味して居るものなることを夢想だもしないのである。此れは、一見甚だ不思議な様に思はれよう。乍去、此の眞意が分らない人々は、抑もデモクラシーと云ふものは、矢張一の國家であること『而して、國家が消滅すれば、デモクラシーも亦其れと共に消滅するものなることに氣が付かないのである。…………。………………………。國家としての國家即ち最も完全なるデモクラシーは唯だ自ら死滅し得るのみである。第四に、エンゲルスは、『……………』と云つた後へ直ちに、具體的說明を與へて、此の断言は、御都合主義論者に對すると共に、又た無政府主義者に對して向けたものなることを明かにして居

る。而してエンゲルスが、先づ第一に其論鋒を向けたものは（無政府主義者でなくして）御都合論者であるのである。（中略）無政府主義に對するエンゲルスの論難は幾千遍となく繰返され、平凡化せられ、甚だ單純な形に於て人の頭腦中に叩き込まれて、一の偏見としての略圖を得るに至つたが、御都合論者に對する論難は、暈かされ而して忘却了せられた。『自由なる庶民國家』（freier Volksstaat）てふ標語は千八百七十年代の獨逸社會民主々義者の綱領的要求で流行の解釋法であつた。此の解釋は、デモクラシーの本質を小ブルヂオア的に言ひ直した以外、何等取り止めた政治的内容を持つて居らぬものである。エンゲルスは、此解決なるものが、合法的言論機關紙上に於て民主的共和國を意味する限りに於て煽動的理由からして『暫く』其の通用を寛假したに過ぎぬ。然し此の解釋は御都合主義的のものである。何となれば、其れは、ブルヂオア的デモクラシーの粉飾たるのみでなく、國家に關する社會主義的批評に對する諒解の缺陷を示めすものであるから。元より、我々は、資本主義の下に於ては、デモクラチツクな共和國は、プロレタリアに向つての最上の國家形態なるを認めて、之を主張する。乍去我々はデモクラチツクなブルヂオア共和國に於ても、賃銀奴隷は、人民の運命であることを忘れてはならぬ。（七）の末段と照し合せよ……、……、……『……』……。……、……、決して庶民國家ではない。マルクスとエンゲルスは千八百七十年代に於て此事を繰返し〳〵其の黨員に説明して居たのである。第五に、エンゲルスは、又た右と同じ所に於て、……。……、……、然るに此點は、今日の社會主義諸黨も之を考察せず、否、之れを口にすることすら爲さぬので　る。日々のプロパガンダに於てもアヂテーションに於ても、此種の　察は少しも加へられて居らぬ。エンゲルスは抑も何と云つて居るか、曰く、『……、……（……）……、……、……

…………、……………………………………………………………………………………………………―此等に就ては、デューリング君は、一言をも費して居らぬのである。彼は溜息をつきつゝ、絞取り經濟の顚覆には、恐らく―不幸にも―實力が必要なる可しとの可能を許すに過ぎない。彼謂らく、實力の應用は、如何なる場合にも、必ず之を實行する人其人を墮落せしむと。……、……、…………………………、………………………………………………―　殊に獨逸に於ては、人民に課せらるゝ實力的衝突は、少くとも、三十年戰後以來の沈滯の爲め國民的自覺に强制せられた奴隷根性を取去る結果を有す可きであるのに。デューリングは、其の疲れ切つた力なき説法師的思想を、歷史を知悉して居る彼革命的黨派に押へ付けやうとするとは。』（同上第一九三頁第二編第四章終）と。

レニン云ふ『マルクスとエンゲルスとが、…………………………………（………、……………………）………………………『……』…………………。プロレ……………、…………………………………………………………、……………………………。………………………………………………………。是れは決して一時的感興の結果ではない、單なる言明でもない、論爭の際の放言葉でもないのである。群衆を實力革命に關する此見解に教育する必要は、マルクス及エンゲルスの全學說の根抵に存して居るのである。然るに今行はるゝ社會的ショーヴヰニスト的カウツキー的思潮は、此學說を裏切るものであつて、殊に兩者共、此種のプロパガンダやアヂテーションに於ても共に全く之を忘却裡に葬むることに於て其裏切りは顯著である。…………、……………………………………………、……………………………。プロレタリア國家の廢止、即ち風袋丈けの國家（Staat schlechthin）の廢止は、（其反對に）『死滅』の方法に

よつてのみ可能である。マルクスとエンゲルスとは、此の見解を、凡ての革命の實際に就て、其の經驗の解剖によつて、詳細に又具體的に展開して居るのである」と。（以上十四頁至十九頁摘要）

（五）

レニンは、以上の斷言を立證するが爲めに、以下五章に渉つて、窃かに、マルクス及エンゲルスの諸著作から、斷片を拾綴し來つて、之を一の體系の下に置くことを試みて居る。五章の當題は『一八四八—五一年の諸經驗』、『一八七一年巴里コムミューンの經驗、之れに對するマルクスの解說』『同上に關するエンゲルスの說明』『國家死滅の經濟的基礎』『御都合論者のマルキシズム平凡化』是れである。

今レニンの解說を考察するに先つて、我々は先づ『共產宣言』の國家理論の如何なるものなるかを一瞥し置くことを要する。何となれば、其れが一切のマルキシズム國家理論の基調を爲すものであり、又た同時に其出立點たるものであるから。

社會主義と無政府主義と相異る根本の點は、前者は、其社會秩序を（國家と稱すると否とは姑く度外に置くとして）何等かの法律強制の上に置くもので、後者は其反對に一切の法律強制を根本的に否認するものであると云ふのが、一般に認められた說であつた。否、今日も概ね然るのである。『社會主義、共產主義、無政府主義二十講』なる此種問題に就て、今最も廣く行はれて居る教典に於けるヂール——小泉教授及米田博士の其所謂『社會法的經濟理論』(?!)なるものを、近頃詳かに紹介せられた——は、此種の學說の絶好の代表者である。ヂールは、人類共同生活の根本形態に二ありとし、一を法律強制を有する共同生活形態、二を法律強制なき共同生活形態とし、第一は更らに之を、共同經濟制度と個人經濟制度とに分つ可きものとし、共同經濟制度には（一）社會主義（二）共產主義（三）農業社會主義の三ありとし

て居る、即ちチールによれば、社會主義も共產主義も共に、法律强制を有する共同生活形態を採るものなりとせられて居るのである。之れに反し、彼は、法律强制を認めざる共同生活形態を主張するものは、無政府主義是れなりとして居るのである。右書第三版一九二〇年刊第六頁 彼は更らに後段『社會主義の國家、國民性、及革命に對する態度』と題する右書の第八九講に於て『社會主義社會制度に於て、『國家』は如何なるであらうか、マルクスとエンゲルスとに從へば、其制度の下に於ては、『國家』なるものは最早全く存せぬと云ふ、――何となれば『國家』なるものは、階級差別を維持することに於てのみ其存在の理由を有するものであるから。從つて一の階級なきこととなれば、國家は無用の長物となつて、死滅するに相違ない、而して社會主義は一切の階級差別を廢止し、唯だ一の統一的勞働協同體を表現するものであるから。（中略）然し乍ら予（チール）を以つて見れば、それは無用な言葉爭たるに過ぎない。社會主義の將來組織を『國家』と呼ぶと否とは何でもないことである。社會主義者が期待する將來の社會制度が一の公的に組織せられた權力を要することは明々白々である。此の公的組織された權力を『國家』と呼ぶとも、他の何かの名を以て呼ぶとも、其れは、單に言葉の差異たるに過ぎない』と。同上書一七三頁 此種の見解に從へば、社會主義の最高原則は、『平等』であり、無政府主義の其れは『自由』である可きである。然るにレニンは、明かに、眞正のマルキシズムは、國家を否認すること無政府主義と毫も異なる所なしと斷言する。從つて、國家を是認するカウツキー以下の徒に、何れも。此點に於て、マルキシズムを僞造したものであると非難せられるのである。レニンとカウツキーとの諸の論爭の出立點は實に玆に存する、『プロレタリアの獨裁政治』に關する兩者の異論は、其根源を此根本の問題の中に有して居るのである。約して云へば、眞正なるマルキシズム――即ちマルクス及エンゲルス著作中に於ける――の國家理論は、無政府主義と根本的に其立脚地を異にするか、又は、其差異は單に程度の差異たるに止るか、是れが、根本の問題であるのである。

（二）

チールの云ふ所には、確かに一の眞理が存する。即ち、若しも社會主義が『法律强制』を如何なる形の下に於ても認むるものならば、其『法律强制』の下に在る共同生活組織は、之を『國家』と呼ばないからとて、其は國家を否認するものとは、斷じて云ふ可きものではない。其れは確かに、單に言葉の戯れたるに過ぎない。問題は、其を『國家』と稱するか否かには存せぬ、抑も最終の階段に於ける共同生活に於いて、『法律强制』『權力』を認むるか否かに存するのである。プロレタリアの獨裁政治は無論一の國家である、其れが社會主義——並にレーニン——の最終の主張であるならば、彼等は、明かに無政府主義とは、根本的に立脚地を異にするものである。今日ボルシエヴヰズムと稱せらるゝ所のものは、此のプロレタリアの獨裁政治である、此意味にてのボルシエヴヰズムは、無政府主義とは、全く相容れないものたることは、言ふまでもない所である。

今日のあらゆる國家理論の前提は、國家と社會との區別論に存する。ロレンツ、フオン、シユタイン以來此區別論は、幾百回となく繰返された。マルクス及エンゲルスの國家理論も亦此區別論に發足するものである。今日の社會政策の出立點も亦此の區別論の考究を以て始めなければならぬものである。（筆者の此點に關する見解は前揭拙著序論中に述べて置いた）然るに、『共產宣言』に於ける、マルクスとエンゲルスとは、此區別論から發足して居り乍ら、其の將來の國家觀を說くに方つては、此區別を甚だ曖昧に附して仕舞つて居るのである、而して今日の社會主義は此の宿痾から瑤も醫されて居らぬ、彼等の將來國家論に於ける、國家社會區別論は殆んど支離滅裂なものである。筆者は、即ち、是れがレーニンの所謂『僞造』の起る所以であると信ずるものである。『共產宣言』中には、屢々『社會』又は『社會的任務』なる文字を用ゐて、實は『國家』及『國家的任務』即ち『强制制度と其任務』を意味するに相違ない箇所がある。又た、『國家』の代りに、『國民』な

る文字を宛てゝある處もある。例へば、プロレタリアは政治的權力を獲得するによつて、『國民的階級に昇格し、自らを一國民として構成せねばならぬ』と云つて居るが如き是れである。

…………………………………………、それが『共産宣言』に於て、明白に、プロレタリア運動の標的とせられて居る所である。但し共れは、最後の標的としてではなくて一の經過的標的としてである。即ち『共産宣言』が此標的を說くに方つては必ず常に、『共産主義者の最も手近な目的』は凡ての他のプロレタリア黨派と同樣に、…………………………、…………、…………『……』…………『……………………』…………。即ちプロレタリア運動の『第一着歩』『最も手近な標的』は、一の『國家』を作るにあることは、斷じて疑を容れないのである。

此の第一の標的、經過的目的に達する途は、即ち『階級鬪爭』であると主張せられる。『共産宣言』は乃ち云ふ『一切の階級鬪爭は、必ず一の政治鬪爭である』と。……『…………』……、…………『…………………』。…………、…………………………、…………『……』…………。……『…………………………、…………、…………………………、…………、…………、…………………………、…………、…………、…………と』

而して、プロレタリア革命の最近の標的たる『國家』の如何なるものなゝかは、『共産宣言』中繰返し〱ブルヂオア社會制度と自覺的對抗を成すものであるとしてある。ブルオヂア國家に代るプロレタリア國家も一の强制秩序であり、

又た一の階級支配である、唯だ其權を執るもの、其の支配者が、從來の被支配者であると云ふ點のみが異るものとせられて居るのである。『共產主義者の最も手近な目的は、凡ての他のプロレタリア黨派の其れと同じく、プロレタリアを一の階級として形成することのである。（これは、言ひ損である、プロタリアは、其遠き以前に既に一の階級として形成せられて居るのでなければ、何事も始らぬに違ひない。恐らく『支配』と云ふ字を脫したのであらう。）…………、」と。又曰く『…………、…………——即ちデモクラシーを實現することゝ之れである』と。而して此のデモクラシーなるものは、強制的權力を含むものであることは、明々白々一の疑を容るゝを許さぬのである。

（七）

『共產宣言』は、ブルヂオア國家に對するプロレタリアの階級國家の差別點を力說して『プロレタリアが政權を得、一の國民的階級にまで自らを引上げ、一の國民を構成せねばならぬと云ふは、ブルヂオアジーに於けると同じ意味に於てはないが、プロレタリアは飽迄國民的でなければならぬと云ふことである』と云つて居るが、茲で國民と云ふのは、實は『國家』の謂であることは勿論である。從つてブルヂオア國家とプロレタリア國家との差別は、抑も何であるか、實は漠然たるのである。何故となれば、其所謂プロレタリア國家なるものは『階級支配』たることとブルヂオア國家と、些も異る所はないものではないか。差別の點は、政治上には少しも存して居らぬ、經濟上にのみ存するのである。即ちブルヂオア國家に於ては、ブルヂオアは政治上にも、經濟上にも、支配階級であるが、プロレタリア國家に於ては、プロレタリアは政治上では支配階級ではあるが、經濟上では、支配階級絞り取る階級ではないと云ふ點が異るのである。然し此點を能く考へて見ねばならぬ。プロレタリアが政治上の支配者となると共に、一切の經濟的絞取りが直ちに熄むものとは、豫斷することは、決して出來ないのである。（最終の階級に於て、其れが全く熄むと云ふことは、經過時代に於

て、其れがなくなると云ふのとは、全く別の事である)。「…………………………………………………………、「然し其れは單に政權に就ての事である、其れと共に資本主義が直ちに無くなるのではない。此れは、現に目今の勞農露國が最も的確に我々に實物教訓を提供して居るのではないか。否、資本主義の廢止は、政治的支配の樣に、一撃の下に行はれるものでないことは、マルクスもエンゲルスも否カウツキー以下の徒も、皆一樣に之を說いて居るではないか。『共產宣言』も此事を明言して居る。即ちプロレタリアは、一度政權を獲得した後に於て、此政權を活用して「段々に』“nach und nach”ブルヂオアジーから一切の資本を取去る可く、斯くて『此の發展の行程に於て』階級差別は消滅し、一切生產は共同せる個人の手に集中するに至る可しと斷言して居るのである。之を言換れば、プロレタリアが政權を獲得した後に於ても、ブルヂオアジーは、猶或る時期の間、——其れは短かいかも知れぬ、又長いかも知れぬ——、發展行程の經過の間、絞取り階級、經濟的支配階級として存續するので、從つて其間はプロレタリアは、政治上では、支配階級ではあるが、經濟上では、却つて被支配階級、絞り取られ階級たることは、依然たるものとせらるゝのである。勞農露國に於て、最近に『資本主義への降伏』か宣言せられたとか、『共產主義が放擲』せられたとか言つて、喜んだり、驚いたり、又は悲んだりして居る人の數が今世界中に少くなくあるのは、此點から見れば、實に噴飯に堪へない馬鹿々々しい空騷ぎである。而して『共產宣言』は、此時期、此經過を、何の位長くかゝるものと見て居るかは、直接には之を推究す可き材料はないが、然し可なり長くかゝるものと見て居ることは間接に察知し得らるゝのである。其は他事に非ず、經過時期に對する施設要求として、其第二部に揭げてある『土地所有の沒收』『高度累進稅』『相續權の廢止』『海外移出者及叛逆者に限り其財產の沒收』『國民工場の設增』『兒童勞働者廢止』等は、決して、此時期を短いものと考へる思想から來る可きものでない。其着想は、甚だ穩和な、緩慢たものであ

るに徴して知る可きである。更らに、言葉を換へて云へば、國家の本質は經濟的絞取りと不可分的關係を有するもなのりとの社會主義說を、根本的に打破するものは、我々非社會主義者の苦心に苦心を重ねた攻擊中其最有力なるものを以てしても、猶且つ『共產宣言』其物の右の一節には、遠く及ばないのである。而して勞農露國の最近の實情は、更らに更らに有力に、『共產宣言』の此一節に裏書して居るのである。國家に於て政治上の實權を有つものは、必ずしも、經濟上の實權を有つものではないことを、證明すること、今の勞農露國に勝る實例以上のものは、歷史上殆んど之を見出し得ないと斷じても、決して過言ではない、而して、其れは、既に已に、『共產宣言』其ものに於て、マルクス及エンゲルスによつて、豫言せられてあり、又たレニンは、勞農革命以前に於て、其『國家と革命』中に於て、其豫言に裏書して居ること前段に示した通りであるのである。

（以下嗣號）

結婚の眞理

文學博士　西　晉　一　郎

結婚問題を論ずるは結婚の眞理を豫想してのことであつて、若し其眞理なしとせば人々各自の意見を吐いて所謂水掛論をするか、さなくば只便宜の見地から考へて相對論に陷り眞妄の斷定が出來ぬ。故に眞面目に此問題を論ぜんとならば結婚自身に具はる眞理あるを信じてあくまで此眞理を突き留める覺悟で進まねばならぬ。而して此眞理は吾々には理想であつて吾々の現實は未だ遙かに之に達せぬかも知らぬが、しかも徒らに人情の弱點を斟酌して此眞理を暗ましてかの水掛論や便宜主義に戻るべきでない。固より人諸共に吾も未だ免れ得ざる人情の弱點を抱きながら人の行爲を嚴格に批判し或は責むる如きはおこがましき振舞である。若し地を換へたならば吾も彼と同樣の過失乃至罪惡に陷つたかも知れぬことを全然忘却したものである。然しながら具體的實例の場合に臨んで其人を如何樣に處すべきか又人の振りを見て自己は如何に反省すべきか等の實地的態度を取るのでなくして、結婚の眞理を究明して經驗的事實として日々生起する事例を判斷評價すべき規範又は理念を尋ねんとするに當つては、自他諸共に弱點を抱くからとて其弱點を勘定に入れて考へることは出來ぬ。人情普通の弱點から生じた他人の罪過を心の中で恕し又は直接其人に對して寛大であることはよからうが、之を公の印刷に於て結婚論として考慮の中にをき、甚しきは之を斟酌して結婚の準據を論定せんとする如きは社會的生活を營む吾人が諸共に向上の路を辿り人生を高尚にすべき共通の責任を省みぬことになる。

然らば純然たる結婚眞理は如何にして明にせられ得るか。こは獨り結婚の道德に於てのみならずすべての道德的干係に於て遭遇する問題、卽ち道德的眞理一般の問題である。而して此道德的眞理或は規範或は當爲は經驗的事實を吟味して其中から歸納的に導出し得べからざるもの、寧ろ經驗的事實以前にあつて經驗的事實を統一し指導しゆくべき所謂先驗的のものであるとせば、結婚の眞理も同じく先驗的でなければならぬ。たとへば正義人道といふことは今日文明的諸國民が異口同音に唱ふる所、國際的道德の眞理であるとせられてをるが、國際的干係の經驗的事實は一として十全に此正義人道の理念に一致したものは恐らくあるまい。然るにも拘らず正義人道の眞理は些も其當爲の權威を減殺せられず、其道德的價値を疑はれず、却て此理想に合はぬ實際の事實を之によつて統一し向上せしめんとしてをる。かく經驗的事實の如何に拘らず吾人が正義人道の眞理を信ずるは此眞理が經驗を超越する所に其根據を据へ、しかも經驗が無根に之に一致し來ることを要求する先驗的眞理なるが故でなければならぬ。斯くの如くに經驗的事實によつて動揺せざる眞理なければすべて道德的生活は確たる其根柢を失つて悉く相對的便宜主義のものになりうるは自明のことである。但しここに注意すべきは固より吾人は單に論理の力のみでかかる先驗的眞理を立てるのではない。所謂經驗にも意義はいろ／＼ある。普通謂ふ所の經驗ではなくして其以前であるとしても、他の何等かの意味の經驗の裡に把捉せられたことでなければ吾人は之を信じ之を眞理なりとする自信力を得ることが出來ぬ。理想も矢張り想であり理念も矢張り念である。吾人の「最良の瞬間」に於て、「高揚せる刹那」に於て、「情識の浪靜なる時」に於て、「吾人が賴みにして此世に腰を据へて居た土臺が崩れた時」に於て朧ろげにか明らかにか、不確實にか確かにか之を會し之を體することがなければ、かかる意味での經驗がなければ、理想理念もまた畢竟空なものである。

かかる意味に於て結婚の眞理とは如何なるものなるか。是は普通の言葉で所謂夫婦の情義のことである。夫婦の情義

は夫婦の情義なるが故唯一無類の一眞理である。是は單に男女の情ではない。又單に趣味の一致とか意氣の投合とか相互の理解とかいふものでもない。又只道徳上、人格上の相互敬愛から起る一致でもない。又以上のものを集合して成れるものでもない。結婚の眞理即ち夫婦の情義は其趣きのさま〴〵に現はれる所を分解して見ることは出來ても其自身には不可分的一眞理でなければならぬ。

結婚は男女の性別に本づき從て生物的要素を有つことは結婚の道徳上重大な意義を包藏して居るが、世の所謂「ローマンチスト」は此原始的生物的素地は抑てさげすみて、戀愛と名づくる何にか精神的に高尙なるものありとし、此戀愛を至つて尊いものとし、結婚の本質も此にあるかのやうに云ふ。男女の情を如何なる範圍まで戀愛と名づくるか不確定と思はれるが、若し容姿に接して生ずる所から見れば姿はうつろひゆくものゆへ、これに起因し之に據る所の情は必然的に又轉變する。蓋しうつらふべき常理に即いて之を見ずして抽象固定せる心像上の姿に執着して脫却し得ぬ間は未來永劫渝らぬ愛であるかの如くに迷ひ思ふのであらう。最早や此世に居らぬ李夫人楊貴妃を漢王唐帝がいつまでも慕つたのは實は永劫の愛ではない。生前の容姿が心像として遺つてをる、其心像に着してゐたので、若し彼等の生き長らへた老の姿を一見したならば却つて興は醒めたではなからうか。(容儀を審美的に觀照するは自ら別である)。某所の某僧死して葬られて後數十年其墓中深く尙ほ艶あるものの如し。人々怪みて發掘して見れば僧顏容の姿ながら未だ腐せず。いかなることかと問へば往年某隣村の某の娘我寺に詣でし其容姿目の前にちらづきてのことなりと言ふ。其娘ならば今尙健全なりいで引き合せんと一老婆を伴ひ來りしに一目見るやかの僧忽ち骸骨となれり。墓中尙ほ之を忘れ得ぬは永劫の愛に似たれど實は一瞬にして消滅する至つてはかなきものである。かゝるものに結婚の眞理が本づかう筈がない。其外趣味の一致とか意氣の投合とか所謂相互の理解とかいふ類いことで誘發助長せられる戀愛もあらうが、此等精神

的に見ゆることも果して如何程深く精神の奥に根ざしてをるであらうか。其多くは歳月の推移、老少の變、環境教養の變遷につれて遷りゆくべき經過的時間的生活に屬するものと思はれる。此等に本づいて保持せられる愛を永久と思ふもまた自ら欺くものではなからうか。趣味の一致とか相互の理解とかいふことは元來贅澤の言分ではなからうか。生きるには飲食が必要であるが快適なる美味は贅澤品である。道徳的に生きるに際し男女婚を成すは必要であるが容色、趣味、理解などといふは謂はゞ贅澤である。これあるは固より結構であるが無いとて結婚の眞理たる夫婦の情義が不可能であるのではない。生きる必要に迫られたときの粗食は飽食の徒の美味よりも快適であるべきが如くに、世に立ち自己の天分を盡さんと欲するものには僅かに米を炊ぎ辛ふじて家内を治めくれる女子もまた天の我に賜へる婦である。且つ吾人の經濟的生活上の運命は何人も之を保證することは出來まいが、若し不幸にして生活のどん底に沈み車の後押しでもして獨立せんとするとき僅かに家を守り辛ふじて子女を育ちくれる妻は深く感謝すべきであるを覺えるであらう。此時に臨んで趣味の一致とか相互の理解とか個性の投合とかいふことは奢つた口が求める珍味に似たものであるを悟りはせぬであらうか。而して女子が男子に對する場合には以上の干係事情は尚ほ一層痛切では無からうか。結婚の本質は今一層うぶな原始的な必然性に立戻つて見ねば分り難い。餘りに感情が纖細になると餘計のことを要求して却て本質的なものを忘れる。

人格或は道徳或は藝術等純精神的生活上の投合から生ずる愛慕の情が男女の愛の誘因となることもあらうが、又只心友としての敬愛でもあり得る。男と女とが互に向ふの道徳、學問、其人となりを愛敬してことに精神的友人の誼が成立するはあり得ることであり又事實あることであるが、之れは夫婦の情義ではない。固より此種の敬愛が結婚に導くことがあり、又其は結構なことであらうが、かくして一旦夫婦となつたときに生ずる情義は以前の敬愛とは全然別趣のもの

である。すべて夫婦の眞理は夫婦となつて始めて實現せらるべき唯一無類の獨特の人格的相關である。故に夫婦となる前に人格上の投合あつてそれが直ぐに夫婦の本質をなすといふ理はないのである。左樣な人格的投合は只心友的情操に過ぎぬので、夫婦となるの立派な誘因とはなり得るも夫婦の情義即ち結婚の眞理其物ではない。

凡そ夫婦の情義を夫婦となる以前に體驗することは出來ぬ。道德的相互敬愛すら夫婦の情義ではない、況や、趣味の一致、相互の理解、意氣の投合の如きは只人間交際の如き動機であるに過ぎぬ。たとへ此等に誘はれて戀愛が發したとて戀愛即ち夫婦の情義ではない。其外容色或は其外如何なることから起つた戀愛でも戀愛が直ちに結婚の本質ではない。結婚の本質即ち夫婦の情義は夫婦として生活するとき當事者が自ら成す所の精神的創造であつて、戀愛の如く自づからに生ずる自然的のもの、與へられたものでない。すべての道德的生活の例に洩れず結婚の道德も精神的實現であつて自然的所與ではない。自然の裡から自ら躍り出づる精神である。出現以前に精神があつて出現するのではない。飛躍することで精神が成るのである。在るものではない成るものである。此故に結婚の道德的眞理即ち夫婦の情義は其の自然的條件の如何によつて左右せられないのである。かかる豫備條件は只結婚の眞理が自らを實現する素地に過ぎぬ。現に結婚の成立せんとする出發點は必ずしも同一ではない、これは偶然的のものであつて時代により敎育の程度により國風民俗によりさま〴〵である。兩親が之を定めて然る後に兩人始めて相知り、結婚して其結果夫婦としての愛情、緻密に言へば夫婦の情義を發する場合もある。右と正反對の極端は兩個人が其無限なる個性特有の投合一致を出發點とし、個性といふことが大に主張せられる、これは近代の歐米に於ける傾向である。しかし此等は何れも只素地、出發點のことで、結婚の本質其物には何等關する所は無いのである。或は容色の愛好あることもありなきこともあり、或は趣味の一致、所謂相互の理解のあることもありなきこともある。然れども成婚の結果として實現せらるべき夫婦的情義はかかる

自然的偶然性を超脱する所に始めて成るのである。向ふを夫とすることによつて自ら婦となり向ふを婦とすることによつて自ら夫となる。するとは實地を踏んで實行することである、なるとは自己を創造することである。すべての他の道徳的關係に於ての如く夫婦の關係は與へられるもの又は認識せられるものではない。夫や婦が與へられるのではない、夫と認識し婦と認識するのではない。夫を創造し婦を實現するのである。向ふを夫として遇する實行によつて自ら婦を實現し、向ふを婦として待つ實行によつて自ら夫を創造する。夫と婦は一客觀的精神の各半面である。夫婦は所謂一圓であつて、此一圓は客觀的眞理である。之を夫婦の道と稱し、夫婦の情義といふ、即ち結婚の眞理である。ここに結婚が人類の精神的生活の存續と重大なる關係あることを知る。之を單に兩人の幸福のためであるなどとするは甚だしい謬である。他の容姿をめづるとか、他の才氣を愛し、互に趣味の一致を喜ぶとか、互に他の心情、事業を理解するとかいふは智識、欲望、感情の世界のことで、皆主觀的なるもの、當人の私事に屬する。道徳は意志即ち客觀的精神の世界である、公共の道である。

結婚が男女の生物的差別を素地とすることは實に深い意義あることで人類の存續の根柢である。其自然の結果として生れ出づる兒子のことを考へずに結婚を考へるは生きたものを毀ちて其殘骸斷片を固執するが如きである。夫婦の情義は其共有の兒子に對する情義と引離しては恐らく十全であるまい。たとへ子無くしてしかもよく夫婦を全ふするものがあつても若し子があつたならば其情義は更に一段完結したであらう。其共有の兒子の生育及教育について共通の責任を負い彼等の運命について喜憂を共にするは結婚の道徳の要素である。而して生れ出づる種族相續者が種族の精神的遺産を繼紹し更に之を發展せしめて人類の精神的生活を永遠に存續する發祥地は家族である。個人々々の職能的活動の寄與によつて團體的生活を營む社會も、社會の政教的組織によつて文化を發する國家も其活動の當事者の供給を家族に仰ぐ

のである。家族に於ける親子夫婦兄弟姉妹の關係は殆ど社會に於ける道德的關係一切の縮圖の如きもので、實に人類の道德的生活の出發點であり同時に又其主要素である。而して其根本は夫婦である。故に結婚の本質が兩人の幸福といふ如きにあらずして、實に民族の精神的運命と直接に連貫し、之と一體をなす公共客觀的のものである。而して公共客觀的のものがいつも主觀的個々の根柢であるから、現にかの個人主義的に結婚を解せんとするものも自身はかかる客觀的制度たる家族の內に人となり、父母たる夫婦が子たる己れを教養せる賜として今日あるを致してをる。若し父母たる夫婦が單に自分等兩人の幸福をのみ眼中にをいたならば子たる自分は如何にして生い立ち今日理窟など主張することの出來るやうになり得たであらうか。自己の足元を忘れるも甚しい。自己は卒然として單獨獨立に現在の自己となつたのでない。種族の精神的生活として絕間なく流れ來たる一大生命の裡に生を寄するものである。此一大生命をして絕間あらしめざる主要素は家族であつて、後者は結婚の直理、夫婦の情義によつて成立する。故に吾も亦結婚によつて此客觀的生命に入り、其自然の結果たる兒子の教養に盡力して此生命に報い其發展に貢獻すべきである。かの個人主義者は己の生命の本を忘れて恰かも自己以前に自己が居て自己を作り上げた如く妄想して、單に現在の自己の感情の滿足を求めて、結婚は兩人の幸福のためなりと謂ふ。若し世人悉くかく振舞つたならば人の兒子たるものは何處に育てられ教へられて種族の生命を永續するであらうか。

於是一部の空論者は結婚と「親たること」を別々に見て、結婚は當事者の情意投合、相互幸福をのみ主眼とし、生れ出づる兒子は國家公共が其教養に任じて自らの相續者を作るべきであると言ふ。米國のパーソンス夫人などの此論はプラトーの所論と同樣に造物主をして人性を作り更へしめて後でなければ行はれぬことと思ふ、只プラトーの昔の論は國家公共のことを切に念ふ所から起り、今の人の論は男女の私の情の滿足を求むる所から起る相違がある。

結婚の眞理は內は夫婦の情義であり、外は客觀的精神を實にする公共の制度である故國法によつて認定せられ社會の儀禮によつて行はれるのである。國法は結婚の中に混入し易き個人的任意を斥けて其道義を維持し、婚姻の儀禮は結婚をして自然的本能を脫出して道德的たらしむる主要條件である。「儀禮的に結婚同意を宣言し又之と相應じて家族及同郷が之を認定するは結婚の本質を言語（精神の直接の表現たる言語）によつて道德的に成立せしむるもの、これによつて自然的なるものは只第二次的のものになる。」或はかかる形式儀禮は外から加へた命令であつて、婚姻の主眼たる相互の愛を傷け內面的であるものを余所々々しくするものであると考ふるは、禮俗國法の客觀的秩序の裡に於てなればこそ個人々々の主觀的感性的愛情が高尙にせられ人間優美なる情操が發現して來たのを忘れて、個人獨りの生活が自力的にここに達するものと誤想するのである。社會が橋を架してくれたことを忘れて渡賃を拂つた自分の力で渡つたと思ふの類である。是は客觀的の力は餘りに緊密に隙間なく個人を圍繞保育するが故に其存在を忘れ易いのである。羞恥の感じは自然に本能を制してをるが遂に精神的に發して貞操を成す。感性的愛好によつて司配せらるる間は互に向ふを自己滿足の方便と見てをるので、人格として待遇してをるのではない。朋友干係にあつても親子にあつても夫婦にあつても感性的愛好の偶然性を脫出して之を從屬的ならしめるのでなければ向ふを一ケ人格とすることは不可能である。故に夫婦の情義といふ。情は義と融合し、愛は理性と合體せねばならぬ。かくの如き精神的飛躍によつて夫婦的人格を實現する眞實の力は國法禮俗に現はれてをる客觀的精神である。個人が心理學的に內に發見する所の心力ではないのである。

結婚は人生に於て唯一無二の意義を有つ。唯一無二の意義あるから人生全體と通貫して之と一體となる。其獨特の意義は內に夫婦の情義として體驗せられ、此情義は兒子の教養に對する責務の遂行を伴つて完結せられる。然るに此情義

は一切の經驗的愛好、感性的投合の超越に於いて實現せられる。男女の本能、容姿上の愛着、嗜好趣味上の投合、利害上の顧慮等の殘留はいづれも皆純なる夫婦的情義を汚がすのである。固より旣に情義であるから情を無視しはせぬ。却て如上の情的愛好は悉く義によつて其質を一新せられて純なる夫婦の情の要素となる。結婚の自然的素地として如上の諸要求を斥けるのではない。寧ろ教育の發達につれて感情思想は微細銳敏となる故、よく他を人格視する精神的統一さへ確實であれば、此等の要求は夫婦的情義の內容を豐富にさへすることもあるであらう。然るにかかる要求が餘りに優勢となれば他を人格視せんとする精神の飛躍作用は容易に壓倒せられて、結婚は感性的投合に墮落する。これ泰平と文明の弊であつて、結婚の眞義は却て原始的素朴的生活の潑溂たる所に實現せられるのである。感傷的情操の要求する贅澤が增長したときは故に一たび文明的生活の皮相を剝いで赤裸の元素的生活に還らしめる必要がある。近來個性といふことが强く主張せられるやうになつたが、眞の個性は社會に於けるあらゆる道德的相關の實現の上に無限に發展するものであるから、之を自然的氣質と混同してはならぬ。若し自然的氣質の投合を誤つて個性的調和となし、此上に結婚を築かんとせば遂に轉々として幾度も仕換へらるる男女同棲となり果てゝ社會的生活は瓦解に赴くことであらう。眞の個性は如何なる出立點から發した結婚に於てゞあつても相手をあくまで夫とし婦とする精神的努力によつて實現せられることを忘れて、個性は自然に完全に與へられたものと誤想して、同氣相求めて相應する男女がそのまま提携するを理想的婚姻なりと空想するに至るは、感性及悟性が過度に促進せられて理性の修養、意志の鍊磨の之に伴はざる不健全なる敎育の結果である。文明が爛熟すると人間の感性が過度に銳敏微細となるから文明を呪咀して自然に還れと叫ぶものも出るのである。

以上の結婚論は家族が國家社會に對して有つ意義は諸國民の間に相違あることを暫く措いたのである。又以上の論は

現實の事實から見て餘り嚴であると思はれるかも知らぬが、ここには結婚の眞理を究めたいのであつて、眞理自身は嚴でも寛でもない。且つ現實の事實も此眞理、理想によつて實際統一せられてゆくことが出來る。其實例としてコロンビヤ大學のアドラ教授が其著「結婚と離婚」の中に擧げてをらるる一實話を最後に紹介する。此實話は又夫婦は一圓であつて互に他を全ふすることによつて自らも全くなるものであるといふ道德的眞理を明白に語つてをる。

男は一種の學者肌の人であつたが女は親切な然かしどちかといへば平凡な主婦であつた。よくあることだが此とは正反對に女が知的才能に遙かに富んでをる場合もある。偖今この夫婦はやゝお互に飽いて來た。夕べ夕べのまといも次第にうるさくなつた。此際恰かも彼等の友人として一人の悧發な婦人が此家に出入するやうになつた。而して此婦人は直覺的に又自發的にこの男の要求に正しく相應じて居つた。是は彼にとつては樂しい經驗であつた。共通の文學的追求の上に無邪氣な友情が結ばれ、知らず〳〵親密の度が濃くなつた。遂に男は其問題に當面せざるを得なかつた。自ら思へらく、私は誤つて居た、私の妻である此女は眞に私の連添ふべきものでなく、この他の婦人こそ私の配遇たるべきものである。私が只の若者であつたときに誤つたために一生涯苦しまねばならぬであらうか。斯く此問題を自己に提出したとき彼の強い道德的天性は敢然として現れて來た。そして彼は徹底的に向き直つた。彼は急に自分が看過してゐたある原始的本質考慮に目醒めた。自ら曰く「私は此女を自分の妻として來た。私は自分の名譽にかけて誓約した。彼女は私の子供等の母である。如何にして私は交友の必要や文學的享樂を語ることが出來べきか、自分の名譽面目にかかわる際である。商業上の取引で約束したものは其約束を取消すやうな事はすまい。然らば祭壇で約束したものがどうして其約束を反古にすることが出來やうか」。かくて彼は決心した、この交友を斷然止めやう、而して此結婚をそれが如何ほど苦痛であつても甘んじて受納しやう。而して彼は自分の子供等の母の生活を幸福にし彼女を慰め保護することに全力を盡

さんと決心した。而して若し彼女が彼の心について來ないならば彼女を助けて彼女が欲するだけ又彼女に可能なる範圍だけ彼女を開發し、然る後に彼女の欠點を忍耐しやうとした。所が不思議な事が起つた。妻は彼が違つた人間になつて自分を新しい光で見て居るといふ事を悟つた。彼はもはやひそかに反抗心を抱きながら彼女に對し、又彼女から逃出したいが只辛抱してをるといふのでなく、彼は今や彼女を幸福ならしめんとして居る者の態度で彼女に對した。女は彼の此新しい態度に動かされた、心の底深く感じた、而して其の結果彼女の內に一つの新しいものが開發せられた。彼女は不親切に代つた親切なる新雰圍氣に應じた。そして一奇蹟が起つた。彼等の同棲は幸福となつた。而して殉教者的精神を抱いて自分の家庭に改めて這入つた男は大なる危險を免れた事を自ら祝福しつつ暮らした。彼は紳士であつた、そして自分自身の報酬を得たのであつた。

間接行動の存在權

杉森孝次郎

直接行動は唯物的方法だ。間接行動は唯心的方法だ。アキャヱリの『君主』一卷は前者の一辯說だ。「マシユー錄」一の五、六、七章は後者の一宣說だ。「逃亡」前の回教祖は、すくなくとも聲明に於いて後者の信者であつた。「逃亡」後のかれは、名實ともに前後兩方法の併信者となつた。第四世紀以前の基督教と、その以後の同教とは、「逃亡」前後の回教に似た一面を示す。これを現代について見るに、警察は前者だ。學校は後者だ。外科療方はあきらかに前者だ。精神療方、健康療方、內科療方は、多少の程度別をば有すれども、外科療方との比較に於いては、要するに後者だ。

秩序がある程度以上に、すなはち極度に失はれた社會にあつては、強制が、すくなくとも暫時の、本質的一必要事として要求される。どんな惡政府でも、無政府よりは善いといふ論理が、事實上しば〳〵成り立つ。混亂狀態の內容が、低級趣味、低級聰明の直接行動の多元的、二元的、或ひは一元的發作である場合がある。かゝる場合には、主義あり、理想あり、信念ある高級趣味、高級聰明の直接行動の發動を待つほかに、救濟は絕望なことがある。「十一月」以來の露は、やゝ、その適例に近い。

混亂の隣家が自由なのではない。混亂の隣家は秩序だ。自由は秩序の隣家だ。混亂の三軒目だ。混亂にむかつて、手をこまぬいて說法ばかりする人は眞の自由主義者でない。立法、行政の手を、眞の自由主義者は、かゝる際に必ず動か

すべきだ。立法、行政に、多少の程度に於いて直接行動だ。レーニン氏にくらべると、ケレンスキー氏は間接主義者であつた。闘志も、實力もなくなつた人民を、無理やりに、聯合國の帝國主義にお附き合ひさせようとして戰場へ曳き摺りだした六、七月のケ氏は、わるい意味の間接主義者であつた。一九一八年のレ氏は、ソヴィエット政府の吏員を嚴介死刑に處したさうな。それからの吏員は、不正、不義、不善、不良の行爲の故に罰せられたのだといふ。良民虐殺の流聞も、實は、惡吏處分の自潔事件であつたことが一例のみならずあつたと傳へられる。あつたらしい話だ。直接行動は、レ氏の生命のやうに觀ぜられる。しかし、かれが、國民敎育に破格の熱意と成功を示し、また國土の電力化に夢中になつてをるあたりにも、かれの間接主義は、多少不完全ながらに洩れ透く。レ氏が、我武者羅の直接行動主義者でないとは、多く論ずるまでもない明白事だ。ガンディ氏の事蹟を聞くと、氏のトルストイ主義、無抵抗主義の發動としての「非協力運動」は、それ自身は、一種の間接主義と見らるべき性質の現象だが、奏効と結果に於いては、直接行動以上の直接行動だ。トルストイにしても、一九一七年の國變に、最大直接貢献をばしてゐない。殊にこの年の晩秋以來の露は、トルストイに負ふよりもマルクスに負ふ。組織と建設はマルクスに負ふところが多い。けれども、「三月」に軍隊が右に向かないで左に向いたことや、レ氏の代となつてからの「普遍的平和」を目的とする單獨講和が民意のかなたに於いて果決されたことや、かぞへ來たれば、暴力、外力としての力の否定者であつたトルストイの感化、影響、勢力、準備が淺小でない。ある直接行動が、その結果に於いて、果たして目的通りの直接行動であるか、ある間接行動が、その實力に於いて、却つてある直接行動以上の直接行動でないか、透徹にして周匝なる觀察と判斷を要する。

啼かぬなら殺してしまへの信長式が、ある種類の直接行動だ。この種類の直接行動は、啼かして見せうの秀吉式、啼くまで待てやの家康式の間接行動に比して、淺薄だ。小成だ。子固が、剛強なるは必ず死すと詠んで項羽を弔し、仁義

なるは王たりと歌うて沛公を祝した。身みづから七十餘戰を戰ひ、當たるところのものは破れ、撃つところのものは服す、いまだ曾つて敗北せず、ついに覇として天下を有つに及んだまでの羽は、直接行動の成功者であつた。ヒンデンブルヒ、ルーデンドルフの呼び聲が、啼く兒の聲をもとどめた當時の驕獨のやうであつた。關に入つてより、財物取るところなく、婦女幸するところなし、これそのこゝろざし小にあらずと、范增をして、夙に警戒の言を放たしめた沛公は、羽をして、四面楚歌するを聞かしむるに及んで、間接行動の成功者であつたことを立證した。一九一八年の春夏來、事實上、米兵の大渡來を招致した英國のやうであつた。ベルジァムの中立破りと、ながきの自由貿易とは、不聰明なる直接行動と、聰明なる間接行動との一對照だ。一九一七年初に於ける「潜航水雷艇の無條件的活動」も、やゝ不聰明なる直接行動であつた。

鴻門の一會と漢楚興亡の全史とは、直接行動と間接行動の現象價と、原則價を、殆んど遺憾なく象徴する。噲が劍を抜いて起ちて舞ひ、伯もまた劍を抜いて起ちて舞ひ、そのうちに、噲が、劍を帶び盾を擁して軍門に入り、ついに入つて帷をひらいて西に嚮かつて立ち、やがて、沛公が、噲の武力のおかげで、あやふくも羽の劍光裏をのがれいでた瞬間は、間接行動の餘地のない瞬間であつた。世には、自然を相手の場合のみでなく、人を相手の場合でさへも、直接行動を唯一の活路とする非常時、變則時、危急時が、今後の社會に於いてすら、なほいくらかはありうることを、その可能を、われらは忘るべきでない。

羽にすゝめて、急に撃ちて失ふことなかれと、沛公を、大志未實現の早きにのぞんで殺さうと企てた范增は、果たして羽のために謀つて眞に忠なる者であつたか。わたしの答へは、不忠であつたといふにある。それ蒼鷹と鷙鳥とは、例えても死肉をば顧みないと想像される。それほどの本質語があればこそ、萬里一翔の雄翼をも創造しうるのではないかと

想像される。年壯氣旺の獅子は、一躍下に走獸をたふしそこなへば、恥ちを含んで立ち退き、他の走獸の見つかるまでは、ひもじさをも辨せ我慢して、敢て第一獸に第二躍を試みるやうな、きたない藝をば演じないと傳說される。勿論、事實は、別の解釋を妥當とする性質のものらしいが、意義深い寓話ではない。容易に直接行動を採用する人は、卑志の持ちぬしだ。淺智の持ちぬしだ。

「主上よ、クラーク將軍がジュノー將軍に接續することができません、墺軍の砲壘からの發射があまりに猛烈なので」「ク將軍をしてその砲壘を捕獲せしめよ」「主上よ、その砲壘に進み寄る聯隊は片つぱしから擊滅されます。主上よ、いかなる號令を發しませう？」「前進！前進！」この答への主人はナポレオンであつた。「余の鐵の手は、余の腕の尖端には存しなかつた。余の鐵の手は直接に余の頭と連結してゐた」とは、かれの直接行動信を語るかれの言であつた。暑いゝゝ、寒いゝゝと泣きごとや、愚痴をこぼすものではない。そんな無効果、無實蹟な勞を費やすひまに、暑ければ製氷の學と術を實現し、寒ければ燃炭燃油の學と術を實現すべしといふのが、古來の成功者や、偉人や、創造的人物に於けるが如くに、コルシカ產まれの一實行的天才者に於いても一本能信及び一自覺信であつた。この本能信と自覺信に、われらは直接行動主義の名を與へることができる。陽明やソクラテスの、知善知惡の直續としての爲善去惡も、結果本位の眞理觀に着目したプラグマティズムも、直接行動主義の名に値ひする要素を、多少異別の樣式に於いてではあるが、あざやかに含藏する。

實在のうちに、その類や、族や、個の識別條件として、比較的に感動力すなはち感受力、理解力、意思力の有無多少が認められる。失火の焰が移り擴がつてくる。火焰には意識はない。火焰にむかつて說法しても徒勞だ。動物殊に人には強度の意識力がある。人にむかつて爲善去惡を要求し、期待する方法は、人の本質としての意識力に、ある機會を供給

するに存する。かれの感動力を認識せば、かれを感化する可能を信ずべきだ。かれの理解力を認識せば、かれを啓發する可能を信ずべきだ。かれの意思力を認識せば、かれの自治、自助、自發的爲善去惡を催起する可能を信ずべきだ。人を直接目的とする行動は、むしろ唯心的方法でなくてはならん。なぜかといふに、人はむしろ唯心的本質の實在だからだ。石にむかつて說法する流儀の「熱の人」は、しば〲、人にむかつて物理學の適用を試み、心理學の適用を信じない。實在の本質が心的である程度に應じて、その實在を取り扱ふ方法を心的にし、實在の本質が物的である程度に應じて、その實在を取扱ふ方法を物的にすべきだから、エディ夫人のある信者と、唯物史觀のある信者とは、多少反省して改補する餘地を發見しよう。

直接行動の正當區域は、すなはち責任範圍は、工藝と技術だ。克己主義、禁欲主義、悟脫主義は、祈禱主義、讀經主義、まじなひ主義と同樣に、それの最善性の場合をとらへていうてさへも、生活の學と術の一部價以上の價値をば本質的に有しない。產業文明は、それの組織に多大の病弊をば伴うたが、人類の創造史の一大記錄であつた。科學は、工藝に延び、技術に化咲き、機械と、工場と、交通手段を始設し、欲望の滿足に曠古の飛躍的機會を與へ、痼疾、のどけを、不可避から可避に移し、不可治から可治に移した。眞の信仰は、科學を發明し、工藝技術を創作する力を無限に所有すべきだ。直接行動は工藝技術以外のものであつてはならん。立法、行政は、それが國家直屬でも、產業界直屬でも文化界直屬でも、國際社會直屬でも、工藝技術の原則と、原則に於いて同一では無論ないが、暗示的類似を有する。ある聯想質を有する。制度は、それが議會であらうと、それが勞働組合であらうと、またその他のなに〱であらうと、淨心無爲を方法として神の王國の到來を信望期待した時代と人の行動にくらべれば、價値すくなき間接行動にくらべられた價値多き直接行動だ。同じ制度は、しかしながら、暗殺、暴動にくらべれば、價値すくなき直接行動にくらべられ

た價値多き間接行動だ。現存の一制度或ひは數制度、或ひはたとひ全制度でさへもが、多少或ひはたとひ全然無價値[illegible]價値であるとしても、その際にわれらの取るべき態度方法は、制度の改良だ。善制度の新設だ。

ただ、制度の改良を可能にするためには、一面に於いては、さしつかへない限りの最大自由を、制度創設、制度繼承、要するに制度信認の當初からして、制度の原則生命のうちに確保する用意が肝要だ。永久不變などいふ條件を、輕率に制度に附與してはいけないのだ。それと同時に、他面に於いて、教育の普及發達が必要だ。制度は、品性高く、智能厚き個々人の、自治の方法として持たれるでなくてはいけないのだ。責任は自治の延長であり、創造は自治及び責任の完成であるのだから、制度は、祈禱主義から見れば直接行動であり、暴力主義から見れば間接行動であるが、これは制度は、祈禱主義としての原始的間接行動に代はるべき進化的直接行動であり、暴力主義としての原始的直接行動に代はるべき進化的間接行動であることを意味する。實は、祈禱主義には、手段智が缺乏してをる。暴力主義には、目的智が不足してをる。祈禱は神の王國を實現しない。暴力は新社會を産まない。兩者ともに、意義ある間接行動でもなければ、直接行動でもないのだ。無智の一態、不德の一形に過ぎない。間接行動の眞の存在權は、同時に、直接行動の眞の存在權だ。結果に主力を用ふるを直接行動と呼び、原因に主力を用ふるを間接行動と呼ぶならば、直接行動は、間接行動の「保護主義」だ。自由貿易が合理的に可能な極大限に擴張し、保護主義が合理的に可能な極小限に收縮すべきであるが如くに、間接行動の完全なる發達は、それ自身が、直接行動の別働隊を不用とし、または兼備するに至るべきだ。意義に於いて、目的に於いて、本質に於いては、人はすべて直接行動の信者であるべきだ。實行目錄に於いて、時間、空間の制限を有するわれらは、多少間接主義者たらざるを得ない。全實在を、瞬間に完成し、救濟し、理想化する意思の成績は、永久に餘白、未了を前途に望む。直接主義は、それの絶對的形式に於いては、われらの信仰だ。間接主

義は、それの最善の意義に於いて、われらの信仰の悲哀だ。

新約全巻の最終の巻は、ヤソの直接行動信だ。プラグマティストとしてのかれだ。數刻の間に破壞を値ひするすべてのものを破壞し、續く數刻の間に建設を値ひするすべてのものを建設せんとする焦躁無限の理想主義的浪漫的結果論者だ。教祖生誕後六十八年にして書かれたるその卷の著者は、自身存生のうちに舊新世界の終始を目撃するだらうとさへ期待された。偉大なる日の暮は、その年から起算して三年半ののちには切り落とされさうであつた。ジョンの死を見て、當時の善男善女は、やゝ幻滅の思ひをしたが、千九百年間の人類の行動と、千九百年後の人類の現狀とをヤソ自身生きながらへて目撃したら、どんな思ひをすることだらう。ウィルソン大統領の十四個條さへ空文に終はつた。資本と勞働は、雌雄を爭ふ前夜だ。理想としての直接行動は、手段としての間接行動となる不可避性を有するのだ。精神と想像は、直覺頓悟の方角に向いても、神の王國の方角に向いても、いかなる速力をも發揮しえよう。身體と物質とは、さういかない。心物一元、靈肉同根の哲學が、科學とも、常識ともなつた近代においては、制度、組合、社會、教育が、直接行動の代表的手段とされる新必要があるのだ。

直接行動は、その名辭が用ゐられる多くの場合に於ては、強制だ。相手の恐怖心を目的とする行動だ。或ひは、相手の意思を、物力方面から絕望にし、不可能にする行動だ。ストライキは、むしろ穩健に近い一例だ。なぜさういふかといふに、ストライキは、物を生産しないだけであつて、物や人を打ちこはしはしない。且つ、それは、なるべく大なる集團形式に於いて實現されることを理想とする。最近の英國を見ても、職掌の細別を超越し、地方別をも超越した、產業的、國民的規模を內容とする合同が主張されてをる。なるべく完全なる集團形式を理想とするところに、社會心がある。組合の大成は、たとひその反對勢力との關係に於ては戰鬪力の大成を意味するとしても、組合內の關係に於いては

複雜なる協力の發達を意味する。要するに協力の發達を意味する。またその戰鬪力も、ストライキを最高限の直接行動とするならば、概ね制度的、社會的たりうる。

社會の發達が直接行動に及ぼす影響は、輿論の喚起と、それを基礎としての制度の改變だ。輿論の喚起は廣義の教育をその手段とする。新聞、雜誌、大小の著書類、講演、學校等は、その具體的內容に屬する。近代式說得だ。制度の改變は新立法だ。說得と立法、說得を前提とする立法、これが、發達した社會に於ける直接行動でなくてはならん。けれども、說得を前提とする立法ならば、その實はすでに間接行動だ。元來、直接行動のあるものは抽象的結果主義だ。間接行動のあるものが抽象的原因主義であるのと相表裏する一事實だ。採信を値ひする直接行動は、すなはち合理的直接行動は、具體的結果主義でなくてはならん。具體的結果主義の一例は、新立法を目的として民衆を說得することだ。そして、その新立法を手段として、理想の生活を實現することだ。具體的原因主義の一例と同質にして等量だ。異稱同實だ。

說得の對象が多數人であると一人であるとは、本質的二事ではない。輿論を喚起すると、一人の理解を準備するとは、一原則の多少異なる二適用だ。自發的理性、自發的感情、自發的意思を觸發するといふ一原則だ。この原則は、二人間にも、一人對二人間にも、一人對百千萬億兆人間にも、同質異形の發動を要求する。父としての直接行動者もあれば、夫としての直接行動者もあるのだ。自分方及び相手方の各方の人數の單複にかゝはらず、すなはち個人對個人の場合にも、個人對團體の場合にも、團體對個人の場合にも、團體對團體の場合にも、自發善を目的とする行動が、合理的直接行動でなくてはならん。すなはち合理的間接行動でなくてはならん。一七六二年に公けにされた『社會契約』と一七八九年七月十四日のバスティール獄城襲擊との間に多少の因果關係があつたと假定する。そしてその獄城の陷落は善い

ことであつたと假定する。ルーソーが、より早く壓制者を說得しえなかつたのは、かれの間接行動の制限として自認されねばならんのだ。獄城は、民衆によつて破壞されるよりも、貴族によつて明け渡された方が一層の美譚であつたのだ。

直接行動を是認する人が、その直接行動の意義を、法治的、憲政的行動の代用として解するならば、それは粗大なる過失だ。是認せらるべき直接行動は、惡しき法治的、憲政的行動に代はる善き法治的、憲政的行動であるべきだ。現存の議會制が惡しくば、善き代表制を創作してそれに取りかへねばならんのだ。普選未實現の社會にあつては、普選の方向に進む必要もあらう。或ひは組合代表制の可能を實現する餘地もあらう。直接行動の目的は、徹底的に建設、創造、成長、進化、發達、完成に存すべきだ。

一人が命令して、民衆が盲從した時代に於いては、その一人を左右すれば、隨つて民衆を左右することができたらう。少數が專制して、多數が屈從した社會なら、その少數を處分すれば、隨つて多數を解放することができたらう。けれども今日の文明國は、もはやその境涯からは脫却した。ロイド・ジョージ氏の力は小さくはなかつたが、氏の一身を處分することによつて、英の對獨態度が大變したらうとは想像されない。かりに一九一八年の春に、一獨探が、ロ氏を爆擊したとする。ロー、カーソン、カーゾン、バルフオア、ノースクリツフ、敵愾心を增大した英國民は、後任を求めて直ちに發見しただらう。根柢の實在は、すなはち主動力は、デモクラシイの發達に應じて、民意となり、社會力となるからだ。あるかたちの直接行動は、川中島の兩雄や、鴻門の兩豪あたりにこそあてはまれ、今日には用をなさない。一九一六年の五月に、英國はキッチナア將軍を、あだかも直接行動によつてかの如くに奪はれた。けれども、當時まだ平大臣であつたロ・ジ氏が、代はつて陸相となり、英國の腰は折れなかつた。折れなかつたのみならず、恐らくは英國民が

キッチナア將軍に期待したりし功績を、將軍以上に樹てた。晩年のキ將軍が、いかなる信望と勢力を英國の民衆に確保してゐたかを記憶する人々は、デモクラシイの社會に於ける一人の力が、隨つてその一人の力を直接行動によつて非存在に移すことが、意外に薄弱である原則に想到しよう。

武力的直接行動は、防衛のある場合の可能的必要方法としてのみ是認せらるべきだ。その防衛の目的内容の所在が、普通の意味に於いての自己であるか、他人であるか、自團體であるか、他團體であるかは、問題でない。通りがかりに、暴行者を見たら、被害の當人でなくても、その被害者を防衛すべきだ。その唯一の方法が、暴行者を積極的に强制するに存する場合もあらう。一九一四年八月四日の英國は、自國のために、すくなくとも名義と口實に於いてはこの原則の團體的一適用を示した。勿論、適切にいひあらはせば、かゝる場合の他人や他團體は、或ひは人に限らず他實在は、實は本質的自己のある部分だ。本質的とは理想的だ。その意味に於いての普遍的だ。

武力的直接行動は、漸くにして、小ぜりあひの亂發ではなく、國際戰の程度にまで進化した。その國際戰も、一國と一國との戰爭ではなく、歐洲二分とか、地上兩斷とかいつた程度にまで進化した。その程度の國際戰でさへ、時代錯誤として廢用に近づきつゝある。殘るは階級爭だが、人類は、この階級爭をも、合理的間接行動によつて決定しえなくては恥ぢだ。國民主義、人類主義を敎化せずに、敵國の一人を刺したり、敵人種の少數を射たりすることは、徒勞の至りだ。敵階級の某々特殊人をねらふことも、同樣の徒勞だ。徒勞は浪費だ。浪費は損失だ。輿論と制度、新時代の直接行動はこの方向に專往せよ。敎育と立法、これがその方向の別名だ。敎育の改質と擴張、それを基底とする新立法、これを、現代人は、經濟、政治の兩面にわたつて要する。

資本主義は復活するか

山川均

一

資本主義の經濟組織が社會主義の經濟組織に推移するとせば、この推移は、純經濟上純機械的の過程としては如何なる形を取つて行はれるであらうか。マルクスは『資本論』第一卷の有名なクラシックな一章のうちに斯う云つて居る。

『この變形（資本主義化）の作用が舊社會の頂邊からどん底までを分解して仕舞ひ、そして勞働者が無產者となつて、其勞働の機關が資本となり、斯くて資本主義的生產が確立せられるや否や、其後に於ける勞働の社會化と、土地その他の生產機關が社會的に利用され從つて共同の生產機關となる變形と、それから私人的所有者の收奪とは、新しい形態を取る。今や收奪せられる者は、最早や獨立の勞働者ではなくて、多數の勞働者を搾取してゐる資本家である。そして此收奪は、資本主義的生產に固有內在する法則そのもの、即ち資本の集中によつて行はれるのである。一人の資本家は多くの資本家を殺す。……この變形作用から來る一切の利益を簒奪し獨占する大資本家の數が、斷えず減少してゆくと共に、悲慘と壓抑と隷屬と墮落と搾取との分量は增加する。そして之と共に勞働階級――斷えず其數を增し、資本主義的生產の作用の機制そのものに依つて訓練され、團結され、組織されつゝある階級――の反逆も增大する。……生產機關の集中と勞働の社會化とは、遂には資本制度といふ外殼と兩立すべからざる一點に到着する。外殼

は粉粋され、資本主義的私有財產の弔鐘は鳴らされ、收奪者は收奪せられるのである』。

マルクスがこの不朽の文章を書いてから五十年後の一九一五年に、ニコライ・レーニンは『帝國主義――資本主義の最終の段階』と題する小冊子を公けにした。レーニンはこの小冊子のうちに、歐羅巴の資本主義國に於ける產業集中の傾向を數字と事實によつて立證し、近代の銀行制度が、資本主義的發展の上に及ぼして居る特殊な職分を明かにし、金融資本の勢力と、その支配が益々少數財閥の掌中に歸しつゝあることを示し、更に近代の資本主義が自由競爭主義から、獨占主義に變じたこと、之が爲に列强の勢力均衡の上に及ぼす結果とに論及した。レーニンによれば、一九一四年の世界戰爭は、資本集中作用の一定の段階を代表する帝國主義の必然の結論であるばかりでなく、この段階は、資本主義的發達の『最終の段階』であつて、世界戰爭の砲聲は、やがて『資本主義的私有財產の弔鐘』に外ならぬ。

二

資本主義の經濟組織から社會主義の經濟組織に推移する變形は、資本集中の法則を通じて行はれるものであつて、資本集中の作用が或る一定の程度に達すると、『資本主義の外殼が粉粋され』るとしたならば、この外殼の粉粋は、資本主義的發展の如何なる時期に行はれるものであるか、マルクスはこの『社會革命の時期』を次の如き有名な定式で示して居る。

『社會の物質的生產力が其發達の一定段階に達すると、舊來の生產條件――その法律上の表はれは、舊來の財產關係――と衝突する。是等の財產關係は、曾ては生產力の發達形態であつたが、今や一轉して無產の桎梏となる。……………………………………。……………………、……………………、………………………………』。

斯ようにマルクスによれば、生産機關とその所有の形式が、生産方法の桎梏となつた瞬間、財産關係が生產力の桎梏となつた瞬間、更に言葉を換へて云へば、社會全體の爲に必要な生產力の增加が、從來の經濟組織と財產關係との爲に阻止せられるようになつた瞬間から、其社會は革命の時期に入つたものである。

然しながらマルクスによれば、資本主義發達の純經濟的純機械的の過程は、たゞ社會革命の條件を造るものであつて、『……』そこで之を云ひ換へて見れば、舊來の經濟組織と財產關係とが。生產力の桎梏となつた瞬間から、社會革命の能動的の要素──即ち人間的の要素、人間の意志、思想、行動といふ要素──が社會的變形の主たる動力となつて來るのである。露國は資本主義が成熟し切つて居らぬから、社會革命は成就することは出來ぬと主張する一部のマルクス主義者は、資本主義發展の法則に關するマルクスの學說を、單に純經濟的純機械的作用とのみ解して居る人々である。

然らば歐羅巴の資本主義國はどうであらうか。米國には現在最も少く見積つても四百萬人の失業勞働者がある。或は六百萬とも云はれて居る。英國の失業者も恐らく之に劣らぬばかりか、每月その數を增して居ることは爭はれぬ事實である。英國四千五百萬の人口のうちで、其一割は働く可き意志を有して居るにも拘らず、働く可き機會が與へられないで、怠惰を强制せられて居ると云ふことは、決して些細な事實とは云はれない。謂ゆる戰後の再建とは、單純に社會的の富を增加することである、單純に生產力を增加することにあるとしたならば、戰後の再建は必ずしも難事でない。現に英國は、立所に四五百萬人の勞働力を應用することによつて、生產力を激增することが出來得る筈である。ところで事實は之に反して、現に勞働の意志を有する四五百萬人の勞働者に怠惰を强制して居るとしたならば、少くとも英國の

資本主義は、その『外殼』が既に生産力の增加を阻止する桎梏となつた段階に達して居ることは疑ひがない換へて云へば。……英國の資本主義は、社會的革命の能動的要素が有効な活動を始めることの出來る瞬間に達して居ることだけは明かである。歐羅巴の資本主義は即ちその『最終の段階』に達して居るものであつて、この資本主義的發展の『最終の段階』を表する『帝國主義』の頂點に爆發した世界戰爭の大砲の響は、やがて資本主義の吊鐘でなければならぬ。ところが世界戰爭の大熔爐の中から、社會革命の洗禮を受けて出て來たのは唯だ露西亞の一國である、それも資本主義的發達の最も低度であつた露西亞の一國であつて、英國を先頭とする歐羅巴の資本主義國は、戰後の再建に苦悶しては居るものゝ、戰後の二ケ年間には、著しく復活の希望を增したことすらもある。今や多くの人々は、歐羅巴の資本主義は此危機を切り拔けて、今一度立て直ほすことが出來ると云ふ希望を、確實に抱いて居る。

歐羅巴の資本主義は復活するか。若し復活するとせば、資本主義的發展に關するマルクスの法則との關係はどうなるか。歐羅巴の『再建（レコンストラクション）』――即ち資本主義の復興――と云ふ問題は、此意味に於ても極めて興味ある問題となつて來る。

假りに歐羅巴の資本主義が、この『最終の段階』の如くに見へた段階を兎にも角にも切り拔けて、よく『再建』に成功したとしても、それは必ずしもマルクスの法則を破るものでないことは云ふまでもない。けれども少くともマルクス主義者が試みた此法則の適用の上には、大なる過誤があつたと謂はなければならぬ。若し歐羅巴の資本主義が復興するとしたならば、資本主義はその『最終の段階』と信ぜられた段階以外に、更に何等かの新しい發達形態を有するかも知れぬ。そして戰後の資本主義が取らんとする此新しい發達の形態は、マルクスが五十年前に、全く豫想しなかつた形態であるかも知らぬ。そこでマルクス說――少くとも其適用は――多少の修正を受容れなければならぬことゝなる。

歐羅巴の資本主義は復活するか。國際資本主義の形態に對して、代表的のマルクス主義者は、果してどんな觀察をしてゐるか。

三

萬國共產黨は本年（一九二一年）七月を以つて、莫斯科に第三回の大會を開いたが、右の問題は、勢ひこの大會に於ける重要問題の一つとなつた。大會は滿場一致を以て、トロツキー及びヴアルガの署名を以て提出せられた『國際の形勢』に關する長文の報告を可決した。此報告、現在に於ける歐羅巴の資本主義的發展に對する、マルクス主義者の見解を示した重要な文書であることは云ふまでもない。（報告の全文は『社會主義研究』十二月號參照）。教授ヴアルガは勞農匈牙利の最高經濟委員長の要職を占めてゐた人であるが、右の報告の大様を概說した一論文のうちに、次の如く述べて居る。

一年前、共產黨インタナショナル第二回大會の開催せられた當時には、資本主義は戰爭の爲に陷入つた荒廢から漸次に恢復して、も一度新生命に入るかの如くに見えた。勿論當時既に、來らんとする恐慌の兆候が現はれては居つたが、それは極めて遠い地點に望見されたまでゝあつた。日本と米國とは、前よりも一層強大となつて世界戰爭から出て來た。そして組織の完備した資本主義は、近づきつゝある恐慌に對して頑強な抵抗を現はした。之に反して歐羅巴は一般的の物資欠乏と、物價の騰貴と、幾分かは失業問題の爲に惱まされてゐた。そして革命的な共產主義の勞働者は尙ほ極めて少數であつた。

一九一八年十一月から一九二〇年五月に至る期間の、經濟上の形勢を精密に分析して見ると、この世界經濟の好景氣は、主として投機的の附景氣であつたことが分る。そして米國、日本、及び英國では、此の好景氣は、主として戰前の

經濟から戰後の經濟への推移によつて齎らされたものであるが、從來或る種の商品の供給を絕たれてゐた中歐の、急激な需要にもよるものである。けれども斯ような物資欠乏の結果は、間もなく消え去つた。と云ふのは市場が飽滿したからではなくて、支拂の手段として、相當の外國貨幣が欠乏したからである。此時歐羅巴、殊に戰敗國は、何も彼も賣り盡した狀態となつた。何故ならば歐羅巴は現在の生產物を輸出してゐたのではなくて、最後の貯藏品、即ち贅澤品や機械や生產機關を賣拂つてゐたのだからである。そこで表面は好景氣に見えてゐたにも拘らず、歐羅巴の經濟的凋落は、爲替相場の不斷の低落に現はれてゐたのである。

斯ような表面上の好景氣は、一九二〇年の半ばまで續いたが、此時に至つて、世界戰爭から受けた資本主義的產業の壞裂は曝露され、世界の資本主義的產業は幾つかの別々の單位に分裂した。米國と英國と日本とは、生產機關と船舶と鐵及び鋼鐵工場の生產物とを以て、市場を飽滿すると同時に、是等の諸國は戰前に比して遙かに生產能力を高めたが、歐羅巴は依然として生產不足に苦んでゐたのである。

歐羅巴の諸國民は、消費するだけのものを生產することが出來ないが、之は主として生產機關の不足と、鐵道及び船舶の破壞、肥料の欠乏によるものであつた。そして更に此形勢を甚しくしたものは戰爭による人命の損傷と、營養不足と、勞働者の勞働能率の低下であつた。そして其他の歐羅巴諸國も、英米の生產物の代りに提供すべき何等の貨物をも有しなかつた。

斯くて地球の兩つの部分は、鮮明な對照をして居つた。即ち地球の一半は生產過多に苦しみ、資本家は巨額の商品の處置に窮して居り、他の一半は生產の不足に苦み、欠乏と窮迫に悩んでゐた。然るに資本主義に固有する全て是等の諸要素の相互作用の結果として、一方に於ける生產機關の過剩を、他の諸國の手に移して、この矛盾を解くことが出來

ぬ。貧乏國は之に對して、等價物を提供することが出來ぬので、依然として欠乏に苦んで居る。資本主義は之に對して、如何なる救治策を提供することが出來るであらうか。それは信用であらうか。米國の過剩は、信用によつて一部分でも獨逸若くは墺太利、又は波蘭、或は其他の貧乏國の手に移すことは出來ないであらうか。資本主義に取つては、此の解決方法すらも不可能である。抑々戰爭は、世界に於ける獨逸の產業上の支配權を、武力によつて打ち落す目的で着手せられたものである。そこで獨逸が經濟的に再興することは、戰爭の理由に反するものである。

然るに一方には、佛蘭西と白耳義と伊太利國は、償金の助けによつて經濟上の地位を恢復しやうとする。ところが獨逸は國民を給養する爲には、食料を輸入しなければならぬ羽目になるので、製造を以つて償金を支拂ふの外はない。然るに償金を工業生產品を以つて支拂ふ爲には、獨逸は工業上の機關を再興しなければならぬ。若し獨逸が多量の製造品を以て、聯合國に戰費を支拂ふなら、英、白、佛の製造業者は恐る可き窮地に陷入ることゝなる。自由貿易の英國は、既に一切の獨逸品に對して保護關稅を課し、佛蘭西と白耳義とは、大に其關稅率を引上げた。

斯くの如く吾々は、一つの矛盾には第二の矛盾が伴ふこと、そして資本主義の世界は、到底之を解決し得ぬことを知るのである。けれども資本主義は、尙ほ何等かの解決方法を求めて藻搔いて居る。そして是等の試みは、要するに國民的收入に對する勞働者の配前を減少し、斯くて世界市場の競爭に堪へるといふ一事を目指して居る。資本主義は其重荷を勞働階級の肩に移すこと以外には、何等の方法をも有しない。斯くて吾々の眼前に行はれて居る激しい鬪ひに、資本家は攻勢を取り、勞働者は守勢を取つて居る。斯くて吾々の眼前には、英國炭坑夫の鬪爭を見、そして其頑強と精力とに驚かされるのである。

けれども資本主義そのものゝ範圍を突破して居らぬ彼等の戰鬪方法では、彼等は勝利を得ることが出來なかつたので

ある。

教授ヴアルガは、次の如き觀察を以つて其論文を結んで居る。

『萬國共產黨第三回大會は、第二回の大會の開かれた當時とは、全く異つた經濟上政治上の世界に開かれて居る。一年前には、吾々の周圍の世界は皮相的には輝やいてゐた。然るに今日は深刻な危機がある。一年前には、吾々は唯だ共產主義者の少數の團體を有したに過ぎぬ。然るに今日は、吾々には有力な大衆的の組織がある。一年前には、生產階級の隊伍の間にも、資本主義は復興すると信じられてゐた。然るに今日は、資本主義の復活は不可能であるといふ自覺が起つて居る。一年前には、殆んど全ての無產階級は仕事を持つてゐた。今日は一千五百萬乃至二千萬の勞働者は職業を失つて居る。……狀況は根本的に變化した。昨年中に於ける勞働者の革命的爆發は失敗に歸し、白衛隊の力に賴るブルジヨア國家は、昨年よりも强大となつたかの觀すらもある。……………………………………』

……………………………………………………………………………………………

四

大會に於けるトロツキーの報告演說は、更に詳細な統計と數字とによつて、右の見解に註釋を加へて居る。

先づ農業の狀態から見ると、一九二一年の收穫を戰前五年間の平均收穫に較べると、何等の減少を見ないが、若し歐羅巴のみに就いて云へば、一九二〇年には一億二千萬キンタル（一キンタルは十二貫目）の減少である。米國は歐羅巴の不足に反して過剩がある。畜產も略ぼ同樣である。そこで歐羅巴の人口は、戰爭による大殺戮にも拘らず、戰前に比して一千八百萬の增加を示して居ることを計算に入れたなら、歐羅巴の人類は戰前に比して遙かに貧困となつて居ることは明白である。

鑛業の狀態を見ると、更に甚しいものがある。一九二〇年に於ける世界の石炭産額は、一九一三年の七割六分であつて、米國では一割の三分の増加を見たが、歐羅巴では一割八分の不足となつて居る。鐵及び其他の主要鑛業も同樣であつて、世界全體の經濟狀態を見ても、各國の經濟狀態を見ても、戰爭の結果は、若しく貧乏となつて居る。

交戰各國の國富は、戰前には二千四百億馬克（獨逸金馬克）、一ケ年の收入總額は三百億馬克と推算せられてゐた。然るに信憑すべき經濟學者によると、戰爭は國富の五割以上を破壞した。然るに戰爭は、一ケ年の收入總額の三分の一を費消したに過ぎないことを計算に入れたなら、交戰國の國富は、一九一九年までの間に約三分の一以上を減じて一千六百億馬克となつたことを知るのである。

之と同時に、紙幣は驚く可き程度に膨脹した。即ち戰前の二百八十億馬克は十倍以上の増加を見て、三千億馬克となつた。之は國民の富の減少した程度を示すには足らぬが、國民の收入の減少を證據立てるのである。然るに外觀上は、却つて富が増加したかの如き形を取つて居る。政府は國債に次ぐに國債を以てし、紙幣を以て市場を氾濫せしめたが、其結果は實際の損失を一層大きくした。一方には生産的な資本は損減して居るのに、名目上の虛僞の資本額は増加した。そして商品流通の機關たる信用制度は、戰爭の爲に國民の富を動員する手段となつた。斯ように國民が戰前よりも貧困になつたことを、最もよく例證したものは、交戰各國に於ける住宅問題の危機であつて、之は國民經濟の最も重要な一部門が、全く閑却せられてゐたことを示して居る。

五

斯ような形勢は、交戰國の各別に就て見ても同樣であつて、リチヤード・カルプアートの記述によると、獨逸の物質的富の生産に從事した勞働者の數は、一九〇七年には一百千三十萬人であつたが、今日は其の四割二分、即ち四百八十

八萬人に減じて居る、戰前には一千五百萬噸の收穫を擧げた獨逸の農業は、一九一九年には六百六十萬噸に減じ、一九二〇年には更に五百二十萬噸となつた。カルヴアートによれば、建築業も亦た生產力は戰前の半分となつて居る。然るに獨逸の國債は二千五百億馬克（金馬克）に增大し、紙幣の量は戰前に比して十六倍し、馬克の實際の價値は、戰前の七ペンニヒ以下に下落した。獨逸國民の富は、戰前には二千二百五十億馬克であつたが、今日は僅かに一千億馬克と推算せられて居る。そして國民の一ケ年の收入は四百億馬克から百六十億馬克となり、獨逸の國民は戰前よりも六割貧乏となつた譯であつて、カルヴアートは、今日の獨逸は、九〇年代の半頃よりも一層貧乏になつたと云つて居る。然るに獨逸は賠償の名義で、一ケ年二十億馬克の貢稅を戰勝國に支拂はなければならぬ。そこでカルヴアートは、獨逸が金馬克と國家の財政との間に、漸次に順當の爲替相場を恢復することは到底不可能であつて、國家の破產に外ならぬと斷じて居る。近頃獨逸では、經濟上、政治上、哲學上、道德上、その他色々の見地から、國家の破產といふことが喧ましく論議せられて居る。…………………………………

佛蘭西では實際の數字が秘密にせられて居り、公表せられて居るものも多くは虛僞であるから、實際の形勢を示すことが困難であるが、佛蘭西の小麥の收穫は二十三億ボンドを減じ、家畜は五百萬頭を減じ、石炭は一千六百萬噸――アルサス・ローレンを算入すれば更に多額となる――を減じて居る。輸出入の權衡を見ると、一九二〇年には五十億の輸入超加となつて居る。一九二一年の最初の三ケ月は貿易の順調を示し、輸出入の平衡を見たことは事實であるが、それは原料品の輸入が減じた結果であつて、製造品の輸出が增加した爲ではない。之と同時に國債は一九一三年から一九二一年の間に三倍し、紙幣の分量は七倍した。獨逸の賠償を計算に入れないと、佛國々庫の不足は五十五億法の巨額に上ぼるのである。シュエルラーが佛蘭西一大官僚主義的の機械に變じたと云ひ、シュヴオンは、紙幣の洪水を止めるには

唯だ破産あるのみと云つたのは、少しも訝くに足らぬ。佛蘭西は今や歐羅巴と世界に於ける最も寄生的の國であつて、獨逸と殖民地との掠奪によつて僅かに存在を續づけて居る。そして獨逸は之が爲に、佛蘭西の利益する二倍を損失して居るのである。そして之が歐羅巴を指導してゐる佛國の立場である。

英國は歐羅巴諸國のうちで、戰爭の影響を蒙ることの最も少かつた國である。英國の農業は、戰爭中に幾分の改善を見たが、それはほんの僅かの期間であり、しかも國家の特別な補助金の結果であつた。英國經濟の基調たる石炭業は、開戰以來二割を減少した。鋼鐵業も同樣である。炭坑大罷工の起つた一九二一年の最初の三ケ月になると、出炭量は更に減少した。英國の主たる輸出品目たる石炭の輸出額は、最近七年間に七割六分を減じ、一九二一年の最初の五ケ月間の輸出額は、戰前の六分の一に過ぎぬ。唯に石炭ばかりでなく、英國の外國貿易額は戰前の三分の一を減少した。然るに國債は十一倍となり、軍事費の豫算は三倍となつた。そして英國が全世界の上に有した優越の地位を失ひつゝあり、恐らくは既に失つたと云ふことは、ポンド・スターリング——卽ちソヴエリン——この『ソヴエリン』といふ名稱そのものが、英國貨幣の世界的支配を象徵して居つた——が全く其金箔を引剝がれて、米國の弗によつて取つて代られた一事によつても知ることが出來る。米國の弗に比較して、英國のポンドは、今や二割四分の低落を示して居る。

六

斯ような數字と事實とによつて、トロツキーもヴアルガと同一の結論に達して居る。トロツキーは斯ような經濟上の狀況から起る、國際間の關係について、次の如く論じて居る。

『……社會的均衡を恢復しようとする望みは、國際間の均勢を恢復しようとする望みと照應する。若し帝國主義的戰爭の直接の目的が、多くの國民的國家に代ゆるに一大世界帝國を以てすることにあるならば、戰爭の責任者等は、充分の

成功を收めることが出來なかつたと云はねばならぬ。戰爭の結果は全く反對の方向にあつた。即ち戰爭の結果は、歐羅巴に若干の小國家を形造することであつて、帝國主義の巨人等は、世界の權力を彼等の間に分配することが出來なかつたことを證明するものである。この結果は絶え間なき國際間の紛爭となつて現はれて居る。佛蘭西は歐羅巴に於ける指導國の役目を演じ、事毎とに英國の政策と衝突する。そして英國の政策は、愈々益々佛蘭西の利害、殊に獨逸の利害に反して來る。若し利害關係が自動的に大衝突を來す場合を云つたなら、それは必ず英米の關係である。……今や英國は、世界の至上權を放棄するか、それとも一切の國富を戰爭の運命に任せなければならぬ、斯くて吾々は、萬國共產黨第一回及び第二回大會に於て見た世界の形勢に對する記述は、依然として正確であることを斷言するに躊躇せぬ。國際資本主義の政策の上には、何等の社會的均衡も恢復せられては居らぬ。萬國の無產階級は依然として、一方には帝國主義的對立の增大と、他方には社會的矛盾の增大とに當面する。歐羅巴の生產力の衰退、東方に於ける勞働運動の成長米國に於ける社會的對立の增大、…………………………………………………………、…………………………………………………………』。

米國の社會主義者スコット・ニャリングは、自國の失業問題を論じて斯う云つて居る。『何時になつたら仕事は始まるであらうか。輸出貿易と、農民の購買力と、勞働者の經濟上の地位と、物價の趨勢とを調べて見ると、問題は斯う變更しなければならぬ――今日から一九二二年の三月までの間に、更にどれだけの勞働者が職業を失ふか？』。

米國は戰爭によつて强大となつた唯一――日本を除いては――の資本主義國である。けれども此失業問題の解決を見出す迄は、決して其資本主義は安全とは云はれない。太平洋會議がよく軍備縮少の計畫に成功するとしたならば、戰後に於ける資本主義復興の爲に殘された唯一の方法が、必然に導く可き第二の世界戰爭が、如何に切迫して居るかを反映

するものに過ぎぬ。それは歴史に於ける最初の光輝ある成功ではなくて、人類歴史の前記を結ぶ最後の一頁に外ならぬ。

歐羅巴の資本主義は復活するか。歐羅巴の資本主義が幾多の難關と危機とを切拔けて、よく再興に成功することが出來るか否かは暫く措き、少くとも歐羅巴の資本主義が生産力の桎梏となつて居ることだけは疑ふことの出來ぬ事實である。

資本主義の經濟組織が生産力の桎梏となつた瞬間は、マルクスに從へば社會的變形の能動的要素が舞臺に上ぼる可き時である。トロツキーは同じ報告演說のうちに、歐羅巴の無産階級について次の如き觀察を下して居る。

『……理論上から不可能（資本主義再興の）を主張しただけでは足らぬ。即ち資本主義的均衡の恢復を不可能たらしめる實際の條件を打算に入れることが緊要である。日和見主義者は、好んで資本主義的發展が、自動的に恢復するかの如くに云ふ。之が彼等の特徴であつて、彼等はそれは鬪爭する二つの階級の問題ではなくて、民衆の意志から獨立し、兩階級の政治的關係から離れた自動的の過程であるかの如くに云ふ。……

『之は産業上の恐慌と相並んで、階級的利害の衝突が、恐る可き勢で進行しつゝあることを、全然彼等が見落としてゐることを意味して居る。商品の生産は減少したが、階級の分化と階級鬪爭の增大とは、巨人の步調で進んで居る。勞働運動の傳統によつて政治的に訓練せられた分子と共に、吾々には、戰爭によつて覺醒した勞働者の一大階級がある。そして共裡には、ほんの最近に階級鬪爭の舞臺に上ぼつた多數の婦人がある。行動の上では、往々にして極めて用心深い勞働階級の一部があると共に、革命の高潮に押されて只管に攻勢的行動を取らうとし、そして斯ような行動の結果は充分に覺つて居らぬ部分がある。』

『然るに一方には、ブルジョア階級間の形勢も依然として一變した。ブルジョア國に於ける政治的闘爭と政治的勢力との前線には、ブルジョア階級の精英が立つて居るが、其他の小ブルジョア階級は、相對的にも絶對的にも貧乏となり、その社會的地位は低下して、眞のブルジョア階級と公然相對立するようになつて居る。……………………、……………………………………………………………………。…………………………………………、…………………………………………………………………………、……………………………………………………………………。………………。……

七

トロツキー、ヴアルガの提出した決議も亦た次の如く云つて居る。

『戰後二ケ年半の間に、……然るに戰爭中と戰爭の直後には、歴史的形勢の必然として、歐羅巴の無産階級を指導してゐたものはブルジョア階級の有益な政治的武器たる第二インタナショナルであつた。

『一九一八年の終りから一九一九年の初にかけては、獨逸に於ける政府の權力は、事實上勞働階級の掌中にあつたが、社會民主主義と職業組合とは、權力をブルジョア階級の手に返還せしめる爲に、有ゆる機關と傳統的の勢力とを使用した。

『伊太利に於ては、一ケ年半に亘る無産階級の革命的運動は、力に滿ち充ちてゐた。そしてブルジョア階級は、唯だ社會黨の小ブルジョア的無力と、議員團の背信的政策と、勞働組合の怯懦な日和見主義とのお蔭で、僅かに其の機關を立

て直ほし、其機關を再興し、白衛隊を動員し、無產階級に對して攻勢を取ることが出來た。

『昨年中に於ける英國の有力な罷工運動が、一再ならず壓伏せられたのは、政府の警察力の爲よりも、寧ろ其機關が反革命の目的に利用されて居る保守的組合の爲であつた。若し英國の勞働組合の機關が、資本主義の利益に用ひられてゐる半分の力を、社會主義の爲に出だしたなら、英國の無產階級は權力を掌握し、ほんの僅かの犧牲によつて、容易に全國の經濟的再興に着手することが出來たらう。之と同じことは、程度こそ異なれ、其他の全ての資本主義國についても云ふことが出來る。』

若しトロツキーとヴアルガの觀測を正しいとしたならば、歐羅巴の資本主義は、社會的變形に必要な二つの要件——經濟的機械的の要件と人的能動的の要件——とを、完全にそのうちに發達して居ると云はなければならぬ。

然らばこの社會的變形は果して何の日に行はれるか。歐羅巴の資本主義が少くとも戰後の二ケ年半の間生き延びたことは、この觀測を事實の上に裏切つたものではあるまいか。大會の決議は之に答へて云ふ。（十五行缺）

資本主義は復活するか。世界のブルジヨアジーは謂ゆる『戰後の再建（レコンストラクシヨン）』に成功するか。何人も異つた判斷を下す自由がある。けれども何人と雖も、歐羅巴の資本主義が、マルクスの謂ふような、生產の組織が生產力の桎梏となつた時機に達して居ることだけは、決して否むことは出來ぬ。マルクスの資本主義發展の法則は、今や全世界的の試驗室に於て試驗されて居る。

宣言一つ

有島武郎

思想と實生活とが融合した、そこから生ずる現象——その現象はいつでも人間生活の統一を最も純粹な形に持ち來たすものであるが——として最近に日本に於て、最も注意せらるべきものは、社會問題の、問題として又解決としての運動が、所謂學者若くは思想家の手を離れて、勞働者そのものゝ手に移らうとしつゝある事だ。こゝで私のいふ勞働者とは、社會問題の最も重要な位置を占むべき勞働問題の對象たる第四階級と稱せられる人々をいふのだ。第四階級の中特に都會に生活してゐる人々をいふのだ。」

若し私の考へる所が間違つてゐなかつたら、私が前述した意味の勞働者は、從來學者若くは思想家に自分達を支配すべき或る特權を許してゐた。學者若くは思想家の學說なり思想なりが勞働者の運命を向上的方向に導いて行つてくれるものであるとのいはゞ迷信を持つてゐた。而してそれは一見さう見えたに違ひない。何故ならば實行に先立つて議論が戰はされねばならぬ時機にあつては、勞働者は極端に口下手であつたからである。彼等は知らず識らず代辯者にたよることを餘儀なくされた。單に餘儀なくされたばかりでなく、それにたよることを最上無二の方法であるとさへ信じてゐた。學者も思想家も、勞働者の先達であり、指導者であるとの誇らしげな無內容な態度から、多少の覺醒はし出して來て、代辯者に過ぎないとの自覺にまでは達しても、なほ勞働問題の根柢的解決は自分等の手で成就さるべきものだとの

覺悟を持つてゐないではない。勞働者はこの覺悟に或る魔術的暗示を受けてゐた。然しながらこの迷信からの解放は今成就されんとしつゝあるやうに見える。

勞働者は人間の生活の改造が生活に根ざしを持つた實行の外でしかないことを知りはじめた。その生活といひ、實行といひ、それは學者や思想家には全く缺けたものであつて、問題解決の當體たる自分達のみが持つてゐるのだと氣付きはじめた。自分達の現在目前の生活そのまゝが唯一の思想であるといへばいへるし、又唯一の力であるといへばいへると氣付きはじめた。かくして思慮深い勞働者は、自分達の運命を、自分達の生活とは異つた生活をしながら、而かも自分達の身の上について彼れ是れいふ所の人々の手に托する習慣を破らうとしてゐる。彼等は所謂社會運動家、社會學者の動く所には猜疑の眼を向ける。公けにそれをしないまでも、その心の奥にはかゝる態度が動くやうになつてゐる。この動き方はまだ幽かだ。それ故世人一般は固よりのこと、一番早くその事實に氣付かねばならぬ學者思想家達自身すら、心付かずにゐるやうに見える。然し心付かなかつたら、これは大きな誤謬だといはなければならない。その動き方は未だ幽かであらうとも、その方向に勞働者が動きはじめたといふことは、それは日本に取つては最近に勃發した如何なる事實よりも重大な事實だ。何故ならそれは當然起らねばならなかつたことが起りはじめたからだ。如何なる詭辯も拒むことの出來ない事實の成行きがそのあるべき道筋を辿りはじめたからだ。國家の權威も學問の威光もこれを遮り停めることは出來ないだらう。在來の生活樣式がこの事實によつてどれ程の混亂に陷らうとも、それだといつて、當然現はるべくして現はれ出たこの事實をもみ消すことはもう出來ないだらう。

嘗て河上肇氏と始めて對面した時（これから述べる話柄は個人的なものだから、こゝに公言するのは或は失當かも知れないが、こゝでは普通の禮儀をしばらく顧みないことにする）、氏の言葉の中に「現代に於て哲學とか藝術とかにかゝ

はりを持ち、殊に自分が哲學者であるとか、藝術家であるとかいふことに誇りをさへ持つてゐる人に對しては自分は侮蔑を感じないではゐられない。彼等は現代が如何なる時代であるかを知らないでゐる。知つてゐながら哲學や藝術に沒頭してゐるとすれば、彼等は現代から取り殘された、過去に屬する無能者である。彼等が若し『自分達は何事も出來ないから哲學や藝術をいぢくつてゐる。どうかそつと邪魔にならない所に自分達をゐさしてくれ』といふのなら、それは許されない限りでもない。然しながら、彼等が十分の自覺と自信を以つて哲學なり、藝術なりにたづさはつてゐると主張するなら、彼等は全く自分の立場を知らないものだ」といふ意味を云はれたのを記憶する。私はその時、素直に氏の言葉を受取ることが出來なかつた。而してかういふ意味の言葉を以て答へた。「若し哲學者なり藝術家なりが過去に屬する低能者なら、勞働者の生活をしてゐない學者思想家も亦同樣だ。それは要するに五十步百步の差に過ぎない」。この私の言葉に對して河上氏はいつた「それはさうだ。だから私は社會問題研究者として敢て最上の生活にあるとは思はない。私は矢張り何者にか申譯けをしながら自分の仕事に從事してゐるのだ。……私は元來藝術に對しては深い愛着を持つてゐる。藝術上の仕事をしたら自分としては嘸愉快だらうと思ふことさへある。然しながら自分の內部的要求は私をして違つた道を採らしてゐる」と。これでこゝに必要な二人の會話の大體はほゞ盡きてゐるのだが、その後又河上氏に對面した時、氏は笑ひながら「或る人は私が炬燵にあたりながら物をいつてゐると評するさうだが、全くそれに違ひない。あなたもストーブにあたりながら物をいつてゐる方だらう」と云はれたので、私もそれを全くと首肯した。河上氏にはこの會話の當時既に私とは異つた考へを持つてゐられたのだらうが、その時頃の私の考へは今の私の考へとは大分相違したものだつた。今若し河上氏があの言葉を發せられたら、私はやはり首肯したではあらうけれども、或る異つた意味に於て首肯したに違ひない。今なら私は河上氏の言葉をかう解する「河上氏も私も程度の差こそあれ、第四階級とは

全く異つた圏内に生きてゐる人間だといふ點に於ては全く同一だ。河上氏がさうである如く、殊に私は第四階級とは何等の接觸點をも持ち得ぬものだ。私が第四階級の人々に對して何等かの暗示を與へ得たと考へたら、それは私の謬見であるし、第四階級の人が私の言葉から何等かの影響を被つたと想感したら、それは第四階級の人の誤算である。第四階級者以外の生活と思想とによつて育ち上つた私達は、要するに第四階級以外の人々に對してのみ交渉を持つことが出來るのだ。ストーブにあたりながら物をいつてゐるどころではない。全く物などはいつてはゐないのだ」と。

私自身などは物の數にも足らない。例へばクロポトキンのやうな立ち優れた人の言說を考へて見てもさうだ。縱令クロポトキンの所說が勞働者の覺醒と第四階級の世界的勃興とにどれ程の力があつたにせよ、クロポトキンが勞働者そのものでない以上、彼れは勞働者と活き、勞働者と考へ、勞働者と働くことは出來なかつたのだ。彼れが第四階級に與へたと思はれるものは第四階級が與へられることなしに始めから持つてゐたものに過ぎなかつた。いつかは第四階級はそれを發揮すべきであつたのだ。それが未熟の中にクロポトキンによつて發揮せられたとすれば、それは却て惡い結果であるかも知れないのだ。第四階級者はクロポトキンなしにもいつかは動き行くべき所に動いて行くであらうから。而してその動き方の方が遙かに堅實で自然であるであらうから。勞働者はクロポトキン、マルクスのやうな思想家をすら必要とはしてゐないのだ。却つてそれらのものなしに行くことが彼等の獨自性と本能力とをより完全に發揮することになるかも知れないのだ。

それなら例へばクロポトキン、マルクス達の主な功績は何所にあるかといへば、私の信ずるところによれば、クロポトキンが屬してゐた（クロポトキン自身はさうであることを厭つたであらうけれども、彼れが誕生の必然として屬せずにゐられなかつた）第四階級以外の階級者に對して、或る觀念と覺悟とを與へたといふ點にある。マルクスの資本論で

もさうだ。勞働者と資本論との間に何のかゝはりがあらうか。思想家としてのマルクスの功績は、マルクス同樣資本王國の建設に成る大學でも卒業した階級の人々が翫味して自分達の立場に對して觀念の眼を閉ぢる爲めであるといふ點に於て最も著しいものだ。第四階級者はかゝるものゝ存在なしにでも進むところに進んで行きつゝあるのだ。

今後第四級者にも資本王國の餘慶が均霑されて、勞働者がクロポトキン、マルクス其他の深奧な生活原理を理解して來るかも知れない。而してそこから一つの革命が成就されるかも知れない。然しそんなものが起つたら、私はその革命の本質を疑はずにはゐられない。佛國革命が民衆のための革命として勃發したにもかゝはらず、ルーソーやヴォルテールなどの思想が緣になつて起つた革命であつただけに、その結果は第三階級者の利益に歸して、實際の民衆即ち第四階級は以前のまゝの狀態で今日まで取殘されてしまつた。現在の露西亞の現狀を見てもこの憾みはあるやうに見える。彼等は民衆を基礎として最後の革命を起したと稱してゐるけれども、露西亞に於ける民衆の大多數なる農民は、その恩惠から除外され、若くはその恩惠に對して風馬牛であるか、敵意を持つてさへゐるやうに報告されてゐる。眞個の第四階級から發しない思想若くは動機によつて成就された改造運動は、當初の目的以外の所に行つて停止する外はないだらう。それと同じやうに、現在の思想家や學者の所說に刺戟され一つの運動が起つたとしても、而してその運動を起す人が自ら第四階級に屬すると主張した所が、その人は實際に於て、第四階級と現在の支配階級との私生子に過ぎないだらう。

兎も角も第四階級が自分自身の間に於て考へ、動かうとし出して來たといふ現象は、思想家や學者に熟慮すべき一つの大きな問題を提供してゐる。それを十分に考へて見ることなしに、自ら指導者、啓發者、煽動家、頭梁を以つて任ずる人々は多少笑止な立場に身を置かねばなるまい。第四階級は他階級からの憐憫、同情、好意を返却し始めた。かゝる

態度を拒否するのも促進するのも一に繋つて第四階級自身の意志にある。

私は第四階級以外の階級に生れ、育ち、教育を受けた。だから私は第四階級に對しては無緣の衆生の一人である。私は新興階級者になることが絶對に出來ないから、ならして貰はうとも思はない。第四階級の爲めに辯解し、立論し、運動する、そんな馬鹿げ切つた虚僞も出來ない。今後私の生活が如何樣に變らうとも、私は結局在來の支配階級者の所產であるに相違ないことは、黑人種がいくら石鹼で洗ひ立てられても、黑人種たるを失はないのと同樣であるだらう。從つて私の仕事は第四階級者以外の人々に訴へる仕事として始終する外はあるまい。世に勞働文藝といふやうなものが主張されてゐる。又それを辯護し力說する評論家がゐる。彼等は第四階級以外の階級者が發明した文字と、構想と、表現法とを以て、漫然と勞働者の生活なるものを描く。彼等は第四階級以外の階級者が發明した論理と、思想と、檢察法とを以て、文藝的作品に臨み、勞働文藝と然らざるものとを選り分ける。私はさうした態度を採ることは斷じて出來ない。

若し階級爭鬪といふものが現代生活の核心をなすものであつて、それがそのアルフアでありオメガであるならば、私の以上の言說は正當になされた言說であると信じてゐる。どんな偉い學者であれ、思想家であれ、運動家であれ、頭梁であれ、第四階級的な勞働者たることなしに、第四階級に何物かを寄與すると思つたら、それは明らかに僭上沙汰である。第四階級はその人達の無駄な努力によつてかき亂されるの外はあるまい。

一九二二〇十一月二十六日

獨逸大統領エーヴエルトと語る

伯林にて
本社特派員　室伏高信

一

私は獨逸へきて、二、三の實際政治家に會つて見たいと思つてゐた。カウツキーは私のために獨立社會黨の首領ブライトシャイドを、ベルンシタインは獨逸共和國現大統領エーヴエルトと、改造大臣ラーテノウの二人を、ともにそれ〴〵紹介してくれた。ベルンシタインからは、九月の半ば頃に、ある日の何時に、大統領エーヴエルトが、私の訪問するのを待つてゐるといふの手紙をよこしてくれた。私はその時丁度ハンブルヒへの旅にゐたので、大統領エーヴエルトは、その指定の日の何分かを私の訪問を期待しつゝ、彼れの官邸に、空しく待ちあぐんでゐたところであつた。私は旅から歸つてこのことを知つたので、今度は自分自ら大統領へあてゝ行違の事情を述べて、是非一度會つて話したいといふ意思を通じて、そのまゝまたゲールリッツへの旅に上つた。旅から歸つた翌日、秘書官のなにがし君から、大統領は九月二十九日午前十一時、彼れの官邸で私を待つてゐるといふことを通じてきた。

私はその日、正確に午前十一時に、伯林ヴヰルヘルム街七十三番なる、獨逸新共和國大統領の官邸にと自動車を驅つた。鐵門前で自動車を降りて、一人の衞兵が銃を肩にして立つてゐた。私は秘書官からの手紙を見せて、奥の受付口へと歩いていつた。私はこゝでも秘書官からの手紙を見せると、今度は正面の玄關口へと私を案内してくれた。こゝにも二人ばかりの取次役が、燕尾服に威容をとゝのへて控えてゐた。一人の燕尾服君が、秘書官からの手紙を見てから、貴賓を迎するように、私を

正面の大廣間へと導いて置いて、大統領の室へと入つて行つた。この大廣間には數脚の椅子と卓子と、二、三つ扁額のほかには別にとりたてゝいふほどのものもなかつたが、その背面は一帶に鬱茂した庭園で、一寸見たところ果てしもない森林のように闇く深く、大樹を連ねてゐる。秋は既に伯林の懷に入つてゐるのに、リンデの樹は、黑きばかりの翠綠を、この庭一面に流してゐる。待つこと一分間もたゝないうちに、私は大統領エーヴェルト君の室へと案内された。

二

大統領エーヴェルトの室は、私の想像してゐたよりも、質素な室であつた。一枚の美人畫のほかには、たゞ三脚の卓子と、四、五脚の椅子と、一脚の長椅子と一個の用箪笥のほかには何の家具も、裝飾も、この室には發見されなかつた。彼れの事務卓子のうへには數通の書類が、他の一隅の机上には雜誌が五、六冊、放り出されたまゝに散らばつてゐる。ウキリアム・モリスのいつてゐるように、粗野な家具が、粗野な人格を表象するといふことができるとすればこの室に入つてきたものは、この室の主人への讀書慾をも、藝術慾をも、疑はないではゐられないであらう、しかしこの獨逸にきて、革命後の獨逸にきて、そこに敗殘の國が、敗殘の後をうけながらも、尚ほ彼れの新生命を開拓しようと努力しつゝあるのを目擊してゐるものにとつては、ポツダムの、またはルストガルテンの華やかな宮殿に比べて、この貧しい一室、何一つ裝飾らしい裝飾もない、そしてリンデの葉蔭に薄闇くなつてゐるこの一室を、再生しつゝある新獨逸共和國のために、祝福しないではゐられないであらう。

私が二重戶を押して大統領室に入つて行くと、それまで机に向つてゐたエーヴェルト君は、直ぐと立ち上がつて、大股に私の方へと步るいてきて、私の手を堅く握りしめて、親しい友人を迎えるように、『ヴヰーゲート？』といひながら、私に椅子をすゝめた。私はすゝめられるまゝに上座の方へと腰掛けた。私は無論例のとほりの梳らない頭で、そして一枚看板の脊廣服で、卓子を隔てゝ、エーヴェルト君と相對した。『十八の時から三十二年間、私は勞働運動のために働いてきた。』彼れはこういつて彼れの經歷の一端を語り出した。彼れは最初は馬具屋の職工

であつた。旅亭の主人などになつたこともあるといふ。一九一三年以後は、社會民主黨の幹部であり、特にヘーゼを除いては、筆頭幹部として立つてきたのであるからヘーゼ去り、レデヴーア去つた後に、多數派社會民主黨の筆頭首領としての彼れが、革命とともに、大統領の地位を與へられるに至つたことは寧ろ自然の行路であつた。私はこの國へきて、二、三の人たちとともにエーヴェルトのことについて語り合つたことがあつた。私をエーヴェルトに紹介してくれた老ベルンシタインに從へば、彼れは學者では無論ないし、政治上の技倆においても、ヘルマン・ミユラーに及ばないにしても、人物の點において同僚の推重してゐるところであると。私は彼れの人物について多くの知識をもつてはゐない。また私が彼れに會ひたいと思つたのは、彼れの人物または思想に感激を思つてゐたからではなくて、たゞ世界における大共和國の、最初の社會主義者の大統領その人を見て見たいと思つた、一時の出來心であつたに過ぎなかつたのである。しかし今、こうしてこの人を前にして見ると、その人の思想や、學問や、見識や、勇氣や、その他の人格價値上の諸點は別とするも、またその容貌を見るに、私より脊も低く、不恰好に横幅の廣い、どう見ても一個の田舍代議士以上には買被れないにしても、流石に貧困の家に人となつて、三十二年間を勞働運動の激流の中にたゞよつてきただけあつて、辛苦艱難の色が、深く彼れの額に刻まれて、絞取階級の政治家の諸君には見ることのできない、新興階級の政治家としての、一種の特色をもつてゐる。

彼は私と同じように安つぽい脊廣服を着てゐた。その脊廣服のポケットから幾つかの鍵を取り出して、がちや／＼いはせながら用箪笥の抽出から來客用らしい卷煙草を取つて私にすゝめた。一本五十プヘニッヒと書いてあるから、日本金で一本五厘か六厘の安煙草であつた。彼れは彼れの靴底で、燐寸をすつて、右脚を左脚の膝の上にのせて、五十プヘニッヒの煙草を吹ひ始めた。どことなく日本の武藏野青年の風に似かよつたところがある。

三

私が大統領エーヴェルトに會つた日は、私がゲールリッツの會

議から歸つてきた後、二、三日してからのことであつたから、私は自然に話をこのゲールリッツの會議のことから始めた。この會議—社會民主黨の會議のうちで、最も重大な問題となつたものは、一は政綱の改正であり、他の一は當面の政局に對する策戰の點であつた。獨逸社會民主黨の政綱はエルフルト以後既に三十年間も其まゝに殘つてきた。その間に政治上にも經濟上にも重大な變化の起つたことはいふまでもないし、特に革命の起つた後であるから、この變化した時代に應ずるために、政綱の改正の必要であるといふことは私は、嘗て、オツトウ・ブラウンの論文のうちに讀むでゐたところであつた。大統領エーヴエルトのいふたところも、またこうした平凡な見解であるに過ぎなかつた。『政黨の綱領が、年とともに更正されるのは、必然なことであると冒頭して、彼はこの重大な改正が無事に行はれたことを喜ぶ』といふた。私はこのゲールリッツの改正については最初から深い興味をもつて眺めてゐたので、進んで各種の點について話しても見たかつたが、またこうした寧ろ半ば學的の問題については、ハインリッヒ・クノウなり、カール・カウツキーなりと話し合ふことが常識でもあるやうに思はれたので、私は話を直に當面の政局へと轉じた。當面の政局といふのは革命後、カツプブツシ以後、特にエルツベルベルの暗殺とともに遽に濃厚になつてきた革命對反革命の大暗鬪を中心としての、ヴヰルト政府の態度、バイエルン政府の行動、それらの局面に應ずるための社會民主黨、獨立社會黨、またはブルデル諸黨の行動などをいふのであることは勿論である。

エルツベルベルの暗殺後、獨逸政府は、大統領エーヴエルトの名によつて非常令を布告した。一九二一年八月二十九日及び三十日の大統領令がこれであつた、それは反革命の勢に對抗して、革命を擁護するための非常手段であつた。その手段の善惡は別とするも、この非常手段の結果は、少くとも全獨逸に膨湃としてゐた反動勢力を挫折せしめるための手段としては慥に見事なる成功であつた。バイエルンの反動政府、獨逸における反革命の中心勢力としてこのカール政府はこれがために仆れたし、獨逸人民黨(ドイツチエフオルクスパルタイ)はこれがために憲法擁護派と早變りしたし、また從つてこの國に於ける最右翼黨としての獨逸國民的人民黨(ドイツチエナチヨナーレフオルク)が

孤立地に押しこめられるまでとなつた。それとともに、社會民主黨と獨逸人民黨卽ちスチンネスの大資本黨との提携が問題となつてきたし、また今日までブルゲル黨と協同內閣を組織したこともなく、且つブルゲル黨との絕對非提携に彼れの特色をもつてきた獨立社會黨の入閣問題さへももちあがつてきた。內外の困難な政局はかくして獨逸の政治史のうへに若しくはこの國の社會主義史のうへに、新局面を染め出そうとしつゝあつた。

私が大統領エーヴェルトに會つたのは、この獨逸の革命對反革命の大動搖の渦の最中においてであつた。『共和制の擁護のために、』そして『革命がもたらした成功』を確保するために、獨逸新共和國と、大統領エーヴェルトと、ヴヰルト內閣と社會民主黨とが、その凡ての力を傾注すべきであるといふのが、彼れの現在の政局に對する、若しくは社會民主黨の立場を辯護する、唯一最高の立脚地であつた。彼れに從へば、獨逸共和國の興廢は、主としてプロイセンとバイエルンとの嚮背によつて定まるものであるのに、バイエルンは反革命の策源地であり、プロイセンもまた反革命の傾向が盛んである。獨逸共和國は再びカツプブツシの危機に面しようとしつゝある。だからこの局面に臨んでは、先づ共和國の危機を救ふことが、社會民主主義の最高の任務であると。この『最高の任務』のために、社會民主黨はスチンネスの大資本黨とも提携することを辭せないといふのが、エーヴェルトの社會民主々義であつた。

四

しかしスチンネス黨と提携することが、社會民主黨と獨立社會黨との提携を益々困難ならしめることは明瞭な數字であつた。だからスチンネス黨との提携の問題は、社會民主黨にとつては、『ローテ・フアーネ』の指摘してゐたとほり、『ストレーゼマンが、プライシヤイドか？』といふ問題に一致することができるであらう。ストレーゼマンの資本的反動黨をとるべきか？、プライシヤイドの左翼的社會黨をとるべきか！、私はこの問題をとつてエーヴェルト君と相對した。しかしエーヴェルト大統領の答は、私の彼れに豫期したよりも簡單でもあり、反動的でもあつた。『獨立社會黨とわれ〳〵とは戰爭中に既に根本意見を異

にしてゐた。革命は一層この相違を大ならしめた。』といつて、この二つの勞働黨の間の、特に不調和な點にだけ重きを置いてゐた彼れは、多數派社會黨と獨立社會黨との協同は到底不可能だらうといふた。然り、反動的資本黨との提携を、『共和國』擁護の名によつて『必然』だとした彼れは、この『共和國』の最も熱心なる擁護者としての獨立社會黨との協同は到底不可能だらうといふた。何故？と問ふことの必要はない。たゞこゝに獨逸多數派社會民主黨の、小ブルヂョア的の特色があると思へばそれで充分である、否な、それだけではない。エーヴェルト大統領に從へば、獨立社會黨は、やがて滅亡すべき運命の呪ひのもとにある『私の考では獨立社會黨は孤立の後に、自然に死滅するであらう。そしてその一部が右へ、他の一部が共産黨へと走るであらう』と。彼れまた曰く、獨逸勞働者の大部分は遠からず社會民主黨多數派の傘下に集まるであらうと。然り。彼れに從へば社會民主黨多數派のみ獨り萬々歳であつた。

五

中世紀の教權が神の前に犠牲を神聖化したやうに、ロシア・ボルシエヴヰキの諸君がカール・マルクスの名によつて凡てを神聖化せんとしつゝあるかのやうに、わが大統領エーヴェルト君は、『共和國』の名によつて、獨逸多數派社會民主黨の凡ての行動を神聖化せんしつゝある。ロシア革命が經濟的民主主義を第一義としてゐるといふことができるとすれば、獨逸革命は政治的民主主義を第一義としてゐるといふことができるであらう。また同時にロシア革命が經濟的民主主義の前に政治的民主主義を蹂躙してゐるといふことができるとすれば、獨逸革命は政治的民主主義の前に經濟的民主主義を蹂躙―蹂躙でないまでも、少くとも閑却し過ぎてゐるといふことができるであらう、獨逸革命は政治的民主主義において勝り、またその點に限られたことにおいて弱い、私はこういふ批評を試みて見た『如何にも』といつて先づ私の見解に贊成してくれたわがエーヴェルト君は、こゝに獨逸革命とロシア革命との區別へと彼れの論步を進めた。獨逸革命は『血のなき革命』である――嘗つてシヤイデマンのいつたことをそのまゝに繰り返したわがエーヴェルト君は、五十プヘニツヒの卷煙草をふかしながら次のやうに語り

つゞける『われ〱の先輩、ベーベルもリープクネヒトも、ともに常に恐慌政治に反對してきた。そしてたゞ組織的進化によつてのみ目的に到達することのできるものであるといふことに社會革命の要點を置いてゐた。……社會民主黨多數派の政策の基礎はこの點にある……ロシア革命と獨逸革命の區別もこゝにある……レニンと私たちとの區別もこゝにある。』こういつてエーヴェルト君はまた五十プヘニツヒの卷煙草をふかす。レニンのような獨裁官と、自分のような民主的大統領とを同一に論じられるのは甚だ心外千萬だといつたやうな態度を見せる。

六

『無論私は政治的民主主義だけに滿足してゐるのではない。社會化委員會にしても、管理委員會にしても、みなわれ〱の經濟的民主主義への努力である。』こういつてエーヴェルト君は、私の獨逸革命批評――經濟的民主主義を閑却し過ぎてゐるといふ私の批評にやゝ不平らしく、特に社會化委員と管理委員會の創設に力を入れて說き初めた。しかし『人物』をもつて新獨逸の最高の地位に推された人だけあつて、わがエーヴェルト君は、矢張り彼れの革命の弱點を辯護しようとはしなかつた。『無論、われ〱は獨逸革命の經濟的效果に滿足してゐるものではない。また、獨逸革命が、社會民主主義的意義において、遙に多大なる經濟的進化をとげておるべきであつたことは疑を容れないところである、が、聯合國の政策――それはわれ〱の內政を益々困難に陷らしめた――は、今日まで、われ〱をして社會改造の理想の實現を不可能ならしめてきた。』『こうした內外の事情のために、社會革命にとつて最も重大な要素としての教育のことなぞも、常に念頭に往來はしてきたものの、まだその改革の緒にさへ就くことができないでゐる』

七

彼れは聯合國の、無慈悲で、傲慢で、飽くなき政策には無論大不滿をもつてゐるように見えた。凡ての獨逸人が滿腹の不平をもつてゐるように、彼れもまたそうであるように見えた。私たちの話は自然と賠償金の問題へと移つた。エーヴェルト君はこの點について頗るの悲觀論者であつた。彼れは戰後における歐羅巴の經濟的危機を說いた。『獨逸は常にその義務を盡してき

た。しかし獨逸が不斷にその義務を盡してきた結果はどうか。世界的恐慌（フエルトカタストロフエー）がもちきたされてゐるだけではないか。獨逸が第一回の正貨十億馬克の償金を支拂つた結果は、貨幣交換率（ヴルータ）の大動揺を來した。今後に來るべき支拂は更にこのヴルータの動揺を激増するであらう。そして恐慌が…そして獨逸はあくまで償金の支拂に努力するであらうが、しかしかゝるべき經濟的地位は獨逸をしてその義務を果たすことを不可能（ウンミョーヒリッヒカイト）とするに至らぬであらうか。』エーヴエルトは明瞭的確に、かくのごとくに豫言した。

八

私は最後に日獨關係について、彼れがどういふ考をもつてゐるかを尋ねて見た。『戰爭前までは人種問題をもつて政治問題に轉じようとする企てがあつた。しかし革命の後に、われ〳〵は全人類一家族の見解をもつてゐるものである。』カイゼルの黄禍論を思ひ出したように、こういつた彼れは、更に他の凡ての政治家の辭令に見るように、近き將來に、日獨經濟關係の回復を望むものである、といふ意味の言葉を添えた。

時計は丁度十二時を指したので、私は辭して歸らうとした。するとエーヴエルト君は日本の社會運動のことについて、色々と質問を始めた。彼れは日本における明治三十年代の社會主義の歴史にも一とほり通曉してゐた。またその頃の二、三の日本の社會主義者の名をも知つてゐた。私は日本の現狀と、そして日本の社會運動とについて、私の思つたまゝを話した。

『あなたの旅行の安全を希望する』と彼れがいふた。『獨逸共和國の將來を祝福する』と私が應じた。

彼れは彼れの卓子の抽出しから一枚の彼れの寫眞をとり出して、私に紀念として贈つてくれた。『一九二一年九月二十九日、フリッツ・エーベルト』と書いて。（伯林にて）

華盛頓會議に就て我國民に警告す

堀江歸一

軍備撤廢問題を回顧す

千八百九十九年の秋頃私が始めて北米合衆國に渡航し、マツサチユーセツ、州の首府ボストン市に隣接するケンブリツヂ市に居をトして、讀書研學に餘念なかつた際、世間の注目を惹く一册の書籍が發行された。其れは露國人ブロツホ氏の著作に係る戰爭將來論の一部英譯であつて、著者は經濟上の諸關係や、武器發達の前途から、考へて、將來戰爭の不可能であることを反覆說明したのである。戰爭と經濟とは、事の本質に於て、兩立す可からざるものであり、經濟上から戰爭を否定し、又之を不可能であるとするを難しとしない。ブロツホの說の如きは、要するに食糧供給、貿易、金融等の關係の複雜に爲つた今日に於ては、戰爭を敢てする國は經濟上に於て、莫大の損失を蒙り、之を恐れて、結局戰爭を回避するに至らしめるであらう。殊に諸國に於て、破壞的武器の精巧に爲つたことは、益々戰爭を不可能ならしめると云ふのであつて、別に異とし、又珍とする程の議論ではないのである。然るにブロツホは時の露國皇帝ニコラス第二世の下に經濟顧問の職に就いて居つたことの關係から、皇帝自ら大に此議論に動かされて、千八百九十九年一片の勅諭を發せられると共に、其趣意に從つて、露國に平生使臣を派遣して居る諸國を勸誘し、其年の五月を以て、和蘭の首府海牙に國際平和會議を開會するの運びと爲つたのである。

多年專制武斷を以つて、世界に名を馳せた露國の「ツアール」が平和會議の主唱者と爲つたことは、如何にも假飛僧の空念佛と同樣、不釣合の話であつて、其成功の程も疑はれたが、果して此會議に於ては、仲裁條約が成立し、或る種類の武器の使用が制限され、戰時國際法の規定に或る修正の加へられたゞけであつて、諸國の期待に副はなかつたばかりでなく、其後平和會議の主催者である露西亞が益々海陸の兵備を嚴重にして、侵略主義を縱にする一方に、他の諸國も同樣の方針を取る爲めに、

平和會議も海牙に一個の平和殿堂を殘した外、殆ど何等の効果を見ないことゝ爲つた。

軍事に熱中する國あり

當時平和會議の議事錄を通讀して、私が最も興味を覺へたのは、軍備制限の問題に對して、强大國は比較的冷靜の態度を取つて居つたに拘はらず、巴爾幹諸國が强硬に反對した一事であつた。前者の斯る態度は軍備制限の實行不可能を見越した結果であつたか、其れとも相對的に縮小の行はれる以上は、敢て之を意に介しないと云ふ考に出たものであるか、孰れとも判斷を下すを得ないが、弱小國が軍備縮小に反對したのは、要するに將來益々兵備を嚴にして、與國の一方便に充てようとする希望の强烈である場合に、之と正反對の事の强要されようとするが爲めに外ならなかつたのである。詰り巴爾幹諸國の期する所は諸列强の間に介在しつゝ、諸國を操縱して、自國の地位を高めようとするのであつて、而して之を操縱する方便としては武力を以つてしよう、又武力の外には何ものをも持たないと云ふことが、巴爾幹諸國を驅つて、右の如き態度に出でしめたものと解される。

日本は軍國を以つて終始す可きか

當時國際平和に關する世界の輿論は充分に成熟しなかつた爲めに、海牙會議の結末は甚だ不徹底であつたが、海牙會議から二十二年を經た千九百二十一年華盛頓會議が合衆國の主唱の下に開催され、今度こそ多年世界に於て平和を愛好する人士に依つて、熱望された軍備縮小計畫の實現を見るように爲つたことは、年來の渴を醫するものと感じられる。然し軍備縮小と云ふことに對しては、我國に如何なる輿論があるであらうか。前期議會に尾崎行雄氏が此問題に關する議案を衆議院に提出した際には、大多數の反對に依つて、否決されたようであつた。固より我國の衆議院が如何に票決したかと云ふことは、我國に於ける輿論の嚮背を知る材料として、殆ど無力のものであつて、此事は私の申すまでもない所であるが、私は我國社會の一部に確に軍備縮小を不可なりとする議論の行はれて居ることを考へる。而して其議論の一ッが往年の平和會議に於て、巴爾幹諸國に依つて唱へられたものと同じように武を以つて、日本立國の基礎としよう、軍事以外に日本をして國際間に力あらしめる何ものをも持たないと云ふことに存するのである。

成る程日本が一個の尚武國であり、軍國であることは爭ひを得ない事實であらう。封建制度は既に武を以つて作爲され、武を以つて維持されたものであり、我國は三百年の久しきに亘つて、其支配を受けたのであるのに、此封建制度が廢れた後に於ても、多年其下に培養された尚武の氣風は國民の間に強い根柢を有し、殊に外國と交通上の關係が出來てからは、強國に對しては、自國を防護する爲めに、軍備を擴張する。弱國に對しては、自國の利益を伸張する爲めに、此擴張された軍事上の勢力を實際に利用する、斯くて領土も擴張され、權力範圍も設定され、次第に我國をして國際間に於ける地位を重からしめた爲めに、一方に斯る軍事的施設が國民に如何なる負擔を加へて居るか、又軍國主義の政策が如何に他國民に苦痛を及ぼして居るかは、全然之を顧みず、我國をして不知不識の間に軍備の擴張なり、軍國主義の實行なりに、謳歌するに至らしめたのである。而して斯の如く國民的謳歌の中心と爲つた軍備である以上は、其發達進歩の目醒ましいのも、當然であつて、陸軍も海軍も有形的施設に於ては勿論、其收容する軍人の才能知識に於て、外國に比較して、遜色なきは勿論、寧ろ外國に向つて、範を示すの概あるに至つた。歐米諸國民は我國の何ものに對して、衷心敬意を表するか、文學や美術に對する愛着の如きは、多く好奇心に出でるのであつて、幾何の艦數の蓄されて居るかは一門の巨砲にである。彼等が眞に畏怖し、尊重するものは、日本國中何ものを措いても、一の陸海軍に外ならない次第であつたのであつて、而して此事は獨り歐米諸國民ばかりではない。支那が大隈内閣時代に日支條約を締結したのも、朝鮮が今日まで日本の統治に服從して居るのも、盡く日本の軍事的勢力の之を然らしめたものと認められる。

軍備縮小を不可なりとする説

斯うまでに從來軍事的勢力に依つて、日本の國力發展上に享けて居る利益の著しい場合に、卒然として今、華盛頓會議に提案された如くに、陸軍にも海軍にも共に大なる程度に於て縮小の加へられると云ふことは、恰も日本としては其得意とする武器を奪はれるようなものであつて、是れでは到底軍國主義の下に領土を外國に擴張したり、帝國主義の下に、自國の利權を外國に伸張したりする望は全く絶たれたものとしなければならぬ。即ち此點に於て我國民は往年の巴爾幹諸國民と趣を一にするようであるが、私は之に對して抗辯す可きもの〻多くを持つのである。第一我國が國民をして今日國際經濟の圏内に於て、生を樂ませるに就ては、必ずしも我國自ら武斷的手段を以つて、海

外に領土を擴張したり、權力範圍を設定したりすることを要しない、我國が共有する資本や、企業能力を外國殊に經濟發達の幼稚なる國に供給して、彼我の間に經濟共通の道を設けようとする場合に、如何なる國が之に反對するであらうか。斯る我國の計畫は彼我の國民に利益を及ぼし、進んで其利益を廣く國際間に頒つ故を以て、諸國の贊成し、支持する所と爲るは論を俟たない。然るに從來我國の他國殊に弱國に對して、爲す所は如何であつたであらうか。多くの場合に於て、武力を挾んで、對手國を壓倒し、斯くて利權を獲得するを常とするのであつて、是れでは對手國の國民が如何に其國を防衞する軍事的能力に於て、微弱であるとした所で、我國に心服しない、機會あれば我國の統制を脫しようとか、我國に依つて獲得された利權の根柢を覆へさうとか、焦慮するのも、當然であるとしなければならぬ。軍事的勢力で外に國勢を張つた所で、滿足なる成績の擧げられないことは、既往の實驗に依つて、明白であるのに、尙ほ我國が軍備を以つて。興國の唯一の道であるが如き考を懷いて居るのは、吾人の取らざる所である。

第二既往又は現在の事實から推せば、我國に於て從來最も大なる發達を致したものは、軍事であると云はれるであらう。然し此事を以つて、軍事以外の方面に於ける我國民の能力に疑を懷くが如きは、大なる誤解であるとしなければならぬ。何故我國では從來軍事のみが發達して、他の方面に於ける發達が之に伴はなかつたのであらうかと云へば、其れには、動かす可からざる原因がある。即ち封建時代から基礎の出來て居る軍事に對して、明治維新以來更に國家に於て其發達に力を致した一事は即ち其れであつて、現に大正十年度の豫算に於て、全體の經費の十五億六千二百五十四萬圓に上つて居る內で陸海軍の經費が七億六千百七十八萬圓の巨額を占め、四割九分と云ふ高い割合を占めて居る事實に徵しても、事の一班を知るに難しとしない。國家の經費の半額は軍事に供せられ、他の半額が軍事以外に於ける一般行政に頒たれるものであるとしたならば、軍事と一般行政との間に於て、如何なる消長を生ずるであらうか。事業の盛衰は必ずしも財力の多寡ばかりで左右されるものでないとしても、尙ほ財力が之を決定する一要素であることは、之を否定するを得ない。隨て今日までの我國に於て軍事以外に發達の見る可き事物がなかつたとしたならば、其れは國家が軍事に對すると同樣の覺悟を以つて、其施設に當らなかつた結果であつて、此國家の怠慢は之を咎めず、單に從來軍事以外に何ものゝ發達を遂げなかつたことを理由として、將來も亦然る可しとするのは、甚だしき早計の議論とするの外ないのである。

軍備縮小と或る種の工業

軍備縮小に對して起る第二の反對論は其縮小に依つて、我國に於ける或る方面の工業に打擊を及ぼし、次第に依つては、其存立の基礎を脅かすことである。戰時に爲り、殊に戰爭の規模の擴大された場合には、一國の工業で軍事關係のものと、軍事以外に於ける關係のものと、二種の差別は餘程判然として來るが、平和の時代に於ては、兩者の差別は餘程漠然たるものであつて、一工場が軍需品を製造すると同時に、一般物資をも製造するし、軍需品の製造に從つて居る間に擴張された工場の設備なり、又之に伴つて鍛錬された職工の技能なりが一般物資の製造力を進める上に於て、大に資する所のものがある。現に我國の事實に就て見ても、從來兵器の製造は官設の工場のみに限られて居つたが、近頃は民間の工場にも之を請負はせる、軍艦の建造に至つても、亦民間の造船所に於て、之に當るものが少なくないばかりでなく、我國をして造艦上に於て、外國から獨立させるには、啻に鎭守府所屬の工廠を發達させるに止まらず、民間造船所の造艦能力をも涵養するのが必要であると云ふ理由の下に於て、三菱、川崎、浦賀の諸造船所は頻に軍艦の建造に當るに至つた。近年是等造船所の事業が著しく繁昌したのは、戰時海運界に於ける異常の好景氣に依るものではあるが、其後不景氣の時代に爲つても、其造船業に及ぼす打擊は海軍擴張計畫の實行に依つて、緩和されるものと考へられて居つたのである。

然るに今回華盛頓會議に於て、決議される如く、軍備に急速の削減が加へられたならば、造船業製鐵製鋼業を始め、是等諸業に關聯する大小の工業であつて、從來軍事上に於ける需要の旺盛であつた結果として、存立し、繁昌して居つたものは總て大なる打擊を蒙らざるを得ない。事業の受ける打擊は其資本家や、企業家に及ぶものと、勞働者に及ぶものと二種の方面に亘り、其共に重大であることは論を俟たない。然し此問題に就ては、私は他の雜誌に於て意見を述べる筈であるから、本誌に於ては之を省略する。

日本の傳統的對支策

華盛頓會議は今や着々進んで支那に對する列國の關係を議するに至つた。列國は支那に於ける門戶開放、機會均等の主義を徹底させようとする一方に、支那は此機會に乘じて、從來列國の爲めに蒙つて居つた各種の壓迫や、束縛を免れようとする。斯く、領事裁判の撤廢論も出れば、關稅引上承認論も起り、列

國の現に有する特殊的利益の廢止說にも接せざるを得ない。斯く種々の主張の生ずるに隨つて、多く其矢面に立たざるを得ないのは日本である。門戶開放、機會均等と云ふことは、往年英國に於てはソールズベリー卿 首相兼外相時代に、合衆國に於ては、ヘー氏の國務卿時代に唱出された標語であつて、今日でも英米兩國の對支政策を律する根柢と爲て居る。日本も亦對支政策に於ては英米兩國と步調を一にし、常に諸國と協調的關係を保つて行くことを以つて、先づ國際間に穩便なるものと考へて居る。斯く穩便として居る所が果して正義の觀念に一致して居るであらうかどうか、又日本永遠の利益に適合するものであるかどうかは、一個の問題であるが現に角門戶開放、機會均等と云ふ二點に於て、英米諸國と對支政策に協調を保つて行くことが從來日本に於て傳唱され、又當局者に依つて、公言されたことも、一再に止まるとしない。

然らば日本は何處までも門戶開放を經とし、機會均等を緯として、對支政策を徹底させて行くかと云へば、必ずしもさうではなく、先年日露戰爭の後に、年來支那の領土權を認容した露國の利權を繼承した結果として、門戶開放、機會均等の原則と矛盾する特殊的地位を占めることゝ爲り、今や又獨逸の山東省に領有した根據を獲得する此上に、列國をして滿蒙に於ける我國獨特の地位を認めしめることに固執したならば、益々我國の支那に於ける特殊的地位は顯著のものたらざるを得ない。門戶開放、機會均等の原則と特殊的地位の承認と理に於て、相容る可からざることは勿論である。華盛頓會議に於て、英米兩國が門戶開放、機會均等を何處までも對支政策の根本原則とし、啻に將來に於て然るばかりでなく、既往に遡つて、之を適用することを主張した場合に、我國は如何なる方針を以つて、之に對抗す可きものであらうか。飽くまでも我國の將來支那に對して、結ばなければならぬ特殊の關係、即ち支那の富源を開發して、我國の爲めに支那をして天然富源を供給する任に當らしめると云ふ狀態の實現を期する爲めに、既得の利權は我國自ら之を保存する必要を主張す可きものであるか、其れとも特殊的地位は我國自ら之を放棄し、支那に於て列國と伍して、彼等の競爭を受けるなり、又此方から彼等に競爭を仕掛けると云ふ態度に出づ可きものであるか、兩者の孰れを以つて可なりとするやは、一個の問題と爲るであらう。

日本の英米二國に求むる所

我國が假に右に述べる如き場合に逢着したとして、正義の點から考へれば、前者の方針に出ることを以つて、正しとしなけ

れにならぬ。固より日本が支那に於ける特殊的地位を失つたならば、此微弱なる資本を擁して、支那に於て、資力の豐富なる英米其他の國に對抗するが得ないに至ると云ふ説もある。如何にも資本の供給に就ては、英米兩國は我國を凌駕するものがあらう。然し兩國が特に支那まで齎し得る資本は果して幾何に達するであらうか、到底内國に於て豐富であると同じ程度に於て、海外に供給される資本の豐富なるを期し得らる可き筈はない、而して一方に同業の難易と云ふことを考へたならば、日本が支那に對して一葦帶水の地位に居り、加ふるに同文同種であることの關係から、外國人の持ち得ない長所を有することは、爭うを得ない、隨つて私は日本が支那に於て特殊的地位を一擲して、英米兩國を始め他の諸國と同一の地歩に立つて、自由競爭に從つたとした曉に於ても、必ずしも憂ふる所もなければ、恐れるものもないと考へるが、日本自ら支那に於ける門戸開放、機會均等の原則を撤底させる爲めに、特殊的地位を一擲するものとしたならば、其條件として歐米諸國に對して、要求することを當然とする點が少なくとも二つある。其第一は歐米諸國殊に英國が現に有する特殊的地位も亦之を棄てなければならぬことであり、其第二は歐米諸國自ら日本人に對して、其本土や殖民地に於て、門戸を開放し、且つ機會を均等にしなければならぬことである。

第一は支那に於ける門戸開放、機會均等の原則を何時の時代まで既往に遡らせるかと云ふことに歸着する。米國人の如きは單に之を遡らせる期間を既往十數年位に限らうとする、斯くて此期間内に於て、支那に特殊的地位を占めた日本の如きが最も大なる影響を蒙り、其以前に特殊的地位の根柢を築き上げ、多年牢乎たる基礎を占めるに至つた英國の如きは、殆ど何等の痛痒を覺へないことゝ爲る。列國の關係を公正にして、將來戰爭の起る可き禍因を杜絶しようとする華盛頓會議に於て、斯る不公正の行はれるのは、吾人の看過す可からざる所であつて、門戸開放、機會均等の原則を徹底させる以上は、支那と歐米諸國と交通上の關係の始まつた當初までに遡つて、領土上の舊狀恢復を謀らなければならぬ。蓋し一の國が領土を占領したり、利權を設定したりすることは、其事だけで門戸開放、機會均等の原則に矛盾するからである。歐米諸國に此覺悟なくして、如上の原則を喋々するが如き、笑ふ可きの話である。然し我國に於て、此點を以つて、歐米諸國に向つて、逆襲を試みる勇氣と自信とがあるかどうか、一個の疑問とせざるを得ない。

日本の對外的發展は何を目的とする

日本が從來支那に特殊的地位を占めたのは、何の目的であつたか。決して此事は單に國民の領土擴張慾を滿足させる爲ばかりに基いたのではない。又朝鮮を日本の保護領とし、續いて日本に併合したのも、亦領土擴張慾ばかりに支配されたものとは認められない。思慮の單純である軍人の如きは、斯る考に捉はれて、恰も加藤清正の朝鮮征伐と同一の目的を達しようとしたものであるかも知れないが、少しく知識のある人々までが多く朝鮮經略に贊成し、進んで支那に對する侵略的手段に左袒したのは、必ずしも斯る淺薄なる考から來たのではなくして、朝鮮や、支那を以つて、日本に取つて最も安全なる食料品や、原料品の供給地とし、斯くて我國工業の存立並に國民生活の確實を保障しようとする趣意に外ならなかつたのである。而して當時朝鮮を保護國としたのは、露國の侵略的勢力が甚だ盛であつて、若しも露國の侵略をして其行はれるに任せたならば、日本に取つて、如何なる差別的待遇の實現を惹起して、日本の經濟的關係を朝鮮から驅逐されるに至るかも、測り知る可からざることを恐れたからである。滿洲から露國の勢力を、山東から獨逸の勢力を驅逐したのも、亦同樣の考に出たものと解釋しなければならぬ。唯日本は朝鮮滿洲山東から在來の專制的占領者を驅逐して、自ら代つて新なる專制的占領者に爲つたのではあるまいか、又爲ようとして居るのではあるまいか。是れは諸外國殊に北米合衆國が我國に持つ年來の疑惑であつて、我國軍閥の行動や、言論から推測を進めれば、斯る疑惑の釀成されることも、亦已むを得ざる所であるかも知れない。

朝鮮統治の件は朝鮮　が獨立運動したとした所で、國際間に於て、物議の種子と爲る可き道理はない、純然たる內治の問題に止まるものであるから、之を略するとして、滿洲山東に於ける我國經濟的關係に就て、特殊的地位は如何す可きものであらうか。我國に於ては、飽くまで之を固守しようとする論者もあることであらうが、私は世界の大勢が支那に於て門戶開放、機會均等の原則を徹底させることに定つたならば、日本として特に之に反對す可き理由はない、否寧ろ進んで之に贊成することを以つて、當然とするのみならず、贊成するに於て、二ツの條件を主張することを必要と考へる。其一ツの條件は既に述べた通り英國を始め他の諸國をして總て從來の對支關係に於て、門戶開放、機會均等の原則に反對するような特殊的施設を持つて居る以上は、之を廢棄させ、眞に名實共に開放された支那の現

出を期することであり、他の一ツの條件は支那を開放して、列國の自由競爭を誘導し、斯くて其包擁する富源をして廣く世界民衆の利用するに任せる以上は、宜しく此原則を世界到る所に擴充し、南北亞米利加に、阿非利加に、濠洲に苟も人の住む者鮮少であつて、天然の富源の饒多である所である以上は矢張り門戶開放、機會均等の原則の下に、列國の人をして富源を利用するに任さしめなければならぬことである。東洋に於ては總ての特殊的地位は之を廢棄せしめ、廣く東西兩洋の人を招いて、自由に競爭させながら、白晳人の根據と定めた所には、東洋人の入ることを制限し、斯くて白晳人だけの天地を作らうと云ふのは、白晳人の大なる我儘であると認めざるを得ない。

軍備の縮小に依つて、武力の用いられ可き道を絶つことは、世界の平和を維持する所以に相違ないであらう。然し從來世界に戰爭の起つた道筋を考へると、其原因は單に旺盛になつた武力を實際に用いて、何か其間に利益を求めようとする必要ばかりになしたのではない。恰も往昔一ツの種族が衣食の資料に缺乏を告げて來た場合に、他の種族を襲つて、之を充たす、斯くて兩種族の間に鬪爭の行はれて已まなかつた如く、今日の經濟的關係に於ても、若しも一國が國民的生活の資料を豐富なる狀態に於て、他國から得ることを妨げられる、其國の人民なり、企業なりの他國に赴く自由にも制限を加へられ、詰り鎖國的經濟生活を強制されるようになつたとしたならば、其國は鬪爭的手段に訴へても、此局面を打破しなければならぬ。然らば國際間に鬪爭の跡を絶つて、眞の平和的關係を確立しようとする以上は、一方に軍備を制限し進んで之を撤廢する必要のあるのは勿論であるが、他の一方に於ては、列國の經濟的關係を最も公正なる狀態に置き、苟も一國の偏見我慾の爲めに、他國の最も自然なる經路を沿うて行はれようとする經濟的發展を妨害するが如きことを禁じなければならぬ。此點に工風が加へられない限り、國際間の平和を目的とする會議も徒勞に歸する譯であると共に、軍備だけ縮小させて、一方に經濟的勢力の外に伸びることを認めないようなものであつては、日本に取つて果して利する所の幾何であるか、之を知るに苦しまざるを得ない。

合衆國や濠洲が從來日本人の移住入國に反對し、隨つて講和會議に於て、我國の提出した人種差別撤廢案を否決したのは、要するに我國民の生活程度の劣等であつて、彼等を入國させた國の國民生活標準を低下させるとを恐れると云ふ理由に基くのであつて、一應の道理として認めなければならないようであるが、抑も日本人の生活程度の低いのは、何に因るものであらうか、其一原因は彼等の豐富なる天然資源に接近する機會に乏しいこと

に存するものと云はなければならぬ。日本人が他國に移住すると云ふことは、即ち天然資源の豐富なる所を求め、之を遂ふ所以であつて、斯くて彼等の力で開發された資源は彼等の生活を豐ならしめるを得るのである。神が吾人に土や、水や、其他の天然物を與へられたのは、要するに是等が吾人の生活要具に利用せよと云ふ意に外ならないのに、人間に濫に國と云ふような障壁を設けたり、人種と云ふ差別を定めたりして、神の意に反する所業をするのは、不可解の沙汰である。

日本の態度の公明を望む

近頃外國電報を見ると、日本政府の全權は華盛頓會議に於て、海軍制限の比率を六割から七割に引上げることに就て、強硬の主張をして居るようである。(十一月下旬の新聞電報參照)然し日本が主義に於て、又原則として海軍制限に贊成である以上は、何故に六割では宜しくないか、七割ならば宜しいと云ふような甚だしく未練な說を固持するのであるか、私は之を以つて、甚だしく未練なる振舞であるとせざるを得ない。軍備にして縮小す可くんば、進んで之を縮小す可く其縮小をされた後に、世界平和の維持に對する保障が今日の儘で、不充分であるとすれば、英米兩國と其保障に關する協定を爲す可く、更に我國民生活の振興を謀らうとする以上は、經濟的發展の前途を塞がれないだけの施設を爲す可きである。軍備縮小と云ふ大勢の嚮ふ所の判然として居る際に、最も小なる技術論に拘泥して、大局論の閑却される觀あるは、政府の方針の然らしめる所であるか、全權委員其人の器局の狹き爲めであるか、其孰れに在るとしても、私の嘆ぜざるを得ざる所である。

日支兩國の利害は巴里講和會議に於ても、種々の點に衝突するを免かれなかつたが、今度の華盛頓會議に於ても、亦同様の趣を示し來つた。固より支那が各種利權の回收や、國權の恢復まで一時に持出したことに就ては、一種の掛引に出るものであつて、如何なる國も餘り眞面目に取合はないであらうが、例へば是等の問題の內で、最も重要視されなければならぬ關稅問題に就ても、最も多く當面に利害の影響を蒙るものは對支貿易の數量の最も大なる日本であつて、日本としては從來常に之に反對する立場に居つた。歐米諸國の如きは日本ゝ反對の先鋒に立たせ、而して諸國は欵を支那に通じて、關稅引上を承認し、日本をして結局最後に承認を與へざるを得ざらしめるやうな窮地に陷らせたこともあつた。日本が支那の關稅引上に反對するのは、輸出貿易振興の見地から考へたならば、當然とす可き様に思はれるが、同時に私は左の三點に就て、我國民の思を致す

ことを望まざるを得ない。

第一、何時までも支那を極端に束縛した税權の下に立たせることが正義に適つた處置と云はれるであらうかどうか。

第二、支那の爲めに關係諸國が或る程度の關税增率を承認する、而して其の增收に依つて、支那の財政に整理の曙光を仰がせると云ふことは、支那の爲めばかりでなく、關係諸國に取つても、亦有利なる結果を齎す所以ではあるまいか。固より關税の增收が適法に利用されて、財政の整理に資するに至るか、其れとも貪官汚吏の懷を肥すに止まるかに就ては、關係諸國の監督を要することは勿論であるが、日本の樣に一概に貿易上の利害ばかりに着目して、支那の關税增率に反對するのは、決して國家として、正義に適つた行動を爲して居るものと認められない。

第三、愈々支那の關税增率に依つて、支那を唯一の或は重要の販路とする我國工業が對支輸出に就て、不利の影響を蒙るとした所で、我國の當業者は之を避ける道を持つて居る。其れは工業上の施設の一部を支那に移し、支那に産出される豐富なる原料品と、支那に於て供給される饒多なる勞働力とを利用し、斯くて産出された物資を其儘支那に供給する方法を取ることであつて、支那關税の引上を承認することが大勢上已むを得ざる所である以上は工業の一部を支那に於て、經營することは、當然の數である。然るに此當然爲す可き所の計畫を怠りつゝ、一方に關税增率の反對に固執して居るのは、誠に短見者流の所業と評せざるを得ないのである。

以上の如きは、日支兩國に交渉を持つ經濟關係の一方面だけに就て觀察を下したものに過ぎないが、彼れと云ひ、是と云ひ、我國の外國に對して爲さんとする所や、外國に對して云ふ所が公明を缺く趣のあるのは、掩ふ可からざる事實である。一國が國際間に處して、行動するに就ては、之を指導するものは、正義、利害、感情の三者に外ならない。利害に支配され、感情に左右されて、動くものは獨り我國ばかりではない、聯合諸國の講和條約を通じて、獨逸に强要した講和條件殊に賠償の條件の如き、全然正義の觀念を脫却して、最も露骨に利害と感情とを暴露したものであるが、他の諸國の態度は如何ようであらうとも、我國としては、飽くまでも我手を淸からしめなければならぬ。如何にして我手を淸くするか、我國の爲す所をして總て正義人道に一致せしめることは即ち其れであつて、此點に於て、我國民的意思が定まつて居れば、華盛頓會議が來るとも、英米聯合の勢力が迫まるとも、我國に於て何等畏る可きものゝあることを知らないのである。

(大正十年十一月三十日稿)

勞農露西亞の監獄生活

山川菊榮

『正義』や『人道』や『自由』や『文化』に食傷してゐる文明人には想像もつかないような、馬鹿々々しい氣ちがいじみた眞似をするのが『野蠻』な『過激派の本領』である。その本領を最もよく發揮した例の一つは『過激派』露西亞の監獄生活を算へることが出來る。

一九一七年十一月、勞農革命の成功當時、ボルセヴヰキの大虐殺といふ途方もない流言蜚語が人心を寒からしめた時、ペトログラード市會と在露米國赤十字の委任を受けて、白衛軍虐殺の現場と稱せられたピーター・ポール要塞へ向つた調査委員の一人、桑港ビュレテイン記者ベアテイー女史は、要塞は天下太平で虐殺された筈の白衛軍の連中は、廣間でトランプをして遊んでゐるし、舊時代の大臣や警視總監は、寢臺も椅子テーブルも備はつたキチンとした部屋に納まり返つて、勞農政府になつてから新聞も見せられ、取扱がよくなつたと喜んでゐたことを報じてゐた。所が最近にモスコーのアンドロフスキ監獄を視察した米國記者ルイズ・ブライアント女史は、猶一層奇怪な事實を報じてゐる。

アンドロフスキ監獄は、帝政時代の修道院の跡で、モスコー一流の尊い響のする鐘のある、廣い立派な建物で、高い土塀で圍まれた中は、美しい庭園になつてゐる。監獄には門番がゐるきりで、部屋にも廊下にも何處といつて錠がかゝつてゐる處はなし、囚人は此廓內でさへあれば、何處の部屋でも庭でも勝手に出入することが出來る。それどころか一人で外出することさへ許されてゐる。滑稽なのはウツカリ外出した囚人が、證明書を持てゐないと歸りに門番に咎められて一悶着起すことである。是は全く僞に似た眞個の話で、現に此春、クロポトキンの葬式に參列するために外出を許された連中は證明書が無いので歸りに門番と一時間許り押問答して、ヤツト入れて貰へたと云ふ事實がある。獄內では共產黨の連中が支部を作つてゐて、讀書室で時に集會を開く。獄內は何處も彼處も綺麗になつてゐるし、食物や保温設備は、モスコーの普通の市民の場合より十分である。たつた一ケ所、丸で厩溜とも何とも云へぬほど汚い、惡臭鼻をつく部屋があつた。それは誰あらう露領亞細亞のヒーバ國の皇太子及重臣らの部屋であつた。典獄の話では、彼等は宗教上の掟だと云つて一切入浴せぬ、從つて身體は汚れ放題で鼻持がならぬ、其の上彼等は今まで無數の召使に傅かれて横の物を縱にした事もなかつたので、何一つ自分では身の仕末が出來ず、おまけに部屋はどうしても掃除をさせないとのことであつた。

今一人の珍客はキルパトリツクといふ米國大尉で、ウランゲル軍に參加して捕虜となつた先生である。大尉は赤軍の女軍人の爲に捕虜になつたのを酷く氣にしてゐたが、其の女軍人は露西亞でも一流の勇士の中に列する騎兵聯隊長であつた。勞農政府は、此大尉以下の米國人は、ジム・ラーキン其他、米國の監獄にゐる米國の社會主義者と交換しようとしてゐる。匈牙利の貴族も捕はれてゐたが、彼等も匈牙利の共產黨員と交換される筈である。米國の共產黨員が一人、獄內でハンガー・ストライキをやつた。これは實兄が米國の警察と關係があるので、本人にも其嫌疑がかゝり退去を命ぜられたが聞かないので監獄に入れた譯であるが、彼は身の明りの立つまで、露西亞において呉れと頑張つてそのためにハンガー・ストライキをやつた次第と知れた。ブライアント女史はキルパトリツクの案內で獄內を隈なく見廻つた揚句「監獄は政府の姿を映す鏡だといふが」と、自由や正義の化身のような米國の監獄を思つて溜息をついてゐる。

生活意識としての民族的精神の價値

長谷川如是閑

一　民族的精神の不合理性

生活を『意識する』といふことは、特に人間だけに與へられた高級の能力であると考へられ、さうしてその事が人間の誇りの中の最も間違のない誇りの一になつてゐるにも拘らず、人間の實際の生活は、此の誇りとは正反對に却つて意識しない生活に於て、重大の生活を『行動』してゐるのである。人間は、彼が甚だ重大としてゐる生活に就て、却つて明確な意識を缺いてゐるといふことを示す例は、個人的にも社會的にも澤山にあるが、所謂『民族的生活』と稱せられてゐる生活にその最も顯著な事例の一つであると云ひ得る。

『民族的生活』といふ生活は、今の人類に取つて、その重大さに於て第一位を占めてゐるかにも思はれる。先づ『民族的に生活せしめよ、すべて他の生活は、民族的生活が成り立つてからの事である。』といふのは、強ち愛國人ばかりの言葉ではない。今の人類は、もし彼を民族的に生活せしめなければ、他の生活一切を犧牲としても、その民族的生活を成り立たしめなければならないといふ、それが喪はれた生活を、滿足に生活してゐる人類は、今の世界には絶無であるといつても好い。

それほど重大な民族的生活といふものは元來何を意味するものなのであるか。此の問題は、特に近代人が始めてその

解釋を求めてゐるのであるが——さうしてその解釋が如何なる程度まで成功してゐるにもせよ——近代人は、決して理解された意識の下に、その民族的生活なるものを營んでゐるものでないことだけは事實である。言ひ換へれば「民族的」觀念が如何に自覺されたにしても、今の人間の多くは、全く盲目的にその民族的生活を生活してゐるのである。

無論民族的精神なるものは、近代に於て殊に强く自覺されてゐるが、此の自覺は、近代の非民族的大國家に刺戟されて、それを崩壞せしめる働きとして勃興した意識であつて、近代的國家生活を、民族生活に還元せしめやうとする政治的進化に外ならないのである。それは有力なる政治思想を構成せしめてゐるには相違ないが、それを動機づけた民族的精神なるものゝ盲目的であることに疑ひはない。盲目的といふのはその民族の生活の絕對性を、無意識的に固執してゐることである。如何なる國民も、自分達の生活を、その民族的本位に於てゞなければ安定せしめ得ないといふ信仰にその集團的行動を動機づけてゐるのである。從つて、それは世界的支配乃至帝國的支配に對する反抗となつて現はれること、敎權の支配やナポレオンの支配に對する國家獨立の精神に於けるが如きことがあるかと思へば、同時にさうしてそれとは反對に、その民族的精神自體が世界的支配乃至帝國的支配の主權者たらうとすること、十年前の英國の成功した南亞征服や、近く獨逸の失敗した世界統一のやうなものとなつて現はれることもあるのである。前の、世界國の否定、帝國の否定が本能的であるならば後の、帝國の建設、世界國の建設も本能的であるに相違ない。一つの民族は、他の民族の絕對的支配を受けないといふ精神が　同時にそれを以て他の民族を支配する權利の淵源となるといふやうな矛盾を平氣で暴露せしめるのはそれが、全く不合理的の根柢に立つものであることを知るに足るのである。

民族的精神が決して合理的のものでないことは、たゞに右の矛盾が證明してゐるばかりでなく、これを合理的に基礎づけようとしたあらゆる企が悉く失敗してゐることでも明らかである。古來人間の哲學と科學とは縱橫無盡に發展した

ものであるが、その哲學若くは科學の何れが果して民族的精神を人間がそれを表現せしめてゐると全く同じ根據に於て肯定し得たであらうか。實際人間が民族的精神を表現せしめる時には、それを恰も絶對萬能であるかの如き信仰に基礎づけてゐる。無論事實に於て、その信仰が障害なしに實現し得た例めしになく、民族の絶對萬能性は全く人間の空想以外にその完全圓滿の世界を現出せしめたことはないのであるが、然し、所謂「民族的精神」なるものは、その絶對性を缺いては成り立たない性質のものである。それは論理的結果として世界の又限にまで到達する可能性を持つてゐるといふところに、その唯一の價値が潜んでゐるのである。かういふ價値を地上に設定する哲學や科學は、それが宗教若くは神話の形に向上──又は墮落──しない以上は存立の余地がないのであるで民族的精神は、その神話的淵源に於て、始めて意識的の存在を人間の心の裡に占めることが出來る。言ひ換へれば、民族的精神は myth といふ言葉の外にこれを解釋するものはない。然かも myth といふのは、たゞ不可解の別名であつて、何の意味をも教えてゐる言葉ではない。

二　民族的生活合理化の困難

民族的生活の條件となつてゐる生活内容を一々拾ひ上げて見ても、一つとして民族的生活を合理的に基礎づけてゐるものはない。通常その條件として數えられてゐるものを擧げて見ると（一）地理的同一（二）人種的同一（三）言語の同一（四）宗教の同一（五）權力服從の共通（六）經濟事情の共通（七）共通の傳統等であるが、この何れもが、民族的生活と必至の關係にあるとは謂はれしない。

第一の地理的同一は、民族的生活の原始的樣式には必然であつて、その頃は、一定地域を出てしまへば、民族關係を離れたものと見做され、又一定地域内に永住し得るものは、その民族と認められたものに限るといふこともあつたのであるが、近代の民族的生活に於ては、日本人は、アメリカに居ても日本人であり、アメリカ人は日本に居てもアメリカ人で

ある。たゞその土地で生れたものはその民族としての認識を與へるといふアメリカ見たやうなところもあるが、日本などは、これを與へない。民族と土地との必至的關係は、ずつと古代の牧畜人種と近代人とに於ては甚だ淡泊である。全く土地を失つた猶太人の如きも、近代人は、これを民族でないとは云はない。一定地域内の生活が民族生活に必然であるといふのは、今日の民族が大抵これに近い生活をしてゐる――全くこれに限定された生活はしてゐない。――といふこと以外には當つてゐない

第二の種族的同一でもその通りである。一つの民族は同じ種族から成立つてゐるといふことは、今日でも、民族が抱いてゐる迷信の一であるが、これは原始時代から事實上決して成り立つたことのないものであつて、最も原始的な民族でも種族の混合は免れないことで、殊に今日一つの民族として生活してゐるもので、純粹に種族的同一を保つてゐるものゝないことは、人種學者の說明してゐる通りである。人類の社會に於ては、早くから純粹種族の生活の立ち行かない事實が存在してゐたのであつて、他種族のものを迎へて、自己の種族に取入れる習慣が成立してゐたのである。而して必らず或る民族の勃興は、何程かの程度の種族的混合に依據してゐたのである。日本民族の勃興は、その初期に於て異種族の征服があつたやうに、後代に於ても人種的混合が、上代の急激な社會的進化を持ち來たしたとは學者の認示してゐるところである。たゞ一時國家的組織が意識的に民族的信仰を高調する心要を感じてゐた時代に於て、異民族排斥の精神が强烈となつて、種族的混合を忌むと同時に、溯つて純粹種族の信仰を鼓吹したのであつたが、近代に於ては、何れの國家も絕對に民族的純粹を固執してゐるものはなく、歸化が極度に獎勵された前世紀の米國のやうな例さへある。

第三に言語の同一といふことは、前の種族の同一より寧ろ民族生活の條件として有り得べきことであるが、然も言語學上の所見によれば、同一系統の言語を有する異民族も多いのであつて、民族の存立が、言語の存立と同一範圍に屬

してゐないことは明かである。もし又同一の語系の内で分れた言語の相違からいへば、同一民族も異語を使用してゐると云ひ得る場合が澤山にある。印度民族、支那民族、英國、米國その他大國民は多く其例に洩れない。言語は元來生活の統一であつて、民族的集團よりも細かく分かれる傾向を有つてゐるのである。無論、接觸して、ある多くの民族の間には、言語の近接も起るのであつて、その意味で言語は大きく統一されてゐるといへるが、又生活が、一つ民族内に小さい區域を作れば、そこに言語が別の形を取るといふ分化的傾向もあるのである。日本の中でも、生活の異ふに從つて、言語の末には分岐がある。青森の言葉と長崎の言葉とは殆んど外國語同士に近かい。言語と民族とは必ずしも同一範圍に屬してはゐないのである。

第四に、宗教の同一といふことは、原始的民族に於ては必至的なことであつたらうがやゝ發達した民族に於ては、宗教の統一が、或は教化的に、或は强壓的に强制されたに拘らず、決して宗教上の統一の完全に成立した民族はない。何れの民族も、その信仰の同一が、その民族的紐帶を强める事情を會得してゐたので、その强制に努力しないものはないが、それは畢竟迫害の歴史を作つただけで、事實成り立つた例はない。尤も歐羅巴に於ては、千余年間基督教の統一が完全に成り立つたことを信じ、グロチユス前後まで、人類的生活は、基督教徒に限られた特權であるとさせられてゐたのであるが、此ことは、民族的生活に宗教の同一が必至的條件である證據ではなく、文明の生活の條件として同一宗教の統一を必要としたのである。

元來宗教の同一は、古代のトーテムの信仰の延長であるが、實際トーテムの信仰は、甚だ、社會的であるとはいへるが、決して血屬的であるとは云へないのである。例へば、母系の子孫のみが同一トーテムに包含されるが、父系のそれは排除されるといふやうな種族もあつたのである。それは同一家長に屬するもゝの限定であつたので、言はば支配の生

活の初期の條件であつたのである。從つてその延長であるところの宗教の統一も亦支配の關係がそれを重大視したのであつて、却つて國家的生活に附隨した條件であつて、民族的生活に必然のものではない。事實異種族の混合から成立つた民族には異宗教は必然なのであるが、一つトーテムに統一されることは支配の生活に於て必要であつた爲めに、國家は、その異種族の信仰を否定して、同一トーテムに歸化せしめるのである。原始時代に於ては、此の歸化の不可能であつた異種族が虐待され排斥されたことは、日本の太古の歷史が、屢異なるトーテムに屬する種族の討伐を記載してゐることによつても察しられる。

第五の共通の服從といふことは、近代の民族國家の理想であつて、同一民族は、權力服從の關係に於て共同するといふことが、近代國家の原則になつてゐるが、此の理想は、民族的生活の事實上の根柢となつてゐるのではなく、たゞ國家生活の根柢を民族生活によつて基礎づけやうとしてゐるに過ぎないのである。即ち事實ではなく理想なのである。共通の服從といふことは、民族の支配が成り立つた場合に成立する事實ではあるが、此の事實は、共通の服從者を必ずしも同一民族に同化せしめるものでないことは、愛蘭を見てもわかる。今日の國民には異民族の支配は、普通のことで、それをしてゐない國民は殆んどない。さうしてうまく治まつてゐるところも殆んどない。カナダの支配に屬してゐるクエベックの佛人などは、比較的うまくいつてゐる方であるが、しかもこれは、カナダの支配が、在來の意味に於ける國家的支配とは多少異なつてゐる爲めであつて、もつと強い意味の國家的支配が民族的に加へられてゐるところでは、皆騷がしい問題を起してゐる。して見れば、共通の支配を民族の生活に結びつけることは最も賢い遣り方で、結局そこへ行くかも知れないにしても、それは今日までの事實としては成り立つてゐないことなのである。

次ぎに第六の經濟事情の共通といふことは、共通の服從といふことよりも民族的生活に密接の關係を行つてゐるとい

へる。尤もこゝに經濟事情といふのは最も廣い意味のそれであつて、殆んど生活の共通といふに近いのであるが、この意味にては、民族的生活を、此の條件が支配してゐる度合は中々廣くして深い。衣服、食料、作業、商業、その他廣義の經濟的生活に於て民族的同一を保つてゐることは著しい事實である。然しこれも亦言語と同じく、民族的範圍よりももつと廣い範圍を取ることもあり狹い範圍を採ることもある。殊に文明の度が進むに從つて、共通の經濟事情は一つの民族にのみ共通であることから、次第に多數民族に共通の働きを及ぼすものである。今日の歐米の事情は、殆んどその全部の民族に共通の事情を夥しく發達せしめてゐる。これも亦原始社會に於ては、同一民族の經濟事情は殆んど他民族に通用しなかつたやうなことも全くなかつたとは云へなかつたであらうが、文明の生活に於てはそんなことは全くない。利害の相反といふことが、必ずしも同一民族を分離せしめないと同時に、利害の同一が異民族を一つ民族に混合せしめることもない。たゞ今日經濟事情の共通が民族混合の條件として顯著に働いてゐる――然し無論ヨリ複雜な形で働いてゐる――のは米國であらう。所謂『ハイフン附き米人』と稱せられてゐるものは、經濟事情の共通を條件として米國民族に飛入りをしたものである。然かも、經濟事情の共通は民族的生活の原因であるよりも、結果であることが普通である。第七の共通の傳統は、今までの條件の何れよりも、實際の民族的生活と必至の關係を持つてゐる。それはトーテムの共同と同一淵源を有つものであつて、始めに云つた民族的精神の理解としては唯一の方便であるところのこゝに基いてゐるのである。同一民族は、何等共通のものを持たないでも存立し得るといへるが、たゞこの最後の條件を持たずには存在し得なかつたのである。尤もこゝに傳統といふのは後代の國家に於ける所謂傳統的精神をいふのだではなく、原始社會に於ける共通の迷信とそれから發展した觀念的生活の方向をいふのである。後代の國家に發達した傳統は、この古代の迷信と同一淵源を持つものではなく、後代の階級的生活の産んだ生活理想を、古代の民族的信仰に結びつけたもので、特殊の生活系統の所産である。特殊といふのは、その民族一般のそれでないといふ意味である。從つて

後代の傳統は、昔の迷信のやうに、一般的なることを得ないで、必らず或る特權を持つた階級とその階級の支配に完全に安定してゐる階級とに限定された信仰なのである。こゝにいふ民族的精神の條件としての傳統はもつと根本的のそれで、もつと人類學的のそれなのである。即ち神話の形に近ければ近いほどその意味に適ふ譯である。この意味の傳統は、或る時代に於ては、民族の形成について必然的に働いたといふことが出來る。而して此傳統は後代の支配が民族的支配をその國家的支配に結びつけた時に、殊更らそれに便利の樣式で構成せしめたことは、多くの國家がその民族の神話を、その國家の淵源に結びつけたことによつて推知するに足りる。

もと〳〵國家的支配の發生は、何れの國家に於ても、その包有する民族の神話的信仰と一致するものではないのであるが、國家の歴史が、國家の手に作られる時には、必ずその間に一致を作つて、その國家が、その民族發達の必然の結果であつたかの如くに歴史を構成せしめるのである。苟も國家が征服事實によつて成り立つてゐる以上は、それは征服者の神話に一致することはあつても、必ずしも被征服者の神話に一致する筈はないのであるが、成立した國家の歴史は、何處の國のそれでも必らず神話の統一が企てられてゐる。而してそれがその國家的精神の本流を爲すものとして一般の信仰を構成するやうに强制されてゐる。此の强制は、今日の心理を以て見れば、不條理の壓制のやうに思はれるが、然し古代社會の心理に於ては、それは今日の信仰の鼓吹、學說の主張と共通のものであつて、自覺した作爲的欺瞞であつた場合は寧ろ鮮いのである。言ひ換へれば、それは種族混合の過程として働いたのであつて、今日のそれのやうに國家膨脹の過程として働いたのではないのである。

然しながら、此の共通の傳統は、何時までも民族的生活を基礎づけてゐるかと云ふに、これは智識の發達に伴つて、次第にその力の減退して行くことを免れないのである。今日の民族は、その民族に或る程度の共通の傳統あることを認

ゐながら、それは寧ろ過去の生活の要件であつたとしか考へないものも多いのである。さうしてその傳統の衰退が必らずしも、民族的生活を減退せしめるものでないことを信じてゐるものが多いのである。而して事實亦此種の傳統のない民族が、その民族的精神に於て中々強烈なのである。例へば英國人がそれである。又その他の民族も、大抵は最早さういふ傳統に基いてその民族的結合の鞏固を計ることをしないのである。今日の民族は、多年の統一的生活——主として國家的統一——の産んだ生活様式の共通即ち今述べた（一）から（六）までの生活事情の共通を根柢として、その民族的生活を固めていかうとしてゐるのである。その點から云へば、今日の民族の形成については、地理的結合、同一種族であるといふ信仰（それは全く空想的であるが）言語、宗教、政治、經濟の共通等が、最後の傳統よりも強く働いてゐるといへるのである。

要するに、民族の生活を合理的に理解することは、今日の人智を以てしては不可能であるといつても好い。

三　民族的精神と民族の生活

民族的精神の合理化が困難であるといふことは、少しもそれが實生活の上で働いてゐないといふ證據にならないのみか、それがその不合理性を以て根強く人類の集團的生活に食ひ入つてゐたことは拒み難い事實である。けれども、此の事實を能く／＼觀察して見ると、人類の平生の實際生活に於て、何れほど今日の意味でいふ民族的精神なるものが活躍してゐたかは甚だ問題なのである。

人類が集團の生活を營むに當つて、異民族の排斥といふことが必然に起つたのは、全くその生活事情が然らしめたのであつて、さういふ生活事情のない場合には、決して此の排斥は起らなかつたのである。最近の社會學的觀察は、原始人類の集團の接觸は必然に戰爭であるといふ在來の信仰とは寧ろ反對に、戰爭は、概して、やゝ發達した經濟事情の下

に起るといふのである。而してその經濟事情が事實戰爭を起す動因であつたに拘らず、その戰爭當事者の意識に於ては、民族的反感が、それの動機であるかの如く思惟されるのである。無意識の現象に關する研究者の指摘する如く、人間は、或る行動を取るに當つて、自からその動因なりと意識するものは、事實に於てその動因ではなく、却つて當事者の思ひがけないところに動因があることが多いのであるが、戰爭も亦個人の喧嘩と同じく、意識的動因以外に、強い無意識的動因を持つ場合が多いのである。その最近の例は獨逸である。獨逸民族が、その文化を世界に光被せしめる彼等の天職を妨げるものに向つて戰爭が開かれたと唱へたのは、餘りに見え透いた出鱈目であるとしても、彼等の多くが、戰爭を英佛に對する民族的反感の致すところと單純に考へたことはあつたであらう。然るに此の反感は、實は單純の感情の沸騰ではなく、實は獨逸國民の經濟的發展の障害に遭遇して勃發したものであつたのである。反對側の英國と雖も、その通りで、獨逸人の暴虐に公憤を發したといひそれは先天的に獨逸民族に對する英國民の反感が、その機會を捉へたものであると考へたのであるが、獨逸の經濟的發展と、英國のそれとの間に、利害の相反がなかつたならば、決して戰爭は起らなかつたのである。即ち所謂民族的精神なるものは、表面の看板として掲げられる場合が多いが、實際の事情に、その看板以外に存することが多い。而して看板の民族的精神は、他の事情による爭鬪の興奮劑に使用されるのである。今日の米國の排日も亦その一例に過ぎない。それは經濟的利害相反であつて、民族的反感そのものではないが、反感は、その利害相反の爭ひのダシに使はれてゐるのである。

それと同じく、國民的生活そのもののうちに、民族的精神が、何れだけ活躍してゐるかも亦一考を要することである。古來日本民族は、民族的感情の純粹を保つただけ中々鞏固な民族的意識を持つた國民であると信じられてゐるのであるが、然かも、實際に於て、昔の日本國民が、大和民族的精神を、その日常生活の間に何れだけ顯著に意識してゐたか

は甚だ疑問なのである。その點に於ては、日本國民は、寧ろ所謂鄉土的精神の方が民族的精神よりも顯然であつたといふのが至當であらう。古代の日本は、近畿地方に限られた一國を爲してゐて、その都會的生活に對して、他の地方はまるで殖民地のそれの如きものであつたので、一國の中心生活を構成してゐる人々は、その都會的意識の方が、日本民族の意識よりも強かつたと思はれる。彼れ等が、日本内の他鄉に出でて、直ちにホームシックを起して都會を憧憬したことは、地方民が、その鄉土的生活に閉籠つたのと同じく、民族的であるよりは、地方的であつたのである。さうして此の地方々々は各それ自からの鄉土的精神を持して、互に戰爭を行ひ、又地方的支配を創設してゐたのである。國家の支配は、此の地方的支配の上層に、政治組織の網を張つてゐるに止まり、國民の生活は、寧ろそれと沒交渉に、地方的意識の下に行はれてゐたと考へる方が至當である。

かういふ生活に於て、民族的精神が活躍しなかつたことは、後の封建的戰爭に於て、武士にも國民にも、毫も民族的精神の見るべきものがなかつたのと同じく、當然のことであり、又それだけで日本民族の生活が、兎も角も今日の日本を發生せしめるだけには繼續して行つたものなのである。たゞ此の生活が部分的にでなく、全的に脅威された時には、そこに民族的精神が勃然として頭を擡げるのであるが、それは二千余年の日本の歷史に於て、たつた數回に過ぎなかつたことである。

かく數千年間に數回しか起らないといふ現象――即ち民族の生活に於て、甚だ乏しい經驗に過ぎないこと――に於て、斯る強烈に民族的感情の働くといふことは奇蹟のやうである爲めに、そのことは必ず奇蹟の出現を伴ふことになつてゐるのであるが、此の民族的感情の奇蹟的勃發は、社會學的に考察すれば、その民族の集團生活が孤立的である爲めに、他民族を恐れる本能の働きがそれを強めるものであることを認めなければならない。動物も、他の動物との接觸を妨

げれば妨げるほど、他動物に對して獰猛になる。彼等を緩和せしめる道は、これを接觸せしめる外はない。それと同じことは國民的生活に於て見出される。孤立してゐる國民ほど、民族的感情が強い。地理的に孤立してゐても、境遇的に孤立してゐても、孤立といふことが、その集團をして、他の集團を恐怖又は嫌惡せしめることに變りはない。日本國民の民族的感情の強烈は、その孤立の度合に比例する譯である。元寇當時に、元の通商要求に對して、日本國民の採つた態度は維新の際に採つた態度よりも民族的感情を逞うしたものであつたといへる。それは、維新の際に於ける日本國民は、元寇當時よりも、智識的に孤立を失つてゐたからである。即ち相手方の事情により多く通じてゐたからである。

しかも、此の孤立の生活それ自からに於ては、日本國民は寧ろ少しもその民族的感情を必要としないのである。必要としないのみか、却つてそれを迷惑としたのである。何となれば、彼等は日本國内の隣人と戰爭をするのに、その隣人を一つに包容する民族的精神などがあつたら、士氣を弱めて、戰爭を不可能ならしめる惧があるのである。で彼等は、決して民族的意識をその平生の生活に取り入れることが出來なかつたのであるが、その事實は、決して或る場合にその民族的感情を興奮せしめる障害とはならなかつた。それは民族的孤立の生活さへ續けてゐれば、異民族を恐怖乃至嫌惡する感情は何代でも保育せしめ得るからである。

民族的意識は、國家的孤立に比例するといふ事實から、民族的感情に關する理解について一種の暗示が與へられる。即ちそれは民族的精神は、人類の集團的生活の個體意識の一つであるといふことである。

四　個體意識としての民族的精神

個體の意識は、人間にのみ特有のものではなく、高級動物の等しく具へてゐる心理なのであつて、殊に集團的個體の意識に於てさうなのであるが、その意識が、人間の心理に現はれる時には、種々でる段階を取るのである。その故も標本

的のものは、家族的集團の意識、種族的集團の意識、民族的集團の意識である。而して此の人的結合の之れに對して、他方に生活の結合がある。これは、この集團に於て、何等人的結合がないのであるが、この生活の集合から、集合的意識が發生するのである。それには、職業と地方的との二種がある。前者は組合のやうな分業的結合もあり、貴族、軍人のやうな階級的結合もある。後者は郷土的一致を構成する意識であつて、村と村との紛爭の如きは、これによつて元氣づけられるを常としてゐる。而して民族的意識は、これらのすべてを、事實的にではなく、信仰的に綜合したものゝ上に存する個體の意識である。

民族的意識が個體意識であるとすると、それは一般個體意識と同じ性質を以て、その個體若しくは、その個體を構成する個體の生活に役立つものである譯である。

元來個體意識といへば、たゞその個體そのものゝ生存に役立つと考へられてゐたのは久しいことである。その結果個體の意識は、出來るだけ全體の爲めに制肘されることが、社會的生活の仕來りになつてゐる。それは今日でもその通りで、個體意識の壓迫が、社會生活乃至國家生活の最急務のやうに考へられてゐる。

然しながら、人間の生活に於て、個體は、その生存を個體の孤立に依據せしめることは絕對に不可能であるといふ事實がある。此事實は、それに反抗する人間を絕滅せしめ、從つて今日まで生き長へてゐるすべての人類をして、彼等の個體意識は、社會意識を離れては成り立たないといふ境遇に立たしめてゐる。全く個體意識に閉ぢ籠る人間は、發狂者の外にはなく、全く個體意識に閉ぢ籠る國家は、發狂した國家といふものがない限り世界に一つもないといふとになつてゐる各國々は事實上、他の國家と互助的生活に於て成り立つてゐることは、他國を夷狄視する思想を撲滅せしめたのである。

個體意識が自然淘汰によつて、右のやうに社會化させられたことは、それが弱められたことであるかといふに、さう

ではなく、事實はその反對なのである。何故ならば、個體の意識が社會化したことは、その個體の保存の爲めの必然の進化なのだからである。個體はその原始的狀態に於ては、全體の爲めの單なる犧牲的生活に過ぎなかつたのであるが、全體の生活の進化は、同時に個體の發達となり、種の繁榮が增せば增すほど、個體の意識は明確になつたのである。さうして人間に於ては、その個體の生存を措いて、彼れ自身にとつて何の生存もないといふ程度にまで達したのである。

　而かも斯くの如き經過の中途に於て人間の社會に發現した重大な事柄は、或る個人が他の個人を犧牲にするといふ一種の變態的現象である。これは通常超人の出現と考へられ、その超人なる偉大の人間に個人的發展と見られてゐるのであるが、これも社會學的に考察すれば、その超人は、實は、集團の人格化の性質を帶びてゐるのである。集團の生活は、原始人の社會では、トーテムによつて代表され、後には、神化した共同祖先によつて代表され、その祖先は過去の人格ではなく、全く現存の代表者として働いてゐるのであるが、かういふ信仰が廢れた後は、代表者の役目を所謂超人が務めた譯なのである。社會的英雄は、その生存を自己の人格に基づけてゐたといふよりは、それが生存してゐた民族の精神の具體化として生存させられてゐたのである。尤も此の民族的精神は、必ずしも社會的のそれではなく、それとは沒交渉の階級的精神であつたのであるが、然かも、その偉人の支配が、民族的生活を左右したことは、その個人的意力であつたと同時に、それがその民族的意識にまで喰ひ込まなかつたならば到底成立したものでないことはいふ迄もない。換言すれば、超人に對する多數個人の犧牲は、その代表する民族的生活への犧牲と意識されて始めて承認されたのである。この意味に於て、民族的精神は、英雄の出現と互助的關係にあるといへる。

　それと同じ事實は國家的集合生活に於て行はれた。即ち一つの國家が他の多くの國家を犧牲として、自國の偉大を完成せしめるのである。古代には羅馬帝國、近代にはナポレオン帝國がその代表的のものである。此の超國家の最後の計

盛が試みられて失敗したのは獨逸のそれである。

超國家が群小國家を犧牲にするのが、國家的集合生活の理想であるといふトライチケ主義は、これ亦超人の場合と同じやうに、或る程度まで國家的集團の意識である場合がある。羅馬の法的支配及び教權の統一支配には幾分それがあつた。しかし國家集合の生活は、人間集合の生活とはその意識的生活の性質や度合が違ふので、個人の場合にかける如く顯著に超國家が、世界國家の理想を包容し代表する場合は鮮ないのである。獨逸が、そんな大望を抱いたのは、個人生活の場合をそのまゝ國家生活に及ぼした哲學的空想に過ぎない。

尤もさういふ事情の爲めに民族的生活と、國家的生活とが混交されるに至つたことは注意しなければならない。國家は英雄（個人又は種族）がその征服によつて成立せしめた生活であつて、それは家族的生活、種族的生活、民族的生活と云ふ寧ろ人類學的系統に屬する生活とは全く別の支配の生活なのである。故にそれは幾多の民族、を混合せしめたり、一つ民族を分離せしめたり、全く、別な集團内容を採るのである。勿論民族も、いろ／＼の種族を合せたり離したりした集團であるが。その離合は、生活事實に發程した心理的動因であつて、上述の如くその動因の全く曖昧なものであるが、國家的生活は、これに反して、極めて明確な、權力服從の統一關係の下に出來上つた生活なのである。愛蘭が、民族的に結合した動因は、いろ／＼の環境が産んだ心理的事實で正確に指摘することは六かしいが、それが英國に合一してグレートブリテンを構成した事情は歴史の示す通り甚だ明確な過程である。國家的生活と民族的生活との區別は、かくの如く判然としてゐるに拘らず古來それが混同されたのは、國家成立の事實上の基礎を成すところの英雄の生活が、前いつた如く、往々民族的精神と相索引し合ふ事實のある爲めである。

國家的生活は從つて、人類の集團生活の個體の意識ではない。さうである場合もあるが、それは必然的條件ではな

い。いくつもの集團的個體が集つて、然もその集りに少しも人類的集團生活の意識なしに國家生活を生活してゐることもあるのである。これに反して民族的生活は、その集團に於て、家族や種族と同じく、集團的個體の意識を構成してゐる。尤もそれが、異質の肉身的集團でないことは、家族的乃至種族的集團といふ信仰の下に、異家族のもの、異種族のものをも包有してゐるのと變りはない。たゞ、家族や種族に比べて、民族は肉身的事實に基く結合としては稀薄で、生活事實に基く結合としては濃厚なのである。

民族が個體的意識の生活であることは、民族的事實（ナショナルキャラクター）の斷定について寧ろ迷つてゐる社會學者も比較的躊躇せずに採用してゐる見地である。社會心理學の老大家の W. Mc Dyngall も民族的生活を定義して『或る程度の政治的獨立を保ち、一定の民族心（ナショナルマインド）及び民族的性格（ナショナルキャラクター）を有し、民族的思慮（ナショナルデリベレーション）と民族的執意（ナショナルヴォリション）とを持つところの人民又は民衆をいふ』といつてゐる。この定義は肝心の『民族』といふことの解釋がないので、これだけでは理解を助けないが、然しそれを個體的意識とする點は、此の定義だけで十分である。

五　民族的生活の社會化

民族が個體の意識であるとすると、前云つたやうに、個體意識の近代的意義に於て、それは必然に社會的のものである。個人としての個體意識の社會化すら、まだ完全に社會的生活に現はれて來ないので、たゞその意識に基いた社會組織を持ち來ようとする努力になつて現はれてゐるに止まつてゐる位であるから、民族としての個體意識が、多數民族の集團の生活即ち世界的生活に於て、何處まで表現されてゐるかは問題であるが、神話の崩れた後の民族的生活が鞏固であり得るのは、その意識が民族的個體意識として世界的生活に役立つ爲めに外ならないのである。さうしてそれに役立つには、その個體の社會化が當然に出現する外はないのである。

が、民族的個體の社會化は果して實現するであらうか。それはもう實現してゐるのであらうか

前にもいつた通り、本來民族的精神なるものは、それ自體に於て何等の內容を持たない感情的興奮に過ぎないもので、ある集團が所謂外その侮を禦ぐべき場合に勃發するものなのである。それは要するに個體に孤立の維持が、自己の生存に必要である場合に生起するに限つてゐるのである。近世に於て、殊に此精神が世界的に起つたのは、中世の統一的支配に對し、民族的獨立が要求された爲めに他ならないのである。然かも其の後の國民の生活は、民族的意識の引續いた昂進であつて、君主制の勃興も、民主制の勃興も、常にこの民族的獨立を高調した運動であつたのである。而かも此の運動は、何時も民族的精神が採つたと同じ方向を採つて、一方では、自己の民族の獨立を要求しながら、他方では、他の民族的生活に對する侵略となつて現はれたのである。而してそれが、現代の資本主義生活と合致して、商業主義の侵略となり、各民族は、自己の商業上の地位を、昔の軍國的のそれに代へて發展せしむべく、組織的努力を試みるに至つたのである。而してその結果は、矢張り軍國的の爭ひに始終したことは最近の歴史の示す通りである。

これを以て見ても、民族的精神は、人類の平和な生活では眠つてゐて、それが爭鬪的接觸を生じた場合に起る精神であることは愈明瞭である。此の如き個體意識の旺盛は、人類の生活に於て、何かの障害の存することの證據に相違ない。誤つた國家的生活が、常に民族的精神を高調するのは、その生活に於て多くの障害を釀成することを豫想してゐるからである。他國を侵略しやうとする場合には、他國の侵略に備へる場合以上に民族的精神の興奮を必要とする。獨逸の永年の準備的作爲は、全くそれであつたのである。それは誤つた國家が、その國家事業に於て民族的精神を利用するのであるが、民族的精神それ自からも、その昂奮狀態に於ては、往々國家以上に積極的發揚を試みる場合もあるが、然もそれは

多く意識した國家の永年の民族的精神涵養の結果であることはいふまでもない、日露戰役後に、日本國民が焼打を行つたのはその一例であるが、それは平素の國家的訓育の結果であることいふまでもない。

で、現代の民族的精神は、大戰亂を勃發せしめて、結局民族それ自からの生存を破壞する方向にまで押し進んだと同時に、その經濟生活の結果が産んだ階級的意識が民族的意識よりも强烈になつたとの爲めに、必然に弱められることになつたのである。各國の民族中の上流と下層とは、昔一つの民族同志が封建的に割據して爭つたとは別の性質と形式とを以て、同じやうな内紛を、民族それ自からの中に演出せしめてゐるのである。而して其上流は所謂資本階級として、各國のそれが民族的障壁を排して互助的生活を組織するに對し、下層のそれは勞働團體として、同じく民族的障壁を排して國際的に結合しやうとしてゐるのである。それは二つながら國際主義そのものなのである、即ち民族主義の自己破壞なのである。

されば目下の民族的精神は、それ自らの大衝突による大戰爭によつて、此の上の自己發揚の不可能を經驗すると同時に、その内的破壞によつて存立を弱められてゐるのである。その結果現はれた世界的現象は、即ち民族的昂奮の時代に於ては到底見る事の出來なかつた民族的個體の社會化の計畫である。此計畫必然に、最も民族的意識の弱い、從つて國家的意識も弱い米國の發言によつたのであるが、その第一の計畫が、事實に於て崩れたのは、各國の民族的精神であつたといふよりは、寧ろそれを誤つて謳謌した國家的精神であつたのである。目下開かれてゐる第二の計畫も亦米國によつて起されたのであるが、この場合は、前と殆んど同じことが、やゝ違つた形で現はれたに過ぎないのに、有望らしく云はれてゐるのは、全く戰爭直後の昂奮と、今日までの時間の與へた沈靜との差違に基く心理的變化に過ぎないと云つてもいゝのである。殊に興奮國の佛國が、その中心の地位を占めてゐないことが、それを助けてゐるといふ事情によつても、そのことは明かである。

それは民族的個體意識の社會化である。民族的個體も亦個人的個體と同じく、社會的生活の裡に於てのみ生存し得るといふ事實の承認である。たとへそれが、餘りに貧弱な形で現はれてゐるのであるが、貧弱な現はれも、傾向を示すにはこと足るのである。

殊に、此の事實の承認を代辯してゐるものは、現在の各國家の態度であるがこの代辯者等は、マクドガルの所謂民族的性格、民族的思慮及び民族的執意以外に、特殊の國家的性格、國家的思慮及び國家的執意を持つてゐるために、自己の意識に民族的意識を引つけることを平生も怠らないが、かういふ場合には殊にそれに精を出すのである。貧弱な表現は、それによつて貧弱さを加へるより外はないのである。

かくの如き民族的生活の進化は、決して現代に於て勃興した事相ではなく、人類の生活が種族範圍を超えて、世界的生活に近接した當初即ち、羅馬帝國の完成以降人類の生活意識に於て、常に民族的傾向と世界的傾向との振子的運動があつたのである。さうして世界の歴史に於て、それが律動的に事實となつて現はれたのであるが、今日までの世界的傾向が必らずトライチケ式超國家の統一的傾向を取つたのに反し、來るべき世界的傾向は、各國家の個體的生存を尊重する個體國家の集團の生活に向はうとしてゐるのである。現代の世界的傾向の特質については、こゝに叙說する餘地はないが、それが甚だ個人の社會的生活の相互關係の傾向に似たものであることは疑ひない。かくして個人の集團を民族に基礎づけてゐるといふ現狀は、此の新しい調和の下に、今後もなほ人類の生活狀態の樣式となつてゐるのであらうが、國家の生活が、その民族的獨自性を過度に利用することは、次第に不可能となるであらう。從つて、民族的精神は、現にその精神を壓迫されてゐる特別の事情の下にある二三の民族以外に於ては從前のやうな興奮狀態に陷ることのない筈である。萬一それが再現すれば今世界は再び先頃の苦い經驗を甞めさせられるのである。その意味に於ても、今後長く世界の一部に民族的興奮を持續せしめるやうな國家の政策は、確かに改善の必要を感ずるのである。

鷄の決鬪

小杉未醒

牝雞のまめな交りは、淫慾とは思はれず、達者な男の達者な仕事の如く思はれる、ホワイトレグホンは、五羽の妻妾の外に、四羽の牝雞の雛の「女」になるのを待ちかけて、達者な仕事の繼續を栫す 其中には、コーチンの牝も混つて居た、牡も一羽居た、憐れな牝コーチンの青年は、其大きさがレグホンに優るほどに成長したにも係らず、毎々餌箱の傍に躑躅し、同期生なる牝共の傍にも寄れない。老レグホンの一喙は、直ちにコーチン青年の二間も三間もの逃走に値する。其處で主男なる私が、此の天下不平の事に就て考へた。琉球人の門生の建議に依ればコーチンは自身の力を知らない、いつまでも自分は雛で、レグホンは大人だと思つて居る。一度戰はせたら好いでせうと言ふ、家の人々、妻も子も婢も女中も、久しく此のコーチンを歯がゆく、レグホンを心憎く思つて居た、斯くて庭の隅で其決鬪が行はれた。琉球人はレグホンを抱きすくめて、コーチンの目の前に突き付けた初めは恐れて避けたが、やがて此先輩の今無力の狀態に在るを知つて、最先の一蹴を加えたので、直ぐにレグホンを地に置いた、勿論レグホンは怒つて居た、好い小春日和で、菊と山茶花とが、半ば開いた間の、青い苔の平地で、白色の老雄と黄金色の青年雞とは、遂に漸く實力的決着に向ひ合つた。去り乍ら斯う記して來た私は、此事件を悔なしでは回想されない、互に實力を知り合つたならば、次には相侵さゞる適當な位置に各自を保つ。と思つた事は、人間の勝手な分別で、其分別が彼等の最後の運命を決めたのは、罪であつたと後に知つても遲かつた。が兎も角、彼等の喧嘩は猛烈であつた。前半に於てレグホンの迅速な蹴りが着々と成功して、コーチンの遲重な攻守は屡々自身を地に倒した。それでも逃げてはかゝり、逃げはてもり返し若い者の根氣を、十分間ほど續けるうちに、青年雞の戰ひ得ると云ふ自覺の悦びから形勢は逆轉した。新進は漸く戰に馴れ、先輩は焦燥する。コーチンの金色の羽毛は、血を浴びて汚くなり、白色のレグホンは、上半身を眞紅にした、レグホンの蹴りは弱くなり、體重の少しの差の爲に、或は却つて跳ね返されて地に顚ぶ、互の雞冠は裂け、嘴は肉の脂に滿れ、目は血紅の中に濁つた、女共の顏色は變り、私の膝は慄ひ出した。冗談事ではなくなつた、是が皆自身の下らない分別の公平心の結果かと思ふ事に氣を打たれて、私に暗くなつて茶の間に退いた彼等の羽の上に加はる打擊の音が、パサリ、パサリと云ふ音が聞える、初め青年雞の爲に聲援しつゝあつた、人々の聲は聞えない、皆押し默つて見度くない事を見て居るのであらう、最早や此の慘事を中止せしむる思案も出なくなつたであらう、中止させやうか、と私は思つた、既に遲いとも思ひ返した、其時弱い低い、息の短かい喉をコーチンが一聲鳴いた戰は決したのである、老雞は全く敗れたのである、疲れに疲れたコーチンが、それでも得意の頸を延ばし胸を張つて、九羽の牝雞の間に立つて居るのが見える、今日よりは彼の天下になつたのだ、今日よりは彼等の九羽は彼の卵しか産まぬであろう。處で老レグホンは何處へ行つたろう、女中が彼を、齋室の横手の小暗い物の影に見出した 殆んど立つに耐えない程になつて居た、鳥屋の視察に見せたらモハヤ長くは保つまいと云つた。

經濟的權力より政治的權力へ



ヂー・デー・エッチ・コール

ギルド社會主義者の運動が起つて以來、彼等が口癖にしてゐる言葉がある。それは『經濟上的勢力は政治上的勢力に先行するといふ言葉である。此言葉は、始めて『新時代(ニウ、エーヂ)』誌に現れて以來、ギルド社會主義の間に重大な異論を醸した。此言葉が正確に何を意味するかに就ては、時に論爭が行はれた。けれどもギルド社會主義者が此言葉に對して、精確にどんな解釋を下さうとも、政策に直接關係ある或重要な意味に關しては、其眞理たることを爭ふ者はなかつた。

然らばギルド社會主義者が『經濟上的勢力は政治上的勢力に先行する』といふ時、彼等は何を意味するのであらうか。

種々の解釋があるにも拘らず——其意見の相異は根本的意味には何の影響も及ぼさないので——此問に對して、徹底した答を與ふることは可能である。其意見の相異は、此言葉の中心的意義ではなくて、範圍の問題であつた。ギルド社會主義者が共通の態度を主張して此言葉を用ゐる時は、彼等は、第一に社會組織の性質を決めるものは、其政治的制度ではなくて經濟的形式であり、政治的形式は經濟的形式に依て決まるものである、といふことを意味して居るのである。彼等は、社會組織を變更するためには、其政治組織の形式及び表現よりも、其下に潜む經濟的構造及び經濟的勢力の分配と社會上の能力の方が重大だといふのである。

是では、單に唯物史觀が根本的に眞理であるといふことを再言したに過ぎないと云はれるかも知れぬ。私は寧ろ、是は唯物史觀の收穫多き發達であり、其れの應用であると云ひたい。確かに是はカール・マルクスの歷史的經濟學説に由來し、且つそれに基礎を置いたもので、マルクスの見地と本質上一致して居るものである。けれどもこれはマルクスの見方を今日の勞働問題の實際に、直接且つ適當に應用したものである。そして唯物史觀を承認する總ての人が、ギルド社會主義者の此慣用句に含まれてゐる意味を認めるものとは限らない。『經濟的勢力は政治的勢力に先行する。』果して然樣であるとすれば、「革命」若くは他の如何なる社會秩序の根本的なる變革をも、第一に政治上の問題として考へることは無益である。過去の革命に於ける顯著な出來事は、疑もなく常に政府の變化であり、或政治的權力が他の政治的權力に取つて代つたことであつた。けれども、若しもギルド社會主義者の云分通りだとすれば、此顯著な出來事は、決てし革命それ自身の精髓では無くて、より深刻なる革命の結果であり、現に働いてゐる、强大な新しい勢力が表面に現れたものに過ぎないのである。政治上の政府の變化が、革命を起したのではなく、社會的勢力の分配の上に起つた潜在的變化が、政治的政府の舊い形式を廢物に歸せしめ、隨つてそれを死滅せしめたのである。革命が政治的政府の變化

を伴はずに行はれるといふことは、或は不可能であらう。けれどもこれは只だ、政治的變化は、社會力の分配の變化に當然に伴ふものだといふだけのことで、政治的變化がその再分配を齎らした、といふ譯ではないのである。

そこで今日、ギルド社會主義者は、社會主義に依る資本主義の廢滅は、政治的政府の形式に深刻な變化を起させるにもせよ、其變化の結果として起るものではないと主張するのである。その廢滅は、今日の社會の資本主義的組織を、勞働者が作つた組織に更へることに依て成立する。それは資本主義的組織の生産的職分の萎縮と勞働階級的組織の、徐々なる、そして有機的な發達とに依て、起るのである。勞働階級が資本主義の上に於て、第一に資本家の酷使と壓制とに對する自家擁護として發達させつゝある團體や協同動作の方法は、單に有力な防禦的行動のみならず、社會の中に於ける新時勢を把握し、資本主義の手から經濟組織の統轄的機制を奪ひ、經濟的勢力と責任とを直接掌握する可能性を包含してゐる。即ち『勞働組合は、防禦と交渉との機關たる狀態を脱して、生産及び管理のギルドとなりつゝあるのである。』

故にギルド社會主義者は社會的變化の問題を、まづ第一に政治的鬪爭の問題として見ずに、勞働階級の訓練と發達との問題として見るのである。是は政治的行動に對する敵意を意味するものでもなければ、其重要さを輕視するものでもない。多くのギルド社會主義者は勞働階級の政治運動に熱心に携はつてゐる。けれども是は政治的鬪爭が全てでないこと、最も本質的な鬪爭ですらもないことを條件とした上のことで、かような見解を抱く者は、彼等の政治的努力をさへ無益視してゐるのである。

『政治上の力は經濟上の力に先行する。』私は今此言葉の眞理を能ふ限り簡單に説明して見よう。私は、近き將來に於て勞働政府が政權を握ることが、少くとも可能である大英國に於て書いてゐるのである。けれども勞働階級に依る此權力

の掌握それ自身が、社會主義若くは社會組織の根本的變革を持ち來すものとは、誰が想像しよう？ さういふ變化を遂行しようとする勞働政府の力は、其意向や希望がどうあらうとも、實際に於て制肘を蒙り、有効なる超議會的背景に依て左右されるに相異ない。勞働者が、資本家的組織に重大な打撃を與へる實力の有無を決定するものは、議會に於ける頭數や結束力ではなくて、勞働階級全體の自覺と、その運動を援ける準備の程度如何によるものである。

或社會主義者らは、勞働者が單に政府の權力を握つただけでは社會主義への推移を實行することは出來ぬといふことを認めた上で、是を議會内に於ける運動の首領の無能と意志の不足に歸してゐる。けれども議會内の首領の微力と無能とは、彼等の背後の運動の微力無能から來るもので、かような見方は社會主義への變化を、經濟的及び社會的勢力といふ、大切な立場から見て居らぬことの結果である。首領連は純然たる政治的手段に依て社會的、經濟的變化を來さうといふ、不可能事を企てゝ居るがためにしつかりしないのである。謂はゞ彼等は、基礎が築かれぬ中に、家の屋根の上に足を掛けさせられてゐるようなものである。

是はギルド社會主義者の言葉の意義を、簡單に、分りよく現した一例だと私は考へる。是は一旦分りよく説明されれば、否定することの出來ぬものであるがために、人を啓發する力を有する。政治的首領は、根本的變化を來すことに就ての彼等の無力を、平會員の冷淡や無教育の故として説明するかも知れぬ。けれども是等は曖昧な云分であつて、徒らに實際の原因を不明瞭にするに過ぎない。平會員は無智無關心であることもあらう、然しそれは主として、社會的變化の事業に於ける彼等の役割が明白に理解されず、又は適切に説明されてゐないがためである。政治家は自らそれを知らないから、人に是を説明することが出來ぬ。又それを微に親知してゐる者も、其問題に關する彼等の部分的理解を、彼等が當面せねばならぬ全ての事情と關聯させて考へることは通例出來ないのである、

社會の構造の性質に關する——非常な變化を伴ふ所の——革命は、經濟的勢力の急激な再分配を伴ふものである。『××××』は勿論是を伴はないけれども、斯樣な運動を說明する場合に用ゐられる經濟的な言葉は、單に經濟的勢力の急激な變化を伴ふに留まらず、實に經濟的變化そのものなのである。吾々が『產業革命』と呼ぶ英國に於ける一大變化は、經濟的勢力の急激な再分配に依つて起つたものであるが、現代の觀察者は此意義を殆ど全然見逃して居る。資本を所有し、又はそれを用ゐることの出來た者が、工場を建てた。そして彼等が其等の工場を支配することから生じた勢力は、英國の全社會組織を一變したのである。就中それは一八三二年の改革命を齎したが、これは資本主義の政治的勢力を形式的に承認したものである、然し此改革命が產業革命の背後に橫はる動力であると感違ひをする政治家は一人もあるまい。社會組織を變革したのは蒸汽力であり、資本の所有主が社會を征服したのは、彼等が蒸汽力を支配し、且つ蒸汽力を通じて人々の生活を支配したがためであつた。

此次の大變化も、本質に於ては此通りであらう。若しも勞働黨、又は、それに關しては、共產黨としても經濟的條件が成熟する以前に、政治的權力を握つたとすれば、彼等は政府の地位を占めることは、必ずしも同時に有效な政治的勢力だけでも占め得るものではないことを、速かに見出すであらう。一方、勞働者の經濟的勢力が增大し且つ有效に組織せられて資本主義の廢棄に差向けられたならば、單に政治的地位のみならず、使行し得べき政治的權力も亦、當然の事として伴隨して來るに相異ない。

故に英國其他何れの國に於ても、勞働者の根本的な仕事は、政治的組織ではなく、經濟的及び社會的組織に在るのである。勞働者の主要な仕事は、資本主義を投票に依て廢止することではなくて——投票は單に相鬪ふ意思の勢力の消長を記錄する方法に過ぎない——自分ら自身、社會主義的基礎の上に社會を組織し直す道具を作ることに依て、資本主義

を廢止することである。而るに資本主義の新興勢力は、中世紀以來殘存して居つた死物的規定や職業上の統制を消滅させた—然もそれを、〃彼等自身のより自由自在な、より能率の高い生産要具を作ることに依て、それを行ふたのである。故に勞働階級も資本主義の下に於て、それ自身の解放の道具——資本主義の制度よりも、今日滅茶々々に紛糾してゐる生産の事業を立派に完成する能力のある組織を作らねばならぬ。

是は政治家が市民に對して、單に投票をするだけで極樂世界を出現する仕事の一部の役割を務めて呉れと頼む場合と事變つて、遙かに困難な仕事である。けれども社會主義が投票箱なり機關銃なりを一寸いぢくつただけで實現出來るように信じて居る政治家又は無鐵砲な革命家は、自ら欺いてゐるもので、眞理を掴んでゐる者では無い。社會主義が、機械の口に一片を投じ、そつと又は荒々しくハンドルをまわすだけで實現せられると想像する誤りを排斥する時には、立憲的政治行動の主張者と同じくに、偏してゐるコムミユニストもある。

故に來るべき變化に對するギルド社會主義者の態度は、「投票箱」又は「機關銃」社會主義よりも、遙かに骨の折れる仕事を勞働者に對して課するものであるといふ事實を、吾々は恐れることは無い。何故なら其仕事が骨の折れるだけ、吾々が計畫してゐる變化は素晴しいものだからである。其變化の性質は『勞働者の管理』といふ、簡單な、然し表現的な言葉に最もよく示されて居る。社會主義の眞の確立には、單に社會の政治的機制のみならず、經濟的及び社會的機制の總ての本質的な部分に對する、勞働者の有效な管理が伴はねばならぬ。それは政府の管理と同じく工場の管理をも行ふことを意味する、それは、總ての最も重要な産業及び職業の、新しい民主的な基礎の上に於ける組織を伴ふ。

此ように考へられた「管理」といふ言葉は、極めて明確な意味を有する。變化を來さなければならぬのは、單に社會組織の形式ではなくて、實際の指導的、行政的勢力である。私有制度より公有制度への單なる變化は、産業を勞働者の管

理の下におかぬ點に於て、今日と變ることはない。それ所か、或條件の下に於ては、それは資本家の管理を一層絶對的なものにせぬとも限らない。勞働政府の下に於ける公有制度でさへも、官僚的指導を十分兩立し得るが故に、必然に勞働者の管理を意味するものではない。社會主義にとつて最も必要缺くべからざる變化は、勞働者自身の態度と實際の能力の變化の結果として——即ち新しい民主的な管理制度を愼重に組織し、産業指導の權利と等しく、責任をも喜んで引うけるだけの用意の結果としてのみ、來り得るのである。

此點をも少し具體的に述べて見るとしよう。現在、大抵の産業に於いては、勞働階級は資本主義に對する防禦の目的のために、僅かに半分だけ組織されて居るに過ぎず、資本主義に取つて代るためには、全然組織されて居ないのである。勞働組合は團體交渉の技術を少し計り學んだ、然し此限られた範圍の内に於てさへも、彼等の協力と團結とが猶ほ甚だ不完全なものであることは一般に認められて居る。部分的な組合主義及び組合同士の競爭はなほ普通で、抗夫、鐵道從業員、及び運輸勞働者の三角同盟の如き、協同動作の企ては、英國のように勞働組合の組織が高度に達した國に於てさへも、今日までの所では、主として運動全體に行渡る結合の不足と弱點とを、暴露しただけのことに過ぎない。團體交渉の純然たる改良主義的目的の點に於てさへも、勞働組合は、猶ほ甚だ遺憾な點が多いのである。

勞働組合が現制度に關する彼等の經驗から、それの絶滅に對する自覺的な欲求に向つて發達したとは事實である。或程度まで彼等は、社會主義的態度を採り、新しい社會秩序に對する要求を抱いて進むやうになつた。けれども彼等は猶ほ此社會的變革の計畫に於て、彼等自身の建設的事業を殆ど全然行ふて居らぬ。彼等は管理權を掌握するために彼等の力を組織したこともなければ、『勞働者の管理』には避け難い困難に當面しようともしてゐない。

然し是は必ずし一般的な事實ではなく、建設的な傾向もあるにはあり、それは今日の逆境の下に於てさへも、漸次

に強大になつて行つて居るのである。ギルドの組織に對する近來の運動は、資本主義の存在する間に、早くも資本家の管理を勞働者の管理に代ふべき、建設的企圖の顯著な例を示して居る。建築職工の勞働組合を基礎として、國内のあらゆる地方に數百の地方團體をもつ、全國建築ギルドが形成されたのは、多くの團結せる勞働者の十分思慮ある努力の結果である。それは彼等が資本主義のために一通りならず虐げられたので、「革命の日」を俟たずに、ギルドを以て資本主義に代へようとしたものであるが、「革命の日」は、此處に述べたような建設的な準備が整はぬ限り、決して來るものではないのである。既に建築勞働者の例が傳播する傾向のあることは明かに見えて居る。家具、車の製造、鐵道機關及び關聯の産業には、小仕掛ながら既にギルドが存在して居る、そして他の方面の勞働者の團體も亦、此運動に熱心に倣つて居る。

私は此點に就て誤解を受けたくないと思ふ。私は單にギルドを作ることに依て資本主義を撤廢し得るものとは信じない。消費組合は、もはや八十年間も有効に存續して非常な成功を收めて居り、純粹たる資本主義的管理の中から、重要な産業をもぎ取つて來て居るのである。けれどももはや何人も、吾々が徐々消費組合の店を相手に取引をしさへすれば、資本主義は消費組合の平和な取引に依て撤廢されるといふような、消費組合論者の説を信ずることはない。斯の如き撤廢には、其遂行に單なる時間ではなく、永遠を必要とするのみか、永遠でさへも、消費組合的な組織の形式を、あらゆる仕事の組織として適切なものとすることは出來ない。

ギルド社會主義者は、古い消費組合主義者の陷つた誤ちを繰返すものではない。のみならず、彼等は、彼等が今日確立しやうとしてゐるギルドの主たる價値は、資本家的産業の構造に對して與へる積極的な打撃よりも、ギルドが團結せる勞働者に敎へてゐる自恃の敎訓の中に認めてゐるものである。建築ギルド、及び現に成立しつゝある他のギルドが、

それに對抗する資本家的勢力の優勢な重みのために押し潰されることも無いには限らない。ギルド主義者は、彼等が僅かにその團結の第一步に遭遇してゐるにすぎず、愈々の場合には、資本主義は彼等に對して、在來用ゐなかつたボイコットや、鎭壓や、財政的管理の手段に訴へるであらうことを知つて居る。總てのギルドは滅されるかも知れぬ、然しギルドが教へてゐる教訓の價値は、その覆滅と共に失はれるものではない。勿論ギルド主義者は、彼等が資本主義の侵撃によく對抗し得、現存の特權制度の、愈々猛烈な反抗の面前に、全國ギルドを維持し發達させて行くことが出來るのを希望する。彼等は、かういふ成功は、悲壯な財戰よりも、更に人心を鼓舞するものであることを知つてゐる。けれども敵の勢力が餘りに强大で、久しい間には遂に敗戰の已むを得ぬに立ち至るような場合でさへも、その經驗は極めて貴重なものに相異ない。それは勞働者が産業を管理する能力のないごとく、資本主義が其能力に對して抱く恐怖と憎惡とを共に示すであらう。

のみならず、ギルドの實驗の影響は、單に新たにギルドが作られるといふ點に現れる許りでなく、勞働組合員の中に新しい物の見方を敎へることが、最も重大な點なのである。莫大な固定資本を基礎とせねばならぬもので、明かに其中には現在では、ギルドを確立し難いもの、又は『勞働階級の生産組織』を作ることに依て、直接資本主義に取て代らうと企てることは不可能な産業も澤山ある。例へば今日、全國鑛業ギルドを作ることは、鑛山が坑夫に屬せず、鑛業に對する支配權を未だ放棄せしめられるまでに至つて居らぬ私人の有となつて居らぬために不可能である。建築業は固定資本が重要な要素となつて居らぬ唯一の大工業であるために、ギルドの實驗には特に有利なのである。是以外に、即時にギルドの實驗が行はれ得る望みのあるのは、殆ど無資本で着手し得る仕事の場合のみである。

けれども斯う云つたとて、今すぐギルドの實驗を行ふことの不可能な他の産業の勞働者が此建築ギルドから何も學ぶ

所がないとか、又は現に學んで居らぬとか云ふ譯では決してない。其教訓は直接明白でない迄も、重要さは決して劣らぬのである。鑛山、鐵道、鐵及び鋼鐵、他の基礎的產業及び職業よりも、建築業に對する資本主義の支配が完全でなかつたので、建築勞働者及び他の數個の集團に在ては、資本主義的組織から、自治的なギルドの管理に飛躍することが出來たのである。そこで勞働者の管理に對する欲求は、直接且つ完全に表現されることが出來たのである。かういふ工合に行かぬ場合には、資本主義を、一層民主的な管理に取代へるといふ、同一目的に對する別の政策が必要である。『工場管理』の要求、即ち勞働者が規律及び解傭に對する權力をもたうとする要求、職長及び監督者の民主的な選擧制度、久しくギルド社會主義者が唱へてゐる『團體交涉』に對する要求――是等はすべて、產業自治への飛躍が、今直ぐには行はれぬ方面で、管理の立場を得ようとする企てゞある。其等は產業的勢力にとつて最も重要視されてゐる『產業管理』の一部分を、傭主階級から奪ふなり、引取るなりして、團體としての勞働者の手に渡さうとする企てゞある。

資本主義に取つて代る（置換的）價値を有するものは、單に實際上さういふ讓步をかち得ることだけではない。勞働者は自治の欲求を明白に意識し、それを實際の要求として形成しようとするや否や、彼等は其等の要求を實現するために團結する。たとへ其要求が拒絕され、暫時の間、讓步は得られぬにもせよ、明白に經濟上の權力を得ることを目的として作られた勞働者の團結の創造は、それ自ら經濟力の獲得と同一である。權力を掌握し且つ行使する能力のある組織を以て武裝して居ることは、實際に權力を奪取する方向へ、一步を進めたものであつた。勞働者の經濟的勢力を主として決定するものは、勞働階級が實際に資本主義に取つて代つたその範圍ではなくて、資本主義に取て代り得る能力と、資本家の指圖を俟たずに社會の生產事業を遂行し得る範圍なのである。

故に社會的權力征服の鍵は、勞働階級の準備如何に依ることで、資本主義の顚覆よりも、資本主義的管理とは異る制

度の上に、産業と社會とを打立てることが必要なのである。勞働階級の政治的將來は、共産主義的將來と同じく、此意味に於ける其準備如何に係つて存する。革命に對する其能力も、等しく、此點に係つて居る、勞働者がまづ第一に學ばねばならぬ教訓は、彼等は彼等が責任を引受け得るだけの準備のある程度以上には、何物をも獲ることは出來ぬといふ點である。私は勞働階級の要求を制限したいがためにかう云ふのではなく、是等の要求の意味を、勞働者自身に十分に會得して貰ひたいがためにかう云ふのである。權力は、それを行使し得ぬ限り、權力ではあり得ない、そして經濟的權力の實質をも同時に掴むことなしに、經濟的權力の影を掴むことは無益である。

これは勞働者の政治運動に對する駁論ではない。これは寧ろ政治的勢力と經濟的勢力との適當なる並行を求めんとする叫びである。これは、さういふ並行が政治的及び經濟的權力の間の實際的關係の正當な理解の上に基かねばならぬことを主張するのである。階級的に分裂して居る總ての社會に於て、政治組織は其本質に於て、經濟組織の表現であり、其中から發生したものである。政治組織は、そこで經濟的條件から生れるものである以上、政治組織は經濟的勢力の分級的分配の變化を記錄するものである、といふことになる。そして總て一定の政治組織は、潜在する經濟組織の必要に適應するように作られてゐるものである以上、その政治組織に相應した經濟組織を廢すべく出來た異る經濟組織の要求に適應することは、萬一不可能でないまでも、到底出來さうもないことである。英國に於ける現存の議會的機關が、社會主義への推移を來す有効な道具となり得たらよほど不思議である。さうはなり得ぬ徴候がいくらもある、何故なら議會のもつ主張の總ては、取も直さず、社會主義が亡すことを使命としてゐる主張其物に外ならぬからである。

故に恐らく、勞働者の新たなる經濟的勢力は其時が來たならば、新しい經濟的基礎と一致した新しい政治組織を發生させるであらう。けれども其れまでの間、現存の政治的機關を、勞働者のために利用し得る限り、利することが必要で

ある。然し是は自分らの目的のためでなく、却て主もに直接自分らの目的を邪魔するために作られた他人の道具を使つて居るのだといふ、自覺あるものゝみに依て爲さるべきである。彼等はそれを用ゐるもよい。けれども彼等は、その勢力眞の源泉は、政治的方向に於ける彼等の選擧の成功ではなく、勞働階級がそれ自身の目的のために作つた組織と、彼等自ら社會管理の積極的責任を引受け得るだけに、是等の組織が成功を收めることゝに係つて居るのである。斯の如く、政治的權力の有効なる征服は、彼らの選擧運動の『王宮革命』又は一揆騷動の成功として現はれずに、社會の總ての方面に亘つて、資本主義的組織を、勞働階級的組織に、積極的に取代へることの結果として現れるのである。『勞働者の管理』とは斯の如きことを指すので、『經濟的勢力は政治的勢力に先行する』と云ふギルド社會主義者の言葉は、斯ような意味をもつてゐるのである。

外國の國粹會

山川均

汽車も舶來、汽船も舶來、電信も舶來、英語も獨逸語も勿論舶來、これではならぬとあつて、誰かゞ畢生の智囊を絞つて出來上つたのが、日本の唯一の眞正々銘の國産、國粹會だといふことである。

ところが此頃ある舶來の新聞を讀むと、怪しからぬことには、外國にもこの國粹會がある。しかも澤山ある。

尤も『プロタルゴール』といふ獨逸の專賣特許藥だから、獨逸の、國粹に敬意を表するために、日本では、遠慮して『プロテイン銀』と云ふ。

そこで獨逸の方でも、國際の儀禮を重んじ國粹會とは云はずに『オルゲツシュ』と呼んで居る。ストライキが起ると此のオルゲツシュ團が發出して秩序を保つ。今迄にも随分澤山な勞働者を殺して殊勳を立てた。

佛蘭西では國粹會のことを『シヴイク・リーグ』といふ。シヴイク・リーグは伊太利のフアスチスチの戰術を取ることを揚言して居るが、ルタン紙などは、公然シヴイク・リーグの組織を獎勵して居るそうである。

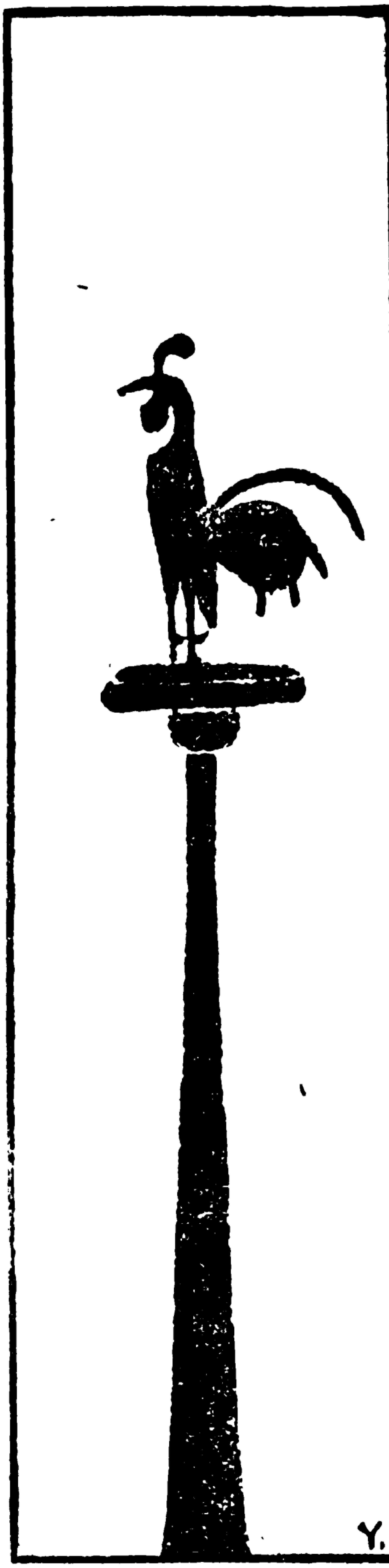
米國では夙てから『アメリカン・リーヂョン』といふ在鄉軍人團があつたが、少し評判が良くなさ過ぎるので、近頃『ク・クラクス・クラン』といふ新しい國粹會が出來た。

しかし何と云つても西洋の國粹會と云へば、伊太利の『フアスチスチ』であらう。流石は地中海上の日本である。ヂオリツチ内閣の倒れた頃、フアスチスチと社會黨との間に一時仲裁が出來かけたが、其時までにフアスチスチの爲に燒拂はれ破壞されたる勞働組合の會館が三百、消費組合の事務所が百、殺された勞働者や社會主義者がざつと五百人、監禁されたものが約五千名である。この國粹會を造つた殊勳者はヂオリツチ内閣の陸軍大臣で、ヂオリツチの後繼内閣を組織したボノミだそうである。

しかし伊太利では少し國粹の藥が利きすぎたものと見へ、近頃では勞働者や農民の方でも、フアスチスチに對抗する爲に、『アルデイチ』といふ團體が出來て居る。此團體には數萬人の勞働者が加はつて居るが、大部分は除隊兵であつて、四年の間實戰に臨んだ士官が指揮して居る。誰やらが『國際の戰爭を變じて階級の戰爭たらしめよ』とか云つたが思ひ合はされる。面白いことには、アルデイチのうちには、ダヌンチオの配下が澤山加はつて居ることである。最近にもフアスチスチとアルデイチとの間に大衝突が起つて、澤山の死傷者を出したといふことである。

英國では『國粹會』を何と發音したか、二三度眼にはいつたがつい忘れた。

名前は色々である。しかし中味は一つである。若し中味が違つて居るとすれば、それはプロタルゴールとプロテイン銀との相異ほどの相異である。



獨逸共和國の政治及社會問題を論ず

エドゥワート・ベルンシュタイン

獨逸共和國は非常なる難境の下に生れた。實に如何なる國家も、其創業に際して之れ以上の難境に當面したことはないのである。前後四ケ年に亘り、而して百五十萬以上の壯丁に戰死を與へ、四百萬の國民に負傷と病苦とを齎らし、國家の財政を紊亂せしめ、一般從軍者や、廢兵や、戰死者の寡婦及孤兒や、其他の戰爭被害者に對する到底料り知れざる義務を聯邦諸國及び市町村に負擔せしめ、産業を邪路に追ひ込み、土地の竭盡に依つて農作物を三分の一以上低減せしめたる戰爭――斯る戰爭の終末に獨逸は際會したのである。加ふるに此國は、一部的には尙頗る憤激しつゝある戰勝國の下に屈服すると云ふ有樣で、重要なる領土の割讓、並に敵國に加へたる戰爭上の損害に對する重き賠償の要求を受く

ることを承諾して居らねばならなかつた。カイゼルは實に恐ろしい遺産を其相續者に傳へたのである。これが國民の上に與へた印象は極めて革命的のものであつた。斯くて一九一八年十一月中、カイゼル政府の手から落ちた國政の舵が社會民主黨の手に歸した時、ブルヂオア階級は寧ろ一安心ついたと云ふ樣子で、何等の反抗がましい企てもしなかつたのである。

勞働階級黨は其政治上の主張に則つて、帝國及び聯邦諸國内に共和制を宣明し、然る後ブルヂオア中の民主的諸政派と協力して民主共和的憲法を是れに與へた。一九一九年八月十一日に發布された獨逸共和國の憲法は、實に社會民主黨とブルヂオア中の進歩的諸政派との妥協に依る事績であつた。此憲法は社會民主々義の立場から觀れば完全とは云へないが、然し一般政治上並に社會政策上の點に於て、他の如何なる大國家の公宣に係るものよりも進歩的なる原則を示したものと言ふことが出來る。

然し帝制的憲法に代ふるに共和制的憲法を以てすることは比較的容易であつたとは云へ、此共和制的憲法及び夫れに照應した精神を深く國民の心裡に印刻し、此憲法たる謂はゞ血となり肉となつて國民の有に歸したものであつて、其れ以外のものではあり得ない、又あつてはならないものだと云ふ風に感ぜしむるは、遙かに困難な仕事であつた。此仕事は獨逸に於て尙いまだ完成されて居らぬ。而して軍國主義崩壞の日に到るまで獨逸國民の大多數が如何に帝制的精神に浸染してゐたかを知れる人から見れば、一九一八年十一月以降三ヶ年を費して尙いまだ右の仕事が完成されないと云ふことは敢て異とするに足りないのである。多くの點に於て、獨逸今日の共和制は一八四八年以後數年間における佛蘭西の共和制と類似の狀態にある。一八四八年二月中、佛蘭西の共和制は國民に依つて熱心に歡迎されると云ふ外觀を呈した。然るに早くも一八四八年十二月十日の大統領選擧に際し佛蘭西が直接的人民投票に依つて選出した大統領

は、確固たる共和主義候補者の一人ではなく、極めて如何はしき人物たるルイ・ボナパルト其人であつた。彼れは實に、七百五十萬票中五百五十萬の多數を以て當選したのである。次いで一四五一年十二月二日彼れに依つてクーデターの強行されたる後、約八百餘萬の投票者中七百五十萬の多數は共和制の斯くの如き毀損を可とした。而して一八五二年十一月[illegible]日、七百八十萬の多數者は帝制を復興すべく彼れに從遁し、之れを否とするものは二十五萬にも充たざる有樣であつた。

前世紀中葉の佛蘭西に比し經濟上遙かに發達せる今日の獨逸に於て、右と同樣の得票比例を見る事は勿論不可能である。一九二〇年六月に行れたる獨逸帝國議會選擧に於て、總投票二千六百萬中各派の得たる票數は左の通りであつた。

(a) 確固たる共和派候補者(各派社會主義者)……………一千一百萬票
(b) 共和派ブルヂオア(中央黨及び民主黨)……………六百萬票
(c) 帝制共和中間派(人民黨)……………五百萬票
(d) 帝制主義を宣明せる政派(獨逸國民黨)……………四百萬票

右に依ると、共和派は大多數を制してゐる。而して現在に於ける獨逸共和制の位置不良なるに拘らず、若し何等かの理由に依つて明日にも新たなる選擧を必要とするに至ることあるとしても、共和贊否兩派間の得票比例は著しき變動を受くることはないであらう。

然し我々は、玆に論究せんとする問題に就き、議員候補者得票の價値を過大視してはならぬ。絶對に信頼し得る共和制闘士と見做すべきは、單り社會黨選擧者のみである。

共和派ブルヂオア中の兩派は、理性の上から來た共和論者たるに過ぎぬ。彼等は現在の位置に於ける獨逸にとつて共

和制は避くべからざるものと解するが故に、之れを採用したのである。されど彼等の選擧者は決して社會民主黨の選擧者の如く確實に信頼し得るものではない。一朝社會的對立が鋭くなると、彼等の選擧者中の著大なる部分は彼等を捨てて帝制派側に走り去るべきことを豫測せねばならぬ。帝制復興の實行可能なりと見るや、五百萬の人民黨選擧者は殆んど例外なしに斯く振舞ふであらう。而して四百萬の獨逸國民黨選擧者に至つては、寧ろ歡呼して斯る行動に出づることとなるであらう。

依是觀之、獨逸共和制なるものは、決して有らゆる萬一の出來事を超越して確固たる位置に据えられてあるものではない。されど此共和制を維持することは、獨逸の對外政策的地位の上に最重要なる事柄であり、また獨逸の勞働者階級にとつては政治上並に經濟上第一位の利害問題たるのである。

即ち獨逸に於ては、共和制か帝制かと云ふ問題は單なる政府の形態に就ての問題に止まるものではない。それは極めて現實的な政治上の內容を包藏するものである。獨逸に於て帝制の復興を努むるものは、第一に西歐諸國に對し何等かの復讐を準備する一手段として、第二に勞働者を抑壓する一手段として夫れを努めるのである。單に大資本家のみではなく、又都市及び地方に於ける中小企業家社會から見ても、共和制下の勞働者は餘りに權利と自由とを有し過ぎてゐるからである。

實際のところ、勞働者の權利地位は共和制に依つて著しく高められた。共和制は選擧に關する一切の特權を廢除した。政治上及び行政上の有らゆる代議機關に關する選擧を通じて、二十歳以上の一切男女に對する無制限平等の選擧權が行はれることとなつた。かくて勞働者の聲は、立法及行政の有らゆる部面を通じて優勢となり、勞働者の代表者は屢々多數派を形成するに至つたのである。これが直ちに社會的支配と經濟上の大改善とに轉化さるるものでないことは論

を俟たぬ。斯くの如き窮迫的經濟狀態の下に於て、直接無條件に勞働者の福祉を增進せしめ得る如き物は一も存しないのである。されど政治上に於ける平等の權利は、勞働者の爲に總ての可能なる改善の達成を確保し、勞働者の社會的威望を高める。勞働者は此權利に依つて、四圍の壓迫に對し未曾有の堅固なる防衞を與へられるのである。

此點に於て、フェルヂナンド・ラッサルレが獨逸の勞働者等に對し、平等選擧權をば彼等の社會的解放の根本條件なりとして推奬したことは當を得てゐる。ただ此主張は、如何なる事情の下にも適用し得るものとは云へないのである。勞働者を主として農業國であり、而して僅かに小部分の地方に於てのみ近世產業を採用せるに過ぎざる官僚國に在つては、勞働者等は其の選擧權を巧みに利用することに依つて若干の改善を獲得すべき可能を與へられ得るとは云へ、而も彼等の社會的隸從は選擧權の利用に依つて幾許の變更をも受け得ないのである。然し發達著しき產業が優勢を占むる一國になると全く趣を異にして來る。

斯くて獨逸の勞働者階級は共和制の維持に就ての如く、又產業の繁榮進步に就ても至大の利害關係を有するものである。マルクスは資本が產業の上になす活動を辛辣に批評したが、此批評の及ぶところ、單に通俗的說明を通してのみ彼れの著述を知るにすぎぬ社會主義者たちをして、實に不倫理なる資本呪詛の聲を發するに至らしめた。彼等は「資本は勞働者階級にとつて不倶戴天の仇である」と宣明せる時、何か非常に急進的な事でも吐露したもの丶如く信じたのである。されど之れは全く非マルクス的な宣明である。寧ろ夫れを反對に言ふ方が、遙かに虛僞でないのである。「資本は勞働者階級解放の重要なる一槓杆なり」とは、正にマルクスの主張する所であるからである。マルクスは決して此主張を秘密にしなかつた。マルクス及エンゲルスの共著『共產黨宣言』は資本制ブルヂオアの革命的功績に對する頌德を以て始まつてゐる。而してマルクスは其大著『資本論』第三卷に於て、資本制生產の下に勞働者の餘剩勞働が採る形態を

ば、これと同時に與へらるゝ、ヨリ高級なる社會制度に達すべき可能に鑑み、資本の文明的諸方面の一（！）として特標することを辭さなかつたのである。

されば、分解力ある専擅的干渉を經濟的機構の上に加へて以て此機構を全くの無秩序に陷らしめ、斯くして——サウエート露西亞に行はれたる如く——其の資本前期的形態への逆轉を招致する以上に、愚なる事はあり得ないのである。獨逸の農業は最早久しき以前より生活資料に對する自國の需要に應じ切れなくなつてゐるので、萬一獨逸の工業が紊亂に陷つた場合それが獨逸國民に及ぼす影響は、露國民が此方面に於て經驗するを餘儀なくされた所よりも蓋し遙かに荒廢的のものであつたらう。

然るに、獨逸革命を露西亞革命の軌道に導き入れんとする企圖をなす者の存したことは、我々の知る所である。露西亞のボリシエヰーキ政府に鼓舞せられ、且つ豐富なる金力を準備せる分子たちは、運動上及び組織上の才幹ある諸人物（カール・リープクネヒト、ローザ・ルクセンブルヒ等）の指導の下に、極力獨逸にサウエート共和制を際明しようと努めたのであつた。此企圖に對する防衛は、獨逸の革命暗愁中（レフォルーチオン・トラユーブ）もつとも暗澹なる一章を成すものである。それは單に、此防衛が幾多の人命を犠牲に供したからのみではなく、又これが爲、舊制度の代表者に對して革命の力が弱められたと云ふ事實にも由るのである。如何なる共同體も其内部に於て容易ならぬ衝突を經ねばならぬ場合には、それに應じて對外的の作働能力及び戰闘能力を損失するに至ると云ふことは、常に反覆さるゝ經驗である。

獨逸共和制指導の任務は、共和公宣後に於ける最初の七週間といふもの、舊來の獨立社會民主黨即ち多數派社會黨所屬の主なる黨員と獨逸獨立社會民主黨員との雙方より均等に成れる人民委員會の手にあつた。此委員會は獨逸勞働者中央委員會の命を奉じたものである。一九一八年十二月廿七日、獨立社會民主黨の代表者等は、叛亂者に對する武力行使

に就て時の中央委員會と意見の衝突を來したるため、人民委員會より脫退することゝなり、かくして人民委員會は今や多數派社會黨員のみより成ることゝなつた。而して此委員會は、共產主義者と自稱するボリシエホーズム信奉者側の激烈なる敵對行爲となつて現はれた反對と戰ふ外に、尙獨立社會黨員側の反對——之れまた一部的には極めて鋭くなれる——と戰はねばならなかつた。

社會主義者間に斯る同志打の行はれたる結果、遂に一九一九年一月十九日に執行された憲法制定國民議會選擧に於て社會主義者は少數派たる位置に陷ることゝなつた。即ち總票數三千四十萬の中社會黨候補者の得たる票數は一千三百八十萬に過ぎず、反對にブルヂオア派候補者の得票は一千六百六十萬票に上つたのである。此社會黨候補者の得票中、五分の四強即ち一千一百五十萬は多數派社會主義者に依つて占められ、獨立社會黨員は僅かに二百三十萬票を得たに過ぎなかつた。共產黨は選擧戰に加はらなかつた。斯くの如き選擧の結果に鑑み、多數派社會黨は有らゆる少數派獨裁に反對すると云ふ其立場から、今や議會的政府を組織すること必要となれるに當り、從來明確に共和主義の立場を守つてゐたブルヂオア諸派を是れに引入れることは避けられぬ所であると考へた。多數派社會黨は又獨立社會民主黨にも入閣を誘つた。然し同黨はブルヂオア派との聯合に加はるを欲せずとて斷然之れを拒絕した。そこで結局、多數派社會黨と獨立民主黨と中央黨（加特立黨）とのみの聯合政府が成立することゝなつた。此うち多數派社會黨は最有力黨たるに違ひないが、然しあらゆる社會民主々義者が一致團合した場合に得らるゝであらうやうな權威を見ることは出來なかつた。殊に多數派社會黨は共和憲法の起草に當り、ブルヂオア黨の利害に讓歩せねばならなかつたのである。而して斯る讓歩の結果は、今日獨逸共和國にとり極めて不愉快なものとなつて現はれてゐるのである。

革命前の獨逸は、大抵みな帝制の下に立てる大小種々なる分支國より成れる一の聯合國家であつて、普魯西國王を其皇

首に頂いてゐた社會民主黨の努力は、即ち斯る獨逸をば民主的なる單一共和國に變へることであつた。元來、此分支國制なるものは、中世に於ける封建諸侯及び王朝創始者等の限りなき爭鬪に基くもので、他の諸地界と共に、又時代後れの宗族的偏見を現在に移植したものである。社會民主黨は斯る分支國家制を廢して、出來得る限り面積を等しうし、且現在に於ける經濟上及び文化上の欲求に從つて區劃さるべき州及地方を基礎として、組織的に共和國の編成をなさんとするものである。かくて例へば、獨逸の土地及び人口の約五分の三を占むる普魯西は、現實に於て獨逸の中に吸ひ込まれてしまひ、もはや他の小分支國並に西方の隣國たる佛蘭西に對して脅威の種ではなくなるであらう。同樣に小分支國中の比較的大なるもの、就中バイエルンの如きはもはや、政治上の分立區域としては存續しなくなるであらう。

此要求は主として、政府聯合黨中のブルヂオア派の反對に依つて挫折した。蓋し彼等は、此要求を實現せんとの企圖が、分立國的施設に愛着せる多數人民の間に反動的なる反抗運動を喚起するに至るべきを虞れたのである。而して此要求が非常なる困難なしに實現され得るは、實際のところ、一九一八年の革命勃發當時獨逸國民を支配してゐた思潮が尙亂れざる力を以て一九一九年迄存續する場合に限るのである。此要求を實現し得なかつたことが獨逸共和國にとつて如何ばかりの損害であるかは、今日正に最も明瞭に知られる所である。

玆に敍述する餘地なき諸種の事情に依り、分支國家——今や國と名づけられてゐる——たる普魯西は今日獨逸帝國の政府とは本質的に組織を異にする政府を有してゐる。獨逸帝國の政府は、中央黨、獨逸民主黨、及び多數派社會黨所屬の民主々義者より成り、中央黨の民主的左翼に屬するヰルト博士を宰相に頂いてゐる。獨逸帝國政府が確固たる共和民主的性質を有するものであることは毫も疑を容れざる所であつて、獨立社會民主黨ですら之れが反對黨たることを斷念してゐる程である。然るに普魯西の政府は中央黨及び民主黨中の寧ろ右傾的なる一派より成り、社會民主黨員を交へず、

其首相には矢張り中央黨所屬の勞働者議員アダム・シュテーゲルワルドを頂いてゐる。彼れは所謂中間政策なるものゝ實行者である。彼れは社會民主黨の爲に入閣の門戸を開いてゐることは事實であるが、然し是れに就て社會民主黨に對し自己の入閣と共に獨逸人民黨と稱する有産階級派の入閣にも同意せねばならぬと云ふ條件を附してゐる。而も此人民黨たる、從來未だ曾て無條件的に共和主義たることを聲明するを肯んじなかつたものである。普國議會に於ける多數派社會民主黨は、人民黨にして此聲明を與へざる以上同黨との聯合政府に加盟するを得ずとなし、斷然入閣を拒絕した。其の結果社會民主黨とシュテーゲルワルド內閣との間に激烈なる敵抗狀態を生ずることゝなつたのである。斯くて同じ社會民主黨の所屬員が帝國に於ては政府黨であり、帝國內の最大國家たる普魯西に於ては政府反對黨であると云ふ矛盾を見るに至つた。我々は今や何んとかして此矛盾を一掃せんものと熱心に努力中であるが、然し現にかく過去に於て斯る矛盾を生じ得たと云ふ事實に依り、分支國家制を存續せしむることが他日如何なる大不都合を招來し得るものなるかを推知することが出來るのである。

目下、帝國政府と獨逸第二の大國家たるバイエルン國政府との間に行はれつゝある軋轢は、右の事實を更らに明瞭ならしむるものである。バイエルン政府はブルヂオア諸派の聯合になるもので、上記の人民黨以外に尙公然帝政を主張する所の獨逸國民黨も加はつてゐる。同政府は嚢に共産黨の叛亂に對して布いた警察管理下の非常取締令をば社會主義者に對しても維持してゐるが、反動派並に其の新聞紙――競つて獨逸共和政治に對する煽動罵詈的攻擊を事とし、且つ中央黨の民主々義大臣エルツベルゲルを斃したる、かの卑怯な暗殺行爲を讚美して新たなる兇行を煽動するに等しき態度に出でてゐる所の――に對しては、寧ろ之れを保護してゐるのである。帝國政府は斯る煽動紙に對して規定せる取締を勵行し、且つ既に久しく無對象となれる非常取締令を撤回すべく要求したが、これに對してバイエルン政府は自己の主

權を主張しつゝ頑強なる反抗を試み、其新聞紙をして、帝國政府は『帝國の統一』を脅かすものなりといふ非難を與へしめてゐる。斯くの如き傾向に就て、バイエルン國、或は寧ろ首都ミユンヒエンを有する上部バイエルン州は、共和制に對する仇敵どもの集合所となり、又帝制並に因襲なる猶太人迫害を復興せんとする有らゆる示威運動の舞台となつた。勿論、バイエルン政府が此傾向を極度まで助勢するものとは考へられない。なぜならば、バイエルン國の他の部分、殊にニユールンベルヒを首都とする産業的なフランク地方（北部バイエルン州）に於ては、人民の多數は斯る傾向に反對してゐるので、若し帝國政府との斷絶が公然の事實となるに至らば、帝國の分裂を招致するに先つてバイエルン國の分裂を見るに至るであらうから。されば、バイエルン政府は、自己の面目を失せざる何等かの形式の下に結局若干の點に就て讓歩するに至るであらうが、然し主義としては其權利　即ち將來らば自己に加擔せるバイエルン諸地方を統合して一ヴアンデー國を建立せんとの權利を保留するであらう。而して今日バイエルン國に行はれてゐる事は、何時かは又異れる事情の下に、他の何れかの分支國にも行はれ得るのである。

帝國議會は獨逸共和國の直接選擧された議會を代表するものであるが、此帝國議會以外に尚獨逸共和國は、各分支國政府の代議員より成る帝國評議會なるものを有してゐる。之れは甞て帝政時代に、同樣な方法で組織された聯邦議會の有せる如き遠大の權能を有するものではないが、それでも帝國議會及び其選任に成れる帝國政府に對し、場合に依つては拘束的、或は少なくとも抑止的に拮抗し得る所の一院たるのである。帝國政府とバイエルン政府との軋轢に際し、此帝國評議會は重大なる一點に就てバイエルン政府側に同意し、かくして反動的煽動者に對する共和政府の行動力を薄弱ならしめたのである。

然し之等すべての事實は、若しそれと同時に、經濟上及び社會上の方面に存する重き不安が獨逸共和國の上に蔽つて

居らないとすれば、格別重大な問題でもないであらう。

獨逸の財政が如何に悲境にあるかは、人の知る通りである。帝國も、分支國も、地方政廳も、其財政の上に莫大なる缺損を有してゐる。而も如何にして之れを補塡すべきかを知らないのである。消費及び營業の上に苛重の租稅が課された。其收入は、從前に於ては空前の巨額と目された程のものであるが今日では未曾有の貨幣缺乏の一小部分を補塡するに過ぎぬのである。從前に於けるよりも遙かに高率なる所得稅、特別所得稅、特別利得稅、財產稅、財產增加稅等も無い譯ではないが、しかしそれは中々所要收入額を齎らさないのである。殊に卑怯なる兇奴に斃れた議員エルツベルゲルは、當時此租稅案を國民議會に提出して通過せしむるを得たのであるが、彼れは單に所得其他に關する稅率を增進することのみを以て滿足せるものではなかつた。彼れは更らに脫稅を困難ならしめんとの、客觀的に正當なる理由を有する改革的熱心を以て、租稅の全算定方法を變更したのである。然るに之れが爲め、稅務吏員等は租稅算定の事務を極めて緩慢に處理することゝなり、戰爭中及び戰後に及んで富を積みたる幾多の投機者等は、此間を利用して其利得を出來得る限り多く國外に持出すと云ふ結果を生じた。戰爭中すでに甚だしく毀損された租稅道德は、今や益々衰頽しつゝある。而して反動論者等は今や全力を盡して此道德を破壞しようとしてゐるのである。彼等は曾てカイゼル帝國の要求せる如き誠意を『猶太人共和國』――民主共和國を彼等は斯く呼ぶのである――に對して抱くの義務なしと云ふ流行語を與へた。多くの人々は斯る言葉に好んで耳を傾けるのである。加ふるに、露顯しないやうに虛僞の財產申告を作製する方法を教ふることを本職とする人々もあつたのである。

斯くて財產稅の徵集は極めて緩慢に行はれ、而もそれは中々所要の收入額を齎らさないのである。斯る間に帝國も、分支國も、市町村も、皆その增大せる經費を支辨し得る爲に貨幣を濫行するの擧に出でざるを得なくなつた。其の結果、

紙幣の購買力——謂ゆる「紙幣相場」——は更に低減するに至り、勞銀、俸給、固定給等有らゆる俸給受取人に其の賃銀低減を見るに至つた。かくして新たに賃銀その他の増加を目的とする運動を生じ、一方には勞働者及び使用人と、他方には企業者並に官廳との間に絶えず新たなる衝突を醸し、之れがため人心は亢奮と激動とを與へらるゝに至つたのである。

如何にして此循環を終決せしむべきか？　帝國紙幣の流通高は八百億萬馬克を超えた。中、金の保證を有する分は五十分の一にも達しないのである。加ふるに未だ償却されざる數十億萬の藏券がある。之れを抑制せねばならないのである。政府は財政上の新たなる負擔に應ずべく、數種の新規租稅計劃を立てた。之等の租稅計劃は消費並に營業と財產との雙方に、殆んど均等の負擔を課さんとするものである。然し從來財產稅に就て得た經驗に依れば、これに依り果して豫定の收入額が得られるか何うかは極めて疑はしいのである。（財產稅なるものは原則上、消費稅及び營業稅と區別さるゝものではないから）。而して勞働者界の人々は、此國家財政上の問題をば單なる可能の手に任せやうとは考へて居らぬのである。獨逸共和國の貨幣要求に應ずべく、社會民主黨兩派は一致協力、現實價値——屢々また金價値とも呼ばれる——の國庫計算を行ふべしと主張してゐる。彼等は云ふ。共和政府は一定の率——二割乃至二割半——を以て都市及び地方に於ける有らゆる資本的企業の共同所有者たることを公言し、此率に應じて之等の企業の收益に參與すべきであると。此方策は多くの點に於て、當然革命的と呼ばるべき價値あるものである。さればこそ、是れに就て强硬なる反對が有らゆるブルヂオア諸黨內に生じたのである。然し社會民主黨が此要求を放棄するに至るべしとは考へられない。政府が斷乎として現實價値の算定を開始せざる以上、社會民主黨は一切の消費稅に承認を與へない事に決した。此主張の貫徹が多大の困難に遭遇すべきは認められ得る所であるが、然し之れ以外の如何なる方法に依つて共和政府が其財政上の窮乏を切りぬくべきかは全く見當がつかないのである。

從來行はれたる如き財産税增徴策には一定の限界が存するものであつて、それを超えると此方法は最早ブルヂオア國家に於ては功を奏さなくなるのである。斯る方法に比較すれば、社會民主黨の要求に係る前記の方策は就中左の長所を有するものである。それは即ち此方策を採用せる場合、如何なる企業も其經營資本を縮小し、甚だしきは撤去する虞がないと云ふことである。資本は依然企業內に止まつてゐる。個人的企業者たると會社たるとを問はず、營業經營者たるものは何等の懸念もなく其業務を續けることが出來る。たゞ異なる所は、利得の一部を要求する權ある新たなる一共營者が加入し來たと云ふ一點のみである。而も斯くの如きはブルヂオア的生活に於ても屢々見受けられる所であつて、之れがため企業の營利的性質は毫も侵害さるゝことはなかつたのである。ブルヂオア的經濟に依つて斯くも多大の價値を認められてゐる經濟的衝動なるものは、これに依つて弱めらるゝことなきのみか寧ろ强めらるゝことゝなるのである。又企業に對する共和政府の享與分を測定するに當り、企業の能率を考慮に入れると云ふ風に法律を制定することも何等差支なき事である。

而も此方法に依つて、社會化の顯著なる一部が遂行さるゝことゝなるであらう。獨逸の勞働者界に於ける社會化の要求は極めて强く、共和宣言當時約束されたる社會化政策が實現を見るに至らないことに就ての不滿は有らゆる方面に現はれてゐる。此點に於ても、獨逸共和國が從來以上の成績を擧げ得たであらうことは疑を容れない。然るに一方には事態の動搖あり、他方には又如何にして且つ何處に端緒を開くべきかに就き甚だしき意見の乖離存したる爲、今日に至るまで斷乎たる處置に出づるを許さなかつた上に、露西亞に於ける實驗の結果は多くの人々に恐怖の念を生ぜしめたのである。

所で社會化、換言すれば私經濟の社會經濟化なる事業は、一定の型に拘束さるゝものではない。社會全體から云へば

何等かの個別的一産業が完全に社會の手に歸するか、これとも一國の總産業に對する著大なる寄與分が社會の有に歸するかと云ふことは、結果の上には何等の差異もないのである。要するに、國庫收入の上から見て、社會全體の利得はそれだけ益々大となり、特に又確實となるに過ぎぬのである。勿論、これに依つて全産業の經營は社會の手に歸するものではない。然し社會は産業の寄與者として顯著なる管理權を保有し、又非社會的經營及び公衆の福祉を毀損する如き販賣の行はれたる場合には是れに對して異議を挿むことが出來るのである。

所でブルヂオア諸黨が社會化の要求に就て特に毛嫌するのは正に此點なのである。彼等はこれについて、全般的にも個別的にも邪惡なる動機に支配されてゐると非難するには及ばない。然しながら彼等の全考想は、私企業に對して社會的立法や刑法の規定する以上に强硬なる干渉を試むることに反抗するものである。企業收益の一部を社會の手に歸せしむることは、完全なる終極點に達する迄は決して停止するを許さざる道程への第一歩だと云ふ風に彼等は考へてゐる。

而して斯る社會化の要求は、從來常に租稅立法の愛兒たりし地方地主等の間に於て、格別激烈な眞に狂熱的の反抗に逢着するのである。彼等は是れに對して强硬なる戰鬪を開始せんとの氣勢を示し、場合によつては農業ストライキを以て是れに對應すべしとの氣込を仄めかしてゐる。

然るに、勞働者黨の方でも、是れに劣らぬ斷乎たる決意を示してゐる。これが爲、單に絕對不可避なる國庫增收の實現が脅されるのみではなく、尙また現在に於ける帝國聯立政府の持續が氣支はれることゝなるのある。現政府は少數派政府であつて、之れを組織する三派の脊後にある議席數は、議席總數四百六十餘中の二百二十に過ぎぬ。かくて現政府が共倒壞を免れ得るは、畢竟六十一の議席を有する獨立社會黨と民主的なるバイエルン人民黨とが是れに對して中立の態度を採つて居るからに外ならぬのである。三派中の一が聯合を脫退するに至らば、政府は最早存續するを得なくなる。

而して租税問題に就て一致が得られないとすれば、かゝる結果は蓋し避けられぬ所であらう。

以上は實に、若き獨逸共和國が現在に於て解決せねばならぬ政治上及び社會上の大問題である。此問題の背後には尚極めて重大なる他の諸問題が伏在してゐる。それは即ち、一方には資本と勞働、他方には有産階級中の一の部類と他の部類との間に行はるゝ重要なる個々階級鬪爭の總體、並に帝國の對外政策てふ大問題これである。幾多の善良なる共和論者をして事態を頗る悲觀せしむる所の、怖るべき內訌が起つてゐる。然しながら苟くも確固たる共和の味方である以上、我々は事態の嚴肅に鑑み悲觀的の情調に打敗けてはならないのである。我々は眼前の危險を念頭に置き、これに打克つべく不休の力爭をしなければならぬ。これに就て我々を激勵し得る一事がある。即ち我々の敵黨側には、共和顚覆するだけの力ある何等の聯合も見受けられないと云ふ事である。

Ueberwindung wirken und kämpfen. Eines darf sie dabei ermurtigen: sie sehen sich keiner Koalition gegenüber, die stark genug wäre die Republik zu sturzen.

völligen Beschlagnahme keinen Halt mehr gabe. Besonder erbitterte, geradezu fanatische Gegnerschaft findet der Gedanke bei den Grundbesitzern auf dem Lande, die bisher stets noch das Schosskind der Steuergesetzgebung gewesen sind. Sie drohen ihm heftigste Bekämpfung an und lassen durchblicken, dass sie im Notfall mit einem Streik der Landwirtschaft antworten werden.

Die Arbeiterparteien ihrerseits zeigen jedoch sich nicht minder entschlossen. Damit ist aber nicht nur das Zustandekommen der unbedingt notwendigen Erhöhung der Reichseinnahmen bedroht, es ist auch die Fortdauer der jetzigan Regierungskoalition im Reich in Frage gestellt. Die jetzige Regierung ist eine Minderheitzregierung. Hinter den drei Parteien, aus dene sie sich zusammensetzt, stehen nur 220 von im ganzen über 460 Abgeordneten so dass sie nur deshalb nicht gestürzt werden kann, weil die unabhängigen Sozialdemokraten mit 61 Abgeordneten und die demokratische Bayerische Volkspartei sich ihr gegenüber neutral verhalten. Sie kann aber nicht fortbestehen wenn auch nur Eines ihrer Glieder aus der Koalition austritt. Und das würde eintreten, wenn inder Steuerfrage keine Verständigung zu erzielen ist.

Dies sind die grossen politischen und sozialen Probleme, mit denen die junge deutsche Republik im gegenwärtigen Augenblick zu kämpfen hat. Hinter ihnen stehen noch sehr gewichtige andere Fragen, der ganze umkreis bedeutungsvoller Einzelheiten des Klassenkampfes zwischen Kapital und Arbeit einerseits und bestimmter Besitzechichten untereinander andererseits, sowis das grosse Problem der auswärtigen Politik der Republik. Ein furchtbares inneres Ringen, das manchen guten Republiinkaner die Dinge sehr pessimistisch betrachten lasst. Die entschiedenen Parteiganger der Republik dürfen sich aber durch den Ernst der Lage nicht von pessimisstischen Stimmungen übermannen lassen. Die drohenden Gefahren im Auge müssen sie rastlos für deren

nichts, das Gesetz so zu formuliren, dass bei der Bemessung des Anteils der Republik auf die Leistungsfähigkeit der Unternehmung Rücksicht genommen wird.

Aber ein grosses Stuck Sozialisirung wäre mit ihm vollzogen. Der Ruf nach Sozialisirung in der deutschen Arbeiterwelt ist sehr stark, auf allen Seiten herrscht Unzufriedenheit, dass die bei Verkündung der Republik versprochene Politik der Sozialisirung nicht Wahrheit werden will. Unzweifelhaft hatte auch in dieser Hinsicht schon mehr geschehen können, als geschehen ist. Aber die Unsicherheit der Verhältnisse und die weit gehenen Meinungsverschiedenheiten über das Wo und Wie des Beginnens haben es bisher zu keiner mutigen Tat kommen lassen, und auf viele wirken die Ergebnisse des russischen Experiments abschreckend. Nun ist aber das Werk des Sozialisirens, worunter die Unwandlung von Privatokönomie in Gesellschaftsökonomie verstanden wird, nicht an ein Schema gebunden. Für die Allgemeinheit ist es im Resultat gleichgültig, ob irgend eine einzelne Industrie völlig in ihre Hand kommt oder ihr ein erhebliches Anteil an der Gesammtindustrie des Landes zufällt. Fiskalisch ist der Gewinn für sie nur um so grösser und vor allem auch sicherer. Allerdings fäll ihr nicht die Leitung zu. Aber sie erhält doch als Teilhaberin ein erhebliches Recht der Kontrolle sowie Möglichkeiten des Einspruchs gegen unsoziales Wirtschaften und dem Gemeinwohl schädliche Veräusserungen.

Indes das ist es grade, was die bürgerlichen Parteien ganz besonders gegen den Gedanken einnimmt. Man braucht ihnen nicht zu unterstellen, dass sie dabei sammt und sonders von bösen Beweggründen geleitet werden. Aber ihr ganzes Denken sträubt sich gegen stärkere Einmischung in die Privatunternehmungen als sie die soziale Gesetzgebung und das Strafgesetz versehen, und sie sehen in der Beanspruchung eines Teils des Ertrags der Unternahmungen für die Allgemeinheit einen ersten Schritt auf einer Bahn auf der es bis zur

die errechneten Erträge bringen werden, und in der Arbeiterwelt ist man nicht gesonnen, es hier auf die blosse Möglichkeit ankommen zu lassen. Die beiden sozialdemokratischen Parteien fordern einmütig die fiskalische Erfassung der Realwerte, vielfach auch Goldwerte genannt, für die Deckung der Gelebedürfnisse der Republik. Die Republik soll mit einem bestimmten Prozentsatz—20 oder 25 Prozent - zum Mitbesitzer aller Kapitalistischen Unternehmungen in Stadt und Land erklärt werden und in diesem Verhältnis an deren Erträgen teilhaben. Eine Massname, die in mancher Hinsicht auf die Bezeichnung als revolutionar Anspruch haben würde und gegen die sich daher in allen bürgerlichen Partein starker Widerspruch erhebt. Es ist aber nicht anzunehmen, dass die Sozialdemokraten auf sie Verzicht leisten werden. Sie sind entschlossen, keine Steuern auf den Verbrauch zu bewilligen, wenn nicht energisch an die Realwerte herangetreten wird. Und wenn zugegeben werden kann, dass die Durchführung des Gedankens manche Schwierigkeiten machen wird, so ist doch gar nicht abzusehen, wie die Republik auf andre Weise aus dem Finanzelend herauskommen soll.

Gegenüber der Zuflucht zur Erhöhung der Besitzeteuern der bisherigen Art, für die es ja eine Grenze giebt, jenseits der sie im bürgerlichen Staat versagen, bietet die von den sozialdemokraten gefordarte Massname unter anderem den Vorteil, dass bei ihr keiner Unternehming das Betriebskapital entzogen oder auch nur verkürzt wird. Das Kapital bleibt im Unternehmen, die Geschaftsleitung, ob Einzelunternehmer oder Gesellschaft, kann unbekümmert mit ihr weiter arbeiten, es tritt nur ein neuer Teilnehmer mit Anspruch auf einen Teil des Gewinns ein, wie das im Bürgerlichen Leben auch sonst heufig genug geschieht, ohne dass dadurch die werbende Eigenschaft des Unternehmene irgendwie beeinträchtigt wird. Der ökonomische Antrieb, auf den die bürgerliche Oekonomie soviel Wert legt, bleibt ungeschwächt erhalten, erhalt sogar eher noch eine Steigerung. Es verbietet auch

Steuermoral, die schon im Kriegs schwer gelitten hatte, wird immer mehr untergraben, und zwar sind es jetzt die Reaktionäre, die ihr Moglichstes dazu beitragen, sie zu erschuttern. Sie geben das Schlagwort herum, dass man der „Judenrepublik," wie sie die demokratische Republik nennen, nicht die Gewissenhaftigkeit schulde, auf die das Kaiserreich Anspruch hatte. Und so etwas lasssen sich manche Leute gern sagen. Ausserdem giebt es Agenten, die gradezu Unterricht darin erteilen, wie man falsche Vermögens Angaben so macht, dass sie nicht auffallen.

So laufen gerade die Steuern auf den Besitz langsam und nicht un dem gebotenen Umfange ein. Inswischen brauchen Reich, Staaten und Gemeindenn Geld, um die wachsenden Ausguben bestreiten zu konnen und so muss immer von Neuem dazh geschritten werden, neues Papiergeld zu drucken, was einen neuen Rückgang in dessen Kaufkraft, Valuta genannt, zur Folge hat, und alle Geldeinkommen: Lohne, Gehalter, Ruhegelder usw. entwertet. Das ruft neus Bewegungen zur Erhöhung der Lohne usw hervor, schafft beständig Konflikte zwischen Arbeitern und Angestellten einerseits und Unternehmern wie Behörden andererseits, welche die Geister erhitzen und die Gemüter verbittern.

Wie soll dieses Drehen im Kreise enden? Der Umlauf an Reichspapiergeld hat die Hohe von über achtzig Millianden Mark erreicht, von denen noch nicht der fünfzigste Teil durch Gold gedeckt ist, und dazu kommen noch milliarden ungedechte Schatzscheine. Dem soll eine Grenze gesetzt werden.

Die Regierung hat für dio Deckung der neuen Lasten in den Haushalten eine Reihe neuer Steuerentwurfe ausgearbeitet, die zu annähernd gleichen Teilen den Verbrauch sammt Verkehr und den Besitz belasten sollen. Aber die Erfahrungen, die man mit den bisherigen Besitzsteuern gemacht hat, lassen es als sehr zweifelhaft erscheinen, ob sie, da sie sich grundsätzlich von jenen nicht unterscheiden,

gehenden Vollmachten, die im kaiserlichen Deutschland der ähnlich zusammengesetzte Bundesrat hatte, aber er bildet doch eine Instanz, die sich dem Reichstag und der von diesem gewahlten Regierung unter gewissen Umständen hemmend oder mindestens aufhaltend entgegenstellen kann. In dem Streit zwischen der Reichsregierung und der Regierung Bayerns hat er in einem wesentlichen Punkt dieser zugestimmt und dadurch die Aktionskraft der Republik gegen die reaktionären Hetzer gelähmt.

Alles das hatte indes keine sonderliche Bedeutung, wenn die Republik nicht zugleich mit so schweren Sorgen belastet wäre, die auf wirtschaftlich sozialem Gebiet liegen.

Man weisss, wie schlimm es um die deutschen Finanzen bestellt ist. Das Reich, die Staaten und die ortlichen Verwaltungen haben in ihren Haushalten gewältige Fehlbeträge und wissen nicht, wie sie sie decken sollen. Man hat den Verbrauch und den geschäftlichen Verkehr mit drückenden Steuern belegt, die Erträge abwerfen, welche früher für unerhört galtan, heute aber doch nur einen Bruchteil des noch unerhörteren Geldbedarfs decken. Es fehlt auch nicht an Steuern auf Einkommen, Extragewinne, Vermögen und Vermögenzuwachs, die alles frühere weit übersteigen aber sie gehen nicht in dem Masse ein als nötig. Der so feige ermordete abgeordnete Erzberger, der diese Steuern seinerzeit in der Nationalversammlung eingebracht und durchgefochten hatte, hatte sich nicht begnügt, die Steuersatze auf Einkomen usw zu erhohen, sondern hat auch in sinem objektiv berechtigtem Reformeifer, um Steuerbetrug zu erschweren, die ganze Berechnungesweise abgeändert. Das jedoch zur Folge gehabt, dass die Beamten in den Steuerämtern die Arbeit der Veranlagung der Steuer nur sehr langsam bewaltigen und dass die Zwischenzeit von vielen Spekulanten, die im Krieg und nach dem Krieg reich geworden sind, dazu benutzt wird, möglichst viel von dem Gewonnenen ins Ausland zu bringen. Die

und deren Presse, die sich in hetzerischen und verläumderischen Angriffen auf die Reichsregierung der Republik überbietet und das feige Mordattentat, dem der katholisch demokratishe Minister Erzberger zum opfer gefallen ist, in einer Weise verherrlicht hat, die einer Aufforderung zu weiteren solchen Attentaten gleichkommt. Der Aufforderung der Reichsregierung, die von dieser gegen die Hetzpresse getroffenen Verfügungen zur Ausführung zu bringen und den langst gegenstandalos gewordenen Ausnahmezustand aufzuheben, setzt sie unter Berufung auf ihre Landeshoheit einen verstockten Widerstand entgegen und lasst durch ihre Presse die Beschuldigung gegen sie erheben, sie gefährde, „die Einheit des Reiches.“ Dabei ist Bayern, bezw. die Provinz Oberbayern, in der die Hauptstadt Munchen liegt, der Sammelpunkt der Todfeinde der Republik geworden und der Schauplatz von allerhand Demonstrationen für Wiederherstellung der Monarchie sowie einer wüsten Judenhetze. Es ist nun freilich, nich tauzunehmen, dass die bayerische Regierung diese Sache auf's Aeusserste treiben wird. Denn in andern Teilen dieses staates, insbesondere in industriellen Franken (Nordbayern) mit seiner Hauptstadt Nürnberg, steht die Masse der Bevölkerung diesem Treiben feindlich gegenüber, so dass ein offener Bruch mit der Reichsregierung eher zur Spaltung Bayerns als des Reichs führen würde. Sie wird daher unter irgend einer Form, bei der sie ihr Gesicht wahrt, schliesslich in einigen Punkten nachgeben, sich aber grundsätzlich ihre Rechte vorbehalten. Das heisst, das Recht, aus den zu ihr stehenen Distrikten Bayerns gegebenenfalls ein Vendee zu machen. Und was heute in Bayern geschieht, kann eines Tages unter andern Verhältnissen in irgend einem andern Einzelstaate vor sich gehen.

Neben dem Reichstag, der das direkt gewahlte Parlement der Republik darstellt, hat diese noch einen aus Abgesandten der Regierungen der Einzelstaaten zusemmengesetzten Reicharat. Er hat nicht die weit

aber hat eine Regierung aus mehr nach rechts gerichteften Zentrumsleuten und Demokraten ohne die Sozialdemokratie und mit einen ebenfalls der Zentrumspartei zugehörenden Ministerpräsidenten, dem Arbeiterabgeordneten Adam Stegerwald, an der Spitze, sine sogenannte Politk der Mitte betreibt. Er hält zwar der Sozialdemokratie den Eintritt in die Regiersug offen, knüpft, aber die Bedingung daran, dass sie zur Hereinnahme von Mitgliedern der sich deutsche Volkspartei nennenden Partei des deutschen besitzenden Bürgertums in die Regierung ihre Zustimmung giebt, obwohl diese Partei sich bisher noch nicht dazu verstanden hat, ein vorbehaltlosses Bekenntniss zur Republik abzugeben. Die Fraktion der Mehrheitssozialisten des preussischen Landtags hat es jedoch schroff abgelehnt, ohne ein solches Bekenntniss der Volkspartei sich an einer Regierungs koalition mit ihr zu beteiligen, und dies hat zur folge gehabt, dass zwischen ihr und dem Kabinet Stegerwald ein starke Gegnerschaft besteht. So dass also Mitglieder ein und derselben sozialdemokratischen Partei im Reich Regierungspartei, im grössten Staat des Reichas aber Oppositions partei sind. Es wird jetzt eifrig daran gearbeitet, desen Widerspruch auf irgend eine Weise aus der Welt zu schaffen. Aber dass er sich äberhaupt einstellen konnte, lasst erkennen, zu welchen argen Unzuträglichkeiten die Fortdauer der Einzelstaaterei sines Tages fuhren kann.

Deutlicher noch beleuchtet dies es der Streit, der im Augenblick zwischen der Reichsregierung und der Regierung des zweitgrössten deutschen Staates, Bayern, spielt. Bayern hat eine Koalitionaregierung der bürgerlichen Parteien, in der neben der oben geschilderten Volkspartei auch die ausgesprochen monarchistisch gesinnte deutschnationale Volkspartei vertreten ist. Sie hält den Sozialisten gegenüber den seinerzeit gegen die aufständischen Kommunisten verhängten Ausnahmezustand aufrecht, der sie der Ueberwachung durch die Polizei unterstellt. hält aber ihre Hand schutzend über die Reaktionsparteien

vorurteile in die Gegenwart verpflanzt hatte, sollte einer organischen Gliederung der Republik auf der Grundlage moglichst gleich grosser, nach den wirtschaftlichen und kulturellen Bedürfnissen der Gegenwart abgegrenzter Provinzen und Bezirke Platz machen. So dass also z.B. Preussen, das nahezu drei Fünftel des Bodens und der Bevölkerung Deutschlands umfasst, wirklich in Deutschland aufgegangen wäre und aufgehort hätte, ein Drohgespenst für kleinere Staaten und den westlichen Nachbar, d.h. Frankreichs, zu bilden. Ebenso hatten die grösseren Kleinstaaten, wie namentlich Bayern aufgehört, als politische Sondergebiete fortzubestehen.

Der Gedanke scheiterte hauptsachlich am Widerspruch der bürgerlichen Parteien der Regierungskoalition, die befurchteten, dass der Versuch seiner Durchführung, in breiten Volkskreisen, die an ihren sodestaatlichen Einrichtungen hingen reaktionäre Protestbewegungen hervorrufen würde, und in der Tat wäre er ohne ernsthafte Schwierigkeiten nur zu verwirklichen gewesen, wenn die Geistesströmung, welche sich des deutschen Volks in den Revolutionstagen vom 1918 bemächtigt hatte, in ungebrochener Kraft noch weit in das Jahr 1919 forterhalten worden wäre. Welcher Schade es aber für die Republkist, dass er nicht durchgefuhrt werden konnte, zeigt sich grade im gegenwärtigen Augenblick in vollster Deutlichkeit.

Infolge von Vorgangen, die zu schildern hier nicht der Raum ist, hat heute der Einzelstaat—jetzt land genannt–, Preussen eine wesentlich anders zudammengesetzte Regierung als das Reich Deutschland. Die Regierung des Letztern besteht aus demokratisch gesinnten Mitgliedern des Tentrums, der Deutschdemokraten und der Mehrheitssozialisten und hat an der Spitze den zur demokratischen Linken der Zentrumspartei gehörigen, Dr. Wirth. Ihre entschieden republikanisch demokratischer Charakter ist so ausser zeweifel, dass selbst die unabhängige Sozialdemokratie auf die Oppositionsstellung ihr gegenüber verzichtet. Preussen

den am 19 Januar 1919 erfolgenden Wahlen zur verfassunggebenden Nationalversammlung die Sozialisten in der Minderheit blieben. Von insgesammt 30,4 millionen abgegebener Stimmen fielen nur 13,8 Millionen auf sozialistische Kandidaten, 16,6 Millionen dagegen auf die Kandidaten bürgerlicher Parteien. Die für Sozialisten abgegebenen Stimmen fielen zu mehr als vier Fünfteln, nämlich 11,5 Millionen, den Mehrheitssozialisten zu, die Unabhängigen Sozialisten hatten nur 2,3 Millionen Stimmen erhalten und die Kommunisten waren dem Wahlkampfern geblieben. Im Angesicht dieses Wahlergebnisses hielten die Mehrheitssozialisten als Gegner jeder Diktatur einer Minderheit as für unumgänglich, die bürgerlichen Parteien, die sich unzeideutig auf den Boden der Republik gestellt hatten, bei der nun notwendig gewordenen Bildung einer parlamentarischen Regierung mit heranzuziehen. Ebenso luden sie die unabhängigen Sozialdemokraten sum Eintritt in die Regierung ein. Diese lehnten aber jede Beteiligung an einer Koalition mit bürgerlichen Parteien schroff ab, so dass nur eine Regierung aus Mehrheitssozialisten, Deutschdemokraten und Zentrumspartei (Katholiken) zustande kam, in der die Mehrheitssozialisten zwar die stärkste Partei waren, aber doch nicht mit jener Autorität auftreten konnten, die einer geeint vorgehenden Sozialdemokratie zugefallen wäre. Insbesondere hatte sie bei der Ausarbeitung der Verfassung der Republik den Interessen und Vorteilen der bürgerlichen Parteien Zugestandnisse zu machen, deren Wirkungen sich heute der Republik sehr unangenehm kundgeben.

Das Streben der Sozialdemokratie war gewesen, Deutschland, das vor der Revolution ein aus überwiegend monarchisch regierten Einzelstaten von sehr verschiedener Grosse zusammengesetzter Bundesstaat mit dem Konig Preussens als Kaiser an der Spitze gewesen war, in eine demokratische Einheitsrepublik umzugestalten. Die Einzelstaaterei, die den endlosen Handeln von Feudalherren und Dynastiegründern des Mittelalters entstammte und neben andern Uebeln überlebte Stammes-

Wie man weiss, hat es jedoch nicht an Versuchen gefehlt, die deutsche Revolution auf die Bahnen der russischen zu lenken. Von der bolschewistischen Regierung Russlands inspirirte und mit reichen Geldmitteln ausgestatte Elemente haben unter der Führung von agitatorisch und organisatorisch begabten Persönlichkeiten (Karl Liebknecht, Rosa Luxenburg usw) grossen Eifer daran gesetzt, in Deutschland die Proklamirung der Sowietrepublik zu erwirken. Die Abwehr dieser Versuche bildet eins der trübsten Kapitel der deutschen Revolution-trüb nicht nur wegen der vielen Menschenopfer, die dabei gebracht wurden, sondern trüb auch wegen der durch sie verursachte Schwächung der Revolution geganüber den Vertretern des Alten. Es ist eine immer wieder gemachte Erfahrung, dass jede Gemeinschaft in dem Grade an ihrer Arbeits-und Kampffähigkeit nach aussen Schade leidet als sie ernsthafte Konflikte im Innern durchzukämpfen hat.

Die Leitung der deutschen Republik hatte in den ersten sieben Wochen nach ihrer Proklamirung in den Händen eines zu gleichen Teilen aus ausführenden Mitgliedern der alten Sozialdemokratischen Partei Deutschlands, Partei der Mehrheitssozialisten-und Mitgliedern der Unabhängigen Sozialdemokratie Deutschlands bestehenden Rats der Volksbeauftragten gelegen, der sein Mandat vom Zentralrat der deutschen Arbeiterräte erhielt. Am 27 Dezember 1918 traten die Vertreter der Unabhängigen Sozialdemokratie infolge von Meinungsverschiedenheiten zwischen ihnen und dem damaligen Zentralrat über die Verwendung von Militär gegen Aufständische aus dem Rat der Volksbeauftragten aus, der nun ausschliesslich aus Mitgliedern der Partei der Mehrheitssozialisten bestand, und, ausser mit der sich in heftigen Feindseligkeiten äussernden Gegnerschaft der sich Kommunisten nennenden Anhänger der bolschewistischen Doktrin, mit der zum Teil auch sehr zugespitzten Opposition der Unabhängigen Sozialisten zu kämpfen hatte. Diese gegenseitige Bekämpfung der Sozialisten untereinander hatte zur Wirkung, dass bei

noch überwiegend Agrarland ist und nur in einer Minderheit von Orten moderne Industrie hat, kann das Wahlrecht den Arbeitern die Möglichkeit bieten, durch seine geschickte Ausnützung einige Verbesserungen zu erkämpfen, aber an ihrer sozialen Abhängigkeit kann es wenig ändern. Ganz anders in einem land mit überwiegender, hochentwickelter Industrie.

Wie am Bestand der Republik ist die Arbeiterklasse Deutschlands daher in hohem Grade interessirt am Gedeihen und Fortschritt der Industrie. Die scharfe Kritik, die Marx an dem Treiben des Kapitals in der Industrie geübt hat, hat Sozialisten, die seine Werke nur aus Popularisirungen kennen, zu ganz widersinnigen Bannflüchen, wenn man erklärte: „Das Kapital ist der Todfeind der Arbeiterklasse." Das ist aber ganz unmarxistisch gesprochen. Viel weniger falsch wäre es, das Umgekehrte zu sagen, denn grade nach Marx ist das Kapital ein wichtiger Hebel der Befreiung der Arbeiterklasse. Marx hat das niemals verhehlt. Das Kommunistische Manifest von Marx und Engels beginnt mit einer Glorifizirung des revolutionären Werks der kapitalistischen Bourgeoisie, und in seinem Riesenwerk, „Das Kapital" scheut sich Marx nicht, im dritten Band die Gestalt, welche die Mehrarbeit des Arbeiters in der kapitalistischen Produktion erhalt, in Hinblick auf die Möglichkeiten, die mit ihr für eine höhere Gesellschaftsordnung gegeben sind, als eine (!) der Zivilisatorischen Seiten des Kapitals zu kennzeichnen.

Es konnte daher nichts törichter sein als durch zersetzend wirkende willkürliche Eingriffe in das Wirtschaftsgetriebe dieses in vollige Unordnung zu bringen und dadurch, wie das in Sowietrussland geschehen ist, seine Rückbildung zu vorkapitalistischen Formen herbeizuführen. Da deutschlands Landwirtschaft langst nicht mehr dessen Bedarf an Nahrungsmitteln deckte, waren die Wirkungen der Zerrüttung seiner Industrie für das deutsche Volk noch viel verheerende gewesen als sie auf diesem gebiet das russische Volk erleben musste.

Die Republik ist also keineswegs über alle Zufälle hinaus sicher gestellt. Ihre Erhaltung ist aber für Deutschlands aussenpolitische Lage von grösster Wichtigkeit und für Deutschlands Arbeiterklasse ein politisches und wirtschaftliches Interesse erster Ordnung.

Die Frage Republik oder Monarchie ist namlich in Deutschland nicht nur eine Frage der Regierungsform. Sie birgt hier einen sehr realen politischen Inhalt. Diejenigen, die in Deutschland die Wiederherstellung der Monarchie erstreben, erstreben sie erstens als ein Mittel der Vorbereitung irgend welcher Revanche an den Westmachten und zweitens als ein Mittel zur Niederhaltung der Arbeiter. Nicht nur in den Augen der Grosskapitalisten, sondern such in denen weiter Kreise der mittleren und kleinen Unternehmer in Staat und Land haben die Arbeiter in der Republik zuviel Rechte und zuviel Freiheit.

In der Tat hat die Republik die Rechtsteilung der Arbeiter sehr bedeutend erhöht. Sie hat alle Wahlprivilegien beseitigt. Bei den Wahlen zu allen politischen und administrativen Vertretungskörpern herrscht das unbeschränkte gleiche Wahlrecht, aller über 20 Jahr alten männlichen und weiblichen Personen, so dass die Stimme der Arbeiter überall in Gesetzgebung und Verwaltung schwer ins Gewicht fällt und oft die Mehrheit bildet. Das setzt sich freilich nicht sofort in soziale Herrschaft und grosse wirtschaftliche Verbesserung um. Bei bedrängter Wirtschaftslage giebt es nichts, was dem Arbeiter ohne Weiteres grösseren Wohlstand verschafft. Aber das gleiche politische Recht sichert ihm die Erlangung jeder möglichen Verbesserung, hebt sein soziales Ansehen und gewahrt ihm einen Schutz gegen den Druck der Konjunkturen, wie er ihn nie zuvor genoss.

In diesem Punkt hat Ferdinand Lassalle Recht behalten, wenn er den deutschen Arbeitern das gleiche Wahlrecht als die Grundbedingung ihrer sozialen Befreiung anpries. Nur kann es sich als das nicht unter allen Umständen bewähren. In einem bürokratisch regierten Land, das

Frankreich der Mitte des vorigen Jahrhunderts, ausgeschlossen. Bei den Wahlen wom Juni 1920 zum deutschen Reichstag wurden von im ganzen 26 millionen Abstimmenden Stimmen abgegeben :

a) fur entschiden republikanischen Kandidaten (die Sozialisten aller Richtungen) — 11 Millionen

b) für bürgerliche Parteigänger der Republik (Zentrumspartei und Demokraten) — 6 „

c) für zwischen Monarchie und Republik schwank-ende Parteien (Volksparteiler) — 5 „

d) für erklärt monarchistische Parteien (Dsutschnationale)

Danach waren die Parteigänger der Republik in der grossen Mehrheit. Und trotz der schlimmen Lage, in der diese sich befindet, würde, wenn morgen aus irgend einem Grunde Neuwahlen nötig werden sollten, das Stimmenverhältniss von Anhängern und Gegnern der Republ k sich schwerlich wesentlich anders stellen.

Indes darf man sich den Wert der Stimmabgabe für Parlamentskandidaten mit Bezug auf die vorliegende Frage nicht übertreiben. Als absolut zuverläs sige Kämpfer der Republik sind nur die Wähler der sozialistischen Parteien zu betrachten. Die beiden bürgerlich-republikanischen Parteien sind Vernunftrepublikaner; sie haben die Republik akzeptirt, weil sie sie für deutschland in seiner gegenwärtigen Lage unumgänglich halten, sie sind aber ihrer Wahler nicht so sicher wie die Sozialdemokraten der ihren, sondern müssen gewartigen, dass, wenn sich eines Tages die Gegensätze zuspitzen, ein grosser Teil ihrer Wahler ihnen davon und ins Lager der Monarchisten läuft. Letzteres würden die 5 Millionen Wahler der Volksparteiler ziemlien ausnahmslos tun, wenn die Wiederherstellung der Monarchie sich als praktizirbar erweist. Und sie wurden die 4 Millionen Wahler der Deutschnationalen mit Jubel an diesem Werke sehen.

misses von Sozialdemokraten und bürgerlich-progressistischen Parteien ist die am 11 August 1919 verkündete Verfassung der deutschen Republik vom sozialdemokratischen Gesichtspunkt aus nicht fehlerfrei. Aber sie kann doch Anspruch darauf erheben, in allgemeinpolitischer wie in sozialpolitischer Hinsicht fortschrittlicheren Grundsätzen ausdruck zu geben, als die Verfassung irgend eines andern grossen Staatswesens die verkuüdet. Wenn es aber verhaltnissmässig leicht fiel, die monarchistische Verfassung durch ein republikanische zu ersetzen, so ist es eine ungleich schwerere Aufgabe, diese leztere ünd ihr entsprechende Gesinnung dem Volk so einzuprägen, dass sie ihm sozusagen in Fleisch and Blut übergeht, von ihm als etwas empfunden wird, das nicht andere sein kann und darf.

Diese Aufgabe ist in Deutschland noch nicht gelöst, und wer da weiss, wie monarchistisch das deutsche Volk in seiner Mehrheit bis zu den Tagen des militarischen Zusmmenbruchs gesinnt war, den kann es nicht Wundernehmen, dass sie in den drei Jahren seit November 1918 nicht schon erfüllt ist. In manchen Punkten ist die Republik in Deutschland heute in ähnlicher Lage wie in Frankreich in den Jahren nach 1948. Anscheinend war diese in den Februartagen von 1848 von der Nation mit Begeisterung akzeptirt worden. Aber schon bei Präsidentenwahl vom 10 Dezember 1848 wählte Frankreich in direkter Volksabstimmung nicht einen der entschieden republikanischen Kandidaten sondern mit 5-1/2 von 5-1/2 Millionen Stimmen den sehr zweifelhaften Louis Bonaparte zum Präsidenten. Dann, nach dem dieser am 2 Dezember 1851 den Staatsstreich gemacht hatte, hiessen 7-1/2 von etwas über 8 Millionen Abstimmender diese Verstümmelung der Republik gut, und am 7 November 1852 forderten ihn 7, 8 Millionen Stimmberichtigter gegen noch nicht eine viertelmillion Neinsager auf, das Kaiserreich wiederherzustellen. Ein gleiches Stimmenverhältniss ist im heutigen Deutschland, das wirtschaftlich sehr viel höher entwickelt ist, als das

DIE POLITISCHEN UND SOZIALEN PROBLEME DER DEUTSCHEN REPUBLIK

von Eduard Bernstein.

Die Republik Deutschland ist unter Umstanden ins Leben getreten, wie sie schwieriger wohl kein Staatswesen bei seiner Geburt vor sich sah. Das Land stand am Ende eines Krieges, der über vier Jahre gedauert, als anderthalb Millionen im kraftigsten Alter stehender Männer den Tod im Felde, vier Millionen Vorwundung und Krankheisskeime zugezogen, die Finanzen des Reichs zerrüttet, Staaten und Gemeinden mit noch gar nicht absehbaren Verpflichtungen an die Kriegsteilnehmer, die Invaliden, die Witwen und Waisen der Gefallenen und die sonstigen Kriegsbeschädigten belastet, die Industrie in falsche Bahnen gedrängt und die Erträge der Landwirtschaft durch Erschöpfung des Bodens um mehr als ein Drittel verringert hatte. Dazu sah es sich zum Teil noch sehr erbitterten Siegersstaaten unterworfen und musste auf die Abtrennung wichtiger Gebietsteile sowie die Belastung mit erdrückenden Zahlungsverpflichtungen fur die angerichteten Kriegsschaden vorbereitet sein. Ein furchtbares Erbe hatte das Kaisertum seiner Nachfolgerin hinterlassen. So niederschmetternd war der Eindruck auf die Bevölkerung, dass die bürgerlichen Klassen fast erleichtert waren und jedenfalls keinen Versuch eines Widerstands machten, als in den Novembertagen 1918 die Sozialdemokratie das der kaiserlichen Regierung entgleitende Staatsruder in die Hand nahm.

Ihren politischen Grundsätzen gemäss verkundete die Partei der Arbeiterklasse die Republik im Reich und den Einzelstaaten und gab ihnen alsdann im Verein mit den bürgerlich demokratischen Parteien eine demokratisch-republikanische Verfassung. Das Werk eines Kompro-

out of which it arises. It follows that, as the political system is born of the economic conditions, change in it will be born of change in these conditions. Political systems register the changing class distribution of economic power. And, as any particular political system is constructed to fit the needs of the underlying economic system, it is most unlikely, if not impossible, that it will also fit the needs of a different economic system arising to supersede that to which it corresponds. It would be an extraordinary thing if the existing parliamentary machine in Great Britain could be made the effective instrument of the change to Socialism. There is, indeed, every sign that it cannot; for all its assumptions are the very assumptions which it is the mission of Socialism to destroy.

Probably, therefore, the rising economic power of the workers will give birth, when its time comes, to a new political system corresponding to the new economic basis; but meanwhile it is certainly necessary to put the existing political machine to every use of which it is capable in the workers' interests. This, however, will be done only by those who recognise that they are using an alien instrument, devised for purposes which are not theirs, and indeed to a great extent directly for the thwarting of their purposes. They will use it; but they will be conscious that the real source of their influence lies, not in their voting successes in the political sphere, but in the organisations which the working-class has itself created for the fulfilment of its own needs, and in the success of these organisations in rendering themselves capable of assuming the positive responsibilities of social direction. The effective conquest of political power thus appears, not as the "palace revolution" of a triumphant electoral campaign or an insurrectionary success, but as the result of a positive replacement of capitalist tissue by working-class tissue in every member of the body social. That is what "workers' control" involves, and that is the significance of the Guild Socialist saying that "Economic power preceds political power."

it into immediate demands, the workers set out to organise for the realisation of these demands. Even if the demands were refused, and concessions cannot for the time be enforced, the creation by the workers of an organisation definitely created for the assumption of economic power is itself a gain in economic power. To be armed with an organisation capable of assuming and exercising authority is to be well advanced on the road to the actual conquest of authority. It is not the extent to which the working-class actually replaces capitalism, but the extent to which it makes itself capable of replacing capitalism and of carrying on the productive work of Society without capitalist direction, that mainly determines the workers' economic power.

The key, then, to the conquest of social power lies in the preparedness of the working-class, not so much for the overthrow of capitalism, as for the conduct of industry and Society on a system free from capitalist control. The political, as well as the industrial prospects of Labour depend on its preparedness in this sense. Its capacity for revolution depends equally upon this. The lesson which above all the workers have to learn is that they cannot have more in than they are prepared to assume in responsibility. I say this, not because I want working-class demands to be restricted, but because I want the implications of those demands to be fully realised by the workers themselves. Power is no power unless it can be exercised, and it is useless to seize the shadow of political authority without seizing also the substance of economic authority.

This is no diatribe against political action by the workers. It is rather an appeal for a proper co-ordination of political and economic forces. It is an insistence that such a co-ordination must be based on a right understanding of the operative relations between political and economic power. In all forms of Society based on class divisions, the political system is, in its essence, an expression of the economic system,

who cannot yet be made to surrender control over them. The building industry was peculiarly favourable to the Guild experiment because it is the one great industry in which the element of fixed capital is unimportant. It is in other cases in which a start can be made almost without capital that further immediate Guild experiments are to be anticipated.

This, however, is far from meaning that there is no lesson to be learnt, or actually being learnt, from the Building Guild by the workers in other industries in which immediate Guild experiments are hardly possible. The lesson is no less important, though it may be less directly obvious. Because of the less developed control of capitalism over building and certain other industries than over mines, railways, iron and steel and other basic industries and services, it has been possible for the building workers, and certain other groups, to make a direct leap from capitalist organisation to the self governing Guild control. The aspiration for workers' control has been able to find direct and complete expression. Where this is not the case, it is necessary to look for an alternative policy, directed to the same end of replacing capitalism by democratic control. The demands for "workshop control," for the assumption by the workers of power over discipline and dismissals, for the democratic choice of foremen and supervisors, for the "collective contract" long advocated by the Guild Socialists—all these are attempts to gain a foothold in control where the leap to industrial self-government cannot be directly made. They are attempts to wrest or transfer from the employing classes, and to place in the hands of the workers as an organised group, a portion of the "control of industry" which is recognised as vital to industrial power.

It is not only the actual winning of such concessions as these that possesses a "replacement" value. As soon as they clearly set the aspiration for self-government before their eyes, and attempt to shape

Capitalism by a mere multiplication and extension of self-governing Guilds. Indeed, they find the chief value of the Guilds which they are seeking to establish to-day less in the positive breaches which they make in the structure of capitalist industry than in the lesson of self-reliance which they are teaching to the organised workers. It is quite possible that the Building Guilds, and the other Guilds which are coming into existence, will go down before the superior weight of the capitalist forces opposed to them. Guildsmen clearly recognise that they are only at the beginning of their difficulties and that, in the last resort, capitalism can use against them the forces of boycott, supppressio nand financial control which it has not yet exercised. Every Guild may be destroyed; but the value of the lesson which the Guilds are teaching will not be destroyed by their overthrow. Of course, Guildsmen hope that they will be able to weather the onslaughts of capitalism, and to maintain and develop National Guilds in face of the growing opposition of vested interests. They recognise that such success will be more inspiring than even heroic defeat. But the experiments will have been immensely worth while, even if the forces arrayed against it prove in the long run too strong to be successfully resisted. It will have demonstrated both the possession by the workers of the capacity to run industry, and the fear and hatred which capitalism feels for that capacity.

Moreover, the influence of the Guild experiments will not be seen only in the creation of further Guilds: its greatest importance lies in its stimulation of a new point of view among Trade Unionists. There are many industries, including all those which are necessarily worked on the basis of a high fixed capital, in which it is clearly impossible at present to establish Guilds, or to attempt the direct replacement of capitalism by the creation of rival working-class productive organisations. It is impossible, for example, to start a National Mining Guild to-day because the mines belong, not to the miners, but to private persons,

are present, and are gaining strength even under the adverse conditions of to-day. The recent movements towards Guild organisation furnish notable instances of the constructive attempt to replace capitalist control by workers' control, even while the capitalist system remains in being. The formation, on the basis of the Trade Unions of building operatives, of the National Building Guild, with its hundred and more local organisations in all parts of the country, is the result of a deliberate effort by big bodies of workers, upon whom capitalism has pressed with more than its normal severity, to set about its replacement now, without waiting for some revolutionary "day," which may never come unless such constructive preparations as these are made for its advent. Already, the contagious effect of the building workers' example is being clearly seen. On a smaller scale, Guilds are already in existence in the Furnishing, Vehicle Building Railway, Agricultural and Horticultural Industries, and the movement is being eagerly taken up by groups of workers elsewhere.

I do not wish to be misunderstood upon this point. I do not believe that it will be possible to supersede capitalism merely by creating Guilds. The consumers' Co-operative Movement, during its eighty years of effective life, has had a great success, and has wrested an important sphere of industry from exclusively capitalist control. But no one any longer heeds those Co-operative theorists, who explain that, if only we persist and do more and more of our business at the Co-operative Store, the capitalist system will in time be superseded by the peaceful expansion of Co-operative trade. Such a supersession would require, not time, but eternity for its accomplishment; and even eternity would hardly render the Co-operative form of organisation suitable for the conduct of all forms of service.

Guild Socialists do not fall into the error which was made by the early Co-operators. They do not believe that they can in fact overthrow

ownership under a Labour Government would not necessarily mean workers' control; for it too is fully compatible with bureaucratic direction. The change which is essential to Socialism can only come about as the result of a change in the attitude and actual capacity of the workers themselves—a deliberate organisation by them of a new democratic system of control, a readiness on their part to assume the responsibilities as well as the rights of industrial direction.

Let me try to state this case rather more concretely. At present; the working class in most industries is only half organised for the purpose of defence against capitalism, and is not organised at all for the replacement of capitalism. The Trade Unions have learnt something of the technique of collective bargaining; but even in this restricted sphere it is generally recognised that their co-ordination and solidarity are still very defective. Sectional Unionism and inter-Union rivalries are still common, and attempts at combined action, such as those of the Triple Alliance of Miners, Railwaymen and Transport Workers have hitherto served mainly to reveal the weakness and lack of cohesion which extend throughout the whole movement, even in a country which has reached so high a degree of Trade Union organisation as Great Britain. Even for the purely reformist purposes of collective bargaining, Trade Unionism still leaves much to be desired.

The Trade Unions have, it is true, out of their experience of the present system, developed towards a conscious aspiration for its overthrow. To a limited extent, they have adopted a socialist attitude, and set before themselves the desire for a new social order. But hardly at all have they yet realised their own constructive task in this plan of social transformation. They have hardly set out to organise their forces for the assumption of control, or attempted to force the difficulties which "workers' control" involves.

This is not, indeed, universally true, and constructive tendencies

better than the institutions of capitalism the work of production which is so sadly bungled to-day.

This is, on the face of it, a far harder task than the politician sets to the citizen when he merely asks him to play his part in voting the Millenium into existence. But the politician, or the blood and thunder revolutionary, who believes that Socialism can be achieved by a few simple operations either with a ballot box or with a machine-gun, deceives himself, and the truth is not in him. There is a type of Communist fully as prone as the advocates of constitutional political action when he despises to make the mistake of supposing that Socialism can be achieved by putting a penny in the slot, and, either gently or violenty, turning the handle.

Let not, therefore, the fact disturb as that the Guild Socialist attitude to the coming change places far more arduous tasks upon the workers than either "bullet-box" or "machine-gun" Socialism. For the arduousness of the task certainly does not exceed the magnitude of the change which we have in contemplation. The character of that change is best indicated in the simple, but expressive phrase "Workers' Control." Any real establishment of Socialism involves the effective control by the workers, not merely of the political mechanism of Society, but of every essential part of the economic and social machine. It involves control of the factories as well as of the Government, it implies the organisation on a new democratic basis of every essential industry and service.

"Control," in this conception, bears a very definite meaning. It is not merely the form of social organisation that has to be changed, but the actual directing and administrative power. A mere change from private to public ownership might leave industry as little under the control of the workers as it is to-day: indeed, under some conditions, it might even make capitalist control more absolute. Even public

which the significance almost wholly escaped the mass of contemporary observers. Those who owned, or could get the use of, capital built factories; and the power which they derived from the control of these factories transformed the whole social system of Great Britain. It led, *inter alia*, to the Reform Act of 1832, by which the political power of capitalism was formally recognised; but not even a politician could mistake the Reform Act for the motive power behind the Industrial Revolution. It was steam power that transformed the social system; and it was by their control of steam power, and through steam power of the lives of men that the owners of capital mastered Society.

So, in essentials, it will be with the next great change. If the Labour Party, or for that matter the Communist Party, should attain to governmental authority before the economic conditions are ripe, they will speedily find that occupation of the seat of government does not necessarily carry with it even effective political power. On the other hand, if Labour's economic power waxes and is purposefully organised and directed to the supersession of capitalism, not merely governmental status, but exerciseable political power, will follow almost as a matter of course.

Labour's fundamental task, therefore, in Great Britain or in any other country, is not political, but economic and social organisation. Its main business is not to vote capitalism out of existence—the vote is merely a means of registering changes in the strength of conflicting wills—but to supersede capitalism by creating themselves an instrument for the reorganisation of Society on a non-capitalist basis. As the rising forces of capitalism swept out of existence the obsolete regulations and craft controls of industry which survived from the Middle Ages, and did so by creating their own more flexible and efficient instrument of production, so the working-class must create under capitalism the instruments of its own emancipation—organisations capable of perfmoring

even successfully inaugurated, seek to explain this by the inadequacy and failure of will among the parliamentary leaders of the movement. But in fact the weakness and inadequacy of the parliamentary leaders proceeds from the weakness and inadequacy of the parliamentary leaders proceeds from the weakness and inadequacy of the movement behind them, and is the result of the failure to conceive of the change to Socialism in the necessary terms of economic and social power. The leaders are vacillating because they are seeking to achieve an impossiblility to bring about a social and economic change by purely political means. They are being set to roof in the house before the foundations have been laid.

This is a simple, but, I think, an illuminating instance of the significance of the Guild Socialialists' saying. It throws light, because, once stated clearly, it cannot be denied. Political leaders may seek to explain their importance to make fundamental changes by referring to apathy or lack of education among the rank and file. But these are vague phrases, and merely serve to obscure the real issues. The rank and file are, if you will, ignorant and apathetic; but they are so mainly because their part in the task of social transformation has never been clearly conceived or adequately put to them. The politician cannot state it, because he does not see it: and even those who have glimpses of it fail ordinarily to relate their partial understanding of the problem to the whole situation with which they have to deal.

A revolution, in a sense which includes an important change in the character or structure of society, involves a radical redistribution of economic power and influence. " . . . . ," of course, do not involve this; but the contemptuous phrase used in describing such movements not merely imvolves-it-is-a radical transformation of economic power. The great change in Great Britain which we call the "Industrial Revolution" consisted in a rapid redistribution of economic power of

in them the potentiarity, not merely of stronger defensive action, but of the positive assumption of new powers in Society, of a wresting out of the hands of capitalism the controlling mechanism of the economic system, of a direct assumption of economic power and responsibility. "Out of the defensive and negotiating Trade Union will come the producing and controlling Guild."

Guild Socialists, then, always view the problem of social transformation as a matter primarily, not of political struggle, but of working-class training and development. This does not imply any hostility to political action, of any underrating of its importance. Many Guild Socialists are active in the working-class political movement. But it does imply that the political struggle is not the whole, or even the most essential struggle, and that those who so regard it room to sterility even their political efforts.

"Economic Power precedes political power." Let me, for a moment, illustrate the truth of the saying in the simplest possible way. I am writing in Great Britain, where the attainment of political power by a Labour Government in the near future is at least a possibility. But who supposes that this conquest of political power by the working-class movement would by itself ensure the coming of Socialism, or even of any fundamental change in the social system. The power of the Labour Government to carry through such changes, what ever its intentions and desires might be, would in fact be limited and conditioned by its effective extra-parliamentary backing. Not so much the size or coherence of its majority in Parliament as the degree of consciousness and preparedness to give support among the working masses throughout the country would determine its actual ability or inability to make any serious breach in the capitalist system.

Some Socialists, agreeing that the mere attainment of governmental authority by Labour would not enable the transition to Socialism to be

But it is a direct and illuminating application of that standpoint to the actual problems of Labour to-day; and by no means all who accept the economic conception of history have been alive to the implications brought out by the saying of the Guild Socialists.

"Economic power precedes political power." If this is so, it is useless to conceive of "revolution," or of any fundamental change in the social order, primarily in political terms. In the revolutions of the past, the outstanding event has doubtless been usually a change of Government, the substitution of one form of political authority for another. But, if the Guild Socialists are right, this outstanding event has never been of the essence of the revolution itself. It has been the result of a deeper revolution, the surface manifestation of powerful new forces at work. The change in political Government has not made the revolution: the underlying changes in the distribution of social power have rendered the old form of political Government obsolete, and so resulted in their supersession. Possibly, the revolutions could not have been carried through without the change in political Government; but that only means that the political change, followed as a matter of course upon the changed distribution of social forces, and not that, in any sense, it *caused* that re-distribution.

So, to-day, Guild Socialists contend that the supersession of Capitalism by socialism, while it will involve a profound change in the forms of political Government, will not be brought about by that change. The supersession will consist in a replacement of the capitalist tissue of present day Society by tissues created by the workers. It will come about through an atrophy of the productive functions of the capitalist forms of organisation, and by a progressive and purposeful development of working-class organisation. The associations and means of common action which the working-classes are developing under capitalism primarily for protection against capitalist abuses and oppressions, have

POWER, POLITICAL AND ECONOMIC

By C. D. H. Cole.

There is a saying, familiar among Guild Socialists from the very inception of their movement. It is that "economic power precedes political power." From its first appearance in the *New Age*, this saying has played an important part in Guild Socialist controversy. From time to time, there have been disputes about its exact meaning; but, however Guildsmen may have differed in the exact interpretation which they have placed upon the saying, its truth, in some important sense bearing directly upon policy, has not been disputed by them.

What, then, do Guild Socialists mean when they say that "economic power preceds political power?" It is possible, despite differences of interpretation, to give a coherent answer to this question; for the differences have in reality never affected the fundamental meaning. They have been disputes about the implications of the saying, rather than about its central significance. Guild Socialists, when they use the phrase in support of their common attitude, mean by it that the character of a social system depends fundamentally, not on it political institutions, but upon the economic forms by which political expressions are determined. They mean that, in order to alter a social system, it is necessary to alter, not so much its forms of political organisation and expression, as the underlying forms of economic structure and the distribution of economic power and competence in Society.

Perhaps it may be said that this is merely a way of restating the fundamental truth of the materialist conception of history. I should say rather that it is a fruitful development and application of that idea. Certainly, it is derived from and based upon the historical economics of Karl Marx, and is essentially congruent with the Marxian point of view.

文藝管見の前書

里見弴

本誌の主幹、山本實彦君から、何か聯續的な讀ものをと望まれて、私は一寸思案した後、自分の、文藝に對する管見を述べよう、と約束して了つたのは、去る九月の末頃だつた。これよりさき、私にはこんな考があつた、——自分で書き綴るほどの氣にもなれないが、どこかに、私のやうな若輩にも聽かうと云ふ團體があつて、聯續講演でも依頼されるやうな場合があつたら、出來るだけ秩序的に、ちつと大袈裟に云へば、私の「文學論」とでも云ふやうなものをまとめ上げて、話してみたい、そしてその速記に補正を加へた上、出版してもよい、と。私にこの考を抱かせるやうになつたもとはと云へば、あければ一昨年、即九年の歳尾（くれ）に、修善寺の新井旅館で、そこの主人から借りて讀んだ「華格人髓」だ。

一體われ／＼志を同じうしてゐる人々の間にも、その風格に於て、何んとなく、平作家（ひらさくか）と云ふ感じの人と、さうでない人とが區別される。平作家とは、（ただ作家だ、それよりほかの何者でもない）と云つた感じの人で、もう一つ詳しく云へば、どんなに有名にならうとも、どこの新聞社から聘せられるでもなければ、どこの學校から教授を依頼されるでもない、——作家として立つてゐるよりほかには、全くつぶしの利かない、と云つた感じの人を指すのだ。現存の、その感じの著しい作家を例するならば、徳田秋聲氏、正宗白鳥氏、泉鏡花氏、若いところでは久保田萬太郎氏などを擧げることが出來る。なかで久保田氏は、現在慶應義塾に教鞭を執つて居られるが、私の云ふのは、實際問題よりも、そ

の風格――一體の感じにあるのだ。この反對の感じの作家を云ふなら、故の夏目漱石氏とか、兄、有島武郎とか、若いところで芥川龍之助氏とかは、自分でさうあらうとさへ思へば、作家以外にも、十分立場のある人たちだ。ところで私は、と云へば、もとより非才ことにも堪へないのだが、自分では大に平作家のつもりでゐるのに、思ひもかけないことには、彼は文壇政治家だ、と云ふやうな蔭口を聞く。が、そんな他人の口はどうでもいゝとして、平作家を以て自ら居る私は、出來るだけ仕事のまぐちを狹めなければならない、と思ひながらも、賴まれるとついその氣になる輕薄な性分から、舞台監督だの、講演だのと、餘計な時間をつぶしてゐる次第だ。

「華椿尺牘」を讀んだ時にも、華山は云ふまでもなく當時の一大新智識で、恐らく「平作家」の感じとは正反對の頂點に立つてゐるやうな人物だが、その畫論の平明で、飽までも實感的なところは、全く平の畫家たる感じで、そして、その上に、藝術のことは、なんと云つても、直接その藝にたづさはつてゐる作家のみがよく說き得るのだ、と今更ながらつく〴〵感心させられたのだ。實際これまでは、自分の文學に對する考を まとめてみようなど〻は、夢にも思はなかつた私だが、――つまりそんなことは、批評家の側か、よし作家がやるとしても、あたまを組織的な働きに習慣づけてゐる人たちに任せて置けばいゝので、自分などの平作家には、試みたところで、とても出來さうもないこと〻思ひ込んでゐた私だが、これはさうでもないぞ、是非近いうちにまとめてみよう、と思ひだしたのだ。それにもう一つには、雜誌社から問題を與へられたり、或は時折々の感想を、あちこちの新聞雜誌に寄せたものが、散々ばら〳〵で、あまり不秩序で、自分ではそこに一脈の思想があるつもりだが、讀者にとつては、結局責任を重んじない放言に終つてゐるだらうことも惧れられた。その證據と云ふでもないが、私の感想文の殆ど總ては、思ひもかけない反感を買ひ、全く見當違ひの理解に立つた駁論に出遇つてゐる。そのたびに「もの云へば脣さむし」の感慨もないではなかつたが、さうかと云つ

て、一々それらに答へてゐる暇もないけれども、私の性分としては、やつぱり馬耳東風とすましこんでゐられないのだ。

これを要するに、私のやうな平作家は、默して、創作三昧に耽つてゐることが、一番本統かも知れないのだが、どこか、性根からの平作家でないところでもあるせいか、第一には自分のために、また、ごく小數ではあらうが、幾分ひとのお役にも立つ自信をもつて、これまで散々ばらばらに發表して來た私の文藝に對する考を、ひとまとめに仕上げて置かうと思ひ立つたわけである。ところが、前に云つたやうな、私に聽かうとする閑暇もなく、隨つて聯續講演の機會も來なかつたゝめに、一方にはさう云ふ企をもちながら、相變らず、片々たる感想文で、雜誌社との約束に、纔にその責をふさいで來たわけだ。實際私としては、いろいろな意味から、さう云ふ仕事が一番したくないのだが、關係してゐる人間社の社長に順つて、當分創作は「人間」以外の雜誌には載せないことになつてゐるので、——それならば全然ほかの雜誌からの依頼を謝してゐればいゝのだが、私の弱い性分からも、また經濟上からも、さうピタリとはきめられずに來たのだ。

さう云ふ際に、山本君からの依頼をうけたのだから、私は即座に決心して、來年正月から一ケ年に亘つて、「改造」の紙面を、私の怪げな文藝觀のために割いて貰ふ約束をして別れた。爾來二ケ月、私はこれまでに全く經驗のない、組織的な記述に用意するために、あれこれと、二三參考になりさうな本を考へたり、それらを讀んで置かうと思つたりしながら、引越のゴタクサや、初めての田舍住居に、すつかり心長閑になつて、ぶらぶらと暮してゐたために、たうたう正月號の締切が目の前に迫つて來て了つた。そこで、大慌てでかゝつてみると、解り切つたことだが、これまで時折々の感想を書いたのなどゝは、到底比べものにならないむづかしさだつた。あちらから筆をつけてみたり、こちらから書き起してみたり、決して嵩ばつたものでもない自分の考の周りを、徒らにドウドウ環りをしてゐるばかりで、どうして

いゝのかわけが解らなくなつて了つた。あせり氣味になつて、どうにでもやつつけやうとすると、一ヶ年はおろか、一と月分にも足らない、ほんの四五枚に片づいて了ひさうな氣もして來る。續いては、こんな仕事で苦しむのが、頭から馬鹿らしいことに感じられもする。私は幾度か人間社同人にかけ合つて、創作禁止の令を解いて貰はふと思つたか知れないが、折角思ひ立つて滿一ヶ年の間、多少ともそこに思ひを潜めて來た文藝觀の發表にも未練がないことはない。そこで勇氣を鼓して、またやりかける、そんなことで、だんだんに締切を延して貰つて、もう明日は五日と云ふ今夜に迫つて了つた。

今夜と云ふ今夜は、自分のしかけてゐるこの仕事のくだらなさで、私のあたまは一杯になつて來た……。私は思ふ。人は誰でも、何事によらず、自分のことは、實際にあたつて、自分のあたまで考へ、自分だけに處理して行くのが一番いゝのだ。例へば、地理を學びたいと思ふなら、初めて尋ねる人のうちでも探すやうに、東京なり、日本ぢうなり、世界ぢうなり、自分の足で歩き廻つてみるに越したことはない。それが暇つぶれで、實際には行ひ惜いと云ふところから——便利重寶を尊ぶ意味から、學校の教室で、居ながらにして全世界を説くのを聞くとか、本を讀むとかして間に合せておくのだ。だから、ろくになんにもわかりはしないのだ。藝術の修業などは、とりわけ自分一個の問題で、結局は日々の心がけ一つにあるのだ。はたからではどうしようもないことなのだ。——さう云ふ言葉が既に、自分自身のこれまでのやり方から割り出されてゐるのではないか。それだのにお前は、渡邊華山などとは、比べものにならない下根の生れで、おまけに、やつと十年やそこらの修業で得たほんの僅かばかりの經驗を、早くも人の前に説かうとするのか。お前は心が傲つてゐるのではないか。靜に考へ直してみろ……。

また私は思ふ。成程俺は、これまで何事も自分流儀でやつて來た。さう出來た境遇や運命を有難くも思ふが、そこに

いつの間にか、賴みや誇をもつてゐる。それが力でもあるが、そこにこそ、心の傲が宿つてゐないとは云へない。自分流儀でやつて來たと云ふじよう、——人は誰でも、どんなに自分流儀でやつて來たと云つても、背には何千年來の歴史を背負ひ、右ひだりには、世界人類の誰とも手をつないで生きてゐるのだ。衆生恩と云ふ言葉を聽いたことがある。坊さん達はそれをどう云ふものに說いてゐるか知らないが、俺がその言葉に感じられる氣持は、そのまゝ右ひだりに繫がる手の感じで、同時に、背に背負つてゐるものゝ感じは、これは俺の造語だが過去恩だ。過去、衆生の二恩を、實感に感じては、己の下根も、貧弱も忘れて、ものを云ふ氣になることがあるのだ。決して心傲つてではない。心ある人から見れば、それは可笑しくもあらう、哀でもあらう。が、微笑をもつて迎へられこそすれ、決して眉をひそめられるたちのものでない。看る目、嗅ぐ鼻、聽く耳のほかに、云ふ口が與へられてゐる。看せて貰ひ、嗅がせて貰ひ、聽かせて貰つた恩を報じ得るものは、たゞ口だ。その口が、禍を招かば招け、己の信ずるところを述べたくなつて、云ふに罪はない。過去、衆生の二恩に感じて、貧者が捧げ得んかすかな一燈なのだから……。いよいよもう私には時間がなくなつて了つた。山本君にくれぐれも詫びる、さんざ締切を引つ張つて置きながら、今度はこの前書、——それさへ不滿足千萬のもので、許して頂くより仕方がない。たゞこゝにも書いて來たとほり、長短はとにかく、どんな意味の困難が來ようとも、この仕事をやり續ける決心だけは捨てはしない。

筑紫の女王から日米戰爭に及ぶ愚談

水島爾保布

筑紫の女王って唄にまでうたはれた白蓮女史が家出をした。「ポンと落ちたら銀三匁、まさか違へば命にかゝる」なんて、古い浮れ節の文句とは反對に、御亭主側から何萬圓とかいびり取つたつてえ評判が本當なら、素人ぢやない。どうで時代錯誤なら大向を目安において「當年とつて三十八歲、まだ乾大根にやアならないよ！」てな捨て台詞と一しよに、二の腕かけた朱入りのボカシ彫でもチラつかせ「親兄弟いとこはとこ」を向合ひに、家がら身分の筋書きは、惡黨のツラネにやアてにはが合はない。第一御客様が御退屈遊ばさア、うたからヌタのあえやうは、ちと甘いかア知らねえが、賤をれならぬ手切の金、かゝり結びをつけておくれよ」とか何とかそこん處の文句は迫つての臺本で相談するとして、兎に角紀の國屋張りで持ちかけた方が、鍛眼味がある丈でも御町内や岡粹諸君の御機嫌がうかゞへるといふものだ。その時ア、白蓮なんて雅ひの引築すじみたハンマな名前は帝展の繪か何かに委托しておいて、不知火おいさとでも名乘るんだね……などと、つまらなく水は向けるものの、我宮崎龍介君は實際羨ましい。伊藤の傳ねえさんよりは二三枚方下の支那浪人を、後ろ楯にして、不等邊三角形にかしこまつたところは、雁次郎や羽左衛門より男振は惡いが、しかし姐さんは六つも年が上だ。まア文句をいふな。自惚れ丈なら誰しも敢て人後には落ちないつもりだらうが、あすこ迄色男にはなり濟されりや大したものだ。教育家なんて蕪カヂリが余計な法界悋氣をヌカス樣ぢやない。

次の社會面プログラムは九條武子ちやんの番だらうだが、誰の番にしろ結構なる話給づくめおはちが僕に廻つて來る等は如何に間違つてもないに極つてゐる。無いには極つてはゐるといふものの、男たらしたるものの通性として上臈なるとのを好んでも見たし、華族の女房位ゐに惚れられても惡くはないし、又あゝよくばラハイエットのやうに、佛蘭西の春本の口繪になつて Le P[illegible] de [illegible] なんて題下に收まり返へる程の幸福にめぐりあつてもよささうに思はぬではないが、生來不器用の上た男が惡くおまけに口が惡い。かてゝ加へて金もなければ腕力もない、と來てゐる。色事から考へて來ると全く人ごとぢやない。色事はさておいて何が目當で三度三度の飯を食つてゐるんだか不可解千萬である。この我ながら呆れた厄雜ものに「先生」なる「馬鹿でない人」に來るべき稱號まで附して、逸話だ、感だと、問題を提出して、人物試驗を行はうといふのだから、改造編輯局諸君も仲々人が惡い。

要するに中附良・君のやうな飄逸な仕事は出來ず、宮崎龍介君のやうな色男にもなり得ない人間である。そんな人間の實感や逸話なんてものが、如何なる形式の下に語り示されやうが、この退屈極まる世の中が何うなるわけのものではない。事實自分ながら愛想がつきてゐるのである。だから、一日も早く日米戰爭が開始されればいゝと思つてゐる。そして爆彈の下にこの體が粉碎されてケシ飛ぶ最後の一瞬間の痛快さを考へてゐる。

案内者

吉村冬彦

何處かへ旅行がして見度くなる、併し別に何處と云ふきまつたあてがない。さういふ時に旅行案内記の類を開けて見ると、或は海濱、或は山間の湖水、或は温泉といつたやうに、行くべき處がさま〲有り過ぎる程ある。そこで先づ假りに温泉なら温泉ときめて、温泉の部を少し詳しく見て行くと、各温泉の水質や効能、周圍の形勝名所舊跡などの大體がざつと分る。しかしもう少し詳しく具體的の事が知りたくなつて、今度は温泉專門の案内書物を捜し出して讀んで見る。さうすると先づぼんやり大凡の見當がついて來るが、いくら詳細な案内記を丁寧に讀んで見た處で、結局本當の處は自分で行つて見なければ分る筈はない。其れが分るやうならば、うちで書物だけ讀んで居ればわざ〱出掛ける必要はないと云つてもいゝ。次には念の爲に色々の人の話を聞いて見ても、人によつて可也云ふ事がちがつて居て、誰れのオーソリティを信じていいか分らなくなつてしまふ。それでさん〲に調べた最後には、つまり好い加減に、賽でも投げると同じやうな偶然な機縁によつて目的の地をどうにかきめる外はない。

かういふやり方は云はゞアカデミツクなオーソドツクスなやり方であると云はれる。此に多くの人々にとつて最も安全な方法であつて、かうすれば滅多に大きな失望や違算を生ずる心配が少ない。さうして主要な名所舊跡を見落す氣遣もない。

併し此れとちがつたやり方もないではない。例へば旅行がしたくなると同時に最初から賽をふつて行く處をきめてし

まふ。或は偶然に讀んで詩篇か小説の中で或る感興 打たれたやうな場所に決めてしまふ。さうして案内記などにはてんで構はないで飛び出して行く。さうして自分の足と眼で自由に氣の向くまゝに歩き廻り見て廻る。此方法は兎角色々な失策や困難を惹起し易い。又所謂名所舊蹟などのすぐ前を通りながら知らずに見逃してしまつたり、するのは有り勝な事である。此れは危險の多いヘテロドックスのやり方である。此れはうつかり一般の人にすゝめる事の出來かねるやり方である。

併し前の安全な方法にも短所はある。讀んだ案内書や聞いた人の話が、何時迄も頭の中に巣をくつて居て、其れが自分の眼を隱し耳を蔽ふ。それが爲に折角わざ〳〵出掛けて來た自分自身は行李の中に押し籠められたやうな形になり、結局案内記や話した人が湯にはひつたり見物したり享樂したりすると同じやうな事になる。かういふ風になりたがる恐がある。勿論此れは案内書や教へた人の罪ではない。

併しそれでも結構であるといふ人が隨分ある。さういふ人は勿論それでよい。

しかしそれでは、わざ〳〵出て來た甲斐がないと考へる人もある。曲りなりにでも自分の眼で見て自分の足で踏んで其の見る景色、踏む大地と自分とか直接にぴつたり觸れ合ふ時にのみ感じ得られる鋭い感覺を味はなければ何にもならないといふ人がある。かういふ人は兎角に案内書や人の話を無視し、或はわざと避けたがる。便利と安全を買ふ爲に自分を賣る事を恐れるからである。かういふ變り者はどうかすると萬人の見るものを見落し勝である代りに、如何なる案内記にもかいてないいゝものを堀出す機會がある。

私が昔二三人連れで英國の某離宮を見物に行つた時に、其中の或一人は始終片手に開いたベデカを離さず、一室〳〵此れと引合せては見物して居た。其のベデカはちやんと一度下調べをして所々赤鉛筆でアンダーラインがしてあつた。

或る室へ來た時に其處の或る窓の前にみんなを呼び集め、ペデカの中の一行を指しながら「此の窓から見ると景色がいゝと書いてある」と云つて聞かせた。一同はさうかと思つて、此の見逃がしてならない景色を充分に觀賞する事が出來た。

私は此の人の學者らしい徹底したアカデミツクな仕方に感心すると同時に、何だかそこに名狀の出來ない物足りなさ或は一種の果敢なさとでもいつたやうな心持がするのを禁ずる事が出來なかつた。なんだかこれでは自分がペデカの編者其自身になつて其の校正でもして居るやうな氣がし、そして其の窓が不思議なこだわりの網を私のあたまの上に投げかけるかのやうに思はれて來た。室に附隨した歴史や故實などはペデカによらなければ全く分らないが、窓の眺めのよしあし位は自分の眼で見付け出し選擇する自由を許して貰ひたいやうな氣もした。

ペデカといふものがなかつた時の不自由は想像の外であらうが、しかし稀には最新刊のペデカに欺される事もまるでないではない。或る都の大學を尋ねて行つたら其處が何かの役所になつて居たり、料理屋を捜しあてると貸家札が張つてあつたりした事もある。杜撰な案内記でゝもあればさういふ失敗は猶更の事である。しかし、かういふ意味で完全な案内記を求めるのは元來無理な事でなければならない。さういふものがあると思ふのが困難のものであらう。

それで結局案内記がなくても困るが、あつて困る場合もないとは限らない。

× × × × × ×

中學時代に始めての京都見物に行つた事がある。黒谷とか金閣寺とかいふ處へ行くと、案内の小僧さんが建築の各部分や什物の品々の來歴などを一々説明してくれる。其の一種特別な節をつけた口調も田舍者の私には珍らしかつたが、それよりも、その説明が如何にも器械的で、云つて居る事柄に對する情緒の反應が全くなくて、説明者が單にきまつただけの聲を出す器械か何ぞのやうに思はれるのが餘程珍らしく不思議に感ぜられた。其時に見た寶物や襖の繪などはも

う大概奇麗に忘れてしまつて居るが、其時の案内者の一種の口調と空虚な表情とだけは今でも頭の底にあり〳〵と殘つて居る。

その時に一つ困つた事は、私が例へば或る器物か何かに特別の興味を感じて、それをもう少し詳しくゆつくり見たいと思つても、案内者は凡ての品物に平等な時間を割當てゝ進行して行くのだから、うつかりして居ると其間にずん〳〵さきへ行つてしまつて、其間に私は澤山の見るべき物を見逃してしまはなければならない事になる。それは構はない積りで居ても、其處を出て後に、同行者の間で丁度自分の見落したいゝものに就いての話題が持上つた時に、なんだか少し惜しい事をしたといふ氣の起るのは免れ難かつた。

× × × × × × ×

學校教育や所謂參考書によつて授けられる智識は色々の點で、旅行案内記や、名所の案内者から得る智識に似た處がある。

もし學校のやうな難有い施設がなくて、そして唯全くの獨學で現代の文化の藏して居る廣大な智識の林に分け入り何物かを求めやうとするのであつたら、其の困難はどんなものであらうか。始から終迄道に迷ひ通しに迷つて、無用な勞力を浪費するばかりで、結局目的地の見當もつかずに日が暮れてしまふのがおちであらうと思はれる。

併し學校教育の必要と云つたやうな事を今更事新らしく玆で考へ論じて見やうといふのではない。唯學校教育を受けるといふ事が、丁度案内者に手を引かれて歩くとよく似て居るといふ事をもう少し立入つて考へて見度いだけである。

案内記が詳密で正確であればある程、此れに對する信頼の念が厚ければ厚い程、吾々は安心して岐路に迷ふ事なしに最少限の時間と勞力を費して安全に目的地に到着する事が出來る。これに増す難有い事はない。併しそれと同時につい

その案内記に誌してない横道に隱れた貴重なものを見逃してしまふ損失に甚だ多いに相違ない。さういふ損失をなるべく少くするには、矢張り色々の人の撰んだ色々の案内記を參照するといゝ。唯困るのは、既に在る案内記の内容を其儘にいゝ加減に繼ぎ合せてこしらへたやうな案内記の多い場合である。此に反して寧ろ間違だらけの案内記でも、其れが多少でも個人の體驗を材料にしたものである場合には、却つて何かの參考になる事が存外多い。

併しいくら完全でも結局案内記は案内記である。いくら讀んでも暗誦しても其れだけでは旅行した代りにはならない事は勿論である。

案内記が系統的に完備して居るといふ事と、讀む人の感興をひくといふ事とは別な事で寧ろ往々相容れないやうな傾向がある。所謂案内記の無味乾燥なに反して優れた文學者の自由な紀行や、或は鋭い科學者の纏まらない觀察記は、それが如何に狹い範圍の題材に限られて居ても、其の中に躍動して居る、活きた體驗から流露する或るものは、直接に讀者の胸に滲み込む、そして假令それが間違つて居る場合でさへも、書いた人の眞を求める魂だけが强く讀者に訴へ、讀者自身の胸裡にある同じやうなものに火をつける。さうして誌された内容とは無關係に其處に取扱はれて居る土地其ものに對する興味と愛着を呼び起す。

專門の學問の參考書でもよく似た事がある。何か或る題目に關して廣く文獻を調べやうといふ場合には色々なエンチクロペディやハンドブーフと云ふ種類のものはなくてはならない重寶なものであるが、少し立ち入つて本當の事が知り度くなればもうそんなものは役に立たない。つまりは個々のオリヂナルの論文や著書を見なければならない。それで此のやうな參考用の大部なものは、骨折つて始めから終迄漫然と讀み通し暗誦したところで、既に何等かの「題目(テーマ)」を持つて居ない學生に取つては極めて効果の薄い骨折損になり易いものである。又こんなものから題目を選み出すといふ事も、

出來さうで出來ないものである。此れに反して個々の研究者の直接の體驗を記述した論文や著書には、假令其の題材が何であつても、其中に何かしら活きて動いて居るものがあつて、そこから受ける暗示は讀む人の自發的な活動を誘發する或る不思議な魔力をもつて居る。さうして讀者の研究心を強く喚び醒す。かういふ意味からでも、自分の專門以外の題目に關するいゝ論文などを讀むのは決して無益な事ではない。

それで案内記ばかりに頼つて居ては何時迄も自分の眼は明かないが、さうかと云つてまるで案内記を無視して居ると道に迷つたり事によると温泉や火口に落ちる恐がある。此れは分り切つた事であるが、其れに拘らず教科書とノートばかりを頼りにする學生は可也多數である一方には又現代の科學を無視した爲に折角いゝ考はもち乍ら失敗する發明家や發見者も時々出て來る。

× × × × × ×

名所舊跡の案内者の一番困るのは、何か少し餘計なものを見やうとすると No time, Sir! など〻云つて引立てる事である。しかし此れも時間の制限があつて見れば無理もない事である。それで本當に自分で見物するには、もう一遍獨りで出直さなければならない事になる。唯其時に、例の案内者が邪魔をしてくれさへしなければいゝ。

しかし案内者や先達の中には、自己のオーソリテイに對する信念から割合された親切から、個々の旅行者の自由な觀照を抑制する者もないとは云はれない。旅行者が特別な興味をもつ對象の前に暫く歩を止めやうとするのを、そんなものはつまらないから見るのぢやないと世話をやく場合もある。つまるとつまらないとか明に相對性のものである場合には此れは困る。案内者が善意であるだけに一層困る譯である。此の種の案内者は其の專門の領域が狹ければ狹い程多いやうに見えるが此れは無理もない事である。自分の「お山」以外のものは皆つまらなく見えるからである。

一方で案内者の方から云ふと、其の率いて居る被案内者から餘りに信頼され過ぎて困る場合も隨分あり得る。何處迄も忠實に附從して來るはいゝとしても、便所迄もついて來られては迷惑を感じるに相違ない。

ニュートンの光學が波動説の普及を妨げたとか、ラプラスの權威が熱の機械論の發達に邪魔になつたとかいふ事はよく耳にする事である。或意味では確にさうかも知れない。しかし此の全責任を負はされては此等の大家達は泉下に瞑する事が出來まい。少くも責任の半分以上は彼等のオーソリテイに盲從した後進の學徒に歸せなければなるまい。近頃相對原理の發見に際して又々ニュートンが引合に出され、彼の絶對論が屢々俎の上に載せられて居る。此れは當然の事としてもそれが爲にニュートンを罪人呼ばりをするのは余りに不公平である。罪人はもつと／＼外に澤山ある。云はゞニュートンは眞理の殿堂の第一の扉を開いたゞけで逝つてしまつた。彼の被案内者は第一室の壯麗に醉はされて其奥に第二室のある事を考へるものは稀であつた。つい近頃にアインシュタインが突然第二の扉を蹴開いて其處に玲瓏たる幾何學的宇宙の宮殿を發見した。しかし第一の扉を通過しないで第二の扉に達し得られたかどうかは疑問である。

此の次の第三の扉は何處にあるだらう。此れは吾々には全然豫想もつかない。併し其の未知の扉にぶつかつて此を開く人があるとすれば、その人は矢張り案内者などの厄介にならない風來の田舍者でなければならない。第三の扉の事は如何に權威ある案内記にも誌してないのである。

× × × × × ×

想ふにうつかり案内者などになるのは考へものである。黒谷や金閣寺の案内の小僧でも、始めてあの建築や古器物に接した時には恐らく樣々な深い感興に動かされたに相違ない。それが毎日同じ事を繰返して居る間にあらゆる興味は蒸發してしまつて、すつかり口上を暗記する頃には、品物自身はもう頭の中から消えてなくなる。殘るものは唯言葉だけ

になる。眼は其の言葉に蔽はれて物を見なくなる。さうして丹波の山奥から出て來た觀覽者の眼に映るやうな美しい影像はもう再び認める時はなくなつてしまふ。これは實に其人にとつては取返しのつかない損失でなければならない。此のやうな人は單に自分の擔任の建築や美術品のみならず、他の同種のものに對しても無感覺になる恐がある。例へば他所の寺で狩野永德の筆を見せられた時に「狩野永德の筆」といふ聲が直ちに此人の眼を蔽ひ隱して、眼前の繪の代りに自分の頭の中に沈着して黴の生へた自分の寺の繪の像のみが照し出される。假令その頭の中の繪が如何に立派でも此れでは困る。手を觸れるものがみんな黃金になるのでは餓死する外はない。

職業的案內者が此のやうな不幸な境界に陷らぬ爲には絕へざる努力が必要である。自分の日々說明して居る物を絕へず新らしい眼で見直して、二日に一度或は一月に一度でも何かしら今迄見出さなかつたものを見出す事が必要である。其れには勿論異常な努力が必要であるが、さういふ努力は苦しい。それをしなくても今日には困らない。そこに案內者のはまり易い洞穴がある。

ニユールンベルクの古城で、其處に蒐集された昔の物凄い刑具の類を見物した事がある。名高い「鐵の處女（アイゼルネユングフラウ）」の前で說明をして居た案內者は未だうら若い女であつた。一體に病身らしくて顏色も惡く、何となく陰氣な容貌をして居た。見物人中の學生風の男が「失禮ですが、貴孃は每日何遍となく、そんな恐ろしい事柄を口にして居る、それで神經をいためるやうな事はありませんか」と聞くと、何とも返事しないで唯首を立てゝ息を吸ひ込んで、暗い顏をして眼を伏せた。私は隨分殘酷な質問をするものだと思つて餘りいゝ氣持はしなかつた。恐らく此の女も每日自分の繰返して居る言葉の內容には疾に無感覺になつて居たのだらう。それが此の無遠慮な男の質問で始めて忘れて居た內容の恐ろしさと、それを繰返す自分の職業の不快さを思ひ出させられたのではあるまいか。

此れと場合はちがうが吾々は子供などに科學上の智識を教へて居る時に屢ゝ自分が何の氣も付かずに云つて居る常套の事柄の奥の深みに隠れた或るものを指摘されて、職業科學者の弱點を際どく射通される思ひがする事はないでもない。案内者になる人は餘程氣を付けねばならないと思ふ。

× × × × × × ×

ナポリを見物に行つた序に、程遠からぬポツオリの舊火口と其中にある噴氣口を見に行つた。電車を下りてペテカを頼りに尋ねて行かうとすると、すぐに一人の案内者が追ひすがつて來て頻りにすゝめる。まだ三十にならないかと思はれる餘り人相のよくない男である。てんで相手にしない積りで居たが何處迄も根氣よくついて來て、そして息を切らせながらしつこく同じ事を繰返して居る。其れを叱りつけるだけの勇氣のない私は、結局其の五月蠅さを免れる唯一の方法として彼れの意に從ふ外はなかつた。其の結果は豫想の通り甚だ悪るかつた。始めきめた案内料の外に、色々の口實で少しづゝ金を取り上げられて、そして案内者を雇つたゞけの効能は殆んどなかつた。唯一つの面白かつたのは、麻糸か何かの束を黄蠟で固めた松明を買はされて持つて行つたが、噴氣口の傍へ來ると案内者は其れは點火して穴の上で振り廻した。そして「蒸氣の噴出が増したから見ろ」と云ふのだが、私には一向何の變りもないやうに思はれた。すると彼は其處とは大分離れた彼方の火口壁の處々に立上る蒸氣を指して「あの通りだ」といふ。しかし松明を振る前にはそれが出て居なかつたのか、又どれ位出て居たのか、丸で私は知らなかつたのだから、結局此の松明の實驗(イキスペリメント)は全然無意味なものに終つてしまつた。併しさういふ飛びはなれた非科學的の「實驗」が恐らく毎日此處で行はれて、そして見物人の幾割かはそれで納得するものだとすると、さういふ事自身が可也興味のある事だと思はれた。

智識の案内者と呼ばれ、權威(オーソリティ)と呼ばれる人には流石にこんな人は無い筈である。其れでは被案内者が承知しない。併

し名を科學に借りて專門智識のない一般公衆の眼を眩ますやうな非科學的實驗を行つた者が西洋には昔から隨分あつた　そのやうな場合には殆んどきまつて平生科學に對して反感のやうなものをもつて居る一群の公衆、殊に新聞などによつて既成科學の權威が疑はれ、そのやうな「發見」に冷淡な學者が攻擊される。併し科學者としては事柄の可能不可能や蓋然性の多少を既成科學の系統に照して妥當に判斷を下す外はないので、もし其の判斷が外れゝば、それは眞に新しい發見であつて科學は非常に著しい進步をする。しかし其のやうな場合があつても、判斷が外れた事は必しも其科學者の科學者としての恥辱にはならない。其場合には要するに科學が一步を進めたといふ事になる。さうして進步するのが科學ではあるまいか。寧ろ外れる方が科學者として妥當である場合がないでもない。

此のやうな場合は別として純粹な眞面目な科學者でもやはり人間である限り、千慮の一失がないとは限らない。そして不知不識にボツオリの松明に類した實驗や理論を人に示さないとは限らない。

グラハムが發電機を作つた時に當時の大家某は一論文を書いて、そのやうな事が不可能だといふ「證明」をした。其れに拘らずグラハムの器械からは電流が遠慮なく流出した。其後に此の器械から電流の生ずるといふ方の證明が段々現はれて來たといふ話を何處かで讀んだ事がある。しかし其の大家の論文をよく讀んで見なければうつかり其人の非難は出來ない。

ヘルムヘルツが「人間が鳥と同じやうにして空を翔る事は出來ない」と云つたのに、現に飛行機が出來たではないかといふ人があらばそれは見當ちがひの非難である。現在でも將來でも鳥のやうな翼を自分の力で動かして、唯それだけで鳥のやうに翔ける事は出來はしない。

凡ての案內者も時々此れに類した、誤解から起る非難を受ける恐のある事を覺悟しなければならない。例へば、案內

者が「此の河を渡る橋がない」と云ふ意味で、渡れないと云つたのを、船で渡つておいて「此通り渡れるではないか」と云はれるのはどうも仕方がない。此れ等は恐らくどちらも悪いかどちらも悪くないかである。意志が疎通しないから起る誤謬である。

併しあらゆる誤解を豫想して此れに備へる事は神様でなければ六かしい。此處にも案内者と被案内者の困難がある。

×　×　×　×　×　×　×　×

私の厄介になつたボツオリの案内者は別れ際に更に余分の酒代をねだつて氣永く附き纏つて來た。それを我慢して相手にしないで居たら、最後の捨言葉に「日本人はもつとゼントルマンかと思つた」と云ふから、私も「伊太利人はもつとゼントルマンかと思つた」と答へて、それ切り永久に別れてしまつた。私も少し悪るかつたやうである。併しこんなのは知識の案内者にはない。

×　×　×　×　×　×　×　×

考へて見ると案内者になるのも被案内者になるのも中々容易ではない。凡ての困難は「案内者は結局案内者である」といふ自明的な道理を忘れ易いから起るのではあるまいか。

景色や科學的智識の案内では此樣な困難がある。もつとちがつた色々の精神的方面ではどんなものであらうか。此方には更に著しい困難があるかも知れないが、或は事によると却つて事柄が簡單になるかも知れない。其處には信仰や愛情のやうなものが入り込んで來るからである。併しさうなるともう私が茲に云つて居る唯の「案内者」ではなくなつてそれは「師」となり「友」となる。師や友に導かれて誤つて曠野の道に迷つても怨はない筈ではあるまいか。

百人一首類の色々な意味

穂積重遠

新年のことですから、百人一首の話をしませう。

どう云ふ動機からだつたか忘れましたが、大正三年頃から私の家庭で百人一首類の蒐集を始めました。小倉百人一首の種々な版本寫本は固より、其以外の百人一首、百人一句、百人一詩、脫線しては一人百首の類まで、苟くも歌なり句なり詩なりを百纏めたものと云ふ頗る廣い標準です。尤も一向計畫的組織的に蒐めるのでもなく、主として父と私とが通りがゝりの古本屋から買つて來たり古書展覽會で手に入れたりするのですが、其事を傳へ聞かれた人々から——見ず知らずの方からさへも——斯う云ふ珍らしいのがあるからとて贈られたのもあつて、今では優に三百種以上になりました。五百種も揃つたら何とかしやうと思つて居ますが、元來國文學の素養も古書學の知識もなく、唯だむやみと蒐めただけなのですから、何とかしやうたつて何ともならないかも知れません。そこで取敢えず手當り次第に七八十冊拾ひ出して、少しづゝの意味合を持たせて見たのが、此「百人一首類の色々な意味」です。勿論素人考への出鱈目ですよ。

一　書誌印刷上の意味

小倉百人一首の版本寫本には隨分色々なのがあります。古い所は徳川初期のもの（もつと古いのがあるのかも知れませんが年代が分りませんから）新しくは夢二氏の百人一首ヱハガキや『そこにこの作者の女らしい心憎さがある』『私は涙なしには彼の一生を考へることが出來ないのである』『私はこゝにまた戀人の悲しい獨白を聞かなければならなかつた』と云つた調子の吉井勇氏の百人一首物語（大正八年）に至るまで、蒐集中の半數

を占めて居ますが、其大部分の面白味は内容よりも書畫及び印刷技術に存すること、寧ろ當然です。書は尊圓尊朝兩法親王とか飛鳥井何々卿とか云ふ様な古い所から、佐々木文山・谷菱湖・尾崎紅葉・阪正臣・小野鵞堂などゝ云ふ顔觸れですが、畫の方は菱川師宣・西川祐信・北尾辰宣・北尾重政・勝川春章・大石眞虎などゝ云ふ一層の大家揃ひです。こゝに一つ珍らしいのは書と畫とを兼ねたのがあります。それは曲筆百人一首(貞享二年)と云ふ木版本で、濃州船着村野士嗣島一外書とありますが、左文字逆文字は申すに及ばず、百首百態實に達者な曲書きがしてあり、其中人麿の歌は山烏、赤人のは富士、家持のは橋、千里のは月の形と云ふ風に、書畫兼備のが數多あります。印刷は大部分木版ですが、其中特に珍らしいのは木製活版で、百人一首宗祇抄と云ふのが美事なそれで印刷してあります。此書の著作は明應二年(約四百三十年前)ですが、此版になつたのは何時か分りません。併し相當に古さうなもので、木活版の好標本だと和田圖書館長に褒められました。實の所を白狀すると、和田博士に見て貰ふまでは木活版であると云ふことすらが素人の私には氣が附かなかつた次第です。木版の中で最も素人目に着くのは錦繪で、國芳畫の百人一首(刊年不詳)・豐國畫の百人一首繪抄(刊年不詳)・廣重豐國國芳合作の小倉擬百人一首(弘化三年)など、いづれも極彩色の中々立派なものです。印刷技術として更に注目すべきのは銅版で幕末に京都に松田玄々堂及び岡田春燈齋と云ふ二人の名工があつたとのことですが、各々百人一首を製版して居ます。銅版の特長たる細かな手際を見せる爲でせう。いづれも小さな一枚刷です。玄々堂のは二種あります。一は百人一首(天保十二年)と題し、鯨尺で横三寸五分強・縱二寸強、他は小倉山百人一首(刊年不詳)と題し、横三寸四分・縱一寸九分弱、いづれも畫入で本式に出來て居ます。それよりも更に驚くべきのは春燈齋の微塵版百人一首(嘉永五年)で、鯨尺一寸四方中に百歌人の全名と歌とを二段に印刷してあり、眼の良い人なら肉眼でも讀めませうし、蟲眼鏡で見るとハツキリ見えます。

二　國文學上の意味

小倉百人一首の國文學上の意味など今更申すまでもないことで、諸大家の解説書が澤山あることは御承知の通り、私も大分

苑めて居ますが、眞面目な註釋書の事は今云ひますまい。所で詐學者の解説珍論が段々とむづかしいことになつて來て、牽強と獨斷とが盛に鉢合せを始めたので、それを馬鹿々々しがつた反動的諷刺的傾向のものが出て來たのは面白いことです。其一つは本居大平の弟子河北詮義の著した百人一首梓話（嘉永四年）で、巫女の口寄せで定家卿の靈を呼び出し、更に僧契沖・荷田春滿・賀茂眞淵・尾崎雅嘉・富士谷成元・香川景樹・本居宣長等の靈をもそれぞれの巫女にかゝらせて、定家卿の靈の前で對決させると云ふ趣向です。全十五冊の筈ですが、私の所には初篇三冊きりありません。全部は出なかつたのかも知れません。併し本も結局理に落ちてしまつて餘り面白くありませんが、それより又ズット砕けたのが曉鐘成自作自畫の百人一首類題話（文政六年）です。これは百首を一々落語にこぢつけようと云ふので、十六首だけ出來て居ます。其中一番短いのを引いて見ると、

（前略）「ほんにその雪でおもひ出した。もろこしの孟宗は、雪の中の笋をとつて親にあたへ、王祥は氷の中の魚を得て孝をつくしたと、二十四孝のはなしで聞たが、もろこしにはめつたに孝をつくす人があるが、日本には孝子の名高いのはないかして、とんと聞んがおまへ聞てか。」「サアあんまり高名な人もないが、アノ百人一首にいれてある天皇さんに孝行天皇といふのがあるが、あれは歌からして孝行らしい。笋にやないが雪のふるのに若菜をつましやつたと見える。」「イヤ〳〵あれは孝行じやない忠義にやあろ。」「なにいはんすやら、名から孝行天皇とつけてあるもの、忠義であらふはづがない。」「そふいはしやんな、忠義といふ證據には、歌の初文字をよんで見やんせ。君がためとしてあらふがな。」

落語としては大して感心もしませんが、百人一首論に對する諷刺としては一寸面白いと思ひます。其諷刺の更に適切痛烈なのが、山東京傳作の百人一首和歌始衣抄（天明七年）です。これは標題から序文・系譜・本文・考證等一切勿體らしく鹿爪らしい形式で眞の註釋書らしく出來て居て、然かも實質は大與太を飛ばして居るので、眞正面から國學者連の著述に當て附けたものです。落語で有名な『千早振』がこれに出て居ます。これが落語の種本なのか、或は當時既に右の落語が行はれて居たのか、判然しませんが、恐らく前者だらうと思ひます。其他合計十八首の珍解釋が出て居ますが、其中一番短かい業平法師「今こんと」

の歌の註解本文だけを寫して見ませう。

此歌はそせい法師はつの午の日に王子いなりへまふでしみちのき也

今こんといひ――今こんといひしはたしかきつねのなくこゑであつたが

しはかりになかつきの――柴かりの男と柴をかついだ男とふたりきつねにばかされてひるなかきゆうに日がくれて道がしれなくなつた

ありあけのつきを――あさまでをくともし火をありあけあんどうといふそのつきたる家を目あてに行て見たら

まち出るかな――二人の男はよふ〳〵町へ出るかな扨はきつねにばかされたかとあとでまゆげをぬらせし事のをかしくその始終をよめり

所でそれと同時に又別方面から猛烈に百人一首を愚弄したのが、初代芝全交の遺作たる黄表紙百人一首(寛政六年)です。これは百人一首中の人物を使つて他愛もない滑稽小説に作り上げたので、例へばけちんぼが二人あつて、一人は壬生狂言を木戸錢拂はずに見たから「みぶのただみ」で、一人は五徳を大事がつて人に貸さぬ故「ごとくだいじのさだいじん」と云ふ様な調子で馬鹿にし切つて居る所が面白い。挿畫が又傑作で、なりは折江戸町人の風俗で頭だけはそれぞれ百人一首の畫にある通りの冠や烏帽子をかぶつて居ます。序にもう一つ百人一首やまとうたうら(天保十四年)と云ふ珍本を擧げて置きませう。其説明は左の序文に讓ります。用法に至つては實物を御目にかけてでないと説明に苦しみます。

「皇國の歌の道の深く神慮も感應まします事今更いふもおろかなるべしそも〳〵此歌占はむかしより古くありて吉凶のつまびらかなる事いさゝか違ひなしされども近き頃は五言七言の詩もて神慮をうかゞふ御鬮といふもの行はれて此國の歌占を用ふる人まれ〳〵なりそのいにしへは名にしおふ紫式部なんどきこえし才女すら和歌をかきあつめて捻紙の鬮をこしらへ神慮をうかがふ祈願に用ひしとなん其より後々の人は小倉百首をもつて占ふことを專にはなせしとぞこの書は久しく都方にして珍重せられしものなるを此度は藤原のあるじが梓を補ひ世の人々の爲めに神占の徳を知らしむるものなり」

三　語學以上の意味

扨て小倉百人一首の流行と共に、これを外國語に翻譯しやうと云ふ企が起り得ます。先づ試みられたのが、云ふまでもなく漢詩に譯することです。橋維獄なる人の容言百人一首(安政三年)と

云ふのがあります。五言絶句に意譯してあるので、中々よく出來て居た樣です。例へば

重到泊瀬　　　　紀　貫之

烟霞昔遊地　重來入僧房　不知主人心　梅花依舊香

といつた樣な調子です。更に小畑詩山の百人一首（弘化三年）があります。これは七言絶句譯で、なるべく直譯しやうと隨分苦心してある樣ですが、中々の難事と見えて、一寸通讀した所でこれはと感服する程の名譯も見當りません。中で分りよいのを一首寫して見ませう。

寧都櫻樹至今存　依舊花開春日溫　折獻一枝香馥郁
平安城裏九重門

次に明治になつてからは英譯が出來ました。外にもあるでせうが、私の持つて居るのは英人デツキンス氏譯松浦與三松氏註釋の英譯百人一首（明治三十一年）です。和歌を英詩に譯するのは難事たること勿論ですから、百の中には頗る無理なのもありますが、併し又中々氣の利いたのもないではありません。例へば中納言行平『たちわかれ』の歌を

Inaba's lofty range is crowned
　By many a tall pine-tree;
Ah quickly were I homewards bound
　If thou shouldst pine for me.

と譯して居ますが、pine と云ふ字が英語でも松と待との兩義になるのは面白いではありませんか。但し「いなば」の洒落だけは英語では如何とも仕方がないでせう。佛譯百人一首もあるとのことですが、まだ手に入りません。

一轉してローマ字綴りの百人一首が出なくてはならぬ筈です。而してそれが出なくてはならぬ筈の所から出て居ます。即ち大正六年に「日本のローマ字社」から土岐哀果氏著 HYAKUNIN ISSYU と云ふのが出ました。全部ローマ字綴りの百人一首略解で、即ち所謂日本式ローマ字宣傳の爲めに出來た本です。著者も序文に Uta ni taisuru Iken tosite yorimo.... ...... Roômazi de tuduru koto ga kono Hon no omona Mokuteki nano de aru. と云つて居ます。所がこゝに面白いのは、同じ六年でも大正ではない明治の六年——即ち四十五年

も以前に、ローマ字百人一首の先鞭が附けられて居ることです。然かもそれが作りさうもない人の手で作られて居るのが面白く、而して又現在蒐まつて居る小倉百人一首中、明治になつてからの最初のものが此新式百人一首であることも面白いと思ひます。それは國學の大家黒川眞頼博士の横文字百人一首です。博士の令孫黒川眞前氏に此書を見せた處、祖父に斯う云ふ著書があつたことは初耳だし、家にも遺つて居らぬ様だと語られました。所で博士が此ローマ字百人一首を編まれた目的は、今日のローマ字論者のそれとは全く違ふ様で、凡例中に博士は斯う云つて居られます。

「我が國の言語を西洋文字に書ならひ讀習するは、おをの音いゐの音の差別を知らしめ、一言一句を知しめむが爲なり。」

即ち國語教習の便宜の爲めに謂はゞローマ字の振假名を附けやうと云ふ次第なのであつて、假名遣ひ其儘にローマ字綴りにするのです。併し又 ta, ti, tu, te, to と云ふ風に綴るなどは偶然にも最新式で、今日の所謂日本式ローマ字に對して元祖爭ひをしてもよささうです。試みに其の綴り方の例を示しませう

"Kuwaukau tenwau" "Wono no komati"
"Sandeu no win" "Ohusikahuti" "Idumigaha"
"asadihu" "yuki ha huri tutu" "kumo no ka-
yohidi huki todi yo" "kehu kokonohe ni nihohi
nuru kana"

四　教訓的の意味

扨て小倉百人一首が益々盛に行はれ、殊にかるたとして青年男女に弄ばれるにつれて、百首中に戀歌の多いことを心配する人が出て來たのは、さもありさうなことです。其心配の最も明白な結晶が私の蒐集中に二つあります。其一つは藤井懶齋(山崎闇齋門下)の蔵笥百首(享保六年)で、此百人一首註解の趣旨は次の序文で明瞭です。

「人のむすめのわづかに物いふ事をしれるより おほやらまづ百人一首をならはしむる事、いつの世よりぞや。その歌京極黄門の えらびなれば、秀逸はまたたぐひなかるべし。されどこれを おのこの小大學になづらへて教訓の たすけとせんに、さはる事なかるべきや。これによりてひそかにおもふに、周詩の章をたち義をとるのこゝろにもとづきてその歌の本説にかゝはらず、ひたすら婦道のうへにとりな

し、ことばをいやしくして註しなさば、必ず女子にたよりせむか。こゝに百人一首を見侍て、歌のさまの此道に叶ひしかたきをばのぞき、さらに八代集のうちよりくはへて數をもとのもゝうたとなし、をのれがこゝろにまかせて訓話す、」（下畧）

此序文では小倉の歌の中若干を他の歌で代へた樣に取れますが實は小倉からは十一首きりはいつて居ません。而して序文に宣言して居る通り、隨分道學者流に牽強附會した解釋で、例へば『あひ見ての後の心にくらぶれば昔は物を思はざりけり』を、親の膝下に居たときは窮屈にも思つたが、結婚して苦勞して見ると昔がなつかしいと云ふ意味と解して居ます。

今一つは西村茂樹翁の新撰百人一首（明治十六年）です。これにも斯う云ふ序文が附いて居ます。

『此編ハ泊翁西村先生ノ撰定セラレシ百人歌集ナリ。（中略）蓋シ從來上下一般ニ兒女子ヲシテ暗誦セシメシ小倉百人一首ハ、戀歌多クシテ頗ル猥褻ニ流レ風化ヲ害スルコト少カラザルヲ以テ、之ニ代フルニ文雅ニシテ教育ノ補助トナル可キモノヲ以テセシレタルナリ。（中略）此編ハ小倉百人一首ヲ本トセシモノユヱニ、其雅純ナル者ハ凡テ舊ニ從ヒ、猥褻ニ涉ル者ハ其人ヲ存シテ代フルニ他ノ歌ヲ以テシ或ハ其人其歌倶ニ刪除シテ更ニ撰擇セシモノモアリ。」

此標準で『風化ヲ害スル』ものとして落第したのが、百首中丁度五十首です。それでも僴齋先生にくらべると餘程點が甘い方でせうか。

併し斯う云ふ風に小倉の抜き挿しをして居たのでは到底註文通りに行きませんから、新たに教訓的な百人一首を選ばうと云ふ考になります。其類は數種ありますが、比較的新らしくて珍らしいものを一種だけ擧げると、杉浦重剛先生が選ばれて塾生に頒たれた梅百人一首・櫻百人一首（明治二十三年）と云ふのがあります。

五　人物崇拜的の意味

所で教訓的な歌を選ぶと云ふことになると、どうしても歌其のものの藝術本位でなくて、讀人の人物本位になります。此人物崇拜の意味での百人一首で最も古いものは、武家百人一首（寛文六年）で、六孫王經基に始まつて足利諸將軍に至る武將連の百人一首、撰者は榊原式部大輔忠次と云ふ康政の孫に當る殿樣です。降つて幕末に至つて盛に人物本位の百人一首を製造したの

が綠亭川柳（六實川柳）で、北齋・豐國・國芳・重信・貞秀などゝ云ふ名畫工揃ひが畫像を分擔した草双紙仕立の百人一首シリーズを出して居ますが、其中英雄百人一首（弘化二年）烈女百人一首（弘化四年）續英雄百人一首（嘉永二年）義烈百人一首（嘉永三年）などは正に標準通りの人物崇拜百首です。尙ほ明治になつてからの人物崇拜百首は別に說きませう。所で同じく人物本位でも笠亭仙果撰の本朝武藝百人一首（嘉永六年）となると教訓的と云はんよりは寧ろ講談的であり、花街（くるわ）百人一首（安政三年 選者不明）に至つては、百美人畫像入の吉原細見百首とでも云ふべきものですから、再び所謂「風化ヲ害スルモノ」になつて來ます。

六　心學的の意味

教訓的と云ふ意味を最も徹底させたものが心學の所謂道歌の百人一首です。其中でも心學の一派の教訓歌集たることを標榜して居るものに豐嶋教（としまをしへ）百人一首と云ふのがあります。撰者も畫家も刊年も分りませんが、頗る古雅なものです。又此種のもので有名なのが伊勢の神官荒木田守武の世の中百首、約四百年前の大永五年に詠んだ一人百首ですが、現在の本は享保七年版で、川嶋重信の畫入です。又北齋時信の作と傳へられる畫本寺段教訓百首なるものがあります、享保十九年に中村三近子註解西川祐信畫で「繪本商水の池」と題して出版されて居ます。又中村滿仙詠西川祐尹畫の繪本錦百首（寶曆二年）と云ふのがあります。此四種は歌はいづれも餘りに下手な所が却つて御愛嬌な位ですが、挿畫がそれぞれ頗る面白く、結局教訓的效果よりも藝術的效果の方が遙に著しいと云ふことになります。こゝに一つ奇拔なのは、珍竹林堂可笑作の教訓百年一首（文政十年）と云ふのがあります。人生百歲の每年に教訓歌一首づゝを割當てゝ、其年度の指針と云ふ趣向にして居ます。

七　佛教的の意味

同じく教訓的の百人一首中で佛教的なものが相當にあります。例へば二十一代集中の佛教に關する歌を蒐めた淨土百歌仙（安永三年）を始め、道歌百人一首麓枝折・無染居士編道歌心の策（共に刊年不明）などゝ云ふのが、いづれも佛教的の百人一首です。更に佛教的の一人百首としては、空華庵詠白隱和尙閱と云ふ道詠新歌百首（文化十四年）福田行誡上人遺詠の釋教百首（明治二十二年）などが

あります。併し其中で特に珍らしくもあり面白くもあるのは、五代目市川團十郎白猿獨吟の念佛百首です。先づ斯う云ふ序文で始まつて居ます。

ことし霜月半の比より水腫病(?)の病に打ふしてこゝ地死ぬべうおいとまごひかとおもふにつけあみだ如來へ臨濟中て長きみらいを助からんため病中のねられぬまゝと一夜ふたよに百首をひとり詠じて枕上で興じ侍りける

市川寺元祖白猿和尚述

所で其百首が、「花道のつらね」と號して狂歌でも鳴らした人だけあつて中々上手で然かも豪放卒直、磊落でありながら信念の強い面目が躍如として居り、流石名人は餘技でも違つたものだと思はせます。例へば

念佛を唱へ地獄に落るなら
　法然様が見てはござらぬ

世の中のかれを見これを聞につけ
　南無あみだぶつ南無あみだぶつ

なむあみと唱へながらに一と寝入り
　さめてだぶつとざんまいになれ

念佛は譯をきいてもはてしなし
　只一筋に唱るぞよき

花になくうぐひす水にすむかはづ
　つまる所は南無あみだぶつ

と云つた様な調子で九十九首それぞれに念佛の功德を歌ひ、そこで第百首目が

南無阿彌陀なむあみだぶつナムアミダ
　南無あみだぶつ　無あみだぶつ

となつて居るなどは、中々氣が利いて居ます。さうして左の跋で結んであります。

あみだ様は不淨機の病人がよこにねてゐてたのんでも極樂へ御あんないなさるゝことに有がたいのうへなし佛菩薩の親玉殿也人々しんぐなしたまへ

これが文化三年の秋で、白猿は其秋其病で六十六歳で死んだのですから、これが實に絶唱絶筆たのです。其版本は死後の記念出版と云ふやうな譯らしく、卷頭には豐國筆の所謂死繪に本集中の一首を辭世として掲げ、卷尾に戒名を記るしてあります。

八　樂天的の意味

扨て此白猿の百首と好一對なのが、蜀山人が四方赤良の名で出しためでた百首（天明四年）です。

改年の御慶めでたく天の戸を
明ましてよい春は來にけり

と言ふのに始まつて毎首「めでたい」と云ふ言葉を入れ、第百首目が

おめでたく又おめでたくおめでたく
かへすがへすもめでたかりけり

と結んである所など、念佛百首の趣向によく似てゐます。而してこれは樂天的な意味の百人一首類と云ふべきでせうが、同じく樂天的と云つてよささうなものは、保科五無齋のよいかゝをほしな百首（明治三十九年）と云ふ狂歌百首です。五無齋保科百助氏は長野縣の人で、鑛物標本採集家として又奇人として有名な人の由、此百首には頗る奇拔な自叙傳的な緒言が附いて居り、又「ほしな百首」と云ふ標題の下に小さく「け」の字を添へて、自分の姓名に讀ませて居ます。歌は百首共皆上の句を『思ふ哉』で結び、下の句を『かゝをほしなと』又は『かゝにほしなと』と云ふ七文字で結んであります

元日に逢ふたび毎に思ふ哉
今年はどうかかゝをほしなと

暗やみに山路を越えておもふかな
案じて哭るゝかゝをほしなと

われ日々に三度は物をおもふかな
お三の出來るかゝをほしなと

四海皆はらからと聞いておもふかな
非人でもよしかゝにほしなと

列女傳よむたびごとにおもふかな
どれでもよいがかゝにほしなと

と云ふ樣な譯です。そこで第九十九首に

おもふかな又おもふかな思ふかな
おもひ焦れてかゝをほしなと

と悲觀し、第百首に一轉して

どうしても無いと言ふなら思ふかな
[illegible]象かゝにほしなと

と大なる樂觀に一致して居ます。

九　技術上の意味

教訓百首の一種として一寸風變りなのは、或技術の心得を敎へる爲めのものです。例へば百首歌と題する寫本がありますが、これは弓術の先生が修業の心得と射法の秘傳とを百首の歌に作つたもので、斯う云ふ奥書が附いて居ます。

右百首愚拙家傳之雖爲秘事不淺依御執心則書令進畢
努々不可有他見者也
享保四巳亥年五月吉日　山本宇兵衛尉勝行花押
加舍忠兵衛殿參

大に勿態を附けたものですが、斯う云ふ敎訓歌に名歌は少ないものです。其中少しは歌らしいもの二つ三つ擧げて見ますと、

あづさ弓常に手なれてひかざれば　はなれてあらき野邊の春駒
海士人のあみのうけ縄よはく＼と　ひくにもこゝろありと云ふなる
妻琴のひくにはなびく事あれど　わかれとなればはなれにくさよ

次に用捨箍と云ふ宗匠の挿花稽古百首（安永四年）と云ふのがあります。讀んで字の通りのもので、細目に亘つて色々成程と素人にも肯かれることが敎へてありますが、其總論とでも云ふべき部の

梁ばかりよくても風雅なき人は　花を知らざる人と云ふべし
ねのあるものは遠慮もしかるべし　たゞ風流に理窟はたれよ
すいりやうの事はちがひのあるものぞ　隨分きいて明らかにせよ

などは、豈それ花道のみならんやと云ふ樣な次第であります。

更にも一つ泉石軒小山懸海著勝地百盆（文化元年原版 大正五年再版）と云ふのがあつて、これは百名所の盆石圖案です。尤もこれに引いてある歌は各名所を詠んだ古歌で盆石術の敎訓歌ではありませんが、併しやはりそれぞれの古歌の心を心として盆石を置く樣にと云ふ意味であらうと思ひます。

一〇　地理的の意味

右の勝地百盆は前述の通り同時に地理的百人一首ですが、其類で殊に一地方を中心としたものが數種あつて、それぞれの地

方色が面白いことです。即ち本居大平編紀伊國名所百首(嘉永元年)・中川清流編阿波百人一首(明治二十七年)・日野資始編宮城百人一首(慶應二年原版明治二十七年再版)・猿山義明編下野百人一首(明治三十年)・眞入亭編富士山百景狂歌集(萬延元年)・五粒庵一湊撰上毛百人一句(安政四年)等であります。

二　事變の記錄としての意味

地理的百人一首は謂はゞ靜的狀態の記錄ですが、動的事變の記錄としての百人一首もなくてはならぬ筈です。元來事變があるとそれを題とする落首が行はれたのはかなり古くからのことでせうが、德川末期になつてそれが益々盛になり、小倉百人一首の作り替で時事を諷刺するものが出て來ました。さう云ふ落首の好題材は江戸の花たる大火事で、大火に關するもじり百人一首が二三あります。道消百人一首(刊年不明)と云ふのがありますが、いつの火事のかわかりません。『公雜集』と云ふ幕府の御坊主が著いたらしい頗る面白い寫本の隨筆がありますが、其中に文政十二年の大火を詠んだ古今百人一所死及び火焼人一首の二種が載つて居ます。此後者は中々よく出來て居ます故、秀逸數首を御目にかけませう。

店のうらにうち出て見ればうろたへの
　不意の飛火に火の子降りつゝ

わが庵は火元の辰巳しかもすじ
　ようのこつたとひとはいふなり

鼻の先に移りにけりな徒らに
　わが身はよしと油斷せし間に

迷ひ子の行くもかへるも焼かれては
　死ぬもしなぬも大火事のせつ

やけ來れば今はたらきも何にせん
　身をこがしてもにげんとぞ思ふ

焼こんといひしばかりにまごつきの
　有合のものをもちいづるかな

親方の叱りのゝしる火事の目に
　さもいくじなく腹のへるらむ

焼ぬればくるゝ物とはしりながら
　なほ深川の握り飯かな

もろともに哀れとおもへ焼だされ
　是よりほかにきるものはなし

消具ほし火元うらめし土藏なく

丸焼ゆえに物おもふ身は
材木やふらちの木場の仕業にも
なほあまりたる值段なりけり

ことに一つ面白い百人一首があります。それは「御蔭參り」なる出來事についての百人一首です。御蔭參りと云ふのは元來伊勢太神宮へ拔參りすることですが、殊に德川時代に約六十年目の周期的に行はれた大仕掛の拔け參りのことをさう云ふのです。其時期になると或地方に御祓が降るのをきつかけに、其地方の者が我も我もと出かけるのが忽ち四方に波及し、全國總動員式の拔參りになり、小さなマイグレーションを惹起すので、隨分の混雜騷動だつたらしいのです。所で幕府の末期には明和八年と文政十三年（丁度六十年目になります）にそれがあつたと記錄にありますが私の蒐集中に右兩回の御蔭參りのもじり百人一首があります。明和八年のは繪本おかげ百人一首と題した頗る古雅なもの、文政十三年のは笠亭仙果が前者に大增補をして同行百人一宿大土佐草と題したもので、板元の序文に左の通りあります。

『東西〳〵おかげごはんじやうに付まして新作あまた出まする間私店にても何がな一部しゆつたい致し度作者仙果へ申付ましたる處かゝるお蔭に拔參おかげ百人一首と申明和八年できの本をお持つたへなされ升たそれをかりうけ歌仙をそへ口諳とかしら書をあらたに補ひさつそくかきくれ升てござり升。

この不思議な現象の宗教學的社會學的心理學的說明は別にありませう、此二部の道化百人一首は實に事件の有力な記錄で、其際の事情と氣分とがかなりに分ります。

二　好劇的の意味

火事や御蔭參りは事變ですが、日常の行事で江戶人の血を湧かせたものゝ一つは無論芝居でせう。ここで江戶つ子の好劇氣分を發露させた百人一首が澤山あります。先づ今日歌白猿一首（寬政十一年）と云ふのがあります。これは白猿五代目團十郎が一旦牛島に隱捿したが再び舞臺に上つて口上を云ふと云ふので、贔負連中が力瘤を入れ、立川談洲樓焉馬が肝煎りとなつて、四方眞顏を始めの狂歌師連が祝歌讚歌を寄せ、白猿自身の口上の文言其他を添へて一冊にし、三馬が跋を書いたものです。白猿自身狂歌が得意なことは前に述べましたが、毎日の口上に毎日遣

つた狂歌を挿んださうで、それも皆收めてありますが、『牛島をモウ出でまじとこもりしに、ひき出されたるはなの顔見勢』と云ふ一首が事情を語つて居ます。又八才の孫鰕藏後の七代目が、口上の舞臺に連なつたについての自作だと云ふので、『ちい樣に抱れてあたる炬燵かな』と云ふ句が載せてあります。次に八文字屋自笑撰流光齋如圭畫の役者百人一衆化粧鏡（寛政十二年）と云ふのであります。當時の俳優百人の當り藝を百人一首に見立てたもので、すべて百人一首節用本の躰裁に大凝りに出來て居ます。又曉鐘成編並に畫の芝翫百人一首玉文庫（文政二年）と云ふのがあります。これも同種類のもので、同程度に面白いものですが、芝翫即ち三代目中村歌右衛門の當り藝百種を百人一首仕立にしたのです。其他謙鼓堂尾左丸作の戯場百人一首（文政三年）役者評判記を百人一首式にした三人一首響鏡（刊年不明）など色々あります。又明治になつてからのものでは、梅幸百種（明治二十六年）と云ふ國周筆五代目菊五郎の當藝の立派な錦繪があります。考鼠堂永機宗匠の畫賛百句が附いて居ますから、コレクション中に加へました。

一三　法律的の意味

併し演劇に關する百人一首で以上のものよりも遙に古くして且有名なのは芝居百人一首ですが、此本には法律問題を惹起したと云ふ特色がありますから別にしました。此本は非常な珍本で、原版は到底手に入りません。大正三年に演藝珍書刊行會から出た縮寫複製本がありますが、其卷頭の伊原青々園氏の解題に左の通りあります。

『本書は元祿六年五月の開板にして、鳥居清信が畫くところ、稀代の珍本なり。現存するものにして予が知れるは、東京松廼舍文庫及び大阪雅俗文庫に藏せらるゝ二部のみ、未だ他にあるを聞かず。思ふに清信がなほ師宣を摸せし壯時の筆に成れるか如きも、豪放の氣全幅に滿ちて、自から後世「鳥居風」と稱せらるゝ鼻祖の筆致をほの見るを得べし。（中略）要するに一種の役者評判記にして、（中略）市川團十郎守田勘彌等名優一百の品隲に至りては、當時劇壇の面目躍如たるを見ると雖も、其筆者の何人なるかを知らず云々。』

この松廼舍文庫と云ふのは安田家の書庫ですが、そこへ納まる前の持主は關根只誠氏だつたのです。所で關根氏が讓渡の際自家へ保存の爲め造らせたと思はれる精巧な敷寫し本が偶然私の

手に入りましたが、それによると關根氏は原本に左の如き奥書をされて居て、それに此本の法律問題が記るされて居ます。

この書は元祿六年夏五月の開板にして、はじめは芝居百人一首と題號しゝが、賤き河原者をやんごとなき小倉の撰に擬してものせるよし、尤憚あるよし時の書物奉行服部甚太 より沙汰ありければ、四場居色競と改題しけり。(中略)されどなほ體裁をかへざりければにや、更に町奉行能勢出雲守より發賣を禁ぜられ、梓主平兵衞といへるは輕追放に處せられぬ。かく製本僅かに數十部に滿ずして、世に希有の册子にてありき。(中略)おのれも年頃いかで見まほしかりしを明治十年のころこれもいまはなき友なる元魁子が秘藏せるよしゆくりなく聞いでゝ、漸にしておのれのものとはなりぬるをこたび文玖庵紫香君の強てといはれつるにいなみがたうて、終にのぞみ給ふにまかせ參らしつ。

明治十七年甲申菊月

かくいふものと持ぬしは

關根只誠

右の發賣禁止理由は如何にも馬鹿々々しい樣ですが、德川幕府としては寧ろ當然でせうか。同く松廼舍文庫所藏の珍本に犬百人一首(寛文九年)と云ふ道化百人一首があつて、私は稀書複製會の複刻本を持つて居ますが其作者たる幽双庵と云ふ狂歌師は罰で目がつぶれたと傳へられて居ます。

一四 外交上の意味

所が江戸人ものんきに芝居ばかり見ては居られなくなりました。それは例の『泰平の眠をさますじやうきせん』が來たからです。併し江戸人はやはり江戸人で、早速アメリカ船渡來の百人一首を作りました。同じ様なものが外にもありませうか。私の持つて居るのは、今はやるどうけきやうかと題する街上で讀賣りでもしたらしい作者の名も年號もない粗末な小冊子で、全部排米氣分で充滿して居る中の一半が、次の様な下手な狂歌と歌相當な挿畫とをならべてあるもじり百人一首です。

泰過て四月きたならあめりかを
　此つきじまでくびをかくやま

あしよはのあめりか人をくがへあげ
　しとうちにしてらくにかもねん

あめりかどくものかよいじのりきたる
　此つきじまでうつてとゞめん

千早振神の利やくであめりかに
　からくれないでおいかへすとは

すみなれぬきしによつたらあめりかを
　一トうちにしてこゝろよからん
ふくからに神風ふいてはせんして
　あめりかぶねはあらじとゆふらん
あらしふくみうらのおきでじよきせん
　くだけてはまのたきゞなりけり

一五　明治維新史としての意味

扨て愈々明治維新が來ました。百人一首界にも維新が來たとでも云ひませうか、今までの遊戯的氣分が抜けて大分眞劍になつて來ます。先づ續々と出來たのが維新功勞者の百人一首です。明治七年に柴崎延房編小林永濯畫の義烈回天百首が出ました。烈公・和宮・梅田源次郎・藤田東湖・吉田松陰・平野次郎・月照・頼三樹・野村望東女・勝安房と云つた様な顔觸れですが、例の『ふるあめりか』の歌の遊女喜遊が加はつて居るのは珍です吉卷尾に『石にあらはす一百名は何れも正義精忠にて遂に舊弊を一洗し文明開化の今日に至れり』とあります。明治八年高畠藍泉編永濯芳虎畫の近世報國百首も同様のものです。所が明治十二年篠田久二郎編生田芳春畫の明治英名百詠選及び明治十三年沼尻絓一郎編の明治百人一首になると、頽廢の破壊的な傾きをした人よりも明治の建設的方面を擔任した人物の方が多くなり政治家軍人の外工業家學術文藝の士が加はつて來ます。例へば佐藤尚中・佐藤進・中村敬宇・平尾(下田)歌子・跡見花蹊・澁澤榮一・福澤諭吉・安井息軒・僧五岳・津田仙・梁川紅蘭・重野安繹・高島嘉右衛門・松本順・大倉喜八郎・三井八郎右衛門・岩崎彌太郎・行誠和尚・長三洲・田中平八・箕作麟祥・佐田介石・守田治兵衛・玉乃世履などです。又明治十四年安井乙熊編松齋吟光畫の明治英名百人首には當時の諸新聞の代表的記者が出て居ます。福地源一郎(日報社)・栗本鋤雲(報知社)・成島柳北(朝野新聞)・沼間守一(毎日新聞)・高畠藍泉(讀賣新聞)・岸田吟香(日報社)・藤田茂吉(報知社)・中村武雄(曙新聞)・前田健次郎(繪入新聞)・假名垣魯文(いろは新聞)・などです。更に明治十五年谷壯太郎編歌川國[illegible]畫の愛國民權演說家百詠選と云ふのが此類で一番面白いものです。口繪に『明治會館演說之圖』と云ふのを掲げ、序文に

『苦因近世歐米の流風に擬し、演說を以て世道を裨する者少なからずとす。即ち普學の勞を待たずして、人智を開達し人心を憤發せしむ

るの美擧ならん。今や議士の言行を摘み以て之を滿湖に公示せんとす。請ふ看官其れ之を袖にせよと云爾。』

とあります。而して内容は板垣退助に始まつて大隈重信に終り、片岡健吉・山口卯吉・末廣重恭・星亨・島田三郎・中島信行・肥塚龍・佐治實然と云つた顔觸れで、先づ以て演説家が半數以上ですが、併し演説とは縁の遠い實業家連も相當に多く、中には蓮月尼・今昔・今岬など、云ふどう考へても演説家とは云へない連中もあります。要するに民間にあつて氣を吐いた人物と云ふ標準なので、そこが此集の面白い所、即ち百人一首が段々デモクラテイツクになつたのを注目すべきです。そこで愈々國會開設となると、明治二十四年に國會議員百首が出ました。伊藤洋次郎編歌川玉英畫で、第一回の上下兩院議員中から選んだ百人一首です。議院の内部外部の口繪が附いて居り、序文に『吾人の毎に渴慕する國會議員諸君の風骨巍然として隻手國家の重きに任ずる偉容性行を知る便に供するのだ』とあります。百人中今存命なのは、細川潤次郎・島田三郎・徳大寺實則・犬養毅・西園寺公望・杉田定一・大野爲之・河野廣中・尾崎行雄等の諸氏です。

其他明治時代の記録としての百人一首には、明治十五年渡邊徴編の眞名學校校主自筆百人一首と云ふ明治初年の私立學校狀態を知らせるもの、明治二十一年高崎龍太郎著の北海戲作百人一首と云ふ北海道開拓の困難を語るものなどがありますが、こゝに一つ是非御紹介して置きたいのは、明治十三年小笠原美治編の民間至寶大全明治新百人一首です。此新百人一首は後醍醐天皇以後明治に至るまでの人物の百人一首で、それ自身も面白いものですが此本が特に面白いのはそれが明治新時代のエンサイクロペデイアであることです。元來徳川時代の小倉百人一首本には節用式のものが多かつたことは御承知でせう。例へば群書百人一首寶鏡（文政三年）には、小倉百人一首其ものゝ外左の諸項を收録しております。

江ノ島の勝景（口繪）・和歌の略解・琴の組うた・夢占ひ判斷・七夕の歌づくし・御所こと葉・男女相性吉凶・鶴折かたの圖・文封じやう・月のかはり名・女中詞づかひ・大和ことば・萬染色の名・疊紙折形の圖・小笠原をりかた・進物目録書樣・婦女をしへ草・諸禮躾かた・食事しつけ

かた●給仕の次第●婚禮作法の次第●平生女心得●七夕祭の事●四季之曲盡序●名香六十一種名寄文章●婦女いましめ草●琴三味線の事●衣裳の正字盡●小兒之藥法●一生涯の祝事

所で此明治新百人一首もやはり此節用式百人一首の系統に屬するものですが、それが明治維新につれて當時の所謂文明開化式に進化した所を注目すべきです。其項目と前記文政三年の本の項目との對照は、實に舊日本と新日本との對照です。而して又今日から之を見ると、明治初年の制度や社會狀態や思想の一端が分り、又當時の人々が新制度に適應し新文明を吸收しやうとした熱心さが窺へて、中々興味があります。其節用項目中新式なものを擧げて見ると左の通りです。

各國旗章の圖●日本全圖（附各府縣）●地球の圖（附各國旗章）●永代太陽曆●横文字いろは並五十音●全世界人員表●五常圖●四大教●野蠻文明の區別●郵便税則略●各種政體●世界大都會經緯●府縣概略改正表●知事縣令集覽●官省諸局●官等及月給表●金銀圖貌●改正各行定額金●證券印紙●世界のあらまし●東京大阪汽車賃錢表●鐵道乘車心得●明治史略●布告日用早引●貸借心得草●訓解願心得並書式及訴狀定則●訴答文例略●代言人規則●出訴期限規則抄●地所規則略●利息制限法●利息早見表●布告到着日限●郵便賃錢略表●婚姻略例●驛遞局預ヶ金並ニ手續略則●天氣論略●大日本高山測量●各地沿海周圍里程●家督相續規則略●尺度斤量●內國各地時刻早見表●出版條例略●諸届書願書證書類書式三十餘

更に明治維新文明史として最も興味があるのは、明治六年の文明開化新百人一首編者は總生寛、畫家は有名な惺々曉齋です。餘計な説明は略して其內容の大部分を類題に排列して御目にかけませう。

衣

さらさ地の金巾けつと緞吳絽
　おきまどはせるしら菊の花

金巾の洋粹もあらぬ此しやつの
　あかつきばかりうき物はなし

ざらにきるとんびはとくな大らしや
　ぬれにぞぬれし色はかはらじ

はきごころよきかあしきかごむぐつの
　まだふみも見ず天のはし立

金巾の蝙蝠傘を物数奇に
　我衣手は露にぬれつゝ

おせばあくかま腳卯のぐあいよく

われても末にあはんとぞおもふ

食

屠牛場へひかれてあゆむ牛の身は
けふを限りの命ともがな

豚はかご人は車にのせるなり
我身よにふるながめせしまに

酒飲みはびいるさんぱんあることほる
いつみきとてか戀しかるらん

住

三がいや四かいの樓をぺんきぬり
よしのゝさとにふれる白雪

横濱を出て築地のほてる舘
いづこもおなじ秋の夕暮

ひどたけもいらずわれずと錬火石
やくやもしほの身もこがれつゝ

こゝろなきがらす障子の明立に
砕けて物を思ふ頃かな

らんぷやらこつぷの棚に突當り
つらぬきとめぬ玉ぞちりける

散髪

此頃のひとつぺつついそりたては
三笠の山に出し月かも

撫付て風にふかるゝざんぎりの
亂れ初にし我ならなくに

ざんぎりや半髪あたま總はつに
もみぢのにしきかみのまに〳〵

巻烟草

鼻の先あつくなりにし巻烟草
長くもがなと思ひけるかな

人力車

人力にのりて俄に夕立の
衣ほすてふ犬のかく山

急がして酒手をねだる人力車
わが衣手に雪はふりつゝ

もとでなし能なしゆへに車ひく
人をも身をもうらみざらまし

汽車

新橋や横濱通ふ蒸汽車に
しるもしらぬもおふさかのせき

新橋の鐵道開き濱御殿
今一度のみゆきまたなん

蒸汽車のはしるは見えて石炭の
さしもしらじなもゆるおもひを

鐵道をよそめにおかを行人は
いかにひさしきものとかはしる

汽船

各國の船のしるしは水の面に
流もあへぬ紅葉なりけり

大風もいとはずはしる蒸汽船

雲井にまがう沖津白浪

入船と川船にならす大砲に
いくよねざめぬ須磨のせきもり

風船
風船にそらの窮理を思へども
人の命のおしくもあるかな

電信
きのふあひけふ別れてゝてれがらに
まつとしきかば今かへりこむ
君がむねわしが心のてれがらふ
人づてならでいふよしもかな

郵便
郵便にこゝろのたけは盡せども
あはで此世を過してよとや

瓦斯
瓦斯燈のひかりはあれどおく霜の
白きをみればよぞ更けにける
瓦斯燈のひかりを照らす雇人
ひるは消へつゝ物をこそ思へ
がす燈の光りぞ今は頼みなる
雲がくれにしよはの月かな
がす燈のいまだ開けぬ町中は
戀しかるべきよはの月かな

天文
日輪と地球の影にかくれずば
雲のいづくに月宿るらん
進歩して天文臺のひとり居に
傾ぶくまでの月を見しかな

暦
十五夜も丸くはならぬ新暦の
有明の月をまちいづるかな
いにしへと今と暦はかはれども
みそぎぞ夏のしるしなりけり
そんでい（日曜日）の外にはたえておはれねば
しのぶることのよはりもぞする

書生學生
おこたりてのむと買ふとの書生輩
身のいたづらになりぬべきかな
小遣に盡きてぼんやり書生べや
衣かたしきひとりかもねん
怠らぬ書生机の石盤は
人こそ知らねかはくまもなし
學校へせがれを入れてうつりかひ
ふるさと樂く衣うつなり

官吏
横文字をよみて月給とる時に
身を盡してもあはんとぞ思ふ
免職をおしむ諸官の人べらし
我身ひとつの秋にはあらねど
免職になれば出て行くすめかけの

閑のひまさへつれなかりけり

洋行　洋行に出かけて國を見かへれば
ふじの高根に雪はふりつゝ

西洋に留學をする年月は
あまりてなどか人の戀しき

萬國をめぐる夫を思ふ身は
行衞もしらぬ戀のみちかな

茲に來てまもなく旦那洋行に
夢の通ひ路ひとめよくらん

新聞　御布告と日々新聞をよむべしと
ひとには告げよあまのつりふね

道ばたに小便したも新聞紙
人にしられで來るよしもがな

法律　刑律にかゝりてはてる贋札師
人しれずこそおもひそめしか

娼妓解放　解き放しされて親なし家なしの
世をうぢ山と人はいふなり

洋妾　親二人り兄まですごすラシヤメンの
戀ぞつもりてふちとなりぬる

新しい女　袴着て馬をはしらす町中の
乙女の姿しばしとゞめん

軍事　たそがれの調練場所にらつぱふく
聲聞く時ぞあきは悲しき

開墾　からふとを開き蝦夷地の開墾に
あはれことしの秋もいぬめり

山畠を開墾しても水氣なく
人めも草もかれぬとおもへば

新發明　世に稀な新發明をこゝろがけ
物や思ふと人のとふまで

機械　水はぢく急なぽんぷのかけ引に
かけしや袖のぬれもこそすれ

うちわれし蒸氣の釜の湯かげんを
はげしかれとはいのらぬものを

かけ直しかけなほしてもやす時計
みだれてけさはものをこそおもへ

舊物衰頽　いろいろの西洋植木はやり出し
松もむかしの友ならなくに

撃劍も觀物となりて武の道の
末のまつ山浪こさじとは

開帳のはしり大黒釋迦不動
人こそ知らねあきは來にけり

中國とほこりし支那の因循に
かひなく立たん名こそをしけれ

家筋をいふてはなげく奥女中
かこちがほなる我なみだかな

年月に百事新たにうつれども
ふりゆくものはわが身なりけり

＊　＊　＊　＊

成程『年月に百事新たにうつ』り行く今日、『ふりゆくもの』の無駄話でもありますまい。先づは此邊で止めて置きませう。

三人の観劇客

生方敏郎

オスカア・ワイルドといふ人の書いた小説の中の人物の言つてゐる言葉に「賢い者と馬鹿者とが、此世の中で一等うまくやつてゐる、彼等は、安々と坐つて芝居を観る。勝利の味も知らぬ代りに、尙更敗北を知る事からは、免かれてゐる」といふのが有る。

これは、一寸面白く、うなづける言葉のやうだ。だが、私は、安々と坐つて芝居を見る見物客の仲間に、もう一人「金の無い男」をも加へたい。

その反對に、浮世座のお芝居に登場する役者達は、A、金の有る者、B、智慧の有る者、C、美貌の有る者、D、金と智慧と有る者、E、金と美貌と有る者、F、智慧と美貌と有る者、日、金と智慧と美貌と有る者、そんな一座で、先づ幕を揚げる。

芝居は元田から初まる。初め靜かに、追々俳優は熱中し、金切聲を出し、又は怒鳴り、泣き、又笑ひ、ドド立ち廻りと成る。

だが、筋書は、毎年大抵定つたものだ。

大臣に紛裝した役者は、二枚舌を使ふ。之を劇通は「××××」といふ。

代議士達の、或者は居眠り、或者は彌次り、又或者は鐵拳を揮ひ、頭の中では金と妾のことを考へ、口には三百的屁理窟と酒の匂とを吐いてゐる。これを劇の專門語で「國政を議する」といふ。

資本家は、貧しい勞働者の膏血を搾取して大に儲け、盛に脫稅する。之を社會奉仕といふ。

貴婦人は姦通する。これを專門語で、「因襲道德の反逆者」とも又は「愛に眼覺めた生活に入る」ともいふ。

勞働者は怠ける。勞働商人の煽動に乘る。これを芝居の通人は「階級戰爭」と云ふ。

小官吏は收賄する。これを「役德」といふ。

藪醫者は院長と成り、又博士號を受け、輕い病人を重くし、重い病人を殺して樂にする之を「仁術」といふ。

坊主は墓地を高く賣り墓石墓標を賣り飛ばし、時には寺の寶物をも賣り、貧しい美人を拾ひ上げて妾宅にかこふ。之を「衆生濟度」といふ。

巡査諸君は人民に向ひ××××る。之を劇通は「秩序公安を保つ」といふ。

藝者は待合に宿泊すること盛んである。これを「世間好景氣」といふ。

汽車は脫線し、電車は衝突し、自動車は人を轢く。之を「交通の發達」といふ。

新聞記者は針小棒大に書き立てて、世間を欺き擾き亂す。これを「記事正確、報道迅速」といふ。

ペンキ屋職人組合と型付染物職人組合と連合して、例年の通り商品見本陳列會を、上野竹の臺に開く。之を「帝國美術院展覽會」といふ。但し、官許藝術門漬小業の一端である。

若い美人と美男とに紛する役者達は、猫入らずを頓服して悶絶する。不良靑年に紛する人々はラララララと叫んだり、不良少女に紛する女優達と抱擁して舞踏する。そして「新時代に活くる者は我等也」といふ。

バカ者は先刻から欠伸ばかりしてゐる。

醜い男は居眠りしてゐる。

貧しい男は傍を向いてゐる。三人が三人とも、ワイルドのいふ樣に、そんなにうまくやつてるとは思つてゐない。

誰かゞ云つた。

「毎年同じ筋書ばかり見せられてるんぢやあ詰らんねえな、お隣りのボルシエビ座の方が面白相だぞ」

「バカ。そんな芝居を見度がるもんぢやねえぞ。それよりか、アメリカ座の中幕が面白さうだ。見に行かうよ」（終り）



犬の近吠

高畠素之

國粹的名物

◇伊豫節が松山の名物名所を誇り、博多節が柳町情緒を讃ひ、仙臺衆が『わしが國さ』と唄ひ出すごとく、古往今來、俚謠俗歌の類は、凡んどお國自慢的要素を以て成育して來た。このお國自慢的感情によるなら、越中富山の反魂丹も、越後蒲原郡の毒消し賣りも、共にお國名物として誇るに足るべく、さては潮來の菖踊り、出雲の鰌すくひ、木曾の御嶽さんの末に至るまで、諸國諸方の名產として珍重すべきものであらう。

◇建國以來三千載、諸般の學藝美術の發達を遂げた日本國も、この意味に於て、海外に稱揚すべき幾多の名物名產を有する。碧眼紅毛者流にいはせれば、日本は美の國、武の國で、從つてハラキリとゲイシヤガールこそ、日本の代表名物だといふ。名物にうまいものなしとやら。して見れば、切腹や藝者が名物ばえがしないといつて、改めて正誤訂正を申込む程に人道屋にもなれぬが、さりとて一寸心外な公憤も抑へ兼ねる。

◇さればとて學問、工藝、美術は元より、軍事外交の端に至るまで、毛唐のそれに比して、勝算の立つものとては更になく、茲に國粹的名物を物色すれば、頗るその候補難に苦しまざるを得ぬ。然し唯だ一つ、眞に唯だ一つ、筆者の確信を以て公言し得る限り、わが國產鬪犬のみは、國民の意を強うせしむるに足るものである。ブルがどうの、テリアがどうのと能書を並べ立てても、わが土佐犬の猛勇に比すれば、彼等は尾を捲いて悲鳴

を擧ぐる以外何等の藝當をも有せぬ動物だ。

◇大正十一　戌年、その初刷紙上で犬談を縦にするの快は割愛しやうが、それは兎に角、この犬さへあれば、東夷、西戎、南蠻、北狄、世界の果ての果てに至るまで、凡そ犬同志の喧嘩なら、決して祖國を辱しめる憂はない。假令陸海軍の戰爭に依つて、一敗地にまみれるの折ありとも、犬の喧嘩に負ける心配は少しもない。士道地に墜ち、上下文弱に流るるの秋、誠に古武士の面影をも想像せしむべき土佐犬こそは、世の誇り、國の誇り、國粹的名物として中外に宣揚するに足るものである。

◇スペインに鬪牛の名物あり、日本に鬪犬の名物あれば、東西呼應して喧嘩の粹を競ふ筈だが、如何にせん、鬪犬の儀はお上によつて固く法度されてゐる。思ふにこれが理由とする所は、猪突猛撃の犬鬪が慘酷だといふのであらうが、如何にせん、鬪犬彼れ自身にして見れば、喧嘩はその三度の飯と共に生理的必要物である、交尾期の燥狂を憐れんで去勢を施すのが動物虐待なら、鬪犬に喧嘩をさせないのも動物虐待である。犬の心も知らず、贔負の引き倒しとはこの謂である。

◇日本は斯くの如くして、折角の國寶をも持ち腐れにしてをる。まさかその埋合はせをする心算でもあるまいが、幸か不幸か、警察的意義に於けるイヌだけは、年と共に、日と共に旺盛を極めてゐる。さすがに、プロイセンの警察國家を模倣した國柄だけあつて、イヌ政策に於ては、誇るに足るべき名物の一つである。通稱危險人物事、即ち要監視人の後へに隨ふ尾行を呼んでいみじくもイヌと命名したのは誰か知らぬが、こんな珍現象は外國で見られた圖でなからう。

◇何れにもせよ、日本は犬の國であり、今年は戌の年である。大本教なら早速こじつけに、國運發展の瑞兆だと喜ぶかも知れないが。本物の犬ならば兎に角、例の警察イヌの方だけ勘辯して貰ひ度いものだ。聊か年頭に際して希望を表する次第である。

主義者狩り

◇座頭の富士登山と、憲政會の異議呼ばはりと、而して警視廳の社會主義征伐とは、勞して効を得ざる大正的三幅對である。骨折り損の足勞れ儲けといふが、泰山も鳴動するばかり陣

鐘太皷を打ち鳴らし、結局一匹の鼠さへ捕獲出來ずに終るその筋の主義者狩りを見れば、人事とは思つても痛々しい哀愁に咬られざるを得ない。

――（犬の○吠）――

◇現にこの間などは、誰がどう幽靈の正體を誤つたか知れぬが、例の『お目出度誌』騒ぎが突發し、第二の幸德事件とまで觸れ出しながら、トドのつまり有耶無耶裡に葬つてしまつた。喉元過ぐれば何とやら、大抵の人間ならそれに手を燒いていい筈のもんだが、まだ〳〵懲りもなく、電柱に貼紙をしたとか、しやうとしたとか騒ぎ出し、これも過激派の廻し者に相違ないと鐵に睨んでしまつた。

◇學生殺しの金ちやんを主義者扱ひにして見たり、原敬殺しの艮一を曉民會と誤診するお役人の頭腦からすれば、手淫代りの貼紙も、過激派の手先きと早合點するに不思議はないかも知れない。然し、これが始めての事件といふのではなし、毎度のところを餘り見つともない狼狽振りは、見せて貰ひ度くもなかつた。全國的な一網打盡を敢行して見たり、高等係の非常招集をやつて見たり、牛刀を用ひ過ぎるにも程がある。

◇大體社會主義などといふものを、さも大した代物であるかの如く考へてゐるお役人の被害狂振りは、先づ噴飯に價値する。我鬼も人數ほどに集まれば、革命歌の一つも唄はうが、國粹會や民勞會の前に出たら最後、グウの音さへも出せない主義者づれに、何の『陰謀』がどこにあらう。演說會があれば、『官權横暴！』と遠くから吠え掛るしか能のない彼等が、コソ泥式に貼紙をして歩るいたからとて、陰謀呼ばはりは、餘りに腰の據はらな過ぎる話ではないか。

◇それをどう感ずつたものか、要路にある某司法官は、第三インタアナショナルと關係させて見たり、上海共產黨と連絡させて見たり、勿體振つた顔をしながら、臆面もなく疑心暗鬼ぶりを發揮してゐる。（東朝十一月十五日夕刊）。平惟盛は水鳥の羽音に愕ろいて、臆病者の龜鑑（?）とされたが、この先生に至つては、起すべき疑心の種もないのに、樣々と暗鬼に惱まされてゐるから面白い。

◇そこへ來ると、警視廳の大久保課長は徹底してゐる。社會主義者は『仲間同志で互に爭鬪し』『主義の宣傳より自分の賣名

のため』に、色々な企てをしてゐるのだといふ。(東日十一月十五日朝刊)。他愛のない事を口走つて危險がつて見たり、兒戲に類する貼紙をして見たり、それで一つぱしの主義者ヅラを振り廻すのが彼等の身上だ。お上や、新聞や、世間までが、彼れこれと騷ぎ立てるので有頂點になつてしまひ、愚にもつかぬ貼紙なんどを『革命』がつてゐるのだ。

◇由來連中の企てとはこんなものだが、幸に相手が慢性被害狂のお上だから、鼠一匹の騷きも泰山の鳴動と買ひ冠つて吳れ、その都度社會主義者とやらが、さも何かしてるかのやうに世間も誤解して吳れる。社會主義者に取つては光榮の極みだが、ダニエル以上、大岡以上の大久保課長に合つちやあ一溜りもない、此間の第二大逆事件(?)といひ、今度の貼紙一件といひ、たうとう一匹の鼠さへ獲めなかつた所を見ると、徒らに大久保特別高等課長をして名を成さしめた觀がある。

◇船頭多くして船山に上り、巡査多くして社會主義狩りに忙殺さる。太平の世の暇つぶしとはいひ、飛んだ人騷がせの茶番狂言は御免蒙り度い。そんなに人手が余つて困るなら、愚にもつかぬ主義者狩りなどをするより、賴朝の故智に倣つて富士の卷狩りでもやるか、それとも天城山の猪狩りでもやつて見たらどんなものだらう。

外國利用

◇ペンキ臭い洋館が立ち並び、改良服の女が出娑張ると正比例して、日本人の生活は內外共に歐米への心醉濃度を加へつつある。條約改正以來踏習する國策は元より、學者、女優、畫家、社會主義者等の末に至るまで、悉く盲目的な外國崇拜に終止してゐる。神風連の昔語りではないが、これではどうやら腹が立たない方に、癇の虫の異常があるらしい。

◇國學者の怒りを買つた荻生徂徠は、その盲目的な支那心醉に發してゐるが、この頃の植民地勞働歸朝者のメリケン崇拜振り、繪描き行脚に出掛ける美術家のフランス憧憬振り、さてはそんぢよそこらの社會主義者が陷つてゐるロシヤ狂信病等、これではまるで上下を舉げて、外國の屬封領土たらん事を希望してゐるやうなものだ。

◇筆者元より國家主義であり、從つて日本の國を愛し、夢の

うな萬國主義を排斥する　如何に矮少の短軀を厭ひ、黄面の醜を嫌つても、我等が日本人である事に變りはなく、從つて白皙長身の西洋人とは、既にその事だけに於ても差違がある。その差別感の是非善悪は兎に角、毛色目色の異なる限り、その體統の相違する限り、事實的に人種的な偏見を抱くに不思議はない。

◇世の社會主義者の論法によれば、資本制度を撤廢すれば國と國、人種と人種との爭ひも當然消滅すべきものだといふ。それが證據にプロレタリアの運動は國際的に協同してゐるともいふ。アメリカの資本家も、日本の資本家も、その資本家としての資格に於ては共同の利害關係を有する。その利害休戚の存する所、資本家は資本家同志で國際的に協同し、勞働者は勞働者同志で協同するのは當然で、もし勞働階級が國際的に協同するといふべくんば、資本家も尚ほ現在協同しつゝある。而も人種間の爭鬪は絶ゆる間とてはない。

◇萬國の勞働者が團結するは、啻に資本制度を破壊するといふ共同目的に就てのみで、それ以外の意味に於てでは決してない。從つて階級的な縦斷鬪爭が解決されれば、直ちに和平共同の世界主義が成就されると考へるのは、どう見たつて餘りに楽天的であり過ぎる。もし勞働者が本來的に國際的であるならば、加州の出稼人がメリケン勞働者（而も社會黨や勞働組合に席を有する）に排斥される理由は説明出來なくなる。

◇勞働者が階級的に國際的であるといふのは、資本主義を倒壊せしめる目的への必要であつて、それを不變の保證と考へるは短見の誤りを免れぬ。徳川幕府を倒すために、薩長が共同動作を採つたといふ事のみを以て、薩長の永久的協同を意味するなら、明治年代に於ける兩藩閥の爭鬪はどう理由づけたらいいのであるか。毛色目色の違ふだけ、この點に關する注意と用心には更に鋭敏でなければならぬ。

◇その意味に於て何人も國家主義者たるべく、それと共に、歐米の文物、制度、學術、工藝その他一切の輸入は、悉く國民の生活内容を豐富ならしむる目的と心得べきである。國家主義者なるが故に外國を排斥せず、寧ろ却つて利用せんとする所に新しい意義が生ずる。そこに理論上の矛盾は存在し得ない筈で

ある。

◇例の社會主義にしても然りである。マルクスは獨逸人であり、而して『資本論』は英國のそれに對する見解である。サンヂカリズムは佛蘭西の產物であり。ボリシエヰズムは露西亞人の發見であり、共にその國民性と社會事情に發生した特種現象である。翻譯的社會主義者は、何らの必然性を考慮に入るる事なしに、直ちにその雛形だけの理論的好惡を表明する。日本人が佛蘭西人又は露西亞人でない限り、更に日本の產業狀態が佛蘭西及び露西亞のそれでない限り、サンヂカリズムもしくはボリシエヰズムの直譯的應用は成立し得ない。

◇もし社會主義のフアナテイツクの言草のごとくんば、マルクスを讀むの必要は、マルクス彼自身に化成するの意義であり、ボリシエヰズムを究むるは、露助そのものに歸化せんとする希望である。牛肉を食はんとする者の目的は、幾何カロリーかの熱量を身に收めんとするためである。然るに彼等フアナテイツクの無謀は、牛肉を食らつて兩角動物化せんと欲する如きものである。日本及び日本人に取つてのマルクス及び社會主義は、恰も牛肉のそれと同一の意義と目的を有する。その意味に於て、メリケン文明を吸收するはメリケンの屬封たらんとする運動ではなく、またマルクスを讀み社會主義を輸入するは、決して猶太人（ジユー）の學說に跪拜し、露助（ロスキー）の糟粕を嘗めんとする目的ではない。ただあるものは外國利用の眞理のみである。

國家心

◇學校に私立と官立の區別があるごとく、品物に舶來と和製の差違ある如く、故意か偶然か、社會運動の分派を見渡しても、この品種の區別は大體に於て該當する。然し同じ官立中にも大學程度と專門學校程度との二派があり、更に同じ私立中にも、內務大臣免許の一派もあり、また純然たるモグリ商賣の一派もある。

◇官立派もしくは官營派の代表は、何といつても協調會である。協調會の溫情主義、協調主義に對しては、改めて野暮をいふ必要もないが、官吏、學者、實業家の現役軍及豫後備軍を編入する彼等は、純然たる權威を以て臨むところ、聊か柳屋小さんの官營藝者か、官營汁粉の皮肉味がある。

◇民間事業としてのそれに於ても、內務大臣免許の運動者思想家は、產婆の免狀と同樣、危險性の免疫者たる某法學士、某某指導者等を意味する。社會主義者のコソ泥式な方法はいふまでもなくモグリであつて、無免許開業者と同樣、その取締は仲々に手酷しい。日蓮主義を以て勞働運動の指針と心得る大迫等の護國團は、その如何なる點よりするも和製たる條件を備ふると共に、大方の主義者指導者は、盲目的た外國模放者たる點に於て。その魂は舶來根性である。

◇當路者はこの四派に各種各別の待遇を取り、煽げたり、脅したりしながら、操縱して行く所に職務的神聖が與へられてゐる。然るにその取締りを職業とするお役人が、お役人でする事なす事が悉く見當違ひで、毎度の事ながら落語の與太郎的笑話柄を與へて吳れる。漫摺屋と時評子の窺ひ所はその御愛嬌振りにある。

◇大體思想の取締りといふ事は、雲斬りの術と同樣に頗る手應へのないものだが、この頃役人は更に思想善導などと人を笑はせてゐる。牛に曳かれて善光寺に詣つたり、お役人の先導で思想を涵養したりする唐變木が、大體この世智辛い世の中にゐると思ふ所に職業的忠實さがある。

◇そのあり得べからざる所を、さもありさうに誤診するのはお役人の愛嬌であるが、その調子で强制的に浪花節を聽かされたり、義士劇を見させられたりしては、される方々に飛んでもない迷惑だ。その深切がある位なら、一層のこと緘默を守つて、放つたらかして置いて貰ひ度いものだ。

◇思想を取締るなら取締るらしく、世間の思惑に氣兼ね氣苦勞して見たり、裏手搦手から口說き落すやうなことはせずに、投獄、遠島、斬罪、打首等、飽くまでも峻嚴苛辣にやつたらよかりさうなものだ。『白禍』を以て脅しながら、つひぞそれらしい手酷しさを見せた事もなし、結局いつも龍頭蛇尾に終る取締方針は、一面からいへばお上を甘く見縊る條件ともならうではないか。アレキサンダー二世の妨遏、メッテルニヒの迫害を加へたならば、採る方も氣持ちよからうし、採れらる方だつて玉石の自然淘汰が行はれ、僞者は去り眞物は結束して面白くならう。

◇大きな聲ぢやいへないが、警察がどうの取締がどうのといつて見たところが、社會主義を商賣にして生計を立ててゐる者が、これ程大勢社會に容れられてゐる事は、何といつても甘いもんだと笑つてやり度い。人騒がせの陰謀斷だつて、高々が治安警察法か、出版法か、新聞紙法に問はれて、××××××をするがオチである。第一社會主義文筆を以て立派に生計を立てさせて置くなどは、溫情屋跋扈の日本ならではの感慨が濃厚である。肝心のお祖師様マルクスだつて、終始一貫喰ふや喰はずで陋屋に果てたではないか。

思想善導

◇年寄りの冷水とはよくいつて呉れた。日本といふ國が骨董溺愛國であるためか、それとも長幼序ある儒教的訓練に慣れたためか、その冷水的な御愛嬌を、隨時隨所に見せてゐるのは面白い。その感情を最も濃厚ならしむるものは、しかし何といつても役人のオセツカイを措いて他になささうだ。

◇役人といふ商賣は、人民を治めたり、または治むる者の手先きとなる仕事だけあつて、職掌柄、時に警告を發して見たり、時に取締を訓じて見たりするのも無理はないがそれがどれもこれも正鵠を失してゐる所に御愛嬌がある。何事ぞ花見る人の長刀！出姿張る幕でもない所に身柄を辨へずに飛び出し、さて鹿爪らしく何事かを訓じる。

◇展覽會があれば竹の臺へ出張し、芝居が開けば嚴い目を光らし、佩劍をひねつて風俗の保全に努むるは感心の外ないが、取締られる『裸體畫』や『脚本』の身になれば、さぞかし失笑を禁じ得ないだらう。女湯を覗くと同一心理で美術品を取締り、春畫を眺めるつもりでフイルムをカツトするあたりは、お役人ならでは出來ぬ愛嬌である。

◇その邊は先づお役目柄で御苦勞とも存じてやれるが、思想善導などと與太られると、此方もつひ腹に据ゑ兼ねるやうな事も往々ある。土偶人形が傀儡師に繰られやしまいし、自由氣儘に引張りまわされて耐るもんかといふ氣にもなる。それが例の浪華節宣傳や、八木節宣傳だといふに至つては、無氣になつても餘りの事に拍子拔けがしてしまふ。

◇まさかそれ程までとは行かないが、この頃文部省が直轄學

校當局に與へた警告的通牒などといふ奴も、これも聊か以上に御愛嬌タップリの代物である。南次官の言によれば、この頃知識階級に起る情死沙汰、姦通事件、駆落ち騒ぎ等、苟しも知識階級の『思想破綻に援助』するが如き口吻を洩らしてはならぬといふ意味なさうだ。如何に研究が自由であるとはいひ、直轄學校の教師ともあらう者が、對外的に發表する意見までも、自由ではあり得ないといふ意味が含まれてゐるらしい。

◇市井に轉落する日常の茶飯事にも等しい事件を以て、知識階級なるが故に新思想の勝利となしたり、金持ちであるが故に重大な社會問題を醸させたりする事は、元より南次官と共に『遺憾至極く』である。然し次官の希望によれば、社會的影響が甚大なるが故に、沈黙を守らせやうとするのであるが、此方は尚ほそれが根本に溯り、そんな事を改めて社會問題振る事の莫迦々々しさを嫌つて、而して先づ遺憾を表する次第だ。

◇大正十年下半期は近年にない時評屋の當り年で、政治的にも社會的にも、書入れの大物が續發した。事件あるごとに、何か一席を辯じなければ引込みのつかぬ識者共が、千姿萬態を競つて喧爭したのも無理はない。その間に伍した大學教師共も、參考書片手に廻らぬ舌をまわしてゐたやうだ。此方の身になれば、社會的影響を憂ふるどころか、その呂律のまわらなさ加減に氣を腐らしてゐたのである。

◇冷水ごのみの文部省にして見れば、こんなことさへも頭痛の種となるらしい。苟くも直轄學校の教師であり、苟くも學問の自由を許された學者であり、苟くも社會の指導者を以て目せられる識者であつて見れば、世人を啓發指導する如き口吻を洩らしてはならないといふのだ。

◇それ程發表されて困る研究なら、決してさせぬに限るべく、またそれ程妄言を吐く危險性があるなら、速に首にしたらよかりさうなものだが、いざとなればさうは行かぬらしい。學を撓めたり、鎖を付けたりして引きずり廻してゐる所に、お上の冷水的興味があるものらしい。

佩劔

◇本物の軍人が東京附近で大袈裟な戰爭ごつこをやつて以來、通りといはず、廣場といはず、棒切れを振り廻したり、砂

利を打つけ合つたりして、一しきり子供の戦ごつこに賑はつてゐる。大將は大將らしく玩具のサーベルを吊り、兵卒は兵卒で竹切れを腰にして、頗る勇壯活潑の極みである。

◇秋旻高き郊外の秋を探ぐつたら、どつかの中學生の行軍と見えて、牛蒡劍を吊つた模擬兵隊が散兵してゐる。中に上級の勢力家らしい男が、將校らしい聲を張り上げて號令を掛けてゐる。腰を見ると例の長い奴をぶら下げてゐる。傍にはこれは本物の軍服を纏つた實物軍人が、頻りに何か小聲で指圖をしたり、注意を與へたりしてゐる。いやもうこれも勇壯活潑である。

◇青年會館に演說會がある。矢張提灯を照らしたお巡りさんが、堵列のまま腮紐を下ろして人民を取締つてゐる。傍の木蔭、家蔭、物蔭にも物々しく武裝したお巡りさんが、一旦緩急あらばといふ身構へで緊張してゐる。いふまでもなく腰には例の奴がガチヤついてゐるが、これはまた不思議な事に、鍔先と鞘との間を麻糸で固く結びつけ、肝心の鯉口が寛ろげないやうになつてゐる。

◇祝日が來た。文武百官が金ピカ裝束を今日を晴れに着飾り、思ひ思ひの乘物を走らせて宮中の參內へと急ぐ。一際目立つて陸海軍人の腰の物は光彩を放つてゐる。軍人に佩劍は牡丹に唐獅子、竹に虎と等しく不可分の好畫題だが、合點の行かぬのは文官と稱するお役人の腰のものである。日頃見慣れた鐵道省の小父さん方まで、尾骶骨を少し延ばしたやうなものを附けてゐるのは滑稽だ。

◇刀劍は武士の魂で、昔から仇や疎にすべからざるものとされてゐた。腰の朱鞘は伊達にはささぬ。必ずや有事の場合に備へられし武士の魂である。その侵すべからざる尊嚴を破り、禮服の裝飾用として餘命を保たせたのでは、何ぼ何でも『武士の魂』に對して慘酷だらう。もし裝飾のためといふなら貝殼細工で間に合ふべく、腰の邊が寂びしいといふなら御商賣の矢立か簿記棒で間に合はして置いて貰ひ度い。

◇更に滑稽なのは巡査のそれである。人民を保護する警官が、人切り道具を帶してゐるといふ理論上の矛盾は、この際どうでもいいことである。外國に例はあらうとなからうとそれも

どうでもいいことである。然し巡査の佩劍は、原則として、拔くべからざるものとされてゐるものだ。して見れば要するに鹿の角と同様に有害無用の長物である。人脅かしの道具が欲しいなら、少しく生蕃人の装飾法でも參考して見ればいい。

◇事あるごとに警官拔劍問題が出されたり、人權蹂躪騒ぎが持ち上がつたりするのは、畢竟するにその無用の長物が齎らせる仕業である。それを未然に防がうとするためか、それとも後日の言拔けにするためか、麻繩なんどで鯉口を固めるの愚策は、愈々以て『武士の魂』を冒瀆するの甚だしきものである。何の目的を以て、何の必要の下にダンビラを下げさせるのか、かうなると外國人でなくとも不可思議とするの外はない。

◇上に立つ巡査風情がこの有様だから、下様の人民共の悴までそれを模倣し、何かといへばすぐ劍を吊つて見たがるのだ。卽ち一高の野球戰には私設巡査が作製され、中學生の運動會には劍を下げた僞似巡査が、場内の看客の肝を支配してゐるが如きは、直言すれば巡査模倣の心理的説明である。

生活改惡

◇文明とは複雜より單純への整理なさうだ。從つて振袖がいけない、日本髷がいけない、米食がいけない、舊劇がいけないといふ例の生活改善同盟會あたりの主張は、この意味に於て文明の原理を眞實的にしたものだと聞かされた。畢竟するに振袖は『効果』がなく、丸髷は『能率』が上らず、米食は『手數』がかかり、舊劇は『活動的』でないといふ趣旨らしい。

◇そんなこんなでこの頃は改良服とか、女優髷とか、パン中尉とか、國民文藝會とかいふものが起つて來た。さなきだに混亂勝ちの女の服装などは、その結果まるで無政府狀態である。服装や趣味の無政府狀態は元より致し方のない話だが、何も彼も功利と能率を主義としなければならないとあつては、どうやら文明といふものも難物である。

◇和漢洋を兼ねたと稱する例の改良服などは、女流教育家連の御覺えも目出度く、既に校服として選定されてゐる所もあるらしい。首の太い、足の短い日本の女學生及び女車掌などが、猫背に纒つた格好は、どう贔負目に見ても香はしいものではない。然しそれも活動的であるといふ話だから、何事も文明とあ

らば我慢するしかあるまい。

◇その邊は先づ目障りになるだけで無難にすむが、食住の方面までこの手を應用されるのだから耐らない。この流行のペンキ洋館の建造者などは、これも活動的であらしむべく設計するのであらうが、幾んぞ知らん西洋と日本との氣候の相違、風變の相異などは忘れてゐる。

◇日本は山の國であり、而して水の國である。雨が多いために濕氣が多い。その日本人が何が故に稻の果を食し、何が故に壁と障子と疊の家宅に住むか、當節の西洋崇拜者などには一向に理解出來ぬものらしい。日本に西洋式の衣食住の法則が發達しなかつたのは、發達し得ざる自然的事情があつたためであり、現在の如き日本獨特の生活方法を編み出したのは、自然現象に備ふべき必要に應じて發達して來たのだ。

◇生活改造の熱心者、實は西洋模倣者の理解に從へば、日本人の衣食住は偏へに浮世繪と三十一文字のために存在したと考へてゐる。所が和歌浮世繪は日本人の特殊な生活樣式に反映した藝術であり、而も日本人の特殊な生活樣式は、日本の特殊な

氣候風土に發生した現象である。そこに日本人としての特殊な趣味好尙が芽生えて來た。

◇能率といふことゝ功利といふ觀念は、元より排斥すべき理由もなし、從つて文明といふ事も大いに歡迎すべきものに相違ない。然しそれは、西洋人を見本にした能率主義や文明觀と違ひ、ある程度まで日本獨特のものでなければならぬ事は、社會主義のそれと同一の理論に於て正當である。正當と否とは別問題としても、さうでなければならぬ自然的必然に置かれてゐる。

◇この意味に於て、例の生活改善何とか會あたりのやる細工は、常に生活改惡の結果に終つてゐるから氣の毒だ。一切を擧げてグル〳〵卷きの女優髷のやうにして見たり、例の黑つぽい改良服を着せて見たりしたら、二回のおきまりで器械的に性慾の取引をすると同樣、殺風景なること砂を嚙むに等しきものであらう。勿體ない話だが、もし社會主義の世の中が來たら、どうやらこの無意味乾燥時代が襲來しさうだ。

雀取り

土田杏村

『爺さん、其れで一日に何羽位取れるのかな
『さあ何羽とはつきりいふ譯にやあいかねえ
さあ近頃の日和だつたらならしで一日に五十羽位のもんかな。今日なんざあ此れで大得物の方さ。

雀取りの爺さんは頭に學生帽の古い奴を被り、毎日私の書齋の窓の横手へ來て、しやがんで居る。稻架が田んぼ一面に見える。爺さんから三間許り離れた小川のわきにはかすみの網が張られて、爺さんは此方で其の端を握つて居る。兩方の羽根を切り取られた囮りの雀が賢こさうに囀つて爺さんの前でぴよん〳〵跳つた。

『此れ政あい、おめえ一人でえばを食ふで無えチヨウ仕様の無え奴だな。

爺さんはちよつくら側にあつた石を抛つてい、政あと呼れた囮りを叱る眞似をする。わきの鳥籠の中に取り籠められた四五十羽の雀が一時にがや〳〵と騒いだ。

『此れから伏見の方へ行くと雀の奴等あずるくていけねえ。町の子供等にしよつちゆう追つかけ廻されてるせいで、からもう手が附けられねえ。其處へ行くと此の邊は間抜けに近い奴が住んでゐる御蔭で雀も鷹揚に出來てらあ。

大浪が寄せた様な具合に雀の大群がざあつと野の下の方を横ぎつて行つたけれども、爺さんの餌なんかには眼もくれないで飛び去つて了つた。無理も無い。米なら今は水や日光の様に田んぼ一面に充滿して居る。爺さんが其處らの稻をむしつて來てけち臭く蒔いて置いた餌なんかは雀の食糧政策からは度外視されると見える。

爺さんの話すところによると、今やつてる雀取り方法は大分制限せられた軍備であつてもつと冬が深くなると、其れ以上のいろ〳〵の新鋭の武器を備へつけるそうである。

『網なんぞも此れぢやあいけねえ。すつかり田んぼの中へ埋めなくつちやあ。囮も三羽位は使ふことにする。大體彼處の學校の屋根にとまつてる雀なんかは、ちよつくらちよつとの獵仕事ぢやあ捕れそうにも無え。其れ今其處へ來た一羽などときたら一昨日からわしを馬鹿にしてゐてどうにもならねえ。あれが皆んなの處へ教へに行くんでさあ。

爺さんは其の邊に飛んでゐる一々の雀に就いて、此れは温順だけれども馬鹿だとか、彼れは狡猾だけれど少し痩せてるとか、此れは胸の恰好が惡いから飛び方が可笑しいとか、彼れはいつも××學校の軒の五番目のところに住んでるとか、澤山の雀の戸籍調べを聞せてくれた。爺さんは此れから冬にかけてずつと京都から江州丹波の旅籠屋を泊り歩いて其の邊の雀を取つて廻るのださうである。

『わしは此れでも家では洗濯屋をやつて居まさあ。だが今の貸家普請を見なせえ。あんな土鼠の巣みたいな家の中に住んでるよりやあ此うした靑天井の家がどんなにせい〳〵するか知れねえ。

捕られた澤山の雀は何處へ身賣りされるのだろうと聞くと爺さんは安心したもので、此等が皆んな京都大阪の和洋料理屋の皿の上へ現はれるのだといふ。爺さんも前は燒鳥用のもつと大きな鳥を捕つて居たのだが、戰爭から此方雀でなければ賣れないので其の方に商賣換したのださうだ。爺さんは其の後でつく〳〵現在の衣食住の質の粗惡になつた事を憤慨し、更に時事問題に及んで過激思想を鼓吹して行つた。



自傳 (6)

片山潜

僕は一八九四年の初春白人の友達と二人で英國の徒歩旅行を企てた。其の頃の英國は社會問題中心地であつた。例に依つて懐は淋しい。

英國の徒歩旅行

英國行きの準備が整ひいよ〱出帆となると僕等二人の外に二人の知人が同船することになつたので、船中は頗る面白かつた。他の二人は歐洲大陸を自轉車旅行することになつて居つた、船中一所であつたことは非常に便宜を得た。汽船はクナード會社のシセヤ號で全くの客船で夏中航行客の多い時丈け航海し冬は休む船であつた。小さいが頗る乘り心地の好い船であつた、船中は愉快に暮した。船に乘ては食ふのと遊ぶのと寢る以外には仕事はない、僕は友人が呉れた椿姫の小説を讀んで非常に其の書き出しの奇抜なのを、未だによく覺へて居る。僕等は無論中等であつたが、演奏會があつた時に僕等の一行は、色々の餘興をやつて喝采を博したので大持てに持てた、

クインスタヲンに着いたのは九日目で隨分長い航海であつた、ソヴワプール港で上陸する際に非常に迅速で萬事便利であつたのには驚き且つ愉快であつた、戰後の今日はどうか知らないが大戰中は何れの國も其出入の人を矢釜敷く取り締つたとの事だが戰前迄は上陸の面倒なのは北米合衆國だけであつた、歐洲に行つて入國は少しも面倒ではなかつた、

他の二人は上陸した其の日に自轉車を買つてサツサと出かけた、僕も自轉車を買つて旅行する考へであつたが、學友が自轉車乘を嫌やがつたので僕も止めて一所に旅行した、

リヴワプール港では別にこれぞと見物したものもないが、英國に行つて一番厄介なのは金の勘定である、米國や日本では圓弗單位であるが英國は然うでないから一寸七面倒である、チエスター市に行つて乞食の多いのに驚いた。其市を廻つて築かれたローマンウヲールを歩いて見た、此處には孤兒院があつて其を見た、總べて英國の都市はキチンとしてよく整頓して居る。田舍を歩いても畑がよく耕作してあつて氣持がよい、レミングトン市は小綺麗の小市である、バアミンハム市は工業地であるが立派な都會である僕が驚いたのは停車場の前のホテルで宿つたが夜八時頃になると市中は靜かになる、市内鐵道も走らない、汽車も出入しない實に米國都市に比べると別天地の感がある。其からカベントリー及シエキスピヤーの生れたストラツトホルトヲレエボンへ行き、シエキスピヤーが生れたと云ふ家に入つて、英國文學者等が壁や窓ガラスに樂書をしたのを見せられた、其れからロンドンに着いたのは眞晝中であつた。

社會問題の探究

英國は米國に比べると公徳の進んだ國である、鐵道に乘つても一片の通し切符を所持する者は沿道下車乘車は自由自在、或る停車場では切符を調べる者さへ居ない、薩摩守只乘りが居らないからでもあろうが鷹揚なものである、日本や米國の如くコセ〳〵とした窮屈を覺えない。

僕は學友ローリン・ハートとリヴツプール港よりロンドン迄は同行した、無論夏期休暇中であつたから生徒は居なかつたが、其でもヲツキスフヲードの空氣は何となく學風に富んでるやうな氣持がした、殊に其古色燦爛たる所は英國の大人物養成所として氣持を清洗せしむるに充分であつた。各大學は各自の特色を持つて見物人を飽かしめない。

僕等は安下宿屋に泊つた、日曜日の朝出かける時に宿婦が晝の食事に歸るかと聞いたから僕は歸らぬと答へて出かけた、所が日曜日には一切の飲食店も何も締め切り飲食する所のないのを發見して、一寸閉口した、米國に比べると英國の日曜日は眞の休息日であつて公園に行つても運動遊びをしてゐるものはなく靜かなものである、店頭の窓は全く〆め切つて——日曜日の市中はまるで殺風景な死の都であつた。

僕等は倫敦に於て一番に何を爲したかと云ふに二人でハイド公園の椅子に掛けてロンドンの地圖を出して研究し方角を定めた其れから二人でロンドン市を橫斷した、ヲツキスフヲード、ホルボロンバイヤダクト、ホワイトチヤペル及マイルエンド迄行つた、而して其處に宿を求めて一泊した。

翌日は當時世界に有名のトインビーホールに行き此處に居ることを交渉した處がトインビーには明間はないが附屬のベリヲルホールに在るとのことで僕等は此處に移つた、朝夕の食事及日曜日三度食と寢泊り代が約一磅日本の十圓であつた、以つて當時の物價の程度を推知することが出來る、四片出すとソセーチ、チヤガイモ及びパンとカレーが食へたものだ、

僕は毎日出掛けた、其行く處は凡ゆる社會及慈善事業其他何んでも社會問題に關する事業を視察することにあつた。監獄感化院孤兒院貧民院等も見物した、ロンドンは當時既に五百萬大ロンドンを加算すれば七百萬で、チヤーリンクロッスから何方へも十五哩行かねば市外に達することが出來ないほどの大都會であつた、僕は毎日々々多くは徒歩し又地下鐵道に乘つて諸所を視察したが僕の一番度々行つた所はロンドンの國立美術館であつた、大抵一週四五回は行つて毎日數時間を費やしたものだ、貧民街や貧民院を探し廻つて此美術館に來ると氣が生々として洗滌され、愉快に油繪を研究した、前年チカゴ大博の經驗で美術が馬鹿に好きになつた、各國各時代の傑作者の繪畫に親しむのが如何にも面白くなつて僕がロンドンに滯在すること六週間、此間僕は暇さへあれば美術館に行き、好きな繪の前に腰を掛けて一二時間もながめたものだ。そうして古今の傑作を研究した、先づ比較研究から始めた、一室に入つて見廻はし、一番僕が好きな而も一番いゝと思ふ繪を一番よく研究する、斯くして各マスタースの流儀を覺へたものだ。

茲に面白い話がある。同行のハートは美術に心得のある男で、母の注意に依つてロンドンのナショナルガラリーの批評中一番好いと云はれる一書を携へて行つて研究した、將にロンドンを去らんとする數日前の事であつた、ハートと一所に美術館に行つて共に繪の批評を試みた、ハートは僕に對しては天狗の方で仲々通を氣取つて僕へ質問を放つた、すると僕は自分が六週間ばかり研究した爲に出來た繪畫批評論を試みた、ハートは少し不思議がつて僕に向つて「君は僕の書物を讀んだな」と問いた、何故かと問へば、僕の書にあるやうなことを云ふからと笑つた。僕は心密かに喜んだ、素人研究でも見る處は黑人も同一であることを。

英國勞働運動の指揮者

一面に於て僕の見たロンドンは資本主義全盛のロンドンであつた。勞働運動は僅かに數年前から頭を擡げ出して來たに過ぎなかつた。而かも資本主義の缺陷は社會改良を以つて圓滿に進むと信じたお目出度い時代であつた、純社會主義は微々として振はず、第二インタナショナルの頭を擡げかけた時であつた、[illegible]

が勞働運動は社會主義者に依つて行はれたのである、一方社會改良の實地研究はトインビーホールが中心となつて既に世界に名聞を揚げ、米國に於てもボストンのアンドゥヴワーハウス、チカゴのハルハウス、（ジエーンアダムスの主任なる）があつた、トインビーホールの外にヲックスホードハウス及ヲックスフヲドグラブなどがあつて富豪の子弟等が貧民に同情して之を扶援せんとした時代であつた、數年前にブースがウエッブ及ポーター孃（今のウ夫人）などの力を借りて貧民研究を爲し其の結果を發表したのは其の近くの事であつた、ブース將軍（宗教家）が救世軍を組織して貧民救助を始めたときの廣告として「最暗黑のロンドン」を出版して世を驚かしたのも最近年の事である。僕がロンドン滯在中に水晶宮で救世軍の世界大會が開會された。僕は之に行つて其廣告的なのに驚いた、僕も無論社會改良には非常の趣味を持つてゐたから救世軍の社會事業には、興味をもつて視察した、總べてが社會改良に向つて全力を先覺者が注いだ時であつた、政治の方面に於ては都市改良が最も好評判の時であつた、數年前から米國は都市改良に盡力してロンドン郡會即ち實はロンドン市會が組織されて始めての統一せる「ロンドンが出來た樣な譯で斯のロンドン市會にジョンバアンス氏が都市改良をロンドン勞働者を背景として奮鬪して居つた頃であつた、一般に當時のロンドンは頗る趣味多きロンドンであつた、英國の市町村字制度が制定されたのは、丁度此年の千八百九十四年であつた、僕は兼ねてブースの書を研究し又英國の勞働問題をも研究して行つたのだから非常なる趣味を以つて實地の視察をした、ジョンバアンスと云へば勞働會の勇將で非常なる勢力を以つて居た、彼は千八百八十九年八月にロンドン波止場人足の同盟罷工を斷行して一大成功を遂げた人である、バアンスは其雄辯を以つて烏合の集なる人足會、英國人民のクズと稱せられる——統一してよく大ドック會社に反抗し勝を占めたからである、而して歐洲勞働問題のオーソリチーであつた、バアンス氏の勢力は其後益々發展して下院議員に選ばれ、千九百十四年迄ロンドン市の一區バタシーより出で其敏腕を振つたものだが漸次自由黨と接近して純社會改良を以つて甘んじ昔日の如き激進派からは遠ざかつて仕舞つて、大戰の時見切を附けて退隱した、今生きて居るか死んだかすら私は知らない。が生きているとしても政治的には死せるも同然である年寄りの冷水をやらないだけは大隈などより見れば遙かに大人物で終を全ふする者である、ジョンバアンスの無二の共同運動者で波止場人足同盟罷工の首領であつたトム・マンと云ふ屈强の人物は當時失意の地位にあり乍らも活動して居つた。

トム・マンは非常な組織的の所有者である。あまりに組織が組織的で論理的であり正直で融通が利かないために政治政的には常に失意の地位に居る、トム・マンは勞働運動者としては三四十年間左翼派を固めて來たものである。當時彼は純マルクスの社會主義を宣傳して居つた、僕はウエストハムで彼が二時間に亘つて生産、交換及分配に就いての演説をしたのを聞いて其能辯と頭腦の的確なると且つ之を謹聽したロンドン勞働者の態度に驚嘆したものである。トム・マンが最も其の手腕を世に現したのはロンドン波止場人足罷工の時兵站部を經營して其才能を發揮した事にある、彼はバアンスの如く雄辯ではない、熱辯を振ふて勞働者を熱狂させるやうなスタンプスピーカーではなかつた、理論と思想がドミネートして居る。是れ彼れが政治界に成功せぬ所以であらう、後年久しく濠洲に在つて勞働運動をやつたが十年前に英國に歸り爾來シンヂカリストとして大活動をやり今や鐵工組合の總幹部として英國勞働組合の赤化に努力して居る彼等は僕の舊友として今日迄非常に世の中の進歩より何時も一歩を進めてゐる。近報に依れば彼は第三インタナショナルに左袒し、赤色勞働組合インタナショナルに加盟を絶叫して居る。

世の人は教育の有無に拘らず二樣に分かれる傾向がある、一は年を取るに從つて化石的に成る人がある、と同時に世と共に進化して行く人もある、前者は保守的であり後者は進歩的である、吾がトム・マンは慥かに進歩的の人である。

トムマ・ン、ジョン・バアンスの外に當時名を成して居つた人にケヤ・ハーデーがあつた。僕が在ロンドン中に議會で皇孫誕生祝賀決議に大反對の演説をなして彼れ是れと非難され又ブレボーと呼ばれた、其人こそケヤ・ハーデーであつた。彼は石炭坑夫から起つて終に獨立勞働黨を組織し之が首領となり大戰中死去する迄其地位を兎に角に持ちこらへて終つたが、彼のラヂカリズムは當時イーストロンドンの評判であつた、英議會勞働者を代表して社會主義を絶叫して居つたのは彼が只一人であつた、其から見れば今日は進歩した主義の上から云へば頓と進歩せぬと云へる、ハーデーの獨立勞働黨は依然第二インタナショナルである、ハーデーが大戰中に死んだのはベーベルやジョーレス等と共に彼れにとつても幸福である、生存して居たらハインドマン、カウツキー、アドラー、フェリなどと第二インタナショナルと討死する不名譽の敗北に終つたかも知れない。

當時青木周藏が全權大使としてロンドンに來て居つた、彼は頗る生意氣な男で日本人が面會に行くと一層ソリ返つて同邦人を馬鹿にしたものだが、日清戰爭後の三國干渉を彼の幕下で計

甚されていたのも一向御存知ないと云ふ間抜外交官であつた。

僕は當時日本人の友人詩家としてロンドンで可なり評判を持つてたエドウイン・アーノルドに誘はれてロンドン市長の日本全權大使靑木招待會に行つて見たが、靑木が市長に紹介されて商會する其風體の如何にもコセ〳〵然として舊幕時代の商家の番頭が主人の面前に呼びつけられて行くかの如く腰をかゞめて早足に走り行つたのをよく覺へて居る、如何にも輕々しい人物であつた、獨逸で失敗したのも無理はない。

今一つロンドンでジヤツプとしての經驗を味つた。當時英國議會の傍聽は國會代議士か其他政府役人又は外交官の紹介が必要であつた、米國人等は皆な公使館に行つて貰つて行く、同胞人であると云ふだけで呉れる、只形式的なものだ、僕も日本の官吏が何んなものか又我が外交官が何う其日本人を待遇するかを知らないから米人並を考へて愚かにも日本公使館に國會傍聽の紹介をして貰ひに行つた、すると書記を勤めて居つた、現政府の外務大臣殿が握りマラをしながら出て來て僕の要望を聞き、如何にも馬鹿にしたような態度で苦が笑ひをしながら拒絶した、之がロンドンに於ける僕の失敗の唯一である。

資本主義萬能の倫敦

ロンドンの名所名物はピカデレーである、僕は神學生であつたが社會問題研究が目的で有つたからピカデレーにも友人に誘はれて行つた、セントジエムス料理店で兎のスチユーも葡萄酒も試みたが一種異様の印象を殘した。白晝は商業の中心に近きリゼント街を一歩上がればオツクスフヲード街で東京の日本橋通り、一歩下ればハイドパークかグリーンパークに接しローヤル劇場に近く紳士紳商の飲食場で五六百を容るゝ大料理店が夜は淫賣婦の巣窟と一變して生喫き人肉の賣り買場となる、ロンドンの文明は其處に反映されてゐる。

此處に集る淫賣婦は中流の者と聞く、車夫、馭者、番頭などを得意とすることはセイトン、ゼームス料理店の夜客の容貌を見ても分る、英國の女郎は一夕一人の客で自分で街頭で撰擇する、相場は友人の言に依ると十志乃至十五志であつた、夜十一時が彼等淫賣婦の商賣時で劇場の終る時間である。十二時後うろついて客を漁るやうな女はクズで又相場も安い。

ロンドンの土曜及日曜日は米國の其れに比べると雲泥の違がある。大通りの店頭は日曜日には全部締め切りであるがイーストロンドン（ホワイトチヤペル及マイルエンド）に行くと勞働者や凡ゆる市民が一杯に街路に溢れて居る凡ゆる店を張る、凡ゆる物を賣る、多くは無代價である、其代物が無形である、無神論、無政府主義、救世軍、奇說、愚論の店を張つて熱心に市

異に向つて賣つて居る、之がロンドン自由市民の狀態である、ハイドパークの角は政治社會に關する論議が盛んであるが此處では緒を賣るを商賣とする者がある、土曜日の午後は仲々盛んである、當時英國の都市は木曜日の午後半日は番頭小僧總べて市中商人の雇人等の半ドンで各公園は彼等によつて充滿する。土曜日は工場勞働者の半ドンで彼等の遊び場所となる。

最後にロンドンの印象として記憶する者の一とつはロンドン市中の狀況である。

當時ロンドンで聞えたる說教者はレケーテンプルのパーカー博士であつた、彼等は一日に數個のロンドンの在ることを指摘して說教をしたが、如何にも然うだ、ロンドンの觀察をして最も趣味あるのは此の四六時中相違せるロンドンを見ることである、此狀況は何れの大都會にも在るがロンドンの其れは最も著名である。

試みにロンドン橋の袖に立つて早朝から九時乃至十時頃迄南ロンドンから橋を渡つて來る人物の相違を見ることは面白い。ゾロ／＼と渡り來る早い者は悉く勞働者で八時か九時迄は番頭書記風。九時前後十時頃は全然紳士淑女風である。午後に至つて、早い者は紳士紳商で、晩い者程下層勞働者である、四シチーロンドンは僅々一哩四方の小區域であつて住民はと云へば七八千人であるが日々此小區内に入り込んで商賣をする者は當時既に一百萬人を超ゆるとの事であつた、以つて當地の繁盛を想見するに足る。

然れども僕が最も深い印象を刻まれたのは夜のロンドンである、十一時過ぎ全市は人跡を漸次に絕つ、少なくとも十二時後四時頃迄に全ロンドンは靜眠する、死せるロンドンである、夕マルメールカートかカーベルを鳴らして通過するを聞くも其他は所々に掃除人が働くのみ。全く死物のロンドンである、汽車の出入も殆んどない、靜かなることは驚くの外はない、米國の都會は晝夜の區別がない、騷がしいばかりであるが英國の都市は打つて變つて居る、其他市中通行人の秩序のある靜肅なることと通行人が相互に謙讓する懇懃さは米國などで見ることは出來ない、ロンドンに比べると米市は野蠻人の市である、併しロンドン人は喧嘩が好きで口論より先づ手を出す、之は米人とは異る、米人は口矢釜敷い、惡口惜言は下層の支那人と違はないが容易に手を出して戰はない、之は皆卑怯者の寄り集りだからである、ロンドンの勞働者一般人民は國内に在ると猫の如く柔順で階級制度に服從して溫順であるポライトであるが一朝國外に足を踏み出すと亂暴狼藉至らさるなしだ、國威を笠に着て威張り散らす。是れ英國の勞働者が依然帝國主義の惡習を脫却する

能はざる一原因である。彼等は帝國主義の恩澤に浴してると自ら感じて居るから印度を屬國としてダイヤリズムを默許するのである、獨逸の勞働者が大戰に贊成して帝國主義の犧牲となり今現に苦しみつゝあるのも同一理由で彼等は帝國主義の恩澤で獨逸の產業が發展したのだから帝國主義の維持は彼等の利益であると心得たからである、

僕に取つてロンドンの六週間生活は有益であつた、當時の英國政界は世界に勢力を持つて居つた。又英國の社會も資本主義全盛の時代で勞働問題も社會問題も幼稚であつて主として社會改良の程度に止まり資本主義の社會が何時迄も維持せらるゝとの信念が漲つてゐた。又資本主義帝國主義も今日の如く横暴ではなかつた、全國民に對する學者の權威も亦堂々たるものであつた、其一例を示さんに僕のロンドン滯在中は日清戰役中であつた、僕が輿論の熱狂の有樣に驚歎したと同時に學者の權威の頗る偉大なのにも亦驚いた一事は日本の海軍が支那のコースン號を擊沈した一件である、斯の船が英國船で英國旗を立てた英船長の下に航行して居つた船だと云ふので英國の諸新聞が一齊に日本を攻擊して凡ゆる毒舌を振つたものだ、出る號外も出る號外も皆日本攻擊であつた、大艦隊を差し向けて日本を懲罰すべし、血に渇せる小ジャップを打破すべしと其は激甚の攻擊であつたが其翌日かに或る大學教授、多分ホルランドであつたと思ふがロンドンタイムスに一段半程の手書を出した、之が要點は既知の日本が擊沈したのは萬國公法上英國を攻擊したのではない、支那の將官が英艦長の言を聞いて降參せざりし故に日本が擊沈したので英國の名譽を毀損せぬと云ふのであつた、事は其れだけだがタイムスは社論の片すみに日本軍艦がコースン號を沈めたのは國際公法に依れば英國の名譽を害せないのだろうだと二三行でけりをつけた、多くの他の新聞は何う云ふ態度を取るだろうかと心密かに待つて居つた、所が驚く可し、今迄對日惡口悖言を並べたてゝ居つたものが一言も云はない、キレイに打ち切りにした、僕は英國の輿論の訓練の能く行き屆いて學者の説を尊重するに驚かさるを得なかつたのである。

英國の貧民窟

僕は費用を儉約する爲にロンドンから船でテームス河を下り北行してハル港に着き其處から汽車でヨークに向つた、學友はケンブリッチ其他を見物したが僕は航行してヨーク寺院を見物し直行して蘇國都府エヂンバローに着いたのは日曜日の夕景であつた、オックスフヲードの經驗の如く市內鐵道も馬車も何もない徒歩して宿を探す始末であつた。

僕は此の立派なる歷史に富める人跡及事跡に豐富なる高尚幽

美な都に約十日間滯在して遊んだ、社會問題研究のためには餘り日新しいものはなかつた。實に旅人に住み心地の好い所であつた、僕は酒屋の裏に貸間を借りたので清潔ではあつたが小室であつた、此處歐洲第一と云ふ貧民窟即ちエヂンバローのハイストリートの上端れであつた、ハイストリートの貧民は實に不潔極まるもので全街悉く不潔で病氣と罪惡の淵源になつて居る。凡ゆる罪惡は此の處で行はるゝのである、だが共の建築は中には壯麗なものも見えた。一歩上れはエヂンバロー古城一歩下れば立派なる御所が堂々と屹立してメリー女王の居た所である。向ふを望めば風光に富む一二の山がある下を向いて遠方を眺めるとメドウランドが一帶の公園を成す四圍は實にエヂンバローを飾る物のみであるが共中心を成すハイストリートは全歐に名高い貧民窟であるとはコンツストの最も激甚なるものであるホレシヲーがハムレツトに答へて墓堀りの心理狀態を云へる如くエヂンバローの市民が此のハイストリートを心無しに默許するのは墓堀り的心理に支配されたものであらうか、恰かも萬年町、鮫ケ橋等の貧民窟が共界隈の井戸端會議の話題に上らないのと同じことである。

エヂンバローで一番目を驚かすものは蘇國人の知名の故人崇拜である、スコツトの石碑の好き正に當市を飾る唯一のモニユーメントである、市中到る處故人にして少しでも名ある者の事跡は寧ろ誇大に現してある、一方から云へば成功熱鼓吹の刺戟を青年に與へるものとも見ることが出來る。共美化してある點は旅人をして却つて好き印象を殘させる。エヂンバローは丘上に築かれ新舊區域共に眺望に富み、富豪の住居市と云ふて可なり、僕は一日をフヲース・ヲウ・フヒルスの世界最大の鐵橋を見に行つた風力を避ける安全の爲めに斯鐵橋は尺餘の弛みを有するとの事である、彈力なき物は破碎を免かれず、事物餘裕がなくてはならぬと思ふた。エヂンバロー大學の博物で最も僕の如き俗物をして愉快を感ぜしめたものは實物摸型の總べてを半折して共内容を示してあつた事で、ロンドンのベヌネル・グリーン博物館が日用品の摸型を示して東ロンドンの貧民をして何が德用であるかを懇切に實物教育せるが如く、圖書館や博物館は美術館が單に學者や藝術家が共天才知能を誇る爲めに設けられたるものでなく觀覽者の知識及人格向上の爲めに設置せられてあると云ふ主旨を最もよく實現されてあることを感じた。

エヂンバローの美術館に佛國美術畫書クラウザの油畫が一二あつた、彼は小兒の半身を畫くを特長として當市にあるものの一は少女が死せる愛鳥を机上に手にして哀愁の表情を現したもので共がいかにも巧みに描かれていたから共寫眞を求めた。

エヂンバローを去つてグラスゴーに來た、グラスゴーは大英國で唯一の米國式の都會である、都市改良の最も早くから又最も比較的完全に實施されてある所である、豫ねて研究せる事とて無限の趣味を以つて此市へ來た。

グラスゴー市が世界に卒先して貧民宿を廢止した、貧民長屋を市營した、水道を市有として水代を漸減した、下水を改良して之を肥料にして市中の塵埃を燒いて電力と化して利用し、勞働者の家賃は其賃銀の五分の一をつて標準とした、市内鐵道を無代で所有する計畫を二十年間の敷設經營權を賃行した市街である、僕がグラスゴー市へ來た時は丁度市内鐵道を私立會社から無償で取り上げて市營にした時であつた、だが資本主義の下に於て都市改良の容易に絶對に望まれぬことを自覺した今の僕は別段に趣味を持たないが、當時の僕は非常なる趣味を以つて視察したものである。東京市の道路や下水の改良は資本主義の下には容易でない、三百六十餘の部屋數を有する三井家が勢力を失はない間は九尺二間の「いろは」長屋の全廢は困難である、ヨシ改善した所で、日々新たに出來る貧民其者を全廢した露國のやうにする事は絶對に困難であることを自覺せる僕には何うしても今日の都市改良を以つて滿足が出來ない、併し現制度のつゞく間は之が改良を一種のパブロガンダ用として主唱するのなら兎も角である。其にはグラスゴー市の都市改良は絶好の模範を吾等に與へてゐる。

・僕は此市から徒歩でトロサック及レデー・オヴゼ・レーキに遊んだ、歐洲第一と云ふ風光明媚の所を跋渉した、今此に改て記する要もない、只資本主義の下には名所古蹟或は景色の好い遊散地は小數資產家の占有に歸して多數勞働者貧民には寧ろ厄介物の如き存在として横はつて居るといふ事實を我が勞働者に知らしめ之が打破に向て無產者の世界的團結を勸めたいと殆んど二十年前の經驗を追憶する事に依て、今更らの如く資本家の横暴を感ずる者である。今一つグラスゴーに於て感じた事は當市の公園に在る博物館で其造船、航海等總べて船に關する標本や其他の實物的品物の陳列してあつたのを見て如何に子弟の教育上地方的特色を現出してあるかを見て感服せざるを得なかつた。

それはとも角として歸校の期日が段々迫つたが爲めに僕はグ市から直行してマンチエスター市に急いだ。

マンチエスターは世界有名の工業地で而かも之が工業を一層盛大ならしめむが爲めに通海大運河を築いた市である、資本家主義の權化である丈けに仲々英國の工商業上に勢力を有し、其マンチエスターガーデアン紙の如きは常に健全な英國一部の輿論を代表すると、稱せられてゐる、コブデン＝ブライトの根據地で

あつただけ政治教育の盛んな所、其自由館の如きスパラシイ建物である、獨立勞働黨の機關週刊レーボル・リーダーは過去二三十年間此の地で發行されて居る。此市の水道は最新式で而も最も大規模なものである、九十五哩遠地のセルミア湖に土手を築き沿道の町村に供給し當市にも充分の水を呼んで居る、頗る營業的遣口である、經營の方法を知らぬ我が東京市の如く水代を年々引き上げて尙ほ水の供給上欠乏を市民が感ずるような屁魔な愚擧はせぬ。

水道事業は多大の固定資本を要するものであるが、しかし其資本の償却と共に水代は年々低下せねばならないものである、英國の都市水道經營は正に然うなつてゐる、僕は當時マンチエスターに來て其公共心ある市民の經營ぶりに感服した。

グラスゴーに比べると萬事天然上恩惠の少ないマンチエスターの發展は慥かに見物する價値がある、市中を歩いてクロムウエルの銅像が嚴然と存在して居たのをよく覺へて居る、當市からリヴワプール港に來て兼ねて學友と打合せて居た事故に同船して歸米することにした。

エール大學卒業

扨て愈英國を辭して歸るに當り再び學友ハートと一つになり乘船した、汽船はシセアに比べると遙か大船であつた、併し乘客は打つて變つて居つた、歸米の人々は其精力を使ひ果して歸家を急ぎ始めて渡米する人々は何となく心配らしく初夏に懷中豐にてし歐遊を試むるか又は金を貯めて歸國する者とは氣持が違ふので船中は何となく靜寂を感ぜざるを得なかつた。

僕は乘船當時食事の時に乾酪を食つた爲め胃の活動を止めたものと見へ、非常に船暈を感じて二三日は氣持惡しく非常に悲觀した、此儘で一週間以上も船上生活をすれば何うなるだらふかとさえ考へた。然し學友がブランデーに水を混じて吳れたのを飲んで全快した、以後愉快に航海を卒へてボストン港へ上陸した時、懷中に金十弗あつた。二百弗の金でよく一夏を英國で暮した一事は少なくとも經濟上から考へれば冒險の一種、僕の如く臆病者に取つては慥かに冒險的行爲であつた。

ご僕の渡米案內には左の如く當時の事を記して居る。

サテ九月中旬英國より歸りボストン府に上陸せし時、金十弗を所有せり、是れ余が總べてなりき、然れども余はエール大學に於て余が最終の學年を送らんと決心せり、歸校後直ちに同級生カール・ケルシーをコンコードに訪ふ、（ケルシーは今は此府大學の經濟學教授を勤めてるが當時はアンドウヴ神學生としてコンコード感化監獄の教誨師を勤めて居つて監獄生活を爲して居たので僕は監獄へ客分として訪問した譯で

あつた）ケルシーは余を喜び迎へて云く「汝に向つて二十五弗の金あり」と余は不審に何處より余に錢を送る者あるやと聞き見ればセンチユリー雜誌社よりの原稿料なりき（數月前同誌に掲載）余之を得たる時は好き無主の落した物を拾ふたる心地せり！

余はアンドヴルの一同級生グラントとエールに轉校した、而して余が八ケ年半の間學生生活をなして經濟的に一番困難を甞めたのは蓋し此年であつたらう、そは、余がエールに來た時は嚢中僅々十數弗の金ありしのみ、而して仕事を得る事は頗る困難なりき、余は只他の神學生が得る所の學校よりの補助（百七八十弗）に當る金額を以つて之で僅かに本學年の生計を支へたり、無論學校の寄宿舍はグリンネルの居た時の如くならず、完全の設備があつたから寒い目をするようなことはなかつた、斯る始末故に余は此九ケ月間は無駄錢一文も使はなかつた、多くは內々自炊して洗濯も亦コソヽヽと自分でなしたる譯なりき、當時エールの市中には一飯米金大枚五仙からで出來る所が二軒もあつた、余は此處に行つて食事を爲ることを無上の馳走と考へたり。

當時エールには横井時雄、木村駿吉、杉田金之助、小谷部全一郎及千葉鑛藏など豪傑奇人無神論者法學者が居る網島佳吉も居つた、余は斯く切り詰めた生活をして錢は貯さざりしも熱心エールスピリツトを得んと努力した、余のエール神學校卒業論文は歐米の都市問題を以つてしたり、エールの一年は余に取りて最も有益なりし學年なりしを覺ゆる者なり。

或る日の事である。僕は横井時雄と散歩した、彼は悲觀の極に陷つて居た、恰度彼は其老母を失つたとの報知を手にした時であつた、彼は僕に語つて老母の死報に接して悲みも起らない、涙一滴も出ない、彼は十數年間牧師傳導に從事して來たに拘はらず、金森通倫を番町教會より放逐せる主動者であつたに拘はらず情誼共に宣教師の恩惠を受けて來たに拘はらず、今現に神學校に身を寄せて居るに拘はらず終に悲觀論者、無神的懷疑者に成り果てヽ居たのである。保守的ミツション學校の教育の弊害も此處に至つて極まれりと云はなければならない、横井時雄君が後年母校に呼ばれて校長となるや學校基金三十萬圓を浪費否活用せんとして新進學者安部磯雄浮田和民を驅り集め一騒動をやつたのも其後日糖事件で猶痰の人德富に筆誅せられたのも畢竟するに彼が信仰を失つたためではあるまいか人は一定の確信が必要である、鰯の頭と云はず馬糞と云はず確乎たる者を握つて居らねば往々一身上の醜態を演ずる恐れがある、御都合主義の伊藤に薰陶された時雄に斯く望むのは酷かも知らない、エ

ドル時代の時雄君を思ふと僕は非常に同情せざるを得ない、彼は愛すべき紳士的の性格を持つて居た、當時僕は非常に憫然に感じた、斷つて置くが、僕のいふ確心!とは資本家の代辯者としての宗教の事では無いことである。僕はエール生活を切り詰めて殆んど交際も(錢を要する)爲さない、千葉が紐育から醤油を取り寄せて牛飯を御馳走して吳れた、彼は議論好で負けると立腹する僕も其の日に逢つた一人である、彼の江戸ッ子自慢には大抵の者が閉口したものだ、僕はクラスの寫眞に寫つたが買はなかつた、そこで一同級生が惠んで吳れた、無論四弗の金がないから免狀は取らない、其でも僕はクラスデンナーに丈けは立派に會費を出して行つた。之が實にエールにて私かに愉快を感じた最後の一事であつた。

エールに於て僕は社會問題研究が專門であつて監獄改良にも趣味を持つて居た、丁度卒業前二三週間前に圖書館へグワフヒッスの「監獄の秘密」なる約一千ページからある二册の本が寄贈されて來た、僕は讀み始めて面白く感じたから暇に圖書館に行つて到々讀み盡した、ユーゴーのレミゼラブルも趣味を以つて讀んだ、讀書せんとすれば何時でも時間は發見されるものだ。

卒業日が來た、プラットフオームに立つて演說をした連中は何れも社會問題を科題とした。社會改良の空氣が講堂を支配するの慨を示した。が其のときの卒業者で今日迄進歩主義のプラットフオームに起ち得るものはブラウンと僕だけである、ブラウンは前年ステルトンのフエレル自由學校の校長をし、又は加洲羅府のホイットマン學校に關係して時々社會主義の新聞雜誌に意見を發表してゐる。卒業式はエール大學講堂でやつて午後に神學校の講堂で離別宴とでも云ふか飲食會があつた、僕は此會に出た、教師及學友に暇乞をして早々立ち去つた、僕の渡米案内は左の如く記せり、

「卒業式終るや、余は其日エールを辭し、三度ノスフヒールドに行きムーデー氏の感化の下にある、ノースフヒールドホテルに五月十五日より九月十五日迄一ケ月四十五弗の食附給金で働き歸國の旅費を儲けた、ノースフヒールドに行く旅費だけはエールで殘して居つたから先づ無事にエールを去ることが出來た。

米國よ、さよなら

四年前のノースフヒールドに比べると四年後の當時のノースフヒールドは餘程變つていた。無論僕の働いたのはノースフヒールドホテルで營利を目的とするものであるから夏季學校を主とする女學校内に働くようなことはないがそれでも當時は

アンパート、ムーヂー（大ムーデーの甥）の全權下に總べてが經營されて昔しのジョーヂ爺さんなどは追ひ出されて歸農して居た、其にホテルはマークワンドボールに比べると晩景はよくない、僕は四年目のノースフヒールドから何物をも與へられていない。當時案辰次郎と云ふ青年がマウントヴルノン學校に學び働いて居つた、僕は滿二ケ月になると月給を貰つて紐育へ行つて杉田金之助と一所に歸る約束であつたから落合つた。

紐育では暫らくブルクリンの日本人會に厄介になつて市中を見物した、杉田は法律家で判事を務めて居たので頻りに裁判所の見物に僕は連れられて行つた、米國の社會は英國の其に比べると粗雜で見物しても只金が掛つてると云ふことを見るの外は別に趣味がない。

併し僕が杉田と紐育見物を爲したのは今から二十六年前の事で其當時の紐育は今日に比べると小さかつた、スカイスクレーパーはなかつた紐育市の繁華の中心は第十四街であつた、ピツホドローム劇場は大きなことを誇りとする丈けで僕等が行つた晩はニグロのケーキウヲークであつた、今日の紐育劇場は非常に進歩したものだ、紐育だけが幼稚なばかりではない全米の政治界も幼稚であつた、ルーズヴエルトは紐育の警視總監を務めて居つた。僕等が警察制度の見學に行つたとき快よく迎つて警察のミユーヂアムに案内して呉れた。

杉田金之助は實に好人物で岐阜縣農家に生れ、志を立てて東京に出て早稻田專門學校を卒業して判檢事の試驗に及第し判事を勤めてエールに來り、羅馬法學博士となつて歸る所であつた、エールに於ける杉田の勉强はカントの如く規則正しく一時間の散歩をする。風雪雨を構はない、實に几帳面なものだ、彼との歸途僕は非常に益する所があつた、僕は十三年前に日本を去り日本の事情には暗い、杉田は四年前に渡米した、而かも判事生活をして社會人情の表裏に精通して居つたからである。紐育で杉田は面白い註文をした、余は米國土産の經驗の爲めに女郎を買つて見たい、と云ひ出したことである。僕は之でも耶蘇こで神學校卒業生である、僕は臆病で前後二十有餘年海外に遊び、常に一人り旅をした、女郎の研究も爲したが、之を買つたとはない、恥入つた譯だらうが杉田の註文には一寸閉口した、僕には案内が出來ないのでそれなりで紐育を去つた。

扨て僕等は再び米國へ來るようなこともなからうから見られる丈け見て歸らうと云ふので、純然たる漫遊客となつてワシントン府へ來た、小さな宿屋に泊り込んで數日間首府を見物した。今のようではなく廣々として所であつた、ワシントン・モニユーメントへも昇つて見た。エールでエヂプトの美術の講義を

聞き又其幻燈を見て頗る大陸の風分があるを見て愉快を感じたがワシントンの風光も何となく其を偲ばせるように思つたが、今日に比べると當時のワシントンは純朴なものであつたように思ふ、杉田の宿題はワシントンに於て解決した、偶然に僕等はスミソニアンに入つた、そこで路術博物館と云つたようなバイ藩の發達經過をワック人形で示したものが陳列してあつた。杉田は之を見て怖氣付いたものと見へて淫賣婦買の土産話は全くお流れとなつた、彼が今日澤山の子供を持つてゐるのに對して宜しく僕に感謝すべきである。

米國の旅行は汽車に乘るばかりで何の時も何の市も別に珍らしいことはない騒々敷ばかし、チカゴにも三四日居つたが別に記憶するようなことはない。ハルハウス、チカゴ大學のホヤホヤを見物する位いなものであつた、段々と寒くなるので僕等は匆々にしてタコマに來て、ストラテネヴワスと云ふ大洋コヂキ船に三等客として乘り込んだ、十月中旬の事であつた。

改造

千葉龜雄

一切の改造は、先づ一切の歷史を撥典することから出立しなければならない。歷史はそれ自身、過去の記錄であるが爲にこそ、始めて存在の意義を帶びる。ところが改造の事業は現在と將來に屬する。在るがまゝの現在の生命を基調として、全く新らしい人間史の第一頁が描かれやうとする時に、今は悉とく生存を止めた過去の生活に順應して行かねばならぬ必要はどこにあるか。それは改造こそ自身の矛盾ではないか。

もし新年の往來に、斯う絕叫する一人の老人があるとすればどうであらう。「我輩は老年である。この老年の經驗と智識とを以て、君達の年を新年ごとに一年づゝ若くしてやる」と。恐らく其老人は、可哀相に松澤村逃亡者の一人ぐらゐと見られるが落ちであらう。

所が玆に傳統の熱烈な支持者がある。若くは特權の所有者がある。彼等はから敎へるのだ、「封建主義、帝國主義、軍閥、愛國主義等其他、そうした過去の存在にさへ依賴すれば汝等の知識の年齡は年々ますます深く若くなるのだ」と。なるほど知識の年はますます若くなつて、所謂小兒の無知にまで引き戻されるかも知れないが、此處に恥しい矛盾は、世界にどんな神秘な機械が發明されても、人間自身が、自己の開展して行く知識の力を自分で抑ひ止める一つの機能をも持つことが出來ない事である。

もう一つ、人類の永遠の向上を信ずるものから見れば、何時の時代でも、生きて居る當代の眼から眺めた歷史そのものは、必ず其當代の標準から餘程劣つて居るところの文化史であるのが至當である。そして其の當代に立つ人は、何時でも文化史上の絕巓に立つ人であるべきである。從つて其處に起る時代文化と歷史の地位は、進化した文化の實體と、進步しなかつた文化史の對照の興味それだけであつて、勿論過去の文化史は進步した新文化の上に、合理的に適用される何等の內質を持つて居ない。ましてや人類の進步と知識の進化が、級數級の飛躍を見る現代にあつては、一切の改造は、廣大赫烈な發光體たる現代の生命の自轉それ自身に委すべきであつて、死滅した過去の生活意識などが、戱さみにも混入され得るものだとは思へないのである。

尤も、歷史をより劣つた文化史だと認めるのは未だよい方で、ワシントン●アアギングなどは歷史は全く罪惡と悲慘の全記錄だとまで否定した。それはどちらにしても、其の意義から云つても、「歷史は繰返す」と云つた理法を、其儘に承認する學徒の多いことを怪まざるを得ない。つまり歷史はそれが歷史であるが故に、それを繰返さする事が出來ないのである。若し繰返したならば、それは直ちに時代の逆轉を語るものでなければならぬからである。つまり現代改造の理法は、現代の內的生命直ちにその者に卽して、其の中から全たく新らしい意義を摑んで來たければならぬと云ふのである。そこから見て改造は適應と妥協でなく全く一つの創造である。然らば改造の爲にする史的考察は果して何の効用があるだらうか。

史的考察が我等に敎へることは斯うだ。歷史中の偉人の事業が、人類に與へた客觀的效用はどうであれ。主觀的には、それは彼等の自我の擴充が、止むに止まれぬ要求によつて開展したその結果である。其偉人の生の營みを中心としてのみ其一代の歷史の生命はある。それは借物でない眞實である。だからそれが休止すると共に舊時代は轉廻する、そこに始めて我文化と人間味の流通性があるのだと。故に我現代の改造をして、改造の生命の擴充其もののみの新創造たらしめ樣ではないか。



平賀源内の死

村松梢風

一

平賀源内は、今日は面白い話を聞いた。それは、例の如く紙鳶堂へ押し掛けて來る雜多の訪問客の中の一人が殘して行つた世間咄しの一つだが、馬喰町の或る家に幽靈が現るといふのだ。其の仔細は恁うである。其處は以前某といふ檢校が住んでゐた家だが、此の檢校は非常な强慾者で、諸方へ例の座頭金を貸し附けた上に不正な事を働いて多くの人を苦しめてゐた。が到頭其の惡事が發覺して仕置に行はれた。無論其の家は闕所にされて賣物に出たので、或る人が其跡を買つては入つた。話は其處から起きたわけで、すると其の家に幽靈が現る。夜な〱血みどろになつた盲人の幽靈が現れて、「此處へ置いた物が見えない、此處へ置いた物が見えない」と云つて金の在所を尋ねるのださうだ。買つた人も怖ろしくなつて、早速他へ轉賣して引つ越してしまつた。すると又今度の住み手になつても矢つ張り幽靈が現る。そこで又々住み手が變つた。恁うして其の家は僅かの間に幾人もの人の手から手へと渡つて來たが、近頃では幽靈の評判が喧しくなつたので買ひ手も借り手もなく、久しく空家になつてゐる。何でも世間の噂に依ると、其の家は幽靈が現るばかりでなく、其處へ住まふと必ず家内に兇事があるといふのだから、人が恐れるのも無理はない。併し、檢校が金に飽かして營んだ普請で、土藏附きの贅澤極まる住居だけに、あの儘腐らせてしまふのは惜しいものだ——といふ話である。

「藤之進お前も聞いてゐたやうだが、さつきの幽靈の話は面白いな」

來客がすつかり歸つた後で座敷を取片づけに來た門弟書生に向つて、源內は、何か名案が浮んだ時などによく彼がやる癖の、上眼を遣つて天井のあたりを眺めるやうにして、薄笑ひを漏らしながら云つた。獨身者で、書生を養ふことに興味を有つてゐる彼は、女と云つては下婢一人置かず萬端男世帶で、身邊の用事も書生達に交る〳〵させてゐた。女氣の無い其の家の空氣は他人には何處かしら殺風景に感じられたであらうが、源內自身は物事がテキパキと規則的に運ばれることを以てよしとしてゐた。其の上彼の趣味として、と云ふよりも寧ろ是れは主義で、例へば室內の裝飾品のやうな物でも實用を兼てゐない物は絕對に排斥するといふ遣り方であるから、一層さうした事務的な感じが助長されるわけなのである。

「左樣で御座います。なか〳〵面白い話で御座いました」

藤之進は直ぐに師匠の意を迎へて恁う答へた。けれども藤之進には師匠が「面白い」と云つた言葉の意味を此の場合どう解釋していゝか判然してゐなかつた。で彼は、ふと氣が付いて、續けて云つて見た。

「先生は、あの怪談から何ぞ御趣向でも立ちましたのですか？」

藤之進の考へでは、師匠が日頃風來山人の名に依つて世間へ發表する狂文や戲作の多くの場合が、或る特殊の人物を紙上に拉し來つて、其の者の口を藉りて社會を罵倒したり諷刺したりするのが例であるから、今度も殊に依ると檢校の亡靈を題材に取つて、何か恁う手嚴しく世間の強慾者を戒めるやうな面白い著述の趣向を得たのだかも知れない、といふ風に考へたのである。

「あはゝゝゝゝ、わしはそんな意味で面白いと云つたのではない」

源內は庭の方へ脊を向けて緣に佇んで、懷ろ手をしながら體を搖すつて笑つた。狹い庭の、葉の乏しい樹木の小枝に、黃昏近い光の屑がうつすらと絡つてゐる。

「うちも段々人數が殖えて來たので、此の住居では狹くて困る

が、と云つて大きな家を買ふ程の金もないから今迄我慢して來たが、あの話だと屹度其の家は持主が安く手放すに相違ないから、明日にも家を見に行つて來て、氣に入つたら早速買はふと思ふのさ」と源内は眞面目で云つた。

「先生、それは本統のお話で御座いますか？」門弟は驚いて顔の色を變へて云つた。

「勿論の事だ」

「それは先生お止めになるが宜敷う御座います。幾ら安からうが、どんないゝ家だらうが幽靈に出られては敵ひませんからな」

源内は、門弟の愚かしい言葉を聞くと笑へもしないやうな氣持になつて、急に腹が立つて來た。

「馬鹿。お前は、此の世の中に幽靈といふものがあると思つてゐるのか？」と彼は少し險しい調子で云つた。

「多分そんなものは在るまいとは思ひますが、併し、俗に理外の理といふことも御座いますから――」

「だから在るかも知れんといふのか？そんな考へでゐるからお前は學問が進まぬのだ。お前は今理外の理といふことを云つたが、其の言葉からして意味をなさないぢやないか？幽靈といふものが若し在るとしたら、必ず其處には在るだけの道理がなくてはならないのだ。物の在る前には、必ず先きに道理がある。」假りにも學問をしようといふ人間が、理外の理なぞといふ曖昧極まる物の考へ方をして安んじてゐる樣なことでどうする？」

源内は徹底的物理論者だつた。それは彼が初めて和蘭の本草學の研究に着手した時から現在に至る迄一貫してゐる思想だつた。彼は自分で工夫し發明したエレキテルの原理によつて、天地自然の法則を解説しようと試みた。彼は先づ、萬物の根本が火であると斷定した。地水風空は皆火より變化したものに過ぎない、火が其の熱を失へば水となり、更に熱を失へば土となるのである。即ち宇宙の根元は太陽で、此の世界や海は其の末が變化して出來てきたものだと、彼は云つた。更に彼は自説を一歩進めて、小宇宙と見る可き人間の靈魂も亦、大宇宙に於ける太陽の如き物素、詰まり火の活力であると見た。

彼は無神論を唱へ、靈魂の不死不滅を否定した。彼は其の著書の「志道軒傳」の中で斯う云つて宗教を罵つた。

「それ佛法は寂滅を致とし地獄極樂なんど名をつけて愚痴無知の婦姥を教ゆる方便にして知ある人を導くべき教に人は陰陽の二を以て體となす譬へば石と金ときしり合て火を生ずるが如し火消ゆる時は跡に殘る所の炭は即ち形體なく、其の消えたる火地獄へ行くや極樂へ行くや汝此の行術を知らば地獄極樂ありとすべし」

彼は、五官に接觸するもの以外に、宇宙間に存在は無いとかんがへた。輪回の説も、因果の理も、彼にとつては無價値であつた。現實の物以外に不可思議力が存在してゐることを若し認めなければならないといふならば、それは寧ろ有らゆる物の存在を否定するよりも彼に取つては困難なことだつた。

源内は、既に何遍も繰り返してゐる自己の學說を藤之進に向つて說き聽かせようと思つた。飽く迄も色の白い彼の顔面には薄く紅味が差した。大きな兩眼が松明のやうにギラギラ燃えた。恁ういふ問題に觸れた時彼の心は直ぐに火のやうに熱するのであつた。白髮の眼だつ總髮の頭、險しく高い鼻、廣々とした額。黑く光る五ツ紋の着流しで懷ろ手をして、彫像のやうに突つ立つてゐる彼の體全體が、ちようど天才の魂其もののやうであつた。

藤之進はおびえた小鳥のやうな眼付きをして師匠の前に立ち竦んでゐた。彼は、自分の師匠に對して常に何者よりも大きな尊敬と信頼とを傾倒してゐる若者であつた。が、それにも係はらず、師匠は彼に取つて折り〳〵不可解の對照であつた。彼は、不可解の儘で、偶像を拜するやうな氣持で、ふだん師匠に對してゐるのだ。

其の相手の愚かな善良な眼付を見ると、源内はふと寂しい氣持になつて、口を噤んでしまつた。彼の心は、忽ち石のやうに冷やかになつた。

「眞理ほど確かなものはない。が、眞理ほど理解されないものもない――」

彼はそんな氣持がした。それは、多年彼が學問上の議論を人と鬪はせて來た場合に、最後に常に經驗する心持であつた。彼がエレキテルの實驗を行つて見せると、其の原理を理解することが出來ない世間の人々は「邪道幻術の類だ」と云つて貶し

た。彼が、天照太神、大日如來は太陽の別名なりと唱へて、太陽を活佛活神の顯體と見做してゐる世人の謬信を斥けようとすると、彼等は却つて彼を目して狂人だと云つて罵つた。さうして彼がほんの遊技的に考案したのに過ぎない火浣布の發明や源内櫛の製作などすると、世間擧つて拍手喝采して「平賀源内は日本一の智恵者だ」と云つて讃めそやすのだ。殊に彼が噴飯に堪へなかつたのは火浣布の香敷を發明製作した時だつた。「平賀源内は今度火浣布といふ火に燒けぬ布を發明して是れを以て淺草の御藏を掩ふて火災を防ぐことを町奉行に獻白したさうだ」と眞面目に云ひ傳へられたのであつた。

「全體、俺のした事や云つた事が、唯の一度だつて正當に世人から理解された事があるか——?」

彼は淋しかつた。

源内はぐるりと向きを變へて外を見た。柔かな春の夕暮の空氣に觸れた。

其の翌日源内は態々馬喰町迄出掛けて行つて例の話の家を見て來た。門構へ土藏附の町家ながら堂々たる構へで、座敷も庭も廣く、木口と云ひ雜作と云ひ申し分のない家だつたので彼は非常に氣に入つてしまつた。其處で早速人を介して其の家を買ひ受ける交渉をした。無論其の相談は一も二もなく纏つた。幽靈が現るために買ひ手も借り手もなくて持て餘してゐた其の家は、普通價格の三分の一にも如かない値で源内の手にはいつた。

性急な彼は直ぐ樣轉居に取り掛つた。彼に取つては恁んな時暦の上の吉日も惡日もなく、只天氣の佳い日が吉日であつた。彼は、新居の住心地の佳さを想像して獨りで元氣づいてゐた。

門弟だの、召使の男などは、誰も彼も不安さうな顏をしてゐた。彼等は、道理の上では師匠の言葉に服しても、それでもまだ各々の感情の隅つこには、何かしら本統に融合ないやうな塊が殘つてゐて、新らしい家に對して説明の出來ない一種の危惧の念をおびきだされるのであつた。

馬喰町の家に移つたのは三月の中旬であつた。大事な書籍や

器械など一緒に、神田大和町の借居の門を出る時、足掛け六年住んだ其の家を振り返つて見ても源內は格別感慨はなかつた。

門前に柳の木が一本植はつてゐた。其の幹は徑二寸以上に太つてゐた。

「此の柳を置いて行くだけが惜しいな」と、源內は門弟の一人に向つて本統に惜しさうな顏をしてゐた。

其の柳は、彼が六年前に此處へ移つて來たばかりの時、自分で鍬を取つて杖位の太さだつたのを植えたものであつた。柳は、歲月に應じただけ成長を遂げてゐた。

「俺は其の間にどれだけの仕事をしたらう?」彼の心には自責の聲があつた。「米鹽の料を稼ぐために、心にもない戲作や淨瑠璃本を書きなぐつたほかに俺はなんにもしなかつたではないか――?」

彼は、何かに對して濟まないやうな氣持を感じながら、兎の耳のやうな芽をふきかけてゐる柳の木を見た。

二

鳩溪は轉居後間もなく、一ケ知人を招待して宴を張つた。

「拙者儀今度世上に名高き幽靈屋敷を買求右へ轉居仕候珍敷き買物及御披露度幽靈御見物旁御來駕の程、云々」といつたやうな手紙を受取つた人々が、彼の新居へ集つた。

其の晚の客は可成り多方面の顏觸れを網羅してゐた。柴野栗山、杉田玄白、太田南畝、谷文晁、五代目市川柏莚などの顏も見えてゐた。宴半ばに、主は來客一同に向つて、眞顏で云ふつた。

「今宵は折角各位の御來駕を忝う致しても、浪人者のことて何んの馳走も差上げることが出來ず、甚だ汗顏の至りに堪へません。就きましては、唯一つ此の家の名物を御覽に入れようと存じますから、只今から一寸別座へお越しを願ひ度う御座います、」

其處で一同は別の座敷へ案內された。それは土藏を前に見た陰氣な座敷で、薄暗い行燈がたつた一つ中央に置いてあつた。一同が片唾を吞んで控えてゐると、軈て襖の向うから血塗れになつた盲人の幽靈が飛び出して來た。一同はあつと駭いた。幽靈は、物凄い顏をして立つてゐたが、不意に其の背後の方から三

味線太鼓の鳴り物が始まると、妙な恰好をして踊り出した。稍暫く踊ると、幽靈はガタリと音を立てて倒れた。

源内の其の晩の催しは諸方で評判になつた。そして、世間では、彼の機智と、細工の巧妙なことをば嘆賞した。けれども、中には其の話を聞いて、眉を顰めた人もないではなかつた。

太田蜀山人は、鳩溪とは既に廿年來の交遊であつた。彼が始めて鳩溪に遇つたのは十九の年で、鳩溪は卅九歳だつた。其の時分から源内の頭には夥しく白髪があつた。蜀山人は神田白壁町に源内の寓居を訪れて、本草學者として、又は「志道軒傳」や「根なし草」の著者として、一世に名聲を馳せてゐる先輩を見たのであつた。其の時彼は自著の「寢惚先生文集」の草稿を懐に入れて行つたので、それを出して讀んで聞かせると、鳩溪は「面白い〳〵」と云つて口を極めて讃めて呉れた。

蜀山と鳩溪とは性行が餘程似通つてゐた。文章の上に於ても、諷刺的である點がよく一致してゐた。思想的にも、蜀山は可成りの程度迄鳩溪と共鳴することが出來た。寧ろ、餘程大きな影響を與へられてゐたのであつた。併し這の兩者は、根本に於て、或ひは最後の歸着點に於て、全然違つた性格傾向を有つてゐた。蜀山人は洒脱であるが、風來山人は執拗であつた。同じく社會に對して不平不滿を抱いてゐながら、文章の上で皮肉を逞しうするだけで、自らは風流隱逸の世界に韜晦してしまふのが蜀山人の處世法であるが、風來山人に至つてはそんな餘裕はなかつた。彼は露骨に他を罵り、何處迄も自己を主張しなければ止まなかつた。若し自己に反對するものがあれば、完膚なきまでに筆誅を加へなければ承知が出來ないのが源内の性格である。同じ時代に生れた武士とは云ひながら、南畝は生ツ粋の江戸ツ兒だが、讃州高松生れの源内の身内には傲岸不屈の野武士的の血が流れてゐた。蜀山の文章は洒落であるが、源内の諷刺には毒が含まれてゐる。怜悧で人の悪い蜀山の皮肉な嘲笑に對して、源内は火山が爆發したやうな馬鹿笑ひをして見せた。

一代の才學を恃んで、世に容れられぬ不平不滿の數々を文章に托して縦かに胸中の鬱懐を吐いてゐる源内に對して、蜀山は常に同情の眼を以て見てゐた。それにも係らず彼は、近頃の源内の態度を見ると折り折り顰蹙せざるを得ないやうなことがあ

つた。あの晩の事でも矢張りさうだ。縦ひ魂魄は現世に留つてゐないにしても、死んだ検校に對して氣の毒だ、と蜀山は思つた。

彼には源内の生活が、慢心と自暴自棄に陥ちてゐるやうに見えた、巧名富貴に餘りに戀々たる人間性の弱點を露骨に現してゐる源内の態度が、彼には憐れでもあり淺間しくも思はれた。

一と月二た月前の事だつた。或る人が源内を訪れて繪の揮毫を乞うた。すると源内は即座に承諾して

「近頃拙者は面白い繪の趣向が浮かびましたから、それを書いて差し上げませう」

といつて、其の場で妙な繪を書いて與へた。それは、一人の男が岩の上にゐて尿をすると、其の下にも男がゐて、頭の上から尿を掛けられながら涕泣してゐる圖であつた。

「ああ面白い、我ながら實によく畫けました」と、源内は喜色滿面の體で云つて、ぽんと筆を投げた。

其の人は、畫意が那邊にあるかを解する事が出來なかつたが源内が常に人の意表に出ることを知つてゐるから、恐らく深い寓意のあることだらうと思つて、禮を述べて持ち歸つた。併し家に歸つて其の繪を眺めて幾日も考へて見たが、矢張り譯が判らなかつた。其處で、最後に蜀山人の處へ持つて來て判斷を請めた。蜀山も其の繪には呆れてしまつた。

「鳩渓は氣が違つたのではないかしら？」其の時蜀山は、心のうちでさう思つて疑つた。

三

源内が馬喰町に引越つしてから、其の年の夏秋は何事もなくて過ぎた。

「どうだ、お前達のところへは幽靈が現るか？」

源内はよくそんなことを云つては門弟を揶揄した。

近頃彼は大概書齋に閉ぢ籠つて、淨瑠璃本の原稿を書いてゐた。彼は今度「實生源氏金王櫻」といふ外題で十二段物を書き卸しに掛つたのであつた。

彼は、福内鬼外の變名で既に幾篇かの淨瑠璃を物した。處女作の「神靈矢口渡」を書いた時には、其の跋にも斷つてある通り、專門家の吉田文三郎に些か手傳はせた箇所もあつたが、それか

ら以後の作は自分一人の筆で仕上げた。狂文戯作の類と違つて、淨瑠璃の方は一度型を呑み込んでしまふと、實に樂々と書けた。それだけに、彼自身では面白くなかつたが、世間で歡迎するので、圖に乘つて書いた。一つは、當代に碌な作者がゐず、近松半二輩の無學漢が名人呼ばはりされてゐるのが癪に障つて書いたのだ。が、書きながら矢張り面白くなかつた。

「恁んなものを書いて見ても仕方がないではないか――？」

時々彼はそんな氣がして筆を投げた。低級な婦女子の興味に投じたり、安價な涙をしぼらせて見て、それが成功したとて何んになる？莫迦〳〵しい話だ、と彼は思つた。是れよりは矢張り、狂文や戯作の筆を取つて、好き勝手な太平樂を並べてゐる方が遥かに面白さうに思はれて來た。

「併し、作文を書いて、世間を罵倒して見たところで、それが果して何んになる――？」

矢張り何んにもならないのだ、と源内は思つた。彼がどれ程皮肉を云つて見たところで、世の中の馬鹿〳〵しさも革まらなければ、自ら益することも更になかつた。無用の文字たることに於て、些かも擇ぶ處にないではないか？さう思ふと、源内は自分のしてゐる仕事を益詰まらなく感じて來た。

「國家の大益」を圖るといふことなれば、彼が當初からの理想で、屢人にも説いて來たことだ學問のための學問に沒頭してゐる人間を指して、腐れ儒者だと云つて彼は罵つた。机上の空論が何んになる？實理實益を伴はない學問ほど無用なものはないと信じてゐた。彼が蘭學を研究したのも、本草を學んだのも、初めて「物産會」といふものを起したのも、「物類品隲」の大著述に從事したのも、總てが此の主義に基いた仕事に他ならなかつた。

「然るに現在の此の俺はどうだ？無用を通り越して、寧ろ有害な、戯作淨瑠璃の作者になつてゐるとはどうしたことか――」

彼は淋しいやうな、腹立たしいやうな氣持になるのであつた。

彼が、實際的方面の活動を斷念して、文學に走つたのは、實暦十三年卅三歳の時からで、戯作「根奈志具佐」は第一歩の足跡であつた。

其の動機は、それより二年前寳暦十一年の九月に、理不盡に彼の運命を決定してしまつた或る出來事、それがために彼は生涯の自由を奪はれ、青雲の志をも抛つてしまはなければならなかつたやうな、甚だ悲慘な事情に胚胎してゐたのであつた。悲慘な事情といふのは、源内の願ひが漸く聽き屆けられて、たつた四人扶持で縛られてゐた高松藩から永の暇が出たは宜いが、同時に「他人仕官之儀は御構被遊候」と動きの取れない鎹を打たれてしまつたことである。

高松藩に致仕を願つたのは、徒らに浪人するのが目的ではなかつた。更に有力な大木を求めて、青雲に昇る路を拓かうと考へたからであつた。彼が身を托すべく目指した大木は、老中田沼意次であつた。

源内が、初めて田沼侯に謁見したのは、其の公用人三浦某といふ人の斡旋に依るのであつたが、田沼は一見して深く源内の才智を奇なりとして、宴を張つて饗應した。當時田沼に面會するためには、諸大名でも莫大の進物をして、其の上客間で數時間待たなければならなかつた。然るに、彼が此の高松藩の御藥坊主を遇することは甚だ厚かつた。源内が暇を告げて歸り掛けた時、田沼は自身で起つて奥から砂糖の折を一個携へて來て源内に與へた。源内はそれを家に持ち歸ると其の儘戸棚へ仕舞つて置いたが、半月ばかり過ぎて何氣なく其の折を取り出して開けて見ると、砂糖の下から小判で百兩の金が出て來た。

源内は頻繁に田沼家へ出入するやうになつた。此の炯眼な老中こそ、源内のためには、たま〳〵驥北の野を廻る伯樂であつた。彼が驥足を伸ばすべきは當に此の秋であつた。此の際小節に拘泥して無力な小藩侯に附隨してゐるには堪へられなかつた。因習と情實で滿たされてゐる其の藩では、終生四人扶持以上に出ることは出來ないのであつた。千里の逸物も空しく槽櫪の間に斃死しなければならないではないか。

源内は、醫學の研究を口實にして致仕を願ひ出たのであつた。すると、彼と田沼との關係を薄々覺つてゐる藩では、其の意中を忖度して、容易に願意を聽き屆けなかつた。而も再三の懇願に接したので、藩では彼に對して非常に不快な思を抱いた。

「源内といふ奴は、自己の名利にのみ汲々として、重代の君恩を思はぬ怪しからぬ人間だ」

といふ悪評を受けた。其の結果が前に云つたやうな意外な解決に逢着したのであつた。

「他人仕官之義は御構被遊候」といふ一札は、鐵の鎖で源内の首を縛つてしまつたのであつた。彼は終生日陰者で過らなければならないことに、其の時以來運命付けられてしまつたのだ。

源内の怨懟は其の極に達した。彼は、世を呪ひ、人を呪ひ、あらゆるものを呪つてもまだ足りなかつた。或る時は煩悶懊惱の餘り自殺しやうとさへしたことがあつた。併し、自殺するといふことは、一面に於て自己を一層劣敗者の地位に引き下げることになるのだと思ふと、剛慢な彼にはそれも出來なかつた。

彼は、到頭馬鹿笑ひを發してしまつた。併しそれは、世の中の馬鹿〳〵しさを悟つた後の諦めの笑ひとは違つてゐた。諦め切れない、胡麻化し切れない、悲しい煩惱の響きが、其の笑ひの底には籠つてゐた。

其の頃、淺草寺の境内で軍書の講釋をして人を集めてゐる風流志道軒といふ老僧があつた。彼は江戸の人で、幼少の頃から豪宕不羈の傾向を具へてゐた。十二歳の時某寺の小僧となつて暫く諸書を渉獵し、又好んで史傳を讀んだ。壯年に及んでから慨然として曰く、戒律は桎梏のみ、聲色酒肉豈我を溺らすに足らんや、將に桎梏を脱して大快活の人とならんと。其處で貝葉經卷を賣り飛ばして酒色の料に替へた。數日で錢は盡きてしまつた。止むなく江湖に放浪して、飢渇のために死に瀕した。人は皆嗤つて狂人とした。彼は或日淺草寺に遊んだ處が參詣の人が市の如くである。其處で悟を開いて天を仰いで云つた。

「我が舌倘在り、窮餓自ら取るは天に非ざるなり」

彼は松の樹の下に席を造つて、机に凭つて講談を始めた。古今の英雄豪傑の成敗得失治亂興亡、盜賊博徒の詐術暴行、或ひは長言或ひは短說、上下縱横其の狀を盡さざるはないのである。講談をする時に手に一本の木の棒を持つてゐたが、其の形は男根に類してゐる。講談の妙所に到ると其の棒を以て机を叩いて節を附けるのである。講談の傍ら世を罵り、俗を嘲り、幕府の新令が出る毎に目前それを罵倒して憚らなかつた。彼は容

貌が頗る醜くて顏は破鍋の如く、口は缺けた盃の如くであつた。而も佝僂で、身の丈は普通の人の半分にも及ばなかつた。志道軒の名は江戸中に遍く、其の前には毎日人が黒山のやうに集まつた。

源內は、此の僧を紙上に拉し來つて「志道軒傳」を書いた。それは勿論志道軒の傳記ではなくて、其の人物を假りて自己の胸懐を吐露するの具に供したまでである。併し、此の變り者の僧が、縱横自在の放言を逞くして、世人を蔑視してゐる態度をば彼は事實共鳴と尊敬の眼を以て覗たのであつた。著述が出來上ると、志道軒を湯島の茶亭に招いて饗應したが、其の時彼が麻上下を着して志道軒の前で其の書を朗讀したのは、全く眞面目な氣持からであつた。

要するに、彼は自分の生きてゐる此の時代に慊らなかつた。其處では、極端な階級制度が個人の存在を征服してしまつて、ゐるのである。因襲の沼が、新らしい流れを全く阻止してしまつてゐるのである。而も無智な世間は、何んの反省もなく、憧れもなく、眼前の狀態を以て甘んじてゐるかの如く見えるのである。彼は、泥人形の如く無氣力な社會に向つて、辛辣な諷刺を浴せ掛けた。志道軒が譚天の誹謗罵詈は、たまたま源內の筆に戲作となつたのであつた。世間は彼の奇文を喝采して迎へた。其處で彼は引續いて筆を執つて、幾篇かの作を發した。彼の文章は、「艷道通鑑」の著者增穗殘口の筆法に倣つた處が尠くなかつた。殘口は京都の國學者で。極端な復古主義を唱導した人である。常に當世を批難して、神代の素直に還れと高唱した。復古主義の殘口と急進主義の源內とは、倶に現代を呪ふ點に於て全く一致してゐるのであつた。

眞面目な學究的態度を捨てた源內は、好んで市井の俗人と交つた。紙鳶堂へは種々雜多な人間が出入した。藝人も來れば、小商人も來た。百姓も來れば見世物師も來た。彼等は皆それぞれ源內先生の智慧を借りて、金儲けの秘策を得ようとするのが主なる目的であつた。自己の經綸を實行する望みを絕たれた源內はそれらの小さな希望を叶へて遣ることでも幾分の慰藉が得られるのだつた。「平賀源內は日本一の智慧者だ」と世間では云ひ囃した。さういふ聲が耳に這入ると、彼はいつでも苦笑した。

四

源内は、近來頭の具合が少々良くないことを自分で感じてゐた。時々、後頭部の心がシンシンと疼くやうに痛んだ。著述の筆を運んでゐる最中に、頭がポツとして來て、一瞬間全く意識を失ふやうなことがあつた。併し是れ迄にも、さういふ經驗がないではなかつた。

「時候の關係であらう」と、彼は餘り氣にも留めなかつた。

併し、源内の樣子に以前とは少し變つた處があることは、門弟の者などには薄々感じられてゐた。談話の途中で、前後に關係のないことがらを突拍子もなくふいと云ひ出すやうなこともあつた。

或る日四五人來客が落合つて、頻りに何かの話に花が咲いてゐた時、暫時默り込んでゐた源内は突然口を出して恁う云つた。

「何、彼奴は鸚鵡で御座る」

其處にゐた人達はみんな駭いて主の顏を見た。すると、彼は俄か息込んで喋り出すのであつた。それは、近頃勘定奉行になつて飛ぶ鳥落す勢ひの松本伊豆守の惡る口であつた。

「世間では松本のことを當代の才子のやうに云つてゐるが、何んで彼が才子なものか。彼奴が才子ぶつたことを云つてゐるのは、あれはみんな拙者が敎へて遣つたことばかりなんだ。彼は人の口眞似しか出來ない男だ」と、源内は蒼い顏に昂奮したやうな筋を現はして、とげとげした口調で云ふのであつた。

一同は是れで漸く「鸚鵡で御座る」の意味を了解することが出來た、と同時に甚だ困つたといふわけは、其の座に與力の浦井傳藏が居合はせたことだつた。傳藏は俗吏だが多少學問もあつて、屢鳩溪の許へ出入してゐるのであつた。さういふ關係だからよもや問題にはなるまいが、與力を前に置いて幕府の大官を罵倒するとは餘り亂暴が過ぎる、と一同は寧ろ不思議に感じたのだつた。

併し源内と松本伊豆守との關係を知つてゐる人ならば、彼の此の亂暴な言葉をも或る程度迄是認しないわけにはいかなかつた。數年前迄、それは松本が今日の榮進を見ない頃には、松本と源内とは非常な懇信を結んでゐたのだつた。源内は屢松本の邸へ出入してゐた。松本が現在幕府の新知識を以て認められ

るやうになつたのは、當時源内との交遊の結果に負ふ處が多いことは明かであつた。然るに、此の兩者の交涉は近年全く杜絕してしまつた。其の原因が何んに在るかを知つてゐる人はなかつたが、源内が松本を訪問した時玄關拂ひを喰つたといふやうな噂が、餘程以前に一部の人の口に上つたことがあつた。兎に角、源内が松本に對して惡感を抱いてゐることは事實で、それは彼としては無理もないことだと思はれてゐた。

源内は、近年は田沼の處へも顏を見せなかつた。松本田沼のみならず、すべてさういふ方面との交際を絕つてゐた。嘗て或る人が其の仔細に就いて尋ねた時、彼は笑つて恁う云つたばかりだつた。

「大名だの役人だのといふ人間は、掟に觸れない掏摸のやうなものだ。他人の懷ろから拔き取つた智慧を我物顏に自慢にしてゐるから可笑しい」

田沼意次は今でも源内に對して惡い感情を有つてはゐなかつた。

「平賀の奴來れば宜いのに獨りでひねくれて居るのぢや。彼の慢心にも困つたものだ」

源内の噂が出た時意次は他に向つてさう云つた。

「實生源氏金王櫻」は、三段目迄書いた處で筆が閊えて進まなかつた。彼はいつでも作をする場合に大凡の腹案さへあれば、局部の趣向は筆を進めるに伴れて自ら湧いて來るのであつたが、今度の場合はさういかなかつた。三段目迄書くにも容易ならぬ苦心を費した。筋が亂れて、人物の性格がちぐはぐになりかけた。彼は机の前に座つたり、離れたりして日を暮した。

彼は、自分の文章を、草稿の儘で他人に讀まれることを非常に嫌つた。朝起きて、手水も使はぬ顏を人に見られるやうな氣持がした。殊に、書き掛けの原稿に至つては、他人に指を觸られることだけでも厭だつた。未完成の草稿を人に讀まれてしまふと、自分一人しか知る者のない秘密の世界へ他人に飛び込んで來られたやうで、折角の氣分を荒されて、何んとも云ひ難い不愉快な氣持だつた。だから彼は、どんな親しい友人にでも草稿だけは見せなかつた。平常門弟にも云ひ付けてあつて、机上の

草稿を覗くやうなことは堅く〳〵禁じてあつた。書齋の掃除をさせるにも周圍だけをやらせて、机の上だけは自分で埃を拂ふやうにしてゐた。他の事には隨分無頓着だつた彼が、只其の一事にだけは非常に神經質だつた。外出して歸つて來て書齋へ入ると、必ず最先きに机の上に眼を付けた。そして少しでも草稿の位置が變つたり置き方が不揃ひになつたりしてゐると、

「誰れか留守に原稿をいぢつたな？」と怖い眼をして咎めるのだつた。

十一月末の或る日のこと、源内は神田の方に所用があつて、午過ぎから外出した。丁度其の日は他の門弟達もそれぞれ何か用達に出拂つてしまつて、あとには下男と久五郎といふ齡のいかない門弟だけが殘つてゐた。久五郎は、まだ十六歳位にしかならない少年だつた。富松町の秋田屋久左衞門といふ米屋の悴だが、戯作者が志望で、去年の春あたりから源内の處へ入門して内弟子に這つてゐるのだ。鳩溪門下の最幼年者だつた。色白で圓顔の、可愛い美少年であつた。源内は非常に此の少年を寵愛してゐた。それは彼が老境に近付いて來た今日でも自分の小供といふ者がないせいでもあつたらうけれど、大體彼は、青年壯年の時代から婦女子よりも寧ろ若衆が好きだつた。彼が終生妻帶しなかつた一つの原因は其處にあるのだつた。吉原へ行つても決して流連するやうなことはなかつたが、衆道では可成り惑溺した經驗があつた。明和元年に刊行した「男色細見菊の園」ほか二三の戯作は其の間の經驗に出つて得た賜物であつた。最早數年前のことであるが、芳町の優童として謳はれた芳澤國石との艶聞などは隨分世評が喧しかつたものであつた。平秩東作の「二國男色連璧談」は源内と國石とをモデルにしたので、作中の合派先生といふのが源内のことであることは世間周知の事實だつた。こんな風であつたから、源内は門弟の久五郎をも特殊の感情で以て寵愛してゐた。餘程劇しい惡戯をされても久五郎だと彼は笑つてゐて叱らなかつた。

久五郎は、師匠が外出したあとで書齋を取り片着けて置からと思つてその座敷へ這入つて行つた。其處は、いつぞや源内が轉居披露をした晩に檢校の幽靈を出して皆を駭かせた、其の部屋だつた。久五郎は遊び半分に、取り散らしてある書籍を整理

したり、師匠が敷く座布團を緣へ出して陽に當てたりしてゐた。大きな書棚の上にも、幾つも並べてある本箱の中にも、さては床の間の上までも、部屋中一杯の書籍である。

「恁んなに澤山本を讀まなければ學者にはなれないのかしら？」何時でもそんな氣がして、讀書が嫌ひな久五郎は一寸不安をおぼえるのである。

机の上には例に依つて書き掛けの原稿がキチンと揃へて置いてあつて、其の上に水晶の文鎭が載つてゐた。其の原稿の厚みはもう幾日も前から少しも變らなかつた。

「今度のお作では先生も餘程苦心して居られるやうだ。其の代り書き上げてしまつたら吃度世間が驚くやうな面白いお作が出來るに違ひない」

兄弟子達がよくそんなことを云つて話してゐるのを久五郎も聞いてゐた。

「一體先生はどんな事をお書きになつてゐるのだらう？」

彼は好奇心を誘はれて、其の原稿を一寸だけでも覗いて見度くなつた。併し、日頃師匠から嚴かましく云はれてある言葉が、彼の慾望を阻止しようとした。

「だが今日は誰れもゐないから大丈夫だ。元の通りにして置けば分る氣遣ひない――」とも思つた。

久五郎は、無邪氣な惡事を犯す興味も手傳つて、到頭師匠の机の前に座り込んで、原稿を手に取つて一番最初の處から讀み始めた。彼は一寸初めの處だけ覗いて見るつもりだつたのであるが、讀み出すとつい面白くなつて、こつそり他人の秘密に觸れる時のむづ痒いやうな快味を輕く意識しながら、置き端がなくてもう一枚一枚と讀んでゐた。

突然、久五郎は人の足音を聞き付けて、吃驚して背後を振り返つた。其の時はもう遲かつた。師匠が座敷の口に立つてゐた。源内は途中から忘れ物をしたことに氣がついて戾つて來たのだ。「久五郎、貴樣其處で何をしてゐた？」

源内は刀を提げて突つ立つた儘門弟の方を睨み付けた。久五郎は吃驚したが、直ぐに原稿を机の上に置いて、猫のやうな恰好をして脇の方へ寄つた。

「何をしてゐたか云つて見ろ！」

「何んにもしては居りません」と久五郎は顫へ聲で云つた。

『嘘をつけ、今原稿を讀んでゐたではないか』

「否え、讀んだのでは御坐いません。風で飛びましたので、捕へてゐたので御坐います」

「默！れ師に向つて僞りを申すとは不埒な奴だ是れへ出ろ」と源内は眞靑な顏をして呶鳴つた。

「お師匠様、何卒御勘辨なされて下さいませ」久五郎は、師匠の劍幕が餘り怖ろしくなつて來たので、矢張り同じやうに眞蒼になつて、疊に手を突いて云つた。

源内の眼には、今程此の少年が憎く見えることはない。否、人間に對して是れ程劇しい憎悪を感じたことはない。其のパッチりと冴えた黑い眼は、掏摸の眼よりも狡猾に見えた。其の紅い唇は賤しい娼婦の唇よりも厭らしく見えた。其の高慢な鼻が冷たく彼を嘲つてゐた。彼は、どうにもならない忌まはしい、腹立たしいものに向き合つてゐるやうな氣持がした。此の少年を八つ裂きにしてしまはなければ氣が濟まなかつた。

「無禮者！」

源内は恁う叫ぶが否や、だしぬけに刀を拔いた。

「あれえ、お師匠様御勘辨下さい──」久五郎は泣きながら逃げようとした。

源内は拔身を振り上げて追ひ縋つた。彼は只黑いやうな悪魔を追つてゐるのだつた。其のほかには何にも考へなかつた。

悲鳴が其の部屋から聞こえて來た。

五

源内は發狂したのだつた。

狂人でも、人を殺した罪に依つて、彼は捕縛されて傳馬町の牢獄に繫がれた。獄屋にゐても彼れは屢狂躁の狀態を發した。そして、見る見るうちに衰弱していつた。

或る日、彼は筆と紙を借りて、次ぎの句を書いて人に示した。

乾坤の手をちぢめたる氷かな

入獄後一箇月足らずで、彼は病んで獄中で死んだ。安永八年十二月十八日が、其の忌日で、行年五十一歳であつた。

遺骸は橋場總泉寺に葬つて、智見靈雄居士と謚した。

生前源内と交誼が深かつた若州小濱侯の醫師杉田玄白は、私財を以て墓表を建て、自ら碑銘を撰して、是れに鐫むだ。併し、公けに罪人の墓を建てることは許されなかつたから、間も無く官の命が下つて、此の碑も取り毀されてしまつた。

流行の作家
流行の書物

佐藤春夫

武者小路實篤氏。有島武郎氏。倉田百三氏。島田淸二郎氏の「地上」。「死線を超えて」江原小彌太氏「新約」其他。菊池寛氏。――この四五年來の流行作家、流行する書物。（といつて悪ければ讀書界に勢力のある作家と作品と）を僕の耳目にふれるかぎりで列記して見ると以上のとほりである。これらの諸家に就て自分は、武者小路氏をのぞいた外の諸家のものは殆んど知らないと言つていい。菊池寛氏のものは氏がまだ流行作家にならない以前のものはよく讀んだが、二三年前「小說灰色の檻」といふ小說を讀んだきりその以後のものは殆んど讀まない。有島氏のものはあまり有名だから「或女」を讀んで見たいと思つて上下二册買つて來たが、その上卷の五分の一ほどを讀んで、あとは讀まなかつた――正直に言ふと讀みつゞける氣になれなかつたのである。「地上」は第一卷を、倉田氏のものは「俊寛」とこの間の「父の心配」といふのとを見た。江原氏のものは未だ一ぺんも見る機會がない。そのうちに何か一つでも讀んで見たいと思つてゐる。一つ讀んで見たらへで未だ幾つでも讀みたくなるかも知れない――ならないかも知れない。兎も角も僕は、流行作家や流行の書物に就て必ずしも冷淡ではないつもりなのである。そのくせあまり澤山讀んでゐないのは、その新らしい流行を一つ二つ試みに愛讀しようとしても僕には、それほど面白く感じられいからである。さうしてその一篇或ひは五六頁で、もう解つたといふ氣がするのである。もう解つたといふのは――必ずしも悪いとか、つまらないとかいふ事ではない。或る場合には、その「好さ」がもう解つたと思ふこともある。さうして未だ讀まない江原氏と倉田百三氏とがまだよく解らないだけで外の諸家は、何れも「もう解つた」つもりである。

但、武者小路氏だけは例外で、この人は僕の尊敬することの出來る極く少數な現代人物中の重要な一人である。――この人こそ深いところから目に見えない影響を、現代並びに後代に殘すであらうと思ふ。僕は武者小路氏の方角を「もう解つた」と思つてゐる。さうしてこの後も彼が進んで行く刻々の歩みをいつも「解つた」「解つた」と感じたいものである。若しさう感じられなくなつたとすると、僕自身で心細い氣がするだらう。――さうしてこの人は今はもう流行の人では無くなつてゐる。實際この人の「人類愛」のセンチメンタリズムはもう昔のもののやうに甘いものではない。

倉田百三氏といふ人は僕にとつて實に不可解な人である。あれほど神的な智慧を持ちながらあれほど野卑な藝術神經を持つてゐる人がゐるか、といふことが僕には、全く驚異的な事實である――最近「父の心配」を見てさう思はずにはゐられなかつた。あまり不思議だから何かもう一篇讀んで見るつもりである。

武者小路、――倉田、――有島、――島田、――「死線を超えて」――菊池寛。これらの人人のなかに何か外側だけでも互に相似たものがありさうに見えるが、それが我々の時代の精神なのであらう。誰かそこのところを一つ論じて見せてくれないものだらうか。



愛犬物語

澤田撫松

一

私は犬が好きだ。それには別に理由はない。が然し、どうしてそんなに犬が好きだと尋ねられると、私に子供がないのが、さうした動物を愛すると言ふ氣分を起させたのかも知れぬが、一つは、子供時分に、俺が大きくなつたら、どうしても犬を飼はねばならぬと、妙なところに發心を起したのも、かうした犬すきになつた原因でもあろう。それはかう言ふ譯だ。私がまだ小學校に通ふて居た頃、さよう、九才位の時だつたと記憶して居る。同級生に川端孝太郎と言ふ兒があつた。母親が女髪結で、私の家の横町に住むで居た。其家に『カメ』と言ふ腹が茶色で背が黒い洋犬が居た。私等子供が鬼ごつこをしたり、隱坊をしたりして遊んで居る時は、毎も一緒になつて遊んで居る犬だもんだから、子供仲間では人間と同じ樣に扱はれて居た犬であつた。その犬が姙娠すると、生れた子供を貰はうと言ふ競爭が起つた。私も、子供としては、あらん限りの智慧を絞つて運動したので、やつと一疋だけ貰ふ約束が成立した。かうなるともう嬉しくて堪らないので、毎日の樣に川端の家に遊びに行つた。そしていつ頃子を產むのか知らんと、子犬の產れるのが樂しみであつた。が、なか〳〵產れないので待ち遠しくて仕方がなかつた。子犬はどうして產れるのかと言ふ、はつきりした認識はなかつたけれどお尻から產れる位のことは、ぼんやりと知つて居たから、毎日、犬の尻ばかり眺めては、子犬の產れるのを待つて居た。さうして居る中にとうとう子犬が產れて、其なかの一番小いさい、黑い縮れた毛の牡犬を貰ふことにした私のつもりでは、子犬が產れたら直ぐ貰つて歸れるものと思つて居た。ところが、產れた子犬を見ると、なる程犬の形はして居るが、頭の大きい、その割りに軀の小さい、變てこなものであつた。眼はまだ開いて居ないし、乳を吸ふほかには物を食ふこ

とさへも知らなかつたなら、とても親犬から離して、連れて歸ることは出來なかつた。孝太郎の母親の話では二ケ月位は親犬の傍につけて置かねば育たないと言ふので、私は直ぐに連れて歸れないことに於て落膽した。それでも、毎日子犬を見に行つて、一日々々大きくなつて行くのが嬉しかつた。子犬の數は六疋であつたので、この親犬に取つては少し多すぎた樣だつたが、一疋も死なさずに育てゝ行つた。さうして子供を育てゝ行く親犬の心づかひと言ふものは、尋常一樣なものでなかつた。川端の家では、この親犬の爲めに、かなり大きい、そして頑丈な犬箱がこしらへてあつた。その中で子を產すつもりだつたので、子を產む前になると（犬は交尾期に於て、最終の交尾があつてから六十二日目に出產するのだ。その當時は無論知らなかつたことだが、犬の研究を始めてから知つたのだ。）箱の中へ新しい藁やら、古い襤褸ぎれを入れてやつたりして、お產の用意をしてやつて居た。犬もそれが嬉しかつたものと見えて臨月の腹を抱へた『カメ』は日がな一日箱の中で寢て居た。だから、てつきり箱の中で子を產むものと思つて居た。すると孝太郎が朝起て箱の中を見ると『カメ』が居ない。どうしたのかと思つて居ると、玄關の疊の下にクン〳〵犬の啼き聲が聞えた。椽の下で產むだのだろうと思つて、根太板を剝いで見ると、地面を丸く堀つて、穴の中に『カメ』が寢て居た。『カメ』の腹の下から小さなものが動いて居た。弄つてはいけないと孝太郎の女親が制して居たので、その日は誰も手を出す者がなかつた。『カメ』も一日身動きもしなかつた。飯を食ひにも小便をしにも出て來なかつた。その翌朝は『カメ』が小便に出た。孝太郎が飯をやろうと思つて、味噌汁のかゝつた飯を犬の食器に入れてやると、『カメ』はまるで飲み込む樣に急いで食ひ始めたが、椽の下で子犬が啼き出すと、飯を半分食ひ殘して、慌てゝ穴の中へ驅け込むのであつた。子犬を踏みつけまいと思つて、丸くなつて寢るまでの苦心てなかつた。親犬がそうした心づかひをして居る中に、子犬の眼が開いた。それは生れて十二日目の朝であつた。眼のあく三日前に、椽の下から箱の中へ移轉さして置いたので、眼のあくまではじつとして居た子犬も、眼があくと箱の中を步き廻つて居た。かうなると可愛くて仕方がないから、私は自分の犬ときまつた縮毛の黑犬を取り出しては抱いて見たりした。二ケ月ほどたつてからやると言ふ、孝太郎の母親の言ふことなどを聞いて居ることが出來なかつたので、子犬が生れて二十日目に、私は黑犬を自分の家へ連れて歸つて、ジョンと言ふ名をつけた。連れて歸つた晚、ジョンを寢床の中へ入れて兩親に叱られた私は、翌朝裏庭へジョン

の入る箱をこしらへてやつた。そして自分の飲む牛乳を飲まないで、皆ジョンに飲ましてやつた。かうして私が丹精して育てた『ジョン』は、三月ほどすると、誰を見てもちやれる愛くるしい犬となつた。學校から歸へつて來て、『ジョン』と遊ぶのを何よりの樂しみにして居た。さうした樂しい私の生活も長くは續かなかつた。その時、五才になる私の弟が、大の犬嫌いで、犬が居ると庭へ下りて遊ぶことが出來ないと言ふことが、犬放逐の理由となつて、『ジョン』は家へ置いてやることが出來ないと言ふ、嚴かな命令が兩親から下つた。『ジョン』と別れることは、私にとつて辛いことではあつたけれど、兩親の言ふことを聞かない譯に行かなかつた。自分の牛乳を飲まずに育てた『ジョン』は、とう／＼餘所へやられてしまつた。

二

私の手から、私の『ジョン』を奪はれた時、我は我國の家族制度に不滿を懷かずには居られなかつた。その時分の京都は(今でもさうだろう)家長的家族制度を極度に讃美し、財産不分割制に從ふて、財産は全部長男が相續することになつて居たから、次男に生れた私なんぞは、家庭に於ては餘物にされて居た。私が長男であつたなら『ジョン』もかうした悲しい運命にはならなかつたものを、私が次男であつたばつかりに、自分の趣味なぞと言ふことは、全然無視されて、一疋の子犬でさへも保護することが出來なかつた。それは子供心にも悔しいと思つた。これと言ふのも、自分が親がゝりの身であるからだ。大きくなつて、一人前の人間になつたら、犬を何疋飼つたつてかまはないのだ。早く大きくなつて、犬をうんと飼つてやりたい。と、まあ、こんな子供らしい奮發心を起したのだ。けれども、私が家を飛び出して、東京へ來てからは、全くの苦學生で、下宿屋の拂ひも碌々出來なかつたのだから、犬を飼ふなぞと言ふことは思ひもよらぬことであつた。私の學友の伊達源一郎君は、鷄が好きで、下宿屋に居た時分から鷄を飼つて、押入の中に、高價な鷄を並べて喜んで居たが、それは下宿料を滯らさない人のすることで、私の樣に、月末になつても、滿足に下宿料の拂へない人間には、いくら犬が飼ひたくても、さうした眞似は出來なかつた。それがやつと、新宿の北裏に、家賃五圓の家を借つて、其所で自炊生活を始めると、多年の宿望であつた犬の問題があたまを持ちあげて來た。假令貧弱な借家であつても一戸の主となつた以上は、犬を飼はうが猫を飼はうが、誰に遠慮がいるもんか、と俄に氣が大きくなつて、犬を飼ふことにした。ところが、飼はうと思ふ樣な犬がなか／＼見あたらないのだ。かう言ふと、犬の子なんか、幾等でもそこらにころが

つて居るではないかと言ふかも知れぬが、犬に對する私の知識は、かなり進むで居たので、其所らにうろついて居る雜種の犬は飼ひ度くなかつたからだ、犬好きとして私が犬を飼ふ以上は、犬種の判然した犬が飼ひたかつたから、それで、容易に手に入らなかつたのであつた。こゝらで、一寸犬の講釋をさして貰ひたい。犬と言ふ動物は一體いつ頃から地上に住むで居たものかと言ふと、これは餘程古いものだ。石器時代の遺物に、犬の形の彫りつけてあつたのもあるし、アッシリヤの古墳を發掘した時人骨と共に犬の骨も出たさうだから、犬は人類と殆ど同時に發生したものと思はれる。日本でも餘程古くから居たものだ。記錄に現れたのは日本書紀で、垂仁天皇の八十六年に、丹波國の桑田と言ふ所に住むで居る甕襲と言ふ人の飼犬が狢を殺して、その狢の腹の中から八阪瓊勾玉を取出したと言ふことや。用明天皇の二年に、蘇我馬子が物部守屋を河内の澁川に殺した時、守屋の臣鳥捕部萬の首を梟首にすると、萬の飼犬がその首を、銜へて山中に隱れ、絶食して首の傍で死んだと言ふ樣なことが書いてある。それより以後の書物には今昔物語や和漢異聞集や元享釋書なぞにも犬のことが書いてある。かうした日本の記錄に殘つて居る犬は、言ふまでもなく日本犬だ。西洋犬の日本へ來たのは、嘉永元年の頃、和蘭の醫者が洋犬を長崎へ連れて來たのが初りで、その後、明治元年頃、橫濱居留地八十一番の英國人が『イングリッシュセッター』を十疋ばかり輸入して、それを繁殖してから、西洋犬と言ふものが日本人にも愛玩される樣になり、段々新種も輸入され、遂に今日の樣な多くの洋種犬を見るに至つたのだ。」

三

日本犬でも土佐、秋田と言つた具合に種類別けをすると、幾種類にも分類されるであらうと思ふが、秋田犬を除くの外（土佐犬は今日では日本犬でない）日本犬と言ふものを見當らないので、日本犬の種類に就ては研究が出來て居ない。だから、玆では西洋犬に就て言つて見たい。西洋犬の種類も、毎年『犬種年報』を見る度に種類が殖えて行くから、概數より言ふことが出來ぬが、ざつと二百四五十種はあらうと思ふ。然し、この中で日本へ來て居るのはさう澤山はない。私が東京で見ただけの種類を舉げると、ポインター(Pointer)、テリヤ(Teirer)、スニール(Spaniel)、ビーグル(Beagle)、オッターハンド(Otter hound)、セッター(Setter)、レトリーバー(Retricuer)、ダッチスハンド(Dachshund)、グレーハンド(Greyhund)、ボルゾオイ(Borzois)、セントバーナード(St.Bernard)、ニューフアウンドランド(New foundlanp)、マスチーフ(Mastiff)、コリー(Coll

ig)オールド、イングリシュシープドック(Old English-Sheep-dog)ブルドツク(Bul Dog)、プードル(Poodl)、ポメラニアン(Pomeranian)、パッグ(Pug)位のものだ。然しポインターの中にもイングリシュポインター、獨逸ポインター。セッターの中にもイングリシュセッター、アイリシュセッター、ゴルデンセッターと言ふ様に種類別けをして行くと、その種類はかなり澤山になる。が純粋のものは至つて少ない。大抵は皆雜種になつて居る。雜種にならなくとも日本に來ると著しく退化するのだ。ポインターの純粋のものは尻尾を水平以上にあげないものだ。それが大抵なポインターは尻尾を弓形にあげて居る。私の友人が、どうかしてよいポインターを殖したいと言つて、獨逸から純粋のポインターを牡牝取り寄せた。無論尻尾は水平以上にあげなかつた。それでその二疋を他の犬と交際さゝぬ様にして子犬を產ましたが、尻尾は矢張り弓形に卷くのであつた。から言ふと、尻尾を水平に保つて居やうが、弓形に卷かうが、そんなことを氣にする心要がないじやないかと言ふ人があるかも知れぬが、なる程、尻尾を卷くだけで事がすむなら、それは大した問題でない。ところが、尻尾にさう言ふ癖があると、犬の知識は餘程劣等になつてゐるのだ。尻尾を水平に保つて居るポインターと尻尾を卷くポインターとの知慧にはかなりの距離がある

純種の犬と雜種の犬とは、文明人と野蠻人ほどの相違がある。だから私が犬を飼うと言ふことになると、何種でもよいから純種のものが欲しい。純種のものが得られぬまでも、純種に近いものが欲しいと思つて居たのだ。ところが、純種の犬と言ふものはなかなか安くないもので、その當時貧乏な私としてはそれを買ふなぞと言ふことは思ひも依らぬことだつたから、誰か知つた人で、純種の犬でも持つて居たら、その犬の子でも貰ひたいものだと、随分虫のよい希望を懷いて居た。けれども、さうしたうまいちよぼいちは、なかなか舞ひ込むで來なかつた。私がさうして犬を貰ふことを心がけて居る時、犬をやらうと言ふ人は出ないで、女房を世話しやうと言ふ人が現れて來て、私の家へは、犬より先に、女房が來てしまつた。その時分は、東京日々新聞の前身の電報新聞の編輯に居たので、新宿の北裏から、毎日電車で有樂町の新聞社へ通ふて居た。丁度大晦日の夕暮、私は社から出て有樂町の停留所の方へ歩いて行くと、煙草屋の前に小いさい子犬が二疋、溝板の上に顫へて居た。見ると、テリヤ種の、生後二ケ月位の子犬であつた。飼犬にしては毛色に艶がない、棄て犬にしては犬がよすぎる、どうした犬かと思つて、煙草屋で聞いて見ると、迷ひ犬か棄て犬か知らないが、十日ほど前から家の前へ來て、何所へも行かないから、飼つてや

らうかと思つて居るが、二疋だから考へて居る、一疋なら飼つてやつてもよいと言ふのであつた。そこで相談の上、一疋を煙草屋で飼ふことにして、一疋を私が連れて歸へることにした。煙草屋で小いさなボール箱を貰つて、その中へ入れて持つて歸つて箱から出すと、掌の上へ、四ツ足を揃へて立てる程の、小いさいフオクステリヤであつた。このフオクステリヤと言ふ犬は狐狩りに使ふ犬で、狐の穴へ飛び込んで狐を獵り出すのが役目だから、小いさい穴へもはいれる樣に、からだが小いさく出來て居るのだ。犬をよく見ると、幾らか雜種にはなつて居るが、殆ど純粹と言つてよい位だ。犬屋へ素人が買ひに行けば、立派に純種で通るしろものだ。骨董好きが、古道具屋で、堀り出し物でも買つてきた樣な悦びで、私はその犬をいぢつて居た。飼主に棄てられて、暫らく宿なし犬になつて居たので、輕い皮膚病になつて居たのが氣持が惡かつたから、アルボース石鹼で每日洗つてやると、十日ほどの間に綺麗に治つて、白と褐色の毛色に艶が出た。

四

この犬は、『ペット』と名をつけて、疊の上で育てたから、人間の言葉は大抵理解する樣になつた。一口に犬と言ふけれど犬の種類に依つて、智慧にも餘程の等差がある。テリヤ種やスパニール種の樣な體軀の小いさい犬は、小才は利くが、人間を驚かす樣な智慧がない。ニユーフアウンドランド種やマスチーフやセントバーナード種の樣な大きい犬は、小才は利かないけれど、時々人間を驚かす樣な智慧を出すものだ。ニユーフアウンドランドと言ふ犬は、體量二十貫からある巨犬で水泳に巧みなことはまるで河童の樣だから、外國では水上警察や捕鯨會社でこの犬を飼育して居る。それはどうするかと言ふと、水上警察で河川や海上を巡視する時に、この犬を船に乗せて行く、そして若し投身者や溺死人のある時は其の犬に救助さしたり、死體を集めさしたりするのだ。マスチーフは獨逸のビスマルクが獨逸ポインターとブルドツクとを交尾さして作つた新種だが勇猛なことに於ては犬の中の第一等で、ライオンと鬪つても引けを取らないだけの實力があるのだ。ビスマルクはこのマスチーフの中の最も勇猛な奴を二疋、每も傍から離さなかつた。この犬の御蔭で、刺客の毒刄から屢々免れたと言ふことだ。人間の護衛なんて言ふものは、眼で見なければ何にも分らないのだから、その活動は每も事件發生後だ。要するに後の祭りだ。何の役にも立つものでない。そこへ行くと犬には嗅覺がある(或は臭覺と言ふのかも知れぬ)。人間の樣に眼で見なくとも知る力がある。刺客が若し兇器を呑むで主人の傍に寄つた時、人

間にはそれが氣づかないで居ても、犬にはちやんと分るから、吠えるとか唸るとか乃至相手に飛びつくとか、何等かの方法を以て、危險の迫つて居ることを主人に知らすものだ。總ての犬がさう言ふ性質を持つて居るが、マスチーフに於て特にさう言ふ性質を餘計に持つて居るのだ。と言ふのはどう言ふ譯かと言ふと、ブルドックと言ふ犬は虎でもライオンでも相手を選まず飛び込むで行く勇氣と、相手の喉笛に喰ひつく天性と、喰ひついたら離さない特質を持つて居るが、普通の犬より臭覺が鈍い欠點がある。その欠點を補ふ爲めに、犬の中で最も臭覺の鋭い、そして怜悧な獨逸ポインターをかけ合したのだから、護衛犬としては理想的な出來なのだ。このマスチーフも十七八貫位の大きさになるものだ。それらか『セントバーナード』は、これも二十二三貫もある巨犬で、山中で積雪の爲めに凍死する者を救助する犬だ。犬の脊に毛布、藥品、食物などを負はして、雪の山中に放つと、積雪の中を驅け巡つて凍死者を搜す。そしてまだ息があると、自分の軀で暖めてやつて、藥や毛布を見せる。氣のついた遭難者は、その藥を飲み、食物を食ふて、毛布を軀に卷くと、犬は道案內をして、救護所へ連れて行くのだ。瑞西のセントバーナード山の寺院でこの犬を使つて、アルプス山脈を巡つて來る巡拜者を救助さして居るから、それでこの種の犬を『セントバーナード』と言ふのである。かう言ふ風に、小犬は小犬大犬は大犬、それ〳〵特色があるので、フオクステリヤの小犬を手に入れた私は、何種でもよい、大犬を今一疋欲しいと思つて居た。その頃、電報新聞は大阪毎日新聞と合併して、毎日電報と改題した。そして社の事業が擴張されると、私の地位も幾等か向上したので、北裏の家では少し不便を感じる樣になつたから、品川の東海寺、澤庵和尚の住むで居た春雨庵と言ふ寺の一部を借つて其所へ轉宅した。品川へ行くと間もなく、國木田獨歩君がやつて來て、德富先生に頼まれて來たのだ、君に是非國民新聞へ來て貰ひたい、と斷り切れない樣に勸められるので弱つた。獨歩君にはいろ〳〵世話になつて居たし、德富先生とは、同じ同志社に學むだ關係で、私が東京へ來ると直ぐ御世話になつた間柄でもあるゆえ、獨歩君の勸誘を斷ることが出來なかつた。毎日電報社には誠にすまんことではあつたが、お暇を頂戴して、國民新聞社へ移ることにした。その時分、夜の編輯を終るのが大抵翌日の午前一時頃になるので、品川行きの電車がなかつた。健二と言ふ車夫の厄介になつて、俥で歸るのが常であつたから、春雨庵へ歸るのが午前三時頃になる。それに、墓場の中央に在る寺のことだから、夜になるとかなり淋しいものだ。女房が一人で待つて居るのには、小いさいテリヤ

一疋では隨分心細いものであつた。大きな、勇猛な犬を一疋欲しいと言ふのは、强ち犬ずきと言ふばかりでもなかつた。

五

私が大きな犬を捜して居ると、耳よりな話を聞いた。それは本郷丸山福山町に住むで居る私の友人の隣りに、非常に大きい犬が子を産むだのたが、餘り犬が大きすぎるので、飯を餘計に食ふだらうと言ふ心配から、貰ひ手がないので困つて居ると言ふ話であつた。早速その友人の紹介で犬を見せて貰ふと、親犬はまぎれもないセントバーナードであつたから、交尾さした牡犬はどんな犬かと聞くと、同じ種類の犬がなかつたから土佐犬をかけたと言ふのであつた。成程三疋の子犬の中、二疋までは土佐がまざつて居る様に見えたが、一疋の牡犬は母親によく似てどう見ても純種のセントバーナードとしか見えなかつた。生後三ケ月だと言ふのにセツターの親犬ほどの大きさになつて居た。

私はそのセントバーナードの子犬を貰つて歸へつた。軀は大きいが、まだ子犬だから、育てるのに隨分骨が折れたけれど、連れて歸へつてから半年ほどたつと、小牛の様に大きくなつたのを見ると、丹精した甲斐のあるのが嬉しかつた。ところが、その年の十月の上旬から、私は感冒がもとで、どつと床に就いたそれでも、十一月の中旬頃からは、床をあげて、家の中でぶらぶらして居れる様になつたが、まだ社へ出ることは出來なかつた。小春日和で、暖い日であつたから、久しく入浴しなかつた軀の垢を落してくるつもりで、手拭と石鹼とを提げて、錢湯へ出かけて行つた。ジョン(貰つて來たセントバーナードの名)とペットがついて來た。私の家の前には目黑川が流れて、川の向側には硝子工場があつた。私は目黑橋を渡つて、工場の前を左へ、流れについて、濱側の方へ歩いて行くと、左側は川で右側は土手の所へ出た。其所までくると、久しく外へ出なかつた病氣あげくの私は、俄に腦貧血を起して、其所へ倒れてしまつた。倒れたあとは全く無意識であつたが、自分の名を呼ばれて氣がつくと、妻が藥瓶を持つて立つて居た。どうしたのかと聞くと、私が家を出て間もなく、ジョンは慌しく表から驅け込むで來て、針仕事をして居る妻の傍でけたゝましく吠えたてるので、唯事でないと思つて、萬一の用意に藥と繃帶とを持つてジョンについて來たら、路ばたに私が倒れて居たから、介抱したと言ふのであつた。私は錢湯に行くのをやめて、春雨庵へ引返へした。そしてジョンにうんと御馳走をしてやつた。若しジョンが知らしに歸らなかつたら、手遲になつて、もどらなかつたかも知れぬと思ふと、御馳走ぐらゐは安いものだ。それから

ジョンにはから言ふこともあつた。私の住むで居る春雨庵の裏は墓地で、其所には澤庵和尚の墓があつた。その墓は普通の墓石とは違つて、所謂澤庵石の樣な、大きな丸石が二個重ねてあるだけだこの澤庵和尚の墓の後に狸穴があつて、其所に狸が住むで居た。ジョンとペットの二疋の犬が來てからと言ふものは、その狸の困り方はなかつた。毎日夜になると二疋の犬に吠えたてられるので弱つて居た。私は長らく犬の吠えるのを聞くと、それが人間に吠えて居るのか、犬以外の動物に吠えて居るのか、但しは犬同士吠えてるのかと言ふことがちやんと分る。二疋の犬が狸に吠えて居る時は、又やつて居るなと、直ぐ分るのであつた。その中に狸に吠えることが尠なくなつて、遂には絶對に吠えなくなつた。餘り犬に吠えられるもんだから狸の奴めら、どこかへ行つてしまつたなと思つて居た。すると變なことがある。ジョンとペットとが時々素晴しい御馳走を食つて居るのだ鯛の鹽燒とか玉子燒と蒲鉾とか言つた樣な、宴會歸りの折詰の中にでもありさうな肴を食つて居るのだ。それが人の食ひさしたものか骨ばかりなら別に不思議はないがまだ箸のついて居ない、うまさうな物を、バリ〳〵やつて居るのだから、變に思はざるを得ないのだ。春雨庵は寺だから肴のあらう筈はなし、私の家庭ではさう言ふ贅澤なものが毎日あらう筈もないから、どこか隣から銜へて來たものに違ひない。けれども、その邊には料理屋と言ふ樣なものもないのだから、どこから銜へて來たか出所が分らなかつた。さう言ふ御馳走を二疋の犬が食つて居るのを度々見たけれど別に詮議だてもせずに居ると、徹夜した朝、東の空が白みかゝつて、薄明りでそこらの物が見えかけて來た時、庭へ下りて新しい空氣を吸ふて居た。ジョンとペットが嬉しさうに、私のぐるりを廻つて居た。墓場を歩いて、澤庵和尚の墓の前まで來ると、二疋の犬が俄に駈け出した。何所へ行くのかと見て居ると、和尚の墓の後の、窪地の方へ尻尾を振りながら駈て行くのであつた。其所に狸穴のあることを知つて居たから、私もその後について行くと、狸穴の入口にかなり大きい鯛の鹽燒が置かれてあつた。それを見たので、御馳走の出所が分つた。品川の通りから春雨庵へ行くには、東海寺跡、尾崎行雄氏の家の前を通らねばならぬのであるが、此所では毎も狸がいたづらをすると言ふ評判だ。私も、宴會の歸りに、折詰を提げて來て中味を取られたことが度々あつた。狸の奴め、かうして稼いで來た肴を、二疋の犬に別けてやつて、すつかり犬を買收してしまつたのだ。

六

その翌年、私は高輪の南町へ引越した。高輪へ來て間もなく

ペットが子を産んだ。交尾の相手を選んでやらなかつたもんだから、自由結婚で、得體の知れない牡犬とくツついたと見えて、ペットとは全く似てゐない、白と黒との斑を産んだ。それでも親が小いさいから、生れた子は鼠の子くらゐしかなかつた。産んだのは二疋であつたが、一疋は死んで、一疋だけしか育たなかつた。一ケ月ほど經つと、犬箱の中から出て庭で遊ぶやうになつた。ばかに小さい犬だつたから豆造と言ふ名をつけた。そして自分の家で生れた犬の子で可愛かつたから、抱いてやらうと思つて手を出すと、いやがつて逃げる、それを無理に捉へやうとすると噛みつかうとする。まだ生れたばかりの子犬でかうだから、大きくなつたらどうなるだらうと心配でならなかつた。母親はフオクステリヤで、怜悧で從順な犬であつたから、こんな子を産む筈はなかつたのであるが、かうした犬が生れたのは、かゝつた父犬が野犬であつたに違ひない。交尾期に監督しなかつたのが惡かつたのだ。子犬がさう言ふ風で、性質がよくなかつたから、時々子犬を叱ることがある。すると親犬のペットが怒り出して、豆造を連れて家出をする。そして二日も三日も歸へつて來ない。甚だしい時は一週間位も歸へつて來ないことがあるこれまでは誠に從順であつたペットが、豆造と言ふもが出來てから、イヤに性質が拗ねて來て、主人との間に圓滿を缺く様になつたから、一層豆造をよそへやつてしまつた方がよからうと思つて、豆造の貰ひ手を捜したが、さう言ふ犬だから一寸貰つてくれる人がなかつた。それでも私の家へ出入りする本屋が、豆造の性質を承知で貰つてくれるといふので、その本屋に貰つてもらつた。豆造が居なくなつてから暫らくは、ペットは大の不平で飯をやつても食はなかつたが、高輪から大久保へ引越して來た時分にはもう諦めたと見えて、元の從順な犬になつた。大久保へ來ると間もなく、ジョンが心臓糸狀虫で死んだので、西大久保の全龍寺へ葬つた。私の自慢にしてゐたセントバーナードが居なくなつたので、俄に淋しさを感じたから、ジョンに代る樣な犬が欲しいと思つて居ると、私の家の横町に株式の店へ出て居る人があつて、其所にマスチーフの牡犬が居た。いゝ犬だから欲しいものだと思つて居たけれど、さうした犬をくれる筈ないと思つて、別に交渉もしなかつた。すると、どうしたのか其所の家では、その犬を置き放しにして夜逃げをしてしまつた。犬は宿なしになつて主人を捜してゐるのがいぢらしかつたから三度の飯をやつて居る中に、私の家の犬になつてしまつた。喧嘩がすきで、傷のたえたことがないからの、向傷の勝造といふ名をつけてやつた。私は毎朝、勝造とペットを連れて戸山の原へ散歩に行つたが、戸山の原には、

野犬團が幾組もあつて、私の連れて居る犬と衝突することが度々あつた。犬と言ふ奴は、主人を持つて居る間は排他主義で、知らない犬が通ると、吠えついたりするが、一朝主人を失へると、孤獨の生活は出來ないのだ。野犬團を捜してそれに加盟する。野犬團の方では、一疋でも團員の多い方が勢力になることを知つて居るから、入つて來る犬は拒まない。野犬團の犬と言つても、腹からの野犬ばかりでなく、元は主人持ちであつた犬も多いのでかなりよい犬も居る。然し野犬團の犬は普通家畜の犬と顔つきが違ふ。腹からの野犬は言ふまでもなく、主人持の犬でも一度野犬團に入ると、牙が長くなつて、牙を覆ふてゐた上脣が縮みあがるので、牙が露出され、かなり獰猛な顔になる

それでは、犬が主人を失へると皆野犬になるかと言ふと、さうでない。犬の種類で、さうした場合に、野犬團に加盟して野犬になれる犬と、どうしても野犬になれない者とある。雜種の犬は大抵野犬になり得る可能性を持つて居るが、プードル(Poo lle)、ポメラニアン(Pomeranian)パツグ(Pug)ペキニース(Pekinese)ジヤパニース・スパニール(狆)なぞは、主人に見棄てられる様なことがあつても、決して野犬團には走らない。接近する人間に媚を呈して、第二の主人を作ることに努める。如何に努力しても主人を持つことが出來ない時は、餓死して死んでしまふ。かう言ふことを段々研究して行くと、犬の元種は一つのものでないらしい。狼、山犬なぞと系統を等しうするものと、全然違つた系統に屬するものとある様に思ふ。

私は戸山の原へ行つては野犬の研究をして居る中に、又一疋大きな鬪犬を買つた。これは純白の土佐犬で、淺草のケンネル倶樂部で大關を張つて居たかなり名高い犬であつた。この鬪犬とマスチーフの勝造を連れて戸山の原へ行くと、流石の野犬も近づかなくなつた。犬のことに就いて、書きたいことはまだ〳〵あるが、與へられた紙數を超過したから、折を見て續稿を書くことにして、この稿はこれで擱筆することにする。

中澤臨川著

嵐の前

我が思想家中の第一等の才筆家であつた臨川が情熱の天才ニイチエを憧憬するのあまり彼の失戀を題材として描き出した涙ににじむ思想小説を見よ。

拾壹版

東京芝櫻田前備町
改造社
振替東京八四〇二

定價金貳圓
送料金拾六錢

山川均著

レーニンとトロツキー

露國革命を語る者の第一に手をつけねばならぬ良書。兩雄の生立、專制政府との爭闘を紙背に徹する眼力を以て剔抉論評す。著者は社會主義者中の人格者として定評あり。

七版

東京芝櫻田前備町
改造社
振替東京八四〇二

價壹圓拾九錢
送料金拾六錢

◇泰西名畫家傳◇

石井柏亭著

（第九編）

マネエ

（新刊發賣）

代表作三十二葉
中判三百頁函入美本
定價參圓　送料拾貳錢

エヅアール・マネエの長からぬ生涯は守舊派と俗衆とに對する苦闘を以て終始した。而かも彼れが『繪畫の爲めの繪畫』の主張は廣汎なる感化を近代の繪畫に與へたクールベエと共に彼れは實に近代繪畫の父祖であつた。著者石井氏はデューレエ氏の著書から其傳記を譯すと同時に、別に『マネエの藝術』なる一篇の論文を草して縦横に諸家の言説を評し又自家の創見を述べて居る。今日本に於けるマネエの評傳者として石井氏以上の適任がある可くも思はれない。

足立源一郎著

（第拾編）

ドオミエ

（新刊發賣）

中判二百八十頁美本
代表作三十一葉
定價參圓　送料拾貳錢

バルザックをして『彼は皮下にミケル・アンジエロを抱き込むでゐる』と驚嘆せしめたオノレ・ドオミエは十九世記フランスに燦然として輝いた藝術革新の曙光である。三十年派の一人としてミレー・ルツソオ・コローなどゝ共に、自然の生々しい本體への復歸に覺醒した畫家である。自由と正義に對する熱情と、彼が生れた南國の光の如き慈愛と清朗な心によつて、舊巴里を背景として描出された多趣多様な生活の實想、『人類動物』の展觀こそは久遠に變りなき人性本然の姿である。

東京本郷湯島六丁目　**日本美術學院**　振替東京五八八六

現代文化人の心理

文學博士

◇◇四六判函入背皮金文字入　最新式機械綴參百八拾五頁◇◇定價金貳圓七拾錢◇◇送料金拾九錢◇◇

◇第一講　文化と文明――文化の社會學概念

本講演のプログラム……今日我國に於ける流行語としての文化……クルツアとシヴイリゼーション……クルツアの語源、原義及び意義の發達……シヴイリゼーションの語源、原義及び意義の發達……獨逸に於ける近代的クルツア概念の發達……文化の概念と民族主義或は國民主義……文明の概念と世界主義或は人道主義……日本の文化と日本の

米田庄太郎著

文明……今日我國で何故に文化と云ふ語が盛に用ひらるゝに至て來たか……文明と文化との根本關係……文化の社會學的一般概念……文化の社會學的研究の根本問題

◇第二講　文化の哲學的研究——文化哲學の概念及び根本問題

文化の哲學的研究の必要……文化の哲學的概念……文化哲學の任務——二種の文化哲學……文化哲學の哲學的性質（一）經驗主義哲學……（二）超越的實在者主義哲學……（三）超越的妥當者主義哲學即ち價値哲學……現代の文化哲學とカントの批判哲學……リツケルトの哲學概念……文化哲學の根本問題……（一）絶對的價値の箇別的研究……（一）價値體系論……（三）人類の歷史的發達に於ける價値實現の究明……結論及び文化哲學と社會學

◇第三講　文化發達の社會學的原理と現代文化の一般的特質——ブルヂョア文化とプロレタリア文化

文化發達の社會學的原理——社會的感覺及び理性說、基本階級說、中間階級說及び選良說……社會組織の概念……無階級的社會組織と階級的社會組織……貴族階級とブールヂョア階級……勞働者階級の發達と現代社會の社會進化上の意義……文化の發達及び現代文化の文化發達上の意義……社會進化と文化發達との根本關係……現代文化の一般的特質……ブールヂョア文化の一般的特質……資本主義精神の分折……（一）無限的營利心……（二）經濟的合理主義……廣義の資本主義精神の概念……近世自由主義と資本主義との關係……ブールヂョア文化の評價……（一）自然の征服……（二）自由主義の發達……（三）文化の高等なる發達の必然的一階段……（四）ブールヂョア文化の手段的性質……ブール

現代文化人の心理内容

現代文化人の心理內容

自然人と文化人とを對立させて考へる主意……自然人と文化人との區別の標準……自然人の心理及び文化人の心理研究の發達……知情意の不分化と分化……知力……感情及び意志……生活條件一般の影響……生活條件と生活氣分

現代文化人の心理の一般的特徵……過渡期の社會心理的過程の考察……過渡期の社會心理的過程の一般的形式……其の說明……近代大都市の發達と其の社會學的意義……(一)近代大都市に於ける刺激の過多と強烈……(二)近代大都市人の群集心理的狀態……現代文化人の神經昂奮、神經衰弱及び不安の念……新しき刺激の慾求及び神秘主義……神經衰弱と現代文化人の運命……現代女子の心理……現代女子運動に現れたる女子の要求、或は精神的傾向……現代女子の理性及び人間意識の發達……婦人運動反對論の考察……婦人運動と文化の高等なる發達との關係……現代女子の神經昂奮、神經衰弱、ヒステリ性及び我國の女子運動に對する私の希望

◇第六講　文化の發達と人類の運命

文化の社會學的研究特有の一問題‖文化が國民の生物的實質の上に及ぼす影響……文化國民の歷史的運命即ち滅亡、及び其の原因……ヘーゲルの歷史哲學……蠻民の侵入と國民の頽廢……國民頽廢の二義……現代文化國民に於ける頽廢の徵候の問題……現代大都市の頽廢的影響……文化國民の頽廢に對して抱かれる種々なる感想……現代文化國民は如何にして歷史的運命を免かれ得るか……國民保健及び都市計畫……優生學及び優生の策

八版發行

東京市芝櫻田備前町
振替東京八四〇二番

改造社

一九二一年以後の人々

聖雄ガンデー

山名信敏

一

戰場の武器は皆奪はれておる、我々に殘されたる者は「魂の勇氣」ばかりだと彼は云つた、全印度の非協同運動、非暴力運動の一大首領である彼の一大思想は今や全世界の闇に一大光明を投げつけた、彼の一大經綸と半生の苦鬪を知るものは誰として感激の涙に咽ばぬ者があらうか、南亞の監獄にある時、最愛の兒童の危篤を傳へられ、そして保釋金を出してその枕頭に侍すべく奬められても、彼は「兒童の生死は神の御手に任す」と稱して頑として動かなかつた、再び夫人の危篤を報ぜられても「個人的係累の爲めに心を動すは全印度の共同を弱め、感應を弱める」と云ひ放つて直ちに馬首を他に回らした、彼はかくの如き克心的の強く、情熱燃ゆるが如くして、表には神色些の微動だにさせない、彼は全印度の魂であり、靈寶であり、生ける神である。一たび手を動かせば印度二億の民は彼の爲めに血を流すを喜んでおると云ふ、眞に彼は印度に於ての唯一の絶體者であり、唯一の太陽である、英國官憲の彼を恐るゝことは努級戰艦の數艦隊に優り、或は十箇の軍團より甚しきものがあらう。彼の堂々王者の如き態度に對しては英國の官憲も手を下すことが出來ぬのである。彼の前には權力もなく、強者の威も及ばない。

彼は全印度に於ける巨人といふばかりでなく、それはレーニン以上の深さと容積とを有する現代の第一人者である。彼は思想としてはプラトーンの流れをくむ、しかしその深さから云へば彼以上とも云へよう。彼は絶體の無抵抗主義を奉ず、さりながらその結果に現るところは實に强い直接行動である。

全印度は唯今ガンデーの天下である。幾百年來印度のマホメタンとヒンヅー教徒との爭鬪は遂に印度を今日の如く弱少にした、英帝國は常に其の隙を看取し、利用しそして今日に至つたのである、しかるに一度び彼ガンデーの出現するに及んで全印度

同族間の爭鬪に全く終熄した。

二

彼は來る可き春を迎へて五十三歳、歐洲では照る日も麗かに「若返り法」の研究に餘念がないが、米國の知識階級ではガンデー研究が今を眞盛りの姿だ、然り、彼は靈的崇高味を帶びた革命家だ、彼は、かの消極的なトルストイ主義の尤も積極的な實行者たるガンデーは理想主義的革命を高調し、宣傳し、實行しつゝあるのだ、それで精神的に生ぬるい味方よりは空想家と非難されておるが、正面の敵よりは最大なる危險思想家、强力なる實行者と目せられておる、さりながら彼の崇高無二の人格に對しては敵も味方も鳴りを靜め、そして一點の雲翳を止めざる明朗透徹の彼の「愛の生活」に對しては誰とて跪かぬものはない。彼はナザレの聖者の如く、古印度釋聖の如く尊崇されておる、そして彼は一切の物質的快樂を斥けて一杯の乳一椀の飯にその短軀を支へ、身に纏ふは一枚の綿布あるのみだ、しかしながら彼の心眼はいつも正義と純愛に燃えておる、不法暴力のためなら、虐げられたる人のためならば血の海を渡るのをも辭さない。劒の林を渡ることも辭さない。曾つて紐育の一牧師ホルムスは語つた。彼れの純潔無垢の大人格はレニンとロマン・ローランの綜合した總容積より大きい現世最大な者だ」と。今彼の具體的思想や、評傳をして見たいのだが、雜誌の締切が馬鹿に早いので、玆に彼の執筆せる思想の大半を掲げて彼の神の如き人格を偲びたい。

三

彼は過去十五年の間、サチアグラハ Satyograha 「眞理の把持」を說き且つ行ひつゝあつた。而して彼は曰く『今日、余が知るが如きサチアグラハの原則は、漸次に發展せるものである』『サチアグラハの名は、余が南アフリカに於て、その地に於ける印度人が滿八年の間、揮へる力を言ひ現はさんがために鑄たる言葉である。そは、當時英國及び南アフリカに於て、受動的抵抗の名の下に行はれつゝあつた運動より區別せんがために鑄られたるものである。』

四

『その根本義は、「眞理の把持」從つて眞理の力を意味する。サチアグラハ……余は、また、そを愛の力、または、魂の力とも呼んだ。サチアグラハを用ふるに當りて、余は既に早く、眞理の追求は、その敵に暴力を加ふるを許さず、寧ろ忍耐と同情に依りて、その誤謬より引き離すべきであることを發見した。蓋し一人の人に眞理と見ゆるものも、他の人には誤謬と見ゆることがあり得るからである。然るに忍耐とは、自ら惱むことである。かくして、

此の教は、敵に苦惱を與ふることに依つてにあらず、寧ろ我自らに與ふることに依つて、眞理を確立することを意味するに至つた。』

五

『サチアグラハは、恰かも北極と南極との如く、受動的抵抗とその類を異にする。後者は、弱者の武器として考案せられて、その目的を達するがためには、物力若しくは暴力の使用を排斥せざるものである。然るに前者は、最強者の武器として考案せられ、あらゆる形に於ける暴力の使用を排斥する。』彼は又曰く。『ダニエルが、彼の良心に背くメデア人及びペルシア人の法律を無視し、併かもおとなしくその不從順に對する刑罰を受けし時、彼はその最も純粹なる形に於て、サチアグラハを行へるものである。ソクラテスは、その眞理と認むる所を、アデンの青年に說くを止めず、遂に勇敢に死の刑罰を受けた。此の場合、彼はサチアグラヒであつたのだ。プラハラドは、その父の命令を、彼の良心に厭はしきものと做せるが故に、これを無視した。而して彼は、その父の命令に依り、彼に加へられたる苛責を、怨む所なく喜んで、これを受けた。ミラバイは、自らの良心に從へるがために、その良人の怒を買ひ、良人より別れ住みて併かも心足り、而して彼女の意志を良人の意志に從はしめんがために彼の女に加へられた凡ての害惡を靜けき威嚴と忍從を以て、耐え忍んだ。プラハラドもミラバイも共に、サチアグラハを行ふたのである。ダニエルもソクラテスも、プラハラドもミラバイも皆その迫害者に對して何等の惡意を持たなかつたことは、記憶の必要がある。ダニエルとソクラテスとは、彼等の屬せる國家の模範的市民であり、プラハラドは模範的の子、ミラバイは模範的の妻と見做されたのである。』と云ひ、次に『此のサチアグラハの教は、新らしきものではない。それは、唯だ家族的生活の規則を政治的生活にまで、おし擴げたるものに過ぎぬ。家族的紛爭と扞格とは、普通、愛の法則に依りておさまる。……』

六

彼は「愛の法則」を說いて、『此の愛の法則は、眞理の法則に外ならない。眞理なくして愛はない。眞理なき愛は、例へば自國を愛して他國を嫌ふが如き愛着であり、青年の少女に對する溺愛である。若しくは、無知なる兩親の、その子供に對する愛の如く不合理にして盲目である。愛は、凡ての動物性を超越し、曾て偏頗なることはない。その故にサチアグラハは、その表に愛を讀み、その裏に眞理を讀む貨幣と考へられる。それは到る所に通用し、而して無限の價値ある貨幣である』と稱し、眞

理の把持の爲めに戰死を論じて『サチアグラハは自依自立である。そは、その用ひらるゝに先ちて敵の承認を必要とするのではない。否、そは、敵の頑强なる時にこそ最も强く輝くものである。その故に、そは不可抗である。サチアグラヒは、敗衂の何たるかを知らぬ。そは、彼は眞理の愛の爲めに戰つて、斃るゝ所なきものであるからである。戰に於ける死は、救ひであり、牢獄は、自由への門途である』と喝破しておる。尙ほ『そはまた魂の力と呼ばれた。蓋し、若しもサチアグラヒにして、死は戰の中止を意味せず、寧ろその完成を意味することを信ずべきものならば、明確に異なる魂を認むることは、必然なるが故である。身體は、單に、自我表現の一つの事に過ぎない。從つて彼は若しその存在が、敵のサチアグラヒの奉ずる眞理を見るを妨ぐる時には、喜んでその身體を放棄するものである。彼は若し彼の身體を喜んで犧牲にすることによつて、敵の意見を變することが出來るといふ信念さへあれば、その身體を擲つのである。そして魂が身體を生き長らへさせるといふことを知つてゐるから、現世に於て眞理の勝利を見ようとして焦るようなことをしない。勝利は、實に、敵をして眞理を知らしめる企てに於て身命を擲つ能力――この時サチアグラヒは表現される――の中に横たはつてゐるのである。

七

『そしてサチアグラヒとしては、決して彼の敵を辱しない、常に靜かな議論によつて、その理智と、また自己犧牲によつてその心情とに訴へるのである。サチアグラハは二度祝福される即ち、それは其實行者を祝福し、且つ實行される人をも祝福する』と述べ、尙ほ『けれどサチアグラハは、吾々が考へるように、選ばれたる少數の者によつてのみ實行出來るものであるといふことは斥くべきことである。私の經驗がそうでないことを實證する。たゞその簡單なる原理――眞理に對する粘着とそれを身命を賭しても主張することが諒解さるれば、誰にでも實行出來ることである。それは、他の德育と同じく實行するに困難であり、また容易でもある。その實行には、誰でもがその全哲學を諒解する必要のないことは、恰度、總ての禁戒の實行に於ける場合と同樣である』。

八

『要するに、眞理を主張する必要に就ては、人の觀察するように、誰も爭はないものである。そして暴力を用ひて、敵に眞理を受け納れしめることを餘儀なくするような計劃が卑しむべきであることを諒解することはいと容易である。議論して說得するに失敗したからとて、誤謬に服することは不名譽である、此

際に於ける唯一の眞理且賞讃すべき方途は、生命を賭けてでもそれに服從しないことである。かくしてこそ、世界は誤謬から清められるのである。誤謬が生命ある人間を損ふところに於ては、何等の妥協が存し得ない。けれど政治的原野に於ては、人民のための闘爭は、主に、不正な法律の型に於ける誤謬に反對することから成立つてゐる。汝等が、その誤謬を立法者に、哀訴等の如き方法にて感知せしめることに失敗した時に、汝等の前に開かれある唯一の救濟は、若し汝等がその法律に從ふことを潔よしとせない場合、汝等自國人の苦難によつて、彼立法者の歩を撤回すべく餘儀なくせしむべきである。即ち、法を蹂躙して刑罰を招くことによるべきである。それ故に、サチアグラハは、世人に對しては、一般に、人民的不服若くは人民的抵抗であるかのやうに思はれて居る。それが犯罪でないといふ意味に於ては、人民的である。

九

『犯罪とは即ち、普通の法の破壊者が、密かに法に觸れることをして刑罰を避けようとして居る者をいふのであつて、人民的反抗者を指すのではない。彼が、いつでもその屬する國家の法律に從ふのは、それがその社會の幸福にとつて善であると思ふからであつて、決して刑罰を恐れるからではない。けれど普通稀なことではあるが、時機が來て、或る種法律が不正であつて、それに服從することを不名譽と思ふ時には、××××××××××××××××××××××××××そして立法者の行爲に對する彼の抗議を確認するためには、彼は公然と、道徳上の破廉恥とならないところの他の法に服しないことにより、××に對する協同を撤回すべきである。私の意見では、サチアグラハの美と效果とは偉大で、その教義は子供にでさえ説教することの出來るほど簡單なものである。私は數千の男女及子供並に普通に云ふ契約勞働者に、これを説教して大に效があつた。

十

『ローラット法案が發表されたとき、私は、それが如何にも人類の自由を束縛してあるので、出來る限りそれに抵抗しようと考へた。私は、また、それに對する反對が印度人中に行き亘つてゐると觀察した。私は、如何なる專制國家でも、人民の全體に適合しない法律を制定する權利がない、印度の如く立憲的習慣と先例とによつて、指導されてゐる政府に於て、殊にさうであると信ずる。私は、また、來りつゝある騒動が、若し暴力の水路へ陷落若くは流入することがなければ一定の指揮が必要であると感じた。

十一

そこで、私は敢て、サチアグラハをその人民的抵抗の光景を力說しつゝ邦國に献ずる。そしてそれは全く內心的洗淸的の運動であるから、私は、或る日——四月六日——に於ける斷食、祈禱及一般休業の遵守に就て注意を喚起してをく。その大なる反響は印度中到るところ、何等の機關もなく、また前以て幾多の準備をすることの出來なかつた小村落にさへも及んだ。その理想は理解されると同時に民衆のものとなつた。四月の六日には、何等人民の暴動ともならず、警官との衝突も云ふに足りないものであつた。ハータル（一般同盟罷業）は、純然たる義勇的自發的のものであつた。私は、この理想に就て、マドラスに於て去る三月二十四日に述べた次の教書を記して、擱筆することゝした。

十二

『サチアグラハとは、私が數度の會合に於て、力說したとほり、本質的に一種の宗教運動である、それは洗淸と贖罪の手段である。それは改革若くは、身に苦難を受けることによつての苦情の救治を求めるのである。それ故に、私は、一九一九年の第二法案に、總督が同意を與へたいといふことが發表された後の第二日曜日（即四月六日）を、屈辱と祈禱の日として遵奉されるに至つたと敢て注意しておく。この遵奉の性質を、持續して行くには、有效なる民衆的示威運動があるに違ひないから、私は次の忠言を呈しておく。

（一）前夜の最終の食事より算へて二十四時間の斷食を、宗教上の考慮若くは健康によつて妨げられざる限り、總ての成年は遵守すべきこと、その斷食たるや如何なる型及形に於ても、ハンガー、ストライキと同じように考へ、又は政府に對して壓迫を加へる計略として考へられてはならない。それはサチアグラヒにとつて、彼等自身を人民的不服に適應させ、且つ彼等の誓言を熟考するに、必要なる訓練として考へられ、そして他の總ての人にとつて、彼等の傷けられたる強い感情の單なる表徵として考へられなければならない。

（二）公益と關係あるやうな仕事を除いて、總ての仕事は、其日には中止されなければならない。市場其他の商取引の場所は、閉止されなければならない。日曜日にも働くように要求されて居る使用人は、前以て許可を得た後に初めて、休むことが出來る。

「この二つの注意を、一般の奴僕が採用せんことを、私は推薦するに躊躇しない。何故なれば、政治的討論なり集會に出席しないことは彼等にとつて勿論善いことではあるが、私の考では、

彼等も生命に關係ある事柄、即ちこゝに注意しておいた限られたる方法にて彼等の感情を表明する權利のあることを疑ふことは出來ないものである。

(三)公會が、その日には印度の各地方を通じて行はるべきである、この二の方法の撤回に對する祈禱の決議を、通過させねばならないところの村落に於ては除外例とす。」

「若し私の忠告が、採用する價値があると思ふならば、その責任は、組織に必要な事業の計劃に對しては各サチアグラハ協會にあるであらう、けれど他の總ての協會も、この示威運動を成功させるために、聯合せんことを私は希望する。」云々。これ彼の一大思索であり、一大經綸であり、一大聖典であり、そして天地を震憾せしむべき大業の宣言である。

×××　×××

彼の思想の體系は略「眞理の把持」に依つて窺知することが出來る、今や全印度は彼の手の動き方一つに依つて左へでも右へでも行く、露のレーニンよりはトロツキーよりはモット絶體的である、ボルバンダールの商家の末子と生れ十二歳の年若で結婚した彼は矢張り印度の一黑人として平凡の生涯を見るだろうと豫期されて居たが、その英國遊學から俄然として彼の人格に一大變革を來たさせた、彼は英國に遊學して、大に彼の紳士道の虛偽なるに愛惜を盡かして、翻然として歸印し辯護士となつたのであつた、しかし其所にも虛偽が多かつた、壓迫が甚しかつた。彼は愛着の故國を棄てて南亞に押渡り、そこで長年月の瞑想の結果から先づ「眞理の把持」なる一信條を得た、彼は理想的革命は眞理の把持であり、眞理の把持は理想的革命で、全印度の人々、それから全人類に正義と全愛と全福を與へるものだと信じ、そして脇目もふらず十五年間一路直往して奮戰しつつある。全世界に一大光明を投じたる彼の將來や奈何、印度の將來や奈何、予は次號に於て大ガンデーの爲めに本誌を通じて數回に記叙する所があるであろう世界第一の人格者——それはガンデーその人の名である。

ミハエル・カリニン

山川均

ブレスト・リトウスク平和條約が成立したので、ミルバッハ伯爵は獨逸大使として莫斯科に乘り込んだ。ミルバッハ伯爵は一九一八年の五月一日（メーデー）の數日前に莫斯科に到着した。四月二十八日の『プラウダ』紙上には、カール・ラデックのミルバッハ歡迎の一文が現はれた。

『獨逸政府の使節は莫斯科に到着した。彼は革命の都に着いた。けれども彼は友邦の勞働階級の代表者として來たのではなくて、苟もその流血にまみれた帝國主義の銃劍の達する所は、殺人と掠奪とを行ふ軍閥の代表者として來たのである。このブルジョアの强奪者が西から來たのと同時に、東からもブルジョアの强奪者がやつて來た。――の强行部隊は××に上陸した……。』

この論文で驚かされたミルバッハ伯爵は、五月一日（メーデー）の示威運動で二度目に吃驚した。ミルバッハ伯は、わざわざ莫斯科まで來て、同國人のマルクスの肖像の入つた赤旗で嚇かされようとは、豫期しなかつた。

恭しく信任狀捧呈の爲にクレムリン宮に往つて見ると、ミルバッハ伯は三度目に驚いた。無論レーニンが、聊か悄氣返つて引見することゝ思ふて居ると、戰勝國の大使ミルバッハ伯爵を引見したのは無名の一勞働者、ミハエル・カリニンであつた。尤もレーニンを内閣議長とすれば、カリニンは勞農露國の大統領といふ格だから、之こそ外交上の儀禮に適つてゐるのだから、ミルバッハ伯は齒ぎしりしたが、どうする事も出來なかつた

勞農露國と云ふはレーニンの露國、トロツキーの露國と早合點をする人がある。人物中心主義の中毒に罹つて居る人々には、とても勞農露西亞といふ勞働階級の大事業は解らない。

露國の最高權力を代表する機關は、全露ソヴイエット中央執行委員會であつて、人民委員（内閣）はこの中央執行委員會が選任し、人民委員の布告でも命令でも、中央執行委員會は何時

でも取消すことも出來れば、効力を中止することも出來る。そこで勞農露西亞の最高の權力を代表して居る人は、人民委員會の委員長レーニンではなくて、全露中央執行委員會の委員長カリニンである。

中央執行委員會は約二百名ばかりの委員から成つて居るので、更に十三名の常務委員會がある。この十三名の常務委員こそ、人民委員の一段上にあつて、無産階級國家の權力を行使して居る機關であるが、一九二一年の新委員（第八回目の改選）は次の十三名であつた。

(1)カリニン。(2)カメネフ。(3)エヌキーヂエ。(4)ルトヴイノフ。(5)リコフ。(6)スターリン。(7)ウラジミルスキー。(8)サプロノフ。(9)クッゾフ。(10)トムスキー。(11)ペトロフスキー。(12)ツアルツキー。(13)スミドキツチ。

ミハエル・イソノヰツチ・カリニンは一九一八年の三月、スウエルドロフが死ぬると、其跡を襲ふて全露中央執行委員長となつた。

カリニンの生涯は、露國に於ける革命的勞働階級の代表的なものである。彼は一八七五年ツフエルの、一農民の家に生まれた。半農半工の勞働者は露國の無産階級の一特徵であつて、大都會には工場制度による工業が發達して、專門の熟練工があるが、補助工業は今尚ほ村落に於て、家內工業制度の下に行はれて居るものが少くない。多くの地方では、村落の附近工場が散在して居るので、多くの農家では、家族の一人や二人は、附近の紡績所や、製材所や、鞣皮工場などに通ほつてゐるのが常である。彼等は固より僅かばかりの土地を耕やして居る。農村に於ける無産階級、又は半無産階級分子であつて、農閑には工場で働らき、春と秋とは土地に歸つて親戚故友と共に働いた。此種の半農半工の無産階級の多かつたことは、露國の經濟狀態の特徵の一つであつて、彼等は一方には都會の勞働者と接觸して進步した思想を受容れ、他方には農民と接觸して其思想を傳へてゐた。一九一七年の三月以來、農村革命の精神となつたのも彼等であつて、多くの農村のソヴイエツトは、主として彼等によつて組織されたものであつた。

カリニンは此階級に屬してゐた。彼は最初はツウエルの鐵道に働いて居つたが、後には旋盤工としてプチロフの鐵工場に働らくことゝなつた。

一八九八年に露西亞社會民主勞働黨が初めて秘密團體として組織せられると、彼は直ちに其黨員となつて組織宣傳の運動に活動した。此時以來、彼は絕えずツアーの密偵に附け狙はれ、

警察の爲に追ひ廻はされ、前後二十回逮捕され、或時は投獄され、或時はシベリアに送られ、或時はペトログラードに潜伏して秘密の運動を行ひ、或時はまた田舍に逃がれて畑を耕やした。社會民主黨では、彼は常にボリセヰキ派に屬してゐた。

『私が全露ソヴイエツト中央執行委員會の議長に選任せられたことは、一つの象徵だと思ふ。私は農民にして同時に勞働者である。私は云はば都市と農村の一致を一身に現はして居る。私は百姓をして來たが、今後と雖も時間の許す限りは續けてやる積りである。……私は中流農民と貧農との中間に立つて居る。私の畑は小さくはあるが善く耕やされて居つた。私は田舍の生活に慣れ、農民の心理を充分に解して居る。私は信ずる、農民はソヴイエツト政府を愛するに相違ない。と云ふのは私自身、農民であつて革命に加擔し、ソヴイエツト政府に働いて居るからである。中流農民はその農業上の立場からして、必ずソヴイエツト政府を擁護すべきものである』。

これが中央執行委員長となつたカリニンの感想であつた。

彼は執行委員長になると間もなく、この抱負を實現する最初の活動に取掛つた。一九二〇年四月二十六日を以て、カリニンは全露農村の宣傳旅行に出發した。彼はウラル地方を振出しに、クルスク、ウオロネヅ、リスキー、ノヴオホペルスク、バラショフ、ペンザ、インザ、リヤザン、ズイトミル、キエフ、エリザベトグラド、オデツサ、ヘールソンを經てクリミヤ半島に到る殆んどソヴイエツトの全版圖を旅行した。

この旅行の第一の目的は、農村の民衆を知り、農村の事情と必要とを知ることであつたが、それと同時にカリニンは此旅行に宣傳上敎育上の意義を持たせることに努力した。一行には有ゆる書籍と小冊子は固より、到る所に活動寫眞、演劇、展覽會博物などを開く準備をして往つた。カリニンは新しい農村に着くと、先づ第一に農民と語り、彼等の希望を知り、彼等の不平を聞くことに努めた。その後にも、彼は屢々此種の旅行を企てた。

此旅行のうちに、農民が苦情なり請願なりを提出すると、カリニンは即時に事情を取調べて、大抵は其場で農民の滿足するような解決を與へるのが常であつた。

ミムピルスク、サマラ、ペンザ、ツラ其他の地では、カリニンは地方ソヴイエツト機關を詳細に取調べ、不法の行はれてゐることが分るとどしどし人民裁判所に突き出した。そこで農民も勞働者も、非常な熱心を以てソヴイエツト共和國の代表者カリニンの周圍に集まつた。

カリニンは餘り圭角のない、華やかではないが、堅實にして

ぢみな人である。英國の彫刻家セリダン夫人は彼れの容貌を評して、露西亞の標本的の農民と云ふて居る。彼は固より學校敎育といふ程のものは受なかつたが、若い頃から熱心に知識を求めて怠らなかつた。殊に社會學に就ては、一廉の學者である。彼の演說は平易明快で何人にも理解され、大なる印象を與へる。演說集は二卷に纏められ、近頃莫斯科のソヴイエツト出版局から發行されて居る。

一勞働者カリニンの下に全露中央執行委員會の仕事をして居る人には、一體どんな人物があるかと云ふと、第一には有名なカメネフが居る。

レオン・ブソキツチ・ローゼンフエルド——カメネフは假名である——は一八八三年七月二十二日チフリスに生れた。莫斯科大學の學生だつた頃、プーシキン銅像前の示威運動に參加して一ケ月半の禁錮に處せられた。一九〇四年には二度目に投獄された。此年以來、彼は社會民主黨の莫斯科支部の一員として、目醒しい活動をした。一九〇五年と一九〇七年には、倫敦に開かれた黨の大會に列席し一九〇八年には巴里に開かれた黨の大會に列席した。一九一〇年から引續いて、レーニン一派が巴里に近いロンジユモーに造つた宣傳學校で『露西亞に於けるブルジョア階級の歷史』を講義して居つたが、當時社會民主黨メンセヰキ派の指導者マルトフがボリセヰキを攻擊した小冊子『救世主か破壞者か』を駁論する爲に、熱心に筆を執つてゐた。

一九一二年一月には、レーニンがプラーグに召集した黨の一般協議會に出席した。一九一四年、戰爭の開始後間もなく芬蘭で開かれた協議會にはペトロフスキー、バタエフ、サモイロフ、ムラノフの四名のボリセヰキ派に屬するドユマの議員が列席したが、カメネフは此協議會で戰爭反對の演說を試み、『戰爭に對する戰爭』こそマルクス主義者の唯一の政策であることを主張した。此協議會並に其後の反戰爭運動の爲に彼は其他の同志と共に捕へられて追放に處せられた。

一九一七年三月の革命が起ると、彼はペトログラード、ソヴイエツトの一員となつたが、間もなく委員長に當選した。

一九二〇年七月には、彼は勞農使節として英國に往つたが、ボリセヰキ宣傳問題の爲に、八月に英國を退去した。

エヌキーヂエはヂマルヂア人で、トルストイの秘書役チエルトコフの友人で、久しく露西亞社會民主黨の一員であつた。正直と剛毅を以て黨中でも最も立派な人物として知られて居る。革命中には、非常革命委員會の爲に過つて死刑の宣告を受けた

多くの人々を救つたことがある。一九二一年二月、チチエリンがヂョルヂアとアルメニアの爭議仲裁を申出た時に彼を仲裁者に推薦した。

ルトヴィノフは全露勞働組合中央委員會の一員で、カリニンの秘書役である。

アレキセイ、イワノヰッチ、リコフは一八八一年にサラトフ縣に生れた。父は農夫である。舊教の寺院で教育され、書記、反譯者などになつた。早くから社會民主黨に屬し、レーニンを助けてボリセヰキ派の組織に盡力した。一九〇八年に國外に退去を命ぜられ、歸つて來ると一九一〇年二月にアルハンゲルに追放された。十二月にピネガ市から逃亡したが間もなく逮捕されマリユンスクに四ケ年間の追放命令を受けた。一九一四年九月再び逃亡した。最高經濟委員會の委員長である。

ソヴイエツト政府に働いて居る多くのチマルヂア人中の最も有爲な人物はスターリンであつて組織の材幹に於てもトロツキーと併び稱せられて居る。彼はレーニンを助けてボリセヰ派の組織に力め、ウオログダ州に二回、シベリアに一回追放された。三月革命後はペトログラード・ソヴイエツトの一員となり、十一月革命後は民族人民委員となり、大に東方の宣傳に努めた。一九一八年から一九年にかけては、露西亞南西部の軍事委員をしたこともある。一九二〇年八月にはバクに於けるモハメツト教徒共産黨大會に列席し、そこからエリヴアン、アルメニア、アンゴラを歷訪し、ケメル・パシヤとの商議を進捗した。スターリンはその強い性格と實行上の能力とで知られて居る。

ウラヂミルスキーは現にソヴイエツト政府の內務人民委員會の一員であつて、第七回の全露中央執行委員の豫備委員となつてゐた。

サプラノフは多年の社會民主黨員であつて、勞働組合の組織者として有名である。

クツソフは全露纖維業勞働組合中央委員の豫備委員であつて、トムスキーは全露勞働組合中央委員會の議長として、全露六百萬の組合勞働者を代表する人である。

ペトロフスキーはカルコフ州に生れ、第二及び第四ドユマにはエカテリノスラヴ州の勞働者を代表した。彼は戰爭以前からの

社會民主勞働黨の一人であつて、一九一二年の十二月波蘭のクラカウに開かれた黨の協議會には、レーニン、ジノヴイエフ、スターリン、マリノフスキー(有名な間諜)等と共に列席し、第四ドユマではボリセヰキ六人組の一人であつた。一九一三年九月ガリシアに開かれた黨の中央執行委員會には、レーニン、ジノヴイエフ、カメネフ、バタエフ等と共に彼も亦た其一員として參列し、其決議により黨の運動基金を造る使命を帶びてキエフに旅行した。開戰後間もなく芬蘭に開かれたボリセヰキの集會に參加したが、此集會でカメネフは戰爭反對の有名な演説をした。ペトロフスキーも亦た同志と共に逮捕され、國外に追放されたが、三月革命と同時に露國に歸り、ペトログラード・ソヴイエットの一員となり、十一月革命後は農業人民委員となり、後ち財政人民委員に轉任した。一九二一年一月には、ペトロフスキーはウクライナ・ソヴイエット政府の議長に當選した。

ピーター・ツアルスキーはペトログラード・ソヴイエットの一員である、スミドヰツチは莫斯科ソヴイエットの一員にして、同時に莫斯科經濟委員會の執行委員である。

露國の最高權を代表してゐる人には、レーニン、トロツキーではなくて、露國の無產階級を代表する一勞働者カリニンである。けれども露國を支配して居るものは露國の無產階級ではなくて、實は第三インタナショナルに集る萬國の無產階級である。この點に於ても、露西亞ソヴイエット聯邦社會主義共和國は全く新しい實質を備へた國家の一新類型と云ふことが出來る。

愛蘭大統領デヴアレラ

新居格

はしがき

英國の宰相として其の手腕の冴えを以つて知られたロイド・

チヨウデ其人が出席すべく言明して居た華盛頓會議への出席を躊躇したのを見ても彼が愛蘭問題の解決に困惑して居る程度が分かる。英國の或る政治家が愛蘭問題特にシンフエーンを目して『血管に宿る惡るい血塊で頭腦に滯つて絶えず不快の感覺を與へるものだ』と云つたのは英國側としては思ふに當然の言葉であらう。

わたくしは今茲に愛蘭問題の依つて來る所を説く積りはない。たゞ、目今の愛蘭側に取つての力であり、將來も愛蘭の運命を背負つて起つであらう人物としてイーモン・デヴアレラに就いて考へてみたいと思ふ。

一、デヴアレラの生活過程

イーモン、デウアレラ(Eamon de Valera)は千八百八十三年生れだから今年でやつと卅九才になる。(それに就いて端なくも思ひ出すのは露西亞ソヴイエツトの指導者達には卅五才以下が多いと云ふ事である。思ふに明快果決の處斷と疾風のやうな實行力は壯齡時代の特權であるべきに、どこかの國は相變らず日向ぼつこをしてお茶でも飮んで春の日永を樂しむ隱居連のおせつかいを許してゐるのは不思議である。但しこんな間の拔けたことはデウアレラ君のよう知つた所ではない。これは餘談だ)彼はダブリンのブラツクロツクや愛蘭の國立大學を卒業して數學の教授になつた。若し彼が單に學問丈をコツコツ遣つてる丈なら身體も樂で牢屋に入れられる事もないのだが持つて生れた熱情は彼をして武器を執らせたのである。

時は千九百十六年、復活祭前の日曜日、その黄昏にダブリン市民軍の總指揮官コンノリーは自由會館の上にオレンヂ、白、綠の愛蘭の三色旗を高く飜して反逆を企てた。稱して「復活祭の叛亂」と云ふのである。この事はジヨン、ボイルの「千九百十六年の愛蘭叛亂」と云ふ書物に事細かく書いてあるからそれに讓る。尤もその叛亂に就いて當時の一新聞は夢想家のピアースが假政府の頭目であり、全時に、愛蘭共和軍の總司令官でゼームス、コンノリーは單にダブリン方面の指揮だけだと記叙した。しかし假政府の出した宣言にはトマス・クラーク・トーマス・マクドナーグ・ゼームス・コンノリー・パトリツク・ピアース他に二名計りの署名がある所を見ると兎に角、二人とも大幹部であつたのだ。たゞ、デ、ヴアレラの署名はまだなかつた。言葉を換えて云へば當時デウアレラは堂々と宣言に署名する丈けの勢力はなかつたと見える。所が市街戰の記事を讀んで行くと叛徒が麵麭製造所を占領した上に、古るい酒造場を奪つた。そしてそれを有效に使つた。そこの指揮者は有能な一人であつて其名をデウアレラと云ひ武器を執る前には大學の教授であつたと書いてある。

ダウソンの本を讀むと明かにデヴレラは分遣隊の指揮者であつたと記叙してあるのを見る。しかし勇敢に最後まで戰つたらしい。そのためかどうかは知らぬがデアレラはトーマス・アツシユ、ウイリアム・コスグローブ、トウマス・ハンタア、マーキウイス等と共に最も重い刑罰を宣告されたのである。それ以來デヴアレラは革命家として急に重きを加えて來た。千九百十七年にはゲーリツク、リーグの總裁となつた。ゲーリツク、リーグはドグラス、ハイド博士の主となつて創始したもので政治的のものではない、純然たる教育的のものであつた。その主要目的は會話の媒介として愛蘭語を復活し、又愛蘭語で自國の文學を再造して行く計りでなく、愛蘭の遊戯乃至娛樂を育成して出來得る限り特殊な文化的實在を愛蘭にあらしめんとした企劃に過ぎない。そのために政治や宗派の眷影を全然回避した。しかし、文化乃至文學を通して外的表現をすることに向つて全然非政治的であるとは云へなかつた。何故かならば文學をメヂアムとして働く政治哲學の關係はあつたのである。本質的に云へば愛蘭共和獨立の源泉はそうした所にあつたと云へる事であらう。全年十一月一日、彼はリンカーンの牢獄に居ながらシンフエーン議會の一員となり直ちに過去六年間アーサ・グリツヒスの占めて居た地位即ちシンフエーンの首領に擧げられた。

千九百十八年には愛蘭共和國の大統領に押された。何れも牢獄にゐてゞある。千九百十九年の二月に彼はリンカーンの牢獄を脱出して巧みにも其出沒を自在にした。亞米利加へも行つた。其當時の外國電報にはデヴアレラは潜航艇で太西洋を往復して居ると世間に傳えたものである。兎に角、亞米利加に渡つて策する所を進めるべく活動して居たらしかつた。そして千九百二十年の末に影のやうに忍びやかに歸國したのである。飽迄も反逆の目的を逹せんとするために。所がこのお尋ね者は遂に千九百二十一年の六月二十三日にダブリンの郊外で再び英國政府のために逮捕された。その時はヘイツンと變名し髮を濃くして變裝してゐたので警官の方でも容易にデヴアレラとは見分けが付かなかつたがポートベロの兵營でとう〱見あらわされて仕舞つた。彼はダブリンの地方司令官と會見したが後に釋放された。その代り警官の幾人かはデヴアレラの家から重要書類を押收して行つた。しかし時は來た。お尋ねもののデヴアレラが愛蘭の運命を背負つてロイド・ヂョーヂと協議すべく貴賓車で迎えられて倫敦へ乘込むの時が遂に來た。過去に於いて（いや現在に於いても）愛蘭共和のために身命を賭して居る多くの志士はあつた。しかし何と云つても現代愛蘭の運命は全くデブアレラとグリツヒスの肩にかゝつてゐると云つていゝ。ロイド・ヂョー

との折衝は次ぎに述ぶとして今少しくデヴアレラ其人に就いて記叙に筆を進めやう。

デヴアレラが獄舍に居ながら大統領に推されたには既述したが彼が千九百二十年の七月中旬ダブリン市長官舍に於ける愛蘭會議散會後の光景を知るものは、如何に彼が愛蘭人の間に人氣があるかが分るであらう。

當時の新聞は大體次ぎのやうに報道した。

大統領デヴアレラが近衛兵に擁せられて立ち現はれると全く白熱的なシーンを呈した。そうして民衆は雪崩を打つてデヴアレラに握手を求めた。幾度かデヴアレラを肩車で擔ごうとさえした。それが出來ないと今度はデヴアレラの自動車に鈴成のやうになつて噛ぢり付いた。そう云つた風だから千九百二十一年の八月末旬に彼はシンフエーン愛蘭議會から熱狂裡に又もや大統領に再選されたのである。更に千九百二十一年十一月十九日の海外電報(ダブリン合同通信社)によると愛蘭國立大學總長に頗る盛んな推戴式を以つてされたと云ふ事であるがこれ亦彼が人氣のある事を證明した譯である。

二、彼とロイド・ジヨージの Word game.

愛蘭問題の解決に關して彼はロイドヂヨーヂと商議を開始することになつた時彼は先づ其の布告の中に決心を述べた。「諸君の代表者に今日の鬪爭を正義と平和のうちに終熄させるために全力を竭くすであらう。けれども我が愛蘭の歴史と爭鬪の性質を考慮する時は輕卒な信頼は警戒して欲しいものである。

諸君の望む平和を齎らすには一切の艱難に耐え得る剛毅な態度がある計りだ。で敵が若し我國民に對し武力を以て迫らうとするなら諸君はこれに抗戰する用意がなからねばならぬ。この覺悟があつて初めて敵をして武力を捨てしめ正義は仲裁者である事を承知させるのである」千九百二十一年七月十六日デヴアレラはロイド・ヂヨーヂと會見した。彼は會見後その模樣を説明してこう云つた。「首相との個人的な會商だが自分はこの會商によつて國境に於ける遠距離砲撃よりもこうした白兵戰の方が遙かに効果の多いものである事が分かつた。」と。

デヴアレラは最初は妥協條件(愛蘭の共和獨立を抛棄するが愛蘭自治を加奈陀憲法に倣いアルスター州にケエベツクの地位を賦與せんとするものらしいとアルスター側は觀測した)を出し首相ロイド・ヂヨーヂをしてアルスター首相クレーグとの交渉を望んだ。そこでロイド・ヂヨーヂはクレーグと逢つてみたが解決は容易ではなさ相に見えた。その矢先、デヴアレラは斷乎として自決權要求を宣言した。その結果クレーグは『アルスターは最早首相官邸の會商には關渉はない。アルスターに自治

法で自決をしたのだから地位は決定的だ。南愛蘭の事には干渉しない。だから南愛蘭に關する交渉は英國政府と南愛蘭そのものとの問題だ」と聲明してアルスターに引上げて仕舞つた。この問題に對して南阿首相スマッツ將軍は大に盡力して、デヴアレラとクレーグとの會見をさせようとしたがクレーグはロイド・ヂョーヂと同席でなくちや會はぬと云ひデヴアレラも、亦飽迄も統一愛蘭にアルスターも加入するのでなければ嫌だと主張を曲げないので手を引いた。そしてデヴアレラに次ぎのやうな忠告を殘して南阿に歸つて行つた。『アルスターは別物として爾餘の愛蘭丈で自由な憲法を布きうまく經綸して經濟は勿論、其他の平和的勢力を伸張してアルスターを必然的に引入れるようするがいいではないか。』

アルスターの脫退後七月二十一日デヴアレラはロイド・ヂョーヂから大様次のやうな妥協條件を受取つた。

（一）南愛蘭或は南北兩部はそれ〴〵自治領式の自治を布くこと。

（二）アルスターの權利に對する保障、

（三）南北兩愛蘭が協調機關を設立する事、

これに答ふるデヴアレラの回答は次ぎのやうであつた。『愛蘭議會も愛蘭人も英政府の提議を承諾は出來ない。愛蘭は飽迄も獨立を要求する。その代り少數民族即ちアルスターの歸順をする保障を得るならば自分並に同僚は何時でも諸外國や英帝國に對して條約締結を提議する用意はある』と大きく出た。

ロイド・ヂョーヂは愛蘭が英國皇帝から分離獨立する權利を承認しなければならないやうな要求を基礎として妥協する事はどんな内閣でも許されないのだ。過去幾世紀の英愛兩國の歷史を見れば離るべからざる運命にあるものだと云ひ又八月二十四日附のロ氏の書翰の中には「デヴアレラ氏はグラタン氏ヤレドモンド氏等の失つた所をも附け加へんとするものだ」と書いた。それに答へてデヴアレラは

「愛蘭人は根本的にして健全且正當の權利として我々が民族の運命を實現するために採るべき道を選擇しつゝあるに過ぎない。我々は絕體の大多數を以て獨立を宣言し共和國を建設したのだ。英政府は愛蘭が英蘭から分離を許されない結合の義務あるやうに見て居るかその盟約なるものは殘虐極まるものではなかつたか」と切り返した。九月二十日インヴアネスに開會したシンフエーン黨議會にもデヴアレラは確定的な態度を以つて愛蘭の獨立を宣言し愛蘭は主權國と認定して居るから選任された委員は主權國の代表者として行動する權限があるのだと聲明した。ロイドヂョーヂは政府は苟くも英帝國の全組織及び英皇帝

の大權に抗戰し國王に對する忠誠の原則を否定せんとするものは非公式にでも承認は出來ない。從つてデヴアレラが獨立した主權國の代表者として會商を求める事を主張する事は斷じて不可能だ」と憤慨した。

こゝに於いて十月中旬デヴアレラも亦宣言を發して「愛蘭の權利と相抵觸する英蘭の主張が今日の所拋擲されやうとは思はれまい。從つて我々は迂濶な希望に耽溺すべきではない。正當の自由を放棄するよりも死を擇ぶがいゝ。鐵のやうな意志を以つて愛蘭の團結を計り分裂を警戒しなければならぬと」云つて應じた。

並行線が遂に交叉しないやうに根本的に相容れない英蘭と愛蘭との主張はロイド・ジョーヂとデヴアレラの涯限なきWord game に激しさを加へて行くのみであつた。

そのうちにデヴアレラが法王に打電して英皇帝の勅諭の判斷を乞ふたのは皇帝に對する忠誠の原則を侮蔑したものだと云ふ問題を惹き起した。統一黨は英蘭と愛蘭との講和は不可能だ。我々統一黨は如何なる犧牲を拂つても愛蘭を英國の一部として存在せしめねばならぬ從つてアルスターの權利は飽迄も保障すべきであると蹶起的な氣勢を見せて來た。ロイド・ジョーヂが華盛頓會議に出席を見合せねばならなくなつたのはそのためだと云はれる。

これが最近約一年間の愛蘭事情である。愛蘭の將來がどうなるかは豫言の限りではないがこれ丈の推移を見てもデヴアレラは千九百二十二年以後の人物として指摘しうる一人である。愛蘭に於いて同じやうに指摘しうる人物にアーサー・グリッヒスがある。本稿は主としてデヴアレラを中心として筆を進めたのであるがデヴアレラを外に對する適當な代表者とすればグリッヒスは內にあつての愛蘭の智慧とせられつゝある人だから序手に簡單にスケッチするであらう。シンフエーンの創設者は實はグリッヒス其人であつた。彼が統一愛蘭人叢書の一部として公けにした「匈牙利の復活」がシンフエーンの中心思想を確立したからである。彼はウエールスに生れた有能なジャナリストで彼が鄕里であるダブリンに歸國したのは彼が二十世紀初頭の數年を南阿非利加に送つた後であつた。

彼は大膽にして尖銳な思想家であり、明晰にして頑健な筆の持主であつた。彼の追隨者は彼に對して動かすべからざる確信を捧げて居た。ダブリンで週刊新聞を發刊してシンフエーンの教說を高唱した。千九百十二年に「自治法案檢討」と云ふ小冊子を發表した。彼の所論はこれを要するに英國に對する憎惡の哲學、反抗の倫理であつた。それだけに多くの青年や愛蘭人の

心を燃やして來た。彼はデヴァレラが不在中は表に立つて闘將ともなる事も出來るデヴァレラに優るとも劣るなき人間である事は分るであらう。

三、愛蘭問題と近代思想

愛蘭問題は發生論的に云へば民族自決的要求からであつた。從つてグリッヒスの提唱もデヴァレラの志向も最初は十八世紀式の政治的共和論に過ぎなかつた。しかし、彼等の要求がそれ丈けに止まるならば大したものではないと僕は數年前一論文を書いて斷定した。その範圍に於いてならば英國は恐れなくてもいゝがそれが近代的世界思潮と抱合するならば強い根柢を堅めるであらうと云つたがその後愛蘭は近代思想をその從來からの志向に加へた。言葉を換へて云へば單純な政治的革命家即ち十八世紀的革命家から近代的革命家たらんとして來た。從つて愛蘭の革命家は彼らの目的達成に相應する手段として一つの局面（政治的乃至民族的な）から多樣な局面に於ける革命家となつて來たらしい。それはデヴァレラやその友人達が千九百二十年の六月に露西亞の勞農政府と通信するに至つたのを見ても分かる。愛蘭の革命家は露西亞の社會主義聯合ソヴィエット共和國と凡ての點で共鳴した。

シンフェーン議會の代議士マッカルタン博士はシンフェーン議會の使節として露西亞に行つたが其時デヴァレラに宛てた手紙のうちに「若しシンフェーンの叛徒が或者から虐殺されるならば英蘭人は報復として露西亞人によつて死刑を執行されることを露人と協定するであらう」と書いた。

此等の事實を見ても愛蘭の革命家の進んで行かうとする或る意志は分かる。

再び云ふ、何れにしてもデヴァレラが二十二年以後に活躍するのは勿論である。（十一月二十六日夜稿）

黒人ガーヴェー

美土路昌一

世界大戦後に於いて民族的獨立運動は、從來のそれに比して非常なる深刻味を帶びて來た、その中でも愛蘭、印度、及黒人の三運動は現在及び將來に於いて最も注目すべきものであらう愛蘭はデ・ヴァレラ氏により、印度はガンデー氏一派によつて代表され、黒人運動はホン・マーカス・ガーヴェー氏によつて導かれてゐる。

愛蘭と印度は各自にその獨得の『本國』を有してゐる、彼等はこの本國を基礎として、その上に獨立自治の旗幟を揚げ得るのであるが、黒人種の運動にはそれがない。家を奪はれたる放浪者の如く、彼等はアフリカの祖國を追はれたる世界的の漂泊人種である。彼等は單に政治的に自由を奪はれたるのみならず、社會的に日常生活にすら凡ゆる自由を奪はれたる人種である、ガーヴェー氏の率ゆるこの運動は、桎梏よりの解放と、祖國の回復と云ふ二重の目的に向つて奮闘せねばならぬのである。

歐洲人は先づ黒人の故郷たるアフリカの全土を買收し、掠奪し、土民は屈服か、追放か何れかの悲慘なる運命に置かれ、奴隷として轉賣され、轉々として今や四億の黒人種はその祖國を失つて、世界に四散してゐる、その奴隷制度はリンカーンによつて救はれたと雖も奴隷的待遇に於いては今尚何等異る處はない。自由と正義の發祥地の如く自贊する米國に於いてすら、非人道、殘虐なる私刑、燒打、婦人凌辱は公然として行はれてゐる、吾人は米國の旅行中に於いても屢白人と黒人種との混血兒を認めるのであるが、彼等は正當の結婚によつて生れたるものに非ずして、大部分は白人の凌辱といふ非人道の結晶として生れ出たものである。結婚、住居、營業、就職、納税、旅行、教育等に於いても一々嚴重なる差別的待遇を受けつゝある。

世界に最も悲慘なこの差別待遇を受けつゝある黒人種の解放運動は、從前幾度も行はれたのであつたが、殆んど有力なものとならず、白人自らもその運動に對して、何等の注意をも拂はなかつたのである。

長い間の壓迫に馴らされたる彼等は、遺傳的に卑屈となり「運命論者」となり、特に巧妙なる白人の政策は漸次に彼等の道徳、知力の低下を企て、低級なる被治的人種たらしめたのであつた、然るに過般の歐洲戰爭は、偶然にも彼等に重大なる一つの教訓を與へ、一朝にして覺醒せしめたのである、それは云ふ迄もなく『人種的自覺』であつた、民族自決の大運動と共に、戰時中に於ける彼等の出征軍人としての能力、後方勤務としての彼等の産業的能力は毫も白人に對して讓るものでないと云ふ一大自覺は四億の黒人種に非常なる刺激を與へた。

而して恰かも此際に黒人のモーゼとして、ホン・マーカス・ガーヴェー氏が現はれたのである。

氏の理想は彼等の故國阿弗利加に一大自由共和國を建設し、白人の桎梏より脱して、神が萬人に均しく與へたる自由と幸福を享有すべしと云ふので『亞弗利加人の亞弗利加』なる標識の下に、運動を開始し今や白人に對する一大脅威として注目されつゝある。

氏は革命家として熱の人と云ふよりも、寧ろ異常なる組織的手腕を有して居る人物である。而して同時に卓拔なる雄辯の所有者で、氏の現はるる處、一語一語嵐の如き拍手に包まれざるはないと云ふ程に、黒人間の信望をも併せ有してゐる樣である。

氏は新聞記者出身で、正則なる教育は餘り受けてゐない樣である。十五才にして初めてジヤマイカで發行してゐる齊致新聞に入社し、引續き五年間自らガーヴェー・ウオツチマンなる新聞を編輯し、次で、コスタリカで二年間日刊新聞の記者として働いてゐた、その後そこを出發して歐洲各國に於ける同胞の現狀を視察し今より六年前米國に渡つた。當時に於ける氏は未だ一介の新聞記者として何等同胞よりも顧られなかつたのであるが、氏は多年自ら體驗せる白人の壓迫と、歐洲視察中に目撃し、更らに米國に渡つて彼等の同胞が如何に想像以上の迫害を受けつゝあるかを見て、猛然として起つたのである。

その黒人解放の第一着手として、氏は先づ黒人自らの向上を圖るが爲めに世界黒人改良協會アフリカ聯合協會を創立した。當時の會員は僅かに氏の周圍にある十五人の同胞に過ぎなかつたと云はれてゐる。

而かも氏の天才的組織能力と、戰爭の與へたる黒人の自覺とは相俟つて數年ならずして、今や世界に二百萬の會員を有し、支部は六百に達し、ガーヴェー氏自らは本年度には、會員五百萬、支部一千に達する見込であると主張する迄に及んでゐる。

氏の運動が斯くの如くに長足の發展を遂ぐるにつれて氏は更に第二の計畫に着手した。即ち一つは政治的に一大共和國の實

現と、同時に產業的獨立の二つで、後者の實行方法としては、黒人汽船會社なるものを設立し、一株五弗を以て總ゆる同胞より資金を募集し今や既に二隻の汽船を有して、米國、アフリカ間の貿易に從事せしめ更に着々として隻數の増加を計企しつゝある。

政治的運動としては昨年八月一日より三十日に至る一ケ月間紐育に於て、全世界黒人大會を召集し非常なる成功を納めた。

氏の召集に應じて集まつた各支那の代表委員は、米國在住は勿論全世界各地より約二千名に達した、一ケ月連續の會議に加ふるに、マジソン公園に於ける一大示威運動は、世界黒人運動の最も深刻なる意義を現はしたるものとして非常なる刺激を與へた。特に此日に於けるガーヴエー氏の演說は、黒人の血を沸騰させ、この世界大會の趣旨及び、黒人の理想を餘蘊なく披瀝したものである。ガーヴエー氏の演說の意味は大略次の如きものであつた。

吾人が今日此處に集まつたのは、吾人黒人種が世界に於ける全民族と均しく、自己救濟の爲めに活動すべき時機なりと信ずるからである。同胞は三百年間この西半球に於いて奴隷的に虐待され、其間アフリカに於ける吾人の兄弟姉妹と離れてゐたのである、然れども今日全世界の同胞は一堂に聯らされたのである。

吾人は今日自由民として此處に集まり、萬能の神が創造せる此世界に、同時に均しく與へられたる他民族と同樣の權利を要求せんとして集つたのである。

吾人は今や權利の法案を作らんとしてゐる、四億の黒人が若し要すれば、鮮血を以て支持すべき憲法を作らんとす。今日は全民族が自由と平等と民主との爲めに活動すべき時機である。吾人は愛蘭、埃及、印度、東歐の國民と同時に、自由の爲めに奮闘すべき時機に到達した。

世界の大勢を觀察して吾人の信ずる處は、吾々黒人がその努力を一にして、人種的に大同團結し、吾人の母國――アフリカを建設するにある。白人の國内に於いて如何に黒人が發展し進歩するもそは極めて不安なるものである。何となれば彼等泰西文明人は總ゆる場合に吾人の進歩發展を破壞せんと欲し又破壞した。吾人は世界大勢力の一たるべきリベリア大共和國の建設に共努力を集注するに決した。吾人は米國の市民たるも白人より侮蔑され英國市民たるも亦同じ。否全世界到る處恐く壓迫せらる。今や吾人は何處にあるも十分に吾人を擁護するに足る可き一大强力政府を必要とする。

白人にして、支配し、管理するの權利あらば、又黄人種にし

て其權利あらば、四億の黒人種も亦その權利ある筈である。斷じて恐るゝ勿れ。今日吾人を脅威すべき如何なる人種も、如何なる國民もなし。

新國人の叫びは『自由か然らざれば死』でなければならぬ。

と絶叫した。

而して三千の代表者は更に引續き自由會堂（リバチホール）に會合して連日會議を開いた結果として、先づガーヴェー氏を彼等が實現せんとするアフリカ本土の新共和國の假大統領に選擧し、更に彼等が最後の一滴に至る迄、鮮血を以つて擁護すべしと盟つたる『獨立宣言』なるものを決議した。

彼等はまづその前文に於いて、黒人が政治的社會的に絶對の差別待遇を受くるの現狀を列擧したる後五十四ヶ條の權利の宣言をしてゐる。

この宣言に際してガーヴェー氏の聲明は更に一句一句黒人の血を沸騰せしむる熱血の文字である。

『吾人は今や權利の宣言を發表した。この一章一章を到達せしめんが爲めには、吾人四億の同胞は最後の一滴に到る迄其の鮮血を犧牲に供すべき神聖なるものである。

この八月の大會は吾人のその目的遂行の義務を決せり、依て神の御名により、天帝の聖慮により全人類の爲めに起つべきの時を示したものである。

吾人は最早や逡巡を要せず、又すべからず、決して再び背後を示す可からず、只天命の指す處に向つて猛進せよ。天命はこれ自由を吾人に與ふるものである。その自由たるや、英國のヴイクトリアの與へたるものでもなければ又リンカーンの與へたる自由をも意味せず、人の間に住する人としての自由、國民の間に住する國民的自由である。而して同時に偉大なる、有力なる國民として吾人を向上せしむるの自由である。同胞にして若しこの自由を獲得し能はずと云ふ人あらば余は『破廉恥漢』と叫ばん。

卿等英國の黒人種同胞はアフリカの西岸に於いて英本國の爲めに如何なる戰勝をなしたるや、卿等佛蘭西に於ける同胞は、メーン・ヴェルダンに於いて如何に赫々たる武勲を著はしたるや、及び又米國に於ける同胞は革命戰爭に於いて、南北戰爭に於いて如何なる貢獻をなしたるや。

而かも何故に卿等は、赤、黒、綠の三線よりなる新黒人共和國の國旗をアフリカに樹立せんとする、卿等自らの爲めにこれを爲さゞるや。

戰は終熄したるも世界の平和は未だ來らず、否吾人黒人種が白人の脚下に虐げられつゝある間、世界の正義は到底望む可

からず、眞の平和は決して夢想する能はないのである。怯懦なる勿れ、怖るゝ勿れ、記憶せよ諸君は人である。神が均しく作り給へる人間である。吾人は決して世界を征服せんとするものではない、只アフリカを征服せんとするのであるアフリカは吾人の祖國である、吾人の國である、余は祖國を熱愛する、諸君の選べる假大統領として、アフリカに住まんと欲し、又その國の爲めに死せんとするものである』

斯くの如き熱烈なる理想の下に決議されたる、獨立の宣言書なるものは、五十四ケ條に別たれてゐるもので、その大部分は彼等の自由、解放の要求であるが後末の四十七條に於いて

吾人は國防自衞の場合以外如何なる際と雖も世界に於ける黑人はその黑人主權者の承諾を得る事なくして、白人種の爲めに戰爭に從事する事なし

と宣言し更に黑人小學生の爲めに黑人歷史の一項を加へ八月三十一日を以て黑人種の國際的祝日と決した。

ガーヴエー氏は事務所を紐育市西百十三丁目に置き事務員一切黑人の男女を使用し、その政治的運動と同時に、前記の如く産業獨立の爲めに汽船會社の經營を行ひ、又一方には＝グロ・ウアールドなる新聞を發行してその宣傳に努めてゐる。

この運動に對して米國政府も漸次に注目し初め、中にはこれを以つて將來に於ける白人種對有色人種間に於ける人種的戰爭に際會して一大危機を增加したる如くに解釋する學者もある。然しながら一般に於いては、黑人種がその固有の文明を有せず、又自ら他を征服したる歷史を有せざるの人種であるといふ歷史的觀察よりして、この運動を輕視してゐる樣子である。尤もその重要なる理由は彼等が世界に四散して、立脚すべき國家の現存せざる事にもよるのである、然しながら萬一將來に於ける人種的戰爭の可能は白人種間に漸次再燃しつゝある現象で、白人國家は總ゆる機會に此問題に觸るゝを避けつゝある。白人が人種的に最も恐怖しつゝあるのは、今回の戰爭は總ゆる白人文明を根本より破壞し盡し、その結果來る可きルネッサンスは有色人種の中より擡頭し來る可く、それと同時に幾世紀間白人が跳梁し壓迫を加へたる、反抗報復として有色人種は漸次白人に對して、壓迫し來る可き虞を抱いてゐるのである。

此場合にこそ恐る可き人種戰爭は惹起されると信じてゐる。黑人運動の現在及び將來に對して樂觀的の見解を抱いてゐる人にしても、その際に於ける黑人の態度は、頗る重要なる決定的の衡器を何れかの一方に與ふるものとして注目を怠らざる有樣である。

現にガーヴエー氏自ら自由、解放を得るの手段としては流血

尙辭せざるを宣言し、その機關紙に於いても公然、人種戰爭の可能を力說し、黄色人種日本の勃興を賞讃し、日本は有色人種の第一選手として奮鬪しつゝあるから、將來若し日本及び白人種間に戰爭の惹起されたる場合こそは、黒人種も亦有色人種として、奮起し、白人の羈絆より脫して自由國を實現すべき時機であると主張してゐる點などは、一層白人國民に對して不安を與ふるものである。

ガーヴェー氏は黒人としては、脊は餘り高い方ではない寧ろヅングリとした本年四十三四の働き盛りで、頭髮の縮れた、唇の厚い、色の黒さ等も純粹の黒人種である。その平たい鼻と、平凡なる八字髭の工合等は着古した背廣服と低いダブルカラー等と對照して何等偉人的の風貌を發見しないのであるが、その二重瞼の大きな眼と、廣い額は、何處となく人を惹き付ける魅力と、動かすべからざる强い意志とを示してゐる。極めて平民的な態度で、從來は單身誰とでも會見してゐたが、最近に四回まで刺客に襲はれた爲め、同志の忠告を入れて一二名の護衛者を側に置いてゐる樣である、然し如何にも事務的に、應答などもテキパキと齒切れのいゝ人物である。

氏の運動に對して一部の間には氏が餘りに事務的で、經營の才能に優れてゐるが爲めに、無智なる黒人を煽動して營利を圖

る等と云ふ人もある様であるが、氏を圍繞する人物中にはその學識に於いても決して白人に劣らざる優秀なる學者、政治家を集め一歩一歩着實なる發展を遂げつゝあるのは爭ふ可からざる事で、その理想とする共和國獨立の實現は或は最近に於いて到達し能はざるにもせよ、黒人運動の將來は、氏を中心として、如何に轉回し行くかは、非常に注目すべき事であらう。

アインシュタイン

竹内時男

ロージアー・ベーコンは謂へり、獨斷と權威とに支配せらるる事を止めよと。時代思想の朝宗する處權威や獨斷の横梁せざる無し。アリストテレスの哲學一世を風靡したる時、彼を祖述するにあらずんば學者にあらずとせられたり。ニウトンの名聲一代を蓋ひし時、人は彼を以て神の遺したる炬火と爲せり。アリストテレスは圓は完全なる形にして、力の働かざる物體は圓運動を爲す可しと論じ、ニウトンは光は光素と稱する微粒子の發散に依つて傳播せらると唱へたり。ガリレイ彼を疑ひ、ハイゲンス之を駁すれども、天才と雖も暫らくは彼等の前に力無かりき。然も權威や輿論や群衆は天才の永遠の敵にあらざりき。

時間と空間とは凡る自然現象、凡る人文現象を思惟する時、常に之に即する形式なり。其の時空の概念に就き我等が曾て先驗的に造り上げたるものを否定し、ニウトン力學を轉覆し、新しき宇宙觀を建設したるは我がアルベルト・アインシュタインならずや。彼の理論は直線的なり、其の力能く三千年來の因習と偏執とを破るに足る。自然は何物をも偏愛せず、ありとしある觀察は絶對の比較的相に過ぎざる事を喝破す。時空の客觀的相對的議論は更に人間生活に依屬する夢魔を振ひ落しぬ。規約は相對論者の批判の前には絶對妥當性を失ひぬ。

人類は今や再生の光の下に時を超越する永遠の己が姿を見出し、始めて内面的自由を體驗し得たり。思索無くしては政治も科學も片時も存在を許さざる事とは成りぬ。實に哲學者の憧憬する喜悦の日は來れり。あはれ吾は吉き時に生れつる哉、凡そ斯くの如き日は復絶えて無かる可し。

科學の歴史を讀み來りて此の革命に到る時、我が胸は鼓動に堪へずして裂けなむとす。若き革命的物理學者よ。極東の一貧生郷が雄魂に限り無き讃嘆の詞を捧げつつある事を希くは忘るゝ勿れ。

理學者としての彼は眞に曠世の偉人なり。而も其の背後には如何なる面影の躍動するや。彼は熱想の人なり、血と生命とに

燃ゆる人なり。科學の眞より發して世界に於る凡ての事物と事件とに同情を有し、全人類に對して熾烈なる而も常に新たなる愛の炎を懷けり。彼は人と人との交渉に至大の興味を持てり、是彼がニイチエの貴族道德に内心より反抗する所以なりとす。

古詩に關してはくさぐさの愛誦の中、彼は特に強き語調もてソフオクレスを擧ぐ。而して此の名こそ人としてのアインシユタインを深刻に我等に印象するなれ。

"Nicht mitzuhassen, mitzulieden bin ich da"

とソフオクレスのアンチゴネは叫ぶ。而も此の絶叫こそ實にアインシユタインが内面生活の基調たる餘韻ある長音律なれ。彼の綱領は心血を以て起草せられたり。

曰く、人類に對する義務の履行、各人の爲の救濟準備、凡る物質的壓抑の防禦。辭は單なれど中に絶對の命令を傳ふるものあり。彼を社會主義者と呼ばんか、其は彼に對しては餘に狹き形容なり。充分に合致せる辭を選ばゞ、實に廣き意味に於る囚はれざる思索的デモクラトと云ふ可し。

彼は科學の王國の統治者なれど、祖國のスウイスを愛するは其の共和的風習を喜ぶに依る。

彼には國家は最終の目的ならざりき。阿諛物に對しても價値を認めざりき。彼は貨幣の頑固なる壓制と眩惑的効驗とは道德に依りて超越し得らるゝ事を說く。

一九一五年大戰爭の裡に在りて彼は千古の大論文一般相對性理論の基礎を完結せり。數年の努力を傾倒したる爲に彼は斃て重き病の床に臥しぬ。彼は此の間戰慄寒戰して、戰爭の慘禍を體驗したり。病癒ゆるや立つて政治的反目の調和、教唆や使嗾に對する問罪に努めぬ。

錯綜せる政略的考案より逃避し、常に簡單なる道德の鄕土に愉悅の眼を歸す事は、彼に取りて第一次的重要のものなりき。彼には同情と共悅との外に何等の敎もある無し。彼の理想主義は敎化の向上に依つてのみ到達し得られ、決して細目に亘る法律の能くする處にあらず。

彼が凡る精神文化民族の國際的提携と永久の國民の喜悅とを展開する時、正に彼の美しき映像は描き出さる。

而も其の繪は質撲純眞なる素描なり。彼自らも喝破して曰く、人間生活の中の最も妙れたるものは輝く如き幻想なりと。世界の平和は彼には心と頭腦との事柄なりき。彼は信ず、來る可き時代は豫期の戲曲的曲面なり、世界史の今日迄の經過は平和實現への序樂を表すと。然り、現世紀迄にも抽でたる血の象徵は彼をして寸毫も惑はしめず。唯、彼は書かれんとする歷史に滿腔の希望を懷く。曰く人類に生長しつゝある依存的觀念と

萌しつゝある單基的意識とを助長し、平和の勝利をして●統治の野心と侵略の非望との惡魔の暴力の上に立たしめよと。又曰く、歐洲の戰爭は其の文明を三十年遅らしめたり、今後戰爭の再來する事あらば人類は其の發明に依りて自滅せん。血を濺がずば平和を見得ずとするは人間の恐る可き惡夢なり。と、實に西部戰場にて創造力に富みたる若人を如何に多く失いたる事よ。彼等の中には顯れざりしニウトン、考へざりしカント、究めざりしダーウイン歌はざりしゲーテ、描かざりしミレーありしならん。余と唱へ、汝と呼ぶものこそ歷史の次章なるに、何を苦んでメキシコの人身御供を學ぶや。曲れる石に體を弓の如く張り縛り、黑曜石の刄にて胸を貫き、司祭は尙生きて搏つ心臟を切り裂く。此の風俗の爲に毎年斃るゝもの數百を越ゆ。我等の戰爭も亦之と違ふ處ありや。軍閥と貴族とに唆れて哀れ尊き靑春の生靈が無名の戰に倒るゝもの眞に幾何ぞ。人類は今日其の迷夢より醒めざる可からざるなり。今日以後の歷史は流血者の群なる可からず。

否世界平和は今日萬人の胸の裡を奔る一大潜流なり。現に見る社會爭鬪も經濟戰も畢竟大なる線への補整の相に過ぎざりき。國際聯盟は正に世界平和の理想の發生器の瓦斯なりき。敎育と宗敎との力にて人類の動機と觀念とを訂正し、科學と藝術的との創造衝動を以て萬民をして偉大なる收斂力に從はしめよ。健康の保持と勞働狀態の均一と無軍備の世界こそ世界平和の理想郷なれ。

エチ・ジー・ウエルスは『歷史の輪廓』の終に於て、同じく世界共和國の幻像を描きたるが、彼は舊文明は傳統を造り、且傳統に生きたれど、我等は傳統を破りて均質なる世界を創造せざる可からずとせり。アインシユタインは大平和の目的は國家の區別を撤廢する事無くして達し得らるとせり。彼には傳統に基く國民的特質は文化國民の精神的合體を抱圍する世界主義との矛盾を意味せず。特質の保存と各別の育成との欣求は斯くて彼をしてジオニスムスの副目的に趨かしめたり。談偶々パレースチナの故土に於るユダヤ國家の創建に及ぶ時、彼の血潮の聲を聽き得らると。彼は國家的特性の各個の自由を保證する事に種族に永續性を賦與する唯一の手段を認むるなり。

彼は或意味に於る唯心論者なり。フリードリッヒ・ジーメンスの「石炭は凡る事物の尺度なり。」の言を嗤ひ、石炭を如何に多く、又如何に有効に使用するとも、人力を借らずんば木綿を製産する事能はず、運賃が低減せらるとも、木綿の價格の中には人間力にて表されたる因子は決して消失せざるなりとせり。又曰く、石炭の効果を更に増大する事に依りて人類の過剩

に生活し得らるとするとも、此が人類に幸福なりと決斷し得られず。最多數は善の最限度ならず。

"Maximumist kein Optimum !"

と。

彼は又蒸汽機關の發明を呪ふ。科學者にして石炭文明科學文明を呪咀する處に彼の眞の偉大を見る。實に人世の赤裸々の觀照より窮の苦鬪を感ずる十字架を捧ぐる街頭の物理學者なり。彼は目ざましき客觀と主觀との混沌たる交響樂其のものならずや。

ユダヤ人種は新しき世界の創造者なり。彼の人種は常に叡智と情懷と、理智と情熱との强き車日輪の如き自然兒を産む。アインシユタインを始めとし、トロツキー、レーニン即ち是なり。ロイドジョージ、ウイルソン亦此の血を引く。

彼は東洋獨自の文化に興味を有す。今年の夏正門の銀杏の並樹の茂る頃はい、我等は此の天才に見得らるゝを畢生の幸とす。東洋は夢幻華想の郷國なり。此の國に此の夢見る如き哲人の面影を映すは奇しくも似合ふ哉。

吾今闇に彼の風貌を描く。

おどろなす髮は一聲一毛眞理の旋律に慄へ、耳は颷として來る天鼓の音に傾けられ、眼は姿は陰れたれど髣としてなびき寄せらるゝ四元の聖賢を認む。何ぞ其の眼の美しきよ。彼の全氣闇は冷嚴の氣漲り、而も現世に對する冷かなる慈悲の微笑を含めり。

(十、十一、二六)

詩人ベールイ

昇曙夢

魔の夢のやうな都會的氣分を歌つたアレキサンドル・ブロークがこの夏死んでから、多士濟々たる露國詩壇に於て特に光輝ある未來を有する詩人はアンドレイ・ベールイであらう。ベールイは既に帝政時代から詩壇の大家であつたが、今後も依然と

して活躍すべき素質を有つて居る。現に今日勞農治下に於ても、彼は哲學と社會主義との關係を闡明する主旨の下に創立された『自由哲學協會』に密接な關係を有して居る外に、彼が最近の力作『キリストは蘇りたまへり』はブロークの『十二』と共に勞農文壇に於ける呼物になつてゐるといふことである。

ベールイは後期モグニストとして象徴派に屬する詩人であるが、その藝術は主として前期モグニストに屬するバリモントと近代詩家ソモフとの影響を受けて居る。バリモントの感化の下に、彼は天體や自然界の現象を歌ひ、近代詩家ソモフに影響されて貴人や貴公子の生活を描いて居る。この點に於て彼は露國文壇のために新しい浮世繪法を創始した詩人と言はれる。また彼が都會の喧噪、市街の光景、裏町の生活、醉漢、跣足者、乞食等を好んで歌つて居る所から言へば、彼は都會詩人でもある。

彼はまたショペン・ハウエルの偉大なる世界觀の影響を受けて、現象の美を確實に描き出した眞の藝術家である。彼は巧みに音樂を以て繪畫の描き得ない所を言ひ現はした眞の詩人である。彼の詩には、天氣の好い日に暫時眼を瞑つて、突然開けた時のやうな天の閃きがある。彼くらゐ獨創力に富んだ詩人は珍らしい。彼も青年時代には、かの見上げるやうな險しい高山の絕頂に押上げられながら足下の平原をとぼとぼと歩いて居る偉大な年老つた旅行者を見ることを忘らなかつた。その中でも殊にニイチエ、イブセン、ドストエーフスキイ、ヴラヂイミル・ソロウイヨフなどの前に跪拜した。斯くして彼は常に「輝やける光」と語り合つてゐたのである。けれども彼等の創作を讀み、彼等の苦痛を味はつて見ると、彼等の光は次第に薄らいで行くやうに感じた。その時彼自身のシムフオニイが鳴響いた。第一(北方交響曲)、第二(劇的交響曲)、第三(循環)、第四(吹雪の杯)と、續けざまに彼のシムフオニイが現はれた。實際シムフオニイはベールイの藝術の特徴をなすもので、彼は音樂と哲學と詩とを綜合して、所謂綜合藝術を詩の上に實現しようと努力して居る。從つて是等のシムフオニイの內容は極めて複雜である。例へば第二の『劇的交響曲』の如き、作者自身の說明に據ると、三つの意味が含まれて居る。音樂的意味と諷刺的意味と象徴的意味とである。その中で最も主要なものは言ふまでもなく象徴的意味であるが、然しそれがために他の二要素が斥けられるやうなことはない。三要素共巧みに各篇に調和されて、それが全體に詩的象徴を形造つて居る。

第四交響曲『吹雪の杯』は藝術的描寫の範圍を超越したやうな複雜な題材を取扱つたもので、音樂と哲學とによつて構成された難解の詩である。此所には『埋葬』の一節を引いておく。これは死後人々に祭られ、謳はれ、葬られるところを描いたものである。

　私の指に
　指環が閃いた。
　私に附纒ふた者があつたが
　私は彼女を氷で冷やした。
　『チリン、チリン、チリン！』
　お客が來た、お客が。
　『おゝ神よ！』と囁いた。
　洋傘と杖とを
　入口に置いて來た。
　黃金の冠を棺の上に上げると
　彼女のヒステリックな泣聲が聞えた。
　私達二人は泣いた。
　紫色の
　光がパッと窓に映えた。
　棺の口には
　銀の
　露。
　周圍には
　妻と戀人と友達と。
　然し私と一緒には誰も居ない。
　何もない。
　やがて香爐の音が響くと
　助祭が唸り出した、
　『主よ、今永眠りし汝の僕の靈を安息め給へ！』

邦語に譯しては何等の妙味もないが、原作で讀むと、語法を巧みに應用して、音韻の嚴密な調和—諸音—を表はして居るので、その中に我々は主要律とその抑揚とを明白に聞き分けることが出來る。

ペールイの詩にはまた懷古詠歎の情を歌つたものも多い。懷古的傾向即ち古代に對する熱烈なる興味は未來主義と共に近代藝術の一要素を成して居る。過去半世紀の間文明の源流を探求せんとする精神は、舊時代の遺物の屑を赤裸々にし、人々の想像を「驚異と迷霧の時代」を通じて、今は世界に有るか無きかの反響を殘して居るに過ぎない古い文化と政治とに導いた。斯

くして懐古主義は神秘、音楽、詩に於て、我々が其の一大要素と認めるほどロシヤ精神に深く浸透したのである。ベールイの詩集『黄金と緑青』の中の『今昔』などは過去に對する憧憬の情を歌つたものとして名高い。我々は之を讀んで、彼の歴史的洞察力に驚かずにはゐられない。十八世紀の半ばに生れて二十世紀を観て居るといつたやうな書き振である。茲には『荒廢の家』を引いておく。

荒廢の家、
刺の多い、然し珍らしい灌木、
過去をかなしむわが心、
あゝ懐かしき祖先よ、今何所にかお在す？」

石の裂目から
柄蟲のやうな苔が生え出て、
屋根の上では
空虚(うつろ)の菩提樹がざわついてゐる。

樹の葉は一つづゝ
過ぎし日の安逸を悲しみながら
破(や)れし古塔の
壊れる窓下へ舞ひ落ちる。

ほんのりと白みがかつた百合が
曲つた鎌で刈取られたやうに―
痕もなく剥取られた
貴(あて)なる家の紋章。

過去は煙のごと―
何となく哀れつぽい。
喘嗄れた鴉が
わが悲しみを嘲ける。

窓を見れば―
支那人形の附いた陶製の時計。
隅の布には
木炭で描かれた兎の群。

壁に塗れた古い家具、
傘を懸けた釣ランプ、窓掛……
遠く眼を放てば……遠くには―
平原の際涯(はて)もなく。

數里につゞく平原のその中に
黄金色せる麥の禾堆、
そして天……
たゞ一人。

過去の生活に滿さるゝ
あくがれの心もて注意せよ、
風は樹の葉と如何に囁やき、
剝がれし戸をば如何に煽るか。

ベールイは過去にあくがれて居るとはいへ、決して過去の追懷にのみ沒頭して居るロマンチックではない。彼は懷古主義の詩人であると同時に未來主義の詩人である。將來に於けるロシヤ藝術の創始者である。彼はその評論集『象徴主義論』の『將來の藝術』なる一章に於て、『我々は須らく現代を超越しなければならぬ、そして之が爲には我々は先づ自己を創造しなければならぬ』と、絶叫して居る。

自然二元の爭闘はロシヤ人の宿命的煩悶である。過去と未來、東方と西歐、專制と自由、宗教と科學、個人意識と人類意識、民族主義と世界主義——斯うした二元の闘ひに、ロシヤ國民の心理は常に分裂して居る。殊にこの煩悶は文學者乃至思想家に於て最も深刻である。『西歐と東方との爭闘はロシヤ國民の自覺史とロシヤ・インテリゲンチヤの歷史とを一貫して流れて居る。そしてこの爭闘の焦點は深く國民の心臟に觸れて居る。この戰闘はまだスラヴ派も西歐派も、否ロシヤさへも存在しなかつた時からあつた。ロシヤはこの爭闘と一緒に生れたのである。』と、メレジユコーフスキイに言つて居る。ゴーリキイも曾て『二つの心』と題する論文を書いて、この二つの異つた世界觀に就いて、二つの思想系統に就いて論じたことがある。創作の方面ではベールイがその三部作『銀の鳩』『ペテルブルグ』と『モスクヴア』に於てこの問題を取扱つて居る。

即ちこの三部作はゴーリキイの論文を創作化したやうなもので、革命的西歐と宗教的東方との衝突を描いたのである。そして三部作の中では、ペテルブルグは革命的西歐を代表し、モスクヴアは宗教的東方を代表して居るが、作者ベールイの見解では、このロシヤ思想の二大要素を調和した所にロシヤ文明の進むべき唯一の道があり、將來のロシヤ藝術の使命があるといふ

のである。メレジユコーフスキイはベールイの三部作を批評して、最後に恁う言つて居る。『東方必ずしも宗教的に充實して居るとは言へない。西歐必ずしも空虚ではない。若し西歐の宗教的創造が無かつたら、世界は今に至るまで、人格と人間性と神の像と肖との如何なるものであるかを知らなかつたかも知れない。何故なら、東方は（ロシヤもその數に漏れない）人格を踏み付け、之を非人格的僞教會的存在の爲に犠牲にしたからである。沈み行く西方の光は地の眞、人の眞である。昇り行く東方の光は天の眞、神の眞である。西方の光必ずしも東方の光より小さいとは言へない。ただこの二つの光、二つの眞の結合のみが眞實の光を與へ、神人の眞を與へる』斯う言つて、メレジユコーフスキイはベールイの思想を肯定して居る。

同じく二つの心、二元の思想系統は矢張り勞農治下に於ける新ロシヤ文學の二大要素を形造つて居る。この點に於て、ブロークがその死する前『スキフ』勞農治下に於ける第一流の文藝雜誌で、雜誌の名は古代ロシヤの先住民族スキフイヤ人から出て居るが、此所ではロシヤ人を意味する）誌上に發表した『スキフ人』と題する長詩は、新ロシヤ文學の傾向を最もよく表明したものと言はれて居る。この詩には不思議にもボリシエヴイキの理想とする世界的要素とアンチ・ボリシエヴイキの理想とする純民族的要素とが相交叉し、四海同胞主義への歸依と國民的自負心の發動とが相錯綜し、文明人の謙遜な應待振と並んでスキフ人（ロシヤ人）の荒い氣風が歌はれて居る。それ故にこの詩はちよつと見ると、西歐に對する革命的謀叛とも聽き、或はまた世界主義的呼號とも聞えるが、それよりは寧ろゴーリキイが『二つの心』に於て、ベールイが三部作に於て取扱つた同じ題目を更に藝術的に表現したものと見た方が適當であらう。つまり其所には二つのロシヤが現れてゐるのだ。そして一方のロシヤは言ふ、

我々は一切を愛する――
冷たい數字の熱も、神々しき幻影の賜物も。
我々には一切が了解る――
鋭敏なフランスの思想も、薄暗いドイツの天才も。

是れはロシヤの一面である。文明化されたロシヤである。西歐の隣邦としてのロシヤである。が、これに對して同じ詩の中にロシヤの他の一面――亞細亞精神――が顏を出して居る。

我々はスキフである、我々はロシヤ人である。
我々は斜視（やぶにらみ）の貪慾な眼を持つて居る。
我々は華美な歐羅巴から、

廣い峽谷と森林とに立退いて
亞細亞風の醜面をお前達に向けよう。

此所に我々は二つの心、二つのロシヤを見る。矛盾した二つのモチーブの不可思議な結合を見る。それがため、同じボリシエヴイキの文學者までがこの詩の故を以て作者ブロークを詰つたといふことであるが、それは無理もない。彼等はこの詩に於て國民的ショウ゛ィニズムが餘りに露骨に表明されて居るのを見たからである。つまりブロークの詩が國際的舞台に於ける階級戰鬪を不問に附して、只管歐羅巴に對するスキフ人の戰鬪を、即ち民族的戰鬪を煽動して居るからである。けれども此の國民的傾向が、革命ロシヤの世界主義的傾向と相並んで、新ロシヤ文學の出發點となつて居ることは、最早爭はれない事實である。勞農露國の文藝と言つても、強ち階級戰鬪の宣傳ばかりとは決まつてゐない。寧ろ多くの藝術的作品は超階級的である。ブローク、エセニン其他の勞農詩人の作にも見ゆるが如く、決して或る定まつた社會的階級の特質を帶びてゐない。彼等の創作の内容と其感とは直ちに全國民、全人類の所有である。そして此の全國民的であると同時に全人類的であるといふことが、新ロシヤ文學の使命でなければならぬ。ベールイは既に早く革命前に新ロシヤ藝術の傾向を洞察して、斯う言つて居る。『新たに求むべき創作の形式は國民の自我と個人の自我との調和を眞實に反映したものでなければならぬ。同時にこの形式は人間の自覺を導る眞の尺度でなければならぬ。眞に國民的たらんが爲には、我等自身の中に宿つて居るロシヤ精神の聲を聞くべきである。國民的自覺とロシヤ文明の表現とは將來の標語である』と。是れは確かにロシヤ藝術の未來を豫言した言葉である。以上述ぶるが如く、果して將來のロシヤ藝術が、ロシヤ人の心理に爭鬪しつゝある二元の調和にあるとすれば、その指導者の地位に立つ者は、その思想傾向から言つてベールイであらうと思はれる。

最後に批評家としてのベールイに就いて少し附加へておきたい。彼は詩人たると同時に、一面批評家として異彩を放つて居る天才で、この點に於ても彼は現代詩人中特に一きわ眼立つて居る。批評家としては常に現代思潮の説明と鼓吹とに努め、また文壇に於ける問題の提供者として重きを爲して居る。現に今も自由哲學協會に於ける中心人物の一人である。玆には批評家ピヤストの言を引いておく。彼はベールイの思想を空高く投せられた鞠に譬へて斯う言つて居る。『ベールイはその掌中にある色彩の多い思想の鞠を世界に投じた。彼は得意に微吟しながら劍

のやうに鋭い繊細な思想を空中に投り出して、眼の廻るやうな手慣れた藝當を少數の觀客に見せた。つまり彼は世界に謎のやうた大問題を提供したのである。我々は驚いて謎の行先を見ると、不思議にもその謎はもう空中には見えなかつた。そしてその代りに一發の花火が忽然と響き、千色の火花が飛び散つたかと思ふと、忽ちそれは灰になつて落ちて了つた。人々はこの藝當に氣も心も奪はれて了つた。或者は自からその眞似をして見たが、巧く行かなかつた。或者は全然その藝人に捉はれて彼の弟子になり、彼の跡を開き、彼の意外な發見に驚き、彼がツルバドウールの位地を贏ち得る時期を待ち焦れた。或者は彼の劍の鋭さと、その巧みな使ひ分けとを賞讃した。そして仕舞には彼が世界唯一のオルデン——純粹な思想と確實な知識のオルデン——の騎士に任命されるだらうと豫言した。」ベールイのロシヤ文壇に於ける地位と、その思想と、その將來とはこの譬喩の中に充分具現されて居ると思ふ。

ピグー教授の厚生經濟學

加田哲二

一

經濟學は英國の學問であつて、英國は經濟學の祖國なることは誰人も否認し得ざる明瞭の事實である。ヒューム、スミス、マルサス、リカルドオの四大學者によつて創設せられた經濟學は、ジョン・スチュアート・ミルに至つて集大成せられた。さうしてこの經濟學が世界の學界を支配したのである。（福田博士、經濟學考證參照）けれども今日の英國の經濟學はスミス、マルサス、リカルドオ、ミルのそれではない。今日の英國の經濟學界は彼等の學說に對して深き理解と同情とを有し乍ら、獨逸經濟學の長所を採用し來つて、特異の地位を經濟學界に占めた、アルフレッド・マアシャル教授その人によつて支配せられてゐる。今ピグー教授について語るについては先づマアシャル

教授の經濟學について語るの必要がある。

現在英國經濟學界における最大の學者たるマアシャル教授は、その經濟學原理(Principles of Economics, 1st ed. 1890)によりて、この名聲ある地位を得たのである。マアシャル教授は經濟學を定義して「經濟學は生活上の日常業務に於ける人間の研究であつて、其の個人的並に社會的行爲の中人生幸福の物質的要件の獲得と使用とに最も密接に關聯する部分を檢査するものである。」と云つてゐる。即ち更らに教授の言を借りて云へば「經濟學は一面に於て富の研究であると共に他面、より重要なる他面において人間の研究である。」經濟學が何故に物質と人間との關係の研究なるが故に、重要であるか。マアシャル教授によると世界の歷史を動かした最大の原因は宗教と經濟の二つである。而して經濟が人生に甚だ顯著なる影響を與へる所以は「人間が一般に其の精神の活動最も旺盛なる時代の著しい部分を割いて、生活資料獲得の道としての業務のために勞働と其の考慮を致し、この時代に於て人がその才幹を作業の上に用ふる狀態、其の作業に關聯して起り來る思想感情、並に作業の同僚、雇主或は自己の使用人との關係等は其の性格、爲人を作るものだからである。」物質的環境が個人の思想性格を支配する。箴言第十章第十五節に云ふ様に、「貧者を滅ぼすものは其の貧乏である。」こゝで問題が起る物質的環境の變改は可能であるかと。

マアシャル教授は之に答へ云つてゐる。『吾人は所謂「下層階級なるものの存在は必然なりや否やの研究に眞面目の努力を傾倒せんとするものである。詳言すれば自らは貧困と勞苦のために優雅な文化生活の恩惠に浴することを得ないで只管他人の營む文化生活の必要物を製するがために勞働としてゐる運命の下に置かれてゐる多數階級の存在は果して必要であるか否かの問題がそれである。貧乏と無智とは漸次其跡を絕つべしと云ふ希望は、第十九世紀に於ける勞働階級の着々たる進步によつて愈々强められたのである。……熟練職工の大部分は最早言葉の本來の意味における「下層階級」に屬さない。其の一部は既に上流階級の大多數の一世紀前に營める生活以上の優美高尚の生活を送りつゝある。一切の人が貧苦の味を知らず、又過度の機械的勞働のために心神を沈滯せしめず、文化的生活を送り得る相當の機會を持して世に出立することは可能であらうか。此の問題たるに至らしめたるものは實に以上の如き進步である。而も時代の誠意は愈々誠實を加へて這般の問題を現下の最大最重要の問題たらしめんとしつゝある。經濟學は此の問題に對して完全な解答を與ふることは出來ない。この解答は一部分人類の道德的並に政治的可能力に繫るもので、此等の事項に關しては經

濟學者は別に材料を得る特別の手段を有しない。ただ經濟學者は經濟學以外の學者の所論から推論を試むる外はない。乍然此解答の大部分は經濟學の領域内にある事實と推論とより來るものである。經濟學研究上の最大最深の興味は洵に此點にある。」マアシャル教授にとつては人間の生活の向上改善が經濟學の最大最深の興味である。

二

マアシャル教授のこの立場は、またその門下の秀才で、ケンブリッヂ大學の經濟學教授であるエ・シー・ピグー(A.C. Pigou)の立場である。彼は既に「産業平和の原理とその方法」(The Principles and Methods of Industrial peace)「保護並に特惠輸入税論」(Protective and Preferential Import Duties)「失業」(Unemployment)並に「富と厚生」(Wealth and Welfare)等の著述によつて英國學界に相當の地位を占め、同じくマアシャル教授の門下でマンチエスタア大學の教授エス・デエー・チャプマン氏と共に理論經濟學における大家である。その最後に揭げた著述「富と厚生」は一九二〇年に至り幾多の改訂增補が加へられ、其の紙數において殆んど倍加せられ、(九百五十頁)「厚生の經濟學」(Economics of Welfare. 1920) となつて現はれた。今彼の學説の極く大要を説明して見やう。

ピグー教授は先づ經濟學を分つて理論經濟學(Pure Economics)と實際經濟學(Realistic Economics)に分つ。人間の認識衝動は智識を智識として求める方面と、生活のために智識を求めると云ふやうな方面とがある。學問のための學問と云ふ一面は吾々が認識慾がある間は存在する。けれども吾々の生活と吾々の思想とが密接な關係にある間は、生活のための學問もまた存在の理由を有する。而して經濟學の如き實際における人生と物質との關係を論述することを目的とする學問は、人生の向上改善のために研究せらるることが多い。乍然、吾々はこのやうな人生の向上と云ふ立場から離れて、宛かも物理學者が物體、空間について研究するやうに、社會における人間對人間の關係の均衡もしくは不均衡を研究することを得る。この場合においては、ある代表的の場合を假定して論を進める。この場合の經濟學が即ち理論經濟學である。然るに實際經濟學においては、吾人の經驗を基本として論ずるのである。乍然單なる經驗の集積は實際經濟學に對して何等の意義を持つものでない。この場合の經驗の集積は、その經驗について何ものかを語らなければならぬ。「科學は事實によつて樹立せられること恰ほ家が石から出來たと同じである。けれども事實の集積が科學でないのは、恰ほ石の集積が家でないのと同じである」から云ふポアンカレ

の立場はまたピグーの主張せんとするところである。即ち事實の中から法則を求めんとするのである。

然らば事實の中から法則を求めんとするならば、その手段は何か。數量的觀察である。彼は、マアシャル教授と共に貨幣による稱量方法を採る。けれどもこの方法も決して容易ではない。吾經濟學の諸法則は甚だ正確を缺く。何故に然るか。それには三つの理由がある。第一經濟現象が甚だ多數で、物理學における引力の法則の如きものが存在しない。第二、經濟學の對象が人間にあるので、實驗の不可能のこと、第三、經濟現象は人間の意識によつて起るのであるが、この人間の意識は普遍性を持つてゐない。これらの三つの理由によつて經濟學は正確を缺くのである。これだけのことは既に諸學者の經濟原論の緒論の部分に云はれてゐることとである。

三

次にピグーはその實際經濟學の對象である經濟的厚生を論じてゐる。先づ「厚生」Welfare の意義について云ふと、それは甚だ廣い意義を持つてゐる。厚生とは物質ではなく、ただ一の意識の狀態である。第二に厚生はその大小を云ふことが出來る。ピグーの經濟學はこの厚生を論ずるのではない。それは單に經濟的厚生 (Economic Welfare) に過ぎない。經濟的厚生とは一般の厚生の中で貨幣稱量の可能である部分を云ふので、それは、經濟學者の呼ぶ國民的分配分または國民的所得 (the national dividend or national income) に相當するものである。而して國民的分配分と云ふのは貨幣によつて稱量される社會の所得の部分を云ふ。この意味の經濟的厚生が經濟學の對象たるべきものである。

經濟的厚生は單に厚生の一部分に過ぎぬ。それは人間が生產の手段として考へられたとき起つて來るところのものだ。人間は自己目的を持つてゐる。さうしてこの自己目的を充足して行くときに一の快適を感ずる。けれども經濟學の論じやうとする厚生はこの種のものではない。ただ生產に參與した人間がその國民的分配分を取得することによつて如何なる經濟的厚生を得るか、また得つゝあるかと云ふ問題である。故にこの種の厚生は貨幣によつて稱量され得る欲望充足、不充足の場合である。

けれども經濟的厚生は非經濟的厚生と關係がないものではない。非經濟的厚生は所得が取得される方法によつて影響される。それは近代の產業革命が顯著な影響を社會一般に與へたことを考へれば直ちに判明する。また經濟組織の如何は厚生と大なる關係を有する。例へば、民主的產業組織の下においては、國民的分配分が以前と同一であつても、吾々の快適の感は增加

するのと同じである。而して所得が消費せらるゝ方法も一般的厚生と深い關係を持つてゐる。故に一般の厚生と經濟的厚生とは相互に影響すべき地位に置かれてゐる。

四

次は國民的分配分の大さと經濟的厚生との關係について考へて見なければならない。國民的分配分とは既に云つたやうに貨幣稱量の出來る社會の所得部分であるが、それは過去の活動の結果と自然の材料と勢力とを利用する勞働の結果である。而して此れは種々な團體並に個人の門に分配されるものから成つてゐる。この國民的分配分と經濟的厚生との關係を論ずるに當つては一定の期間、即ち産業的活動の活潑な時も、さうでない場合もある期間の一定平均分量を定めること、第二に貧者に分配せらるゝ國民的分配分が全體の分配分に對して一定の割合を持つてゐること、第三、全體の分配分も、貧民へ屬すべき分配分と一定の平均分量によつて平均標準を取つて變化すること。この三つのことを定めて置くことが議論の簡單を期する上に便利である。

今この前提によつて經濟的厚生と國民的分配分との關係を見るとそれには四つの場合がある。第一には國民的分配分の增加は經濟的厚生の增加となる。この場合には國民的分配分の分配もこの種類も從前と一定たることを要する。而して經濟的厚生の觀察は單に消費による滿足に關するのみでなく、生産における不快をも計算しなければならぬ。例へば從前の勞働時間をも增加して二倍の分配分を得ることは消費における滿足の增加にはなるが、生産の苦痛は甚だ增加する。從つて快不快の計算の結果、快樂は從前の二倍とはなつてゐない。そこでピグーは第一の法則を作る。曰く「人々の興味また此の利益が指示する以上の勞働を行はすために强制もしくは壓迫なくして、生産能率を增進し、從つて國民的分配分の平均分量を增加さす場合は一般に經濟的厚生を增進する。但しこの場合此が分配を變更しよたは一國の消費所得の變化を增加せざるを要す」と。

次に貧者の取得する國民的分配分と經濟的厚生の關係を論ずる。貧民の取得する分配分は、殆んど消費的所得である。然るに富者の所得はこれと異つてその大部分の所得が貯蓄せられて、現實の享樂に供せらるゝことがない。然るに貧民は常に充足されてゐない欲望を多く持つてゐる。即ち貧民の消費的所得は、富者の消費的所得よりも、甚だ大なる利用を齎らす。それは利用遞減の法則がここに適用されるからである。故にこの場合とは次のやうに云ふことが出來る。貧民によつて取得せらるゝ國民的分配分の割合を增加する原因は、之が分配分の收縮を惹起せ

す、其の變化を發生せざる限りにおいて、一般に經濟的厚生を增進する。全體としての國民的分配分と經濟的厚生との關係については次のやうなことが云へる。「國民的分配分の變化を減少すべき原因は、之が其分量並に分配に惡影響を與へざる限りにをいて、一般に經濟的厚生を增進する。」次に貧民の取得すべき國民的分配分の變化と經濟的厚生の關係については、「貧民の取得すべき國民的分配分の部分の變化を減少すべき原因は、之が富者の取得すべき部分の變化に比して大なる場合にも、他の事物が均しければ經濟的厚生を增進する」と云ふことが出來る。

以上はピグーの理論を辿つて極めて簡單に國民的分配分と經濟的厚生との關係を觀察したのであるが、今これを要約して見ると經濟的厚生は次のやうな場合に增進すると云ふのである。（一）國民的分配分の平均分量が大なるとき。（二）貧民の取得すべき國民的分配分の平均分量が大なるとき並に（三）國民的分配の年々の分量に變化なく、貧民の取得すべき年々の所得に變化なきとき。この三つの場合において經濟的厚生が增進するのである。

ピグーの厚生經濟學の第一篇はこれらのことを說明してゐる更らに第二篇、第三篇、第四篇においては國民的分配分の平均分量が影響せらるる現象についての研究である。即ち第二篇においては、諸地方並に諸職業間における生產的資源の分配について論じ、第三篇においては勞働組織の諸問題について論ずる。第四篇では、國民的分配分と國家財政の問題を、第五篇では全體の國民的分配分を減少すると共に、貧民に歸すべき分配分の增加は如何なる狀態の下において起るかを論じ、最後に第六篇において國民的分配分の變化を惹起すべき原因を研究してゐる。

要するにピグー教授の厚生經濟學は所得分配と經濟的厚生の關係を研究したもので、其の態度が愼重なだけ普通の讀者の興味を惹くことが少ないかも知れない。吾々は彼の著書において卓を打つて快哉を叫ぶやうなところはない。彼は科學者が自然現象を取扱ふやうな態度を以て、經濟現象を研究してゐる。だから彼の著書はそれだけ流行ものを讀まうとするものには向かない。けれども眞面目な讀者は必ずこれから益を受くることがあるだらう。福田博士は曾て本誌において從來の經濟學を分つて、價格の經濟學と厚生の經濟學とした。さうして將來の經濟學の行くべき道は厚生の經濟學であるとした。ピグー教授の學說はこの經濟學界における新傾向に貢獻せんとするものである。吾々は經濟生活において價格の世界から厚生の經濟學へ行かなければならない。而して更らにピグー教授が見てゐるやうに人間

を生産の手段と見ることなく、經濟生活においても自己目的を持つてゐるものとして遇さなければならぬ。自己目的を有する人間への復歸の過程として價格から厚生へ注意を向けられて來たことは甚だ喜ぶべきことと云はねばならない。けれども私はマアシャル教授やピグー教授の如く社會政策的立場にあつて、完全な、即ち一般の厚生と經濟的厚生とが一致するやうな社會が組織されるかは、甚だ疑問とするところである。甚だ不完全なものではあるが、指定の紙數が盡きるのでこれで擱筆する。

陳獨秀より胡適へ

柏城學人

一、新思想界に於ける胡適の立場

支那の思想界が最近兩三年來非常に動搖し變化しつゝある事は掩ひ難い事實である。そして其思想運動の新傾向は所謂文化運動を中心として動きつゝある事も亦是認せねばならぬ。而して此文化運動の源泉は實に北京大學の新人陳獨秀、胡適一派の孔教の自由批判及文學革命論に始まる。此意味に於て陳獨秀と胡適とは支那新思想界の母であると共に其育て親である。然るに陳獨秀はルーソー、モンテスキュー等の自由思想を承けたる理想家であり、胡適はウイリアム・ジエームスの哲學思想を祖述する穩健なるプラグマチストであつた。從つて兩者の新思想に對する運動は自ら夫々別個の態度を以て進んだ。陳獨秀は常に高遠なる理想を高調して急激輕躁なる態度を以てあらゆる新思想の急先鋒となつたに拘らず胡適は常に冷靜にして研究的態度を以て專ら文學革命に沒頭した。從て陳獨秀は一時新思想界の寵兒として將又新思想の先達として第一人者たるの名聲を擅にしたけれども、元來が支那の國民性と無關係なる歐米の思想を鵜呑みにし、之に依つて支那の改造を企てたのであるから國民の自覺と共にそこに意外の破綻を生じ遂に彼は今や昔日の名聲を失ふの餘儀なき立場に陷つた。之れ素より當然の歸結であらう。之に對して胡適は彼の生立に指摘する如く一面家學の子であると共に新學を受け容れただけに、歐米の主張を其儘に嚥下せず支那從來の思想とよく調和してそこに支那の改造を爲さんと努力した。其實行方法に於ても陳獨秀の輕躁過激なるに反し、頗る穩健且漸進的態度を以て進んだ。玆に於てか彼の眞價は時の經過と共に漸次認められて陳獨秀に代つて今や彼は當代支那思想界の明星として仰がれ將又指導者として押しも押されもせぬ重要なる地位に立つ事となつた。實にや彼の文學革命論によつて新思想の先驅を擧げた支那の思想運動は、其過程の中道に於て陳獨秀の活動により漸次覺醒せしめられたが其正軌に立ち還ると共に何時しか陳獨秀は卻けられて再び胡適の手に

採收せられ指導せらるる事となつたのは、素より彼の穩健なる思想や高潔なる人格が遙に他に卓越したものがあるに由るのであろうが、今一つには彼が深く支那を理解し得た結果である。

胡適の支那思想界に寄與した所は叙上の如く支那思想界の自覺を促すと共に、其穩健なる發達の正軌に引き戻した事にあるが、尙ほ全部が成功の域に達して居るのではない。最も成効したと見らるる文學革命に於ても、成る程白話文は今や支那の朝野を風靡し、新聞も、雜誌も其大半は之を採用し、假令それを採用して居ないとしても之が眞價を是認して居るが、白話詩に至つては尙ほ多くの反對者があり、缺點があつて彼の目的を遂成するまでには前途は遼遠である。況や、新教育國學社會改造に至つては更に大なる努力と奮闘とを要する。それと同時に、彼及彼を中堅とする一派の新人に特に期待せねばならぬものは彼の力によつて彼と同型の新人の養成に努むべきことである。彼と同型の新人とは、徒に外國文學に心醉し、國學を無視し支那の根本文化に盲目なる新人をして覺醒せしめ、東西文化の融合を爲さしむべきことである。此の事にして成就するなくんば彼如何に新思想を主張するとも支那の改造——政治的にも社會的にも文學的にも——は恐らく殆んど絕望と云つてもよかろう。彼の重大なる使命と面目は實に玆に在ると考へる。

しかして彼の思想上の傾向は奈何、彼は支那國學に深き造詣を有すると共に、米國に留學して新學に沒頭した。そして彼はよく其長短を調和して現代支那に適合する新文化を造り上げようと期して居る。此思想は次に掲げる彼の新文化運動の基調の精神に於て窺はれる。

「新思潮の精神は批評主義にある、ニイチエは現代を稱して Transvaluation of all values の時代なりと説いて居るが此の「重新估定一切價值」の八字は批評的態度に基礎を與ふるものであつて、彼の舊文學に對する革命運動、孔教に對する懷疑的態度其他文化生活の各方面に亙る新運動は此批評主義を以て共同精神と爲すものである」

新學を受け容れた結果、彼も亦社會主義に對して相當の理解を以て之を祖述して居るが、彼は國家社會主義を奉じて居る。そして其實行に臨んで頗る穩健なる態度に出づる所以は、彼がジョン・デュウイ博士の高弟であり、ウイリアム・ジエームスの哲學を祖述するからがある。今彼の思想を、彼の發表した議論を基調として解剖してみよう。

二、胡適の生立

順序として彼の生立から述べる、彼胡適は一八九一年（明治二十四年）十二月十七日を以て上海に生れた。彼の父は安徽の

名儒胡培翬の孫で、北滿の探險家として知られた地理學者であつた。そして彼の父は、彼が僅かに三歳の時逝去した。そこで彼は母の伴はれて郷里南安徽の績溪縣に歸臥して母の手に養育せられた。物心のつく頃から支那一流の家學教育を受くる爲め其の伯父の設立した村塾に入門し、之に從學すること九年にして再び其出世地たる上海に遊學した。爾來上海に在ること六年其間苦學生として諸校に轉々流寓し最後には當時日本から歸國した革命學生の設立にかゝる支那國民學校等に入學し、傍ら家庭教師として學資を得るの外競業旬報（一ケ月三回發行の革命誌）の編輯によつて學費を自給しつゝ刻苦した。適々一九一〇年團匪賠償金の奬學金による留米學生の選拔試驗に合格し、米國に赴き最初コルネル大學農科豫科生として入學した。

留米後彼は忽ち自己の農業に適しないのを覺ると共に、支那は科學的農業と同樣文學哲學を要するを感じ、農科にあること一ケ年半にして文理科に轉じ專ら英文學、政治學及び哲學を研究した。研學一九一四年にはロバート・ブラウニングに關する論文を提出してハイラム・コルソン賞を受けた。同年同校卒業後は專ら哲學の研究に沒頭し、一九一五年コルンビア大學に轉じ、研學二ケ年にして「The Development of Logical methods in Ancient China」と題する墨翟哲學の論文によつてドクトル・オプ・ヒロソヒーの學位を得た。蓋し氏が支那文學の根本的改革に沒頭するやうになつたのは實に此の二ケ年間に於ける賜である。そして此の間に文學に對する彼の研究は後に「支那文學改革論」として現はれるやうになつたのである。この論文は「文學革命」の第一宣言とも云ふべきもので其の歷史的地位は後に出た「新文學建設論」に次ぐ所のものである。

そして其の頃から彼は專ら白話體で詩を書き始め近代的支那詩人として「嘗試集」なる一百餘首の詩集を發表した。蓋し彼は一九一六年から詩作を試みてゐるのであるが、それ以來「口語詩」派なるもの生じ、その詩は多くの定期刊行物に表はれるやうになつた。

彼は最近プラグマチストたる立場から上海商務印書館の總編輯となつて北京大學を去つたがとういふものか又復北京大學に復皈し文科學長として哲學を講じてをる。彼れは常に「哲學の研究は余の終生の事業であり、文學は道樂である」と述べてをるのは彼の思想を解くものゝ注目すべき所である。彼れの思想を見るべき著書として有名なるものは民國七年出版せられた「墨子派の哲學」と民國八年出版せられた「中國哲學史大綱上卷」とである。其は何れも白話文で書かれてをる。

三、哲學思想に表はれた孔教批判

北京大學を中心とする新進學者は、何れも孔子に對して可なり懷疑的態度を持し、支那在來の教育に對して常に革新を叫んでをつたが、公然と之れに對して挑戰した皮切りは先づ陳獨秀の「憲法與孔教」なる一文である。そして陳獨秀の孔子排擊論は、次で發表せられた「再論孔教問題」に於いて更に急激となり、孔子廟廢棄の提議を爲した。然しながら陳獨秀が斯くの如き主張を發表したる所以は信教の自由といふ點から孔子教の國教たる事に反對し、尊孔條項の憲法挿入を以て許すべからずといふにあつて、孔子の學說に對する批評に至つては「孔子之道與現代生活」に於て淺薄なるものを發表した以外殆んど見るべきものがない。然るに胡適は此の點に於て陳獨秀の如く孔子攻擊をしていないが哲學的見地より冷靜自由なる批判を發表してをる。民國八年二月出版の「中國哲學史大綱上卷」の中に於て孔子の學說に對する認識論的批判を試み、透徹せる觀察を以て自由なる論評をなし、更に孔子人生哲學即ち倫理說は「君君、臣臣、父父、子子、夫夫、婦婦」にありとなし孔門正統派は此の思想を繼承し多少の變化を觀たもの丶依然「孝」「禮」の二觀念を出でないとの斷案を下してをる。そして之れ等の主張は現代民國の政治社會に相容る可からざる思想である事を暗示してをる。斯くて彼は其の哲學的根據より孔教三綱五倫の今日社會と相容れないことを論證せんとして次の樣に論じて居る。

「實社會は一塊の大理石の如く我等が自由の改造の對象物として我等の欲する所に應じ如何なる塑像をも形成し得るのである。換言すれば實在の相符合すべき眞理は人造的のもので一種の人的工具である。故に人的工具として有用なるものは眞理たるべく其の有用なる性質を喪失する事に依つて其の眞理たることを失ふべきものである。而して社會文化の變遷は此の有用性の變化を要求するものであるから今日の眞理必ずしも又明日の眞理たることは不可能である。孔子教にある「三綱五倫」は古人は眞理と認めてをるが、之れは古代の宗法的社會制度の下に於て人的工具として有用であつたからだ。然し、今日の如く時勢變遷し國體一變し「三綱」の內君臣の一綱「五倫」の內君臣の一倫は××××なければならないし、又階級的觀念を容納せる「父爲子綱」と「夫爲妻綱」の兩條も存立することを許されない。東方文化と西方文化の接近すると共に孔教的勢力は漸次衰微を示し今日既に孔教の迷夢を打破し去つたのである。然るに舊思想家は政府の法令の威力を以て孔教に對する尊嚴を回復せしめんと努めると云ふが如き時代錯誤の行動に出でつ丶ある。」

斯くの如き胡適の孔教に對する懷疑論は遂に支那從前の社會制度の或るものに對し反抗的態度を持する傾向を生じ來つた。即ち

(一) 家庭倫理の問題

儒教の思想を根基とし二千年の間支那人を支配し來つた「父父、子子、」の倫理は子が父に服從し父が子を壓制するの道德にして片面的義務の觀念であるから、新倫理は父の子に對する義務を定めねばならぬ。夫婦の關係亦同じく從來の道德は片務的にして夫の義務を稱へ論じないが、新倫理は夫の義務を定めなければならぬと云ふがその要點だ。

(二)婦人問題

男女の道德價値は單なるもので、男子が女子に對し服從を要求するならば女子亦男子に對し同樣の服從を要求し得べきものである、而して此の思想に背反せる從來の支那社會制度及び法律は全然反對否認すべきものであると云ふのである。

彼は共和國の忠の字は不適當である樣に思へるが事實はそうでなく君に忠といふ觀念は變じて「國家」に忠であると改變すべきであると述べてをるのは注目すべき議論である。

四、胡適の文學革命論

胡適が文學革命を主張したのは辛亥革命前六年頃からの事であるらしい。之れ蓋し彼が支那家學の訓薫を受けた結果、支那の古書を涉獵し其革命を思ひ立つたもので相當根柢もあり、且は種々研究の結果に依るもので他の海外留學出身者とは自ら逕庭がある。彼の主張する所に依ると文學の本質は白話文に在りと云ふのである、彼が白話文の提唱を發表したのは民國六年一月米國より「新青年」に「文學改良芻議」なる一文を寄書し所謂文學革命の第一矢を放つたに始まる。更に其後引續き白話文に關する數篇の論文を公にし一方大いに白話文の使用及白話體の詩を作り以て其宣傳に努力したもので其信念の強固な事は非常なものであつた。歸支後北京大學教授に聘せらるゝや其擔任哲學史講座に於て先づ白話體の講義を斷行し、自ら舊文學を排斥し、文學革命の氣運の促進に努めた。而して彼の文學革命論の基本は全く歷史的文學進化論から發足して居る。

凡そ一時代の文學がある、此の時代と前の時代との間には承前啓後の關係はあるが、決して全然之れを踏襲すべきものでない、若し全然之れを踏襲するならば、之れ決して眞の文學となす事は出來ないと思ふ、嘗つて中國文學史上時代の變遷に伴ふて文學の革命が成就されてゐる、即ち韻文を以て之れを論ずれば「三百篇」變じて騷となり更に變じて五言七言となつて居る賦變じて無韻の詩文となり、古詩變じて律詩となり詩文變じて詞となり詞變じて曲となり劇本となつて居る、斯く時代の流れは文學の倒流を許さない即ち前人は前人時代の文學を作り今人は當に現代の文學を作らねばならん。

中國文學變遷の跡を辿るに白話の文學は宋より以後古文家の爲めに漸次壓迫せられたるが猶一線相承けて今日に及び更に絶へない、此の白話文を現代文學の正宗として採用すべきを主張する所以は全然古文

學と相異する數多の美點があるに由る、即ち現下中國の文學を觀るに當に改良すべき重要なる要件が尠くない其要點を左に列擧すれば

(一)、形式的方面

イ、典式を用ゐないこと
ロ、陳套語を用ゐないこと
ハ、對句を用ゐないこと
ニ、俗字俗語を避けないこと
ホ、文法を守るべきこと

(二)、內容的方面

ヘ、故なくして徒に悲觀的口調を用ゐないこと
ト、古人を模倣せず語々に個性を發揮すること
チ、個性の感情又は思想を表示すること

然其主なるものである。是れ胡適の文學革命の先驅たる「文學改良芻議」及「嘗試集」の序文に表はれてをる議論の要旨だ、嗣で彼は建設的文學革命論を發表した。曰く、

文學革命は固より破壞の方面より着手せねばならぬ、然れども現在の舊文學たるや一顧にも値しない。桐城派の古文や文選派の文學や、江西派の詩や、夢窓派の詞や、聊齋志異傳の小說等何れも破壞する價値なき文學である。斯かる無價値なるものゝ國中に存在し得る所以は一つに生氣ある新文學の彼等の地に然るべきもののなきが爲めである。故に若し玆に眞文學と活文學とあるならば恐らく叙上の如き假文學と死文學とは自然に消滅する事は明である。然れば余は文學革命を提唱する人々が皆眞文學に對し「彼に取つて代るべし」との心掛を以て新文學の建設に努力せんことを希望せざるを得ない。云々

更に彼は「文學改良芻議」に述べた所を繰返へし且支那に現存する文學中兎も角白話體に近きものを用ひて作られたる木蘭辭、孔雀東南飛、杜甫の石壕吏、兵車行、水滸、西遊、紅樓夢、儒林外史等を不滿足ながらも現存せる支那文學の價値あるものと主張してをる事は海外留學生出身者として實に異數の見識と云はねばならぬ。

五、新詩宣傳者としての胡適

革命が外面的から漸次內面的に遂行せられる傾向は否む事の出來ない事實である。此の意味に於て支那の革命が政治から社會に社會から文學に轉移するのは自然の歸結である。新人胡適が玆に着目したのは一見識たるを失はぬ。彼の文學革命主張の論旨は既に述べた。そして一種のプラグマチストたる彼は白話文の提唱を啻に文章に之を用ふるに止めず詩體の解放に迄進めた。玆に於てか支那新詩の運動は勃然として起つた。

尤も彼が詩體の解放に突込む迄には可成り反對もあり苦心もした其間の事情は「嘗試集」の序文に詳しく述べてをる。その彼の苦心し反對せられた新詩の形式內容に關して彼は如何なる見解を持してをるかは是非紹介せねばならぬ問題である。併て彼

は星期評論に於て「談新詩」なる題目の下に次の様な意見を發表してをる。『現代語の文學を創設せんとする者は獨り詩に於てのみ數百年前の平水韻譜に依る平仄押韻の形式に成る作詩に滿足する事は許されない。何となれば從來の律詩絕句の如き形式上の束縛を受けては到底充分なる內容と精神とを忌憚なく描寫する事は出來ない。從つて詩體の解放を行ふ事は同時に內容を改善する手段である』と述べてをる。即ち彼の言を藉りて云へば

詩體を解放すれば豐富なる材料も精密なる觀察も高遠なる理想も複雜なる感情も皆總べて詩を以て表現する事が出來る。從來の五七言八句の律詩では到底豐富なる材料を生かす事は不可能である。又二十八字の絕句では精密なる觀察を表出する事が出來難い。要するに長短一定せる七言や五言では高潔なる理想と複雜なる感情とを悉く表する事は甚だ困難と云はねばならぬ

更に彼は詩體の解放が決して今日急に起つたものではなく長い間の徑路を經て茲に到達したものであるとて次の如く述べてをる。

支那に於ける詩體の變遷を歷史的に看れば詩三百篇から南方の騷賦文學に變じたのは第一次の革命であり、漢以後五七言古詩に入つたのは第二次の革命であり、唐以後詩變じて詞となり曲となつたのは第三次の大革命である。而も詞曲は始終調子から獨立すること能はず、常に詞調曲譜の制限を受くるが故に根本的の大拘束を受け猶自由と稱することが出來ない、然るに近來の新詩に至ては啻に五言七言の詩體を打破したばかりではなく詞調曲譜の種々の束縛から脫出し——即ち格律に拘らず、平仄に拘らず、長短に拘らず——如何なる題にても如何なる詩にても自由に作る事が出來る樣になつた。是れ即ち第四次の詩體の大革命であり大解放である。此の解放は一見甚だ過激なるが如きも其の實は詩三篇以來の自然の趨勢である。

次に胡適は新詩が如何なる形式を採るべきかといふ點に關しては從來通り音節は之れを無視しないが舊詩の如く句末の韻脚や句中の平仄には一定の制限を設けない樣にせねばならぬ。换言すれば形式的制限を撤廢して內部組織即ち層次、排比、章法、句法等——に於ては音節を整ふに充分なる注意を拂はねばならぬと共に其內容も亦從來の如く抽象的說法を成るべく避けて具體的說法を用ひねばならぬと主張してをる。

然るに現在に於ける新詩には尙依然として樂詩や詞曲から脫胎して出てきた樣な新詩が甚だ多い而已ならず內容も亦舊詩に比して空虛であり形式も亦甚だ無形式で頗ぶる蕪雜の觀があつて未だ文壇に尊重せらるゝ域には達してゐない。素より過渡時代のものとして幾分大目に見るべきものであらうが胡適の努力は更に今後に多くの期待をかけねばならぬ。と同時に彼も尙舊詩に捕れてをる事は事實である。此の點に關し胡適自身は今日の新詩が過渡時代のものである事は充分に承知してをるらしい。そして彼は全然解放せられたる詩體に進む爲めには何大いに努力すると共に之に藉すに相當の歲月を以てせねばならぬが、今日の成績は寧ろ豫期以上の效果が擧つてをると云つてをる。

一九二二年以後の趨勢

一九二二年以後に於ける露、獨、支那、印度の將來及び世界に於ける社會運動、學術界の趨勢並に之等諸方面に於て中心たらんとする人物に關し左記の各項に分ち思想界諸名士に意見を徵した處左の如き懇切なる回答を得た事を感謝する

1. 一九二二年後に於ける露、獨、支那、印度の將來に關する御高見

2. 一九二二年以後に於ける社會運動及學術界の趨勢並に傾向に關する御高見

3. 一九二二年以後に於ける世界學術界及社會運動に於ける中心人物は誰に歸するかその豫測

○ 法學博士 上田貞次郎

1. 露國に於ける空前の社會的實驗の結果は漸く明かになつて來るだらう。如何に社會制度を改めても、急速に人間性を改めることは不可能であるから、制度その者の實際的運用を現在の人間性に適せしむべく工夫することになるだらう。獨逸は多數社會黨の勢力の下に漸次改革されるだらうが、貨幣問題の爲めに尙幾年か苦しまねばなるまい。支那は支那人自ら統一を行はぬかぎり列强の共同管理に移さるゝのではないかと思ふ。稅關の次ぎは鹽であつたが此次は鐵道と中央銀行とであらう。印度は依然として英國の治下にありて極めて徐々に改革の方向に向ふのではないか。印度の人種宗教はあまりに分裂して居る。

2. 社會運動は空想の時代を過ぎて實際的建設の時代に入るであらう。併し世界は最早單純なる政治上のデモクラッシーに滿足せずして產業上のデモクラッシーを要求すると思ふ。コレクチヴイズムと共に產業の自治を求める

と思ふ。即ち運動の調子は穏當になるが、改造の原則は新傾向を取るだらう。而して政治上にも産業上にもデモクラシーの根本條件たる自治の組織を其の基礎工事から築き上ぐるの必要に着眼するであらう。

3. 社會運動の中心人物はレニン氏ではないが、併し誰だか分らない。若し英國に勞働内閣が成立すれば中心人物は其の中から出現するかと思ふけれども、是は一九二二年の事ではなささうだ。

○　堺利彦

1. 露、勞農共和國の建設的施設が追々完成するだらう。

獨。中央社會革命の先驅をやるだらう。

支。東洋諸國中、一番早く(但し曲りなりに)露の影響を受けるだらうかとも考へられる。

印。アイルランドに次いでイギリスの持て餘し物になるだらう。

2. 社會運動はいよいよ×××傾向を顯著にするだらう。學術界は恐らくそれと反對の傾向を取るだらう。或は逃避的、超越的、中立的態度を取るだらう。

3. 勿論前項の傾向を代表する人に歸するだらう。それが誰れであるかは知らない。

○　商大教授　高田保馬

1. 露國は漸次その赤色の色彩をこれから薄めて行くに非ずやと思ふ。獨逸も恐らくこれから當分左傾し行く事はあるまい。戰敗國が戰爭の終結から時日が經過するにつれ幾分落ち付き穏和化するのは一般の原則であるから。併し獨逸は若し聯合側の償金の誅求が烈しき爲めに經濟界が更に惡化するとなれば、形勢豫測を許さないものがあらう。印度の獨立運動は内部に、而して思想的に根をはつて行くであらうが、その外部的勢力は戰爭の終結から遠ざかるにつれて小さくなると思ふ。

3. 大問題に就いて御答致す丈のまとまれる考へを取り得ず。

○　加藤一夫

1. 露國はレニンの說くが如く、共産主義が益々發展して國家が自然に消滅するどころでなく、世界が未だ赤化しきらないので、段々と共産主義の色をあせさせて行くより外は仕方があるまい。しかしそれは革命の不成功を意味せず、潜勢的には益々その力を強めて行く事を意味する。

獨逸はまああの位の程度で現狀維持か。

支那には新らしい生命が益々動き出すだらう。今潜勢的に存在して居るものが、益々力を加へて行つて、革命が案外早く來るかも知れない。

印度も大いにその熱度を增して行くであらうが、英國と云ふ大きな力が邪魔をするから中々骨だ。

2. 社會運動ではボリシエウヰキイとアナアキズムとギルドソシアリズムとが鼎立して進んで行くだらう。ボリシエウヰキイは、今社

會運動をして行く多くの人々から唯一絶對の道のやうに思はれて居るが、その熱が段々さめて來るだらう。だがこんなことは本當はわかるものでない。物事は衝動的に突發的に(實はさうでないが、吾々の眼にはさうとしか見へないところの)色々の事が起るものだから、こんな事は考へるのも變だ。

學術界の趨勢は無學の僕にはわからない。だが僕一個の要求乃至感情からいへば、自然科學的認識論や新カント派などが、益々その研究の歩をすゝめて行くだらうが、何にも本當に滿足しきれなくなるのでないかと思ふ。

○ 土田杏村

1. 露國は各國との通商を開始し、貨幣を認め、或る制限の下に個人經營、殊に外國企業家の個人經營を認め。結局個人主義經濟と國家資本經濟との混同態を繼續し、國家主腦者は其れより進みたる共產社會を現出せしめんとするも永久に不可能にして苦心ならん。露國の社會は國家資本主義以上に進む事斷じて無し。

獨逸は經濟狀態の復活と平行して資本主義的私有財產的社會を現出せしめんとする危險あり。

支那と印度とには大した變化無きことゝ思ふ。但し印度には從來よりも大なる、又經濟的に眼覺めたる叛亂の起ること必ずある可し。

支那を中心としての世界會議も何時かは起る可し。

2. 世界的に言へば、社會運動は次第に建設的に向ふ可し。即ち勞働者は一時的反抗よりも長期の戰爭を繼續せんとし、其の團結力を日一日と增加し行くならん。ギルド社會主義の樣式は諸國にて試せらるべし。我國としてはやはり同樣の傾向を追うは勿論なるが、軍備制限などのために一層勞働者の困難を增加し、勞働問題は社會の重大問題となる可し。小作問題も亦根本的に解決せらる可き必要にせまられ、議會にて議せらるゝまでに達す可し。蓋し食料問題と平行する重要問題なればなり。

學術界は世界的に豫言出來ず。我國としては概して工業的哲學的科學に大なる發達を遂ぐるも、所謂思想界は現在と大なる相違ありさうにも無し。但し學者は民衆と次第に近接する樣になるは明かなり。

3. 此の如き中心人物は、現在のところ名を現はし居らざる可し。

社會運動に於ては、レェニン・ヂノヴィエフが益々重視せらるゝ事だけは明かなり。

學術界は誰れが風靡するといふ風のことは考へられず。通俗的に有名になる人ありとするも、肝心の學術專門家はそれほど重視せず、先づ群雄割據の狀態がつゞくこととなる可し。又此の狀態を希はざるを得ず。

○ 宮島資夫

1. 一昨年の夏頃レーニンは、勞農政府の危機はこの冬までだ。この冬さへ越せば我が勞農政府の基礎は安固となると云つてゐたと記憶します。そしてこの冬も過ぎて勞農政府の基礎は思つたより確りしてゐる事を世界に示したが、さて昨年の冬から今年の春へかけて凶作の爲め、今度は饑饉が、ロシアを襲つ

來た。これが爲か何うか知らないが、勞農政府はその施政方針に變化を生じて、漸々、資本主義の方へ退却し始めたさうであります。

之れは誠に我々に取つて悲しむべき事實でありますが、事實である以上やむを得ません。而して、勞農政府のこの退却政策が、どの邊で止るのか、資本主義制度をどの邊まで許すかによつてロシアの今後の狀態は說明さるべき事と思はれますが、思ふにロシャの勇敢なる闘士も長年の苦闘に少しは疲れてゐるでせうから、奈邊かちつと足溜りをこしらへて、國民と共にほつと息をつきたいでせう。だから僕の豫想する所では、來年あたりから、益々歐米各國と妥協して、通商を開始し、生產機關の充實に努め、一方には年少子弟に社會主義的敎育を施して、おもむろに赤化政策を講じようと考へてゐるのではないかに思ひます。

一方ドイツは同じく敗戰國として革命を起しましたが、ドイツ一流の組織的訓練によつて、大した流血の慘事もなく、從つて大した反動的の騷ぎがなく、この頃は靖々として國力恢復に努めてゐるさうです。此方面に於けるドイツ人の努力は素晴しいものだと云ふ事を聞いてゐます。アルサス、ローレンを取られても、波蘭の一部を取らうとしたり、オースタリーの一部を獨逸の版圖に入れようとしたり、そして粗衣粗食に堪え、絕對專心、獨逸國力の恢復に努めてゐる所を見ると、中々侮る事は出來ないし、どの邊までこの國の人々が社會主義的に進まうと思つてゐるのか疑はしくなります。矢張り彼等の多くは、パン、ゲルマニズムを今以て夢見てゐるのではないかと思ふのです。從つて今後のドイツは矢張りドイツ聯邦共和國の充實發展の爲に進むべき事と思はれます。

ドイツの漸進的態度で到着した點と、ロシヤの急進が退却した點と、どの邊で一致するかは一寸興味のある問題と思はれます。そして恐らく之れは今後の漸進主義者に益々好い口實を與へる事でせう。然しながらロシャ革命が世界の人心に與へた効驗は、とてもドイツ革命の比ではなく、專制や壓制が、如何に恐るべき結果を齎らすべきであるかと云ふ事位は如何に頭の遲鈍な政治家も學んだ事と思ひます。その他愛蘭、印度、朝鮮に與へた彼の刺激、正貨が何十億となつたと云つて喜んだ日本、六億の金をむざ〳〵と捨てさせて、大連會議でチャラッポコを云つて嘯いてゐる、彼の態度は中々襃えたとは云へません。

たゞ併し、此の資本主義國家の中にあつて、ある一國が、社會主義理想の實現を企てる事の困難は、之れによつて立證されました。と同時に社會主義的傾向のある國家の存在も確立されたわけですが、從つて今後は社會主義者の國際的運動を最も必要とするでありませう、それと同時に主義理想を同じくしてゐても I W W の內部ですら想ると云ふ、各國民間の反感闘爭などと云ふことから、眞に人類的に結合する爲には、如何なる手段と方法を取つたら好いか、結合する以前に自己自身をよく知る爲に、民族硏究の必要等と相俟つて、大變必要な問題になつて來たやうに思はれます。

印度と云ふ國は、あの變てこな苦行の爲に忍び得る國民の力を、本當に自覺させて、そ

の方に振り向けたら、中々恐ろしい國になると思ひます。今年の一揆暴動なども隨分手強よさうでした。曾ては日の當つてゐない所はないと誇つた英國も、各民族の自覺と共に因果の報つて來る時が近づいたように思はれます。

支那については、余ゝに知らなければならない事を僅かしか知らないので、何も云へない事を恥る次第です。

2. 勞働運動と社會運動の全體——尠くも勞働運動のない社會運動は無意味——と見てゐる僕は社會運動は即ち勞働運動と見ます。日本に於ては、或時はマルクス、クロポトキン、ギルドなどゝ色々研究だか流行だかは推移しましたが、之れゝ結局ギルドは英國に、サンヂイカリズムは佛蘭西に、IWWは米國にと云ふ風で生れた國の國土と人々の氣質で、各自ゝ各自に發達して行くでせう。

日本に就て云へは、雜誌の上の社會問題がだん／＼下火になつて行く時に、事實の上の勞働爭議が容易に衰へないのを面白いと思ひます。曾ては思想問題としてのみ取扱はれた事が、今日は事實として經済界を動かして來た。政治家も實業家も相場師も余儀なく之れを考慮の中に入れなければならなくなつて來ました。併しまだ何と云つて、何々ズムと云ふ程の日本固有の物は形成されてゐません。當分はかっして暗中摸索のような有樣で進んで行くのでせう。

たゞ僕は、ともすれば、如何なる場合にでも官憲の力にすがりたがる振合があり、從て國家社會主義的になりたがる傾向のある事を悲みます。そしてその意味に於て、普選問題位の生半可な意見と態度で、勞働者を自家の勢力の下に置かうとする政黨や、別の意味から資本家階級に反感を持つ官僚軍閥の徒が自分に都合の好い點だけ勞働者を利用しようとする政府の出現よりも、明らかに反對階級を代表する資本主義政府の存續を希望します。

そして鬪爭を續けてゐる中に、日本は何か日本らしい物が生れて來て、學者があとから之れに理論をつけるでせう、見て外國もそうであるらしいように。然し又た一面には日本の勞働者の一般的傾向が所謂指導者を排斥し、自己の問題を自己自ら解決をつけようとするようになつた事と、甚だしき內面化して來た事は喜ぶべき事と思ひます。

社會主義的研究の對象としては、今日まではは日本でもフランスでも必要で、賛成すると否とに拘はらず、ロシヤのコムミユニズムの研究が、盛んであつたし、コムミユニストと稱する人達も大分出來たようですが、之れも結局本元のロシヤが、少しづゝ退却するし、すぐにそのまゝどこにでも應用するわけにも行かず、結局もう少し、自分は自分で自分の國について意を注がなければならないようになつて來ると思ひます。

學術界の事は、一時の專門崇拜がだん／＼形を變へて來て、專門的科學者が、各自の立場から、一般的普遍的の問題を解決しようと努力するようになつて來たように思はれます。勿論專門的の研究は之れからも益々進んで行くでありませうが、科學者ももう少し藝術や哲學を理解して好いし、藝術家も亦科學者のあの冷たい推理の底に潜む詩的な情緒を

尊敬し理解するようにならなければなるまいと思ひます。科學が乾枯びた學者や研究家のものでなく、藝術が獨りよがりでつまらない藝術家ばかりの物でなく、哲學から浮世離れをしたような誇りの面をはぎ取つて、之れ等の凡てが、全べて民衆の手に歸る事を。僕は趨勢や傾向よりも切に希望します。

3, の事に關しては考へた事もありません。中心と云ふ事が吾々は人氣と流行を意味する限りつまらない事と思ひます。殊に社會運動の中心人物などは不必要と信じます。

○　麻生　久

1. 露國は本年と大差なく、着々として共產主義の實を擧ぐべし。現在の所にては資本主義國家の世界的勢力なきより露國が如何なる事をなすも如何ともなし難かるべく、饑饉にて苦しみつゝある由なるも、そのためレーニン氏に反對して之れに代る如き勢力勃興することとなし、此點は世界と等しく露國も疲弊し居ればレーニン氏等の政策が少々揺づくとも大丈夫なるべし、

獨逸はエルツベルゲルの暗殺などあり新舊の衝突激しく容易には落ちつく處を知らざるべきも、露國の勢力が恢復して積極的に世界に作用せざる以上反動期に入れる世界の大勢に制せられて寧ろ反動勢力の擡頭を見るべきか、併しながら獨逸自身として大した變動はなかるべく社會の狀態は一般に社會主義の色彩を濃厚ならしむべし。

支那は統一的精神更らになし、列國の勢力の間に介在して自己を防禦せんとしつゝあるも、その策拙劣にして結局、日本からみばれられては困る。世界の現狀より支那に對する日本の行動も大目に見らるべく日本の軍閥は得たりとして大いに支那に××××××は大損をすべし。

印度は變化なし、露國が積極的行動を取り得る實力を得ざる以上革命はものにならず。

2. 反動期に入れる一九二二年に於ては社會運動は著しく現實的傾向を有するに至るべし。一九二一年に於ける日本の社會運動は所謂宣言的原理的運動にして夢の如く幻の如きものなりしも、一九二二年に於ては著しくその方向を轉じて所謂右傾的傾向をとり現實的勢力を獲得する方向に向ふと思はる。斯くて文筆的社會運動者と現實的社會運動者との間に截然たる區別を生じ從つて運動は著しく進歩すべし。

殆どあらゆる思想哲學を經過したる今日に於ては、一九二二年度に於ても特に明確なる學術界の趨勢なかるべし、傳へらるゝ露國社會主義運動の失敗等により確信なきものゝ間には哲學的宗教的傾向に其の人生觀を求むるものあらんも要するにものにならず。唯だ流行を追ひ商賣を本質とする雜誌新聞のヂャーナリズムに依つて唯一瞬眩はさるゝに止まるべし、現在の處學術界も特に確信を以て異れる方向をとるに至るべしとは思はれず。

3. 社會運動に於ける中心人物は依然としてレーニン氏。

○　小川未明

1. 民衆の幸福以外に最良の政策はない筈である。ソヴイエツトは主義の遂行をあまりに急ぐことから目醒めた。かうして徐々と共產主義的の××××××××××ることと思はれる。

獨逸が今日まで堅忍の態度を兎も角も持して來たのは誰れの力でもない。國民性そのものであつたのだ。しかしつひに耐えられない日が來る。その時は赤化するより他に途がないだらう。

中央亞細亞は、何といつても赤化思想の揺籃地だ。隣接する印度に早晩傳染しない筈がない。たゞ支那にしても、印度にしても、一種の東洋的の宗教思想がみんなの頭から拔けられないから、一時に燃え上るといふやうなことは豫知されない。

3. いろ〱の人があるであらうが、レニンは最も注目される一人と信ずる。

○ 三井甲之

1. 露國は勿論伊太利及びスカンヂナヴイア半島まで「中央歐羅巴」の擴大範圍のうちに歐羅巴的統一に向つて進むでありませう。そして東西亞は印度の北境にまでその勢力を及ぼすべき地位を占めて居る、印度にも民族自決權のアフタア・エフエクトが消えますまい。

しかしそれらはもとより自然現象ではなく生活現象で、主として人間の情意の方面によつて決定せらるゝのでありますからして、一定の原理方則によつて世界の將來を運算するわけにはまゐりません。しかしながら歷史的方則と各國民の意志とによつてある程度まで將來の開展を規定することが出來ませう。又日本人としては支那に對しては「將來如何になるであらうか」と考へるより「將來如何にあるべきか」と、決心すべきですが、これはこゝに公表するを憚ります。これは日本の軍備ことに陸軍のそれと關聯して考察しつゝあるところのものです。

2. 社會運動及び學術界の趨勢は、日本のそれも世界のそれに影響せらるゝはいふまでもありませんから、世界一般に就いて考察するのと、日本だけのそれに就いて考察するのとは決して別の見地からなさるべきものではありません。しかしながら今便はそれを日本に限局し、そこを立脚地として簡單に申します。

社會運動も學術界の趨勢も自然の推移よりもむしろそれを支配しまた指導する知識と意志とによるのであります。もしさうせねば日本は思想戰で敗北し宣傳戰だけでヒドイ目にあひませう。ヒドイ目の例はヴエルサイユ條約に對する獨逸の重荷が證據であります。それ故にわれらは社會運動をも、それの原理と政策とを「日本的」に確立して世界的趨勢に對して統一の中心生命の調和を求めたく、その爲めに「親鸞の心理學的理論」を、また學術界のうち精神科學文化科學界社會學歷史學的研究の範圍に對しては、僕は「交際文化史的研究」を發表したいと思つて居ります。僕は以上の問題についてかくあるであらうと豫測するのではなくかくあれと意欲するのであります。

3. 現實面の人物については豫測できませ

ん。史的人物としても學術界及び社會運動に於てその精神に復活し開展せしむべきは、日本の親鸞、獨逸のヴントであると僕は思つて居ります。また聖德太子の憲法、三經疏、明治天皇の御製と教育勅語とをも、その他山鹿素行等をも研究すべきであると思ひます。われらは「中心人物」や「英雄」より「祖國」を「現實的生活」をまたそれを素質化するまでの勢力ある「史的傳統」を、また現實生活を契約する現實條件としての「世界現象」を注意したいのであります。

インディヴィデュアリズムとしての「中心人物」の如きを考えるのは貴族的の考えと思ひます。眞實の「内的平等」と「同一歡喜」としての「同胞感」の手本を示すべきは日本であると思ひます。此の日本の中心人物は中心人物を排することに於て最も熱心の人、即ち全國民の平等化を志す人たるべきであります。日本も「思想」を有する大臣ことに總理大臣を要します。しかしこの「思想」といふのは「認識」したところのものではなく、それを統一すべき體驗をいふのであります。

それらを學術的見地から觀察しますと、「心理學の發達」が優勢的統御要素となりませう。

○ 早大教授　北澤新次郎

1. 頽廢せるブルジョア文化の弊害は年を逐ふて暴露せらるゝに從つて、之れを改造して眞に人間の生活するに適當する新社會の建設に向つての社會運動は愈々高潮せらるゝであらうし、學術界の研究並びに傾向も、此の方面に對して益々深刻に進むのではあるまいか。

○ 久津見蕨村

1. 露、獨、支、印各々多くか少なくか必ず變化を見やう。之は誰も推し得る所であらうが、併し(イ)露は今後も尙依然としてレーニンの天下であつて、共產主義の試金石として續くであらう。又其の續くことが世界各國の研究家の爲めに然るべきだと思ふ。(ロ)之に對して獨は必ず軍閥と帝政派との反動運動を見るであらうが、而かも其の成功は覺束なからう。さりとてスパルタカスや、共產黨の天下にもなるまい。そして恐らく當分はブールジョア・ソシャリズムとかオヒシャル・ソシャリズムと命名すべきもの又はアリスト●ソシャリストと云ふべき人々の天下であらう。(ハ)支那は依然として南北軋轢、財政窮乏、形勢混沌。(ニ)印度はものにはならぬながら獨立運動の騷ぎが諸市で增大し、パンヂヤップ方面ばかりでなく、南方中獨立王國等まで騷ぎ出すであらう。斯くて茲一兩年は過ぎ行かう。但し神ならぬ身の非常突發の事件は誰れも豫言の限りではござるまい。

2. 尙第二問に簡單・答へることは恐らくは誰れも困難を感じやうと思ふ。私は(ハ)社會運動(ロ)學術界の趨勢傾向を各別々に考えて簡單にお答へする。(ハ)は當年以後プロレタリヤの運動、階級鬪爭の意識が益々進んで來やうと思ふが、一面からは亦其の反動が必らず一層增して來るだらうと信ずる。そして社會全體を『全一』と見る考へが其の双方に濃厚になつて來て、社會にブールヂョア征伐ばかりが能事でない。プロレタリヤばかりの天下でもない。總ての人の天下である。ワン、コ

コモンウエルスであると云ふ意識が漸々に分つて來やう。否さうなつて來ねばならぬと信ずる。（b）は今の傾向である科學的專門主義(サイヤンチフイクスペシヤリズム)は必らず一轉化を告げやう。科學的統一主義とでも稱するものゝ方へ向つて進むであらう。そう進んで行かなければ世界の事實に反つて來る。『萬有は不可分離の一大塊』である。之を各科學に分化して研究するは人間の便宜に過ぎない。一旦其の便宜によつて今日の進步を得た後は今度は其の本體の不可分離の一大塊の方へ傾向統一されねばならぬ。之が當然の順路であるからである。

3. 當年以後暫くの間は尙アインスタインとレーニンとが學術界と社會運動とに於て世界的に注目され、指呼さるゝ名であらう。勿論各國各地に於て大小それ〴〵に其道の中心人物たる大なる名は亦必ず別に呼ばれるものがあらうが、私は其の名を故らしく玆に排列するほどな博識家でないことを恥づるものである。

○　早大教授　帆足理一郎

1. ルシヤは幾多の波瀾あるにも係らず、コンミユニズムを徹底するであらう。

ドイツも結局リオシヤリスチツクな國家を建設するに相違なく、支那は當分南北に分れて漸次北方の民主化が行はれるであらう。印度も大英國の羈絆を脫するまでには中々の奮鬪を要するであらうが、所詮異民族の統治は困難で、民衆の文化的啓發と共に獨立を見る至ると云ふ豫測が正當ではあるまいか。

2. 今後の傾向は別に戰後の今日までの傾向と變ることはあるまい。民衆の自覺と共にデモクラチツクな政治や經濟組織を益々要求するやうになり、學術界に於ても、過去の傳統的な絕對主義的見地を益々遠かり、眞理は日々相對的のものと認められ、宇宙は何等の絕對原理により支配されることなく、只夫れ自身の體驗によつて造り出された理想を追ふて絕間なく進步すると云ふ創造的進化の思想が益々根强く傳播するであらう。

3. 社會運動の中心人物は誰であらうとも云へないが　世界の刮目に値するものはやはりレニンではなからうか。彼れが今後如何に資本主義の國々と折衝して共產主義を盛り立てゝ行くかは慥かに廿世紀の見物であらう。學術界ではアイスタインの名を呼ぶものがかなりあるけれど彼れの相對性原理が大した變動を學界に惹起さうとも思はれない。ラツスルやベルグソンの哲學にもアプリオリが殘つてゐるので、彼等を以つて新哲學界の中心人物とすることは出來ない。デユウイーは新社會の建設に適合した基礎的哲學を持つて居るけれども、惜いかな預言者的態度に缺けてゐる。要するに學界には中心人物など豫想すべき人は見當らない。

○　九大教授　桑木彧雄

1. マルクの相場は頻に下落しつゝあるが此頃獨逸の教育界に補習教育等が非常に進步しつゝありとの記事英國の雜誌に在り。エナの戰敗後教育の進步の力を以て獨逸の興隆あり

たる如く彼様の教育の普及の力に依り新獨逸は益々興隆するならん。

2. 物理學に於ては物質的原子の構造の研究相對性原理の擴張等中心問題たるべく又當らざるかも知れねど學術史の研究、科學の綜合研究、一の傾向をたすならん。

3. 若し一人だけ擧げるとあらばアイスタイン氏ならん。

○ 鷲尾正五郎

1. 露國は dictatorship の下に内容上の social democracy の施政をなすであらう。

獨逸は形式内容共に social democracy の方向に進むべき可能性を比較的多く有すと信ず。

印度には將來益々獨立氣勢熾ならん。露獨の影響を蒙る事益々多く、英國の不安は愈々増すならん。

支那は現状のまゝ國際資本主義の活躍舞臺となるべき運命にありと思ふ。

2. 今後の社會運動は勿論 social democracy の方向に進むならん。但し social democracy の氣運にして、その實現される形は state socialism 的のもの多からん。

文學や哲學には超俗的乃至古典的なる精神の發路を見るならんと私は豫期す。社會運動としての social democracy と文學や哲學の古典的傾向とは必ずしも相反する現象にあらず。

現代の趣味は行き詰れり。文學者や哲學者や詩人は眞面目であるかぎり現代趣味に反抗せざるを得ず。

3. 政治上或は社會運動上の世界的中心人物は依然としてレーニンならん。

思想方面に於ては矢張英國の自由主義者が中心勢力ならん、獨逸には當分思想上の中心人物は出でざるべしと思はる、ラテナウの如き人も實行家にして思想家にあらず。

○ 千葉龜雄

1. ▲露國に就ては[illegible]的封鎖を解く遲速によつて國情と政策の變化にも遲速がありませう。それを除いては、レーニンは依然國内の堅固な結束を凡ての困難に打勝つて持續し、相變らず主義の世界的宣傳を猛烈に勵行する事だらうと思ひます。大體に於いて露國それ自身としては、幸福な方向に進む事は疑ひないと思ひます、

▲獨逸は國情と政變の繼續を豫想されませんが、科學の精神と、峻烈な例の國民的熱情によつて、着々物質的困難を征服して行く光明を豫想します。

▲支那の暗黒は丁度我國の明治維新です。超國民的觀念の考へられる今日に、新しい興國の青年達は漸く猛烈な國際的興奮に燃えて居るやうです、之も一つの過程でせう。自我覺醒はたとへそれがどんな形をとつても、自我の全的擴大に注すべき現象です。

▲印度の獨立こそ日英同盟の精神の弛緩の程度によつて變化がありませう、尤も原則としては私は民族獨立主義は佛教の所謂小乘に過ぎないと思ひますがこれも大乘に達する過

程の一つと見ませう。

2. 社會運動は質が多いので、又た學術界は幅が廣いので私のやうた無知者にはよく分りませんが、何せよ社會運動の一切が「民衆の爲め」の旗印に統一される事、從つてそれに反抗してあらゆる障害に生存の命を與へまいとする熱情的運動が益々有力になる事は間違のない當然の傾向として認められます。從つて凡ての思想と學術は之等の解放に貢献する意味に於てのみ認められ、生存し、又た開展して行くものだと思ひます。そして其の特質とするものはやはり、理知を基調とした文化的希求だらうと思ひます。それと共に其の實際的運動が今日などよりももつと急進的な飛躍的な方面に向ふことも勘定に入れてよいかと思ひます。

3. 私の僅かにのぞく一角は思想界、藝術界のそれも極めて狹い一隅ですが、矢張それは今日までは既出の人物の影ばかり大きく、今日の改造運動もみな其人によつてのみ率ゐられて居ます。之は現代の新運動の趨勢の止むを得ない自然の結果で、寧ろ中心人物は今日未成品未知數として埋まつて居る當來のX氏から出るのはありませんか。私は現代を世界改造第一期の漸やく前半紀にも達しないものと見て居るものだからです。

○ 新居格

1. 露―レニン氏一派の勢力は無論續くものと思ふ。今迄續いたやうに。レニン氏は共産主義を捨てゝ資本主義を採用するやうになつたと云ふ電報が數次あつたが、それは信ずる事が出來ない。若し採用するにしてもそれは改訂資本主義換言せば方便的、政策的資本主義であつて資本主義ではない。資本制度を潤彩したやうな風に見えてもそれは内外の事情が一時的にさせたことで共産主義が不人氣になつたためではない。其證據はペトログラードで最近行はれた勞農會議の選擧で千四百三十人の中で千百六十人の共産黨員が選擧されたのでも分る。で千九百廿二年以後の露西亞は對内的に云へば農民と政府との緩和がどれ丈うまく行かと云ふ事と十二月廿日(千九百廿一年の)に開かれる露の第十一回全露勞農大會で討議さるべき政策がどんな風に定まるかと云ふことであつて對外的に云へば、帝政時代の國債償還の義務履行を對償として列國に提唱した勞農露國承認運動の結果如何が、露西亞の將來を層一層決定的にするであらうと思ふ。

獨逸―當分現存の儘で移行するであらう。獨逸は露西亞程飛躍的でない。詰り、根本的でない。その代り秩序的であり理性的である。であるから共和憲法の擁護、民主共和制の維持を續けるであらう。共産黨を現制度(共和制)の破壞者として斥けるであらう。無論反動的右黨の勢力には力強く對抗する。エルツベルゲル氏が暗殺された時、政府は右黨の反動派と共産黨とに對して共和制の暴力的傾覆をなさんとするものには他意も挑戰的であることの意思表現をした。エルツベルゲル氏の暗殺を動因として伯林で行はれた共和制擁護のデモンストラチオーンは幾十萬の大衆が集まつたらしい。それは反動的右黨に對する脅威

をなしたが、さうして共産黨の示威運動参加を拒んで協同動作を執らなかつたと云ふのを見ても現獨逸の主潮は何であるかゞ分かる。スパルタカス團の殘黨、無政府主義一派のものが將來の獨逸をどうも出來ないのではないかと思ふ。

支那ー外國の勢力「例へば日英米」がどんなに支那に關渉を持つかに依つて支那の將來が可なり、左右されやしまいかと思ひます。その關渉的勢力とは必ずしも今迄のやうな干渉と違つても云ひうることです。貿易上、投資の事、何れもさうでせう。さうした勢力を問題外にして單に支那自體に就いて對内的に見れば現狀のまゝで推進して行くのであるまいか、言葉を代えて云へば混沌たる大きな謎を續けて行くのではいなでせうか「若き支那」（ヤングチャイナ）は氣持のいゝ程聰明で近代的と思ひます。しかしそうした清新の勢力が何時支那の實勢力になりうるかは判斷がしかねる。思想的には可なり進んで居るやうだがそれは支那の現實の勢力とはならない。

印度、ー英國が露西亞と千九百廿年七月に英露通商條約を締結した。其時英國は自國の制度や利益に反對する宣傳をしない事を條件としたらしい。それはロシヤが波斯人を煽動して反英思想を懐かせる事を恐れたからである。而してそれはやがて印度やアフガニスタンに影響が及ぶと思ふからであつた。

英國が恐れるほど反英思想は印度に於て強烈であり根深かいやうだ。夫は印度にあつて英國政府の施設の全的妨害の主張する非協同運動と云ふのがあつて感情的に印度人の歡迎する所となつて居るかを見ても分かる。それはやがて愛蘭以上になるかも知れない。印度の獨立を極端に主張するガンジー氏は愛蘭のデヴァレラのやうにならないとも限らない。實際に於いて千九百廿一年は僕のぼんやりした記憶にして誤りなければ一月頃にレイベリー地方(?)に大規模の農民暴動があつたやうだ。二月から三月にかけて印度鐵道勞働組合と電信勞働組合とが聯盟して政府に賃銀の一般的訂正をのぞんだ（歐洲人及び英國勞動者は参加せず）が容れられないので暴動を起した。モプラス人種とかは極端なる[illegible]治要求を抱いて英國並に印度皇帝に反逆し燃えつくすやうな熱帶の太陽に綠の旗を飜した。暴動の首領アリムサリヤール外十三名は捕らへられて十一月四日死刑に處せられたが、それ位のために反英思想は鎭歸すべくもない。印度の將來は非協同派の非協同策が印度の各民族間の胸に徐々浸透して産業的にも、政治的にも民族的にもかなり英政府を困惑する事はないであらうか。

2. 伊國に反動的なファスシスチーが社會運動を壓してみたが、二十二年後には何かの機會で左傾運動が復活しやしまいか。露西亞を除いて多くの國の社會運動は千九百二十一年にはさまで目覺ましい飛躍を見せないやうに思へた。しかしそうした停頓からそろそろ動きを見せやしないか。

● ソヴイエチズムがもう少し強烈になりはしまいか。それと共に無政府主義がもっ少し激動を與えるやうにならないかしら。少くとも×××××××××××××しはしないかと想像する。

學術界の事は學者でないからよくは分からぬが哲學的傾向を深めて行くであらう。そしてネオ・リアリズムのやうな行方が段々眩られて行くのではないか、僕の言葉で云ふと「理性の眞理」の時代から「感覺の眞理」を強調するやうになるのではあるまいか。オカラガン氏の所謂 Dual evolution と云ふたやうな工合に。

3. 世界學術界ではアインシュタイン氏が中心の一人となるのではないか（よくは分からぬが）その他にも何とか云ひたい人が二三あれどアインシュタイン氏を指摘すると同様確信を以つて云ふことが出來ない。（僕が無學だから）。

社會運動では依然レニン氏でせう。

（隱れたる傑物をよく知らざれば）

○　小樽高商教授　大西猪之介

一、豫言は科學の本分ではないのですが、特に近來の如く激變の重なる世の中に於ては將來がどう動くかと云ふ事を察するは全く不可能であらうと存じます。もし自分はかう動けばよいと思ふと云ふ事を云ふのなら、それはどうとも云へませうが、それは單なる個人の意見には趣味の問題であつて、而して私は個人的趣味がそう他人に披露して然るべき價値あるものとはよう考えないのであります。

○　高島米峰

1. 獨は帝政復興し、露の過激派は、貧甚だ貧しき獨と提携することに依つて、しかも總に空腹を免れ、獨の帝政を讃美するもの次第に多くなりゆきて、紛擾常に絶えず。獨は、その虚に乘して大に勢力を扶植し、一面、米國の跡に於ける勢力を驅逐せむとし、一面、西伯利亞に於ける日本の勢力と結ばむとす。

支那は、米の甘言に瞞過せらるゝことの危險を自覺し、切に、日支の提携を節望し來るべく、印度亦、反英熱次第に高く、人種平等民族自決の聲盛なりと雖も、日英同盟の關係上日本の後援の得難きに苦しむ。

2. 人は、唯物史觀の上に立ちたる改造論の、物足らなさに不滿を感じ、精神的教化運動の勃興を見るに至るべし。しかも、それは、既成宗教、及びその所屬の僧侶教師輩以外の人士によりて、叫び出さるべく、從つて、唯心哲學として、爛熟せる思想を盛られたる大乘佛教の研究批判が、世界の學界に、熱烈に歡迎せらるゝに至らむ。

3. その何人なるかは、測り知り難し。たゞ、少くとも、その一人は、日本人たることを念願して止まざるところなりとす。

○　和辻哲郎

1. おたづねの諸國の事情をよく知りませんから豫測がましい事は出來ませんが、希望だけは持つてゐます。

一、露國は革命陛下の專制をやめてもつと本當に無政府主義の國になつてもらひたいと思ひます。

一、獨逸はヤンキイの眞似をすることをやめてゲエテやカントの時代の獨逸らしくなつてもらひたいと思ひます。

一、支那や印度は自分たちの祖先の偉さをもつと理解してくれるといゝと思ひます。

2. この問題についてもたゞ希望だけをのべます。

一、日本の社會運動はもつと本當に「運動」らしくなつてほしいと思ひます。落ちついて、根深く、互に連絡をとり、自棄氣味にならず、目標をはつきり見定め、大地をしつかりふみしめて。

一、日本の學術界はもつと本當に「智識の愛」に燃え立つてもらひたいと思ひます。さうして各の專門な間にもつと連絡を取つてほしいと思ひます。特に文化科學について云へば、日本は今西洋と東洋とのよきものをいづれも共に生かせ、協同させ、そこから新しい生命を生み出すべき、重大な瞬間に立つてゐると思ひます。

○ 山川均

1. 恐らく獨逸に革命が起り、第三インタナショナルは本部を伯林に移し、萬國革命運動の中心となるだらう。

2. 歐羅巴の諸國は資本主義の再建に益々もがき出し、此努力は階級鬪争を益々鋭利にする其趨向と結果とは言はずして明かなり。

3. 社會運動の方面では全然豫想が出來ぬ。

○ 山川菊榮

一、露西亞は社會主義的社會の基礎が愈々鞏固になることを信じて疑ひません。これだけはブルジョアの新聞が逆立ちをした處で、ゴマメの齒ぎしりにすぎまいとお氣の毒に存じます。

二、獨逸は早くて二三年、晩くも四五年の間に、モ一度革命の遣直しをしなければ納まりますまい。

支那印度のことは日英米等に於ける資本主義の運命次第で極ることゝ存じます。獨立運動、排斥運動は世界的無產運動の中に溶け入るべきものと思ひます。

すべての社會運動は畢竟×××の運動に合流し、若くはそれに引ずられて行くものと信じます。

學術界の事は學者先生にお聞き下さい。

3. 有名な人ばかりが最も有力な、最もエライ人とは限りませんし、社會運動は個人を中心の仕事とも考へられませんから、何分のお答を致し兼ます。

社會運動は、人物中心でなく、思想中心で集まり、銘々が其運動に對して全責任を負ふ心持で働くことが必要だと思ひます「中心人物」が入用なのは政黨屋の仕事です。

○ 高畠素之

1. 露國益々自由主義（資本主義）化すべきも、獨逸は大體に於て現狀を維持するなるべく、支那のことは知るに由なく、印度は危殆に瀕すべきか。

2. 幾多の迂餘曲折あるべきも、大體に於て進歩するものと見るの外はなかるべし。

3. 學術界には種々な分科あるを以て各其道の人ならでは分らず。學術と云はず運動と云はずたまには日本からも一流人物を出したきものにこそ。

ランド・ラッセル著

たる我國民性を基礎とせる彼の理想、哲學を述べたるものにして、彼の「愛國心の功過」の一文の如き、空前の大論文として單り思想界のみならず、官僚、軍閥の徒に至る迄一大刺戟を與へ、異常の感動を與へたるものたるは、今尚世人の記憶に新なる所である。我社は玆に此世界的大思想家の來朝を記念せむが爲めに、敢て此貴重なる一書を江湖に薦めむとするものである。【最新刊】

「文明の再建」として發行豫定の所都合上書名を「愛國心の功過」と改め發行いたします、勿論內容には少しも變更ありません。

四六版布裝函入
定價壹圓八拾錢
送料金拾六錢

東京芝櫻田備前町
振替東京八四〇二

改造社

大杉榮氏譯（ハワド・ムウア原著）

四六判箱入 春布表紙 三百六十頁

熱狂的歡迎忽三版

新刊

人間の正體

定價金貳圓貳拾錢 送料金十六錢

一代の風雲兒大杉榮氏が冷靜なる研究者の半面を以て興味深き問題を靜かに講じたる近來の快著

水の中に住む者も、砂の中に住む者も、地の穴の中に住む者も、宮殿の中に住む者も、集窟を營む者も、帝國を築く者も、亦游ぐ者も、飛ぶ者も、匍ふ者も、歩む者も、苟も此の地球上に住む萬物の一大血族である。此の萬物の血族關係を、單に美しい理想として、空想としてではなく、生物學上の適確な事實に依つて論證したものは本書で、所謂萬物の靈長と誇る人間の正體は、譯者の深刻にして犀利なる筆に依り、遺憾なく闡明し盡された、鬪士として革命家として常に社會的鬪爭の戰線に馳驅して居る譯者が、半歲の精力を傾注して成れる本書が讀者に、多大の感興を與へる事を疑はぬ。

ハワド・ムウア著 山川均譯 **文明人の野蠻性** 一圓六十錢 送料十二錢

家畜は開化した野獸で、文明人は家畜化したる野蠻人である。生物學上の最高智識を日常生活の水準に引き下し、人生問題、社會問題の急所を突き進ましむる名著

ベルシュ著 堺利彥譯 **人間發生の跡** 一圓五十錢 送料十二錢

譯者一流の趣味ある文章で、人間が發生する順序をハッキリと力強く論證したもので、苟も人間として誰でも持たねばならぬ根本の大智識である。

クロポトキン原著 山川均譯 **動物界の道德** 一圓五十錢 送料十二錢

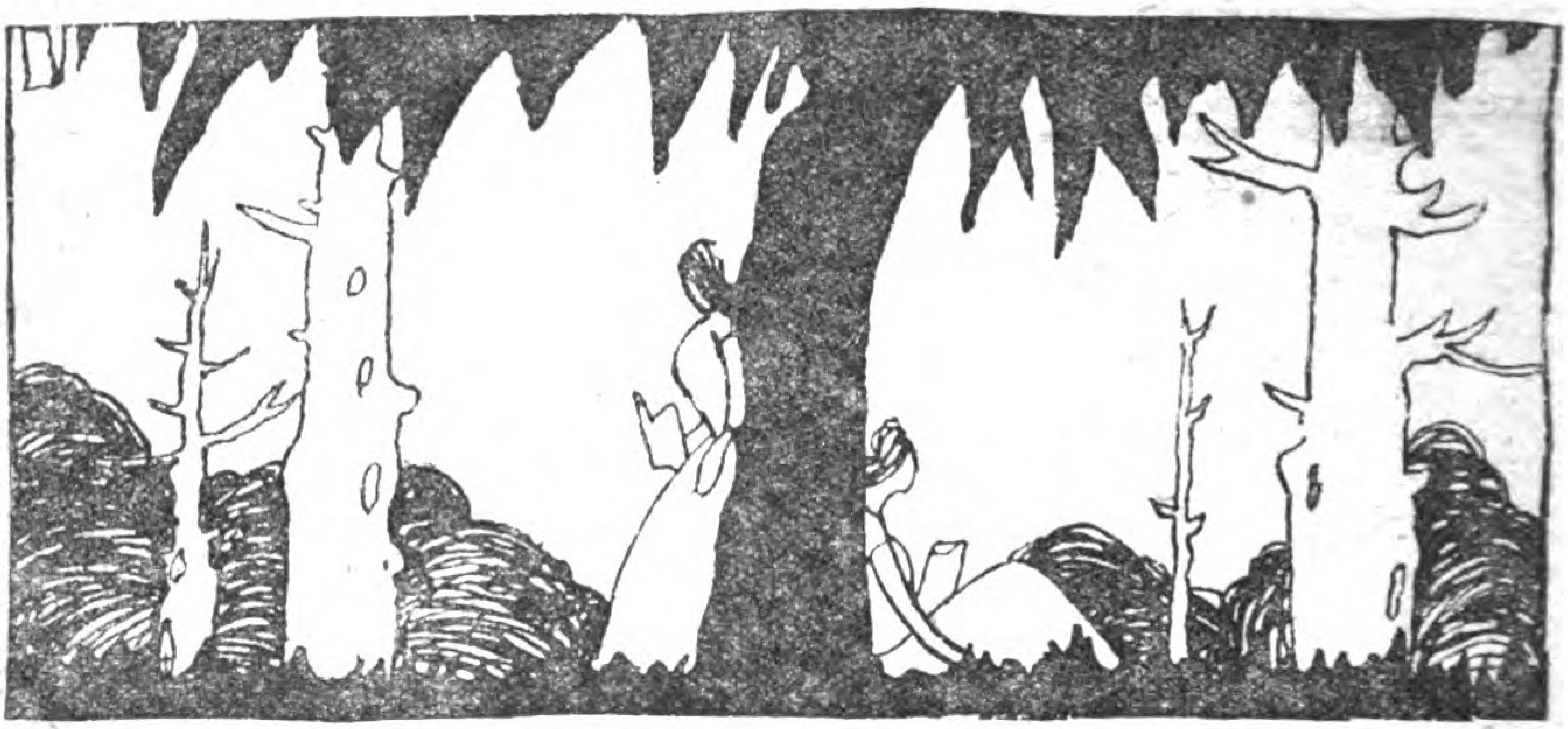
自然的にして嚴肅なる動物界の道德を說いて、其筆平明直截眞に青年新思想家を立たしむるものがある。原著は世界の學界を震愕せしめたる名著。

●發兌 東京神田裏神保町六 振替東京三三〇八一 三德社

小樽新聞

北海日日新聞

新年特別附録創作



戯曲

雲の柱

―三幕―

賀川豊彦

解放者モーセに導かれて、奴隷の地エヂプトを立ち出でたるイスラエル六十萬の大軍とその民族は困苦の後にシナイの荒野に着き、その後更に、約束の地に入る爲めに、進撃を續けエヂプトを出て、四年後に漸く、ユダヤの國境カデシ市の郊外に屯田して既に數ケ月を經て居る

斥候を派遣して約束の地を偵察させたが、十二人の斥候の中十人までは、進撃に不利なることのみを傳へ、民の間に不穩なる言論を　なすもの起り、民衆はエヂプトに歸ることを宣傳するものに、耳を藉し、反抗的に、偶像バアルの祭りに集ひ來り、ミデアンの遊女と戯れ、ミデアンの妻女と私通し、進撃の精神を放擲したることを示す。イスラエル軍中惰氣充つ。

第一幕

第一場

―(雲の柱)―

時　紀元前十六世紀頃利夏六月の早朝

所　小亞細亞カナシの國境カデン郊外の荒野

登場人物

イスラエルの總督	モーセ
モーセの妻	チッポラ
モーセの妻の弟	ホバブ
チッポラの父	エテロ
イスラエルの男	二人
イスラエルの女	四人
イスラエルの女兒	一人

灌木セーチ●ブッシュが多く生えて居る荒野、　舞臺の左手一哩位い向ふに城壁で圍れたカデンの市が岡の上に見え、その方面から、祭の笛太鼓また喇叭の音が折々聞こゑくる。

イスラエルは正面の地平線上に、幾千となく天幕を張つて居る、まだ日が登らない。

日の出ぬ中に、イスラエルの女四名と、男二名と、七つ位の女の子が、野に、マナを集めに來て居る。マナは白い色をした野いちごのやうなものである。それをセーチ●ブッシュの根に集めて居る。衣服は貧乏そうに見え痩せ衰えて居る。男子は凡て牧羊者の姿をして膝までしか無い縞の木綿の衣を着て皮帶をメめて居る。女は、シリアの女がする如くナプキンで頭を包んで居て、長い着物をきて居る。之から後に出てくるイスラエル人は凡て之に習ふ。

凡ての人はマナを集め乍ら話をして居る

女の甲（男に向ひ）『今度は進軍が大分遅れたやうですねえ』

男の甲『サア、斥候の報告が悪かつたものだから大分遅れたねえ』

女の乙（男の甲に向ひ）『モーセはカデシの國境を北に越えるつもりでせうかね』

男の甲『サア、ねえ、どうしますかな。カナンの南には、アマレキ人の強い奴が軍揃へをして待つて居るとか云ふことですなア』

女の甲『それぢや、どうしても、エヂオンギベルの方へもう一度引返さなければ進むことは出來ないでせうね。』

女の乙『それに此頃の疫病の流行では當分進軍も覺束ないで御座りませうね。』

女の丙『ほんとに昨今の人死と云へば大變な數で御座りませう。』

女の乙『サアもう夥しい數で御座りますねえ』

男の乙『こりやア一體、もし、どうなることで御座りませうな。こんなに人がころ／＼死んぢや、約束の土地に這入る時にや、もう人種が盡きはしないかと心配いたしますない。』

男の甲『サア、それを天幕で云ふてゐたのですがなア、なんでもモーセの云ふことには、エヂプトから出て來たもので二十才以上の者はみな荒野で死んで了つて、それから下の者だけがカナンの土地に這入れるのだそうで御座います。』

男の乙『そうすると私等は可哀相なことで御座りますない。』

男の甲『御互にエヂプトから出て來たものは影の薄いことで御座りますなア、ハア、ハア、ハア、』

大勢のものみな笑ふ。

男の乙『奴隷の狀態から解放してくれるのも悪いことでは御座りませんが、こんなに四年も五年も、沙漠の中に抛つておかれるのは考へもので御座りますない。』

男の甲『サア、もし、それでも、モーセは、まだ此上四十年も荒野で彷徨(さまよ)はねば、神の約束の土地には這入れ無いと云ふて居るそうで御座りますよ。』

男の乙『呑氣なことを考へたもので、御座りますな』

男の甲『そうすると、私達は、殆ど詭されたやうなもので御座りますな』

男の乙『まア、そんなもので御座りますなア』

男の甲『いつそ、死ぬのならエジプトで死んだ方が善かつたかも知れませんなア』

男の乙『出てくる時は、モーセも隨分元氣の善いことを云ふて居りましたが、シナイからこつちいは、どうもモーセも元氣が無いやうで御座りますなア』

男の甲『サア、もし、エヂプトを出る時には十の災厄(わざはい)で、パロを困らしたりなどして隨分手際の善いやりかたでしたが、荒野に出ましてからわ、薩張りあきませんなア』

男の乙『然し御互に、近頃は痩せまして御座りますなア』

男の甲『私はこんなに手の根付が細くなりました。』(自分の手頸を握つてみて)

女の丁は先きから默つてマナを集めて居たが

女の丁『あゝ、くたびれるよ、腰の骨がいたくなつて來たよ』

そう云ふて拾ふことを中止して風景を眺めて居る。

女の甲（男の甲に向ひ）『マナばつかり食つて居ては肥りませんわ。』

女の乙（女の甲に向ひ）『それでも、よくも、之で三年も四年もマナだけで辛抱出來たもので御座りますねえ』

女の丙『もう善い加減に、パンでも降つて來てくれそうなもので御座りますなア。エヂプトに居ると魚や、胡瓜や、西瓜、韮、葱、青蒜が足る程食べますのになア』

女の甲『然しパンが降つて來てくれても、約束の土地に這入れなくて死ぬのぢや、先の望みがありませんな』

女の丁『あゝ、モーセが來る！　モーセが來る！』

凡ての人カデシの方を見る。

女の甲『こんなに澤山集めて居るのを、見付けられると叱られるから、逃げて行かう。あの人は一日に一オメル以上集めると叱るのだよ！　神樣のものを一人のものが集めてはいかぬと云ふのだよ！』（逃げ出す）

女の乙『私も逃げやう。』

男女子供、七人凡て逃げ出す。退場。モーセ、エテロ、チツポラ、ホバブ登場エテロは七十歳位いの元氣な老人、モーセは五十歳位いに見ゆる黒い髯のカール●マルクスのやうに見える男、チツポラは年より若く見えて三十位に見える女、赤ン坊を抱いて居るホバブは三十代の壯者

エテロ（モーセに敬禮をして）『もう此處までゝ結構です』

モーセ『そうですか、もう少し向ふまで行きませう。』

エテロ『いくら、向ふに行つても、同じことだから』

そう云ふてチツポラの頸に抱きついて頰に接吻し乍ら、

エテロ『今度はね、よく辛抱しておいでよ』

チッポラ　（羞つた貌をして）『はい』

エテロ　（モーセに向ひ）『モーセ、可愛がつてくれよ』

モーセ　『承知いたしました。』

エテロ　（チッポラに向ひ）『姉さんがな、どんなに六ケ敷く云はれても、今度からは跡ついてくるのぢやないんだよ』

チッポラ　『はい』（ハンカチで眼を拭いて居る）

エテロ　（モーセに向ひ）『それでなア、モーセ、おまへは何でも、一人でやらうと思へば屹度失敗するからなア、凡ての人に適當に責任を持たせて、あまり、一人でやきもきせんが善いぜ。』之は、私の度々あなたに云ふた忠告だが、お別れする時に、もう一度、云ふておかう。そしてな、あんまり急いで、じたばたせんが善い。あんまり、慌てると屹度失敗するから。何でも一度にせんが善い。急ぐ道は廻れでな。前に難所があるなら、そこを避けて通るが善いよ。

モーセは、一々それに頷いて答へて居る。

エテロ　『エヂプトを出た時には、なか〳〵勢が善かつたが、之からが、六ケ敷しいのだ。自由になることは、あまり六ケ敷いものでは無い。鎖を打切つて逃げ出してくれば善いのだから。然し建設の段になると、サア、六ケ敷いのだ。それはたゞ逃げ出すだけの筆法ぢやいか無いのだから。自分だけの考を通さうとすると屹度失敗するよ。よく祈りよく考へて、猶、その上に人々に聞いて見てそうして事を決定するやうにしないと、屹度失敗するよ。凡て氣長くやるさ。おまへ一代で完成しなければ、おまへの子にやらすさ。乳と蜜の流れる地に、すぐに這入れると思ふことは大きな謬りだ！　向ふだつて、そんな處をすぐに、こちらに渡したくはなからうからなあ。それで、こちらの犧牲を最も少なくして、最も完全なる計畫を立てゝ進むやうにせねばならぬ、エヂプトから飛び出した時に、甘いこと行つた

からと云つて、それで此後萬事がその調子で行けると思へば、大きな間違ひだよ。此後、或は、雲の柱が見えなくなる時があるかも知れ無いよ。その時でも、光明を失はないで、いつも、前に額をたけて、前進することを忘れないやうに。そら四十年かゝつても、五十年かゝつても善い。あんまり急いだら屹度失敗するから、人の非難はあまり顧み無いで、悠然行くが善いよ。……エヂプトから出て來たものは、全く駄目だよ。あの人達が死に絶える頃に、ほんまものが生まれるのだ。いつも若いものに眼をつけてな。若いものの云ふことも、よく聞くやうにせねばいかないよ。此後、そら、いろんな事が起つてくるだらう。然し、おまへは固き信念の上に立つてな。外なるものが必しも、凡てのものを決定するもので無いことを知つて、常に神のみ聲を聞くやうにせねばならぬ。

モーセ　『はい、有難う、御座りました、お父様の云はれることはよく、私にわかります。それを一々實行したいと思ひます。』

カデシより祭の音樂がきこえてくる。

エテロ　『今日は、カデシの祭かな？』

ホバブ　『今夜は、新月の祭で御座ります』

エテロ　（モーセに向ひ）『ホバブのことに就ても、よろしく御願します。あまり今日まで、他所に出したことが無いのだから、御役に立つか、たゝぬかわからぬが、まあよろしくお願ひいたします。一人前の人間にして下さい。』

モーセ　『承知いたしました。』

エテロ　『ホバブは、少し、人が善過ぎるのでな、だれの云ふことでも聞くので困るのです。少しきつい所を教へてやつて下さい。（ホバブに向ひ）おまへ、しつかりせな、いかんぞ。（モーセに向ひ）然し荒野の中の道だけは、誰よりもよく知

つて居りますから、大丈夫です。ミデアンの野原で、此の男を知らないものに、一寸少ない位だから、ハ、ハ、ハハ

ア（得意になつて笑ふ。）それぢや……さよたら』

モーセ『さよなら、ほんとに此度は御厄介をかけました』

チツポラ『さよなら、お父様！』

ホバブ『お達者に！』

チツポラとホバブは殆ど同時に云ふ。

東の方、赤くなる。太陽が昇る前の空の光景が見える。

第一幕

第二場

所　小亞細亞カナン國境カデシ市バアル神殿の庭

時　初夏六月の新月の夜バアル祭

登場人物

シメオン族サルの子美少年　ジムリ

ミデアン人ツルの娘　コスビ

反逆者コラ　コラ

反逆者ドタン	ドタン
反逆者アビラム	アビラム
反逆者ルベン族ペレテの子	オン
藝術家ダン族アヒサマクの子	アホリアブ
アロンの孫	ピネハズ
モーセの妻の弟(道案内者)	ホバブ
斥候ザツクルの子	シャンマ
斥候ホリの子	シマパテ
斥候ヨセフの子	イガル
イスラエルの使者	
斥候ソデの子	カデエル
ミデアンの娘	ケトラ
ミデアンの娘	ミルカ
ミデアンの娘	ヨケヘテ
ミデアンの娘	プワ
ミデアンの遊女	エリセバ
モーセの長男	ゲルション

ミデアンの祭司　一名
ミデアン人　十數人
イスラエルの男　數名
イスラエルの女　數名

バアルの神殿は朝の太陽を拜する爲め西向に立てられエヂプト式の鈍角形の建築に多少バビロンの様式の加味されるものである。新しき彫刻が軒に見える。田舎の神殿としてあまり大きくないもの、岡の上に立つて居る。舞臺の正面には、正門が見え、正門の向ふに、イスラエルの多くの藁屋がすかして見ることが出來る。舞臺の右手には正門より小さき門がある。それを越えて、ミデアン人の市街地が見える。その上に新月が懸つて居る。舞臺の左側即ち神殿の前には四隅に角を飾る、燔祭壇ありその側に小亞細亞式の土甕數個に酒が充され、酒宴の準備なる。神殿の軒にはオリブ油を焚く七本枝の派出する美しき燈明が吊り下ろされてある。二つの門の入口には、イスラエル人が物珍らしげに立つて居る。若きゲルションの顏が右手の門の群衆の中に見える。庭の中央には、ミデアンの遊女エリセバを中心として、ユダヤ人もミデアン人も打混じて約十二人のものが踊つて居る。幕があかぬ中から、歌が聞こゑる。それはヘブライ古調の譜によく似たものである。イスラエルの人々は反物の不足の爲めに短い袖の無いものを着ミデアン人は裾の長い袖のある着物を着て居る。

「今宵、よい時
バアルのまつり
レンの荒野も、ケデシの森も
乙女心の色に醉ふ

乙女心に酔はないものは
オグか、バシャンの大牛か。ハイ。ハイ。』

此處まで歌つた時に幕あく。そこには大勢が埃及踊によく似た三角踊をして歌の譜に合せて興じて居る。ユダヤ人の中で踊つて居る人々は藝術家ダン族のアホリヤブと、斥候四人で、一緒に踊つて居るミデアンの男は一人で他はミデアンの女ケトラ、ミルカ、ヨケヘテ、遊女エリセバ、美しきツルの娘コスビその娘友達プワの十二人である。傍聽者の中にはミデアンの祭司を初め多くのミデアン人の外にモーセの妻の弟ホバブ、ユスビの戀人美少年ジムリも混つて居る。幕があいて第一まわりの歌が踊り乍ら唱はれる。

『今宵、よい時
パアルのまつり
結ぶ心の帶紐といて
夢の架橋うちわたせ
夢の架橋渡らぬものは
オグか、バシャンの大牛か、ハイ。ハイ。』

踊がすむと、みなのものは慌たゞしく盃の方に急ぐ。そして男女相對して酒宴を張つて居る。ジムリは酒も呑まず憂顔をして拜殿の柱によつてぼんやり見て居る。

遊女エリセバ　『ちよつと、色男のジムリさん。コズビさんも踊つてゐるのに、あなたもちつと踊つてはどう？』

ジムリ　『やう踊らないよ！』

エリセバ　『なにも六ケ敷いことは無いよ、踊れなきや、敎へてあげるわ、何にも遠慮する必要なんか、ありやしないぢ

やありませんか。ねえ、コスビさん』(コスビに向いて)

コスビ『全くですよ。お目出度い時に少しも踊らないと云ふのは、何だか、あまり呆氣ないわ、ほんとに。』

エリセバはジムリの處に傲然と近づいて行つて

エリセバ『コスビさんのお許しが出たから私が敎へてあげましやう。一寸と此處へお出でなさい』

エリセバはジムリの手を取りに行く。ジムリはそれを見てコスビの處に逃げ出す。大勢のもの笑ふ。

エリセバ『矢張り、イスラエルの色男はいくぢ無しぢや。ホ、ホ、ホ、ホ〱〱』

アホリヤブ『そうぢやないんだ。エリセバ。ジムリはおまいと踊るのは、いやぢやと云ふのだ。コスビとであれば一緒に踊りたいのだよ――そうだらう、ジムリ。』(ジムリに向いて)

ジムリ『まア、そうですね』

大勢のもの笑ふ。ジムリはコスビの肩に手をかけて如何にも世間の許した戀人だと云つた態度を見せつける。

アホリヤブ『たまらねえな。あんなに見せつけられちや、なア、エリセバ。おまいこつちいお出で、ジムリの眞似をしやうや』

大勢のもの笑ふ。エリセバは近づいて行つてアホリヤブの手を取り、自分の肩におく。

エリセバ『これで、いゝの?』

アホリヤブ『そうだ、そうだ、これで善いのだ。エヂプトから、モーセの馬鹿野郎に引張り出されて、もうかれこれ四年にもなるが、お酒の一滴だに飮めず、長いこと軟い女の肩に手などかけたことがないものだから、久方振りに、お酒を頂戴して女の肩に手をかけると、エヂプトにでも歸つたやうな氣になるわ。な、エリセバ。』

エリセバ『そうだらうと、思つたから今夜招いてあげたのぢやありませんか。こん夜は悠然していらつしやい。もうイスラエルの陣屋のことなんか忘れてしまつて、カデシの市の人になつて了へば善いのですよ、あなたも。ね、アホリヤブさん。あなたも餘程苦勞性ねえ。』

（エリセバはアホリヤブの盃に、から云ひ乍ら酒をつぐ。アホリヤブそれを呑み乾して

アホリヤブ『ほんとに、わしだつて、なんにも、モーセに喰付いて荒野なんかうろつきたくないのぢや。たゞ外のものがあいつに附いて行くものぢやからな、仕方なしに附いて行くだけぢや（シャンマに向いて）なア、おい、シャンマ。おまいも同じことだらう。』

シヤンマ『そうだとも、おれはもう、モーセに附いて行くのは止して了ふ積りだ。つまらねえ、あんな嘘吐に喰付いて行つたら、この後どんな非道い目に遇はせられるか知りやしねえ。俺はもうかうやつて、ミデアンの人々に厄介なり序に、厄介にして貰ふ積りなんだ。』

アホリヤブ『ほんとだ、ほんとだ。此間おまいたちはカナンの土地に行つて非道い目に逢つて來たと云ふぢやないか？ほんとに、そうなんかい？』

シヤンマ『俺達が嘘なんか云ふものかい。バアル神に命賭けても云ふよ、俺達はあんな、こわい目に出會つたことはなかつたよ。なア、シマパテ』

（シマパテはケトラを相手に喃語し乍ら、酒を呑んで居たが、急に首を向けて、

シマパテ『ウム、ほんとに俺達は非道い目に會つたよ。あんなこわい處だつたら俺達の壽命は幾つあつても足らねえや。』

エリセバ『ネピリムとか云ふ大男が居ると云ふのはほんと？』
シヤンマ『ほんとだとも。そら大きな奴だ。背の丈が一丈二三尺もあるだらうねえ』
ケトラ『まア・・・そら嘘だわ』
シヤンマ『ほんとだなア、シマパテ。』
シマパテ『ウム。偵察が、一丈五尺いると云つて居たよ。』
エリセバ『シマパテさん。あなたそれをみたの？』
シマパテ『いや。別にみたと云ふのぢやないが、カナンでそんな評判して居るのを聞いたよ。』
エリセバ『シヤンマさん、あなたそれをみたの？』
シヤンマ『その人の足跡を見たよ。』
エリセバ『それぢや、實際の人は見たことは無いの？』
シヤンマ『足跡だけだよ。そら大きな足跡だつたよ。一尺五寸位いもあらうと思はれる程だつたよ。』
エリセバ『足跡をみただけですかいな。面白くもない。それは誰かゞ辷つた跡でせう。』
ケトラ『ほんとかと思つたら、人の辷つた跡をみて來て、ネピリムを見て來たやうに云ひ布らして居るのですかいな、
此人達は！　臆病者ねえ。此人達は、ほんとに！』
シヤンマ『そうぢやないよ。ほんとだよ。あしこのものはなんでもみな大きいのだよ。俺達がエシコルの谷で取つて來た葡萄の一房などでも、二人で擔いで歸らなきやならなかつた程大きなものだつたよ。』
ケトラ『またシヤンマさんは嘘を吐いて居るわ。いくら大きい葡萄の房だからつて、二人の人が擔がなきやならんよう

なものがありたすものか？　ね、エリセバ』

エリセバ　『此人達は、少しお酒がきいて來たのよ。』

ケトラ　『それ位いのことだと思つた。』

イガル　『ほんとだよ。』

カデエル　「俺達は信用がないなア』

エリセバ　『まア信ぜられませんね』

シヤンマ　『やりきれないなア。苦勞して來ても、こんなに信用がなきやあ」

シマパテ　『こいつら金を遣りや、信用するのだが、金が無いから信用しないのだよ、その證據にみろ、お大名の子のジムリであれば、ちやほやするじやないか？』

エリセバ、多少憤怒の色をみせて

エリセバ　『まア非道いわ、それだからあなた達は、モーセに破門されるのだわ』

シヤンマ　『何を云つて居るんだい。モーセはこちらから破門してやるんだい。（シヤンマは昂奮して腕まくりをして云ふ）

アホリヤブ　『まア、みんな、そんなに昂奮するない。まだお酒は大分殘つて居るから」

エリセバ　『だつて、あなた達は、モーセから勘當を受けて居るのじやないの？』

シヤンマ　『何を生意氣なことを云ふんだ？（シヤンマはエリセバの所にやつて來て拳をエリセバの顏面につきつけて）こら賣女！　失敬ながら、俺達はまだミデアンの女郎などにみくびられないのぢや。生意氣なことを云ひくさると打殺すぞ！』

エリセバ　（まけぬ氣の多少嘲弄した聲で）『打殺してくれるなら、殺してみろや！　此イスラエルの厄介者めが！　人の畑を荒しやがつて、まだ、ぐずぐずぬかしやがる　驢馬の骨が！　エヂプトへでも早く歸つて行きあがれ！』

アホリヤブ　『まア、二人ともそんなに怒るない！　今日はおまつりぢやないか！　仲よくしてくれ！』

ホバブ　（仲裁に這入つて）『喧嘩しちやいかぬ、喧嘩しちやいかぬ。（エリセバに向つて）　エリセバも、おまい、お客さんに向つて、少し口を愼まなくちやいかないよ。』

エリセバ　『だつて此人は平生から碌か無いのですよ。カデシの青樓（おちやや）に遊びに來ても、お金を持つて來たことなんかありやしないのよ。その癖いつも酒に醉ふてぐずぐず云ふんですよ。ほんとに、私、此人、嫌いだわ。イスラエルのほかの人はみな善い人だが此人だけは、私、嫌いだわ。』

アホリアナはシマパテをジムリが最初立つて居た方に連れて行つて酒を呑ませうとする。

ホバブは、エリセバの所に近づいて行つて、エリセバの口に手をあて

ホバブ　『もう善いよ！　エリセバ』

エリセバ　『ホバブさん。ほつといて下さい。こんな時に、あの男に少し教へてやらなきやいかないのですよ。あまり平生から生意氣だから！　シマパテの野郎。カナンの土地から逃げ歸りくさつて！　人の辷つた跡を見て、ネビリムの足跡だつて！　ようまアそんなことが云へたもんじやなア！」

シヤンマ　『こら、エリセバ！　（椅子にかけて居たシヤンマは直に立ち上つて、エリセバの頬ペタを擲りつける）ようまア人の前でおれらを侮辱しやがつたな、己はもう、勘忍せんぞ！』

アホリヤブ　（それをアホリヤブが止めて）『兄弟。他處の御厄介になつて居て亂暴することだけはよしてくれ！　もう歸ら

う、歸らう、もう大分醉が廻つたと見えて、みんな正氣を失つて來たやうだ！』

シャンマ『アホリヤブ！ 放してくれ、俺は今夜、エリセバの野郎に制裁を加へなきや許せねえのだ』

ケトラとミルカと飛び來り、シャンマの兩腕を取り、

ミルカ『それぢや私達が陣屋まで送つてあげますから、もうお歸りなさいねえ』

ケトラ『さうしませうね、私達が送つてあげますから、靜かにして歸りませう』

女二人でシャンマを送り出すので、シャンマは靜かに東門から出て行く。
それをみて、シマバテ急に淡しくなり、機嫌が直り、

シマバテ『シャンマはうまいことしやがる。俺もケトラに連れて歸つて貰ふ！』（獨言のやうに行つて出て行く）

それを見送つてエリセバは笑ひ乍ら

エリセバ『あの人達はほんとに女に飢えて居るのね。』

アホリヤブ『さうあたりまへぢやないか！ 三年も四年も荒野の中に放つて置かれちや、女にもパンにも飢えるよ。』

エリセバ『然し、私は少しもあの人達に同情が起らないわ。私は何だかモーセさんが可哀相になるわ。あんまりみんなが、いぢめるものだから』

アホリヤブ『痛い所に力を入れるぢやねえか？』

エリセバ『ねえ、ホバブさん、チツポラさんだつて可哀相だわ。あまりイスラエルの人達が毎日いぢめるので泣き通しですつてね。ミデアンの女達をお嫁さんにしてくれるのは善いが、チツポラさんのやうに、いぢめられるのであればほんとに可哀相だわ！』

アホリヤブ『心配すない、エリセバ。おまいが俺と一緒になつてくれさへすれば可愛がつてやるよ』

ニリセバ『甘いこと云つて居るわ』

バアルの祭司『ほんとに、エリセバはアホリヤブさんの所に行けば恰度善い夫婦になれるなア』

エリセバ『神主(かんぬし)さんは甘いこと云はれるよ、また彫刻(ほりもの)の一つでも、彫つて貰ふと思つて。』

バアルの祭司『いや、アホリヤブさんのお手工(てなみ)には全く感心して了ひましたよ。全く。な、エリセバ、この宮の新しい彫刻はみなこれアホリヤブさんが、このお祭の爲めに彫つて下さつたのだよ。ほんとに結構なものだ。』

エリセバ（驚いた素振をして）『ほんとに？ まア、善く出來て居ること！』

ミデアン人甲『ほんとに立派なものですな』

ミデアン人乙『これは、エヂプト式の彫刻(ほりかた)でせうなア。結構なものですな。』

ミデアン人丙（軒の彫刻を見上げて）『五穀豐饒のお祝ひの印しですなア、では先生に一獻(こん)、獻じさせて頂きませうかなア』（そう云ふて盃をアホリヤブに渡すと氣をきかせてエリセバ酒をつぐ）

アホリヤブ『ありがたい！ こら、ありがたい！』

ミデアンの祭司『ほんとに、バアルの御身體などはよくあんなに立派に出來たものですね』

アホリヤブ『そや、そこさねえ。シナイの山の下でね、モーセが山に登つて降りて來ないものだから、みなのものが領りながつて御神體を一つ彫つてくれと云ふものだから、その時に、アロンに頼まれて彫つたのは今度、此宮に獻じたのと同じものでさア』

祭司『ア、そうですか？ そらまア勿體ない。實に結構なもので御座りますなア。そうすると、シナイのものはどう

なりましたか？』

アホリヤブ『シナイのものは、モーセが怒つて擲き毀して火の中に打込んで了つたのです……あいつには藝術が判りませんからなア。』

祭司『そら、また惜いことをなさいましたなア、どうしてそんなことになつたのですか？』

アホリヤブ『いや、それには深い事情があるのですがな。モーセは神様は魂で目には見えぬものだと云ふのです。そしてその目に見えぬ神様のお祭をするのだと云つて、私達を荒野に引張り出して来たのですがね。人民はあたり頼りないものですからね、神様が魂であることはわかつて居るが、眼にみえる印だけ附けてくれと云ふのですよ。それでモーセの留守の間にアロンにせがんで、牛の形をして居るバアル神の御神體を拜むことになつて居たのですよ。』

祭司『ははア、さうすると、モーセはそれがいかぬと云ふのですな。餘程偏寄つた人ですなア。魂の神様も信ずるし、形に表したものも拜むやうにすれば、善いでせうになア。』

アホリヤブ『兎に角、藝術と云ふものは、形に象さ無ければ、美を表現することは出來ないものですからね。私はそれを主張するのですけれども、モーセは頑固ですから少しも聞いてくれ無いのですよ。』

祭司（ホバブに向いて）『な、ホバブ、おまへの姉さんの婿さんと云ふのは餘程かた寄つた人だと見えるなア。おまへは一體、どつちの肩を持つて居るのぢや』

ホバブ『私はどつちでも善い。魂の神様も信ずれば、形になつて居るものも拜むのです。』

祭司『それだから、おまへは道案内がつとまると云ふものぢや……モーセのやうな、かた寄つたことを云ふて居れば、とても人には入れられませんな。』

ホバブ 『兄キが云ふのがほんとなんだらうけれども、わたしにはちつとわからんところもあるので、迷ふて居るのですよ。』

祭司 『そうだらう。人間は迷ふて居る所が少し人間味があると云ふものだ。魂ばかりになれば、マナも食は無くても善いと云ふことよ。』

大勢のもの笑ふ。

アホリヤブ 『モーセに、それだけのことがわかつたらなア、おれはうんと傑作をしてやるのだがなア。あいつは俺に傑作をする機會を與へてくれ無いのだよ。全くいやになつてしまつた。』

エリセバ 『そんなに、いやにならなくてもよろしい。私がお酌してあげます。』

アホリヤブ 『ねえ。神主さん。私も隨分モーセの爲めには、今日まで盡して來て居る積りなんですよ。あのエホバの幕屋の諸道具は何から何まで、全部、私とベザレルと云ふ男と二人で造へあげたものです。然し、沙漠の眞中の麻の幕屋の中ぢやパックが悪いから彫刻も生きて來ませんよ。エジプトのやうに堅い石のある所で、建築がしつくりして居ると、彫刻をしても、彫刻し甲斐があるが、どうも幕屋ぢやぐつと、しませんよ。奴隷解放も宜いけれども、モーセのやうな藝術を破壊する奴隷解放も困つたものですね。』

祭司 『ほんとに御同情します。まア出來るだけ長く、カデシにお止りを願つて、うんと善い傑作を遺して行つて頂くことですな。』

アホリヤブ 『そうしたいものですね。』

新月は、西に隠れ、イスラエルの陣中にはまばらに燈の光が見える。カデシの市には多くの燈火が見える。バアルの神

殿にはオリブ油を焚く七本の枝の出た燈明が軒につるされ光が美しく輝く。そこに、反逆者コラ、ドタン、アビラム、及びオンの四人のもの相次いで現れる。

コラ『おい。神主さん。此處へ、イスラエルの斥候に行つてゐた人は來なかつたか？　お、アホリヤブ（アホリヤブを發見して）シヤンマや、シマパテは、此處に來て居らなかつたか？　一寸と聞きたいことがあるのだ。』

祭司『先き、歸りました女に連れられて』

アホリヤブ『何かの用事かね？』

コラ『ウム、今、陣中ぢや、大騒動をやつて居るのだ。ヨシュアとカレブの野郎共がモーセの肩を持ちやがつてな、斥候に行つた外の十人のものを惡様に云ふので、みな怒り出してな、ヨシュアとカレブとを殺すと云つて大騒ぎをやつて居るのだ。』

イガル（それを聞いて）『そら大變だなア、俺達のことで陣中を騒がしちや、誠にすまねえなア』

ドタン『いや。ヨシュアの野郎、あいつ生意氣だから、やつつけてやつた方が善いのだよ。』

カデエル『ほんとに、あいつ、モーセのお思召が厚いと思つて豪ら相にするから、ちつとやつてやつた方が善いのだよ。カナンに這入つた時でも、自分だけ旨いことしやがつて、エリコのお青樓（ちやや）に這入りこみやがつて、俺達には六ケ敷い所だけ探險させて、自分は、毎日女郎とふざけやがつて、敵が來ると、女郎の帶を吊り下げて二階から城外に逃がして貰つたりして居やがる癖に、歸つて來ると如何にも、自分だけが功名を立てたように云ひ布らしやがるのが、俺は、癪なんだ。あんな奴は、ほんとにやつた方が宜いんだよ。』

コラ『カデエル、そうすると、シマパテはもう先きに歸つたか？』

カデエル『先きに、此處を出て行きましたがな、あいつのことですから、途中で、女の宅にでも引懸つて居りはせんかと思ひますがな。先生も、近頃少し燥氣になつて居りますからね。』
アビラム『そいつは困つたなア。ね、コラさん（コラに向いて）あいつの顏を立てゝやらうと思つて盡力しても、先生がそんなに、今から燒けパチになつちや一寸と拵へもんですなア』
コラ（カデエルに向ひ）『おまいはシマパテの女の家を知らないか？』
カデエル『知つて居りますよ。ケトラの宅だつたら。』
コラ『一寸と、呼びに行つて來てくれないか、すぐに、此處まで來てくれるやうに。』
カデエル『よろしい！　すぐ行つて來て上げます。』
カデエル退場せんとして、東門の處まで行く。それを呼び止めて
ドタン『君も、すぐ此處まで歸つて來てくれ給へ、相談があるから』
カデエル『承知しました。』
ドタン（イガルに向ひ）『君も相談に乘つてもらはねばならぬ。もう少ししたら、君もコラさんの幕屋までやつて來てくれ給へ。重大事件の相談があるのだから。』
イガル『重大事件つて、なんですか？　私は近頃臆病になつて、もう動くことが嫌いになつたから人を殺したり斬つたりする相談にはもうようのりませんぜ。』
ドタン『卑怯なことを云ふな。イガル。』
エリセバはコスビ、ヨケヘテ、ブワと共に、新らしく來た四人の客に盃を配つて廻る。

エリセバ（コラに向ひ）『まア、御祝儀に、一杯！』
コラ『こんな積りで來たのではなかつたのですがなア。少し待たして貰ふかなア』
アビラム（ヨケヘテの酌を受け乍ら）『御祝儀だけ受けることにしませう。酔うと一寸困るものですからね』
ドタン（プワの酌を受け乍ら）『有難いなア。お酒の頂けるのは四年振だなア。有難いなア。』
オン（コスビの酌を受け乍ら）『有難いなア。あなたは、ジムリさんの、なんでしたねえ。有難う御座ります』
コスビ『いゝえ、どうしまして、よくこそ御出で下さいました。』
オン『ジムリさんわ。』
コスビ『隅ツこに隠れるやうにして居りますよ。ミデアン人の間に、少々恥しいのでせう』
オン『あなたの話は、イスラエルでは評判ですよ』
コスビ『さうですか、困りましたね。それは。ジムリがあまり熱心なものですから、すぐ人の目につくのです。』
オン『然し、今度はお氣の毒ですねえ。』
コスビ（オンの云ふことが徹底しないらしく聞き直して）『何のことでしたかね』
オン『それぢや、あなたは、まだ御存知ぢやないのですか？』
コスビ『いゝえ、ちつとも。』
オン『さうですか？　そら、私達が來てよかつた。――ジムリさんは、まだ何にもあなたに云ひませんでしたか？』

他の人々は頻りに酌をされて飲んで居る。

コスビ『いゝえちつとも。ジムリは、この二三日私の宅へ來たツきりで、ちつともイスラエルの方に歸らないもので

すから、何にも知らないので御座いませう。』

オン『さうですか、それはヨシュアの發議で、雜婚禁止令が出たことは御存知ぢやないのですねえ？』

コスビ『いゝえ。そんなことはちつとも知りませんよ。雜婚禁止令と云ふのは何ですか？ 教へて下さい。』

オン『雜婚禁止令と云ふのはね、イスラエルの人々があまり、ミデアンの娘達と結婚して、進軍の意氣を阻害するものですから、ミデアンの娘達との結婚を禁止すると云ふお布れなのです。』

コスビ『そんなお布れがいつ出たのですか？』

オン『今日の晝頃、出たのです。それでイスラエルの陣中で、モーセやヨシュアの排斥の聲が高くなつたのです。』

コラ（コスビに向ひ）『あなたのことなども大分問題になつて居りましたよ。』

コスビ（ジムリを呼びつけて）『ジムリ！ 一寸と此處へいらしやい！（コラに向い）どうかなりますか？ 私何だか心配ですわ。（不安な態度を示して云ふ）

ジムリ靜かに沈んだ顏をしてやつて來る

コスビ『ジムリ、あなた、雜婚禁止令の出たことを知つて居るの？』

ジムリ『……』（默つて頷く）

コスビ『まアあなた知つて居たの？ 何だか今日は沈んで居ると思つた！ さう！ あなた知つて居たの？ それですね、エリセバが、一緒に踊らうと云つてもよう踊らなかつたのは。』

ジムリは相も變らず默つて煩悶の態度にて立つて居る

オン『コスビさん、あなた注意しなければ、今にヨシュアか、その部下のものが、ジムリを探がしに來ますよ。私達が

此處に居れば、大丈夫ですが、それでなければ殺されますよ』

コスビ　『私、どうしませうね。私、怖いわ。ねえ、ジムリ、(ジムリにすり寄つてジムリの手をとり)私をどうしてくれるの?』(コスビは眼に涙を湛えて居る。)

二人は靜かに退場。大勢のものそれを見送り少しの間沈默。

アビラム　『ほんとに、モーセと云ふ奴は仕方の無い奴だ。若いものの戀愛などに對しては、もう少し理解のある奴かと思つて居たが、』

アホリヤブ　『その癖、自分も若い時には、ミデアンの女に子供まで孕せた身分でありながら、なア、』

コラ　(アホリヤブに向つて)『おまいも、知つて居る通り、この儘で行けば、俺達四百萬の同胞は、モーセに逃はされたばかりに、このシンの荒野に彷徨して、パンの一片もやう食はない中に死なねばならぬことになるかも知れないぜ。』

アホリヤブ　『全くなア。』

アビラム　『我等の今日迄の苦勞と云へば、それは一方ならぬものであつた。それにもかゝわらずモーセは一言のお禮だつて云つてくれないのみならず、いつも呪と脅迫で、俺達をおどしてたゞ、自分の野心だけを滿足させて居るのだ。』

コラ　(アホリヤブに向ひ)『實際あいつのやり方には俺もどんなに癪に障るか知りやしない。同じレビの族の同じコハテの子孫であるから、何かにつけて相談してくれるなら、一々相談にも乘るのだけれども、自分一人が如何にも豪らいやうに考へて凡てに專制君主的に振舞ふものだから、俺達同族のものでも、彼の云ふことを聞かなくなつて了ひましたよ。兄弟のアロンや、ミリアムまでが彼に反抗して居るのでも知れるぢやないか!』

アビブ　『カデエルは、えらい、おそいなア、なにして居るのだらう。』

ドタン『まだ歸つて來る時ぢや無いよ。街までは五六町あるからなア』

アホリヤブ（コラなどに向ひ）『きみたちは、之からどうする積りなのか？』

コラ『決心して、エヂプトに歸る積りだ。それともモーセをやツつけて、もうすこし平民的に民衆の云ふことをよく聞いてやりたいと思ふ』

アホリヤブ『斥候等の報告は、えらう、善くなかつたやうだつたが、つまり進撃は不可能になつたのですか？』

ドタン『報告があまり惡いものですからな、士氣が全く阻喪して了つて、反亂にでもならうかと云ふ懼れがあるのですよ。あなたがたのやうな藝術家肌の人でさへ、モーセに愛憎をつかして居る位だから、一般民衆は一層愛憎をつかして居るのです。』

アホリヤブ『それで、今夜は何かその相談でもあるのですか、モーセ排斥に就てでも。』

ドタン『大きな聲では云へませぬが、まアそんなことですな。』

アビラム『モーセに對する反對運動は既に起つて居るのです。先きも陣中で、幾千のものがモーセの幕屋を取り圍んで騷いで居りましたよ。その中でも女共の叫びと云へば聞いて居られぬ程悲痛なものでした。女達はマナばつかり食つて居るものですから、乳が出ないと云つて泣き叫んで居るものもあれば、子供が死んでも葬る墓場が無いと云つて、モーセの幕屋の戸口に來て泣いて居ましたよ。然しそれより悲慘なのは老人でした。アマレキ人が攻めてくるかも知れないと、シヤンマやシマパテが報告したものだから、早く退却してくれろと云つてモーセに泣きついて來るのです。また或者は水が無いと云ふて訴へて居るものもあるし、或者は安息日に柴を集めて居て、エホバ神に打殺されたのが不平だと云つて怒つて來て居るものがあるしそれこそ、モーセの幕屋は民衆の怨嗟の的ですよ。今のところ、兎

に角、モーセの解放運動は全くの失敗ですね。』

アホリヤブ『失敗であることは、判つて居りますがね、この後、荒野に居る四百萬の生靈をどんなに導いて行つてくれるでしようね。私はそれが第一心配なんですよ。』

コラ『そこだよ、アホリヤブ。彼を亡くして了うより外に道は無いよ？』

アホリヤブ『そしてもう一度、エヂプトに歸つて行くのですか？』

コラ『まア、そうですね。』

エリセバ（アホリヤブに向ひ）『またエヂプトに歸るだけは、およしなさいよ。私達があなた達に同情して居るのはパロをやツつけて來たからぢやありませんか！　もう一度、エヂプトに歸るなんか、そんな卑怯なことが男として出來るものですか！　男らしくもない。』

コラはエリセバをぐいツと睨みつける。エリセバをそれでも平氣で居る。

ホバブさん、あなたは直接關係があるから、イスラエルの人々を奨勵してあげなさいよ。それでなければ、わたし達が、今日まで同情を表して來た甲斐が無いわ。』

（エリセバは續けて）イスラエルの人々はもう少し、勇氣があるかと思つたら、存外勇氣が無いのね。ね、（ホバブに向いて）

ホバブ『わしの力でイスラエルは動かぬよ。』

アホリヤブ『エリセバ、然し、おまいのやうにイスラエルに同情してくれる女と一緒になることさへ禁止するのだから、モーセは余程わからずやぢや無いか！　そうは思はんか？』

エリセバ『モーセさんの意志を私は推測することが出來るわ、それは絶對に禁止すると云ふのでは無くて、あまりみん

なが女にのろけちやつて進撃する意志を無くして了ふからだわ。モーセさんだつて戀愛に全く同情の無いわけぢやないと思ひますわ。だつて自分もミデアンの女を嫁さんにして居るぢやありませんか！』

アホリヤブ『おまいは、よつぽど、モーセびいきだなア』

エリセバ『そうよ、私は、モーセのやうな、解放者が好きですわ。自由を縛られて居るものは誰だつてモーセが好きになりますよ。私は私の境遇から推してモーセが好きなんです。』

アホリヤブ『モーセがおまいの身受けをしてくれるのぢやあるまいし、おべつか云ふことをよせや。それよりか（アホリヤブはコラや、ドタンを見て）こちらの旦那の御機嫌でも取つておくが善いよ、その方が自由になる日が近いよ。』

エリセバ『私は、お金などで、自由の身にせられたくは無いわ。』

アホリヤブ『だつて、おまいは、僅かの金で奴隷に賣られて今の身分になつて居るのでは無いか！』

エリセバ（涙ぐんで）『アホリヤブさん。もうおよしなさい。人を嬲つちや許しませんよ。』

アホリヤブ（コラとドタンに向つて）『この女は、ここのお宮についた「巫女」女郎なんです。』

エリセバ『アホリヤブさん、およしなさい！』（盃を取つて、アホリヤブに泣き乍ら投げつける。）

アホリヤブ『エリセバ、氣に觸つたなら許してくれ！』

エリセバ『覺えていらしやい！』

（エリセバは神殿の中に驅け込んで、アホリヤブが彫刻したと云ふボアルの神像を引づり出して來て、アホリヤブの足元に投げつける）

エリセバ『こんなものが何がありがたいものか』

祭司『エリセバ、おまいは何をするのだ？』

エリセバ『何が、之で藝術だ、ほんとにあきれて了ふわ！ 私のやうな女の身を錢金で做好して置いて、それで藝術だなんかよく云へたものだ！ ねえ、アホリヤブさん、私を解放して下さい。それがほんとの藝術なんですよ。わけのわからぬ牛の像を彫む藝術よりか、人間を解放する藝術の方がずつと豪いのですよ。』

祭司『エリセバ、おまい、今日限り此處を出て行け！ 罰あたり奴が！』

エリセバ（泣き乍ら）『出て行く處があれば出て行きます。然し、自由にしてくれた證據を下さい。』

祭司『自由にした證據か？ よし？ 今やるぞ』

祭司は神殿に飛び込んで行つて、白刃を引拔いてやつてくる

祭司『エリセバ！ おまへを自由にしてやる。』

祭司エリセバを斬らんとする。エリセバは逃げまどふ。門の扉より、モーセの長男ゲルション飛び込み來り、祭司とエリセバの間に立ち塞がる。

ゲルション『エリセバの身柄は私が貰ひました。』

祭司『何に？ 貴樣小倅の癖に生意氣な、すつこんで居れ、それでなければ、貴樣もついでに殺して了ふぞ。』

此混亂にミデアン人ホバブを初め皆名のものは、祭司を抱き止めて、劍をもぎとり、ゲルションは默つてエリセバを連れて正門より退場

祭司『あいつは何人ぢや、ホバブ。』

ホバブ『あれは私の姉の子です。』
祭司『そうすると、モーセの長男か？』
ホバブ『そうです。』
祭司『コリセバは、あの男と、元から關係があるのかね』
ホバブ『知りませんよ』
祭司『あの男は、どうしてあしこに居たのだ。』
ホバブ『私が跡をみせに連れて來たのですが、恥かしがつて、中には這入らなかつたのです。私は歸つたことだと思つて居りましたが、どこかの蔭に隱れてゐたのでせう。』
祭司『餘程、變つた男だなア』
ホバブ『お父さんとよく似た處があります。義俠的な處は――』

この時イスラエルの陣屋に火起り、火の柱天をこがしてゐる。

アホリヤブ（それに氣がついて）『コラ、ドタン、あれをみろ、イスラエルの陣中には何事か起つたぜ！』
コラ『何だらう、心配だな！』
アビラム『それでは、モーセの方から先に計劃を覆してかゝりやがつたな。』
ドタン『どうも、こちらはいつも計劃が齟齬して先手をうたれてばかり居るのだなア』
オン『いまいましいなア。モーセには、エホバ神がついて居るから、かなはねえなア』

そこへカデエル慌しく飛び歸り入場

カデエル『大變です。大變です、イスラエルの陣屋は大火事です。あなたがたの陣屋に火がついたのです。』

コラ『さては、モーセの野郎、先に手を廻して俺等の虚を衝いたなア。よし。（カデエルに向ひ）シャンマやシマハテはどうした。

カデエル『何處にぐずり込んだか、わかりません。何處を探しても見當りませんでした』

アビラム『仕方がないな。之ぢや當にもならないなア』

そこにまたイスラエルからドタンの部下、使者として入場

使者（ドタンに向ひ）『注進申し上げます。』

ドタン（慌て氣味にて）『どうした？　どうした？』

使者『唯今、ルベンの陣屋に、天火がつきましてドタンとオンとアビラムの陣屋全部、またレビのコラと幕屋全部が燒け落ちまして、その中に旗擧げの準備をして居りました。一味徒黨二百五十人はみな燒け死にました。』

ドタン『そうか？』

使者『モーセは、それに乘じて、あなた達の在り家をさがして居ります。一刻も早く、お隠れなさるように御願いたします。』

アホリヤブ『そら、一刻も早く逃げたが善い！　逃げたが善い。此處に居ると、剣呑だ！』

コラ、ドタン、アビラム、オンと使者のもの慌しく東門より退場

ミデアン人甲『おい、天火を見に行かんか？』

ミデアン人乙『危ない。』

ミデアン人甲『よく燃えて居るじやねえか？　見に行かう〳〵。』走り出で退場）

ミデアン人丙『己も行かう』

ミデアン人丁『俺も行くよ、待つてくれ』

ホバブ初めミデアン人、全部退場。

祭司（火を見て居る、アホリヤブに向ひ）『之ではあの附近にある、ミデアン人の幕屋も危いから　も一寸見舞に行つて來ます。後を頼みますよ』

アホリヤブ（イガルを顧みて）『神主さん、後は、イガルに頼んでおきませうや。私も騒動が見たくなつた。あなたと一緒に行きませう。……（イガルに向い）……イガル、後を頼むぜ。（女を見て）恰度善いや、女がまだ二人殘つて居るから』

祭司、アホリヤブと二人退場

イガル（火を凝視して居る、ヨケヘテとブワに向い。）『飲まうや、飲まうや、お目出度くもねえ。祭の晩に、火事騒動で、人の醉を醒ましやがる。己は、イスラエルの幕屋が燃えやうが、カデンの街が燃えやうが、そんなことはどうでも善い。飲みさへすれば善いんだ。』

ヨケヘテ『あなたも、ほんとに呑氣な男ね、自分の宅の幕屋が燒けてるかも知れないのに、まだ、こんな處で居座つて早く歸つてみて居らしやいよ。』

ブワ『ほんとに、この人は呑氣ね』

イガル、一人で酌をして一人で飲む。余程醉ふて居る。

コケヘテ『ねえ、イガルさん、イスラエルの人はみな歸つて行きましたよ、もうあなた一人ですよ此處に居るのは。早く歸つていらしやい。』

イガル『まあ、そう云ふな、悠然させてくれ、イスラエルに歸つて行きや、マナは有つてもお酒は呑めねえのだ。』

コケヘテ『ほんとに此人はいけすかない人ね。こんな人がようまア斥候に行けたもんぢやなア』

イガル『何でも善いや、今夜は此處で泊るのぢや。神主さんにも頼れたから。』

女二人は大笑いに笑ふ

ブワ『こんな人にかゝつたらかなわないわ』

落付いてアホリヤブ退場。イスラエルの陣中より若者ピネハズ拔刀して入場

ピネハズ『おゝ、イガル！　此處にジムリは來なかつたか？』

イガル『知らないよ。』（舌の廻らない句調で）

ピネハズ『確かに來て居た筈だが、』

イガル『知らないよ』

ピネハズ（イガルに向ひ）『ホバブが、さつきゲルションをこつちへ連れて來よつたが、ゲルションは此處に來て居らないか？』

イガル『知らねえよ』

ピネハズ『何處へ行つたかた』

ホバブ『知らねえたら、知らねえよ』

ピネハズ『みな仕方の無い奴ばかりだなア。大騒動が起つて居るのに、行衛さへわからさ無いと云ふのは……ほんとに呑氣な奴らばかりだ！』

イガル『騒動つて、一體どうしたんです？』

ピネハズ『天火が降りて來て、謀反人のコラやドタンの一味徒黨のものをみな燒き亡ぼして了つたのだよ　イガルおまいも、こんな處にぐずぐずしないで、早く、陣屋に歸つて居ら無きや、また、神樣の罰が當るぞ』

イガル『私は、どうせ罰あたりですから、どうでも善いのです』

ピネハズ『おまへは、今日の正午お達しを知つて居ような！』

イガル『知らねえよ。』

ピネハズ『仕方のない奴だなア』

イガル『俺は早やう罰がくれば善いと思つて居るのだ。エヂプトから出て少しも面白くもねえことばかりだ。四年間も引張り廻はされて』

ピネハズ『ぐずぐず云つていたら、打殺すぞ』

ピネハズ刀を振り上げる。

イガル『怖わい、怖わい！』

イガルひよろつく足で逃げ出さんとする。女達それを見て笑ふ。

ピネハズ『偶像の室に居座り込んで、醉拂つたりして、此恥知らずめが、サ、出て行け、出て行け。之から一切こんな處に近づいてはならぬ』

イガル、ピネハズに追はれ乍ら二人共退場イスラエルの火の柱、猶も盛んに燃ゆ！

ヨケヘテ　（プワに向ひ）『まあ恐ろしい火ね。今夜は一體どうしたんでせうね。私は何だか薄氣味が惡くなつた。』

プワ　『ほんとにねえ』

ヨケヘテ　『私、うちが心配して居ると思ふから歸るわ』

プワ　『ぢや、私も一緒に歸るわ』

二人共拜殿に恭しく禮拜をして、急いで立ち去る。

舞台に凡ての人影が消えた時に拜殿の後ろよりジムリとコスビ手を引き合つて現れる。暫時沈默。

コスビ　（泣き聲で——長く泣いて居たと云ふ態度にて火を見つめ乍ら）『あなたの陣屋が燒けて居るのぢやないの？』

ジムリ　『燒けて居てもいゝよ。すつくり燒けて居ても。俺は地上に、おまへの外、何者もいらねえのだ。』

コスビは、打萎れて泣き出す。

ジムリ　『コビス、どうか、お願いだから、泣いてくれるな。病氣になると惡いから。』

コビス　『だつて、かうやつて、二人で居れるのも今夜限りでせう。』

ジムリ　『そんなことは無いよ、これからでも何度、毎晩來るよ』

コスビ　『だつて、さうすれば、律法に呪はれるぢやありませんか！』

ジムリ　『それが、何だ、戀は律法より強いでは無いか！』

コスビ　『そんなに云つたつてあなたが殺されたら仕方が無いもの』

ジムリ　『殺されても、善いぢや無いか！　戀の爲めならば。』

コスビ『だつて、あなた一人が殺されるのは、私はいやですわ。殺されるのなら、二人で殺されたいわ』

ジムリ『ぢや、二人で殺されることにせう。』

暫時、沈默。

その時イスラエルに轟然たる爆發の音起る。

コスビはそれを見詰めて、

コスビ『ジムリ、イスラエルは、益々よく燃えるのね』

ジムリ（コスビの顔を凝視して）『燃えねばならぬものは、燃えるさ！』

コスビ（ジムリに抱きついて）『ほんとに燃えるだけ燃えたが善いのね』

暫くの間沈默あり。その間に、火の柱は段々消えて行く。そして颶風の聲起る。

静かに幕下る。

第二幕

第一場

場所　モーセの幕屋の内部

時　バアル祭の日の眞夜

幕屋は亞麻で作つたもので、大きなもの約百人位は優に這入れる位の程度のものである。中央にオリブ油をたく燈おつ

いて居る。入口は右手にあり、正面は引幕があつて次の室に通ずるやうになつて居る。簡単なる机、椅子腰掛などが置かれてある。

登場人物

イスラエルの総督　モーセ
モーセの兄祭司長　アロン
モーセの姉　ミリアム
モーセの妻　チツポラ
モーセの長男　ゲルション
モーセの妻の弟　ホバブ
斥候長　ヨシュア
斥候の有力者　カレブ
アロンの孫　ピネハズ
シメオン族サルの子　ジムリ
戀人　コスビ
ルベン族の首長　シュデルの子　エリツル
シメオン族の首長　ツリシヤダイの子　シルミエル
ユダ族の首長　アミナダブの子　ナション

イツサカル族の首長　ツアルの子　ナタニエル
ゼブルンの首長　エリアブ
ガドの首長　エリアサフ
アセルの首長　パギエル
エフライムの首長　エリシヤマ
ベンニヤミンの首長　アビタン
ナフタリの首長　アヒラ
イスラエルの人々　十数名

幕があくと、モーセの妻チツポラは、大きな荷物を作つて、里に歸つて行く準備をして居る。隣の室ではモーセの次男エリアザル(一才)が泣いて居る
モーセの姉ミリアムは、チツポラの荷造して居るのを手助りもしないで脇から見て居る。

ミリアム　『歸りたければ、歸るが善いわ、おまいのやうなものが、イスラエルの陣中に居るから、色々な誤解が起るのだよ』

暫時沈默。外側には騷風の響頻りに聞こゆ。

ミリアム　『その代り、今度歸つたら、もう今度は此家には這入つて貰は無いから、さう思つておいで。此前におまへが家を出た時に、もうよう歸つて來ないのかと思つて居たら、またお父さんに連れられてやつて來て、まるでお姫さまが何ぞのやうに豪ら相な顏をして、人を見下げる。ミデアンの犬つころは、もう少し頭を低くして居るものだよ』

また、少しの間、沈默

ミリアム『歸つたら、お父さんに、そう云ふがいゝわ、小姑のミリアムが六ケ敷くてとても辛抱が出來ないつて。あんたのことだから、私の惡口は一生懸命に捲したてることだらう――自分の惡いことは棚にあげておいて。おまいが居るばかりに、モーセだつて、どれだけ迷惑したか、知れやしないよ。第一イスラエルの若い者が、弟の云ふことを聞か無いぢやないかね。いくらミデアン人と一緒になつてはいかぬと云つたところで、御大將が、おまへのようなものを連れてゐては。イスラエルに女が不足して居るわけぢやあるまいし、モーセの嫁であれば、いくらでも來てくれる人はあるのだから、何にも、ものずきに、どこの馬の骨かわからぬやうなものを引き入れて、血統の正しいレビ家の血をよごさ無くても善いのよ。』

チツポラはミリアムの罵倒に對して何等の返答もせずにゐたが、あまりの急迫に堪え兼ねて荷物も其儘捨てゝ置いて泣咽び乍ら次の部屋まで逃げ込む。

ミリアム『ミデアンの女は、これだから仕方が無いと云ふのだ――ほんとに、だらしの無い』

そう云ひ乍ら、麻繩や、布切を片付ける。隣の室から、チツポラのすゝり泣きがきこえる。

チツポラ(幕の蔭より)『どうか御勘辨下さい。萬事私が惡う御座りましたから。』

そう云つて、エレザエルを負つて、幕蔭から飛び出て來て、幕舍の入口の方に飛び出で行かうとする。

ミリアム『一寸と、チツポラ、あなたは、この遅いのに、子供を負ふて何處へ行くの?』

チツポラ『歸りますの?』

ミリアム『何處へ』

チツポラ『父の所へ』

ミリアム『子供はどうするの』

チツポラ『一緒に連れて行くのです』

ミリアム『いけません。子供は置いて行つて下さい、男子は、イスラエルの寶です。子供を連れて出ることは出來ません――子供は私が育てます。』

ミリアムは、チツポラに近づいて行つて子供を受取らんとする。

チツポラ『あなたは、この兒を私から奪ひなさるのですか？ 之は妾の子です。私はこの子が成人するのを樂しみに、今日までお宅に辛抱してゐたのです。この子を取られたら、私は生きて居る甲斐は無いのです。』

そう云つて、チツポラは戸口の處で泣き伏す。

ミリアム『みつともない、犬か豚のやうに、そんな處で泣くものではないよ。チツポラ、あなたもう少し、お愼みなさい。うちにお這入りなさい。』

チツポラ『私は、家を出ますから、どうか、この子だけ連れて出ることをお許し下さい。上の子はもうあんなに成人しましたから、イスラエルに置いて行つても心配はありませんが、この子はまだ乳が入りますから、どうか、連れて行かして下さい。大きくなつたら乾度イスラエルの御奉公に寄越しますから。』

ミリアム『おまいは、その子を連れて出ることを、モーセに相談したかい。』

チツポラ『いゝえ』

ミリアム『おまいは、亭主に相談もしないで、そんな量見がよくも出るねえ……その子供をお越しと云へば、お越し、

その子は私が育てるから、おまいの亭主だつて赤ン坊の時は、私がエヂプトのお姫さんから頼まれて育て上げたのだよ。おまへは、私がよく子供を育て無いと思ふて居るのかい。』

チツポラ　『いゝえ』

ミリアム　『それぢや、その子供をお越し……おまへが産んでも、内で産れたら、うちの子ぢや』

チツポラいや〳〵背中から赤ン坊を降して、泣き乍ら、それをミリアムの手に渡す。ミリアムそれを受け取る。子供は大聲にて泣き叫ぶ。チツポラそこに打倒れて泣く。

ミリアム　『これもイスラエルに、雜婚禁止令と云ふやうな律法が無ければこんなに八釜敷云ふのぢやないが、イスラエルの風儀が亂れて仕方が無いものだから、その爲めには品行の惡いミデアン人の娘等と一緒になることを禁止したものだからな、御本尊のモーセがおまへのやうなものと一緒になつて居ては、反つて若い者の手本にならないからな。無理のやうに見えるけれども、イスラエルのことを思ふて、おまへに云ふて居るのだよ。』

そこへアロン入り來る。

アロン　『ミリアム、チツポラはなぜ泣いて居るの？』

ミリアム　『また歸ると云つて荷物の仕度をして子供を連れ出て行くものだからね。子供だけはおいて行つてくれと云ふて居る所なのよ。バアルの娘はいくらいつてきかせても、事がわからぬから仕方が無いよ。』

アロン　『子供を連れて出て行きたければ、出て行かせば、善いぢやありませんか！』

ミリアム　『だつて、男の子は、イスラエルの寶だから、連れて出られると困るから云ふて居るのよ。』

アロン　『然し、この女にはいくらいつて聞かせても駄目だから、爲たいほうだいにさせるのが一番いゝのですよ……今

もピネハズの云ふて居るところを聞けば、これの（チッポラを指差して）弟がね、ゲルションを連れてさ、宵の口にカデシのバアル祭に行つて居たのだとよ。モーセは何をして居るやら薩張わからないね。一方では、獨一無二の神のことを說いて居るかと思へば、一方では、子供に、遊女の居るバアル神に參詣にやつたりするのだからね。上に立つものが、そうだから、いくら、あいつが八釜敷云つたところで駄目の筈だ。コラも、ドタンもみなあしこに寄つて協議をしてゐたのだとさ』

ミリアム『ほんとに、あきれるね。だから、こんな嫁には一刻も早く出てもらわぬと、此後どんな刑罰が下るかわからないよ。ねえ、アロン。モーセも、モーセだね、一方では雜婚禁止令を出しておいて、一方では、昔馴みとは云へ現在ミデアンの女を連れてゐるのだからね。あんな法律を出すのであつたら、先づ自分の妻を離別して、それからすれば善いのにね。』

アロン『それだからさ、シメオンの陣中では、サルの子のジムリの一件で、益々モーセに反抗の氣勢をあげて居るやうだ。』

ミリアム『私はちつとも、そのことは知らない。それはどうしたの?』

アロン『それは、この間、ホバブが云つてゐたぢやないか、ミデアンの首長ツルの子のコスビと云ふ娘と戀中に落ちた若いものが、シメオンの中にあると云つて。』

ミリアム『あゝ、そうそ。それなら思ひ出しました。』

アロン『それなんだ。その話が、今夜も幕屋の前で持ち上つてね、モーセが豪いこと攻撃せられて居たよ。然しモーセも現在ミデアン人の妻を持つて居るものだから、餘程辯解に困つて居るやうであつた。』

ミリアム　『そうだらうね。實際無理だわね。自分はミデアンの女を連れて居つて人にはカデシの市に近づいてはならぬと云ふのは。そんなことを云つたところで誰も聞く人は無いね。』

チッポラは立ち上つて出て行かんとする。

アロン　『チツポラ、おまへどこへ行くのかい？』

チツポラ　『家に歸りますの』

アロン　『家つて、おまへ、荒野の中を二百里も、三百里も、おまへ一人で歩けるかへ？』

チツポラ　「然し、お姉様が出て行けとお仰るから、出て參るのです」

アロン　『そんな量見で、いいのかい？　またモーセが歸つて來たら、八釜敷云ふぜ、おまいもう少し、大きな量見を持たなくてはいかないぢやないか、顔ばつかり美しいのが、能ではないぢやないか！　ちつと大將樣の奥樣のような氣になつて、しつかりせないかんぢやないか！』

チッポラ入口の柱に倚りかゝつて泣く。赤ン坊は大聲をあげて泣き叫ぶ。

ミリアム　『ほんとうに、その子は八釜敷い子ぢやな、（赤ン坊をすかして）よし、よし、よし、』（そう云ふて赤ン坊をゆすぶる）こんな厄介な赤ン坊を、私に打ちつけといて、それで、ようまア出て行く氣になつたもんじやなア』

チツポラ　『姉さん、あなたも、ほんとにもう少し見上げた方かと思つてゐたら蛇のような心を持つて居らつしやるのですね、いつ、私はその子を、あなたに、ぶちつけて出て行くと云いましたか……私はその子が可愛ければこそ、今日まで、いぢめられ抜いても、此處で辛抱してゐたのぢやありませんか？　今もその子を背負つて出て行くのを無理にあなたは、その子を、もぎとりなさつたのぢやありませんか！　そんな邪慳なことを云は無いで下さい。そんなに、

私が憎ければいつそ、私を殺して下さい。』

ミリアム　『殺すつていついつたか？』

アロン　『殺せなど云ふものぢやないよチツポラ。おまいは氣でも振れて居るのぢやないのか？』

チツポラ　『氣なぞ振れて居るものですか、私は正氣です。然し、私は此儘ではとても歸られませんから、死ぬのなら、荒野の中で獅子に食はれて死んで了ふか、あなたがたの手で殺された方が、親に云ひわけがたつのです。』

チツポラ、柱の根元に泣き伏す

そこへ、モーセ羊を飼ふ杖を持つて入場、入口に倒れて居る妻に氣がつかず。

モーセ　（アロンに向ひ）『コラの連中はやつて來なかつたか？』

アロン　『イヽや……また、ゴダ／＼して居るのかい？』

モーセ　『あの連中はどうしてもわしを今夜中にやつつけるのぢやと云ふて居るそうな』

アロン　『然し怒るのも無理は無い』

ミリアム　『だつて、モーセ、おまいも悪いところがあるから、向ふでも怒るのだよ』

アロン　（モーセに向ひ）『おまへがあまり短氣だからいつでも、かうなるのだよ。』

モーセは天を仰ぎ、二人の云ふ事を一々きいて、深く考え込んで居る

アロン　『アビユウとナダブが焼け死んだ時でもそう思つたよ。もう少し、お前が早く、あれ等に注意してやつてくれてゐたら、あんなにならなくて、善かつたにとなア、

なア、ミリアム、(ミリアムに向つて)若いものだから、少し位のしくじりは見逃してくれ無ければなア。マナの集めやうが多いと云つては、罰せられる神の霊屋の火を消したと云つては罰せられる。そんな狭い考へで、どうして仕事が一緒に出來るものか、何でも、自分の考へばかり通さうとしてもそれは無理だよ。世の中は一人で持てるものでは無いのだから、そこは人の缺點も多少、見逃してやらないと、凡てが自分の思つた通り都合よく行くもので無いよ。(少し考へてゐて)今度の事件だつてさうだよ。自分がミデアンの女を妻として連れて居て、人にはミデアンの女の所に通ふなと云つたところで無理な話ではないか！ コラの子等が怒るのはあたりまへぢやないか！』

ミリアム『だから、私がいつも云つてゐる通り、チッポラは離縁して、イスラエルの若い血筋のものをもらひなさいと云ふてゐたのに。今になつて、私の云ふことが、わかつて來たと云ふことだ。』

モーセは、下に向いて、深く考へ込んで居る。何事も云はず厳粛に沈默してゐる。

アロン『コラの子等の云ふのも理屈があるよ、進軍してもつまらぬから、エドムを廻つて、一度エヂオンギベルまで引返して、モアブの方から、カナンに這入つてくれと云ふのも理屈の無いことではないよ。その方が多人數の犠牲を拂はなくて善いではないか…… そら、卑怯だと云へば、卑怯だよ。彼等の中に、わざ／＼恐ろしく、虚偽の報告をして來て居ることも事實であらう。然しヨシュアや、カレブの云ふことだけを信じてシマバテや、シャンマの云ふことを全々信じないと云ふのも間違つてゐるよ。(まだ暫時沈默あり)おまいのやうな專制的なやりかたでは、味方に內側揉めばかり作つて、結局は敵に乘ぜられることになるのだ。今夜のしうちなどでも、わしは反對だ。何にも、ダタンやアビラムの陣屋をみな燒き拂はなくても善いぢやないか！ そら、天火が落ちて來て燒けたのだから、おまへに責任が無いと云へば責任が無いやうなものだが、おまへが一々天の神様に、お祈するから、さうなつてくるので、おまへの

申しやうで、あいつ等を助けやうと思へば助かるものぢやないか！　非道いよ、あまり無下性なやりかただ。みんなが、おまへを怖がるのは、あたりまへだよ。實際、わたしもおまへが怖いもの。おれ達は一日として、安心しておまへについてゆくことは出來やしない。いつどんなに、おまへが怒つて、非道いめに會はされたか知れ無いのだから、いつでもビク〳〵して居る。それで、心から底からおまへに心服して仕事をするのでは無くて、おそろしいから、怖いからしやうことになしに、神罰のたゝりが恐ろしさに、おまへの云ふ通りになつて居るのだ。然しなんでも、コラの組では、今度はおまへの遣り方を根本的に換へてもらうと云ふて居るそうなから、おまへも、よく考へて、イスラエルの爲めを思ふて、少しやりかたを換へなきやいかないだらう』

ミリアム　『ほんとに、おまへも少し考へ直さなきやいかないよ。自分だけが高慢で居て、それで世の中は治まるものぢやないのだよ』

モーセ　(天を仰いで人の顔をみずに)『私は、別に、高慢でもなんでもない。神の道が、自ら進んで行くのだ。そして、神の道に立ち塞がるものが、常に亡びるのだ』

ミリアム　『そんなことが、よく云へるぞ！　それぢやアロンの息子のアビユウや、ナダブは、神の道に立ち塞がつたものかい？』

モーセ　『そうなんですよ、アビユウや、ナダブが清浄でありさへすれば、何も神にうたれはしませんよ。凡て清浄を缺いだ人間は神の國には這入れないのです。』

ミリアム　『一度や、二度、遊女通いしたから、清浄を缺いたなど云ふのであれば、イスラエルの族で、神の國に這入れるものは、誰れも無いね』

モーセ『そうです、イスラエルの古き人々は誰れも約束の土地には這入ることは出來ませぬ。彼等は、みな荒野で死なねばならぬ運命を持つて居ります。彼等はエヂプトの不潔と貪慾に穢れて居りますから、決して、カナンに這入ることは出來ません！　彼等は、凡て荒野で死にます』

ミリアム『まア、怖ろしい！　あの云いやうわいな。それぢや、なぜ、わたしらを欺いて、こんな荒野で、うろつかすのです？　あなたは、餘程嘘付きだね。エホバの神まつりをすると云ふて、イスラエルを連れ出しておいて、もうかれこれ四年間と云ふものは、穀粒一粒だつて食べるのぢやなし、明日にでもカナンに這入れるかと、そればかりを樂しみにして居るのに、今になつて、イスラエルの古い人々は、もうカナンに這入れぬなど、そんなことが、よくも、よくも、云へたものぢやない。それぢや、モーセ、わたしも――こんなに、あなたのことを思ふて盡してあげた、わたしも、その約束の土地には這入れないのですか？』

モーセ『勿論です。凡て、エヂプトの穢れた文化を見て來たものは、荒野で死なねばなりませぬ。』

アロン『わしもか？』

モーセ『勿論あなたも！』

アロン『それは一體どう云ふ理由で？』

モーセ『不淨は神の國に通ることが許されないからです』

アロン『ぢや、わしも不淨だと云ふのかい！』

モーセ『そうです』

アロン『それぢや、おまへはどうだい』

モーセ默然として居る。

ミリアム『モーセは、よくもまア、あんなことが云へるものだねえ、これだけも盡してあげた私等に、約束の土地には這入れ無いつて、ドタンのやからが謀反をするのは、あたりまへだ。私でも、モーセの云ふのが憎たらしいもの、』

モーセ『その憎しみが、いかないのです』

ミリアム『だつて、わたしだつて、人間ぢやないか。憎い時には、憎いと云はなきや』

モーセ『その、憎しみの爲めに、あなたは、神の國に這入れないのです。神の國に這入れるものは凡て、エヂプトの偶像と、不淨と、バロの壓制を知らない、荒野をよく走る若者ばかりです。凡て若き血でなければ、新らしい國を繼ぐことは出來ませぬ。神の國を繼ぐものは、憎惡と利己心だけでは繼げませぬ。』

アロン『それぢや、おれも駄目なのかなア』(アロン悲しむ)

ミリアム『ぢや、おまへも、神の國には這入れ無いよ、チッポラのやうな邪慳な女のつれやいぢやないかい。神の國に這入れたらどうかして居るよ。おまへが神の國に這入れて、わたしらが、荒野で骨を晒すのであれば、エホバの神はどうかしていらしやるよ。(語氣を改めて)それはそうと、モーセ、おまへのお嫁さんの、チッポラは、こんなに私に赤ン坊を打ちつけておいて、おまへに案内もせずに、此家を出て行かうとして居るのだよ。ちつと、云ふてきかして貰はな困るよ、あの女は、人を眼下に見て、おうへいで仕方がないよ。』

モーセ靜かに立ち上つてエレザエルをミリアムの手から受取り、入口の所にて、顔をそむけて坐つて居るチッポラの膝に運ぶ。

モーセ『この子等が大きくなつた時にイスラエルは蜜と乳の流るゝ地に這入つてゐるであらう。』

ミリアム『氣長いことを云ふて居ること』

アロン『モーセ、おまへの子供にも氣をつけなくちやいけないよ、ホパブに連れられて、今夜はカデシのバアル祭に行つたとか、ピネハズが云ふて居たぜ。あそこには遊女が澤山居ると云ふぢやないかい。また、アビユウや、ナダブのやうに神樣に罰せられるよ。』

モーセ『さうですか、よく、申しきかせます』

ミリアム『おまへが、いつでも、そんなに素直に人の忠告をきくのであれば、イスラエルに騷動は起らないのだがねえ』

モーセ（ミリアムに向い）『この子をもう寢させておやり、そしておまへも、もうおやすみ！』

チツポラ『はい。然し、ゲルションはどうしたのでせうね。遲いですね』

モーセ『いゝよ、その中に歸つてくるよ。あなたはお休みなさい。』

——チツポラは子を抱へて次の間へ靜かに退場

ミリアム『私も寢やうと思ふけれども、コラや、ドタンの一味が今日もせめてくるかと思つて心配でならない。』

モーセ『心配は御無用です。どうかおやすみ下さい。』

ミリアム『ほんとに、心配はいらないかい。』

モーセ『ほんとに、心配は御無用です。』

ミリアム（モーセを嘲弄する調子で）『それぢや、休ませて貰らかね、神の國に這入れなければ、寢床の中でエヂプトの夢でも見ませうかな？』

ミリアム、退場

アロン　（ひとりごとのやうに）『わしは、もう一度、幕屋に行つて様子を見てかう、また何事か起つて居るかも知れぬ。』

アロン、入口より退場

アロンの退場後、モーセはひとり靜かに祈りの様子にて、跪き祈つて居る。そこへユダの諸侯の中反抗者に加擔するエリツル、血相をかえて、劍を携へ、蛩悟あるものゝ如き姿にて入場、入口の外側に大勢の足音する。そして口々に喋から舞臺に姿をみせず天幕の外側でモーセを罵つて居る

A　『モーセの馬鹿野郎』

B　『奴畜生？』

C　『やツつけて了へ！』

D　『殺せ！　殺せ！』

少し間が有つて、

E　『パンが食いたいなア！』

天幕の外側のもの大勢にて、ドツと笑ふ

F　『引きずり出せ！　引きずり出せ！』

G　『モーセの嘘付き！』

シルミエル一人入口に現れ、

エリズル　『居る、居る！　みな這入つて來い、這入つて來い。』

シルミエル、ナション、ナタニエルの三人も同じく劍を携へて入場

外側のものは、內側の逆行に注意してゐると見えて靜かになる。

エリヅル『こら、モーセ、貴樣はよくも、俺達の一味の者を擲き殺したな、さ、その理由を云へ、云は無ければ、今日は貴樣の命を貰ひたいのぢや』

モーセ靜かに椅子より立ち上り落付いた調子にて

モーセ『わしの命が欲しいか、欲しければ、いくらでもやるが……レビとルペンの族(やから)の陣屋の燒けたことに就ては、神樣が御承知のことであつて俺の知つたことでは無い』

シルミエル『もう一度云つてみろ——おまへはいつも神樣と云ふが、その神樣と云ふのは一體どんな神樣だい、俺にはちつとも、合點がゆかねえのだ』

モーセ『合點が行かない筈だ、おまひ達の心が腐つて居るから』

シルミエル『俺の心が腐つて居る？ よく云つたな、俺の心が腐つて居るなら、おまへの心はひねけて居ら、こら、エテロの娘婿！貴樣は、俺達をよくもまあ、こんな沙漠に引張り出しやがつて、『非道い目に合はせやがるなア貴樣のやうな嘔吐は世界中どこを探したつてありやしねえ』

モーセ『シルミエル、少し口を愼め！』

シルミエル『何が、口を愼むんだい？ 貴樣こそ、口が過ぎるつてゆふもんだ、豪らくもないのに豪らさうに云ふのは……貴樣は、一體誰に立てられて、そんなに一人で、豪らさうにして居るんだい。何か、おまいはそれでも、人から王樣にでもして貰つた積りで居るのかい？ 一人で威張りくさつて！』

（外側より）『モーセの馬鹿野郎』

モーセ『アブラハム、イサク、ヤコブの神が、わしを召し給ふたのだ、それに何か不服があるか。』

シルミエル『それに不服があると云ふのぢや無いが、おまいが威張りくさるのに不服なのだ――一體何故、おまいは、イスラエルの大事の生命を二百五十人から燒き殺したのだ？』

モーセ『わしが、殺したと思へば大きな間違ひだ、おまへたちが、イスラエルの士氣を阻喪させ、謀反を企て、神に反抗するから。神自らが審き給ふたのだ。わしには、直接關係は無いことだ。』

ナタニエル『嘘をつけ！』

エリヅル（ナタニエルと殆ど同時に）『おまへが呪つたから、あゝなつたぢやないか』

シルミエル『おまいは、人を呪ふことばかりするのが、役目ぢやないか、今日まで、イスラエルで何百人何千人が、おまいの呪にかゝつて死んだか、知りやしねえ、おまいの生命を貰ふことは、イスラエルに對する反逆で無くして、イスラエルに對する報謝だぞ！

イスラエルは、おまいが居る間、一日として安心の出來る日はないのだ。それで、おまへの生命を貰ふか、それともおれたちの生命をとられるか、それを今日はきめたいと思つてきたのだ。』

外側の大勢の聲口口に『殺して了へ！　殺して了へ！』

モーセ『神の進み給ふ道に立ち塞がる者はみな呪はれる』

ナタニエル『馬鹿を云へ！』

シルミエル（前者と殆ど同時に）『何に？　もう一度云つてみろ！』

シルミエル、モーセにすり寄る

シルミエル　『私の道に立ち塞がるものと云ふのはお前のことだ！』

モーセは沈默のまゝ天を仰いで立つて居る。

ナタニエル　『また妙な、眞似をしやがる！　そりや何の眞似だい？　また己達のことを神に告げて、呪ふて居るのか？　おい、モーセ。おまいに是非聞か無くちやならぬことがあるのだ。今日、おまへは、ミデアン人とイスラエル人とが一緒になつてはならぬと布れて廻らさせたが、あれは、ほんとかい？　ほんとなら、ほんとで、こちらにも量見があるのだ！』

モーセ　『僞りはない！』

ナタニエル　『それぢや、何故、おまへはミデアンの女を妻に連れて居るのだ。』

モーセ　『その爲めにイスラエルの進軍にさゝわりでも有つたか？』

ナタニエル　『進軍にさゝわりが無ければ、善いのか？』

モーセ　『おまへ達イスラエルの諸侯等は、わざ〳〵士氣を阻喪する爲めに、ミデアンの遊女等に近づいて居るではないのか！』

ナタニエル　ぢや、遊女がいかないと云ふのか？』

モーセ　『おまい達の仲間にはミデアンの人妻と姦淫したものがあるでは無いか！』

ナタニエル　『ぢや乙女であれば善いのか？』

モーセ　『凡て、神の進み給ふ淸き途を穢すものは呪はれるのだ。』

ナタニエル『乙女の肌に、清くは無いのか：』

モーセ『偶像を植えつけ、貪婪を教へ、イスラエルの血を汚す異邦への血は呪はる可きだ！』

ナタニエル（大きな聲で笑ひ）「ハ、ハ、ハ、ハ、ハア。よくもまア、そんな白ばつくれた、ことが云へたものぢやなア。チツポラは、イスラエルの血を汚さ無いのか？ そんな狭い量見で世間が渡れるか？ もう少し、大きな度胸を持て血を汚すのはおまへ達で無いか、おまへの子のゲエルションは遊女と關係をして居ることをおまへは知らないのか！』

ナシヨン『それでなにか？ 此際ミデアンの女達と關係したものはまた神の罰でも受けるのか？』

ナタニエル『また、天火にでも燒かれるのか？』

モーセ『凡て、神の進路に立ち塞がるものは、火の蛇の呪を受ける！』

ナシヨン『フム、何を云つていやがるんだい！ 火の蛇？ そんなことでイスラエルがおまへの云ふことを聞くと思つて居るのか？』

ナタニエル『それぢや、おまいの息子も、火の蛇に噛ますだらうな！』

モーセ『神の裁判には偏頗は無い！』

ナタニエル『よし、覺えて居れ！』

ナシヨン『それぢや、おまいの妻はどうするのぢや』

モーセ『國元に歸したら善いだらう？』

シルミエル『おまへはあれを此間、呼んだばかりぢやないかい。』

モーセ『神の進路に防げになるなら何時如何なる時でも處分する。』

エリヅル　『然しモーセ、おまへに聞きたいことがあるのだ。おまへはエヂプトを出る時に、神は晝は雲の柱となり夜は火の柱となつて導いて下さるから荒野を通るに案内者はいらないと我等に斷言したが、近頃おまへはおまへの妻君の弟のホバブと云ふものを、道案内に連れて來たがあれは一體どう云ふ理由ぢや。もう雲の柱は信用が出來ないのか！

シルミエル　「嘘吐き奴が」

外側の民衆は『嘘吐、モーセの嘘吐、モーセの馬鹿野郎』と絶叫す

ナシヨン　『返事をしてみろ』

モーセ　『神のみ旨は變らない！神は雲の中にも人の心の中にも働き給ふのだ』

シルミエル　『なに？』

シルミエルは劍を振りあげんと努力したが、どう云ふ理由か腕が持ち上らない。

シルミエル　『おれはもう承知が出來ないのだ。この嘘吐め！それ、ナシヨンやツつけて了へ！』

四人のもの劍をあげて切らんとする。

大勢のもの入口よりのぞく。然しモーセが恐ろしいと見えてやう這入らない。

モーセ杖をあげて大聲にて、

モーセ　『待て！（四人のもの都度膽を抜かれる）おまへ達は何を求めて居るのか？俺の命か？それとも權力か？俺の生命だけ取つてそれで善いのならば今すぐやつても善いが、もしわしがおまへ達の上に政治することが惡いと云ふので不平であるならば、明日幕屋に行つて、神に公平なる裁判をして戴けば善いぢやないか？』

四人のものは劍を振りあげた儘直立して樹木のやうになつて居る。

モーセ『そして、神の籤のあたつたものに、イスラエルの政權を委ねたらいゝぢやないか！

ナシヨン『またおまへはその籤をごまかす積りだらう？』

ナタニエル『俺達はそんなにぐず〳〵してをれない。今夜お前の命が欲しいのだ。』

ナタニエル先づ劍を打下す。

モーセ身をかわす

その時近くの所に轟然大爆發の音起る。

群衆　逃げ出す足音がする。

入口の群衆も姿を隱す。

モーセの幕屋裂ひ、その後地震と地鳴りあり四人のものは辟易し刀を杖につき相互の顔をじろ〳〵と見合す

暫時沈默拔刀せるピネハズ飛び込み來る。

ピネハズ『申上げます、唯今、ドタン、コラ、アビラム、オンの四人のものが、幕屋でアロンと云ひ爭ふて居りましたが、彼等は神を穢した爲めに幕屋の前の地が裂けて四人のものを呑み亡ぼしました。』

四人の諸侯色を換へ、刀を杖にしてピネハズを凝視する

ナタニエル『なに？』

（齒を喰ひしばつてピネハズを睨みつける。）

モーセ「よろしい。その外別に變つたことは無かつたか？」

ピネハズ『別に變つたことはありません。』

モーセ　（エリヅルの方に向いて）『それでは今夜の中にイスラエルの十二の侯伯(きみ)たちの一人に一本づゝ杖を持つて幕屋に来るが善い。そして今夜の中に神が杖に花を咲かせ給ふたものに凡ての政治を委ねることにせう。』

若者ヨシュアとカレブ武装して抜刀した儘入場

ヨシュア　（モーセに向ひ）『唯今、コラとドタンを初め、アビラムもオンも神に逆ふ者共は地が裂けて、地に呑まれて了ひました。』

カレブ　『神の御威光の大きなのに驚きました』

他のものは沈黙して、立つて居る。或者は震へて居る。

ヨシュア　『総督！これらのものは刀を抜いて何かあなたにでも脅迫がましいことを云ふて来たので御座りますか？』

カレブ　『ほんとにおかしい奴らだなァ！』

ヨシュア　『おまいら、刀を以つてこんな処になにしに来たのだ！帰れ！帰れ！』

四人のものすご／＼と退場せんとする。

ナタニエル　『ぢや、明日の朝、幕屋に行つて待つて居りますよ』（四人退場）

ヨシュア　『あいつらは何をしでかすかわからない奴等だ！総督！私はこれから、イスラエルの陣中をもう一度巡視して参ります。カレブ、おまいも行かうか！』

カレブ　『よし……』

二人出口まで行き、ヨシュア、モーセを顧みて

ヨシュア　『総督御安心下さい、エフライムは少しも動揺して居りませんから、ヨセフの子孫は大丈夫です。ヨセフの

子等が動揺して居らなら以上は、いくらルペンやガドのやからが騒いだつて駄目です。凡て私がお引受します。奴等、何かなさんです！』

そう云つて男ましく退場

モーセ（ピネハズを顧み）『ピネハズ、おまへは宵の口に、カデシに行つて來たのだつたなア』

ピネハズ『はい』

モーセ『おまいは、ゲルションをそこで見なかつたか？』

ピネハズ『いゝえ』

モーセ『うちのゲルションが遊女と戯れて居たのを見たのはおまいではなかつたか？』

ピネハズ『いゝえ、違います。』

モーセ『然しおまへは、ホパブとゲルションがバアル祭りに行つたことだけは確かに見屆けたのだなア』

ピネハズ『はい、確かに見ました』

モーセ（獨言のやうに）『仕方の無い奴ぢやなア』

ピネハズ『然しあれは、ホパブが惡いのです。ゲルションは何の氣なしについて行つたのだと思ひます』

モーセ『そうか？おまへは、そう思ふか？』

ピネハズ『私は、宵の口に、バアルの宮へコラやドタンを探しに行つたのでしたが、殘つて居たものは、イガルと變な女二人だけでした。

モーセ『イガルはまだ、そこに居たか？』

ピネハズ『はい、居りました。』
モーセ『イガルは謀反に加はらなかつたのか？』
ピネハズ『いゝえあいつは、もう酒さへあれば、善いので、カナンから歸つて來て以來、あの後ずつと、たゞもう『カデシに行つて酒ばかりに浸つて居ります』
モーセ『そうか、困つたものだなア、そんな調子では神が、イスラエルをおせめなさるのも無理のないことだなア』
ピネハズ『實際、私が、神樣であれば、イスラエルの年寄の連中はみな亡ぼして了ひます。みんな仕方が無い奴ばかりですからなア』
モーセ『おまいもそう思ふか、若いものはどうだ？』
ピネハズ『若いものは、大丈夫です。若いものは何を云ふても元氣です。みなカナンの土地に進軍すると申して居ります。エヂプトに歸りたいなど、云ふものは、一人もありやしません。
モーセ『そうか、矢張り、若いもので無くては駄目だなア。
ピネハズ『全く…．（幕屋の外側の足音に氣がつき入口を凝視する、）…．若いもので無くては駄目で御座ります。』

コスビとシムリそこを通りすぎる

モーセ『あれは誰だ…．あのミデアンの女を連れて今入口を過ぎつた若者は？』
ピネハズ『あれが、總督、シメオンのサルの子のジムリです』

ピネハズ入口まで走り出て二人の行衛に注意して

ピネハズ『あいつ…．イスラエルの陣中に公然女を連れ込んで居やがるなア！（ひとりごとのやうに呟く）總督、私は一寸

と制裁を加へて參ります』

ピネハズ憤しく退場

モーセは椅子により物思ひに沈んで居る。奥の間から引き幕をあけてチツポラが覗く

誰れも居らぬことを見て、チツポラは妖婉なる姿にて現れる、退場したる時とは衣服が變つて居る。更に美しく見える。

チツポラは、モーセの足元に走り寄り跪いて膝の上に兩手をのべ、モーセを見上げ、

チツポラ（泣いて）『ねえ、さつきからの事を私はすつくり、向ふで聞いてゐたのです。あなたは、此間來た許りの、私をまだお返しになるお積りなのですか？それぢや……あんまりだわ……エレザエルを孕んで、里に追ひ返され、二年も泣き通した私が、久方振りに、あなたのお顔を拜む事が出來たかと思ふと、早やまた……つき返されるのですか？…あなたは、私を、不憫と、お思ひには、なりませぬか？（チツポラはモーセの膝の中に顔を埋めて、顔をやう上げ無い、暫時沈默）

モーセも煩悶の體で、眼を閉じて考へ込んで居る。

チツポラ（なきじやくりして）『今度、かえ……かえらねば、ならぬのであれば……わたくしは、シンの荒野でのたれ死にしたが善いと思ひます。わたくしは、そら、身分は、ミデアン人でありましても、心は全くイスラエルなのです。わたくしは、歸りませんよ……わ、た、わたくしは、歸りません、殺されても歸りません、わたくしは、あなたを離れて行く處はありやーません、わたくしは、ミリアムやアロンに……（激しく泣く）いくらいぢめられても、此家は動きませぬ、入口の柱にしがみついても歸ら無いつもりです。さつき、わたくしが、家出をすると云つたことをお許し下さい。わたくしは、永遠に、永遠に、此家を出ないのです。屍となつて、あなたの手で運ばれ出されるまで私は此家は出ませぬ。あなたは…それ、でも、私を離別するつもりですか？云ふて下さい…一言、何とか云ふて下さい。きデ

アンの女と一緒になつてはならぬと云ふ法律をあなたが、お出しになつたことを私はよく知つて居ります。然し、それだからと云つてあなたは、私までも離別なさるのですか？その、あなたに戀ひ慣れて居る、チッポラを？

暫時沈默、外側には嵐の聲と何者か天よりパタ〳〵と落つる音がする。モーセも泣いて居る。何にも答へない。

チッポラ『ね、あなた一言、なんとか云ふて下さい。十八年前、あなたがミデアンの荒野に迷ひ込んで來たその日から、今日に至るまでの間一日となく、思ひつめてつくして來た私を、よもや、今になつて、棄てるとは仰りますまいねえ？（まだ沈默）何とか一言だけ、御返事して下さいませんか！』

モーセ『わしは……おまへを愛して居る？』

チッポラ『そうですか？そうですか？そんなら私は此儘死んでもかまわ無い。（チッポラ激して泣く）

天幕の外側に足音とゲルションの聲がする、それを聞いて、チッポラ立ち上つて次の部屋に退場

ゲルション（天幕の外側にてひとりごとを云ふ）『まア澤山、鶉が落ちて居ること！』

ゲルション勇しく入口に現れ、鶉を二羽兩手にさげて入場、牧羊者の風裝ではあるが帶は五色の　に華美なものをメめ如何にも若々しい上品さがある

ゲルション（モーセをみてうれしさうに）『ねえ、お父樣、どうしたわけか、今夜の暴風に鶉が澤山落ちて參りましたのよまアみ惠ですねえ、一寸と、之を御覧下さい。みごとたものぢやありませんか？

（モーセは椅子のまゝ俯向いて、何にも返事をしない）

ゲルション（一間位の所まで近づいて行つて）お父樣、どうかなさいましたか？お父樣！』

モーセは靜かに、顏をあげて、ゲルションの顏を嚴肅にみる。ゲルションは震ひ上つて、顏を背向ける。

モーセ『ゲルション！』

暫時、沈默、天幕の外に人の歩く音がする。

モーセ『ゲルション！』

ゲルション『お父樣？』（泣き聲にて）

モーセ『おまへ何處に行つて居つた？』

ゲルション『カデシまで行つて居りました』

モーセ『たゞそこへだけか？』

ゲルション（聲を濁らせて）『はーーい』

モーセ『おまへは、バアル祭りに行つてゐたらう』

ゲルション『はい、それでね、お父樣、私は、あなたに是非聞いて頂きたいお願ひがあるのです。』

モーセ『それは何だ？』

ゲルション『お父樣誤解して頂いては困りますよ』

モーセ『それは、何だ？』

ゲルション『一人の女奴隷をお助け下さいませんか？』

モーセ『その女奴隷と云ふのは』

ゲルション『私が、そこから助けて來たので御座ります』

モーセ『そこからつて、何處からか？』

ゲルション『カデシからで、御座ります』

モーセ『カデシのバアルの宮からか？』

ゲルション『はい』

モーセ『それはバアルの遊女ぢや無いのか』

ゲルション『さうです、全く、さうです』

モーセ『そんな穢れたものを助けてどうするのだ？』

ゲルション『解放してやるので、御座ります！』

モーセ『解放する？』

ゲルション『さうです、お父様、イスラエル人が、エヂプトの奴隷の境遇から救はれたやうに、私はその女奴隷を救けてやりたいのです。その女奴隷は、バアルの神像を取り出して、こな微塵に毀した爲に、もう、カデシには歸れない、可哀相な女なのです。どうか助けてやつて下さい。』

モーセ『その女は今、何處に居るのだ？』

ゲルション『あしこに立つて居ります』（ゲルション入口の方を示す）

モーセ『それはミデアン人か？』

ゲルション『さうです』

モーセ『おまへは、その女と關係があるのか？』

ゲルション『はい。』（殆どきこえ無い位小さい聲にて）

チッポラ暗い蔭から姿を現し、二人を交る〲沈默の儘凝視する

モーセ　（驚愕の形にて）『ゲルション、おまへはいつその女と關係が出來たのだ？』

ゲルション『お父様、お願ですから、それを尋ねないで下さい。（チッポラを見て）お母様、どうか、お願ですから、その女奴隷を助けてやつて下さい。贖い金は僅か十六シケルです。それで、その女は自由になるのです。』

チッポラはモーセの後ろまで進み出て來て

チッポラ『ほんとに、その女は、バアルの宮の遊女かい』

ゲルション『はい。そうです』

チッポラ『おまへはいつそんなに墮落したのかい？』

ゲルション『お母様、私はちつとも墮落はして居りませぬ。私はたゞその遊女を救ふてやつただけです』

チッポラ『まアこの子は恐ろしい子だねえ、イスラエルの幕屋の中へ、バアルの遊女などを入れてどうする積りです？』

ゲルション『女奴隷の狀態から解放してやるのです。』

チッポラ『妙な解放もあつたものだね、遊女の解放など云ふことを、私は始めて聞いた。』

ゲルション『同じことぢやありませんか！イスラエルを救ひ給ふた神は、何故バアルの遊女を救へないのですか？』

チッポラ『そんな理屈は私にはわからないよ…然しこの子は、恐ろしい子だねえ』

ゲルション（煩悶と失望の體にて）お母さん、ぢやあなたは、その女奴隷を救つて下さらないのですか？』

チッポラ『そら、お父様に聞いてみな』

ゲルション『私は奴隷なら、イスラエルも、ミデアン人も區別は無いと思ふて助けて來たのです。』

チツポラ　『遊女も、普通の女奴隷の區別も無いと思つてか？』

ゲルション　『全く、そう云ふ考へで助けて來ました。（モーセに向ひ）お父樣、奴隷でもミデアンの奴隷であれば、あなたは救ふては下さらないのですか？そうなら、お父樣の奴隷解放と云ふのは偏寄つたものなのですね、』

モーセ　『おまへは、神を呪つてはなりませんよ』

ゲルション　『だつて、お父樣、女奴隷の遊女だつて、助けてやらなければ可哀相ぢやありませんか？私はお父樣の眞似をしただけなのです。お父樣の若い時に、エヂプトの壓制者を切り殺して一人のイスラエル人をお助けになつたこともあるぢやありませんか？私はお父樣からみれば、イスラエル人ですけれども、お母樣からみればミデアン人です。それでミデアンの奴隷も解放せねばならないのです。私はお父樣の子です。自由を愛する人の子なのです。』

チツポラ　『その女奴隷と云ふのは何處に居るの？』

ゲルション　『入口の外側に立つて居ります（ゲルションつか〳〵と入口まで出て、エリセバを呼び入れる）お母さん、この人です。』

モーセもチツポラも女に眼をそゝぐ。

チツポラ　『名は何と云ふの？』

エリセバ恥じらつて

エリセバ　『エリセバと申します』

チツポラ　『おまいは、カデシのものかい？』

エリセバ　『いゝえ、エヂオンギベルのもので御座ります。』

チッポラ『ではいつカデシに來たの』

エリセバ『十四の時にカデシに賣られて來たので御座います。』

チッポラ『そうかね、可哀相だね、お前の家は無いのかね。』

エリセバ『エチオンギベルに、家はありますが、長いこと歸りませぬから、どうなつて居るか、知りませぬ。』

ゲルション『お父樣、どうか、この子を贖つて下さい。』

モーセ『いかない！』（毅然として）

ゲルションは父の一言に默つて入口に泣き乍ら出て行くエリセバもそれについて出て行く二人退場

モーセは俯向いて考へ込む、チッポラはそれを見送り、軈て、入口に飛び出て

チッポラ（泣き聲にて）ゲルション……！ゲルション！あの子は早や何處へか行つて了つた！』（獨言のやうに云ふ）

ダーター・チェーンヂにて、舞臺面變る――

第二幕

第二場

時　バアル祭の翌日の早朝

所　イスラエルの神の幕屋の前

神の幕屋は亞麻製にて色の褪めたる五色のカンバス製のもの、しつくりした感じを與へるもの。その周圍に多くの天幕

が部落をなして葬られてある。

空は晴れて居て、太陽が段々幕屋の屋根を照す。そこに二三人の男女が蛇に噛れて倒れて、死んで居る。

幕があくと、十數人のものがモーセの來るのを待ち乍ら話をして居る。

アヒラ『昨夜は、鶉が落ちて來たりなどして、久し振りで齒の間に肉の片が、はさかるやうで結構で御座いますな。私の近所のものはみな喜んで居ります。』

エリアサフ『そら折々は鶉位落ちて來てくれなければ、干乾になつて了ひます。』

パギエル『然し、あの蛇にかまれたものは、あれはどうなることで御座りませうなア、あの儘で、死んで行くので御座りませうかなア』

エリアサフ『豪いことになりましたもので御座りますな一度に二千人も三千人も蛇に噛まれると云つたやうなことはよく／＼のことで無ければありませんなア』

アビタン『どうしたんで御座りませうな、何か罰でも當つたんで御座りませうかな』

エリアサフ『どうも、カデシに行つて遊女買をしたものはみな、どうも、やられて居る樣にみえますなア』

二三のもの笑ふ

パギエル『さうすると、どうも、神樣も、一概に惡口は云へませんな、ハハハハア』

アビタン『女は昔から蛇とは緣が御座りますからな』

アヒラ『甘いことを仰りますな。モーセも善い、知慧を出したもので御座りますなア、惡所通いをしたものを、蛇に噛ますと云ふのは』

アビタン『矢張り、モーセは何と云ふても、善い大將で御座りますな』

バギエル『然し、私の知つて居るものにバアルの遊女の所に行か無いものでも、隨分、蛇に噛れて居りますよ。』

アビタン『どんな人かな、もし？』

エリアサフ『斥候に行つたシマバテ、シヤンマ、イガル、之はみな今朝おかみさんが泣いて居りましたが、蛇に噛れたと見えますわい。』

アヒラ『そうすると、何ですなア、たゞ遊女買ひをしたものばかしでなしに、神樣を穢したものはみな、やられたので、御座りますなア』

アビタン『まア、そうすると我々は無難と云ふわけで御座りますなア、ハ、ハ、ハ、ハア』

アヒラ『然し、蛇に噛れたものは、すぐに死ぬやうで御座りますが、あれは直す工夫は無いもんで御座りましやうかなア

エリアサフ『サア、餘程毒が甚しいやうですから、一寸と、直す工夫と云ふのは、御座りますまいなア』

アビタン『やア、來よる、來よる、あしこにも蛇に噛まれたものが、こちらに向いて來る。餘程、傷口がいたむとみえますな』

アヒラ『あゝ倒れちやつたよ。あいつは、もう助からんぜえ』

幕屋の裏より呻きの聲が三つも四つも聞こゆる。

バギエル『モーセが來た、モーセが來た！』

モーセはエリヅル、ナション、ナタニエルの諸侯、斥候長ヨシュアを連れて登場、みな默禮をする。モーセは沈默のまゝ幕舎の入口まで進み、周圍の人々を見廻す。

アロン幕屋の中より美しき祭司長の衣裳をつけて、モーセを出迎へに來る。

モーセ『外のものはどうしたか？』

アビタン『シメオンのシルミエルは用事がありまして、よう參りませぬ。ダンのブツキは嚙まれまして、不參いたして居ります。然し我等は凡てを代表いたして居りますから、之でみな揃いまして御座います。』

ヨシュアを除いて凡ての人神の幕屋に這入る

ヨシュアは入口に番をして居る如く周圍を注意してゐる。幕屋の右手より、ピネハズ槍を持つて登場

ピネハズ『總督は？』

ヨシュア『幕屋の中だ』

ピネハズ『族長たちも、中か？』

ヨシュア『そうだ。君は、昨夜、あれからどうした。』

ピネハズ『ジムリをやつて了つた』（槍をすごいて殺したと云ふ眞似をする）

ヨシュア『そら、善いことをした！　外のものがもう、彼を見習はなくて善いよ。』

そこへ、カレブ武裝の儘大急ぎにて駈け來る。

カレブ『總督は？』

ヨシュア『幕屋の中だ？』

カレブ『カデシに近い所に駐屯してゐる。シメオンのやからは、仕方が無いよ。ジムリの事件から引き續いて、シルミエルが怒り出して、騒いで居るよ。　ピネハズに向ひ）　一部のものはおまいを殺すと云つて計劃して居たぜ』

ピネハズ『あいつらが怖くて、綱紀肅正が出來るものか』

カレブ『然し見て居つてみろ、あの連中は今日明日の中に何か騒動を起すから……今日もシルミエルは此處へは來なかつたらう。』

ヨシュア『あの連中は水が無いと云ふのが、此間うちからの不平であつたぢやないか！』

カレブ『それだつて！水の問題が解決せなければ、シメオンは靜かにならないのだ。』

ピネハズ『なにエフライムの方に汲みに來れば、善いぢやないか！あいつら不精なものだから、汲みに來ないで、ブツブツ云ふて居るのだ。あいつらほんとに、仕様事のない奴等だ！』

カレブ『然し、エフライムまで汲みに行くと云つても、かれこれ十四五町もあるからなア。不平を云ふことも、無理でないよ。』

ヨシュア『そのエフライムが壯丁ばかしで四萬人からあるのだから、井戸の一本や二本で足りる筈はなしなア』

カレブ『それで俺は總督に云ふて、今日は是非シメオンの水の問題を解決して貰ひたいと思つてやつて來たのだ。たゞ彼等を怒らすだけが能ぢやないからなア』

モーセ、アロンを初め、九人の諸侯手に手に長き杖を持ち再び幕屋より出で來る。ヨシュア、カレブ、ピネハズの三人敬禮する。アロンは手に巴旦杏の花の咲いた杖を持つてゐる。

モーセ『之で、凡ての人は不服は無いか？』

ナション『不服はありませぬ。』

モーセ『エリヅル、おまへも不服は無いね』

エリヅル『恐れ入りまして御座ります』

アロン『みな、心を一つにしてたア、敵の前に仲間争ひなどしないやうにせねばいかない』

諸侯一々輕く、お辭儀をする。

ナタニエル『この事を、早速、組のものに報告させて頂きます』

エリヅル『それでは、之で失禮させて頂きます』

エリヅル妙な挨拶をする。

九人の諸侯靜かに退場。

アロンとモーセ、幕屋に入らんとするのをみて、

ヨシュア『カレブが、一寸とお願が御座ります』

(二人は立ち止り、ヨシュアとカレブを見る)

モーセ(カレブに向ひ)『カレブ、何だ?』

カレブ『シメオンがあまり騷いで居りますので、是非、今日シメオンの問題を解決して頂きたいと思つて參りました。』

モーセ『それは、どう云ふことだ』

カレブ『サルの子ジムリの事に就ては、もうお聞き及びですか知ら?』

モーセ『いゝや、まだ聞いて居らぬ。どうしたか?』

カレブ『ピネハズ、おまへ報告申上げたが、善いだらう!』

(モーセに向ひ)

ピネハズ『總督、私は、昨夜、あれからジムリの跡を追かけて行つて、とうとう、ジムリをやつて了つたので御座ります』（又槍をすごく眞似をする。）

モーセ『可哀相なことをしたなア』

ピネハズ、顔を俯伏にする。

カレブ『そのことの爲めにシメオンは今朝から餘程動揺して居るので御座ります。』

モーセ『そうだらうなア』

ヨシユア（ピネハズに向ひ）『何處で殺したのか？』

ピネハズ『二人の寢床までついて行つて串ざしにしたのです』

ヨシユア『そら少し殘酷だつたなア』

瞬間的沈默、その間に毒蛇に嚙まれたものの呻吟聞こゆ

モーセ（カレブに向ひ）『それでどうすると云ふのだ』

カレブ『その動揺を抑へるにつきましては、彼等が平生から訴へて來て居る、水のことを先づ解決してやらなければ、靜まりそうも無いので御座ります。』

頻りに呻きの聲が聞こゑる。

モーセ（ヨシユアに向い）『毒蛇に嚙まれるものは、増加しつゝあるか？』

ヨシユア『はい、あの通り、幕屋の周圍にゝ、幾十人と無く呻いて居ります。』

モーセ『實に、憂ふ可き現象だなア――イスラエルの腐敗が此處まで及んで居るとはわしも今まで氣がつかなかつ

た。（ヨシュアに向い）これで、イスラエルは、少しは覚醒するだらうか？』

ヨシュア『大に覚醒すると思ひます。少なくもジムリの場合は、イスラエルの爲めには、善い教訓だと思います、兎角の批評はあるにしましても』

カレブ『シメオンでは、ジムリとコスビが殺されてから、あのあたりの惡い流行病がピッタリ止つたと云ふて居ります。然し、今度はまた蛇に弱つて居ります。』

相變らず呻きが聞こえる。

幕屋の兩側には、蛇の毒に嚙まれたものが、這ひ乍らやつて來て、その數が殖える。彼等は悶え乍ら、幕屋の方に向いて拜むやうにする。神の慈悲によつて癒やされんとして居るのである。

アロン（幕屋の横側をみて）『益々殖えるやうだ』

カレブ『それで、總督、今日は、シメオンの水の問題をどうか、解決してやつて頂きたいと思ひます。』

モーセ（頷き）『ウム、今日はどうかせう。』

モーセの妻、チッポラ登場狂亂の姿にてモーセの傍まで飛び來る。

チッポラを見て、アロン幕屋の中に這入る。

チッポラ（泣き乍ら）『あなた、ゲ、ゲ、ゲエルションが、とうとう。蛇に嚙れて、うちへ連れて來られました。』

カレブ（眼を丸くして）『え？』

ヨシュア（驚いて）『ゲルションまでが？』

ピネハズ『そいつは、弱つたなア！』

モーセは沈默したまゝ杖を持つて立つて居る。

チツポラ卒倒せんとする

それをカレブが支えて

カレブ『奥様、しつかり！』

ヨシユアも手助けをしてチツポラを支え、

ヨシユア『しつかりなさらなくちや、いきませんよ』

ピネハズ『土の上だけれども、寢させてあげた方が善いだらう』

カレブとヨシユア。チツポラを靜かに、土の上に横たえる。カレブとヨシユアとピネハズの三人はチツポラの枕元に跪いて看護して居る。

カレブ『奥様、もう大丈夫ですか？』

先きから、幕屋の兩側に居た、蛇に嚙まれた人々は、段々正面の方に廻り、折重なつて、十數名のもの、モーセに向つて合掌して、癒されんことを、嘆願する。

その間、モーセはあまり動かないで沈默、たゞ周圍の事情によく注意をして居る。

蛇に嚙れた者甲（身體を半分支え、モーセに向いて）『あゝ、苦しい、苦しい。總——總督、總督』（こゝまで云ふて、倒れて了ふ）

カレブ『奥様、もう大丈夫ですか？』

チツポラ『も——もう——大——丈夫です。』

ヨシユア『氣をおたしかに！』

チツポラ『水を——くだ——水をください』

ヨシユア（カレブに向い）『此處には水が無いのだつたなア。（ピネハズに向い）何處か、此近處に行つて、水をもらつて來い』

ピネハズ『よつしや！』（ピネハズ、大急ぎで退場）

蛇に嚙まれた者乙、（モーセを見上げ、土上に横たはつたまゝ兩手を伸ばし、モーセを呼び）『わたくしは——之れ、——之れから——改心いたしますから、どうか、癒して、癒して下さい。』そう云ふて、腕をパッタリと土の上に倒す、

或者は、痛に悶えて轉がり廻る。モーセの下まで轉げて來て、モーセ之を避ける。

チツポラ、僅かに起き上つて

チツポラ『あの子を——助けてやつて下さい。』

そこへホバブの肩に倚つて、苦しみつゝ、色の青く褪めて、殆ど死人のやうになつて、膝を折々屈はせる、ゲルシヨン登場

その後から、槍を片手に、水を、盃に入れて、溢ぼし乍ら、ピネハズ妙な恰好をして直に登場チツポラに默つて水をあてがう。カレブはゲルシンヨをみて急いで助けに行く

ホバブ（ゲルションに）『しつかり！ しつかりして！』

ゲルション（ひとりごと）『苦しい、苦しい！』

カレブとホバブの二人はゲルションをチツポラの側に靜かに寢さす

チッポラそれに氣がつき

チッポラ『おゝ、ゲルション！』

蛇に嚙まれた者丙『エホバの神！　神よ！』

蛇に嚙まれた者丁『無情だ！　無情だ！　俺は神を呪ふ！』

モーセは一つ一つに眼をむけて深く考へ込む

ゲルション（半身を支え）『お父樣！　どうか！　お父樣！どうか、お助け下さい！』

チッポラ（半身起き直り）『あなた、自分の子までも、蛇に嚙まさ無くても善いぢやありませんか』

チッポラはゲルションにすりより首を抱きしめて泣く

カレブ『總督！　之はどうか、ならんものですかなア』

ヨシュア『お子さんだけでも、助けて頂きたいのですからなア』

ホバブ『ゲルションは心から惡いのでは無いのですからなア――罰せられるのなら、私の方が先に罰せられねばならないのです』

チッポラ（モーセを見上げ）『ねえ、あなた！　あなたと云へば、一寸、神に祈つて下さい！　ゲルションの爲めに』

ゲルション、チッポラの腕を拂ひ父の足元に這ひ寄つて兩足に抱きつき――

ゲルション『お父樣！　お父樣！　苦しい――苦しい』

蛇に嚙まれた者乙（半身を起し眼をふさいだまゝ片手を上にあげ）『水――水！』

（そう云ふてバタと倒れる）

蛇に噛まれた丙（寝たまゝ）『おゝ、あいつは、もう死んで了ふた』

ヨシュア、カレブ、ピネハズ、ホバブは土の上に坐つて居る。

ヨシュア（カレブに向い）『そこに——カレブ——毒蛇が——きよる！』

カレブ、それを避けて、立ち上り

カレブ（立ち上り乍ら）『如何、どうか、お子供さんだけでもお助け下さい！』

ヨシュア（立ち上つて）『カレブの云ふ通りにして頂きたいものですね——罪を悔いたものには罪は無いのですから
ね』

モーセつかつかと走り寄り、片手に石を拾ひ又カレブの側に這ふて居る蛇を片手にて首の所を捕へ幕屋の前の石の上にて、その蛇の首を石にて打砕き

モーセ、獨言のやうに大聲にて

モーセ（早口にて）『エバを呪ふた蛇よ！』（一撃）神は、おまへの、首を砕きなさる（數撃）

その間、凡てのもの、沈默

モーセは幕屋の横の叉になつて居る物干棹のやうなものに、蛇を打かけ幕屋の横に居るものにも見えるやうに、幕屋の隅の所にその蛇の懸つた木を立て

モーセ（大聲にて）『イスラエルよ！　この木を見上げよ！　人間の肉を呪ふ、蛇の首は、今、砕かれた！』

モーセ、兩手をあげ、天を仰ぎ、イスラエルを祝福して、神に祈れるが如き形をする。その間舞臺に沈默あり

モーセをみて居た惱めるものまた倒れたるまゝ、兩手を天にむけ、首をモーセの方になげ木の上の蛇を見る。凡ての人

元氣づく。

チツポラ（ゲルションを抱き起し乍ら）『ゲルション！ゲルション、おまへも、あしこを見なさい！』

ゲルション『お母さん、眼があかない！』

チツポラ（泣き乍ら）『おゝ（驚愕の意味にて）——もう眼があか無いのか？（間）どれ、（チツポラ右手にてゲルションの瞼を開く………）ゲルション！之で見えるかい？』

ゲルション答へなし

噛まれた者甲（立ち上り乍ら）『癒つた！ 癒つた！』（大勢のもの彼をみる）

チツポラ『ゲルション！ゲルション！（モーセをみて）もし！ あなた！ この子は、もう冷くなつて、了ひました、……』

チツポラ、そこに泣き倒れる

——靜かに幕——

第三幕

時　バアル祭翌日の午後四時頃

所　カデシに近きシンの荒野

登場人物

イスラエルの監督　モーセ
モーセの妻　チッポラ
斥候長　ヨシュア
斥候の有力者　カレブ
若者　ピネハズ
シメオンの首長　シルミエル
イスラエル人の男　多數

バアル祭の出來事にモーセ心煩悶して曠野に退いて祈つて居る。
此場面は今迄の舞臺と違つて、最も陰氣なもの。天然も市街地も少しも見えず、舞臺は全部セピア色の沙漠の心持ち、舞臺の左手は座の形をした大岩あり、その下は沙漠で砂礫横はる。沙漠に生えるやうな植物が極くまばらに生えて居る。
幕があくと、モーセは獨り大岩に向した砂の上に座り小岩に倚り懸つて、絶望の形である。少さい旋風が小砂をきり〳〵舞はす。
少ししてモーセ聲をあげて祈る。

モーセ『わたしはもう此上の苦難を見たくはありませぬ――神樣！ わたくしの荷が少し重過ぎるので、御座ります。(兩手をあげ目をとぢ、訴へる如く)わたくしは一人ではとても背負ひきれませぬ。……神――神さま、あの民の叫びを聞いて下さい！(間)(遙かに民衆が「ツァ」と云ふ聲と「おーい」と呼ぶ聲が屢々聞こえる。)……あれ！ 神樣、あの聲は民が私を呪ふ聲なのです。民は夜徹し私の門口に來て泣きました。私はその聲が聞かれませんでした。私は強くみえます――人の前には強く仕事をして居ります。然し神さま、あなたも知つていらしやる通り私も普通の人間なのです。シ

ナイの野から出て行く時に、私は其事をあなたに申上げておきました通りで御座ります。私は人間です、人間です。(モーセ立ち上り、煩悶の體にて歩き廻る) その弱い人間をつかまへてあなたがするやうな仕事を命じなさるのは無理な話です。(民の喚叫聞こゆ) おゝ、あれ、あれ! また呪の聲が聞こゑます。神はイスラエルを荒野で虐殺する爲めに連れ出して來たのだ。民があなたを呪つて居ます。いや、私をそう云ふで呪つて居るのです。

食ふ可きパンはなし、他に食糧はなし……たゞあの甘くもないマナで、その日を過ごして居ります。女は食物が悪いので流產し、赤ン坊は乳が無いのでバタ〱死にます。神よ之は一體誰の罪ですか?

あなただ! あなただ! 宇宙の凡ての苦しみと惡はあなたに責任があるのだ!

神様! あなたは人間を創つて以來一日として人間に樂しい日がありましたか?

イスラエルの日は暗い! その歴史は飢饉と神に欺かれた歴史ぢやありませんか? 解放の日は何時なんですか?

約束の日は何時來るのですか?

御覧なさい、神様、あなたは乳と蜜の流るゝ土地と仰つたでせう? そしてそこはアブラハム、イサク、ヤコブに約束した土地だと仰つたでせう。そしてどうです。アブラハムは一體何を貰つたのです。一生を通じてあなたから貰つた土地と云へば、僅かに妻サラの墳墓の爲めに僅かばかりの土地を銀二十枚でマクペラから買ふたばかりぢやありませんか? そしてイサクの土地はどれだけでした。井戸を五つ掘つた! それだけ! たつたそれだけ! それも常に敵に脅かされ、アビメレクに追はれてはエセクに逃げ、エセクから追はれては、レホボテに逃げ、イサクは一生抵抗力の無い逃亡者として了つたぢやありませんか! イスラエルの一生は猶悲慘です。彼の一生は誤謬と沈淪の慘敗史です。そしてあなたは彼をエヂプトまで追ひやりなさいました。

そこでもイスラエルはあなたに欺かれて來たのです。四百年の間、私共の祖先はあらん限りの迫害にあひ、ナイルの河はイスラエルの民族の血で赤くなつたのです。そしてあなたは遂に、私を用ゐて、民族解放の途上におつかせなさいました。

然し民族解放のあなたの手際はうまいこと行きましたか？ 何と云ふ醜くい解放なんでせう。蛇にかませたり、火で焼いたりして、それで無ければ、あなたは此民族を解放することは出來ないのですか？

あなたの手はそんなに短いのですか？ それともあなたは居睡でもしていらつしやるのですか？

神様！ おきて下さい！この有様ぢやあなたの面目にもかゝわります。周圍の民族は云ふでせう。エホバはイスラエルを荒野に連れ出して、解放の途中で兇くぬいでとう〳〵荒野の中でイスラエルを全部打ち殺したと。

あゝ神様！ あなたの面目を思つて下さい。

全能者だと云はれるあなたが、紅海の波を二つにわけたあなたが、このイスラエルに眞の救ひをやり與へなさらないとは何事ですか？

無慈悲だ！ 慘酷だ！われらを荒野で餓死せしめるとはあまり慘酷だ！

そうだ神なんか依賴(たよ)つて居るのが間違つてゐるのだ！

たゞ問題はパンと力の問題だ！

そうだ！ 私は今日からあなたを絶闘して強く生きる！

自由である可きものが、あなたのやうな絶對的專制者を信じて居るのが第一間違ではないのですか！

私は之れから一人行きます！ そうだ私は之れから一人で行く！ 神からパロからも解放せられて、私は一人行く。あ

ゝあまり私の迷ひが深過ぎた！ 私は心の荒野にも長く迷ふてゐた！ そうだ、今日限り私は神の鎖からも解放せられたい！

モーセ狂亂の態度にて

私の心よ、心を無視せよ！ 死んで了へ私の心よ！

おゝ神さま、私を殺して下さい。此上イスラエルの嘆きを見ない爲めに、殺して下さい！

ドタンのやうに、土地に吸ひ込まれた方が、私としては、どれだけうれしいか知りやしない。生きて居れば責任がある。早く死にたい！』

大勢のものドヤ／＼と現る

甲『こんな處に逃げて來て居る！』

乙『卑怯な奴ぢやなア』

丙『こらモーセ、水はどうしてくれるんな、水は？』

甲『おまへは責任を遁れる積りなのか？ 一體どうしてくれっ積りなのか？』

乙『馬鹿にするない、モーセ、こら己はもう神さんなんかどうでも善いのだい、いくら神さんに頼んで居つても、天から雨の一滴だつて降つて來やしないから、己はもう神様はやめた！ 水を出せ！ 水を出せ！

丙『おまいは蛇に嚙まれた者を癒す力を持つて居るなら喉の渇いたものに水の一ぱい位いのましてくれることは出來るだらうなア』

丁『己はもう口の中が乾いちやつて、舌がもつれてものさへ云へねえや』

或者笑ふ——

甲『兎に角來てくれ！』

大勢のものモーセの腕をとらへ、引張つて行からとする。

モーセの頸筋を捕へて引ずり乍ら——

乙『俺はもう神樣の罰なんか怖くはないのだぞ！　生命は抛つて居るのだ！　地獄へでもどこへでも行つたる。こいつはほんとに剛情な奴だ！』

モーセ暫時、彼等のなす儘に赦して居た後大聲にて

モーセ『侮辱しちやア許さぬぞ』

凡てのもの驚愕して本能的に手をはなす

民衆の或る者『やつぱり怖いなア』

互に見合つて笑ふ

モーセ『何處へ行くのか？』

甲『シメオンの陣屋まで來い！』

モーセ『行つてやる！　靜かにしろ』

モーセを圍んで群衆退場

乙（凡ての後から從いて行き）『モーセの馬鹿野郎が！』

乙も退場

入れ變つて逃つた方向よりカレブとヨシユアの順序にて入場

カレブ『總督は、先き、こちらの方に見えた筈だがなア、居られないなア！』

ヨシユア『岩陰にでも行つてお祈りでもして居られるのぢやないか？』

ヨシユア岩陰に行つて覗く

カレブ『この大騷ぎの中に總督が居られなければ大變だなア』

ヨシユア『居られない！　居られない！』

カレブ『もう少し遠く行かれたのかも知れ無い。』

岩蔭の方向に、モーセを索ね乍ら、二人のもの退場

チツポラ髮を振り亂して入場

チツポラ（大聲にて）あなた！　あなた！……（間）……もし、あなた！』

耳をすまして返事を待つ

チツポラ『もし、何處ですか？　ねえ』

返事が無いので、今來た方向に引返し退場。

民衆またモーセを取捲んで入場

シメオンの族の首長シルミエルは最も後より入場

乙『よし出すと云つたな！』

甲『出せよ！』

丙『今度嘘を云つたら叩き殺すぞ、ほんとに。』

乙『何處で出すんな、何處で？』

モーセ小岩の上に腰を下ろし沈默の儘考へ込む。

シルミエル『モーセ、水が出ると云ふのは、此處か？　何處に水が出て居る。』

甲（シルミエルに向ひ）『大將出て居るのぢや無いのですよ。出すと云ふのです。』

シルミエル『何でも善い、一體水は何處にある。ハ、ハ、ハア（空笑ひして）どこまでも人を馬鹿にする男だなア。ルベンや、ガドの人達はな謀反をしても杖の先に巴旦杏の花の一つ位、つけて見せて貰つてそれで感服するだらうがな、シメオンだけはそんな手品で誑され無いのだ。己は飽迄貴様に反抗するのだ。花を見せて貰つた處で喉の渇きの止るわけぢやあるまいし、俺はそんな瞞着手段には乘らないのだ！　こら！　モーセ！　俺はなエリヅルやナションのやうなお人善しと違うからなアそう思つて居つてくれ！　神がなんだい！　貴樣がその代辯人だとは何のことだい！よくもそんな嘘が云へるなア此僞善者が！　一言一句おまへの云つたことが實行されたことがあるか？　考へてみろ、おまへのなすことすることは凡てイスラエルには災となつて居るでは無いか！　サア、今日はその百云つた嘘の一でもほんとにして償ひをつけてみろ！　水を出せ！　水を！　今日はなア、今迄のやうにおとなしいシルミエルとは違ふのだ！　今日はおまへが昨夜人手を借りて殺させたジムリの敵打をしてやるのだ。試みに水を出してみい！──（モーセを足で蹴る！）──　こいつは默りくさるとちつとも返事しくさらん奴だなア！』

乙『石で打殺してやらうか！』（石を拾ふ）

シルミエル（乙に向ひ）『待て！』（モーセを見下ろす。）

甲『大將、こいつは、また嘘をつきくさつたのです、もうやつつけて了ひませう。』

モーセ沈默の儘座つて居る。

シルミエル『こら、モーセ。（刀の鞘の先でモーセを突き乍ら）もう、お前の手品も種がつきたのか？　水だけは神さんに賴んでも出ないと見えるなア。もうおまへの神樣は死んで了つたのか？　そんな事だと思つた。こら、モーセ、もう普い加減に「神樣」つて云ふことだけはよしてくれ、俺の耳はもう神樣と云ふことで酸えちやつた。何でもかでも神、神と云はなくて、ちつとおまへの力量でやつてみい。自分に力が無い癖に神にばかり賴つて、口寄せのやうなことばかりをあてにして大民族を連れ出してくるから、このやうな大失敗を演ずるのだ！　おまへが、今日まで爲て來た仕事が凡て虛僞であつたことを白狀しろ、俺は神のかわりにおまへを裁判してやる。俺はコラやドタンのやうに地の底に投げ入れられる位のことが、怖いやうな男と違ふのだ。俺は、神をも、魂をも信じない男なのだ。パンと水と女だけあればそれで滿足して居るのだ！　それに、パンは食へず水は無い。女は買へ無いと來ちやア、何が樂しみでこんな沙漠に迷ふて來たのだ！　沙漠で薬でもさす積りか？　少し寛容で居らせてくれなきア困るぢやねえか！　沙漠に住んで居て、誰れも知つて居る人はなし、女は尠し、別嬪が通れば妙な心も起るぢやねえか！　自分の金でカデシの遊女買ひする位い見脫してくれなきや困るぢやたえか？　それを、量見の狹い！　一寸と遊女買ひすりや毒蛇にかませるとか、惡い病氣に罹らせるとか！　おまいはまるで疫病神のやうな男だなア！　サア、モーセ、思案はもう後のことにせう。水はどうしてくれるんだい！（又足で蹴つて）神に云はずと、自分の力で水を出してみんかい！』

甲『サア、水を出せ、水を！　先きには水位いはなんでもない自分の力で出すと云つたぢやないか！』

群衆の一人（後ろより）『やつちまへ』

小石がモーセの上に落ちてくる

暫時沈默、大勢のものモーセを凝視す

シルミエル『俺はもう辛抱の緒が切れた！　やつちまへ』

民衆、手に手に石を取つてモーセを擊ち殺さんとす。

モーセ靜かに立ち上り

モーセ『待て！　シルミエル！　おまへたちは眼に見えるところだけで善いのだなア！』

シルミエル『勿論！』

モーセ『今暫くの辛抱は出來ないのだなア』

シルミエルと民衆（同時に）『出來ない！　出來ない！』

モーセ『約束の土地に這入るとはどうでも善いのだなア』

甲『そんな處はどうでも善い！　今、水が呑みたいのだ。』

丙『あんなことを云ふて居て、逃げ出すのぢや無いのか？』

乙『逃がすなよ、逃がすなよ、』

大勢圓陣を作つてモーセを圍む

モーセ『己だつて、水の一つ位い出す力は持つて居るのだ』

甲『出して見なくちやわかるかい！』

乙『まじないしたり御祈禱したりして、此上誤魔かすことだけはよしてくれよ、エヂプトの妖術師ぢやあるまいし』

丙『こいつはだめだ！　いくら待つてもやうやらないのだ！　逃げ口上ばかり作る積りで居やがるのだ！　こいつのしたことと云へば今迄何一つとして善いことはありやしない。人を利することばかりぢやねえか！　何かこの男が自分でしたと云ふ仕事でイスラエルに利益になつたと云ふことがあるか？』

モーセ『マナはどうして降つた？』

甲『あれは神さんが降らしたんぢやないかい。』

シルミエル『神さんのした仕　をおまへの仕事と云ふのが間違の起りだ。おれたちは神様を抜きにして、どれだけおまへが眞實にイスラエルを思ふて居るかゞ知りたいのだ！』

甲『神さんを除けてみろ、おまへは影法師のやうなものぢやないか！』

乙『神さま抜きにして、早く、おまへ一人の力量を見せてくれんかい。ぐず〳〵せずと。何かイスラエルに善いことをしてみろ！　許してやるから。』

シルミエル『奇蹟の力を借りて居ちや、解放運動は出來ないのだ！　人間そのものの本質が俺は知りたいのだ。人の見ぬ所でマナを降らしたり、鶉を降らす位いの神様はエヂプトにもバビロンにも澤山あるよ。然し俺達の知りたいのは、俺達の眼の前でおまへの力で此沙漠の眞中に水の湧いて出るやうな、そんな事が出來るか出來ぬかそれが知りたいのだ！』

モーセ『神の力を借りて人間を解放するのが間違つてゐると云ふのか？』

シルミエル『そうだ神の力で人間を解放するのは神の解放だ！　人間の解放は、人間自ら解放すべきだ！』

甲『カデシの井戸はバアルの神がひとりでに噴かせたと云ふのぢやないか、おまへは平生からバアルより豪いやつな

こゝを云ふて居るではないか！　一つ、水を噴かせてみろ！』

モーセ　『バアル？　あの木像(でく)が何が出來るか？　バアルが出來るなら、俺も出來る。信ずるものに於ては何事でも出來る。おまへ達は俺を信ずるか？』

丙　『神は信じないがおまへは信じてやる！』

モーセ杖を振り上げて大岩の凹んだ處を強く打つ！　水、直ちにほとばしり出る。

甲　『あゝ出た！　出た！』

シルミエル吃驚して居る！

乙　『水が出た！　水が！』

乙は水を呑まんとして、凹んだ處に口をあてる。水力弱くして水面にちよろ〳〵になり、後止る。

乙　『なんだい！　人を馬鹿にしてゐるぢやないかね！』

丙　『もう水は止つたぢやねえか』

甲　『まるでまじないのやうな水だつたな！』

乙　『おい、己達は、つまされて居るのぢやないのかい！（モーセに向ひ）おい、ほんとに人を馬鹿にすない！

群衆の一人　『ヤツつけて了へ！』

から云つてモーセを打つ

そこへカレブ、ヨシュア、ピネハス登場

カレブ　（大喝一聲）『こら何をするか！』

群衆蜘蛛の子の如く散り三人を見て恐れて逃げ出し退場
モーセは嚴に腰を降して沈默――
シルミエルだけは悠然退場せんとするカレブそれを呼びとめ

カレブ『シルミエル！ 貴樣は此處に何の用があるのだ！』

シルミエル『何でも善いぢやないか？ 從いて來い、陣屋で云つてやらア』

シルミエル退場

カレブ（ピネハズに向ひ）『ピネハズ、後を追つかけて、やツつけて了へ！サア來い！』

ピネハズ『ウム』

カレブとピネハズ急ぎ退場

モーセ（ヨシュアに向い）『ヨシュア、あれをとめてこい、若いものはどんな、早まつたことをするかも知れない。』

ヨシュア『はいかしこまりました！』

ヨシュア、急ぎ退場
モーセ一人殘る。舞台は遽かに暗くなり、電光が激しくセピア色の砂漠地帯を照らす。風起る。砂飛ぶ。
モーセは小岩の傍にまた跪き聲を出して祈る。

モーセ『醜い、私の魂よ！ おまへは、永遠に約束の土地に入ることは出來ない！
神を離れて、何事もなし得ない魂があまりに、高慢であつた。人間は矢張り泉の創造者ではないのだ！
おゝ神よ、私はあなたの鞭に服します。凡てを自分の思つた儘にせんとするものは、永遠に、自分自らをさへ、自由

に爲し得ないものです。

私を、荒野で死なして下さい。私も矢張りエヂプトの木伊乃（みいら）の側から出て來たものです。神の國に持つて這入れない醜い自我の持主です。私は、私だけは神の國に這入れると思ふて居りました。それが第一間違つてゐたのです。神の國は私一人の所有ちやなかつたのです。

私は、先づ、私自らを、この荒野に葬ります。そして、後から萠え出る若き芽に、神の國を繼いでもらひます。

私の事業は私自身を荒野に葬ることです。神様ありがとう御座ります。此處まで連れて來て下さつたことはほんとに御禮の申上げやうもありません。

凡ては、あなたの、み心のまゝに動く可きものです。さうです、生命あるもの、生命なきものも、息あるものも、息なきものも、みなあなたのみ心の儘に動きます。凡てを凡て自由に置いておくことが、ほんとの解放であつたのです。間違つて居りました。私は律法をつくり、戀愛に制限を加へ、人の生命の長短にまで干渉せんとして居りました。つまり、私は肉の奴隷を解放して、新しき奴隷を作つて居たのです。まア、何と云ふ醜い私でせう。この醜い私は、先づあなたのお叱りを受けねばならぬものです。

荒野の死！それは、私にはあまり勿體なう御座ります。私はこれに氣をつかせて頂いた事を、心より感謝いたします。

モーセ骸を抱いて泣き倒れる。

ヨシュア飛び出し來り登場

遙か向ふの地平線上に旋風の進路と見ゆる龍卷きを指ざし

ヨシュア『總督！雲の柱が立ちました！神様はもう進行していらつしやいます！』

　　モーセ顔をあげ、涙を拭いて

モーセ　『どれ何處に？』

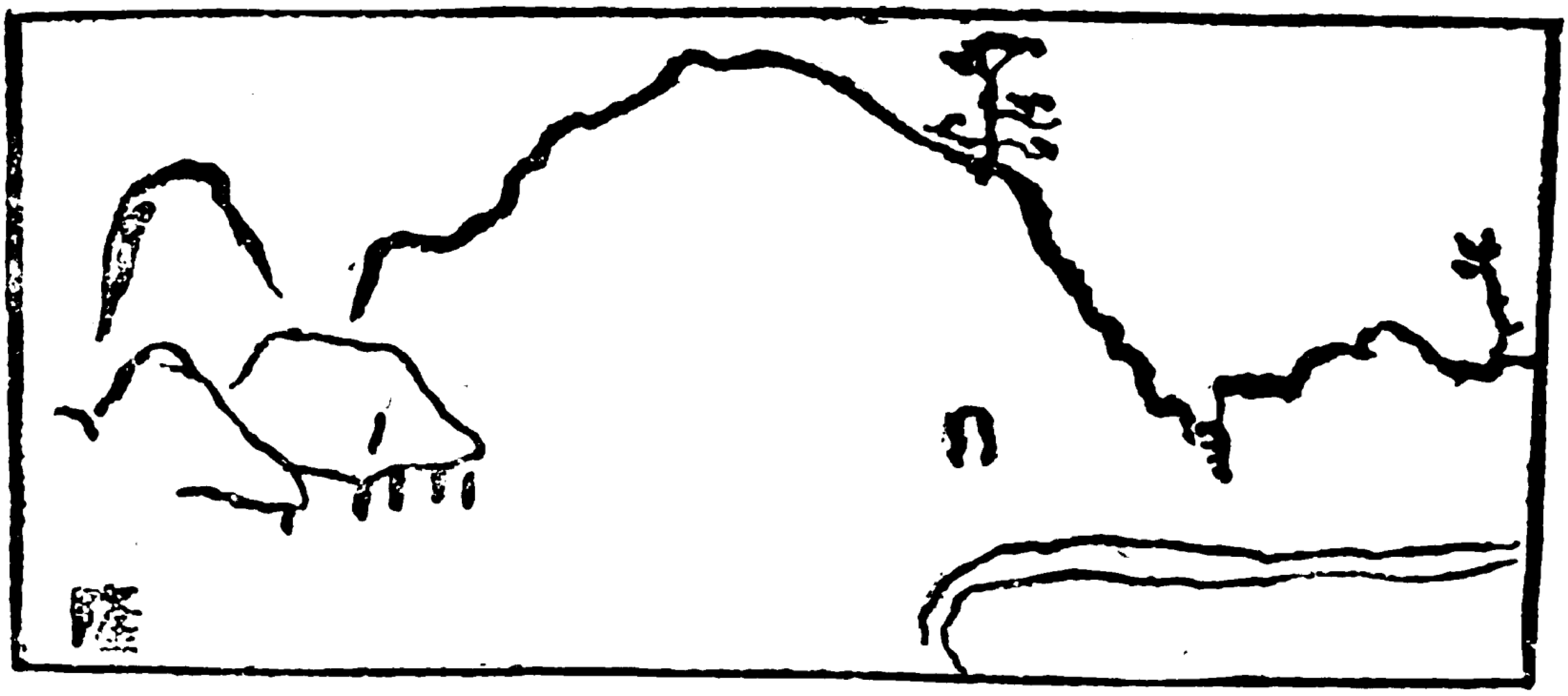
ヨシユア　『あれ、あしこに！　あの立派な雲の柱を御覧なさい！』

　　カレブとピネハズ急ぎ登場

カレブ　（多少驚き）『あゝ雲の柱！　雲の柱！』

　　モーセ立ち上り髪を兩手でなでつけ再び靜かに雲の柱の方向に跪き、合掌して祈る。
　　微かに、西は夕焼けして居る。風は段々激しくなる。

——靜かに幕——



將軍

芥川龍之介

一　白襷隊

明治三十七年十一月二十六日の未明だつた。第×師團第×聯隊の白襷隊は、松樹山の補備砲台を奪取する爲に、九十三高地の北麓を出發した。

路は山陰に沿うてゐたから、隊形も今日は特別に、四列側面の行進だつた。その草もない薄闇の路に、銃身を並べた一隊の兵が、白襷ばかり仄かせながら、靜かに靴を鳴らして行くのは、悲壯な光景に違ひなかつた。現に指揮官のM大尉なぞは、この隊の先頭に立つた時から、別人のやうに口數の少ない、沈んだ顏色をしてゐるのだつた。が、兵は皆思ひの外、平生の元氣を失はなかつた。それは一つには日本魂の力、二つには酒の力だつた。

少時行進を續けた後、隊は石の多い山陰から、風當りの強い河原へ出た。

「おい、後を見ろ。」

紙屋だつたと云ふ田口一等卒は、同じ中隊から選拔された、これは大工だつたと

云ふ、堀尾一等卒に話しかけた。

「みんなこつちへ敬禮してゐるぜ。」

堀尾一等卒は振り返つた。成程さう云はれて見ると、黑々と盛り上つた高地の上には、聯隊長始め何人かの將校たちが、やや赤らんだ空を後に、この死地に向ふ一隊の士卒へ、最後の敬禮を送つてゐた。

「どうだい？、大したものぢやないか？、白襷隊になるのも名譽だな。」

「何が名譽だ？」

堀尾一等卒は苦々しさうに、肩の上の銃を揺り上げた。

「こちとらはみんな死に行くのだぜ。して見ればあれは×××××××××××××さうつて云ふのだ。こんな安上りな事はなからうぢやねえか？」

「それはいけない。そんな事を云つては×××すまない。」

「べらぼうめ！、すむもすまねえもあるものか！、酒保の酒を一合買ふのでも、敬禮だけでは賣りはしめえ。」

田口一等卒は口を噤んだ。それは酒氣さへ帶びてゐれば、皮肉な事ばかり並べたがる、相手の癖に慣れてゐるからだつた。しかし堀尾一等卒は、執拗にまだ話し續けた。

「それは敬禮で買ふとは云はねえ。やれ××××とか、やれ××××だとか、いろんな勿體をつけやがるだらう。だがそんな事は嘘つ八だ。なあ、兄弟。さうぢやねえか？」

堀尾一等卒にかう云はれたのは、これも同じ中隊にゐた、小學校の教師だつたと云ふ、おとなしい江木上等兵だつた。が、そのおとなしい上等兵が、この時だけはどう云ふ譯か、急に噛みつきさうな權幕を見せた。さうして酒臭い相

手の顏へ、惡辣な返答を抛りつけた。

「莫迦野郎！　おれたちは死ぬのが役目ぢやないか？」

その時もう白襷隊は、河原の向うへ上つてゐた。其處には泥を塗り固めた、支那人の民家が七八軒、ひつそりと曉を迎へてゐる、――その家々の屋根の上には、石油色に襞をなぞつた、寒い茶褐色の松樹山が、目の前に迫つて見えるのだつた。隊はこの村を離れると、四列側面の隊形を解いた。のみならずいづれも武裝した儘、幾條かの交通路に腹這ひながら、ぢりぢり敵前へ向ふ事になつた。

勿論江木上等兵も、その中に四つ這ひを續けて行つた。「酒保の酒を一合買ふのでも、敬禮だけでは賣りはしめえ。」――さう云ふ堀尾一等卒の言葉は、同時に又彼の腹の底だつた。しかし口數の少ない彼は、ぢつとその考へを持ちこたへてゐた。それだけに、一層戰友の言葉は、丁度傷痕にでも觸れられたやうな、腹立たしい悲しみを與へたのだつた。彼は凍えついた交通路を、獸のやうに這ひ續けながら、戰爭と云ふ事を考へたり、死と云ふ事を考へたりした。が、さう云ふ考へからは、寸毫の光明も得られなかつた。死は××××にしても、所詮は呪ふべき怪物だつた。戰爭は、――彼は殆戰爭は、罪惡と云ふ氣さへしなかつた。罪惡は戰爭に比べると、個人の情熱に根ざしてゐるだけ、×××××××出來る點があつた。しかし×××××××××××外ならなかつた。しかも彼は、――いや、彼ばかりでもない。各師團から選拔された、二千人余りの白襷隊は、その大なる×××にも、嫌でも死ななければならないのだつた。……

………

「來た。來た。お前は何處の聯隊だ？」

江木上等兵はあたりを見た。隊は何時か松樹山の麓の、集合地へ着いてゐるのだつた。其處にはもうカアキイ服に、

古めかしい褂をあやどつた、各師團の兵が集まつてゐる、——彼に聲をかけたのも、さう云ふ連中の一人だつた。その兵は石に腰をかけながら、うつすり流れ出した朝日の光に、片頰の面皰をつぶしてゐた。

「第×聯隊だ。」

「パン聯隊だな。」

江木上等兵は暗い顏をした儘、何ともその冗談に答へなかつた。

何時間かの後、この歩兵陣地の上には、もう彼我の砲彈が、凄まじい唸りを飛ばせてゐた。目の前に聳えた松樹山の山腹にも、李家屯の我海軍砲は、幾たびか黄色い土煙を揚げた。その土煙の舞ひ上る合間に、薄紫の光が迸るのも、晝だけに、一層悲壯だつた。しかし二千人の白襷隊は、かう云ふ砲聲の中に機を待ちながら、やはり平生の元氣を失はなかつた。又恐怖に挫がれない爲には、出來るだけ陽氣に振舞ふ外、仕樣のない事も事實だつた。

「べらぼうに撃ちやがるな。」

堀尾一等卒は空を見上げた。その拍子に長い叫び聲が、もう一度頭上の空氣を裂いた。彼は思はず首を縮めながら、砂埃の立つのを避ける爲か、手巾に鼻を掩つてゐた、田口一等卒に聲をかけた。

「今のは二十八珊だぜ。」

田口一等卒は笑つて見せた。さうして相手が氣のつかないやうに、そつとポケットへ手巾をおさめた。それは彼が出征する時、馴染の藝者に貰つて來た、緣に繡のある手巾だつた。

「音が違ふな、二十八珊は。——」

田口一等卒はかう云ふと、狼狽したやうに姿勢を正した。同時に大勢の兵たちも、聲のない號令でもかかつたように、

次から次へと立ち直り始めた。それはこの時彼等の間へ、軍司令官のN將軍が、何人かの幕僚を從へながら、嚴然と歩いて來たからだつた。

「こら、騷いではいかん。騷ぐではない。」

將軍は陣地を見渡しながら、やや錆のある聲を傳へた。

「かう云ふ狹隘な所だから、敬禮も何もせなくとも好い。お前たちは何聯隊の白襷隊ぢや？」

田口一等卒は將軍の眼が、彼の顏へぢつと注がれるのを感じた。その眼は殆ど處女のやうに、彼をはにかませるのに足るものだつた。

「はい。步兵第×聯隊であります。」

「さうか。大元氣にやつてくれ。」

將軍は彼の手を握つた。それから堀尾一等卒へ、ぢろりとその眼を轉ずると、やはり右手をさし伸べながら、もう一度同じ事を繰返した。

「お前も大元氣にやつてくれ。」

かう云はれた堀尾一等卒は、全身の筋肉が硬化したやうに、直立不動の姿勢になつた。幅の廣い肩、大きな手、頰骨の高い赭ら顏。──さう云ふ彼の特色は、少くともこの老將軍には、帝國軍人の模範らしい、好印象を與へた容子だつた。將軍は其處に立ち止まつた儘、熱心になほ話し續けた。

「今打つてゐる砲台があるな。今夜お前たちはあの砲台を、こつちの物にしてしまふのぢや。さうすると豫備隊は、お前たちの行つた跡から、あの界隈の砲台をみんな手に入れてしまふのぢや。何でも一遍にあの砲台へ、飛びつく心にな

ちなければいかん、――」

さう云ふ内に將軍の聲には、何時か多少戯曲的な、感激の調子がはひつて來た。

「好いか？決して途中に立ち止まつて、射撃なぞをするぢやないぞ。五尺の體を砲彈だと思つて、いきなりあれへ飛びこむのぢや。頼んだぞ。どうか、しつかりやつてくれ。」

將軍は「しつかり」の意味を傳へるやうに、堀尾一等卒の手を握つた。さうして其處を通り過ぎた。

「嬉しくもねえな。――」

堀尾一等卒は狡猾さうに、將軍の跡を見送りながら、田口一等卒へ目交せをした。

「え、おい。あんな爺さんに手を握られたのぢや。」

田口一等卒は苦笑した。それを見るとどう云ふ譯か、堀尾一等卒の心の中には、何かに濟まない氣が起つた。と同時に相手の苦笑が、面憎いやうな心もちにもなつた。其處へ江木上等兵が、突然横合ひから聲をかけた。

「どうだい、握手で××××のは？」

「いけねえ。いけねえ。人眞似をしちや。」

今度は堀尾一等卒が、苦笑せずにはゐられなかつた。

「××れると思ふから腹が立つのだ。おれは捨ててやると思つてゐる。」

江木上等兵がかう云ふと、田口一等卒も口を出した。

「さうだ。みんな御國の爲に捨てる命だ。」

「おれは何の爲だか知らないが、唯捨ててやるつもりなのだ。××××××でも向けられて見ろ。何でも持つて行け

と云ふ氣になるだらう。」

江木上等兵の眉の間には、薄暗い興奮が動いてゐた。

「丁度あんな心もちだ。强盗は金さへ卷き上げれば、×××××××云ひはしまい。が、おれたちはどつち道死ぬのだ。××××××××××××たのだ。どうせ死なずにすまないのなら、綺麗に×××やつた方が好いぢやないか？」

かう云ふ言葉を聞いてゐる内に、まだ酒氣が消えてゐない、堀尾一等卒の眼の中には、この溫厚な戰友に對する、侮蔑の光が加はつて來た。「何だ、命を捨てる位？」——彼は内心さう思ひながら、うつとり空へ眼をあげると、今夜は必ず人後に落ちず、將軍の握手に報いる爲、肉彈にならうと決心した。…………

その夜の八時何分か過ぎ、手擲彈に中つた江木上等兵は、全身黑焦になつた儘、松樹山の山腹に倒れてゐた。其處へ白襷の兵が一人、何か切れ切れに叫びながら、鐵條網の中を走つて來た。彼は戰友の屍骸を見ると、その胸に片足かけるが早いか、突然大聲に笑ひ出した。大聲に、——實際その哄笑の聲は、烈しい敵味方の銃火の中に、氣味の惡い反響を喚び起した。

「萬歲！日本萬歲！惡魔降伏。怨敵退散。第×聯隊萬歲！萬歲！萬々歲！」

彼は片手に銃を振り振り、彼の目の前に闇を破つた、手擲彈の爆發にも頓着せず、續けさまにかう絶叫してゐた。その光に透かして見れば、これは頭部銃創の爲に、突擊の最中發狂したらしい、堀尾一等卒その人だつた。

二　間諜

明治三十八年三月五日の午前、當時全勝集に駐屯してゐた、A騎兵旅團の參謀は、薄暗い司令部の一室に、二人の

支那人を取り調べて居た。彼等は間諜の嫌疑の爲、臨時この旅團に加はつてゐた。第×聯隊の歩哨の一人に、今し方捉へられて來たのだつた。

この棟の低い支那家の中には、勿論今日も坑の火つ氣が、快い溫みを漂はせてゐた。が、物悲しい戰爭の空氣は、敷瓦に觸れる拍車の音にも、卓の上に脫いだ外套の色にも、至る所に窺はれるのだつた。殊に紅唐紙の聯を貼つた、埃臭い白壁の上に、束髮に結つた藝者の寫眞が、ちやんと鋲で止めてあるのは、滑稽でもあれば悲慘でもあつた。

其の處には旅團參謀の外にも、副官が一人、通譯が一人、二人の支那人を圍んでゐた。支那人は通譯の質問通り、何んでも明瞭に返事をした。のみならずやや年嵩らしい、顏に短い鬚のある男は、通譯がまだ尋ねない事さへ、進んで說明する風があつた。が、その答辯は參謀の心に、明瞭ならば明瞭なだけ、一層彼等を間諜にしたい、反感に似たものを與へるらしかつた。

「おい歩兵！」

旅團參謀は鼻聲に、この支那人を捉へて來た、戶口にゐる歩哨を喚びかけた。歩兵、——それは白襷隊に加はつてゐた、田口一等卒に外ならなかつた。——彼は戶の卍字格子を後に、藝者の寫眞へ目をやつてゐたが、參謀の聲に驚かされると、思ひ切り大きい答をした。

「はい。」

「お前だな、こいつらを掴へたのは？ 掴まへた時はどんなだつたか？」

人の好い田口一等卒は、朗讀的にしやべり出した。

「私が歩哨に立つてゐたのは、この村の土塀の北端、奉天に通ずる街道であります。その支那人に二人とも、奉天の

方向から歩いて來ました。すると木の上の中隊長が、──」

「何、木の上の中隊長？」

參謀はちよいと目蓋を擧げた。

「はい。中隊長は展望の爲、木の上に登つてゐられたのであります。──その中隊長が木の上から、捕まへろと私に命令されました。」

「所が私が捉へようとすると、そちらの男が、──はい。その聲のない男であります。その男が急に逃げようとしました。………」

「それだけか？」

「はい。それだけであります。」

「よし。」

旅團參謀は血肥りの顏に、多少の失望を浮べた儘、通譯に質問の意を傳へた。通譯は退屈を露さない爲、わざと聲に力を入れた。

「間諜でなければ何故逃げたか？」

「それは逃げるのが當然です。何しろいきなり日本兵が、躍りかかつてきたのですから。」

もう一人の支那人、──鴉片の中毒に罹つてゐるらしい、鉛色の皮膚をした男は、少しも怯まずに返答した。

「しかしお前たちが通つて來たのは、今にも戰場になる街道ぢやないか？　良民ならば用もないのに、──」

支那語の出來る副官は、血色の惡い支那人の顏へ、ちらりと意地の惡い眼を送つた。

「いや、用はあるのです。今も申し上げた通り、私たちは新民屯へ、紙幣を取り換へに出かけて來たのです。御覧下さい。此處に紙幣もあります。」

髯のある男は平然と、將校たちの顏を眺め廻した。參謀はちよいと鼻を鳴らした。彼は副官のたぢろいだのが、內心好い氣味に思はれたのだつた。

「紙幣を取り換へる？　命がけでか？」

副官は負惜みの冷笑を洩らした。

「兎に角裸にして見よう。」

參謀の言葉が通譯されると、彼等はやはり悪びれずに、早速赤裸になつて見せた。

「まだ腹卷をしてゐるじやないか？　それをこつちへとつて見せろ。」

通譯が腹卷を受けとる時、その白木綿に體溫のあるのが、何だか不潔に感じられた。腹卷の中には三寸ばかりの、太い針がはいつてゐた。旅團參謀は窓明りに、何度もその針を検べて見た。が、それも平たい頭に、梅花の模樣がついてゐる外、何も變つた所はなかつた。

「何か、これは？」

「私は鍼醫です。」

髯のある男はためらはずに、悠然と參謀の問に答へた。

「次手に靴も脫いで見ろ。」

彼等は殆無表情に、隱すべき所も隱さうとせず、檢査の結果を眺めてゐた。が、ズボンや上着は勿論、靴や靴下を

検べて見ても、證據になる品は見當らなかつた。この上は靴を壞して見るより外にはない。——さう思つた副官は、參謀にその旨を話さうとした。

その時突然次の部屋から、軍司令官を先頭に、軍司令部の幕僚や、旅團長などがはいつて來た。將軍は副官や軍參謀と、丁度何かの打ち合せの爲、旅團長を尋ねに來てゐたのだつた。

「露探か？」

將軍はかう尋ねた儘、支那人の前に足を止めた。さうして彼等の裸姿へ、ぢつと鋭い眼を注いだ。後に或亞米利加人が、この有名な將軍の眼には、Monomania じめた所があると、無遠慮な批評を下した事がある。——そのモノメニアツクな眼の色が、殊にかう云ふ場合には、氣味の惡い輝きを加へるものだつた。

旅團參謀は將軍に、ざつと事件の顛末を話した。が、將軍は思ひ出したやうに、時々頷いて見せるばかりだつた。

「この上はもう打つてでも、白状させる外はないのですが、——」

參謀がかう云ひかけた時、將軍は地圖を持つた手に、床の上にある支那靴を指した。

「あの靴を壞して見給へ。」

靴は見る見る底をまくられた。するとその處に縫ひこまれた、四五枚の地圖と秘密書類が、忽ちばらばらと床の上に落ちた。二人の支那人はそれを見ると、さすがに顏の色を失つてしまつた。が、やはり押し默つた儘、剛情に敷瓦を見つめてゐた。

「そんな事だらうと思つてゐた。」

將軍は旅團長を顧みながら、得意さうに微笑を洩した。

「しかし靴とは又考へたものですね。――おい、もうその連中には着物を着せてやれ。――こんな間諜は始めてです。」

「軍司令官閣下の炯眼には驚きました。」

旅團副官は旅團長へ、間諜の證據品を渡しながら、愛嬌の好い笑顔を見せた。――恰も靴に目をつけたのは、將軍よりも彼自身が、先だつた事も忘れたやうに。

「だが裸にしてもないとすれば、靴より外に隱せないじやないか？」

將軍はまだ上機嫌だつた。

「わしはすぐに靴と睨んだ。」

「どうもこの邊の住民はいけません。我々が此處へ來た時も、日の丸の旗を出したですが、その癖家の中を檢べて見れば、大抵露西亞の旗を持つてゐるのです。」

旅團長も何か浮き浮きしてゐた。

「つまり奸佞邪智なのじやね。」

「さうです。煮ても燒いても食へないのです。」

こんな會話が續いてゐる内、旅團參謀はまだ通譯と、二人の支那人を檢べてゐた。それが急に田口一等卒へ、機嫌の悪い顏を向けると、吐き出すやうにかう命じた、

「おい歩兵！　この間諜はお前が掴まへて來たのだから、次手にお前が殺して來い。」

二十分の後、村の南端の路ばたには、この二人の支那人が、互に辮髮を結ばれた儘、枯柳の根がたに坐つてゐた。

田口一等卒は銃劍をつけると、まづ辮髪を解き放した。それから銃を構へた儘、年下の男の後に立つた。が、彼等を突殺す前に、殺すと云ふ事だけは告げたいと思つた。

「儞、――」

彼はさう云つて見たが、「殺す」と云ふ支那語を知らなかつた。

「儞、殺すぞ！」

二人の支那人は云ひ合せたやうに、ぢろりと彼を振り返つた。しかし驚いたけはひも見せず、それぎり別々の方角へ、何度も叩頭を續け出した。「故鄕へ別れを告げてゐるのだ、」――田口一等卒は身構へながら、かうその叩頭を解釋した。

叩頭が一通り濟んでしまふと、彼等は覺悟をきめたやうに、冷然と首をさし伸した。田口一等卒は銃をかざした。が、神妙な彼等を見ると、どうしても銃劍が突き刺せなかつた。

「儞、殺すぞ！」

彼はやむを得ず繰返した。するとそこへ村の方から、馬に跨つた騎兵が一人、蹄に砂埃を卷き揚げて來た。

「歩兵！」

騎兵は――近づいたのを見れば曹長だつた。それが二人の支那人を見ると、馬の歩みを緩めながら、傲然と彼に聲をかけた。

「露探か？　露探だらう。おれにも、一人斬らせてくれ。」

田口一等卒は苦笑した。

「何、二人とも上げます。」

「さうか？　それは氣前が好いな。」

騎兵は身輕に馬を下りた。さうして支那人の後にまわると、腰の日本刀を拔き放した。その時又村の方から、勇しい馬蹄の響と共に、三人の將校が近づいて來た。騎兵はそれに頓着せず、まつ向に刀を振り上げた。が、まだその刀を下さない内に、三人の將校は悠々と、彼等の側へ通りかかつた。軍司令官！　騎兵は田口一等卒と一しよに、馬上の將軍を見上げながら、正しい擧手の禮をした。

「露探だな。」

將軍の眼には一瞬間、モノメニアの光が輝いた。

「斬れ！　斬れ！」

騎兵は言下に刀をかざすと、一打に若い支那人を斬つた。支那人の頭は躍るやうに、枯柳の根もとに轉げ落ちた。血は見る見る黃ばんだ土に、大きい斑點を擴げ出した。

「よし。見事だ。」

將軍は愉快さうに頷きながら、それなり馬を歩ませて行つた。

騎兵は將軍を見送ると、血に染んだ刀を提げた儘、もう一人の支那人の後に立つた。その態度は將軍以上に、殺戮を喜ぶ氣色があつた。「この×××らばおれにも殺せる。」――田口一等卒はさう思ひながら、枯柳の根もとに腰を下した。騎兵は又刀を振り上げた。が、髯のある支那人は、默然と首を伸ばしたぎり、睫毛一つ動かさなかつた。……

將軍に從つた軍參謀の一人、――穗積中佐は鞍の上に、春寒の曠野を眺めて行つた。が、遠い枯木立や、路ばたに倒

れた石鹸箱も、中佐の眼には映らなかつた。それは彼の頭には、一時愛讀したスタンダアルの言葉が、絶えず漂つて來るからだつた。

「私は勲章に埋つた人間を見ると、あれだけの勲章を手に入れるには、どの位××な事ばかりしたか、それが氣になつて仕方がない。…………」

——ふと氣がつけば彼の馬は、ずつと將軍に遅れてゐた。中佐は輕い身震をすると、すぐに馬を急がせ出した。丁度當り出した薄日の光に、飾緒の金をきらめかせながら。

三　陣中の芝居

明治三十八年五月四日の午後、阿吉牛堡に駐つてゐた、第×軍司令部では、午前に招魂祭を行つた後、余興の演藝會を催す事になつた。會場は支那の村落に多い、野天の戯台を應用した、急拵の舞台の前に、天幕を張り渡したに過ぎなかつた。が、その蓆敷きの會場には、もの一時の定刻前に、大勢の兵卒が集つてゐた。この薄汚いカアキイ服に、銃劍を下げた兵卒の群は、殆看客と呼ぶのさえも、皮肉な感じを起させる程、見じめな看客に違いなかつた。が、それだけ又彼等の顔に、晴れ晴れした微笑が漂つてゐるのは、一層可憐な氣がするのだつた。

將軍を始め軍司令部や、兵站監部の將校たちは、外國の從軍武官たちと、その後の小高い土地に、ずらりと椅子を並べてゐた。此處には參謀肩章だの、副官の襷だのが見えるだけでも、一般兵卒の看客席より、遥かに空氣が花やかだつた。殊に外國の從軍武官は、愚物の名の高い一人でさへも、この花やかさを扶ける爲には、軍司令官以上の効果があつた。

將軍は今日も上機嫌だつた。何か副官の一人と話しながら、時々番付を開いて見てゐる——その眼にも始終日光の

やうに、人懐こい微笑が浮んでゐた。

その内に定刻の一時になつた。櫻の花や日の出をとり合せた、手際の好い幕の後では、何度か鳴りの悪い拍子木が響いた。と思ふとその幕は、余興掛の少尉の手に、するすると一方へ引かれて行つた。

舞台は日本の室内だつた。それが米屋の店だと云ふ事は、一隅に積まれた米俵が、僅かに暗示を與へてゐた。其處へ前垂掛けの米屋の主人が、「お鍋やお鍋や」と手を打ちながら、彼自身よりも背の高い、銀杏返しの下女を呼び出して來た。それから、――筋は話すにも足りない、一場の俄が始まつた。

舞台の悪ふざけが加はる度に、蓆敷の上の看客からは、何度も高聲が立ち昇つた。いや、その後の將校たちも、大部分は笑を浮べてゐた。が、俄はその笑を競ふやうに、益々滑稽を重ねて行つた。さうしてとうとうしまひには、越中褌一つの主人が、赤い湯もじ一つの下女と相撲をとり始める所になつた。

笑聲は更に高まつた。兵站監部の或大尉なぞは、この滑稽を迎へる爲、殆拍手さへしようとした。丁度その途端だつた。突然烈しい叱咤の聲は、湧き返つてゐる笑の上へ、鞭を加へるやうに響き渡つた。

「何だ、その醜態は？　幕を引け！　幕を！」

聲の主は將軍だつた。將軍は太い軍刀の柄に、手袋の兩手を重ねた儘、嚴然と舞台を睨んで居た。

幕引きの少尉は命令通り、呆氣にとられた役者たちの前へ、倉皇とさつきの幕を引いた。同時に蓆敷の看客も、かすかなどよめきの聲の外は、ひつそりと靜まり返つてしまつた。

外國の從軍武官たちと、一つ席にゐた穗積中佐は、この沈默を氣の毒に思つた。俄は勿論彼の顏には、微笑さへも浮ばせなかつた。しかし彼は看客の興味に、同情を持つだけの余裕はあつた。では外國武官たちに、裸の相撲を見

せても好いか？——さう云ふ體面を重するには、何年か歐洲に留學した彼は、余りに外國人を知り過ぎてゐた。

「どうしたのですか？」

佛蘭西の將校は驚いたやうに、穗積中佐をふりかへつた。

「將軍が中止を命じたのです。」

「なぜ？」

「下品ですから、——將軍は下品な事は嫌ひなのです。」

さう云ふ内にもう一度、舞台の拍子木が鳴り始めた。靜まり返つてゐた兵卒たちは、この音に元氣を取り直したのか、其處此處から拍手を送り出した。穗積中佐もほつとしながら、彼の周圍を眺め廻した。周圍にゐ並んだ將校たちは、いづれも幾分か氣兼さうに、舞台を見たり見なかつたりしてゐる、——その中にたつた一人、やはり軍刀へ手をのせた儘、丁度幕の開き出した舞台へ、ぢつと眼を注いでゐた。

次の幕は前と反對に、人情がかつた舊劇だつた。舞台には唯屏風の外に、火のともつた行燈が置いてあつた。其處に頬骨の高い年増が一人、猪首の町人と酒を飲んでゐた。年増は時々金切聲に、「若旦那」と相手の町人を呼んだ、さうして、——穗積中佐は舞台を見ずに、彼自身の記憶に浸り出した。柳盛座の二階の手すりには、十二三の少年が倚りかかつてゐる。舞台には櫻の釣り枝がある。火影の多い町の書割がある。その中に二錢の團洲と呼ばれた、和光の不破伴左エ門が、編笠を片手に見得をしてゐる。少年は舞台に見入つた儘、殆ど息さへもつかうとしない。彼にもそんな時代があつた。…………

「余興やめ！　幕を引かんか？　幕！　幕！」

將軍の聲は爆彈のやうに、中佐の追憶を打ち碎いた。中佐は舞台へ眼を返した。舞台には既に狼狽した少尉が、幕と共に走つてゐた。その間にちらりと屏風の上へ、男女の帯の懸かつてゐるのが見へた。

中佐は思はず苦笑した。「余興掛も氣が利かなすぎる。男女の相撲さへ禁じてゐる將軍が、濡れ場を默つて見てゐる筈がない。――」そんな事を考へながら、叱聲の起つた席を見ると、將軍はまだ不機嫌さうに、余興掛の大主計と、何か問答を重ねてゐた。

その時ふと中佐の耳は、口の惡い亞米利加の武官が、隣に坐つた佛蘭西の武官へ、かう話しかける聲を捉へた。

「將軍Nも樂ぢやない。軍司令官兼檢閲官だから、――」

やつと三幕目が始まつたのは、それから十分の後だつた。今度は木がはいつても、兵卒たちは拍手を送らなかつた。

「可哀さうに。監視されながら、芝居を見てゐるやうだ。」――穗積中佐は憐むやうに、殆ど大きな話し聲も立てない、カアキイ服の群を見渡した。

三幕目の舞台は黒幕の前に、柳の木が二三本立ててあつた。それは何處からか伐つて來たか、生々しい實際の柳だつた。其處に警部らしい髯だらけの男が、年の若い巡査をいぢめてゐた。穗積中佐は番附の上へ、不審さうに眼を落した。すると番附には「ピストル強盜清水定吉、大川端捕物の場」と書いてあつた。

年の若い巡査は警部が去ると、大仰に天を仰ぎながら、長々と浩歎の獨白を述べた。何でもその意味は長い間、ピストル強盜をつけ廻してゐるが、逮捕出來ないとか云ふのだつた。それから人影でも認めたのか、彼は相手を見つからない爲、一まづ大川の水の中へ姿を隱さうと決心した。さうして後の黒幕の外へ、頭からさきに這ひこんでしまつた。その恰好は贔負眼に見ても、大川の水へ沒するよりは、蚊帳へはひるのに適當してゐた。

空虚の舞台には少時の間、波の音を思はせるらしい、大太鼓の音がするだけだつた。と、忽ち一方から、盲人が一人歩いて來た。盲人は杖をつき立ながら、その儘向うへはひらうとする、――その途端に黒幕の外から、さつきの巡査が飛び出して來た。「ピストル强盜、淸水定吉、御用だ！」――彼はさう叫ぶが早いか、いきなり盲人へ躍りかかつた。盲人は咄嗟に身構へをした。と思ふと眼がぱつちりあいた。「惜むらくは眼が小さ過ぎる。」――中佐は微笑を浮べながら、内心大人氣ない批評を下した。

舞台では立ち廻りが始まつてゐた。ピストル强盜は渾名通り、ちやんとピストルを用意してゐた。二發、三發、――――ピストルは續けさまに火を吐いた。しかし巡査は勇敢に、とうとう僞目くらに繩をかけた。兵卒たちはさすがにどよめいた。が、彼等の間からは、やはり聲一つかからなかつた。

中佐は將軍へ眼をやつた。將軍は今度も熱心に、ぢつと舞台を眺めてゐた。しかしその顏は以前よりも、遙かに柔しみを湛へてゐた。

其處へ舞台には一方から、署長とその部下とが驅けつけて來た。が、僞目くらと格鬪中、ピストルの彈丸に中つた巡査は、もう昏々と倒れてゐた。署長はすぐに活を入れた。その間に部下はいち早く、ピストル强盜の繩尻を捉らへた。その後は署長と巡査との、舊劇めいた愁歎場になつた。署長は昔の名奉行のやうに、何か云ひ遺す事はないかと云ふ。巡査は故郷に母がある、と云ふ。署長は母の事は心配するな。何かその外にも末期の際に、心殘しはないかと云ふ。巡査は何も云ふ事はない、ピストル强盜を捉へたのは、この上もない滿足だと云ふ。

――その時ひつそりした場内に、三度將軍の聲が響いた。が、今度は叱聲の代りに、深い感激の嘆聲だつた。

「偉い奴ぢや。それでこそ日本男兒ぢや。」

傳積中佐はもう一度、そつと將軍へ眼を注いだ。すると日に燒けた將軍の頰には、涙の痕が光つてゐた「將軍は善人だ。」――中佐は輕い侮蔑の中に、明るい好意をも感じ出した。

その時幕は悠々と、盛んな喝采を浴びながら、舞台の前に引かれて行つた。傳積中佐はその機會に、ひとり椅子から立ち上ると、會場の外へ歩み去つた。

三十分の後、中佐は紙卷を啣へながら、やはり同參謀の中村少佐と、村はづれの空地を歩いてゐた。

「第×師團の余興は大成功だね。N閣下は非常に喜んでゐられた。」

中村少佐はから云ふ間も、カイゼル髭の端をひねつてゐた。

「第×師團の余興？ああ、あのピストル强盜か？」

「ピストル强盜ばかりぢやない。閣下はあれから余興掛を呼んで、もう一幕臨時にやれと云はれた。今度は赤垣源藏だつたがね。何と云ふのかな、あれは？　德利の別れか？」

傳積中佐は微笑した眼に、廣い野原を眺めまはした。もう高粱の靑んだ土には、かすかに陽炎が動いてゐた。

「それも亦大成功さ。――」

中村少佐は話し續けた。

「閣下は今夜も七時から、第×師團の余興掛に、寄席的な事をやらせるさうだぜ。」

「寄席的？落語でもやらせるのかね？」

「何、講談ださうだ。水戸黃門諸國めぐり――」

傳積中佐は苦笑した。が、相手は無頓着に、元氣のよい口調を續けて行つた。

「閣下は水戸黄門が好きなのださうだ。わしは人臣としては、水戸黄門と加藤清正とに、最も敬意を拂つてゐる。——そんな事を云つてゐられた。」

穗積中佐は返事をせずに、頭の上の空を見上げた。空には柳の枝の間に、細い雲母雲が吹かれてゐた。中佐はほつと息を吐いた。

「春だね、いくら滿洲でも。」

「内地はもう袷を着てゐるだらう」

中村少佐は東京を思つた。料理の上手な細君を思つた。小學校へ行つてゐる子供を思つた。さうして——かすかに憂欝になつた。

「向うに杏が咲いてゐる。」

穗積中佐は嬉しさうに、遠い土塀に簇つた、赤い花の塊りを指した。Ecoute-moi, Madeline ………——中佐の心には何時の間にか、ユウゴオの歌が浮んでゐた。

四　父と子と

大正七年十月の或夜、中村少將、——當時の軍參謀中村少佐は、西洋風の應接室に、火のついたハヴアナを啣へながら、ぼんやり安樂椅子によりかかつてゐた。

二十年余りの閑日月は、少將を愛すべき老人にしてゐた。殊に今夜は和服のせゐか、禿げ上つた額のあたりや、肉のたるんだ口のまはりには、一層好人物じみた氣色があつた。少將は椅子の背に靠れた儘、ゆつくり周圍を眺め廻した。それから、——急にため息を洩らした。

室の壁には何處を見ても、西洋の畫の複製らしい、寫眞版の額が懸けてあつた。その或物は窓に倚つた、寂しい少女の肖像だつた。又或物は糸杉の間に、太陽の見える風景だつた。それらは皆電燈の光に、この古めかしい應接室へ、何か妙に薄ら寒い、嚴粛な空氣を與へてゐた。が、その空氣はどう云ふ譯か、少將には愉快でないらしかつた。

無言の何分かが過ぎ去つた後、突然少將は室外に、かすかなノツクの音を聞いた。

「おはひり。」

その聲と同時に室の中へは、大學の制服を着た青年が一人、背の高い姿を現した。青年は少將の前に立つと、其處にあつた椅子に手をやりながら、ぶつきらぼうにかう云つた。

「何か御用ですか？　お父さん。」

「うん。まあ、其處におかけ。」

青年は素直に腰を下した。

「何です？」

少將は返事をする爲に、青年の胸の金鈕へ、不審らしい眼をやつた。

「今日は？」

「今日は河合の――お父さんは御存知ないでせう。――僕と同じ文科の學生です。――河合の追悼會があつたものですから、今歸つたばかりなのです。」

少將はちよいと頷いた後、濃いハヴアナの煙を吐いた。それからやつと大儀さうに、肝腎の用向きを話し始めた。

「この壁にある畫だね、これは皆お前が懸け換へたのかい？」

「ええ、まだ申し上げませんでしたが、今朝僕が懸け換へたのです。いけませんか？」

「いけなくはない。いけなくはないがね、N閣下の額だけは懸けて置きたい、と思ふ。」

「この中へですか？」

青年は思はず微笑した。

「この中へ懸けてはいけないかね？」

「いけないと云ふ事もありませんが、――しかしそれは可笑しいでせう。」

「肖像畫はあすこにもあるやうぢやないか？」

少將は爐の上の壁を指した。その壁には額縁の中に、五十何歳かのレムブランドが、悠々と少將を見下してゐた。

「あれは別です。N將軍と一しよにはなりません。」

「さうか？　ぢや仕方がない。」

少將は容易に斷念した。が、又葉卷の煙を吐きながら、靜かにかう話を續けた。

「お前は、――と云ふよりもお前の年輩のものは、閣下をどう思つてゐるね？」

「別にどうも思つてはゐません。まあ、偉い軍人でせう。」

青年は老いた父の眼に、晩酌の醉を感じてゐた。

「それは偉い軍人だがね、閣下は又實に長者らしい、人懷こい性格も持つてゐられた。……」

少將は殆感傷的に、將軍の逸話を話し出した。それは日露戰役後、少將が那須野の別莊に、將軍を訪れた時の事だつた。其の日別莊へ行つて見ると、將軍夫妻は今し方、裏山へ散歩に御出かけになつた、――さう云ふ別莊番の話だつ

た。少將は案内を知つてゐたから、早速裏山へ出かける事にした。すると二三町行つた所に、綿服を纏つた將軍が、夫人と一しよに佇んでゐた。少將はこの老夫妻と、少時の間立ち話をした。が、將軍は何時までたつても、其處を立ち去らうとしなかつた。「何か此處に用でもおありですか？」——かう少將が尋ねると、將軍は急に笑ひ出した。「實はね、今妻が擇りへ行きたいと云ふものだから、わしたちについて來た學生たちが、場所を探しに行つてくれた所ぢや。」「——「丁度今頃。——もう路ばたに毬栗などが、轉がつてゐる時分だつた。」

少將は眼を細くした儘、嬉しさうに獨り微笑した。——其處へ色づいた林の中から、勢の好い中學生が、四五人同時に飛び出して來た。彼等は少將に頓着せず、將軍夫妻をとり圍むと、口々に彼等が夫人の爲に、見つけて來た場所を報告した。その上それぞれ自分の場所へ、夫人に來て貰ふやうに、無邪氣な競爭さへ始めるのだつた。「ぢやあなた方に籤を引いて貰はう。」——將軍はかう云つてから、もう一度少將に笑顏を見せた。………」

「それは罪のない話ですね。だが西洋人には聞かされないな。」

靑年も笑はずにはゐられなかつた。

「まあそんな調子でね、十二三の中學生でも、N閣下と云ひさへすれば、叔父さんのやうに懷いてゐたものだ。閣下はお前がたの思ふやうに、決して一介の武弁ぢやない。」

少將は樂しさうに話し終ると、又爐の上のレムブラントを眺めた。

「あれもやはり人格者かい？」

「ええ偉い畫描きです。」

「N閣下などとはどうだらう？」

青年の顏には當惑の色が浮んだ。

「どうと云つても困りますが、――まあ、N將軍などよりも、僕等に近い氣もちのある人です。」

「閣下のお前がたに遠いと云ふのは?」

「何と云へば好いですか?――まあ、こんな點ですね、たとへば今日追悼會のあつた、河合と云ふ男などは、やはり自殺してゐるのです。が、自殺する前に――」

青年は眞面目に父の顏を見た。

「寫眞をとる餘裕はなかつたやうです。」

今度は機嫌の好い少將の眼に、ちらりと當惑の色が浮んだ。

「寫眞をとつても好いぢやないか? 最後の記念と云ふ意味もあるし、――」

「誰の爲にですか?」

「誰と云ふ事もないが、――我々始めN閣下の最後の顏は見たいぢやないか?」

「それは少くともN將軍は、考ふべき事ではないと思ふのです。僕は將軍の自殺した氣もちは、幾分かわかるやうな氣がします。しかし寫眞をとつたのはわかりません。まさか死後その寫眞が、何處の店頭にも飾られる事を、――」

少將は殆ど憤然と、青年の言葉を遮つた。

「それは酷だ。閣下はそんな俗人ぢやない。徹頭徹尾至誠の人だ。」

しかし青年は相不變、顏色も聲も落着いてゐた。

「無論俗人ぢやなかつたでせう。至誠の人だつた事も想像出來ます。唯その至誠が僕等には、どうもはつきりのみこめ

ないのです。僕等より後の人間には、猶更通じるとは思はれません。………」

父と子とは少時の間、氣まづい沈默を續けてゐた。

「時代の違ひだね。」

少將はやつとつけ加へた。

「ええ、まあ、――――」

青年はかう云ひかけたなり、ちよいとの間外のけはひに、耳を傾けるやうな眼つきになつた。

「雨ですね。お父さん。」

「雨？」

少將は足を伸ばした儘、小さい欠伸を嚙み殺した。

「又榲桲(まるめろ)が落ちなければ好いが、………」

（終）



綾鼓

野上彌生子

人物

王　ラシド

妃　マリナア

侍從　ジャファル

家來　メスルウル

園丁　ハサン

その他廷臣四人、侍人臣人

場所　バグダットの都に近いラシド王の離宮

時　古代

庭に面して圓柱を持つてゐる大理石の迴廊。この廻廊は、中央から幾らか右手に寄つて位置を取つた廣間のために左右に分たれてゐる。廣間の正面についた階段からは直ぐ庭に下りることが出來る。その庭の左手に見えてゐる芝の一隅では、頭にきれを捲いた老人の園丁ハサンが何か庭の手入をしてゐる。階段の第一階には侍女の一と侍女の二が並んで腰かけて羊毛の絲を紡いでゐる。侍女の一が小さい紡を持ち、侍女の二が兩手を擴げて糸の輪をかけてゐる。侍女の三は一人離れて、左の廻廊の中程に立つた圓柱に横向きに凭りかかつて、床に投げ出してある羊毛の絲玉から絲を手に捲き取つてゐる。（これ等の動作と位置は臺詞の受け渡しに應じて自由に變化してよい。）

侍女の一　本統にどんな顏をしてゐれば、羊飼の分際でお妃様に戀をするなんて氣になれるのでせうね。私見てやりたいと思ひますよ。

侍女の二　侍從のジャフアル樣にお預けになつて、裏の番小屋に入れられてゐるのですつて。

侍女の三　ハサンならきつとよく知つてゐますわ。

侍女の一　（園丁を呼びかけて）ハサンや、お前さんはお妃樣に戀をしてゐると云ふ羊飼を見ましたか。どんな男なの。

ハサン　どんな男つてあなた、ただ若い男だと云ふだけのことですよ。あなた樣方が若い御婦人でゐらつしやると同じやうに。

侍女の二　そんなことが返事になりはしないわ。

侍女の三　ハサンや、あの小屋の中であの男は何をしてゐるの。戀をする者は、殊に叶はぬ戀をする者は、泣いてるか、うめいてゐるより外に、時間の立てやうはない筈だけれども。

ハサン　どうして、あの男は平氣で元氣な顏をしてゐます。時々は歌もうたつてゐます。

侍女の一　まあ、その歌のことですよ、きつと。お妃樣のことを美しいの戀しいのと云つて、大つぴらに野山をうた

つて歩いてゐたと云ふのは。ねえ、ハサンや、さうでせう。土地の言葉だから私たちには分らないと云ふけれども、お前さんになら分る筈だわ。どんな歌をうたつてゐるのだか、うたつてお聞かせ。

ハサン　ところが彼奴のは本統の土地の言葉ぢやないのです。百姓たちもあの男は何處から來たのだか分らない人間だと云つてゐます。今この邊の牧場にゐたかと思ふと急に姿が見えなくなる。さうしてまた飛んでもない時分に飛んでもない牧場へ現はれると云ふことです。巡禮に出た村の者たちは、あの男にそつくりの姿をした坊さんをメッカのお寺で見て來たなんて云つてゐます。そんな譯で彼奴の歌はきれぎれの言葉だけは分つても、すつかりの意味は土地の者にだつて誰にも分りはしないのです。――おや、またうたつてゐるな。行つて止めて來なければなるまい。あの番小屋は生憎とお妃様のお部屋から程遠くないのだから、お耳觸りになるやうなことがあつては大變だ。

ハサンが退場する。

侍女の一　ハサンの云ふことが嘘でなかつたら、その羊飼は餘程變な男だと見えますわねえ。お妃様のお顔だつて、二週間前にバグダットからこの離宮へお馬車でいらつしやる途中にたつた一と目拜んだきりだと云ふのですもの。

侍女の三　もしかしたら氣でも觸れてるのぢやないでせうか。

侍女の二　兎に角あのお妃様のお美しさだけは別なのですからね。本統にどう云つたらよいのでせう。他のどの妃様とも違つた不思議な特別な淸らかさと輝やかしさが、まはりに漂つてゐるやうで、一度見た程の者ならあの羊飼でなくたつて、決して忘られないお顔ですわ。王様だつてどんなにか大事がつてゐらつしやるのでせう。あの異常なきつい御氣性から、どれ程愛してゐらつしやる者に對しても、決して際立つた愛情を發表なさらない方が、この離宮にたつた一人あのお妃様だけをお連れになつたのを見たつて分かりますからね。――さう云へば、羊飼のことはどうして王様のお耳にお

入りになつたかお聞きになつて。

侍女の一　それはね、今朝王様が侍從のジャファル様と御家來のメスルウルだけをお連れになつて、お忍びで狩獵にいらした時に、それとは氣がつかないで百姓達が面白さうに噂をしてゐたのだと云ふことですわ。

侍女の二　道理で、今日狩獵からお歸りになつた時、お出迎をなされたお妃様をぢつと御覧になつた王様のお目つきが私には氣になつてゐましたの。

侍女の一　さうでせうか知ら。――私はまた今日はひどく御機嫌のやうだと思ひましたよ。尤もこれはお居間で狩獵の御裝束をお脱がせ申してゐた間のことですけれども。――ジャファル様をお相手に何か頻りにお話しになつては、おかしさうに笑つてお出でになりましたもの。

侍女の二　もしそれが羊飼のことであつて、さうしてすべてを笑ひ話しにしてすましてやらうと思召すのなら、珍しく寛大な御處置と云ふものですわね。

侍女の一　でも、さうでなかつたらあんなお約束はなさらない筈ぢやありませんか。――實際メスルウルをやつて羊飼をお召寄せになつたと聞いた時は、皆んなどんなお咎がある事かと怖れてゐたのですからね。――それに意外にもあゝ云ふお言葉が下つたのですもの。流石はラシド王様だと思ひましたよ。

侍女の三　私に話して聞かして下さいな。王様のなされたお約束と云ふのを。皆んな怖れて驚いたやうな、それでゐて妙に面白いことが湧いたやうな顏つきをして騷いでゐる癖に、聞いて見れば委しいことは誰も知らないらしいのですもの。――王様やお妃様はあの羊飼に今夜何をおさせになると云ふのですか。

侍女の一　私はメスルウルから聞いたのですから間違ひはないと思ひますよ。――約束と云ふのは斯うなのですつて。

向ふの花園の中のお池の縁に一本の桂の樹があるでせう。——丁度そちらの圓柱からだとまつ直ぐの見當ですわ。——日のうちならはつきり見えるのですけれど。

侍女の三　夕日の殘つてゐる梢だけが、黄金の槍の穗のやうにまだ輝いて見えますわ。

侍女の一　あの桂の樹の、池に向つた方の枝で、下から數へて丁度三つ目の枝に鼓をかけて置いて、今夜花園の後の森から昇る月が、最初の光を池の面に落すのを合圖に枝の鼓を打て、その鼓の音が御殿の奥まで聞こえたなら、戀ひ慕つてゐるお妃樣のお顏を今一度近間で拜ませてやらう、と仰しやつたのですつて。

侍女の三　まあ、浮つかりそんなお約束をなすつて、若し聞こえたらどうなさるお積りなのでせう。

侍女の二　王樣の御誓言ですもの。その時は立派にお約束をお守りになるに極つてゐますわ。

侍女の一　でもその點なら私は大丈夫だと思ひますよ。あのお池の桂の枝で打つ鼓が此處まではつきり聞こえる位なら、大空のお星樣の歩く足音だつて、時には聞こえさうなものですからね。

侍女の三　でも分かりませんわ。

侍女の二　皆んな賭をしてゐるのですつて。

侍女の一　私たちも賭けてもいいわ。

ラシド王が廣間の奥から登場する。

王　ジャファルはゐないか。——ジャファルを呼べ。（侍女の一、右手の廻廊から退場。侍女の二が續かうとするのを呼び留める。）待て、そちはメスルウルに云つて來い。——約束の桂の枝におれが今鼓をかけた。何人も近づかせないやうに嚴重に番をしろと云へ。（侍女の二退場。侍女の三も續かうとするを、又呼び留める。）そちにも用事がある。そちは園丁の

ハサンを呼んで、花園の入口の大篝火(おほかがり)に頓て火をつけろと云ふのだ。――池の小道は迷ひ易い上に、羊飼奴には馴れぬ道だ。明るく、盛んに焚いてやれと云へ。

侍女の三退場する。

王　併し、何故おれは斯んな命令を下すのだ。――あの男が池の道に迷つて、そのまゝ水に落ちて死んだと云つて、おれに何の關係があるのだ。――構はない譯ではないか。――可哀相だと云ふのか。――それとも約束の樹まで辿り着く前に彼奴に死なれて、折角の今夜の興味ある企が番狂はせになるのを怖れるのか。――本統を云へば、どちらでもない。おれはたゞジヤフアルやメスルウルの――いや彼等が代表する世間の裏をかいてやらうとするまでだ。世間は、羊飼が妃のマリナアに戀をしてゐるのを面白がる以上に、それがおれの感情にどう影響するかを面白がつてゐるのだから。――今羊飼の男が池へはまれば、世間はおれがひそかにハサンに云ひつけて突き落したのだとも云ひ兼ねない。而しておれの顔を見て意味ありげに笑ふだらう。――何もかも知つてゐると云ふ風で。いや、おれが怒つて嫉妬に燃えて羊飼奴を絞り首にでもかければ、彼等は一層面白がるのだ。彼等はそれを見たがつてゐたに相違ない。而してその領土に於て、富に於てその氣高さと美しさに於て、東邦の王の中たる王とうたはれてゐる若い獅子のラシド王も同じく人間だ。一羊飼の男を戀敵のやうに取り扱つたと云ひたかつたに相違ない。よい笑話にして、いつまでも此の世に殘し置きたかつたに相違ない。――併しさうはさせない。おれは何處までも王だ。何處までもラシド王だ。如何なる時に於ても、若い獅子王の尊嚴を傷つけたくはない。――だが、あの羊飼奴は變な奴だ。ぼろを着て、埃塗れになつて、汚い臭い手足をしてゐる癖に、昂然と威張つた顔をしてゐる。先刻(さつき)メスルウルに連れられてこの庭先へ入つて來たときの様子はどうだ。丁度何處かの王子が求婚者として戀人の宮廷に現はれたと云ふ風つきだ。それで誰に向つても仲間扱ひの口

をきいてゐる。何んと云ふ奴だ。おれはまだ生れてからあんなことを見たことがない。併しジャファルがその無禮を咎めたからおれはわざと云つてやつた。――ジャファル、捨てて置け。此奴等は森と宮廷の區別を知らないのだと。――それは嘘ではない。彼奴等は森と牧場より外は見たことがないし、百姓と羊より外には口をきいたことがないのだから。――ふん、それで仲間の女羊飼に戀をすると同じ氣でおれのマリナアに戀をしたと云ふのか。――而し、また今宵約束の鼓を見事に打つて、今一度彼女の顔を見よ と胸を躍らして待つてゐるのか。――あの汚小屋の蜘蛛の巣の中で。――たわけ奴が。――今にどんな目に逢ふか見てゐるがよい。

三人の侍女が前とは反對の順序に並んで燭を持つて右手の廻廊から再び登場する。

王　いよ／＼夜だな。――だが、今夜は多くの灯を置くな。この廻廊に射す月光の第一線が、同時にあの池の水に落ちる最初の光なのだから。――おれはそれを見誤つてはならぬ。（侍女の三が持つて來た燭だけをただ一つ、右手の廻廊から中央の廣間に通ずる角に置いて退場しようとするのを呼び留める。）おい。おれが先刻云つたことはそれ／＼屹度申しつけたか。

侍女の三　ハサンは、今宵の大篝火は特別によく燃える木が選んであると申しました。

侍女の二　メスルウルは御申しつけます／＼鹿のやうにお池の方へ飛んで參りました。

王　ジャファルはどうした。――何故來ないのだ。何をしてゐるのだ。

侍女の三　侍從樣は、お妃樣が何か御用だと仰しやつて、お部屋にお召しになつてゐらしたところでございました。――丁度只今あちらからお見えになりました。

ジャファルが左の廻廊から登場するのと引き違へに、三人の侍女たちは反對の廻廊から退場する。

王　マリナアの用事と云ふのは何だ。

ジャファル　――お妃様はあの羊飼の男を番小屋から出してしまへ。――足枷を解いて追ひ拂へと仰しやるのでございます。

王　何んだと。

ジャファル　今夜のことが不氣味になつた。何もかもやめにせい、とお仰せでございます。

王　下らない氣紛だ。――今になつてそんなことを云ひ出すことがあるものか。――殊に君を捕へてそんなことを云つたつて始まらないぢやないか。

ジャファル　いや、失禮ながらその點はお妃様にも深い御配慮があつて、ことかと存じます。――あれ程の御誓言の手前、陛下のお名に於て御中止を乞ふことは、御威光にも關はることでございますから、ただあの男をお預かり申して居る私の落度にしてすませようと思召してのお言葉と信じます。

王　併しどちらにせよ、おれが約束したことが實行されないとなれば、おれの威嚴の傷づく點に變りはない。同時にそれはおれが何よりも恥とするところだ。悩みだ。その一點だけは、おれは何人に對しても常に敢然と防いで來た。――マリナアに云つてくれ。おれが自由にあの男を解き放つまでは、あの男に手も觸れさすことは出來ない、おれが禁ずると。

ジャファル　……………

王　それも、ただ不氣味になつたと云ふだけの根據のない云ひ分で、どうしておれの企が妨げられようなどと思へるのだ。――第一、その言葉からしておれには氣に喰はない。――何を不氣味だと云ふのだ。――マリナアの怖れるのは何だ。

ジャファル　それは何とも承りません。ただひどくものに怯えたやうに、まつ青になつてお出でございます。

妃マリナアお左の廻廊に登場する。

妃　——羊飼奴がやつとうたひやめた。——あの聲が私には怖ろしい。——何故と云ふ譯もなしに私の心をおののかせる。——あれは人の聲ではない。山の暗い洞に棲む妖精の呼び聲か、でなければ森の魔神が人間の上に投げかけるまどはしの言葉であるかも知れない。——私はあんな聲を聞いたことがない。——それでゐて不思議と私があの聲をようく知つてゐるやうな氣のするのは何故だらう。——あの聲は、私が搖籃の中で聞いた子守唄が、もう一度私の鼓膜を打つたやうに響く。いいえ、子守唄よりももつと〳〵遠い以前の世界で聞いて知つてゐる歌のやうに響く。——でも、あの怖ろしさは何處から來るのだらう。耳にはこれ程親しく響く歌が、何故斯う私の心をおののかせるのだらう。あの中に何が交つてをれば、樂しくなつかしい筈のあの歌が、これ程怖ろしい、物の怪に引きずられるやうな思ひを私に起こさせるのだらう。——また歌ひ出した。——あの調子がたまらない。（逃げるやうに廣間へ行く。）ジャファル、どうしてお前はあの羊飼を追ひ出してはくれないのかい。——私があれ程頼んだことを、お前はきかない積なのかい。

王　おれが止めたのだ。彼奴を追つ拂ふ必要があれば、おれが追拂はせる。

妃　だつて、——あなたはあの男があんな調子でうたつてゐても平氣で聞いてゐらつしやられるのですか。——私も、よい鹽梅に此處までは聞こえないわ。——でも廻廊の向ふの柱まで行けばはつきり聞こえます。——あの聲とあの調子は人を氣狂ひにいたします。

王　ふん、お前が怖ろしがつてまつ青になつてゐると云ふのはその歌のことなのか。恥を知れ、マリナア。——怖れと云ふことはそれ自身の弱さを意味するのだぞ。お前はあの羊飼の男に何の弱味があるのだ。——おれの後宮に持つお前の地位を考へて見ろ。おれは自分の後宮の婦人が羊飼の男に怖れを感じるなどと云ふことは聞くのも不快だ。もつと

高い誇を持て。——どの男がどんな調子で何をうたへば、どうあるのだ。

妃　いゝえ、いけません、いけません。——あなたはあの歌を一度も耳になさらないからそんなことが仰しやられるのですわ。あの男があの歌で何をうたつてゐるかを若しおわかりになつたら。——外の言葉の意味は私にも分かりはいたしません。でも、あの歌の中であの男が呼んでゐる女の名前だけははつきりと分かりますわ。——マリナア——マリナアつて、朋輩の娘でも呼びかけるやうに、あの男は私を呼んでゐるのです。おお、あなただつて、あなたのマリナアを、羊飼の男にあんな呼び方をさせてお置きになる筈はありません。

王　併しおれは一匹の羽虫がお前のまはりにどんなうなりを立てて飛び廻らうとも、それで眞劍に怒つたり、あわてて防いだりする氣にはなれない。却つて、お前の美しさが一匹の羽虫の胸をさへ打つことは、一つの興味である。何を思ひ煩らふことがあらう。アラアは土地を焦がし過ぎて沙漠にする。併し自然だから仕方がない。お前の瞳の前に目を眩ます者があれば眩まして置け。氣を狂はすものには狂はして置け。涙を流すものには流さして置け。歌ふものには歌はして置け。——すべてが美の祭壇に捧げられた當然な贄だと思へ。少くともおれはそれ以上には考へないから平氣でゐられる。さうだ。あの羊飼の男に對しても、これがおれの全部の感情なのだ。——ジャフアル、君たちは先刻おれがあの男と今夜の約束をした時に驚いて止めようとした。あり得べからざることだと云つて諫めた。——今でも、もう一度あの言葉を繰返す氣があるかい。

ジャフアル　私共は羽虫の尺度を持つて獅子の心を測らうといたしたことを後悔いたします。併しながら、あの歌が餘りにお妃様のお耳障だとあれば、うたふことをさし止めるのは當然私の責任かと存じます。

王　君が預かつてゐる男だからと云ふのだな。——よからう。要するに、おれはあの男に歌をうたはせる約束はして

ないのだから。

ジャファル左の廻廊から退場する。

王　マリナア、歌がお前を脅かすことはもうないよ。安心しておいで。

妃　いいえ、――私にはまだ安心は出來ませんわ。――あなたが今夜のことを皆んなやめにして下さるまでは。

王　まだそんな氣紛を云つてゐる。――マリナア、どうしたのだ。おれがあの羊飼の男の話をして聞かせて、今夜の計畫を打ちあけた時に、おれと共に面白がつて笑つたのは誰なのだ。あれからまだ二時間とはたつてゐないのだぞ。

妃　いゝえ、私はあの時決してあなたに同意してはならなかつたのですわ。どんな爭ひをしてもそれをお止めいたさねばならなかつたのでした。それだのに、私の心は美の誇で浮いてゐました。丁度あなたがジャファルの前で公言した心持が、その儘私の心持なのでした。而して私の祭壇の風變りな貢を面白がつて笑ふ外には、何んにも考へようともしなかつたのでした。――おお、その二時間前に私がたつた一つのことを思ひ出してゐさへしたならば。――それを私の胸に呼び起したのは、あの歌の聲であつた。

王　それな何の意味だ。

妃　運命が私の上にかけた古い謎が、また新しく私を脅しはじめたのです。――（王に取りすがる。）あなた、あなたのマリナアが一生にただ一度するお願ひをお却けはなさらないでせう。何んにも仰しやらないで、あの羊飼を追ひ拂つて下さい。今夜のことを何もかもやめにするど仰しやつて下さい。

王　落ちついて、マリナア。よく考へなければいけない。おれは正しい理由のないことは何事もしたことがないし、またするのも好まない。お前がそれ程嘆願することならばきつとそれだけの理由があるに相違ないが、先づそれから

聞くが順當ではないか。それが今夜の計畫を中止させるに足りるだけの意義を持つてゐるかどうかは、その上で極まることだ。

妃　私ならば、——少くとも女ならば、自分の愛する者が跪まづいて賴むことにまで理由を見出さうとはいたしませんわ。

王　併しおれはお前でもなければ、女でもない。

妃　おお、私でもなければ女でもない。——本統にあなたはいつでもあなただと云ふことを私はつい忘れようといたしましたわ。——どんな瞬間だつて、——私を抱いてゐらつしやる瞬間だつて、——あなたはきつとあなたなのだと云ふことを。

王　その不平ならおれからも云へさうだ。マリナア、お前が若しあらゆる場合におれと同じく感じ、同じく行動し得るなら、おれの今夜の企てを妨害するやうなことを云ひ出さなくもすむのではないか。いや、おれは一歩を讓つてお前が中止を望む理由を聞かうとまでしてゐる。それに說明をさへ與へられないでゐるのだ。

妃　申します。——申しますわ。その代りに——

王　まあ、話して御覽。

妃　——私が十三で、姉のレベカが十六の春でした。父の家にエジプト生れの年取つた巫子が來まして、お姬樣方のお目出たい御生涯の占を判じませうと申しました。最初に判じさせたのはレベカでした。巫子は、これは輝やかしい御一生ぢや、頓て婿樣が六頭の馬に曳かせた馬車でお迎へに參りませうと申しました。けれども私が巫子の胸に手をおくと、そのお婆さんはただお前さんの牧場の草がいつも綠であるやうに、お前さんの羊の群の上にいつもお日樣が照るや

うにと云つただけでした。

王　それがどうしたのだ。——その豫言が當つてゐるとでも云ふのか、

妃　少くともレベカのだけは當つてゐると云はなければなりませんわ。——レベカがメクラン王の妻として嫁いだのは丁度その翌の年の春でしたから。

王　それならお前には十二頭の馬に黄金の車を曳かせて迎へに來ると云つても、太陽と月と星と、三つの光を合せたよりも、もつと輝やかしい生涯を約束したとしても、し過ぎると云ふことはなかつた筈ではないか。

妃　ええ、私があなたの後宮に迎へられた時には、巫子の豫言は嘲の中に葬られて、その儘誰からも忘られてしまひました。本人の私さへ思ひ出したことすらもなかつたのでした。——ほんの二時間前までは。——あの羊飼の歌を聞くまでは。——おお、あの歌の怖ろしい譯が今こそはつきりと分かりますわ。あの歌こそ巫子の豫言にかなはせるために、目に見えぬ怖ろしい者が憑いてうたはせてゐるのですわ。——お前さんの牧場の草がいつも緑であるやうに。お前さんの羊の群の上にいつもお日樣が照るやうに。——あの豫言とあの歌につながつてゐる意味が怖ろしい。

王　マリナア——

妃　いいえ、いいえ、もう何んにも仰しやらないで。——ただあの男を追ひ拂つて下さい。あなたのマリナアを不當な運命の呪から救つて下さらうとお思ひなら、あの男を遠い國へやつて下さい。世界の果へ流して下さい。

王　すべてが愚な恐怖だ。マリナア、假りにその巫子の豫言を眞實なものだとするならば、お前はおれの後宮に入る前に、先に羊飼のかみさんにでもなつてゐなければならなかつた筈だ。さうではなくて、おれの妃の一人として選ばれたのは、同時にお前になされた豫言の權威の消滅を意味するとは思はないか。現に當時それは嘲笑の中に葬られたとお前

も云つてゐる。それでよいのだ。永久に葬つてよい噂言だ。――それを何のために新しく堀り出して怖れたり、震えたりするのだ。

妃　堀り出さうとも、思ひ出さうともしなかつた。それでひとりでに堀り出され、思ひ出されるのは何故でせう。――さうしてまたこの怖ろしさは。どう紛らさうとしても紛らしきれない、身の底から湧き上る怖ろしさは。――おお、それを教へて下さい。何故だか教へて下さい。

王　教へてやらう。それは、お前が昨夜枕許の香爐に焚いたエジプトの沒藥の分量が、一とつまみ多過ぎたといふだけのことだ。

妃　ああ。――

王　今夜ゆつくり眠つて御覽。明日の朝は自分で笑ひ出すから。――またその時分にはあの羊飼奴は山の上へ歸つてのんきに羊を追つてゐる位なものだ。それに、今お前がやつきになつてあの男を追つ拂へのどうのと云ふ騷ぎをするのは、するだけが滑稽だ。さあ、もう落ちついて、先刻おれと一緒にあの男について笑つた心持を取り返さうではないか。月の出も間もあるまい。

妃　さうして、若し枝の皷が鳴つたならば、私はあの男に逢はなければならないのですね。――それがあなたのお約束なのですね。――おお、何んと云ふ怖ろしいことになつたのだらう。

王　マリナア、お前はあの遠い池の桂にかけた皷が、此處まで聞こえて來ると思つてゐるのか。

妃　初めは聞こえて來る筈はないと思つてをりました。でも今では、それも信じきれなくなりました。

王　何んと云ふ馬鹿げたことだ。マリナア、皷は鐘ではないぞ、ただ叩いただけで鳴るものかどうか、誰よりもお前が

一番よく知つてゐる筈ではないか。殊にあれだけの距離があつて、どうして聞こえるものか。また聞こえなければこそ面白いのだ。今日二人が何を笑つたか、また今夜何を笑はうとしてゐたか、考へて御覽。

妃　それを忘れはいたしませんわ。私たちはあの男が今一度私を見るために、距離も考へなければ、どう打つ樂器とも知らないで、悦んで打つことを承知したのを笑つたのですわ。而して最後に驚いて、失望して、悲しむのを今夜また笑はうとしたのですわ。――おお、でも、それがどんな危い冒險だつたかと云ふことに、あなたはまだ氣がおつきになりませんの。打てば鳴るのが鼓の自然である以上、殊にあんな氣狂ひじみた男が決心して打たうとしてゐる以上、遠いことが何んの頼みになりませう、どんな拍子でどう高い音を立てないとも限らないのですわ。その時こそ――おお、聲を聞いただけでもこれほど怖ろしい思ひのする男に、私は近間で逢はなければならない。あの男の顏を見なければならない。――いいえ、いいえ、私は逢つてはならない。あの顏を見てはならない。それはメッサを見るよりも恐いことだ。――私は私の全靈で強くそれを感じます。――と云つて、今夜の約束が解かれない以上は――ああ、どうしたらよいのだらう。――どうしたらよいのだらう。――（王の傍へ驅け寄つて取り縋らうとして驚いて叫ぶ。）おお、あなたは笑つてゐらつしやいますのね。――

王　マリナア、お前はあの鼓を普通の鼓だと信じてゐるのか。

妃　――

王　仕方がない、お前だけには云つてやらう。――あれは誰が打つても決して鳴ることのない鼓だ。

妃　――鳴ることのない鼓――

王　皮の代りに蘭草を張つた鼓だ。

妃　おゝ、あなたは――あなたは――

王　さあ、これでお前の恐怖も愁訴もすべて無意義だと云ふことが分つたか、マリナア。お前はおれの愛をもつと根深く信じてゐてよい。

妃　でも、そんなたくらみまでしてあの鼓を打たせなければならない譯が、私には分かりませんわ。

王　それはお前がおれと二人つきりでゐる時には、いつもおれが本統に誰だかと云ふことを忘れてゐるからだ。おれは王だ。おれはあらゆる場合を利用して、おれの特殊の地位と權能を周圍の者に思ひ出させなければならない人間だ。同時におれには、おれの地位と特權に相當する特殊の意志感情が賦與されてゐることを彼等に示さなければならない。彼等が泣く時におれは笑ふかも知れない。彼等が怖れる時におれは面白がるかも知れない。彼等が悲しむ時におれは悅ぶかも知れない。彼等が嫉妬する時におれは樂しむかも知れない。――さうだ、愛の問題に於てすら、おれの胸は彼等と同じ打方はしないのだと云ふことを、おれは今夜のことに依つて彼等に示さなければならないのだ。――桂にかけた鼓の音が聞こえたならば、今一度お前の顏を見せてやらうとおれがあの羊飼奴に約束した時の人々の驚き方はどうだ。おれは愉快だつた。――いや、おれはもつと懸賞を大きくしてもよかつた。今宵一夜を彼奴の小屋にお前を貸してやらうと云つても差支へなかつたのだ。この誓言は一層彼等を驚かしたに相違ないから。――而して結局鼓の聞こえないのは同じことなのだから。

妃　それをあの男は夢にも知らないのですね。鳴らない鼓だなんて夢にも知らないで悅んで打たうとしてゐるのですね。――私を一と目見るために。――いいえ、それは餘りです。殘酷過ぎますわ。あの男は――

王　しつ。ジャファルが來た。

ジャフアルが四人の廷臣と共に左の廻廊から登場する。同時に右の廻廊から三人の侍女が酒の壺と肉の皿と果物の皿を持つて登場する。

ジヤフアル　羊飼女を引き出してハサンへ渡させておきました。頓て池の縁へ達した頃でございませう。

王　月の出にはまだ幾分ある。

廷臣の一　お時計の間のお時計はただ今正六時でございました。今夜は六時十五分の月の出でございます。

王　――あの羊飼奴のおかげで飛んだ面白い月見をするな。

これ等の會話の間に三人の侍女は壺と皿を廣間の左の壁に添うて置いた卓の上に並べる。而して王のために酒を注ぐ。人物の位置は王とその傍にかけた妃を中心として、片側には人の侍女が並んで立つてをり、他の側にはジヤフアルを首位として廷臣等が並ぶ。

王　(盃をあげながら)　月の出までにお前たちの賭高をきいて置かうかな。――隠したつて駄目だ。今夜のことがお前たちのよい賭になつてゐることは、おれにはちやんと分つてゐるぞ。――ジヤフアル は幾ら賭けた。

ジヤフアル　私は八十キセン賭けました。

王　聞こえる方にか。

ジヤフアル　反對でございます。

廷臣の一　私はまたその反對の方に七十キセン賭けました。

廷臣の二　私は八十キセンを六十キセンに減じただけで、ジヤフアル と同じく聞こえない方に賭けました。

廷臣の三　私も聞こえない方で、五十キセンを賭けました。

廷臣の四　私は聞こえる方に四十キセン賭けました。

王　女たちはどちらへ賭けた。

侍女の一　私も聞こえる方に耳飾を賭けました。

侍女の二　私は聞こえない方に手鏡を賭けました。

侍女の三　私は聞こえる方に頸輪を賭けました。

王　マリナア、お前も何か賭けてやれ。

妃　これ以上私が何を賭けませう。——私自らを怖ろしい賭物としてゐる私が。——

王　よし、それではおれが賭けてやる。（腰の劍拔く）おれはこの劍を賭ける。

ジャファル　聞こえる方にでございますか。聞こえない方にでございますか。

王　（拔いた劍を捧げて誓ふやうに）勿論、聞こえない方だ。

　聞こえない方に賭けた廷臣と侍女が手をあげて萬歳を叫ぶ。その瞬間に月光が青く廻廊に射す。

妃　おお、——月が。

　一同は忽ち沈默に落ちて、それ〴〵の姿勢で、鼓の音の聞こえて來るのを待つ型を示す。半分の間。

ジャファル　鼓は終に鳴らないと見えます。——

妃　おお、——鳴らない鼓。——

王　もう少し待つてやれ。夜は長い。

ジャファル　併し今まで待つても鳴らぬ鼓が、これから聞こえようとは信じられません。——彼奴が驚いて失望して

ゐる有樣が目に見えるやうでございます。

廷臣の二　彼の不當な行爲から考へても、鼓は決して鳴る筈はないと最初から私は信じてをりました。

廷臣の三　陛下の御寛大に浴するには、彼は餘りに猥らで、僭上でございます。たとひ陛下がお宥しにならうとも、天がその儘にさし置く筈はないのでございます。

マリナア　お默り――お默り――、お前たちは何んにも云ふ資格はない。お前たちは何んにも知らない。――

王　マリナア。――氣をつけてものを云へ。

妃　私には――今夜はあなたが怖ろしくなりました。

侍女の一　(叫ぶ) メスルウルがお池の方から駈けて參ります。

メスルウルが左の庭から登場する。

メスルウル　羊飼の男が池に身を投げて死にました。

妃　おお――

王　あの池は底のない池だ。

ジャファル　鼓が鳴らないので氣が狂つたるのと見えます。

廷臣の二　氣は初めから半分以上狂つてゐたのだ。

廷臣の三　いや、天の懲罰だ。

妃　メスルウル、もつと委しく話して御覽。あの男がどんな風に約束の樹に近づいたか。どう鼓を打たうとしたか。鼓が鳴らなかつた時にどう嘆いたか。悲しんだか。――皆んな　してお聞かせ。

王　いや、それは餘計なことだ。メスルウル、かよはい婦人の前でそれ以上死の話などを決してしてはならない

妃　いいえ、構はない。――メスルウル、構はないから話しておくれ。あの男は何處からどう身を投げたの。死ぬ時に私の名前を呼ばなかつたかい。さつきまで歌の中で呼んでゐたやうに。

メスルウル　お妃様のお名前を高く二度呼んだのと、凄まじい水音が起つたのとは殆んど同時でございました。私とハサンが篝火の傍から飛んで行つた時には、明るい池の水面に、たゞ一箇所波がさわいで月影の亂れてゐたところがあつたばかりでございます。

妃　それつきりで沈んでしまつたと云ふの。――あの毒蛇と泥の底へ。――常闇の死の穴へ。――それで最後まで私を呼び續けてゐたと云ふの。――いいえ、もしかしたら、それはあの男の初めての恨みの聲であつたかも知れない。あの怖ろしい鼓の秘密がついに分らない筈はないのだから。――あの男は私に欺まされたと思つたに違ひない。さうして恨み死に死んだのかも知れない。――おお、私ではない。私ではない。お前を殺したのは私ではない。――さあ、私が頼むから今一度泥の底から出ておいで。水の上に頭を擡げて、この月の光でお前の顔を見せておくれ。私はお前が見たい。見たくなつた。見なければならない。――お前が新しく私の名を呼んで呉れたら、私は直ぐに返事をして上げます。お前は私の姿は一度見たことはあつても、聲を聞いたことはない筈だ。私がどんな優しい返事をするかお前は知らない。今一度私を呼んでお呉れ。お前の顔を見せてお呉れ。（これ等の臺詞の間に妃は左の廻廊の中央に進み、突然或る物音に耳を打たれて叫ぶ）おお、あれは鼓の音だ。

一同お驚の色を示す。けれども音は聞こえない。

王　月の光に打たれ過ぎたのだ。――マリナアを奥へ連れて行け。

三人の侍女が駈け寄つて寧からうとする。

妃　私に觸つてはいけない。——ちつとしてあれをお聞き。——鼓が鳴つてゐるではないか。

幽かな鼓の音が二つ聞こえる。一同が更に烈しい驚を示す。殊に聞こえる方に賭けた廷臣と侍女は、その驚の中に悦の想を示す。

廷臣の一　間違ひもなく鼓の音だ。

廷臣の四　賭は我々の勝だ。

ジャファル　いや、あれは波の音だ。池に風が立つて、水が岸を打つ音だ。

廷臣の二　それとも森の梟の聲かも知れない。

王　どちらでないとしても、身を投げて死んだ者が鼓を打つ筈はない。

妃　私の呼んだ聲が池の底へ屆いたのですわ。あの男は私の言葉に勵まされて今一度歸つて鼓を打たうとしたのですわ。（鼓の音がその時初めて明に三つ聞こえる）おお、あれが鼓の音でないでせうか。——

王　いや、何んと云つてもあれは鼓の音ではない。あの鼓が鳴る譯のないことはお前が知つてゐる筈だ。

妃　その鼓が鳴るのですわ。——鳴る筈のない鼓があの通り鳴つてゐるのですわ。——

鼓が烈しく鳴る。

王　——何故鳴るのだ。——あの鼓は何故鳴るのだ。

妃　おお、何故鳴るのでせう。——いいえ、あの鼓が鳴るに不思議はありません。蘭草で張つた鼓の代りに石の鼓であつたとしても、屹度鳴るに極まつてゐますわ。あの男は私を見なければならなかつたのですから。——私があの男を

見なければならないやうに。――あの男を呼んで下さい。あの男は約束を果たしました。

王　マリナア。氣を靜めなければいけない。あの男が死んで池の底へ沈んでゐることは、此處にゐる程の者は悉くメスルウルから聞いて知つてゐるではないか。

妃　でも鼓が鳴つてゐるのですもの。あの男が池の底にゐる筈はありません。あの男は桂の樹の下に立つて、私たちが呼ぶのを待つてゐるのです。それがあなたとあの男の約束であつたのですから。――約束を守つてやつて下さい。

王　約束を守らないと云ふのではない。併しお前はその履行をおれに迫る前に、今一度考へて見ようとはしないのか。先にお前が幾度もおれの前に膝まづいたのは何故か。今夜の事をすべてやめてくれ。あの男を遠い國へ追つ拂つてくれと云つたのは何故か。あの男に逢ふのを怖れたためだ。鼓を聞くのも堪へられないと震えてゐたためだ。その男にお前は今自分から進んで逢はうとしてゐる。それも今生命を失つて、鬼か幽靈になりかかつてゐるかも知れない男に。――その行爲が何を意味するかを考へて見よ。マリナア、お前を捕まうとしてゐる呪の手が見えないのか。お前はそれから遁れようとはしないのか。

妃　私にはつきり申させて下さい。私はもうあの男が怖くはなくなりました。怖いのは別な人です。――いいえ、それよりも別な事です。――私が今日まで本統の運命に逆らつて住んでゐたと云ふことですわ。十三の時のあの豫言を忘れて生きて來たと云ふことですわ。――間違つた場所に住み、間違つた寢床に眠り、間違つた人に抱かれてゐたと云ふことですわ。――お前さんの牧場の草がいつも綠であるやうに。お前さんの羊の群の上に、いつもお日樣が照るやうに。――六頭立の馬車で王の宮に入ることは、レベカだけの豫言であつたと云ふことを、私はどうして今日まで氣がつかなかつたのだらう。私は斯んな絹と寶石で包まれる代りに粗い皮衣を着なければならなかつた。（上衣を脱ぎ捨てる）

斯んな黄金の靴を穿く代りに跣足にならなければならなかつた。（靴を脱ぐ）而して私の牧場と羊の群を探しに行かなければならなかつた。おお、その牧場は何處にあるのだらう。――私の可愛い羊の群は。――（王に近づいて）あなたは知つてゐらして。――あなたの足許にマリナアが最後の膝をつきますわ。敎へて下さいまし。――いいえ、あなたが知つてゐる筈はない。あなたの知つてゐるのは鼓の鳴らぬ秘密だけだ。――おお、その鼓が鳴つたのだ。鳴つたのだ。（飛びのいて庭へ駈け下りる。）――メスルウル、あの男を呼んでおやり。あの男は約束を果したのだから、當然此處へ呼ばれなければならない。私が悦んで逢つてやると云つて呼んでお出で。――あの男ならきつと知つてゐる、私の牧場と羊のある場所を。

メスルウル　――

妃　お前は呼びに行かないのかい。――よし、よし、それなら私が自身で行くからよい。行つて逢つてやる。――どうせ私は行つてしまはなければならなかつたのだもの。

三人の侍女が駈け下りてすがる。

侍女の一　うちへお入り遊ばせ。

侍女の二　おみあしがお冷えになります。

侍女の三　お髪に露がかかります。

妃　左様なら――お前たちにも。左様なら、私が再び上らぬあの階段にも。廻廊の石の柱にも。廣間の私の馴れた椅子にも。左様なら。――私が今日まで愛したもの、愛されたもの、私の手の觸れたもの、私の足の踏んだもの、私の息のかかつたもの。――悲しい幻影の道連れのすべてへ。左様なら。――

王 (階段を駈け下りながら叫ぶ) マリナア、マリナア、行かないでくれ。ラシド王が——地のアラアが、初めて人間の足許へ膝まづく姿を見て、おれの愛を確かめてくれ。(膝まづく。) おれの強い抱擁を思ひ出してくれ。(抱擁する。) お前をこの腕から放す日のことはおれには想像されない。バグダットの後宮にある妃の數は、このカペリの野の花を寄せたより少くはない。併し天にアラアが二つないと同樣に、おれの可愛い太陽はただ一つだ。而してあの大空の光の根源が永久に宇宙から去ることがないと等しく、お前はおれから去ることは出來ない。思ひ留まつてくれ。行かないでくれ。お前はただ怖ろしい夢を見てゐるに過ぎないのだ。

妃 いいえ、その夢が丁度今覺めたのですわ。長い、怖ろしい夜の夢が。——あなたのお言葉はもう遲過ぎます。此の腕を解いて下さい。今になつてあなたの若い獅子王の誇を捨てないで下さい。その膝をあげて下さい。それは奴隷のすることで、王樣のなさることではございません。

王 おれは悅んでお前の奴隷になる。お前がさう云へば云ふ程おれは一層强くお前を抱く。一層低く膝まづく。

妃 でも、それはあなたにはお似合ひになりません。あなたは矢張り宮殿の玉座について、世界ぢうの人間を目の下に見下ろしてゐらつしやる時が、一番お美しくもあり、一番氣高くもあることをお忘れなさいますな。

王 いや、この腕にお前を抱き留めて置くためには、おれはもつと醜くなり、もつと賤しくなることをも厭はない。

妃 決して。——あなたにはそれはお出來になりません。

王 マリナア、これまで云つてもお前はおれの愛を信じないと云ふのか。

妃 あなたの愛を信じないのではございません。ただ、私はあなたの誇は、王の誇は、愛以上のものだと知つてゐるのです。

王　おお——（叫んで抱擁を解いて立ち上る。）おれは生れて今日までアラアの前より外に折らなかつた膝を、一人の女の足許に、家來と侍女の面前で折つた。

妃　それが本統のあなたのお嘆ですわ。——私を失つたことなんぞは、十二時間もたてばきれいにお忘れになります。

王　併しおれの此の新たな怖は——トルコの十萬の黒騎兵のまん中にただ一騎で取り圍まれた時でさへも、びくともしなかつたおれの胸を、初めて震はせたこの怖は——いつ止むのだ。（その時皷がまた高く鳴る。）おお、また鳴つてゐる。——あれは誰が打つのだ。おれはそれが知りたい。知らなければならぬ。

妃　私はただ行けばよい。あの男が待つてゐるのだから。——おお、今行きます。——行きます。

妃は左の庭の奥をさして駈け入る。

王　マリナア——マリナア——

王が我を忘れて四五歩追ふ。それを見て、廷臣と侍女が共に追ひかけようとするのを今度は王が制する。

王　留めるな。——誰が打つた皷だとしても、鳴つただけは事實だ。おれは羊飼の男と誓つた約束を破つたとは云はれたくない。

沈默。突然池の方に當つて騷がしい物音が起きる。ハサンの聲で、お妃樣が——お妃樣が——と叫ぶ。（幕）

暖國のいで湯に浸りて

石原純

一

南のくにの

蒼くひかつた海のおもてに、

かそかなるしろい鹽をふくみ、

有機的ななまぬるい臭ひをもつた

五月の風のそよふく日に、

こゝろの
いたましい哀傷を體感しながら、
艀舟のなかに
ゆらゆらと揺られて
このまろき灣(いりうみ)の
平らな漂遊に辿つた私。

私の瞳(め)には、
くろい山に三方をかこまれた
温泉まちの家々の屋根が
その擾(みだ)れたゆらぎをみせて、
かそかな曇りを

たゞよはせました。

はじめてとほる町々の
見慣れないもろもろが
みんな自分に衝き當ります。
ふとしたちひさな事がらが、
しかし或る心の疲れをもつて
それに出遇つてゆくものには、
むらむらと
不安を湧かせて
はげしく動悸をおこさせます。

なやめるいのちに取りて
いちいちの憂慮と怖ろしさとをこめる
私たちの
知らない未來、
それを隱す不透明な壁は
どこまで厚いことでせう。
壁のいろが
ほのかにしろく明るんだり、
ひた黒く塗られてしまつたり、
それを見凝めるのに
堪へられなくなつて、
私たちは眼をふさいであゆみます。

その立て塞いだ壁のやうに
ゆふぐれの空が灰いろに曇り落ちたときに、
溫泉まちの家々の燈が
ほつと私の兩傍に明るみました。
かなしくも傷(いた)みもだゆる心が
そのながい疲れのはてに
稍々敏くもはたらいて、
町の奥の
ひろい樹(こ)深いしづかな宿に
私の病める肉體を
しかすがに導いてゆきました。

うつしごころはた哀しきに、我が病みて、
とほき海べの湯のまちに來つ。
我れに來むさびしきことを、ひそかにも
この夜はおもふ。はやく寢ねつつ。

二

濕りをふくんだ
ひたくろい土壤。
ふしぎではありませんか、
　　そのつちくれが
すべての生を培ひます。

湯のくにの
この土にふかく掘つた
たくさんのいで湯のくちからは、
あつたかい湯が
もくもくと溢れ湧きます。

ひろびろとした庭のなかには、
湯尻のながれが
ほそい溝をつくつて
ほのぼのと湯氣だつてゐます。
湯の滲みとほる
ゆたかな土壤よ。

そこに繁りあふ木立のなかには、
夏蜜柑の樹が
たかい、くすしい香ひを放ち、
巨大なる蘇鐵が
いきいきと酸素を吐き出してゐます。

落ちつきませう、私は、
なやましい過去の紛糾を
徒らに想ひ虞れるやうに
氣おくれしてゐてはなりません。
このめぐましい湯に浸りませう。
眼を瞑つて、

ひたすらに祈り念じませう。
私のいのちを
培ふ土壤を得んがために。

ひとのいのちのくすしきを我はおもひつつ、
いで湯に浸る。この夜のおそきに。
しほからきいで湯に浸り、湯あがりに
ぬくむからだのあからみにけり。

三

あゝ、かなしい人間の像(すがた)
しろい腕(かひな)の肉

もしも敬虔なるいのち
　之にちかづき接したならば、
たふとい聖者の佛をも
そこに禮讃し得たでありませう。
もしも嚴肅なる愛が之に對したならば、
眞と善と美と、あらゆる德を
そこにも求め得たでありませう。
かぎりなく意味ぶかい。
自然の諸相。
あのひかりあふるゝ日射しのもとには、
鶵の子が
いまあかいくち嘴をうごかして

鳴いてゐます。

やさしいおきざりすの花が
つちに觸れてさいてゐます。
すべてそれらは
聖なる神のおこなひの
さながらの顕示であり得るのでせうに。

朝陽あたるつちやはらかし。夏蜜柑の
しろき花びら落ちしきにけり。

あはれ、いたはしい人間の交錯、
みづからの意識なしにさへ、
お互を蔑みしお互を傷つけ、

おのおのにゆるされたいのちを
いつ知らぬ間に犯しあふおそろしさ。
愛の名において
義の名によりて
あなたは何をなし何を欲してゐるのでせう。
すべての生くるものたちよ。
あなたのおこなひを
虔ましく深く省りみるときに、
いづこにつみのない姿を
みいだすことができるでせう。

しみじみとこゝろ泣きたり。たやすくは

いひ解きがてぬさびしさをもち。

あゝ、あらしが吹いて來ます。
あの槇や楓や夏蜜柑や、
すべての軟らかい樹々の芽をゆすぶつて、
ひどい雨粒をたゝきつけて、
いま、あらしがふいて來ます。

きのふ私のみた
小さなもずの子は
どんなにその巢のなかで
おびやかされてゐるでせう。
くろく塗つた

とたんの屋根庇を
雨水が絶えずながれてゆきます。

週期的にひやうひやうと
また攫れてざわざわと
なりさわいでゐる風の雑音、
何といふ寂しさを湧かせることでせう。
あゝ、寂しい私のこゝろのなかに
それでも
しつかりと結びついてゐる愛護の信念。
私はそのもはらなる愛を擁いて
この病める肉體の

養ひの料に得たもちませう。

つちのしたにいで湯わくなり。我がいのち
愛しさをもちてとはにいくべく。

四

二日つゞきあらし雨ふり、湧ける湯も
濁りだてるにけふ浸りをり。

槇の葉のしなやかに伸び、
梅雨ちかき
雨やまずけり。

病みてひさしく。

雨降りて木立濡れをり。
湯の宿に
湯をあみて來て
しづかにゐるも。

この朝を遲くめざめて、
母家裏に、
いで湯掘るひとのきほひ聲きく。

梅雨ちかき雨ふりつづき、濕りゐる

木立のもとをあゆむひとなし。

五

雨がたいそうひどく降りしきります。
こんな日頃には、ふしぎなことに
いつもより熱い湯が
量（かさ）おほく湧いて來て
湯ぶろにあふれながれます。
流れ落ちる湯の條（すぢ）が
脉々と縺れあはさつて
渦をつくつて湯のおもにふくらみます。
透きとほつたその淨さ、

めぐましいこの湯に浸りませう。
地殼のなかから
鹹い味を溶かして
湧きいでるこのめぐましい湯は、
いま私のたましひに
いやふかくしみ徹ります。

このゆふべこゝろこほしく湯に浸り、
いで湯をくみて口にふゝむも。
渦まきていで湯わきくる湯のくちに、
手をひたしをれば、湯はこぼれぬぬ。

じつと湯に浸つてゐると、
おだやかなこゝろが
私の胸によみがへります。
なにとなしになつかしい未來が
あの手應へのしれない
不透明な壁布のおくに、
こもつてゐるやうでもあります。
私のいのちのもとむべき
愛の對象が
やはらかくそこに
私を待つてゐるのかも知れません。

長湯に疲れた私の眼が
ひろくあたりを見まはすとき、
暖かいみなみの國の
山々には
もう麥がいちめんに黄ばんでみえます。
畝々のそろつた線條が
陽おもての斜面に
きつちりと並んで
四角に劃られてゐるではありませんか。
蜜柑ばたけの
若い葉並みが
つやつやと伸びきつた間には

しろい花でいつぱいに
ゆかしい香はしさを湛へてゐます。

山裾の畑みちに來て、海あをく
ひかれるを見る。町屋根をこえて。
たかだかと材を結ひ立てゝ、いで湯掘る
畑なかのみちに。けふも來にけり。

病めるからだの
ゆるやかに歩みをうつしながら、
私はそこに
どんな感激を得たことでしたらう。

六

限りない錯綜、
しかして
太陽と地殻と、その間に在るすべての
　　　　もの丶抱擁、
たゞしき理解、
ほんとうに、ほんとうにさうであります。
人間と人間との對立として、
最も合理的に
希求していゝものは、
これを措いて外にはありますまい。

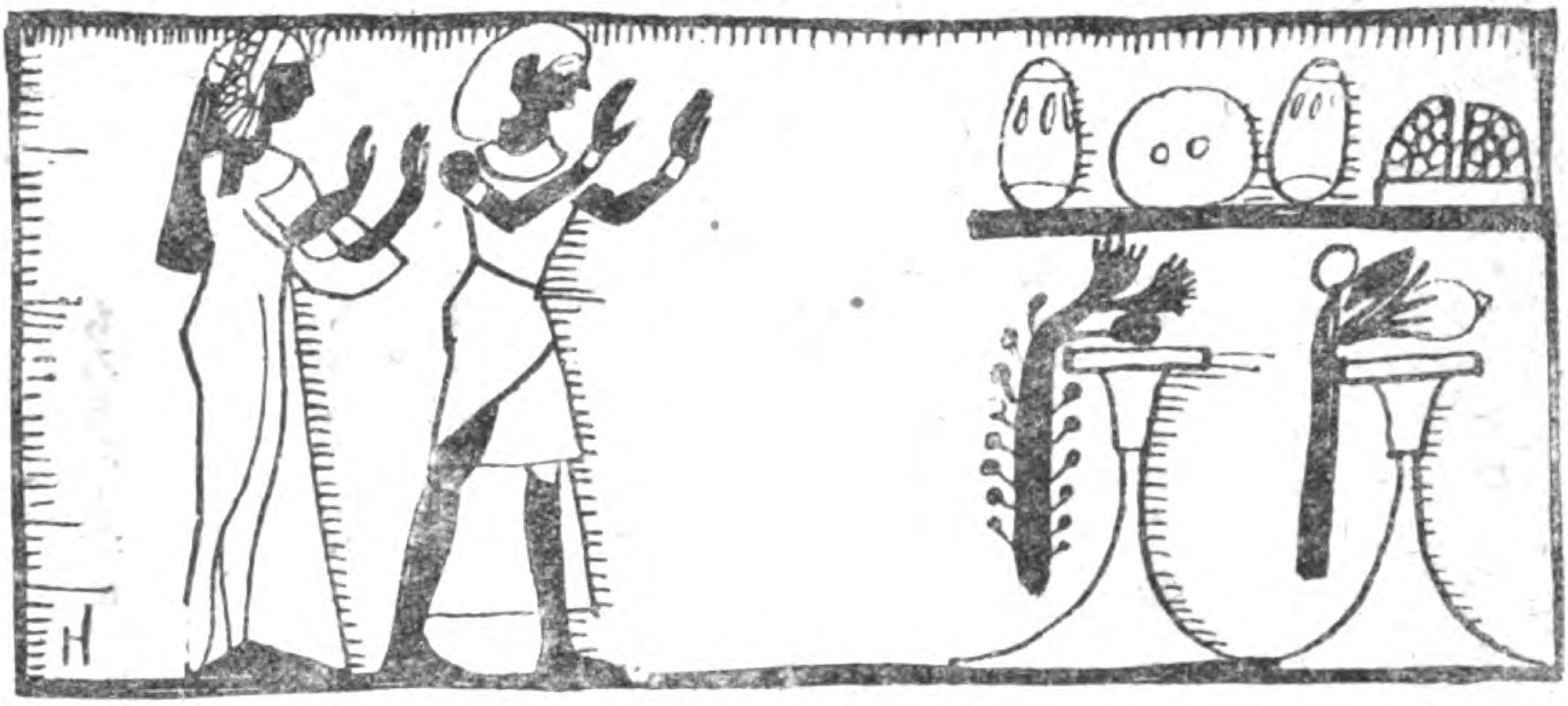
お互のまごころがひらき合つて
あたゝかさが相通ふとき、
もつれ合つた感情も
ぴつたりと融和します。
歪んだみにくさも
その直さにかへります。
いたはしい傷ぐちが縫ひあはされ、
さうして至神の愛が
私たちの間に充ちわたるとき、
私はその日を待ちませう。
とほくとも待ちませう。
私の愛する

もろもろと共に。

あの海のむかうに

陽が鮮やきはじめます。

（附記）　私は或る三部連作の一つとしてのつもりで之をつくつてゐました。さう云ふこゝろもちが此の作にこもつてゐることを豫め述べておきます。尙ほ私は自分の最初の試みとしてこの詩作のなかへ短歌の諧律を交響的に挾んでみました。私の豫期しただけの多様な効果が、それによりて達せられてゐるがどうか判かりませんが、私はなほひそかに、この作の推敲の到らないことを自分に愧れてゐます。



片方の心

有島生馬

一

博士、雨降つて地かたまるといふが、もう少し降らずにゐてくれゝばよかつた。電車で歸る方々に御氣の毒だつたね。

(戸外では雷雨の音がしきりに聞えてゐた)

鐵也、さうです、少し早く降り出し過ぎました。

(廣間に入りながら話合つて來た二人は、シルクハットと外套とを卓の上に片よせてのせた。博士は奥の卓の前に坐つて、白手袋をぬぎながらいかにも滿足相であつた。)

鐵也、今日は何から何まで一方ならぬ御配慮に預りまして、誠に有難うございました。……厚く御禮を申上ます。

博士、いや式も滯りなく濟んで何よりだつた。これで私も本統に安心した。娘を無事に結婚させた時の親の喜……まあそれは察して下さい。

鐵也、……。

博士、京子は御承知の通りの娘で、あなたのやうな學者の半身として一生面倒を見て頂くやうな資格がある女ではないが、かうして縁があつた上はどうぞ末長く幸福に暮させてやつて下さい。今更らめくが私のこの一言は生涯忘れずにゐて下さい。（博士は鄭寧に挨拶した。）年をとると喜びの時にも悲みを思ひ悲みの時にも悲みを思ふやうになるものだ。

（から博士は鐵也に話してゐた間に博士夫人は盛裝のまゝの京子と廣間に這入つて來てゐた。）

夫人、まあ〳〵無事にお開きにおなりましてお芽出度うございました。

博士、お互にお芽出度う。三人ぎりの家庭が四人になり、その四人がまた段々に增へて行く、本統にこれより芽出度い事はない。

夫人、お前もだまつてゐないで、御父樣や鐵也さんにお禮をお云ひなさい。

京子、お父樣色々有難うございました。……それから……

（とのみ先を云ひ得ないで、京子はお辭儀一つしてもぢ〳〵してゐた。）

博士、それからだけでおしまひかい、あは……。

夫人、杉や梅や、さあ〳〵そんな處でのぞいてゐないで、こつちに出て來て御祝儀を申上げたらいゝでせう。

下女等三人、はい、旦那樣此度はお芽出度うございます。

博士、やあ、どうもありがたう、ことに杉には長い間お世話になつた。杉が來てから何年になるかね。

杉、丁度十二年目でございます。

博士、では京子の十二の時から世話になつたわけだね。ふうん………

下女等一同、奥様お芽出度うございます。

夫人、お前達にはほんとうにいろ〳〵お世話になつた。けふは式もにぎやかに萬事都合よくお開きになつたから、喜んでおくれ。

下女等一同、若旦那様お芽出度うございます、御孃様お芽出度うございます。

夫人、若旦那様は大出來だつたけれども、もうお孃様じやないよ。

一同、あはゝ………（大笑ひ）

（博士が夫人に眼くばせしたので、夫人は隣の部屋に立つて行つて、白木の三寳を持つて出て來た。）

夫人、お前達にはいつもいそがしい思ひばかりさせて、こんな御芽出度い時でもゆつくり御馳走することも出來ないんだよ。ほんのおしるしばかりだけれども、おなまぐさで上げるから、めい〳〵勝手なものを祝つておくれ。………これは杉。

（此時隣室から電鈴の音が聞えたので、鶴が飛んで出て行つた。）

鶴、もし〳〵どなた……おやおかしいね……もし〳〵どなたです、どうしたんだろう、……混線してゐるかしら。

（電話室から戻つて來た。）

京子、（少し不安らしく）どうしたの鶴。

鶴、何んでございますか、誰も出て居りません、混線でございませう。

夫人、これは鶴、お前に上げます。

（又電鈴が鳴つたので梅が出た。）

梅　もし〳〵どなた、……もし〳〵どなた、……おかしいねどうしたんだろう、……

今電話どころぢやないんだよ……今度は私の番なんだらうね。

（梅も要領を得ないで歸つて來た。）

夫人、ではこれは梅に。

下女等一同、御丁寧に一〻有難うございました。

（又けたゝましく電鈴が鳴りひゞいた。）

鐵也、おやどうしたといふ電話なのだろう。

京子、杉一寸お待ち、私が出て見るから、もし〳〵……もし〳〵……おやおかしい、……もし〳〵

（そのうち京子色靑ざめて電話室からよろけ出て來た、……一同は不安の思ひにおそはれた。）

夫人、京子どうしたの。

京子、どうもしませんけど……やつぱり混線なのでせうか……。

夫人、どうしたんだらう、いやな電話だね。

（電鈴が又前よりも烈しく鳴つた。）

夫人、今度は私が出てみますわ。

鐵也、一寸お待ち下さい、私が出ます。

（鐵也は電話室に走つて行つて、受話器をはづすとそのまゝ耳にもあてず、電話器の上にのせて置いてしまつた。）

鐵也、混線でせう、かうして受話器をはづして置けばもう大丈夫です。

（一同沈默、下女等は、お辭儀をして下つてしまつた。）

博士、どら、私は失敬してこの窮屈袋をぬがして貰はうか。

（博士立ち上つた。）

京子、御母樣、では私ももう着替えてよろしうございますの。

博士、いや花婿花嫁は窮屈でももう暫くそうしてゐて貰はう、晩餐にお見えになる方々もあるし、そんな着物は一生に二度と着ることの出來ないものだ。着てゐられるだけ長く着てゐておくれ。

（博士が出て行くあとを追つて夫人も立つた。）

夫人、御召し替えですか。

（電鈴又鳴る）

博士、おや。

鐵也、（京子を注視しながら）神鳴が鳴つてゐますから、それに感電してゐるのでせう。

夫人、まあ、……そんなことがあるものでせうか。

（二人は隣室へ行つてしまつた。）

二

京子、神鳴が感電するなんてことがほんとにあるのでございませうか、

鐵也、無いこともないでせう。解らない事は解るまではないやうなものだから。

京子、……ではあなたは何でもそういふ風に世の中の事をあきらめて考へてゐらつしやるのですか。

鐵也、私は解らないことを無理に解らふとおもふより、解ることの方を一そう確實にしたいと思つてゐるばかりだ。

京子、それでは私共の結婚に就ては。

鐵也、私は先ず何よりも先生を尊敬してゐる。さうして又先生の御幸福の何んであるかも諒解してゐるつもりだ。私としては諒解の出來た事は理性の力でその當然な結果へ達することが出來るものと思つてゐる。

京子、でも、もうそれがお出來にならなくなつたら。

（電鈴が又鳴つた。二人は青ざめて立ちすくんだ。）

京子、もしこの電鈴のやうにあなたにもお解りにならない事が起つたら、どうなさいますの。

鐵也、仕方がありません、無いことでも有ると信じ、有ることでも無いと信じるのです。信じて愛し憐み同情する外なくなります。

京子、ではあなたは私をも……。

鐵也、そのことはどうぞいはないで下さい。

京子、有難うございます。然しそれだけ私は苦しみます。

鐵也、あなたと一緒に私も苦しみませう、……然し御父樣は成付いてはいらつしやらないでせうか。

京子、それは分りません。

鐵也、では御母樣は。

京子、母とは全く別々な考で生きてゐます。でもこんなに互に離れては生きられないほど親密に暮してゐるのですから

いつ感付かれたか解りません。

鐵也、それだつたら私の苦心も……いや私共の苦心も皆な空しい水の泡ですね。御母樣にしろ、御父樣にしろどんなに心中で心配なさつてゐるか解らない。

（博士は紋服に着替えて夫人と共に出て來た。）

博士、時に鐵也君には久しく逢はなかつたのだね。あれから一週間もたつかね。

鐵也、はい、その位たちます。毎日のやうに上つてゐて、一週間も上らないと、淋しい氣がします。

博士、私もそれはそうだ。論文の淨書はもう出來上つたの。

鐵也、えゝ、あの心臟の××の部分は出來上りましたが、まだ××の××が訂正してありませんから、それを仕上げた上で淨書させ、一緒に出したいと思つてゐます。

博士、君が最後まで問題にしてゐた××の××と××の關係はどう片付けました。

鐵也　あれはやはり先生のお說に近よつて來たので先生の發見なすつた××劑の功力を保證する結果になるだらうと思ひます。

博士、それは非常に愉快だ。××の××と××との研究はぜひとも協力して仕上げたいものだが、あの一件の疑問が今後どうなるか。

鐵也、私もそのことを考へるとじつとしてゐられない程、焦つて來ますが、どうも實驗の出來ない點ではあるし……。

（二人は以上の話をしてゐた間に、夫人と京子とは次のやうな話を取替してゐた。）

京子、そうよ、來ていらしつてね。お謡だつたでせう。

夫人、岡部さんも見えていらしつたね。

京子、えゝ、いゝお帯だつたわね。學校の方は大概來て下さつてよ。もう奥様になつた方の方が多いゝわ。まだいらつしやらない方は杉本さんに、山口さん位なものよ。……それにおなくなりになつた方も二人あるわ。

（そういひながら肩で深い溜息をした。）

夫人、それでもね、ほんとに皆さんよく來て下さつたね。

京子、來て下さらないでもいゝのに。

夫人、そんなことといふものではありませんよ。あゝして一時間か二時間でも、來て下さるといふのは、よほどの御厚意がなくては出來ないことだよ。

京子、それはさうですけれども、その御厚意をうけるといふことは考へてみればつらひことなのよ。

夫人、まあ、あなたの云ひ樣はなんです。（氣をかへて）岡田先生には久しぶりでお目にかかつたが、隨分お年をお取りになつたね。

京子、おつむりなんかもうまつ白ね。

夫人、内の御父樣とおなじ位だつたかしら。

京子、もう六十におなりになるでせう。少し御上よ。

（電鈴の音があわたゞしくひゞいたので、四人の會話はとぎれた。博士は苦し相に。）

博士、またか。

鐵也、又鳴りましたなあ。

京子、いゝえ、今度のは電話の鈴ではないでせう。

鐵也、いや電話だつた。

京子、私は玄關のベルかと思ひました。

夫人、私には兩方が一度になつたやうに聞こえました。

博士、私にも電話のやうに聞こえた。

（又電鈴がなつた。然し遠く玄關からのみ聞こえた。）

鐵也、あゝやつぱり玄關からだつたか。不思議だな。僕には電話のベルのやうにしか聞こえなかつた。

（梅は一枚の名刺を持て來て博士に渡した。）

博士、鈴木幹一、どうも覺えのない人だ。

（京子は一人顏の色を變へて驚いた。）

博士、どうも私には記憶はないが、……あゝさうだ、かういつてをくれ、今日は一寸手に取込みがございますが、御用の向は何でございませう、まあさういつて聞いてみておくれ。

梅、はい、かしこまりました。

博士、（後から呼止めて。）おい一寸待つた。一體どういふなりの方だ。

梅、何んでございますか、きたない洋服を着て、あたまの先から足の先までぬれ鼠のやうになつた老爺さんでございます。

（博士一寸首をかしげてゐたが。）

博士、よし今云つたやうにさう云つてをくれ、……誰だつたろう。どうも思ひ出せないが。さうかといつてまんざら始めて聞いた名のやうでもないし。
梅、さう申上げましたら、お取込みのあることも承知してをりましたが、ぜひ只今先生にお目にかゝつて一寸五分でもお話したいことがあるからと、おつしやいました。
博士、さう、それならどうぞこちらへ。
鐵也、先生お逢ひになりますか、……今日はおやめになつては如何です。
博士、なぜだい。
鐵也、別になぜつてこともありませんけれども……。
博士、それなら、この雨ふりではあり、老人だといふから一寸逢つてやらう、……お前達は暫くむかふに行つておいで。
（みすぼらしい老人雨にぬれたまゝ、小さい箱をたづさへて這入つて來て、京子とすれちがひに顔を見合つた。）

三

老人、始めてお目にかゝりますのに、突然御取込みの中をおさまたげして申譯ございません。
博士、いゝえ、どうぞそれへおかけ下さい。
老人、私がかうして急に上つた譯は私の息子がほとんど一命をかけて作りました解剖の標本が只今しがた出來上りましたからでございます。……息子の云ひますには、これをぜひ一刻も早く先生にお目にかけたいからどうぞ持つて行つてくれと私に頼みますのでございます。
博士、それは少しも思ひがけないことですが、一體あなたの御子息はさういふものをお作りになるのが御商賣なのです

か。

老人、商賈といへば商賈でせうが、まず妙な商賈です。

博士、さうしてそれは何んの標本です。

老人、心臓の標本です。

博士、では早速ながら拝見いたしませう。

老人、はい。どうぞ御覧下さい。

（老人ふろしきをといて小箱を机の上にさし出す、博士、箱のふたを取つて血なまぐさい心臓を取り出した。）

博士、これは驚いた。こんな標本を私はこの年まで見たことがない。解剖の實驗室でもこんな濕い。血の滴つてゐる、生きた心臓は見たことがない。

鐵也、これが標本でせうか。

老人、さうです。これが息子の作つた心臓の標本です。

博士、この心臓は濕い、脈を打つてゐる、動いてゐる、生きてゐる。

老人、生きてゐる、（冷かに笑つたが。）生きてゐる、……しかしそれ以上です。

博士、生きてゐる以上とは。

老人、なかに、魂が有りますから。

博士、なるほど、それはあるかもしれない。しかし私の智恵では生きてゐるといふこと以上のことはわからない。

老人、そうでせう。しかしまだあります。

博士、何がです。

老人、愛があります。生きてゐるものがなぜ死にかはつて行くか。生といふ限りある瞬間から死といふ無限世界にのぼつて行く偉大な動力もその力によつて支配されてゐるのでせう。

博士、私にはあなたのおつしやることはよくわかりかねます。

老人、ともかく、これは私の息子が一命を増して作つた傑作なのですからどうかあなた方の研究に遺憾なく御役達下さることを衷心から希望いたします。

博士、御厚意にそむきますまい。ことに私共が目下研究してをります問題は、この標本がどの位有効であるかは失禮ながらこれを作つた方も御想像なさらなかつたらうと思ひます。

老人、さあ、それはどうですか、………息子のこれを作つた考へは失禮ながら又あなた方の學問の想像も及ばないところかと私は思ひます。

（三人默然向合つて立つてゐた。）

老人、ではこれで私は失禮いたしませう。

博士、もうお歸りですか。伺ひたいことがまだ澤山ございますが。

老人、私の申し上げたいことは大概申上げました。………では左樣なら。

博士、御急ぎでなかつたら……。

老人、急ぎもしませんが何れもう一度お目にかゝります。

（老人は消えるやうに居なくなつてしまつた。）

四

博士、不思議な老人だ、

鐵也、不思議な標本です。しかし吾々の研究に取つて此上もない珍い標本が授けられたものだ。××と××との關係に此標本がどの位有力な助言をしてくれるかしれない。

博士、全く吾々の研究は急にこれによつて光明をえたわけだ。

（二人が此會話を交してゐた間に、京子はそつと奥から出て來て二人の後から血の滴つてゐる心臓を見、青くなつて長椅子の上に倒れた。）

鐵也、心臓の動悸が急に烈しくなつたやうです。……はてな。

博士、さうかしら。

（手で丁寧に心臓をさはつて見た。）

博士、なるほど急に烈しくなつて來た。

鐵也、此處に聴診器がありました。

（内かくしからそれを取出して博士に渡した。）

博士、なるほど、ふう……ん、心臓麻痺の狀態があらはれて來てゐる。ふうん、ことにかう押えて壓迫すると、××の××が××になる、こつちから壓迫すると××は××に變つて行く、どうもさうだ。ふうん、ふうん、ふうん、……君も聞いてみ給へ。

鐵也、（聴診器を受取つて）ふうん、なるほど、ふうん、此處を少し開けてみたいものですな。××と××との最後の大

切な關係がわかります。

博士、さうだ。

鐵也、開けてもいゝでせうか。

博士、メスがないだらう。

鐵也、ナイフを持つてゐます。

博士、これを川し給へ。

(博士が心臓に切り付けると血がほとばしつた。——京子は一度長椅子から起き上つたが呻いて氣絶してしまつた。此間に夫人不安の面持で走り來り京子に抱き付いた。)

博士、鐵也、これは人間の最後だ、生命の終りだ。

夫人、(獨言のやうに) これが最後ですか、もう言切れなのですか。

鐵也、生死はこんな簡單な事實に過ぎません。

夫人、ではもう死んだんですか。

博士、もうかすかな脈搏もない。

鐵也、血液の巡行がとまつて、凝固して行きます、……あゝもう冷めたくなつて來た。

夫人、あゝもう冷めたくなつて來た。ではこれで死んだのですか。どうして京子は死んだのです。

(最後の言葉を大聲で呼んだので、博士と鐵也は驚いて後をふりむいて京子を見た。)

夫人、ではもう京子は死んだのでございますか。

（鐵也、走りよつて京子を抱き上げたが、京子にはもう意識がなかつた――博士は聽診器を心臟にあてゝ。）

博士、鐵也、全くおんなじ現象がこの心臟にも起つたわけだ。

夫人、あなた何を云つていらしやるのです。京子が死んだのではありませんか。

博士、京子が死んだ……京子が死んだ、京子、お前はどうして死んだのだ……どうして一言もいはないで死んだのだ。

京子、お前はほんとに死んだのか、私は夢をみてゐる。どうしてもほんとうには思はれない。……京子、どうして死んだ。

（電鈴が鳴つた、三人驚いてその方を見た。）

博士、又ベルがなる。

（梅がはいつて來た。）

梅、先程の方がお見えになりました。

夫人、お客樣どころですか、御孃樣はおなくなりになつたのだよ。

（梅は驚いて倒れてしまつた。）

五

（再び電話がなつた。――鈴木老人右手に白張の提灯を下げて這入つて來た。その後から二つの白木の寢棺を舁いだ人人が續いて來た。）

老人、御迎へに來ました。（獨言のやうに）こんなに早くまた來ようとは思はなかつた……。

夫人、又あの厭な人が這入つて來た。早く追ひ歸して下さい。

（博士は京子のそばをはなれて老人の方によろけよつた。）

博士、誰に頼まれて斷りもなくはいつて來たのです。失禮でせう。

老人、京子さんに頼まれて御迎に來ました。

夫人、いけません、いけません。京子は私のものです。

（老人博士に。）

老人、ではもう用意はおよろしいのですか。

博士、何んの用意です。

老人、京子さんの御迎の。

（さう云つて左手で合圖をした。一つの柩は京子の方へ進みよつた。鐵也は空しくそれと格鬪した。）

老人、ではあすこにある片方の心臟も序に頂いて歸ります。（終）（十年十一月二十一日。）



或る男

武者小路實篤

九十三

彼はトルストイによつて自分の生活を否定し出した。現代の社會組織のまちがつてゐることは自づと彼の口にのぼつた。彼の母は彼の思想が、所謂危險思想になりつゝあることを感じた。しかし彼の母は、さう云ふ點で彼に交渉はしなかつた。彼は何を云つても聞かない男だと云ふことは知つてゐた。又男はその位の氣がいが必要なことも知つてゐた。しかしそれを決してよろこんでゐるわけではなかつた。しかし彼の兄や、叔父に相談すれば、二人ともトルストイには厚意をもつてゐた。たゞ彼のトルストイにかぶれすぎるのを恐れてはゐたがさはればさはる程、反つて籔蛇のことを知つてゐた。反對もせず、賛成もせず、さはらぬ神に祟りなしと云ふ態度をとられた。彼はよみたいものをよみ考へたいことを考へた。彼は生活をかへたいと云ふ慾望を強く感じた。郊外に一人で住みたいと云ふ氣が強くなつた。しかしそれは許されなかつた。彼は自

分の家において段々生活を單純にしてゆかうと思つた。肉食するのが段々氣がひけて來た。しかしそれをやめなければならないとまでは思はなかつた。しかし朝だけ精進をすることにした。そして一冬火を一切遠ざけた。友達がくると火をもつて來てもらうが、友達が歸るとすぐ火を遠ざけた。彼の母は彼の身體を心配して反對したが、彼は聞かなかつた。彼は一寸云ひ出したことは、どうしてもあとにひくことは嫌ひだつた。云ひ出した以上、折れるわけにはゆかなかつた。だから母もあきらめた。

しかし彼は喉がよはいので、どうかすると風邪をひいた。母は彼に厚着させたがつた。しかし彼は、二枚の着物をもたぬ人のことを考へた。そして自分の生活を出來るだけ質素にし、身體をきたへたく思つた。それで羽織を着るのをいやがつた。それを母は心配して着せたがつた。羽織を着るとか着ないとかでよく彼は母と口論をした。

その時分彼の兄は結婚して、彼は往來に面した長屋に住んでゐた。彼の室の隣りに、祖母達が住んでゐ、又、叔母が從妹と住んでゐた。其處に御別宅にゐた從妹も世話になつてゐた。御別宅の人達はその時分引越してゐた。その從妹は、妾腹の子であつて、本當の母は行方がわからなかつた。

彼が風邪のなほり切らない内に友達の處へ出かけて冬の夜おそく歸つてくると、彼の母は門に出て彼の歸るのを待つてゐて、彼の歸りの遲いのを非難する。

「私がこんなにお前の身體を心配してゐるのだから、少しは早く歸つて來てくれてもよささうなものだ」

「私の身體は私の方が知つてゐますよ。もう門へ出て待つのはよして下さい。友達の處へ行つたつて氣樂になれませんから」

彼は母の愛を感じるよりも、母のしつこいのに不快を感じる。自分の子供許りを愛して他人の不幸に平氣な母のエゴ

イストに腹をたてる。

「今度から起きてゐたら承知しません。なほおそくまで友達の處にゐますから、そのつもりでゐて下さい。本當にうるさい」

そんなことを怒鳴つて、殊に母に挨拶もせずに、まるで敵にものを云ふやうに口をきいて彼は自分のつめたい室に一人歸つてくる。

「本當にうるさくていやになる」

彼は、母の子供あつかいする愛に腹をたてたやうに、氣まりのわるい云ひわけのやうに一人ごとする。そして彼は寢床に入つて明りを消した時、

彼はその從妹が、女中と話してゐる話をふと聞いた。

「本當にお母さんのある方は仕合せね、羨、羨やましいわ。」

彼は母の愛には食傷して來た。早く獨立したかつた。センチメンタルな愛からのがれたかつた。荒波にもまれたかつた。子供あつかいされたくなかつた。

しかし彼は家を出る勇氣はなかつた。

そしてたゞよく癇癪を起した。夜なかに志賀の處に出かけやうとした時、母は風がふくからと云つてとめた。彼は腹をたてた。

「もつとさむい夜に夜店を出したり、旗をふつたりする人のことを思つて御らんなさい」

彼は本當に腹をたてゝ家をとび出す、しかし飛び出すと急に母が氣の毒になる。ひどいことを云ひすぎた氣がする。

母は怒る氣ちやないのだ。しかし彼は腹をたてたのはやむを得ないと思ふ。自分の氣が狂ひさうな程、腹がたつのだから仕方がないと思ふ。母は自分の戀の敵である。自分の彼女とわかれる時、母はそれを看守した。そして十分に一生のわかれを氣持ちよくわかれさゝなかつた。そんなことまで考へた。怒るのは無理はない。仕方がない。さう思ふ。しかし志賀の處へ行つて志賀と話したらすぐにそんな氣はとんでいつた。

或時、彼の母は、彼にこう云つた。

「お前は、自分の強情をはり通す爲には、私が死ぬと云つても、平氣で見てゐるだらう」

彼はそれを聞いた時、本當にさうだと思つた。自分が正しいと思ふことをする時、母がもし反對して、自殺すると云つておどかしたら、彼は自殺して下さい、見てゐますからと自分は云ひかねない男だと思つた。

しかし彼は母を愛した。無抵抗の愛には叶はなかつた。彼の日記にはかうかいてある。

「今朝目がさめたのは六時半頃だつたらう。起きやうと思つたが、寢ころんで空想してゐる方が遙かに樂だつたから、起きないでゐたら庭から下駄をはいて急いでくる足音が聞へた。なんだらう？　こんなことはこの前吉光君が死なれた時、正親町から電話がかゝつた時だけだから、又電話か知らんと思つてゐたら、障子をあけて入つてこられたのは母だ
「まだ寢てゐたので安心した。これで早く起きて來た甲斐があつた。今日は寒いからシヤツを二つ着けておくれ」と云はれたので、「寒くない」と何時ものやうに云ふ勇氣なく、「はい」と云つた。母は喜んで去られた。何時もながら母の愛には叶はない。釋迦も母があつたらと思つたこともあつたが、一層感じた。あゝ何時か良心の命に從はんために……あゝ

（一九〇六、三、二三、）

しかし彼が家出の出來ない理由は母をすてるのを恐れたゞけだととることは出來ない。彼は家をとび出しても何をし

たらいゝかを知らなかつた。又彼は自活するだけの力も勇氣もなく、又たゞ自活するだけで滿足も出來ない男であつた

九十四

お貞さんが彼とわかれて二年程した時だつた、或日母は彼に一つの寫眞を見せた。それはお貞さんがお靜さんと有志の看護婦になつた時の寫眞であつた。彼はそれを見た時、お貞さんのことをはつ切り思ひだした。彼は泣き顔を母に見せるのがいやで、その場を逃げだした、その樣子が異常であつたので、母は彼のあとをおつた。彼は母の前から逃げ切れない内に、悲しみをこらへることは出來なかつた。そして聲をあげて泣いてしまつた。

母はそれを見て心から同情するやうに云つた。

「お前はそれ程までお貞さんのことを思つてゐたのか」

それから彼の前で誰もお貞さんの話をするものはなかつた。

彼がその年の夏休みであつたらう。金田に海水浴に行つてゐた時、例の從妹の處に一通の手紙が來た。彼は何氣なく見たら、それはお貞さんの手紙で、姓が既にかはつてゐた。それで始めて彼はお貞さんが人妻になつたことを知つた。

その後も彼れはお貞さんのことを思はない日はなかつた。とりかへしのつかない淋しさをその都度彼は感じた。

それが翌年の春、最後の力をもつて彼をおそつた。お貞さんとわかれてから春は彼にとつて禁物の時期であつた。それはお貞さんとわかれた時候なので、見るもの、聞くものが、別れを思はした。それがその春、殊に強く彼をおそつた。

彼はこの調子では氣がちがひはしないかと思ふ程淋しかつた。彼の日記にはこんなことがかゝれてゐる。

「昨夜又ジー（彼女）の夢を見た、先日前橋の汽車中、今度の御祭りを見に來て家に來てゐたらどんなだらうと望ましいやうな、恐ろしいやうな氣がしたが、家に居ないので安心したやうなものゝ、なんとなく心細かつた。一日頃は甚だ

氣持がよく一生獨身でゐて見せると思つたが。今朝覺めると何とも云へない淋しい氣がした。どう云ふわけだらう。どうしてこんなにまであのことは引力が強いのだらう。僕はどうしてこんなに弱いのだらうと思つた。」(一九〇六、五、四)

しかし彼はこのさびしさを一人の女によつていく分か慰められだしてゐた。それは十四になるまきと云ふ小間使だつた。その翌々日の日記に、「田園生活！　吾人は三年の短かゝらざる時間を、都に過し能はざるべしと思ふ。或者なくば、この一年も」と、

この或者はまきであつた。それより二十日程前の日記にも「ある引力、ある引力汝の力は何に故にさまで強いか」とかいてゐる。しかし彼がまきを本當に愛しだしたのはもう少し前のことだつた。

三月三十一日の午後彼は母とまきと三人で菊の苗を植へかへた。その時、田端で生れた田舎育ちのまきは甲斐々々しく裸足になつて菊を植へた。その姿を見た時、彼はまきの内に清い美を感じた。

彼は求めてゐたものが、自分のわきにゐることを感じた。彼はまきの力で家川の決心を強めずにうちにおちつける氣持になつた。

しかし彼は、まきに戀を打ちあけやうとは思はなかつた。樣子を見て、本當に自分のためには一生をよろこんですて、そして自分の使命を果すのに役に立つ決心を持ち得るのを知るまで彼は樣子を見てゐたく思つた。相手はまだ十四であつた。そして彼の家には少くも二三年以上はゐさうな口ぶりだつたから。

處が、その時分彼の家に一人の書生がゐた。それは女のためにしくぢつて家から勘當されてゐた男だつた。人のいゝ、しかしにぶい感じのする、生々した處のない、にやけた男だつた。それがまきに露骨に厚意を見せだした。それが他の女中の笑ひ種になつた、そしてまきはそれをいやがつてゐた。

彼はそれを噂で知つたが、滑稽な事位いなことに思つてゐた。處が書生は、暇をもらつて旅行した時旅行さきからまきに毎日のやうに何かものを送つた。それが又笑ひ話になつてゐたが、歸るとまもなく、二人の間は近しくなつた。しかし彼は別に氣にしなかつた。處が五月三十一日に彼は母からまきの家からまきの暇をもらいたいと云つて來たことを聞いた。それは書生との仲を恐れたのが原因だつたらしかつた。しかし彼にはこのとは不意の打擊だつた。彼は日記にかうかいた。

「今日は僕にとりて輕からぬ日なり、四五十日許りの間の唯一の慰藉はあとかたなくくずれたり。今はたゞ涙、數年ののち始めて今日の心地はかき得べきか、否か。破れぬ前はかほど迄とは思はなかつた。」

あくる日、まきはゐなくなるかと思つたらゐなくならなかつた。彼は一寸安心した。それから反つて彼はまきにたいしての自分の愛を本當に知つた。彼は幼稚な處のある、理想的な見方で、まきのことを日記にかいてゐる。

「此の頃、僕の頭を一大問題が占領してゐる。それはMが僕を愛してゐないのなら問題にならない。僕は無理にも、よろこんで涙と共にMの未來の幸福を望んで別れる。しかしMは輕薄な男に情を弄せられたらしいから、その空を滿す爲に僕を萬一愛し始めたのだつたらどうだらう。彼女は僕にとつて比較にならない程高尚であると思ふが、しかし今の青年に誠の點に於て僕に勝るものは少ないと思ふから、僕は僞り多い男に彼女の一生を委ねるよりはと思ふ。だがどうせ近い内に別れるこの頃に、しかも僕には頑固な理想と主義がある。されど〳〵萬一〳〵彼女が僕を心から愛して、僕が假りにも主と云ふ處から默して別れるなら、彼女の一生は悲慘なものではないか。しかしそんなことはあるまい。僕の目がある眼鏡をかけてゐるのであらう。何に故に戀といふ魔物は世の中に存在してゐるのだらう。眞の愛を知る階段として存在するものならばもう少し他にしかたのありさうなもの」（六、四）

翌日の日記にはかうかいてある。

「夕食後、弱き吾も運命の惠によつて近い内に理想の境に一歩ふみ入ることが出來るだらう。涙の洗禮によりて。母上は誠に憐れだがしかし母上は僕の性質を最も理解し能はない一人である。これ運命が僕に授けた惠かも知れない。憐れなる運命を荷へる母上よ。されど僕は已をあざむく能はず、昔の孝行をなさんとすれば、僕は狂するより他なし、母上よ許してよ」

その翌日、彼が夕飯を食ひに行つた時、母は書生とまきが母の居るのを知らないで「へんな話をしてゐた、子供と思つても油斷が出來ない」と云つた。彼はそれを聞いた時に、不意に腹が立つた。母が書生の方の惡口を云ふよりもまきの方の惡口を云つたのに腹をたてた。まきは憐むべき人間なのにと思つた。それよりも彼は母が彼の前でわざとまきの惡口を云つたのに腹をたてた。お貞さん　時、お貞さんを思ひ切らさうとして母はお貞さんの惡口を云つた。それは今でも彼は思ひ出すと、不快を感じないではゐられない事だつた。今又まきの惡口を彼の前で云つたのは、彼にまきを思ひ切らす爲に云つたのだと思つた。それが彼には侮辱のやうに思へた。

「寧ろ我が、……（まきをののしられた。母は何の爲に僕に云はれたのか、僕はその意を知るに苦しむ、もしある意味で云はれたのなら、僕は益々母をもつて自分を知らないものと見、同時に母上は一言も僕にかれこれ云ふ資格がないと思ふ」

と彼は日記にかいてゐる。母はごく氣輕に云つたのであらうが、彼はあきらめさせる爲に、又ある心配の爲にわざ／＼云つたのだと彼はとつた。彼は自分を生かすことに潔癖だつた、責任のもてないことは少しでもすることを恥ぢてゐた。その爲に隨分戰つてゐた。自分は無條件に信用されていゝ人間に自分を築き上げることに全力をつくしてゐた。少くも彼はさう思つてゐた。處が母にそれを信用されず又いやしく解釋され、不安を感じられるのが彼には辛抱の出來ないこ

とである。その上によしそれが本當であると云ふことを彼は知つてゐるにしろ、自分の愛してゐる人間の惡口を聞くことは彼には耐えられない侮辱である。そして彼に冷淡になれない唯一の母が彼にとつての唯一の打ち勝ちがたい敵になつた。それは彼の世俗的な人間になることをのぞんでゐる唯一の強敵のやうに彼には思へた。彼は同じ日の日記に又かうかいてゐる。

「僕のこの頃の氣の立つてゐるのは母上が僕を誤解してゐるのが十中の八だ。本を讀まうとしたが駄目。母上に涙と共にジー（お貞さん）とＭ（まき）にたいする自分の考へをかいて送る」

この手紙は母には意表外であつたのは云ふまでもない。その時母がなんと云つたか、彼はもう忘れてゐる。しかしその後三四日のちの彼の日記にその時の母の言葉らしいものがかいてあるからついでにかく。

「昨夕か今朝か、母上食事の前に『私はお前が自殺でもしないかと心配する』と云はる。『そんなことは決して』と答へた。三四日前母上は『私はもう居ない方がお前の爲にいゝと思ふと死にたくなる』と云はれた。嗚呼主義をまげずして母を安心させるいゝ方法はないものか知らん。汝が愛するものに愛されたきが如く母上は汝に。過去に幾多の耐え難き苦心をし、苦勞をせし母上を、慰めるは汝なり、あゝ」

彼は母に怒つた手紙をかいた翌日、氣分がおちついて本がよめるのをよろこんだ。しかし夕方、少しおちつかなくなつたので、神田へ行かうとして、彼は書生室のわきを通る時、彼は自分の耳で、書生とまきが親しく話してゐるのを聞いた。まきの「九月、九月にね」と云ふ言葉がはつ切り聞へた。彼は二人の關係をすつかり知つた。それは云ふまでもなく彼には大打撃であつた。それ迄はまだ彼はまきが書生を愛し切つてゐるとは思へなかつた。それは月が鼈を愛することが不自然なことのやうに彼には不自然に思へてゐた。しかし今や事實を事實として認めないわけにはゆかなかつた。

「トルストイのクロイチエル・ソナタ（獨譯）をよみ始む。豫定一週間。（中略）神田に行かんとしてよき下駄はかんと例の所に行けば書生部屋にてMK（まき）がMY（書生）にたのしげに「九月、九月にね」と。嗚呼我が血はたぎりぬ。今日はやゝ血靜穩になりしと喜んでゐたのに。しかも自ら二人の樂しげな會話を聞かんとは。我は二人の間を神聖なものと考へんと欲すれども能はず。母上の言葉もあり、MYのへんな噂もきけば、僕はあまりに女を神聖化して居たり、僕は一生獨身で送るべき人間か、僕は今、頭の中の混亂してまとまりて何事もかくこと能はず、冷靜に考へ得る時、我が心を解剖せん哉」（七日）

翌日、彼はクロイチエル・ソナタにすつかり心をうたれた、彼は日記にかうかいてゐる。

「讀むに從つて描寫は益々深刻になつてくる。字々句々誠より出づ、吾人は心地のわるいやうな、痛快なやうな、一種特別な感に打たれる。十二章はあることの起る度によみかへす價値あり、否寧ろ讀みなほすことを要す」

翌朝、彼は、學校へゆく途中、「クロイチエル・ソナタによりて我は救はれたりと思はず叫ぶ。誠にこの頃危險なりしが、この小說によつて惡夢より醒めたる心地せり、トルストイは誠に我が恩師なり」と痛切に考へた。

しかしその翌日十日の日記には彼は又こんなことをかいてゐる。

「夕食の時、久しぶりでMの笑ひ顏を見、やさしき言葉を聞くことが出來た。心地甚だよし、常になく美しく見ゆ。明日家に歸ると、一生Mとは逢ふこと出來まい。異樣な感じがする。

彼女は去るよ。去るよ。

美しき姿をわが腦に印して、

死するまで彼女に逢はずとも

死するまで彼女を忘れじ。
彼女の紀念として空想を他にして母上の恩により彼女のつくりし財布あり。ジーの紀念はたゞ記憶のみなるに。」

九十五

同じ十日の日記にかう云ふことがかいてある。

「予は何故か知らねど、奪つて行ひ、過去と現在に思ひし惡事を考へ出し自分程罪人はなく、僞善者はなしと痛切に思ひたり、しかして恐ろしき考の獨りでに浮びしこと二度、あゝ予は死刑を受くべき資格を有するとは生れて始めて感ぜしことなり。進歩か退歩か、我は知らず、されどながくつゞかず」

之は彼がまきの彼の家を去る最後の入浴を知つて、まきの裸體を一度でも見たいと云ふ誘惑をうけた時、起きた感想であらうと思ふ。彼はその目的を果す前に、自分の罪を強く悔いた、彼はまきと菊をうへる前日に、彼が私かにしまつてゐた、一條成美の裸體の女のカットをやぶいたことを日記にかいてゐるが、性慾との爭ひはその時分の彼の戰ひの大きなもののゝ一つであつた。彼は十日以上うちかてたことは稀であつたらう。

同じ日に又かう云ふことをかいてゐる。

「知識然もこの頃益々増加せり、しかして汝は時々無爲に過ごす。明日よりは……（まきがいなくなるからと云ふのを思はせぶりに點にしてある）故に眞に出來るだけ有益に時間を過ごせ。未來は汝を要すること、少なからず、過去の罪滅ぼしに」

「十一日、月曜日、晴。」

昨夜は雨になることを切望して床に就た。食ひすぎたので、可なりひどくおそはれた。正氣のつきかけた時、惡魔はこ

の世にゐるものだと思つた。しかし勇氣を奮つてやうやく勝つた。勝つた。その後も惡夢に二三度おそはれた。一度は死と云ふものはこんなものかと思ふ程、氣が段々遠くなるので、變な氣がした。しかし無事に目がさめた。起きて怖はごは見たら雨らしき模樣なし、實にがつかりした。今日は實に彼女が家に歸るのだ。それで雨がふると當に學校がやめになるのだ。それなのに雨は降つてくれない。起きて日本文學史の試驗が今日あるので、勉強しやうと机に向つた。しかし氣はおちつかない。朝飯の膳に坐つた。配膳する者は既に彼女ではなかつた。眞に失望した。彼女の聲に耳をすませつゝ飯を食ひおへた。しかしすぐ立つ氣になれない。文學史を少しよみ、又新聞をよんでぐず〱してゐた。彼女は靜に襖をあけて入つて坐つた。丁寧にお辭儀して

「若樣、永々お世話になりました」

と云つた。

「僕こそ」と小聲で云つた。

「今度こちらに參りましたらおじやまにあがります」と小聲で。

一寸無言であつた。

「いつたつ？」

「午前の内に」と優しく。

「さうか」と云つた。何かなほ云ひたいが何も云へない。その內にお辭儀して彼女は去つた。僕は何となく悲しくなつた。暫く新聞を讀んで自分の室に歸つた。臺處で彼女の後ろ姿を見た。之が見おさめである。萬一の場合のほか。なんだかへんだ。學校に行つてゐる間はさすがにまぎれて居たが、歸り路と、家に着てからは何となく淋しい。

彼女は今時分、畔路か原で遊んでゐるであらう。籠から出た小鳥のやうに。夢々々。

クロイチエル・ソナタをよみ終る。（中略）

神田に行き歸つて夕食の膳に坐る。折食つたあとだつたが、姉嫂が來て、「篤ちやん海鰻（あなご）が好きね」と云ふ。何げなく「えゝ」と答へると、嫂は大よろこびで「勝つた、勝つた」と兄を無理につれて來た。之は姉が僕は海鰻がすきだからのこしておくといゝと云つたのに、兄が「そんなことがあるものか」と云つたので議論になつたのださうだ。母上も來て皆大笑ひ。しかし僕はなんとなく寂しい。女々しいと思へば思ふ程、甘き夢が思ひ出されて涙ぐみさへする。僕はこの夢を忘れたい。しかし忘れたいと思へば思ふ程、思ひ出される。彼女は誠に天使である。あたりにゆくと喜びの光明に浴せられる。少しでも離れるある力に引きつけられる。處が彼女は永遠に僕から去つたのである。去つて始めて僕は彼女をそれ程迄、愛してゐたかと自分でおどろくのである。しかしそい御かげでまだこんなことを縣つた日でかくことが出來るのだ、さもなければ泣いてゐる。」

彼はその後もまきのことをよく思ひ出した。しかしお貞さんと別れた時程は參らなかつた。しかしお貞さんの生れた大阪と、まきの居る田端とは彼には神聖な處になつた。田端を通る度に彼はまきのことを思ひ出し、そして偶然停車場に來てはしないかと注意を怠つたことはなかつた。そしてまきが偶然同じ汽車にのりこんで彼に挨拶することを考へないことはなかつたが、その後、あふ機會はなかつた。

彼はまきと別れてまもなく一つの小說をかいた。そして今度は母によんで聞かせた。それはまきと云ふ長屋に住んでゐる可憐な少女が、主屋（おもや）の若樣と戀をする小說であつた。母はその女の名がまきなのをいやがつた。しかし彼はそれをまきと云ふ名にしなければかく氣になれないのだと云つた。

あとで志賀に見せたら可なり賞めてくれた。そして志賀も武者にかけるならと思つて小說を一つかいた。彼もこれをはめた。之が發表されない二人の小說の最初の作であつた。一歩々々彼等は文學の方への道をたどつた。

九十六

彼はその後、まもなく第三の女を戀した。

それは彼の家の近所にすむ女だつた。彼はその女の名前も、家も知らなかつた。たゞその女の出入りする門を知つてゐたが、門のうちには三四軒家があつて、そのどの家から出てくるのか知らなかつた。しかし彼はその女のことはもつと前から知つてゐた。お貞さんのゐる時分から知つてゐた。恐らくその女が七つ八つの時から彼は知つてゐたであらう。そしていつもその子を見る時、彼は可憐に思つた。やせた細面の目にうるほいのある子供だつた。彼はあとでその女のことを志賀に話す時に、マリアの顏にヴイナスの目をつけたやうな女だと云つた。少くも彼はその女の顏を見る時、淸い顏と憧がれの目を見た。それに彼が戀を感じだしたのはまさを失なつたまもなくであつた。

始め何にも知らなかつた志賀は彼があまりつぶしのきかない頑固な所があるので、「武者は一度ラブでもするといゝのだ」と笑つて正親町に彼のゐる處で云つたことがあつたが、今は「武者の彼女には閉口だ、電車の中でも、停車場の切符切る處でも大きな聲でやられるので、皆に見られて閉口だ」と云つた。しかし彼にはそんな記憶はなかつた。云はれて見るとそんなこともあつたらうと思つた。しかしそれはもつとあとの話であらう。

彼は勿論、彼女と挨拶したこともなく、話したこともなかつた。たゞ彼は、彼女の學校へゆく姿を見ることが毎日の日課になつた。

一年程たつて彼はその女と結婚したいことを母にうちあけた。母にその女を見せた。母はよささうな人だと云つた。母は反對しなかつた。彼はお貞さんの時も、まきの時も、自分に夫になる資格があるとは思はなつかた。又相手が、自分の妻になるにも不適當な處が何處かにあると云ふことを否定出來なかつた。處が今度はその反對で、結婚しないことが、彼女にとつては不幸になるやうに思へた。それは理窟ではなかつた。彼に云はせれば直感だつた。彼は雜記帳の内に澤山彼女についての詩をかきつけた。その内の幾つかを見せれば彼の感じははつ切りすると思ふ。

「目と目と呼く、星と星とひらめきあふ如く
この時、いなづまの如、
戀の矢は二人の胸を射ぬけり、
二人の胸か、一人の胸か、
彼も知らず。彼女も知らず。

運命の神は冷けき神よ
二人をば見交はさせて、一人微笑む。
微笑みのひみつ、彼も知らず、彼女も知らず。
燃ゆる思ひを運命の神にたくす。」（一九〇六年十一月十日）

「今日で數日彼女の姿を見ず、

病めるか可憐の女、
幸あらしめよ、
幸あらんをのぞむ、
麗はしき彼女の姿を
顯はさんことをのぞむ。
日うらゝかなれど
日出でざるが如し、
愛の情は憐れみの情となり、
憐の情は、心をいたむ、
可憐の女、可憐の女、」（十一月二十二日）

「彼の女病む、命あやうし
我、かく心に描く時
我が心いたむ、
思はじと思へど思はれ、
はらはんと思へど思ふ。
死の神は無情の神なれば、

彼の女の死、
などてこの思ひの
かくも我を亂すか」（彼女の姿見へざるまゝにかくは、天氣よし）

「例の時、
久々に
彼の女の姿顯はる、
常は襟卷せぬに
桃色の襟卷して
靑ざめて見ゆ。
かよわき彼の女」（以上十一月二十六日）

「余り靑ざめた彼の女の顏氣にかゝり、
再びよく見んと思へど
又病めるか、影さへ見せず
この寒空、あたらねばよし。」

「あゝ嬉し、彼の女
學の園より、勇ましく、
家路さして、この寒そら、
吾、家にありて、炬燵にあたりしを耻づ」（十一月二十七日）

「平和なる彼の女の顔、
この世の人とも見えづ、
戀せんには餘りに高き哉」（行き）

「彼の女の姿よく見さればよかりしものをと、
思へどもそはをそかりき、
たゞ運命にゆだぬべきか、
あはれ、そはつらきものよ」（十一月二十九日）

「我が胸に毒蛇ひそみて
いかにせばよからんと
色々に心つかへど

毒蛇は去りもせで
いよゝ、力をふるふ。
この時に、彼の女の顔、
深きやわらぎに滿つ彼の女の顔、
われおのゝき、目うるはう、
目かはき、おのゝきとまれば
毒蛇の影、旣に消えて
我が胸に春風香る」（十二月十四日）

槪ね、かくの如し。

九十七

彼がこの女を戀したのは五六年つゞいた。

そして彼が二十八の時結婚するすぐ前までつゞいた。つまり彼の妻が現はれ出る迄つゞいた。始め彼が戀した時は學習院の最上級にゐた時だが、彼女を思ひ切ることが出來たのは白樺をやり出してから三年目である。自分は彼女についてつゞけて語る前になほ多く彼について語りたい。

自分は彼の日記を多くぬき書きしたついでに彼の日記について一言したい。彼はあまり日記をつけない男だが、一九〇六年（明治三十九年）の三月二十日から六月十六日迄は彼にしては珍らしくくわしく日記をつけてゐる。それ

から同じ年の十月から翌年の三月迄のいろ〳〵のものをかいたもの、日記も處々に入つてゐる、が殘つてゐる。それ等は文章は時に見るにたへない程、幼稚でいや味ではあるが、彼の當時の內面生活を知るには適當だ。その他、〇八年の四月から十二月迄の日記がある。しかし今自分は彼が學習院を卒業する時分の思想を見、それから外面の生活を一通り見たく思ふ。

彼の日記は主に自己を生長させる爲、又淋しさをまぎらし、勇氣を與へる爲にかゝれてゐる。それは既にあげた日記でもわかることゝ思ふ。

當時の彼にとつての大問題は自己完成と、自己を人類に役立せるにはどうしたらいゝかと云ふことゝ、性慾と戀愛と結婚の問題である。最後のものについてはいく分か既にかいた。最初の二つに就てごく簡單にかいて見やうと思ふ。

「リビングストンの邦語の傳記をよみ始めた、面白い。『凡富貴功名は命の定る所なり、半は人力に由り、半は天事に依る。惟聖賢と成るを學ぶは、全く己れより主となるに依り、天命と相干渉せず（十五頁）の曾國藩の言葉が一番面白かつた。曾國藩の傳記は持つてゐるから何時かその內よむとしやう。リビングストンに就ては最後までよんだ時にゆづらう。

今日夕食少し前より何となく嬉しい。自分では確かに純潔な喜びと思ふ。こんなことは僕の弱い記憶ではないことだ。私に思ふ、僕にして一歩々々覺の路を歩いてゐるなら、最初の一里塚に今や達したのだと思ふ。路遠くして日既に傾くではないが、之から大變々々。

リビングストンやルーテルなどの傳記をよむと自分なんかの煩悶（言ひ得べくば）は一種の道樂にすぎない。この有樣では土の中にもぐりこむ迄には眞如の月を見ることが出來るかどうか疑はしい。しかし聖賢となるはたゞ己の努力如

何にあるのだから、進め、進め、すべての苦痛と慾とに打ち克つて。慾？　自分はまだこの光をかき得る程にいたらず」

（一九〇六年三月二十日）

「午前リビングストンの傳をよむ、讀むに從つて自己の小なるを覺えぬ。吾人は緒言にかゝれたるカーライルの誡を口にして行ひの反するものたるを恐る。「愛は歡樂にあらず、愛は神也」

トルストイの「なくて叶はぬもの一つ」を午前中亂忩によんだ。今日迄、人々がトルストイの言を以て現代に行はれずと云ひしを冷笑せしが、今日は少くも現時の日本に於ては行はんとするには、それ迄に二三の階段を經ざるべからざるを信ずるに至れり、吾人は世の有様を見聞するにつけ、吾人の天職の大なるを覺ゆると共に修養の大ならざるべからざるを覺えぬ。吾人は敎育の力を盡し種をまかんかと思ひぬ。されど刻一刻時は來る。現時は靜かに多くの時を費すべき時に非ずして、拙速を貴ぶべき時機にあらざるかを思ひて心痛む。吾人は如何なる事をなして最も安全に、最も大なる收獲を得るかを考へざるべからず、あと三年（大學を卒業する迄の意）の短時間に吾人の愚を以て最良の方法を考へ出し能ふことを切にのぞむ。直言を買はないでよさうと思つたが、上田敏氏に聞いたゴルキーの短篇が出てゐるのを廣告で見て十時半頃神田に行き買つて來た、「炎の心臟」と云ふ題だ、快心の作である。ダンゴーの如き人によりて實に世の中の大事は出來るのである。しかし吾人は眞の愛に燃えず、恨みと猜みに燃えたる小ダンゴーの出でざるを望む。吾人小にして愛を幾分か解するを得て、政宗の「仁にすぐれば弱くなる」の徒になつたのかも知れないが、「ヤツケロ」的のことは絕對にいやだ、一人でもそれの爲に死に或は傷ついたら、（人々が自分で好んで犧牲になるならいゝが）どんな仕事でも贊成することは出來ない。平和的手段はないものか。

午後一時間許り晝寢をした他はリビングストンの傳を讀むのでつぶした。讀み終る。ルーテル傳を讀んだ時と同じや

うな大なる感じを受けた。しかしルーテルは權威（勢力と云ふ方がいゝと思ふが、原文のまゝに）に逆つて眞理をとき、リビングストンは野蠻人に愛をもつて眞理を傳へたのだ。ルーテルに於ては吾人は精神の力の偉大と眞理の力の偉大を知り、リビングストンに於ては肉體の苦痛に打ち勝つ偉大なる力と愛の力の偉大なるを知ることが出來た。

如何なる効果と雖も忍耐と勉勵なくしては獲られず……（一一四）

虛榮は耳邊に高く叫はりて余を惑はす、されども、そは朽木の斷片のみ」（一九八）

など名句金言甚だ多し、

ロアンダよりリヤンチに歸る所（九一）

テツレテにて從者に逢ふ所（一二六）

奴隷を解放せし所（一三八）

スタンレーと會見の所（一九二）

兩氏離別の所（一九九—二〇四）

など最も我が情を動かした。

今朝は五時に起きた、近頃にない偉いことだ。リビングストン傳を讀んだあとで、サンダーをやつた。僕は運動をせずに勉强で身體を一度こわして見やうかと思つたが、それは良心を麻醉さす卑怯な方法だと思つた。樗牛の重盛論に贊成しておいて意氣地のない所だけをねるのはいゝことではない。まして今自分が身體をこわすのは人に心配かけるばかりでなく、それ見たことかと或る人々に思はれるのは自惚かも知れないが、自分一人の損のみならんやだ」（三月二十一日）

「昨日眠りに就たのは十二時を打つたのを聞てからだつたが、今朝目がさめたのは近所の時計が四時を報じた少し前だつた。

どんな夢を見たのか全く覺えてゐない。覺えて居てもかくことの出來ないやうな夢だつたかも知れないが、覺めると何んとなく優しい美しい人と樂しく話がしたい氣が起つた。（男女の別なく）この前美しい景色の所にゆきたいと切に思つた時と同じ强さだ、神聖さも同じだと云ひたいが、肉の僕には何かその内にあると云ふことを全然否定するわけにはゆかない。其處で例の如く過去と未來のことを想像してその切なる慾望に打ち克たうと思つた結果、

「最も强い人」と云ふ題で演說しやうと考へた。

「最も强い人とはやがて消ゆべき肉體の强い人を云ふのではない、（學習院では腕力自慢が多かつたので、わざと皮肉を云ふつもりだつたらう）權力の强い人を云ふのではない。最も安心せる何ものも恐れない人を云ふのである。即ち獨立獨步の人である。このことは自分の考ではないノルエーの詩人イプセンの言である。しかし自分はイブセンの言だから信ずるのではない。それが事實だと云ふことを信ずるからである。で以前作つた「予が要求する人」と云ふ文を少し變體さして考へたのである。之で大いに元氣が出來て以前の女々しい切なる求めも消え、その勢ひに起きて以上のことをかく（五時半頃）

それからすぐト翁の「なくて叶はぬもの一つ」の五章をよみ始む。（昨夜十一時近くより四章を亂暴によんだ）まだ一頁もよまないのに矢張り昔のト翁となつて顯れた、愛の化身の。昨日はあまりザーのことを罵詈してゐるので、老ひ早きが近いので激怒しやすくなつたと思つたが、それは大なる誤り。しかしこの理想を實現するのに二三の階段を要すると云ふ感は昨日と同じ。何しろまだ半ばも讀ないで、かれこれ云ふのは餘り禮を失してゐるが、情に激するとさきが讀め

なくなる。まして日記をつけるのが、樂しみになると一寸激するとかきたくなる。之日記の弊害か。つまらぬことをかく内になほたのしみがあると云ふと偉さうだが虚榮心のある內は日記をかく前に餘程、注意を要する。

（午後）「なくて叶はぬもの一つ」の五章をよみ終る。吾人は常にト翁の書を讀みて感ずるが如くいたく良心に打たれて自分の罪人なることを深かく感じ、この世の不合理のことを打破する爲に一生を献ぜざるべからざることを深かく感ず。僕にとつてト翁の書は頭痛の書である。吾人は何度かト翁の書を讀まざらんとした。しかし或るものが切に讀むことをすゝめる。吾人は近き將來に於て大なる苦悶に落ち入るであらう。吾人の內には大なる逸樂を得んとする火と、眞理と愛を行はんとする火がある。奴隷的根性と、奴隷を救はんとする精神がある。このものは決して平和には一致することは出來ない。必ず〳〵大なる苦闘を要する。

××の吾人の上に行ふ最も恐るべき害は××が精神上、道德上に人民を腐敗せしむることである。（三十二頁）

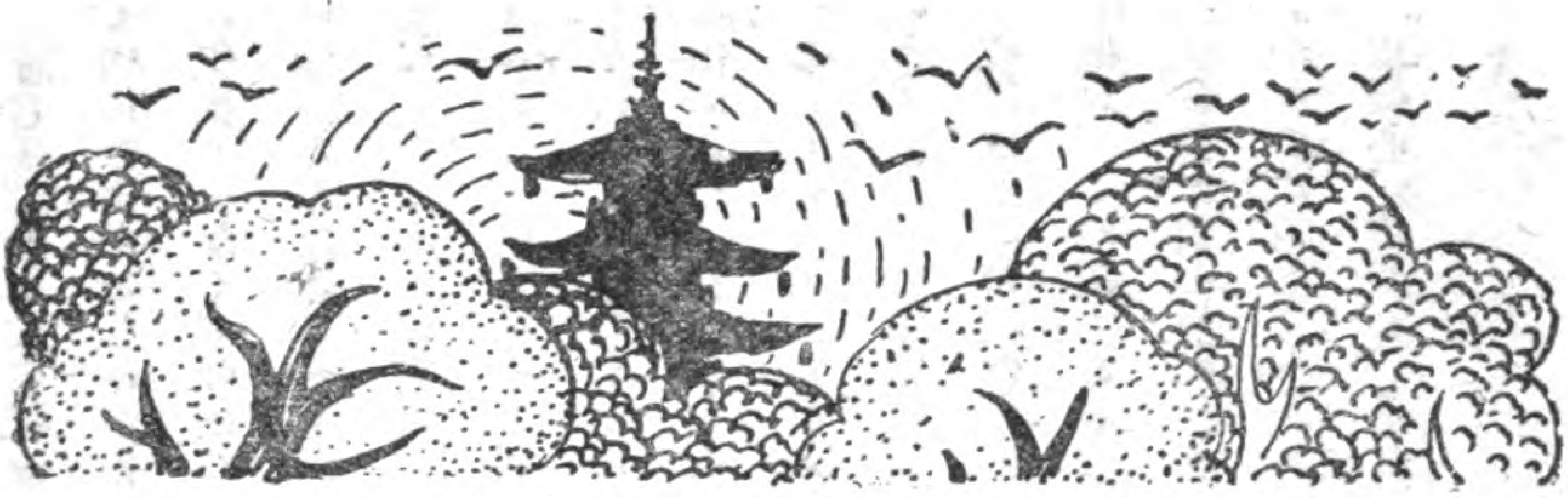
然り吾人もたしかに誘惑されたる、骨の中まで誘惑される一人である、ト翁の書に接しなかつたら。

彼等は彼等の奴隷制度をほこつてゐる（三四）一人であるにちがいない。……」（二十二日）

概ね、この類である。あまり長くなるから、少しちがつた短いのを一つかいてあとは讀者に任せやう。

「夕食後志賀の所に行き色々話をした、運動に就ての作文を見せてゐる時、正親町君が來た。志賀は僕を中々皮肉だと云つたのに對してトルストイなども皮肉だと暫くして云つたのには歸路自分に愛想がつきた。

虚榮心、虚榮心、それは汝の大なる悪しき缺點である？」



冬夜に

室生犀星

一　錢屋五兵衞

一

いつになく鮒鯉と云はず、大物ではぼらや鱸までが、蒼白い腹を空に向けて、片ながれする水戸口へ流れてきた。ぴりぴりと尾鰭を震はせ、一尺ばかり泳ぎ走ると、ぱたりと止んで、もとの腹白い仰向けになるので、それが、石垣際へ行列をつくつて、すぐ、目に鈍く光つて見えた。

石垣を繞らした木屋問屋は、亭々たる磯馴松にかこまれ、緑青のなかから、幾構えもある土藏の白壁が、藤に丸の紋章ある影を、青い、とろりとした水の上にうつしてゐた木屋藤右エ門は、幾日もつゞいた不吉な潟魚の死體を、石垣の構道の段々に蹰んで、掌に乘せかけて眺めこんでゐた。實際、潟魚が故もなく死る（あが）といふことはなかつた。ひどい大夏の旱つゞきでも、それが行列をつくつて、水戸口へながれてくるなぞといふことは、子供のときからも聞いたことさへなかつた。

藤右衛門は、その餌の一疋を掌にのせて見ると、まだ、あえぎがある。水に入れると、れいの一尺ばかり水面へ乗りあがるやうに走つて、勢盡きたやうに、もんどり打つて、ぽかりと浮きあがるのを見た。それに、先刻からふしぎに思ふのは、どの魚もみな鱗片を逆立て且つ紫色を帶びてゐることであつた。やつと水の溫みの行き亘つた春先きだのに、潟心(かたしん)に腐れもののあるわけでもあるまい、藤右衛門の老眼は、永い間、しらじらと流れくる魚類に見据えられ、術かしさうな惑ふた色をうかべてゐたのである。

木屋の庭先きでは、土藏の新建ちの荒塗りが始まつてゐた。細竹の、籠めいた上へ、ぺたりと、ひと鍬もあらう濡れ土が、足代の上の小者に投げ送られると、小手と受板で、おさへたかと思ふと、既うぬらぬら鈍い容の光をふくんだ壁に塗り込まれてゐた。それが終つても、まだ壁の入口が塞いでなかつた。

藤右衛門は、暫らくそれを見詰めてゐたが、なるべく壁を重厚に塗るやうに吩咐けた。そして樹立ちのうしろに去つた。

うららかな春の、ひよどりの機嫌啼きする午後だつた。藤右衛門の末娘の六つになる子が、松の幹に隠れごつこをしながら、こちらへ來たとき、對手の鬼番に當つたこれも女の子のちらちらする影が、築山の上にあらはれた。女の子はそこらを見廻したが、隠れ場所といふほどのものがなかつた。ただ、内と外とを塗り合した隙間が開いてゐて、なかは恰度、小さいからだを充分に匿せるほどに空いてゐた。女の子は、左官の方をながめたが、誰も氣がつかなかつたのでそつと、席の裏から潛り込んだ。

左官は、間もなく、そこの隙間を一と息に塗りあげてしまつた。わづかに一尺四方くらゐだつたので、わけがなかつた。潟風の強さと、うらうらしたよい天氣で、壁の外部はほんのりと湯氣つて溫かさうに乾きかけてゐた。

鬼番の女の子が、尋ねあぐんで、鶏卵のやうに眞寂しい少し青ざめた顔をして、左官にたづねた。

「ちつとも見えませんでしたよ。あちらぢやないかしら・・・・。」

左官は、築山のかげの熊笹の繁つたところを指さした。潟風で、騒ついて、ちちち・・・・と笹鳴きのこゑがした。女の子は、そこをさがすと、また左官の方へかへつて來た。そして居ないと告げた。

「ぢやだいぶ先きからでございますな。見えないのは。」

左官は、すこし色を變えて、心配さうに覗き込んでゐる女の子を見た。

「ええ、ずつと前から。」

さういふ女の子を案内させて、二人の左官は、築山から水門、泉水、奥庭をさがしてあるいたが影すらなかつた。表の方は吊橋になつてゐて、材木船の出入りに便宜するやうになつてゐた。引續いて入船だつたので、橋は午さがりから吊つてあつたと船の小者は答へた。

日昏れになつても、やはり見付からなかつた。藤右衛門自身でも、幾度もなく同じい繁みや物陰をさがしてあるいたが、やはり見當らなかつた。藤右衛門は、ぼんやりとして、れいの死魚の列をながめた。今朝から見ると、さきの分は流され、つぎの分は、だんだん數をすくなくしてゐた。

翌日になつて、大野の町や金石の錢屋五兵衛へも問ひ合はして、見つかつたら届けてくれるやうに依頼した。五兵衛は、それは危(あやま)つて泉水が潟口へはまり込んだものかも知れないと言つて、持船を水戸口へ向はせた。が、五兵衛自身は出てゆかなかつた。ちやうど、錢屋の奥坐敷には二人の異邦人が泊つてゐた。紅毛だつたが、手代番頭にいたるまでその客を知らなかつた。紅毛人は、持荷の内から取り出した珍らしい白肉の一片を噛りながらゐて、一切、五兵衛方の食

事を採らなかつた。

藤右衞門は、五兵衞が自分で出てこないのを不思議に考へた。あのくらゐ如才のない五兵衞が、こんどの騷ぎに何時ものやうに働いてくれないのを心外に考へるより、何か他に事情のあるものとしか思へなかつた。

「べつに渝つたことがありさうもなかつたか。」

藤右衞門は、いくたびも使番に左うたづねたが、變化つたことがないと答へた。もと藤右衞門のところに手代をしてゐたころのことを、樣々に考へ合せて、かれは、ふしぎさうに頭をふつてゐた。

が、娘のお藤は、水戸口から大海へ押しながされたものとしか考へられなかつたので、弔ひまで濟ました。ふしぎに、死魚はその前後から浮ばなかつた。それが、お藤の死と係はりがあるやうで、藤右衞門は、わざわざ水供養までした。

新建の藏をいれると、七棟の、眩ゆい白壁が松の間に光つて見えた。

庭番があとで、かう云ふて、本屋の祖先からつたはつた靈驗あらたかな觀音經を讃めたたへた。

「ちやうどお藤様の行衞が見えなくなつてから、新建のお藏のなかから、森とした觀音經を誦む聲がしましたよ。ちやうど、あの日の夕景ころから、まるで三日間といふもの丶、ありがたいお經のこゑが、絶え間なくして居ました。」

その以前のこと、やはり藏破りが忍び込んだときに、その觀音經をしまつてあつた藏だけが破られなかつた。あとで、その土藏破は「誰だかお經をあげてゐるので、どうしても破れなかつた。」町役人にかれはさう言つたさうである。

ともかく藤右衞門はじめ家中のものは、みな庭番のいふことを信じた。わざわざ番頭手代小僧までが、晩おそく、藏のそばへ行つて耳を傾てたくらゐだつた。が、その誦經は、再び聽えなかつた。

二

河北の潟、混んだ芦の繁みに、二人の異邦人と銭屋五兵衛とが、對ひ合つて、微笑しながら舟中の人となつてゐた。異邦人は、黒の、ゆつくりした服の間から、時々眩ゆい金色の匂ひする時計を取出しては眺めてゐた。そればかりでなく、麝香のやうな匂ひのする巻煙草をふかしたりした。五兵衛は、それらの珍らしい品々を、その服の飾りボタンまで見逃さなかつた。

異邦人のいふには、この潟を埋めた方が田園の收穫が莫大な額になるだらうと云ふこと、異邦人の住んでゐる土地もどんどん池沼、湖などを埋めてゐるといふことだつた。五兵衛は、河北潟を埋没にすることは、ずつとさきから考へてゐたことであり、今からして異邦人の思慮をきくことに、自分の考への的中してゐることを快適な氣もちになつて聴いてゐた。それの計畫や何や彼で、豫め町奉行や目付役などに、出來るだけ資金を融通してゐたのである。

異邦人は、水深を計る眞田虫のやうな、さきに錘のついた紐を水中に沈めた。それは、鑵のやうな中から無限に繰り出される紐であつた。五兵衛は、その便宜な水深器を懇望した。それから水中目金の類まで、一つとして五兵衛を驚かさないものはなかつた。五兵衛は、手眞似で時計や磁尺や玻璃器などと取換へるための加賀絹などの値段を打ち合せた。「これ要りませんか。」

異邦人は。黄味のある紙包みを、五兵衛の目の前にさし出した。五兵衛は、それを一見すると、いつかの蒼白い半死の魚が、見てゐる間にぷくぷくいきあがつてきたことを思ひ出した。激しい臭ひのある劇薬のやうなものだつた。

「それも置いて行つて下さい。」

五兵衛は、その包みを手に受けとつた。

舟は、日暮れてから岸にもやがれたが、異邦人は、五兵衛とは別々な道をとつて歸つた。

五兵衛は、もとの主家である木屋へ寄り道をした。藤右衛門は、不思議な娘の行衛不明にな,たこと、それから、この間、いつになく、死魚が數多く水戸口へながれてきたことなどを話した。死魚の話が出ると、五兵衛は、氣附かぬ程度で顔いろを變えた。

「わしはまだこの年になるが、あゝいふ死樣をした潟魚を見たことがない。紫色に腫れたやうになつてゐたのだ。」

五兵衛は、話してゐるうちに落着いて、月をすえて聞き入つてゐた。

「紫色と申しますと……。」

「さうだな、わしの考へでは潟心に何か腐れものでもあるか、でなければ劇藥ででも殺したものかと思ふがの。それに不思議な異邦人が此頃來てゐるやうぢやから—。」

藤右衛門は、左う言ひながら五兵衛の鋭角な瞳に見入つた。五兵衛は、それを伏せないでゐた。

「このごろにでも死魚は浮きあがるやうでござりますか。」

「いや。」

藤右衛門は、呼吸を飲んで、すこし眉をひそめた。

「それが不思議ぢや、お藤が見えなくなつた前後には、そこの石垣に寄せられて隨分浮いてゐたのが、このごろになつて最う浮かなくなつた。」

五兵衛は、こころのうちで日を繰つて、胸に應へた。が、顔には出さなかつた。

「わしの考へだけぢやが、ひよつとするとお藤は異邦人にさらはれたのではないかと思ふが……ちやうど、あの前後から異邦人が來てゐたやうだから。」

五兵衛は、一笑した。何故といふことなく微笑ひがうかんだ。藤右衛門は、それを不興氣にながめた。

「異邦人が旦那のお藤様に何の用事がございますものか。やつと六つやそこらの女の子でございますしな。」

五兵衛は、やはり水戸口から漏れ込んだものと考へるより仕方がなかつた。

「いやお前はさういふが、近頃不思議なことが多いのだ。お前なぞあまり手出しをせぬ方がいい。」

藤右衛門の、この意味を含んだ言葉を、五兵衛はちよいと頭を下げてきいたが、眉宇の間にきりつとした色をうかべて答へた。

「仕事は大きいほど、やり甲斐がござります。運試めしに今年は一つ何かしようと思つてゐるんでございます。」

藤右衛門は、微笑つて、手をふつてとどめた。

「もう錢屋とまでいはれれば本望だらうがの。」

「いや、まだまだでございます。」

五兵衛は、微笑つて、頑固さうな口つきをつむんだ。北國人らしい陰鬱な口づかひが、ともすれば放膽に輝いた。請負仕事でも、この木屋に勤めてゐたころは、どんどん自分で進んで引受けた。

「ははあ、あのお藏でございますな。今度お建てになつたのは――。」

築山の松の間から、鮮かに白う、松籟に研がれたやうな白壁が見えた。

「骨董藏にな、見てくれるか。」

「ぜひ拜見。」

ふたりは、椽下駄を引つかけた。

築山のかげから、長女の、そのが、しんなりと優しげに微笑んで、五兵衛にあいさつをした。五兵衛の小倅のときから一緒にそだつたが、見ちがへるやうに、皮膚はあぶら氣をうつすりとふくんで、ちよいと光つて、美しかつた。

「お久しうございます、よくこそ。」

「まアおきれいになんなすつた。五兵衛もぞつとするくらゐでございますよ。」

そのは、それでも赧くなつて奥庭の方へ行つた。手代時分から關係のついてゐた聚ケ崎の女のことも知つてゐた藤右門は、もう娘のことを貰つてくれなぞとは云はなかつた。

「なるほど、いい藏になりましたな。結構な藏だ。」

五兵衛は、壁や石敷などを見廻つて賞めた。

二人は、立つたまゝ建物の話なぞに暫らく耽つた。

「普請といふものは、不思議なことが多いものだ。」

「さう、お藤さまのことなぞ……。」

「このあたりから陷り込んだらしいんだ。壁屋がきてゐてそれに氣付かなかつたんだからの。」

「ふむ、壁屋が――。」

五兵衛は、凝乎と考へ込んでゐた。

「わしも見廻りにきてゐたんだ。が、やはり氣附かなかつた。」

五兵衛は、突然、言葉を挿んで、藤右衛門の顔を眺め込んだ。

「何をして遊んでゐらしつたのでございます。」

「さあ、隱れごつこだつたさうで——。」

五兵衛は、顏いろを變えた。そして急いで藏の入口に立つた。

「口塗りが濟んでゐたのでございますか。それとも……。」

「いや口塗りはあとだつた。」

五兵衛の顏いろはみるみるうち、眞蒼になつて、瞳は、重厚な入口の壁地に向けられた。かれは身慄ひまでした。藤右衛門は、すぐ其感情をじりじりと感じた。

「壁屋が塗つてゐるうち、下口の穴から這入つたきりになつたのでございませんか。よくあるやつだ。」

藤右衛門も顏いろを變へた。併しまさかといふ氣もしたが。その感情よりも五兵衛のいふところが當つてゐるやうな氣もした。

「下口から這入つたとすれば、塗り潰しにはわけがない。ふむ。」

藤右衛門は、きふに惡寒をさへかんじた。足もとから、水面をすべつてくる風が、濕り氣を含んで、ひやりとした。

「とにかく取毀ちした方がようございますよ。さうでなくとも、大したことでないんでございますから。」

「うむ。それがいいな。」

藤右衛門は、すぐ壁屋の小者を呼びつけた。蓋石をめくつて、上塗りを、がちがち崩しはじめた。

藤右衛門は、眞蒼になつてゐた。娘のそのも、いつの間にきて、五兵衛のうしろに立つてゐた。

「とにかく一尺ばかり破るといい。そこからなかが見える筈だ。」

五兵衛の言ふ通り、壁屋が穴をあけた。覗き込んだが暗くてわからなかつた。

「ぢや最う一つ明り穴をあけるといい。離してだ。」

五兵衛は、さう言ひかけると、ふつと、或る臭氣をかんじた。かれは默つて藤右衛門を風上に立たした。藤右衛門は、何やら小さい聲で叫んで、紙のやうな蒼い顏いろをした。

「やはり然うだつたか。」

かれは、かう呟いた。壁はもう疑ふ餘地もなかつたので、北側全部を毀ちかけた。

「五兵衛や、どうなるでせう。」

そのは、そのかみの子供のやうな口をきいて、低い震ひ聲で囁いた。五兵衛はどう言つていいか分らなかつた。一人前の娘になつてから、かう親しく口を利いたことがなかつた、そのだつた。

「あなたは母屋へ行つてゐらつしやい。」

五兵衛のあとで、父もさう言葉をつづけた。そのは、母屋へあるいて行つた。

五兵衛は、そのとき、ちらと紅縮緬の着衣の裾らしいものを見た。藤右衛門も棒立ちになつて、惡寒と、恐怖に似た不思議な震へを身うちにかんじながら、五兵衛と並んで立つてゐた。

壁が全部取毀たれたとき、臭氣はあたりの空氣を襲ふた。金糸を縫ひ併せた手毬がまだ新らしい小さい髑髏のあたまのそばに、ぽつんと一つ寂しく轉がつてゐた。

三

異邦人到着の噂とともに、毎夜のごとく、燈臺の砂丘へ町の人人が集まつて、沖にちらつく幽玄な燈影を眺めた。

燈影は、ちらつく晩もあれば、殆ど片影さへしない晩もあつた。なかには、明らかに蜃氣樓のやうな黒帆を見たといふも

のもあり、それのみならず不思議な異邦人が、その黒装束で、毎夜町の辻々に現はれると云ふものさへあつた。呪文を唱へ七面鳥のやうな相貌をもつてゐるとさへ噂された。しかし實際に於て、それらの異邦人を見たものはゐなかつた。猫のやうに音もなく海べりを辷つて去つた異邦人を知つてゐるものは、味噌屋町一帶をとりかこんだ奥深い住居にゐる錢屋五兵衛だけであつた。

錢屋五兵衛は、離れの居間に、阿蘭陀渡りの珍らしい鶏鳴を發する自鳴器をかゝげて、その柱の下で、阿蘭陀渡りのあつし羽織を着込んで端然と坐つてゐた。望遠鏡、虫目鏡、八角の表面ごとに色がはりするぎあまん、異國の風景をあつめた寫眞帳、それから又紅毛あやしく風體ゆたかに一見さむさを感じせしめるところの異國女體の裸形の數々や、唐縮紗の様な厚い冴えた赤色の刺繍ある卓布、ニンフの畫面、ボタン、天鵞絨に銀糸をもて花鳥を繍めた宗教風なトルコ帽、兩取手のついた酒瓶、それから又不思議なるきりすたん、でうすの曲譜、聖母マリアの畫布や、さまざまなる品々は、金銀に倦きた錢屋五兵衛の心をとらへた。

かれは、それらの品々に手指を觸れるごとに、あやしい優美な感觸と、心遥かなる異國の風土にあこがれる、ほとんど小兒にちかい心をさへかんじた。編糸のほつれたやうな地圖を廣げたりしながら、この日本の幾十倍もある異國の廣潤な風土に驚嘆したりした。わけてもかれにとつて神經おののくところの裸形版の豐麗にして感覺悩ましい畫面は、かれが多くの畜妾のそれにくらべては雲泥の相違があつた。手や足はもちろん、その大きい瞳孔と潤澤ある光とは、かれの胸を悸つかせるほど恍然たらしめた。なだらかに白い逞ましい女體は、ほとんど唐天竺のそれのごとく、優美と柔軟と、豐富なる肉感の建築であつて、一どきに彼れを魅惑して了つた。かれは、そのアート・ペーパの様なる皮膚の外面にあらはれる數多い表情を、恍惚として熟視してゐた。

かれはそれらの異國の物品に手指をふれては、自鳴器の靜かな秋夜の虫のそれのやうな囁きをききながら、異國人が最後に、かれを異國にいつかは連れゆくことの約を結んだことを思ひ出した。かれは、その常に祭禮のやうな言葉の湧き立つ街區の混雜のうちに、畫面に描かれた美しい多くの女體が、ほしいままに歩行してゐるさまを思ひ描いた。心間を温ませるやうな重い肉體の華麗な微笑を、かれはふいに鼻のさきにさへ感じるのであつた。かれの目の前には、藍いろ、紅色、雪白い姿、または深い帽をかむつた様様な婦女子が、一枚の色彩複雜な絨氈を織るやうに、あるものは影繪のやうに、遠近に、街燈の黄なる光のもとに、あちゆき、こちゆきしながら現はれたり消えたりした。わけても不思議な石を積み重ね、窓を多くしつらへ、窓ごとに灯のあかりする町々を、朦朧と、醉つて目まひするやうにくるくる次から次へと描いて行つた。

かれは、しまひには其處の群衆のうちに自分の姿をまで加へ、それゆえ、なほ混沌とした自分の姿を心にえがき始めた。一つ一つ手足にふれるものは皆かれが生れて初めてするところのものだつた。かれは伸び上つて、梵鐘のなかに鳥雀の囁きを鳴き交ぜたやうな音樂を燦然と、その耳底のなかに感じはじめた。しかも異國が今自分の住つてゐる地下の何百萬里にあることや、そこにも星簇の煌めき、樹木花鳥まで繁茂することを考へると、かれは自分の思慮がずつと廣大されてゆき、長い呼吸のつけることを感じた。かれは、いまさらのやうに、椽側に出て、天上を差し覗いた。雲と雲とのきれめに、なほ遠くきらめく寂しい星をながめたとき、かれは、かれの自得した幸福に感銘さへした。その星はきえかかり、また煌めきはじめ、かすかで、しかも永くかれの視野の遠方に動かずにゐた。

さういふ彼のふしぎな幻想は、いまは庭にある一切の、暗然と、天上に向つて呼吸する夜の樹木にまで及んだ。ふしぎは、そこにも蒼い板を伸してゐた。さういふものの生息するといふ感覺は、たんにそればかりの値でなく、物珍らし

い自然の掟にあてはまつてながめられた。樹はみな星の方へ伸び、星はすぐ樹の上にかかつてゐた。そのいみじい接近の微妙さが、かれに始めて感じられたところのものであつた。かれは、壘の上に散在する異國の物品をながめ、星をながめ永い間坐つてゐた。かれはそのときかれの持船が、星と星との間の暗い波を掻き分け、夜と同じい色の帆を張り、唄ひながら、朗々として續いてゆくのをながめた。暗い波がしらは白く晒され、かれの紋章で、圓に五たかいた、船がしらが揃つてゐるのを見るさへ心勇んだ。しかもそれらの總ては燦たる星族の遠き方へ向つて、波がしらを刻んでゐた。

かれは、そのとき植込みに、ばさといふ音をきいて、ぎつくりした。異邦人が消つてから毎夜のやうにその音がつづいた。かれは、それが決つて城下の隱密であることを内感してゐた。ふしぎなことに、音がすると同時に悉目姿が見えなかつた。煙のやうに消える隱密は、かれの考へでは、邸内のうちの、誰かがその一人のあることを知つてゐた。

かれは、筧下の礫を拾ふと、植込みのなかへ續けさまに打ち込んだ。木の葉にさわる礫の忙しい音がつづいてするだけで手應とてはなかつた。

「ばか。」

かれは、さう小さく叫ぶと、昂然と階上の物見臺へあがつて行つた。そこから千戸足らずの町と、日本海、それから飛彈山脈とを背後にながめることができた。唯、星ぞらの下の町はひつそりとしてゐたが、燈臺のあたりには、まだ執拗に毎夜のやうに蟻のやうな人人のむれがあつた。黒船の灯がみえると誰かが言ひ出してから、人出がつづいた。

五兵衛は、物見臺の上から、それをながめたが、知らず識らず冷笑がなみ打つて頬の上にあらはれた。それは疾う異邦人は、とうくに發つてしまつたからである。

沖はくらかつた。星かげが碎かれては映つてゐた。かれは、犀川の水戸口につないである數へきれない持船が、ゆつたりと、少しづつ揺れるごとに帆柱まで動いて、のんびりと靜まりかへつてゐるのを眺めた。

反對の眺望には、河北潟がうつすりと水面を曇らして、砂丘の間からさし覗いてゐた。その水明りは星ぞらにもつれて、ぼおとしたあかるみを含んでゐた。五兵衛は、そこに蒼波ゆたかに揺らぐ田園の光景を目にえがくと、それが決して空想でないことが考へられた。が、城下の公議がそれを許容するかどうかといふことが氣になつた。かれは、併し間もなく自分の手でこの一帶が自由になること、もはや穴藏の皆壺の金銀をもつてしても、加越能一帶におそるるもののないことを知つてゐた。

かれは、物見から下りると、五郎島から呼びよせた曾代の居間をおとづれた。お曾代は、蒼褪めた皮膚をして、何かの折に錢五のこんどの仕事を止めやうとしてゐた。

「お前の恐ろしがるのは、隱密ぐらゐだらう。それなら邸内の誰かがそれをやつてゐるのだ。」

お曾代は、さう考へないではなかつた。唯、數多い使役人のうちで、誰がその役目にあたつてゐるか分らなかつた。

「ご存じでございますの。」

「大概わかつてゐる。氣をお付け。」

かれはさう言つて、お曾代の室を出やうとした時、ふいに、あれほど厭がつてゐたお曾代が、銀べりの十字架をその首すぢから胸もとにかけてゐるらしく、つめたい鎖か首すぢの生白い柔らかい地にペタリと絡れてゐるのを眺めた。さういふ畫面をながめてからの五兵衛は、その妻の首すぢにも冷たい金屬を纏はさうと骨折つたが、かの女は、何彼と云つてきかなかつた。五兵衛は、しまひに疳癪を起して打たうとまでした。それが、既う頸首にまとはれてゐた。五兵衛は、

快よい微笑をしてお啓代をふりかへつた。そして愛想らしく言つた。

「頭がいたみはせぬか。」

繊い、きやしやな、それゆゑ、子供の手首のやうに柔らかい首すぢであつた。

「いいえ。」

お政は、さういふとにこりとして見せた。五兵衛は、ゆつくり女の顔をみつめると、自分の室へ引きかへした。微笑はそのまま湛へられ、消えずにゐた。

二　お川師藤七

一

城外十一屋の竹藪は、殆ど數里に亘つて寂落たる竹林が續いてゐた。當時城内の若侍どもは、みなこの竹林に分け入つて縱橫無盡に綠深い竹幹を、あるひは新刀試めしや、所在ない暇潰しなどから斬り倒した。まだ參差立ちのせぬ今年竹まで、手あたり次第に薙ぎ倒した。節割れの空氣の破れる音は、その鋭い切口と蒼白い中身をあらはにして、喉の鋭利な鳥類のやうな奇聲を發してゐたのである。

それがため百姓小者は、毎年生える筍までに、双きずの痕のあるのは、親竹の切れ口を根に受け、それゆゑ筍に肌傷が絶えぬのだと、城内の侍どもを怨んでゐた。そればかりではない、竹林外の桐畑にしても、やはりその刀痕を、各々年輪の上に遺してゐた。ずばりと銹び込んだ刀傷は、幾年の後も、月形の年輪を掠めてゐたのである。或ひは三五人の連れを作つた侍どもは、百姓家の垣根に生えた竹まで、興味さうにずばりと遣りつけた。蔟立ちした竹幹の頂のしげみ

が寂んとした音を立てると、一切に下の方から震え、その瞬間ちよいと、靜まり上つて、頂の葉まで震えが登ると、幹はしづかに切口から離れた。

百姓らに見るに見兼ね、なんぼう武士おやとて餘りの仕打ちやと、垣のうちからおそるおそる小言をいふと、ひとりの若侍は、矢庭に飛ひ込んで、蓆編みをしてゐる百姓を、すぱつと拔き打ちに遣つゝけた。百姓の首は、ちよん切りそこなつた蟷螂のそれのやうに、くるつと一ト廻りしたかと思ふと、肩のところへもたれたまま、三文儒がとかげのやうにだらりと下がつた。二抱の後取い地ひびきが、やはり數叢の葉なみをふるはせた。

若侍は、帽子先きに溜つた血を二三度地面に雫打つたとき、椽側から逃げ出す二人の子供を見つけた。蛸の頭のやうに小汚ない、素早い子供だつた。半分、戯談のやうに若侍はそれを趁ひかけた。朋輩は、止めろと、しきりに止めたが、ただ譯のわからぬ昂奮で、ばたばた座敷へ飛び込んだ。

若侍は、たづねあぐんで、垣外へ引返したとき、二階納屋の藁積みのなかで、赤蛙のやうに二人の子供が震えてゐた。子供らが、二階から恐る恐る降りたときに、ゐろりの傍で祖母の死體を見出した。

十一屋村の兵十といふ顔ききが、その事件の三十分あとに、馬に乘つて侍共のあとを趁ひかけた。犀川の橋の袂で、侍共と行きついたが、これも美事に首をハネられた。谷屋の淵と稱はれた橋下で、するすると往き來する水馬を覗き込みながら、あとから來た二人の子供は、村の人々の、兵十の死體を搬ぶのを眺めてゐた。

兄は、十二歳で、弟は三つちがひだつた。兄の藤七は、それ以來、暇さへあれば、竹の幹ばかり斫つてあるいた。及た刄を布袋に提げた藤七は、枯葉の腐りこんだ藪中を、のろい獸のやうに歩き廻つてゐた。が、青竹は、親指と人差指のまはりくらゐある奴に限つては切れたが、兩手をかけて廻りかねる奴は、かあんと、手痺れがして、却つて、掌が痛ん

できなかつた。それゆゑ手ごろの奴ばかり切つてあるいだ。

何處へ行つても親の敵なぞを打つのは、却つて兵十のやうな酷い目に遭はされるから止めさつしやいと謂はれた。それより寺參りをするか菩提を葬らひ家業にいそしめと言はれた。古い城下は至るところ眞言や禪宗がゆき亘つて、實際敵打ちなぞ滅多になかつた。みな神佛に仕へることに依つてのみ、敵打ちができるもののやうに思はれてゐたのである。

藤七は、侍の顏をしつかり覺えてゐるやうな氣はするが、實際は記憶がなかつたのである。侍さへ見れば皆敵に見えた。それゆゑ、誰を狙つていいか分らなかつた。いつの間にか藤七は、村の人がひやかし半分に、敵打ちのそれを言ふと、かれは恁う言つて胡魔化した。

「わしは敵の顏も知らんから、もう止めにした。」

止めさつしやい。いまどき其那ことは詰らんと、村の人々は止めたのを賞めた。藤七は、弟が赤腹といふ病氣で倒れてから、間もなく城下町へ出て、川師の群れに這入つた。川師は、加越能三州の、越の神通川、加賀の手取川、能登のおやべ等に、それぞれわたりがついてゐた。

藤七は、春鱒から落鮎までの、十月終りのうそ寒い大日おろしの荒ぶ季節まで、水の中でくらした。かれの肌身は、たらりとあぶらを流したやうな日焦げがして、手も足も、水中では、なめらかな藻のやうな水さばきをしてゐた。かれの潛る淵は、かれでなければならぬ變相な深淵と、巴流れする瀬裏潛りに限られてゐた。泡一粒立たさぬかれは、水の中では、一層平つたく、鰈のやうに泳ぎ澄んで、永い間浮ばなかつた。

谷屋の淵では、春秋二度づつのお墓參りの行列が、大橋から寺町の坂の上へ練つてゆくのが、靜かな江戸繪から投げ

出したやうに、供揃え由々しくながめられた。殆ど林立された鎗持の共とは異はぬ穂立ちかた、漆塗の腰揃えの光りなど、警叱の聲とともに礒に土下坐してゐる藤七の方から、その水面の影繪とともに眺められた。さういふとき、藤七は、その供揃えのなかに、敵も一緒に雜つてゐることと思ふが、どうしても顔を思ひ出せないために、ただ漠然として例の侍さへ見れば起る憎念にかられるばかりだつた。

かれは、さういふ日は、ぼんやりと十一屋在にゐたころの、蓆編の親父と、その莚にあたる日ざしや、いつも置物のやうに坐つては、かれの鼻汁をかんでくれた祖母のことなどを思ひ出した。蕭々とした竹林のそよぎや、そこに離れた一軒家の自分の家もつい思ひ出された。庄屋、村の者などが、諒く敵打ちなどするなと言つたことも、頭一杯に考へ出された。

が、父親が庭に出て、仕事をしてゐる日の靜かなこと、そこには決つてかれの姿のあることを思ひ出すと、かれはかつとして憎念に燃え上るのだつた。一生のうち、何處かで會へるやうな、的のない敵のことで、じりじり脊中に燒きつくやうな日光を感じながら、供ぞろへを見送つてゐた。

二

秋近い、寂鮎の季節になつた。藤七は、朝から大桑の瀬や淵を覗いて歩いてゐるうち、ふと、攻埃釣りをしてゐる一人の侍が、しきりに竿を縦横に動かしながら、糸を藻搔かせてゐるを見たしまひには、自分で着衣を脱いで腰坎に引つかかつたらしい釣糸をほぐしに入水するのを見た。

藤七は、その變に蒼白い侍の肌を一と目見ると、知らず識らず忌はしい憎念の湧くのを感じた。侍は、底が深いので幾度も、呼吸を繼ぐために水面へ浮きあがつた。

「糸がかゝつたのなら、ほぐして上げますぢや。」

藤七は、磧からさう聲をかけてをいて、淵の方へ泳いで行つた。

「さうか、深みでよう底が見えん。ちよいと見てくれ。」

侍は、もう四十を越えた、肩幅の廣い、腕の太い男であつた。泳ぎつけないと見え、呼吸を切らしてゐた。

「蛇籠での。糸を手繰つても、よう探られん。」

侍は、釣糸を藤七にわたした。藤七は、それを手頼つて水底にくぐると、蛇籠の編み竹にもんどり打つて卷きついたらしい錘が、にぶい、藍色の水あかりのなかに光つて見えた。が、かれは、それをわざと最う二卷きばかり蛇籠に絡ませ、氣味わるく水中で微笑をもらした。

浮びあがると、藤七は、わざと侍に釣糸のありかが判りかねることを告げた。侍は氣强さうに藤七を苦笑つてみせた。

「川師が潜つてをいて分らぬといふ法はない。何ごとぢや。」

藤七は、さういふ侍を何故か二度も三度も見たやうな氣がした。あらはな冷笑で送つた侍をした。

「いくら川業でも見つからんものは仕方がごはせん。」

「それぢや一緒に潜らうか。わしが先きに見つけるわ。」

「へえ、どうぞ。」

二人は、すぐ又水に潜り込んだ。糸を手にすべらせ、蛇籠にそうて沈んだ侍のからだの蒼白さは、水のなかまで、ほんのり明るみを漂はせるくらゐだつた。藤七は、そのうしろから泳いだ。

侍は、釣糸をさぐりあて、錘の絡まりを解かうとしたが、もう息を水面につかねばならない時だつた。それゆえ、藤七の

方を向き、釣糸のありかを示し、自分は息を入れてくるからと、口もとを指さして見せた。藤七は、すぐよろしいと答へて見せた。が、侍が身をおこし泳ぎあがらうとしたとき、藤七は、鮒のやうな黝ずんだ和容に、たぎり立つ劇しい憎悪のいろを浮べた。そしてゐるもりのやうな片手をすぐ目の前にひらつく侍の片足にかけ、力まかせにぐいと引いた。引かれた足は根のない沼草のやうに、容易に手もとにひかれた。それを底暗みの蛇籠に足の甲雜を引つかけ摑へた藤七はもう一度ぐいと手ぐつた。侍はからだを歪げようとしながら幾度も鰕のやうに足を刎ねつけたが、藤七の手は離れなかつた。そのうち、ひとりでに沈み込み、こんどは浮きあがらうとした。藤七はその頭を蛇籠の編目にがぢがぢ銜き込んだ。それゆえ浮ばなかつた。呼吸はもうなかつた。

藤七は、水面へ浮びあがると、侍の着衣と大小を尻目にかけ、番小屋の方へあるいて行つた。たいがいの漁時には小屋がけをしてゐたのである。

それからの藤七は、侍さへ見れば、それが川漁に限つて遣つつけた。あるときは、一心に糸を垂れてゐる侍のうしろから、物もいはず河の中へ投げ入れてをいて、水中に引き入れた。そして人取䱟か何かのやうに、かれは對手の呼吸の絶えるまで、水面へ浮び出なかつた。慘忍にちかい藤七の顏は、日ごとに、さそりのやうな鋭どさを加へて行つた。が、幾人あやめても藤七の心はおさまることがなかつた。どれが敵であるかも分らない限り、侍を片つ端から手にかけねば氣がすまなかつたのである。

それゆえ自然犀川には、淵主がゐると云はれ、釣をしに出かける人がすくなくなつた。あるものは馬まで水に引かれたとか、あらぬ噂が立つたりした。しぜん侍なぞもあまり出かけなかつた。

藤七は、十九歳になつてゐた。

三

前田百萬石の參勤交代は、越中から信州路をとり、上州を廻つた。道中第一の難所には、親不知の海べりがあつた。斷壁の際を絶えず洗つては逆卷く怒濤は、わづか四五間のところであるに拘はらず、旅人の足を淩つたのである。それ故、濤の引き際を見澄しては馳驅つて通らなければならなかつた。

參勤行列には、人垣といふ、なみさらへの人足が、數十人その手を組んでお籠の通行するとき、波打際に立つてゐた。加越能三州の漁夫や川師の最も屈强なものが、肌着もつけずに煙立つ波を脊中に受けてゐた。かれらは、波の引き際には、數十人の手を組んでゐるため、お互ひの足場定めしてあるため、めつたに人垣が崩れることがなかつたのである。

まだ肌寒い安政二年四月の午さがりの、荒い怒濤は、どこか冬荒れの餘勢を沖の方にはらんでは、斷壁を砥のごとく洗つてゐた。お籠は人垣の前を通りかかつてゐた。わづか一間くらゐしか空いてゐないので、足場辷りのする人垣の人足どものよろつくごとに、お供勢への行列にぶち合つたりした。

引き際を狙つて走りぬからうとしたお籠は、追ひ波をくらつて、人垣の間から、お籠の垂れを充分に嚙み込むほど、高く打つかつて來た。餘りの緊張に足場ばかりに力を入れた人足らは、踵の砂を食まれてよろついた。と言ふより寧ろ、その人足の中心になつてゐる屈强の若者が、前のめりに組んだ手を外したため、人足は總崩れになつたのであつた。その餘勢をくらつたお供は斷壁の入口にかかつたものは二三歩引きかへし、通り過ぎようとしたものは狼てて走りぬかうとした。が、中途にあるお籠は、斷壁にそふたまま、ぴたりと止まらなければならなかつた。追ひ波を二三度かぶつたお籠の垂簾から、雫が垂れてゐた。

そのとき一人の人足がよろついて、お籠の脇へ寄ると、いきなり屋臺のへりに縋みついた。と言ふより、ぐいと一息、

その屋裏柱をつかんで手元へ惹いたとき、お籠は、六尺人足とともに波乗りしてするする、汀の方へ引かれた―そのときには、もう人垣が崩れはじめたのである。

數分の後、お籠は恙なく難所を通り越えた。そして川師藤七は、すぐ取繩をかけられたのである。あきらかにお籠を波間へ引いたのはかれより外にはなかつた。

お白州で藤七は、その逐一を白狀した。いつそ侍共を遣つつけるよりも、城主を遣るのが、手練と經驗とを積んだ彼には、何よりも父の敵として適當なものに考へられたのである。

これまであやめた犀川での侍のことなども、吟味奉行の舌を卷かせた。

間もなく。前田では、人垣の波さらひを廢止になつたかはり、足輕のうちよりその人選びが行はれたのである。川師仲間は間もなく藤七の墓碑を城外十一屋に建てたが、お關ひあつてすぐ取毀たれた。



或る罪の動機

谷崎潤一郎

博士を殺した下手人が常に博士の忠僕であつた書生の中村であると分つた時、博士の遺族の人々は皆驚いたのである。未亡人も、令息も、令嬢も、等しく云ひやうのない恐怖と戦慄とに撲たれたのである。なぜなら、それが如何なる動機に基いて實行にまで持ち來たされたか、又あの善良な博士が如何にして災害を受ける原因を作り得たか、全くそれらが意料の範圍を逸して居たから、――さうして人は、一般に、災害が何等の發見し得べき理由もなく訪れて來たとき、況んやそれが極めて陰險に、巧妙に、恰も一箇の事業を遂行するが如くに綿密な計劃を以つて遂行されたとき、一層その恐怖を大にするものであるから。――つまり彼等は、人はどんなに完全に幸福であり善良であつても、いつ何時いかなる禍の犠牲になるかも知れないと云ふ事を、痛切に感じたのである。其の事は博士に徴して眞理であるばかりでなく、加害者たる中村に徴しても眞理であつた。何となれば、――彼等の見る所では、――中村も博士と同じく幸福であり善良であつたから。博士の殺されたの

が偶然の禍であるとしたら、中村の博士を殺したのも、抑もその考へが中村の頭に發生したのも、矢張り偶然の禍であるとしか、彼等には思へなかつたから。

で、その時、――と云ふのはE探偵が紛れもない指紋に由つて彼の犯罪を立證し、博士が殺されたその書齋で、遺族の人々の面前に於いて彼の自白を迫つた時、中村は口邊に薄笑ひを洩らしながら、「しまつた」と云ふ風に頭を掻きながら、靜かに云つた。

「あゝ、お分りになりましたか。――では仕方がございません、先生は私が殺したのです、――」

その態度は、落ち着いては居たが横着とは見えなかつた。不思議にも矢張り今迄通りの正直で忠實な書生に見えた。その素振りや物の言ひ振りは少しも今迄の中村を裏切らない、彼に似つかはしいものであつた。強ひて異點を求めれば、ただ顔色が平生よりもやゝ青褪めて居ただけである。

「私が殺したのに相違ございません、皆様は嘸びつくりなさいますでせうが、私は氣が違つたのでも何でもないのです。正氣で實行したのです、どうか私を出來るだけ憎んで下さいまし。」

彼はさう云つて、未亡人や、令息や、令嬢や、――一座を見廻しながら、はにかむやうに笑つた。その時彼の青ざめた頬には處女のそれのやうな紅味がさした。

「あなた方は、なぜ私が正氣で先生を殺したか? 大恩を受けた博士を殺す氣になつたか? きつと其の事をお疑ひになるでせう、私に取つてはそこに明かな理由があつても、あなた方は其の理由を到底想像なさる事は出來ますまいし、又お出來にならないのは御尤もだと存じますから。――」

「では君は、その理由を話してくれ給へ、」

と、令息が第一に尋問の語を發した。彼の調子は、中村に釣り込まれたせいか矢張り奇妙に落ち着いてゐた、書生に對する言葉としてはいつもより鄭寧なくらゐであつた。

「お尋ねになる迄もなく、私の方からも聞いて頂きたいのでございます。」

中村はさう云つて、哀願するやうな眼つきをして、さて續けた。――

「その理由を、あなた方がよくお分りになるやうにお話しするには、何から申し上げたらいゝかちよつと見當が付かないのです。いつか一度は申し上げる時もあらうかとは思つて居ましたけれども、こんなに早く其の時が來たのは全く意外なので、順序よくお話しするだけの用意が出來て居ないのです。……しかし、兎に角私は聞いて頂かなけりやなりません、私が先生を殺しましたのは、まあ一と口に云ひますと、全く殺す理由がないと云ふ所に理由があつたのでございます。先生は申す迄もなく立派な人格の方でした。そしてその人格にふさはしい幸福な家庭の御主人であり、圓滿な生活を送つて居らつしやいました。先生の周圍に居られる方々は、奥様でも、御子息でも、御嬢様でも、みんな先生のやうに純潔な、美しい性質の方々でした いや、あなた方ばかりではありません、斯く申す私にしても、皆樣に可愛がられ又皆樣によく仕へて、圓滿な家庭の空氣を助けて居たと存じます。私は出來るだけ忠實に、正直に仕へた積りですし、あなた方もそれを信じて下さいました。ではなぜ先生を殺したか？何處に殺す原因があつたか？と云ひますと、先生がそれ程圓滿な人格の方だつた事、先生の周圍がそれ程幸福に充ちて居た事が、それが直ちに原因になつたのです。此の事に就いて、私は先づ私の人間からして説明しなければなりませんが……」

中村はこゝで言葉を區切つて、いかにも苦しさうに息を深く吸ひ込んでから、

「全體私は、――」

と、一種嚴肅な感じを起させる、微かな顫へ聲で云つた。

「全體私は、いつ頃からさう云ふ風になつたのか自分でもよく分りませんが、もう餘程以前から、世の中と云ふものを非常に淋しく、味氣なく感じるやうになつて居ました。斯う云ふとあなた方は、それは多分境遇の然らしめた所であるとお考へになるかも知れません。成る程私は子供の時分に頼りのない孤兒として育ちましたし、先生の御宅へ御厄介になる迄は、隨分不仕合はせな目に遭ひましたから、或はそんな事が影響してゐないとは限りませんが、しかし私の此の厭世觀は決して外界の事情から來たものではなく、案外根の深いものであるやうに、私の生れつきの性分の中に其の芽が含まれて居たやうに、私自身には思へるのです。なぜなら私が世の中を詰まらなく感じるのは、自分の意志が思ふやうに充たされない爲めではなく、寧ろ私は意志と云ふものを、此の世の中の何物に對しても抱き得ない爲めなのです。もつと突つ込んで云へば、私は此の世の中に何一つとしてほんたうのものはない、眞に欲しいと思ふ値打ちのあるものはない、みんな虚無だ、みんなたかの知れたものだ、と云ふやうな氣がしました。さうして其の氣持は此の二三年來、徐々に如何ともし難い重苦しい持病のやうになつて、私の精神と肉體とに喰ひ込んで居ました。さうです、たしかに肉體にも喰ひ込んで居たのです、私はそれを心で感じるばかりでなく、明かに體で感じて居たのですから。あなた方は私が酒も飲まず女にも近付かないと云ふ理由で、品行の正しい青年だとお思ひになつたでせうが、それは私に強い意志があつたからではなく、實は少しも意志がなかつたからでした。そりや私にしたつて、うまい物を喰へばうまいと思ひます、綺麗な女を見れば綺麗だと思ひます、だがその後から、うまいのが何だ、綺麗なのが何だ、と、直ぐさう思ふのです。さうして、多少の勞力を拂つてまでうまい物を喰つたり綺麗なものに接したりするのは、馬鹿げて居るやうな、大儀なやうな氣になるのです。そんな物質的な慾望などはどうでもいゝとして、精神的な物事に對してもさう云ふ無感激

な狀態に陷つたとしたら、その淋しさはどのくらゐであるか、恐らくあなた方には想像も付かない事でせう。あなた方は私を溫和な柔順な青年だとお考へになつたでせうが、その實それは私が無感激の結果だつたのです。意志のない私は、ただあなた方の命令通りに動きました、さうするより外私の生き方はありませんでした、私はせめてもあなた方と云ふものがあつて、私の體を動かして下さるのを張り合ひがあると思ひました。若し私に他人の意志が働きかけてくれなかつたら、私は一つ所に停滯して、ちつと動かずに居て、死んでしまつたかも知れません。實際私は、もうしまひには生きて居るのか死んで居るのか分らなくなつて居ましたから。――何かおかしい事があつてあなた方がどつとお笑ひになるとする、私もそれを見て成る程おかしいとは思ふ、が、おかしいのが何だ、と、直ぐさう思ふと、笑ふのさへも大儀になる。のみならず一層悪い事には、笑つて居る人間が馬鹿らしく見えて來る。みんな分り切つた事ぢやないか泣いたつて、笑つたつて、感心したつて、それが結局何になるんだと云ふやうな氣がする。もうさうなると人間はおしまひです、その人に取つて人生と云ふものは、唯一つの單調な、無意味な存在に過ぎなくなるんです。――あゝ、私は此の呪ふべき氣持ちの爲めにどんなに長い間苦しんだでせう、若し私の此の氣持ちが單なる厭世觀から來て居るのなら、哲學とか宗教とかに訴へる手段もあつたでせうが、困つた事には、今も云ふやうにそれは私の體質に喰つ着いて居るので、寧ろ厭世觀よりも前にあつたものなのです。私の厭世觀なるものは却てそれから生じて來た結果に過ぎないと云へるでせう。私は屢々さう思ひました、誰だつて恐らく理窟の上からは、此の世の中にほんたうの物があるかどうかを、斷言する事は出來ないだらう。誰だつて私と同じやうに、笑つたところで泣いたところで、世の中の事は結局たかが知れて居ると、冷靜に考へればさう思ふだらう。しかし人間と云ふものは理窟ではさう思ひながら、可笑しい事があれば笑ふし、悲しい事があれば泣くやうに出來て居る。それが人間の常なのだ。すると自分には、何か人間として缺けて

居る所があるのぢやないか。自分には人間の持つべき筈の感情と云ふものがないのぢやないか。――――さうだ、自分には意志がないと同時に感情がないのだ、自分にあるものは唯つめたい理性ばかりだ。そしてその理性に從へば、世の中には眞に善い物もなければ惡い物もない、して惡いものもなければしないで惡いものもない、人間はどんな事をしたつて構はないが、又どんな事をしいないだつて差支へない。したいと思へば泥坊をしたつて詐欺をしたつて惡いとは云へないし、したくなければ懷ろ手をして寢ころんで居るがいゝ。自分はしたくないから何もしないので、それで一向差支へはないんだと、私はさう云ふ考へで居ました。さう考へる事は人間として頗る情ない、不仕合はせな事ではありましたけれども、それより外にどうしても考へやうがなかつたので、それは決して間違つては居なかつたと思ひます。自分が斯うして生きて行くのは、自分としては最も自然であり、最も正しい生き方であると云ふ氣がしたのです。……」

「あゝ、ほんたうに、あの時分の氣持ちは今でも忘れられませんが、實に苦しうございました。神とか、善とか、道德とかを信じる事が出來る人には、正しく生きる事が同時に幸福に生きる事であり、安心して生きる事にもなりませうけれども、私の場合にはさうはなりませんでした。私には正しく生きる事が絕ざる不幸の意識であり、不安の原になつたのです。人間らしくないとは云つても私も矢張り人間ですから、自分ながら恐ろしいやうな、薄氣味の惡いやうな氣もしました。私の考へは、眞理としては間違つてゐないが、人間としては間違つて居るのぢやないだらうかとも思はれました。人間として此れが一番惡い事で、泥坊をしたり人殺しをしたりする方が、まだ此れよりは善い事だ、幸福な事だと、さうも思ひました。で、兎に角私は人間になりたかつたのです。泣いたり怒つたり、泣かしたり怒らしたりする事の出來る、人間になりたかつたんです。何かしら感情らしい感情を持ちたかつたんです。……」

「さうすると君は、何かしらやつて見たい爲めに人を殺したと云ふのかね？」

と、その時令息が再び尋ねた。

「さうです、まあさう云つてもいいかも知れません。ですがそれには、もう少し込み入つた心持ちがあつた事を申し上げなけりやなりません。何かやつて見たいから人殺しをした、——たゞそれだけでは一向説明にはなりませんから。——あなた方は私が、そんな風に孤獨に淋しく生きて居た間に、あなた方御自身はどう云ふ風に暮らして居らつしたか、それを考へて頂きたいと思ひます。あなた方は、先生も奥樣も御子息もお孃樣も、一人として私がどんなに苦しんで居るかと云ふ事を、察しては下さいませんでした。勿論それは察し得られる譯がない、察しないのが當り前だと仰つしやるでせう。成る程、私も御尤もだとは思ひます。しかしあなた方は察して下さらないばかりでなく、お自分たちは非常に滿足に、幸福に暮らしておいででした。あなた方の御樣子を見ると、『人間は神を信じ、道德を奉じて居さへすれば、決して不仕合せはないのだ』と云ふ事を、信じ切つて居らつしやるやうでした。私はあなたを見ると、一層孤獨の感を深め、自分の不幸を痛切に感じたのですが、あなた方にはそれがまるきりお分りにならない。御自分たちの幸福が、他人に迷惑を掛けて居ようとは夢にもお思ひにならないばかりか、却つて他人をも幸福にさせて居ると信じて居らつしやる。そして和氣藹々たる家庭の空氣に浸つて居らつしやる。私は別にあなた方を羨しいとは思ひませんでしたが、しかしあなた方が偶然の幸福を必然の報酬のやうに思つて、自分たちはさうでなければならないやうに考へて居らつしやるのを、反感を以て見ないでは居られませんでした。なぜなら、私に云はせればあなた方が幸福でなければならない譯はなく、私が不幸でなければならない譯もないのですから。あなた方は、正しく生きよう、信仰に生きようと云ふ旺盛な意志と情熱とを持つて生れていらつしつた。けれどもそれはあなた方の努力の結果でもなければ、さう云ふ風に生れた事に、何等の必然もありはしないでせう。あなた方はさう云ふ人間にお生れになつた、しかしさうでなくてもよ

かつたのだ、私のやうな人間に生れたつて仕方がなかつたのだ、さうでなければない事は何もないのだ。――と、私は思ふのです。ですからあなた方の幸福は全く偶然の賜物であるのに、先生を始め、誰方もそれを反省なさる樣子がない。それでいゝのだ、さうあるべきだと思つてゐらつしやる。私はあなた方の幸福を奪ひ取らうとは思ひませんし、又取らうとしたつて、生れ變つて來ない限りは取れるものではありませんけれども、たゞあなた方が、あなた方御自身で標榜なさる通りに、何處までも人生を正しく觀察し、眞理と正義とに依つて生きようとなさるなら、一應御自分たちの偶然の好運をお認めになつてもよからうと思ふんです。そして私のやうな不運な人間に對して、ちよつと一と言ぐらゐ御挨拶があつても然るべきです。『どうも己達はお前に比べると大分割がいゝやうだが、これも運だから仕方がない、濟まないけれどもあきらめてくれろ』と、さう仰つしやつてから、多少私に遠慮しながらでも、そつと御自分たちの幸福をお樂しみになるのが禮儀ではないでせうか。それがほんたうの正しい道ではないでせうか。ほんのちよつとした事ですけれども、その御挨拶がなかつたのが非常に私には淋しうございました。そりや、あなた方に私の不運を知つて頂いたつて仕方がないのだし、又知らせようと思つたつて、知らせる方法もないやうなものですから、要するに仕方がないの一言で盡きてしまふのですが、仕方がないと思へば思ふほど餘計やるせない氣がしました。怒つたつて仕方がない、恨んだつて仕方がない、あなた方の察しの悪いのを咎めたつて仕方がない、何をしたつて結局たかが知れて居る、と、私は又思ひました。私は決して、鼓を鳴らしてあなた方を攻めようと云ふ勇氣も出ないし、醉興もありませんでした。けれどもその爲めに一層苦しく、ぢつとして居ると息が詰まりさうな氣がしました。………」

「………そこで、私が先生を殺しましたのは、さう云ふ重苦しい氣持ちが募り募つた結果だつたと、さう云ふより外はありません。私は何も最初から人を殺さうと思つた譯ぢやないのですが、――どうせ人を殺したつてたかが知れてると

も思ひましたが、――しかし先生を殺すことは、何かする事のうちでは一番しばえがある事のやうに感じたんです、なぜかと云ふと、先生はあなた方のうちでも一番幸福な圓滿な方で、あなた方の幸福は先生の存在を中心として居るので、先生が居なくなつたらあなた方も少しは不幸になられるだらう。さうしたら今までの幸福が偶然だと云ふ事をお悟りになるだらう。――それを悟つて頂いたつて勿論大した意義はありさうにも思へませんが、しかし決して悪い事ぢやない、悟らないよりはいゝ事だ、少くともあなた方に正しい人生の觀かたを敎へる事だ。それに私としては、今までの不公平が多少取り除かれる譯で、まあいくらかは運命の片手落ちを矯正する事が出來る。と、そんな風に思つたんです。尤も世の中にはあなた方ばかりでなく、もつと好運な人たちも澤山あるでせうし、何も先生に狙ひを付けなくつてもよささうなもんですが、しかし先生は最も私の手近な所に居らつしやいました。私は無精な人間ですから、そんなに遠い所へなんか動いて行く氣はありませんでした。まあ云つて見れば、私の眼のつくやうな所に居らつしやつたのが、先生の災難なので、同時に私の災難でもあるんです。かう云ふと甚だ勝手のやうですけれども、事實さうに違ひないんです。私のした事は意志の働きと云ふよりは、水が自然に流れたやうなものなので、偶低にも傍に底い所があつたもんだから、つい其の方へ流れて行つたんだと、さう解釋して頂きたいんです。……」

「いや、そんな事は云へない筈だ」

と、F探偵が鋭い語氣で口を挿んだ。

「お前は豫め非常に綿密な計劃を立てゝ、誰が見ても故殺とは思へない隱險な手段で實行したのだ。それでもお前は意志がなかつたと云ふ積りか？」

「成る程、そのお尋ねも御尤もです。」

と、中村は、いかにも我が意を得たと云ふ風に頷いて見せた。

「たしかに、私は非常に綿密な計劃を立て、陰險な手段を考へました。ですがそれは、何も實行しようと云ふ意志があつたからぢやないんです。私は最初、實行よりも寧ろ空想を樂しんで居たのです。私のやうな人間に取つては、實行は

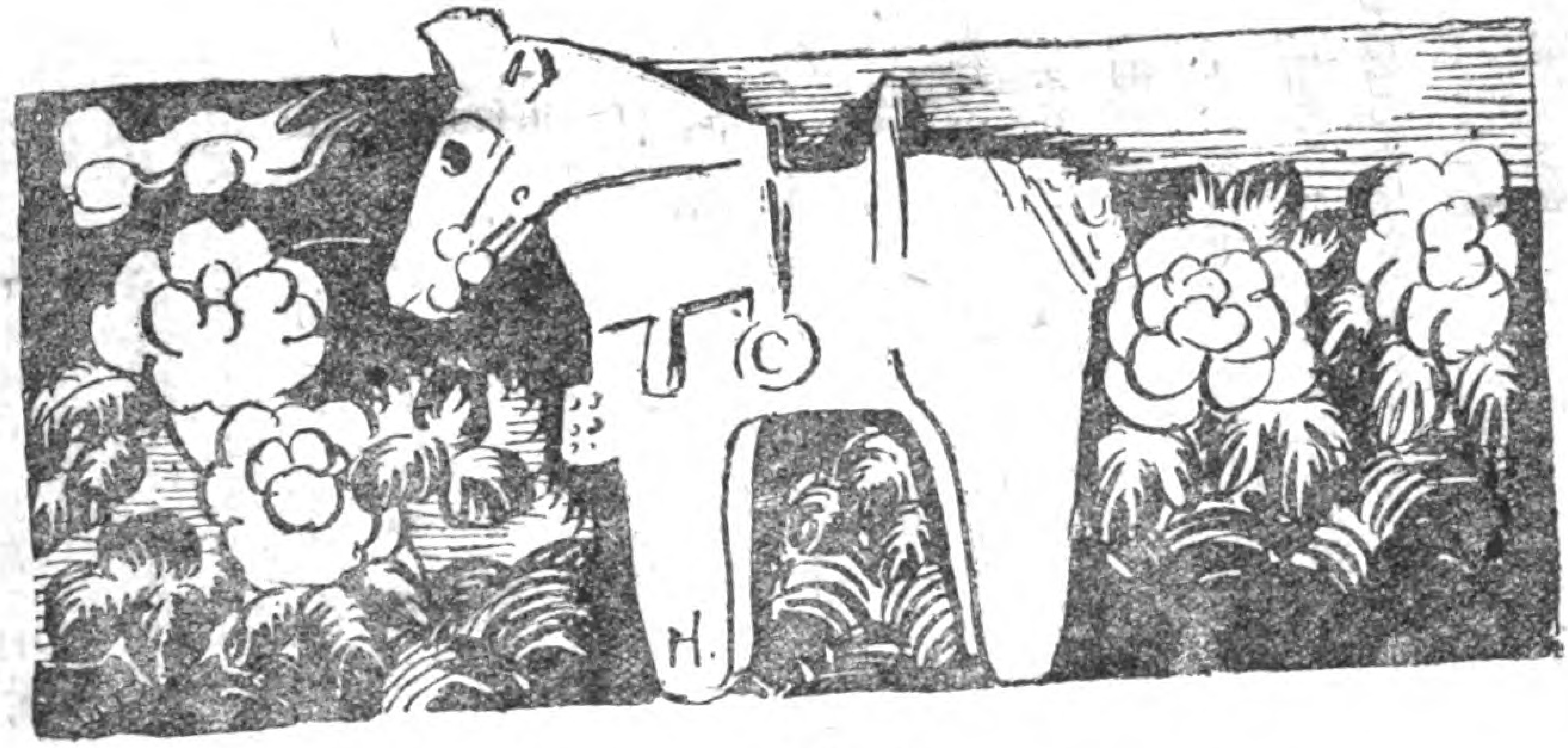
容易でない代りに、空想ではどんな事でも考へますから、——實際、空想にでも耽らなければ、私はどうして孤獨の時を過ごすことが出來たでせう。あなた方のお考へでは、實行の意志があつたればこそ計劃したんだと仰つしやるでせうが、私は大概空想だけで滿足しました。實行の爲めの空想ではなく、空想の爲めの空想を描いて、それで秘かに慰めて居ました。ただその空想が、眞實性を帶びて居るほど餘計感興をそゝつたことは事實なので、從つて私の計劃は非常に綿密な點まで頭の中に描かれて行きました。私はありありと、恰も實行して居る通りに、その時の光景を見、心理を經驗する事が出來ました。そしていつもなら、ただそれだけで止めてしまふ所だつたのに、あまり空想が眞實に近づいた結果ついほんたうに實行する氣になつたんです。全く、空想に釣り込まれてウッカリやつてしまつたんです。私のやうな人間になると、空想と實行との間に大した距離があるやうには感じられないものですから、空想の積りでいつの間にか實行してしまつたり、實行の積りで知らず識らず空想して居たり、そんな事にいくらだつて有り得るので、ウッカリやつてしまつたと云ふのが何より正直な告白なんです。ただ私は空想の中で指紋と云ふものを深く考へて置きませんでした。空想と實行との違つた點はそれだけでした。——私の空想がもう少し精密であり、指紋と云ふ事に細かい注意が拂はれて居たなら、恐らく凡べてが考へ通りに行つたでせう。私は長く、私の罪を發見されずに濟んだでせう。發見されたつて格別悪い事はないのですが、しかし私は刑罰と云ふ肉體的苦痛を受けるのは、餘り感心しませんから。——」

それから中村は、間もなくF探偵に引つ張つて行かれた。

「御機嫌よう、——」

と、彼は書齋を出る時に、まだニヤニヤ笑ひながら、一座の人々を顧みて云つた。

「斯うなるくらゐなら、空想だけにして置けばよかつたんですね、——どうもやつぱり、私の方がよくよく不運に出來て居ると見えますよ。」



屋根裏の戀人

宇野浩二

×

社はかう風うに引けたのであるが、山村廣吉はいつまでも固い椅子に腰かけたまゝ、中々歸り仕度をする氣になれないので、と云つて別に何を見るでもなく、何を聞くでもなく、又何を考へるでもなく、唯ぼんやりと頰杖を突いてゐた。何といふ事なく物事が慌しくて、日は田舍町の店屋の戸締りのやうにばたばたと早く暮れてしまふし、空氣は妙に甘くて。そこはかとなく哀愁に充ちてゐるし、……さうだ、秋の十月が來ると、そして人生のこの年頃になると、ひとり我が主人公の山村廣吉ばかりでなく、彼のやうな、謂はゞ優しい心を持つた青年たちは、誰も皆この同じやうな心持を感じるに違ひない。

「山村さん、廣吉さん！　何をそんなにぼんやり考へてゐるの？」とその時誰かゞ耳元に來て、そつと呼きでもしたら、恐らく山村はその聲に甘へるやうに泣き出したかも知れない。けれども、見渡したところ、編輯室の、だゞつ廣い、汚い部屋

の中には、彼方此方に一つ一つと點を打つたやうに、大方は笠のない電燈が點いてゐて、ちらほらとその下に、朝刊編輯記者や、夜勤記者の數人がこそこそと思ひ思ひに仕事をしてゐる外には、書きつぶしの原稿用紙が、亂雜に、部屋中に、無器用に並べられた机の上に埃にまみれてゐたり、床の上に踏み躪られてゐたり……要するに山村を慰めるものは何にもないのであつた。

「優しい心を持ちながら、戀がない、あゝ、戀がない、」とそこで彼はいつとなくこしらへ上げた、歌とも詩とも付かないこれだけの文句を、自分で自分をいたはるやうに、口の中にくり返しながら、最後にあゝと欠伸をして、それからマッチをすつて煙草に火をつけた。

「山村君。君は相變らず遲くまでゐるね、夜勤でもないのに。」と、その時夜勤記者の島仲が、山村のすつたマッチで煙草を吹ひつけながら「もうみんな歸つてしまつたぢやないか？」

「それや家庭があつたり、細君が待つてゐたりする人たちは、さつさと歸つて行くさ。誰がすき好んでこんな腐つた編輯室などに殘つてゐるものか！」と言つて、山村は恨みもない人間に少し言葉が强過ぎたと思つたので、急に優しい調子で、「だが、僕には妻もなし、(「戀もないし、」とそれは口の中で言つて、)社が引けて歸つて行くところと言つたつて、つまり獨り者の下宿屋の部屋だからね。」

「ぢや、どうだ、細君をもらつたら？」と島仲は微笑しながら言つた。

その島仲の顏がいつになく山村に親み深さうに思へた。そしてそれも時候のせいかも知れなかつた。山村は、不斷はこの單純な、無趣味な男、と輕蔑してゐる常識家の島仲にさへ、この寂しい、縋りどころのないやうな心持を、打明けずにはゐられない氣がして來た。

「だがね、」と山村は始めた、「細君を貰ふたつて、斯う貧乏で、そして臆病ぢやあ……。それに、僕のやうな知己の少ない、身依りのない者は、元より此方がぢつとしてゐても他所から誰かゞ世話してくれる筈もないから、それには大いに自分で奔走して廻らなければならない譯だよ、そんな事は大儀でね。實際、どうしたのか何も彼も大儀で、何をするのも面倒臭くて、そしてつまらない氣がして仕様がない。それで、つい斯うしてぼかんと賴まれもしないのに、社に居殘つてゐたり、活動寫眞を覗いたり、當もなしに町をぶらついたりしてゐるんだ。と言つて、懐に金がある譯でもないから、夜が更けて來ると、仕様がないからのそ〳〵下宿の方に歸つて行くんだがね、それが又厭でたまらないんだ、實際、貧乏な、さゝらのやうに古ぼけた疊の部屋に歸つて見たつて、何の樂みがある譯ぢやないからねえ。……」

そして、それが實際毎晩のきまりであつた。山村廣吉はいつも方々の家々が悉く戸を閉めた時分に、浮かぬ顔をして下宿の戸口に立つのが常であつた。彼は場末の荒物屋の家の二階を借りてゐたのであつた。荒物屋は子澤山の夫婦者で、彼が歸る頃はいつも戸を閉めて寢込んでゐる、恐らくは寢入りばなであるに違ひない彼等を、あゝ、氣の毒だな、と氣兼ねしながら、毎晩のやうに戸を叩いて起さねばならなかつた、彼はその度毎に、まるで放蕩な伜が夜遊びの歸りに、我が家の裏門を叩く時のやうな、その様な臆病さで暫く戸口の前に立つのであつた。そして、店の間の次の、その家族の居間にも座敷にも寢室にも兼ねられてゐる、じめ〳〵した濕氣臭い六疊に、ごろ〳〵と子供たちと共に、何本かの川の字になつて、だらしなく寢腐つてゐる彼等を想像しながら、そつとそつと戸を叩くのである、すると、いつの時でも必ず亭主が目を醒まして、「はい、はい、」と寢呆けた聲で一言返事をして、戸を開けに來てくれるのである。「どうも済みません、」と山村はぴょこ〳〵と頭を下げながら言ひ捨てゝ、大急ぎでバケツや箒や、籠や桶やの間の細い通路を縫つて、逃げるやうに二階の自分の部屋に駈け上るのである。そこには十燭の電燈と、形ばかりの机と、小さな組立本棚

と、十冊餘りの雜誌と書物と、それだけであつた。そして其の外には何にもなかつた。彼はその邊にどしんと尻餅をつくやうに腰をおろしたまゝ、洋服を脱ぐ氣も、寢間着に着換へる氣も、寢床を敷く氣もしない、いつ迄も、一時迄も、二時迄も、丁度この編輯室でのやうに、ぼんやりと坐つてゐるのである。時々餘り仕方がないと、机の前にもたれて、手當り次第に書物を開くこともあるが、決してその開いた頁を次にめくつたことはなかつた。——

「でも、晝間は却つて仕事に氣がまぎれていゝだらう。君は朝の出社時間が遲いのが何だが、それを除けると、內情は兎に角、精勵家といふ評判で、主幹の氣受けもいゝぢやないか？」と島仲は慰め顏に言つた。

「主幹の氣受のいゝ惡いが、僕の幸福に何の關係もないぢやないか？」と山村は相手の注告が餘り平凡なので、思はず斯う見得を切つて言つた。そして彼は編輯室の正面に、特別の仕切りを造つて、それに主幹室といふ札を掛けさして、そこからまるで檻の中の鬼のやうな體裁で、編輯員をぢろ〳〵見張つてゐる、主幹の長い馬面を思ひ出して、ちゝツと舌鼓を打つた。

「晝は晝で……」と山村はそこで又、罪もない島仲を假想敵のやうにして、時々苛々しい言葉を吐くのを後悔しながら、すると又急に弱音を吐いて「何しろ今言つたやうな譯でつい夜が遲くなるものだから、自然朝寢坊をするやうになるだらう、だから、いつも遲刻する、とつい主幹の顏色を……」と、こゝで又彼はふと口を噤んでしまつた、こんな單純な、常識家をつかまへて、自分は何をぐづ〳〵と喋つてゐるのだ？　と氣がつくと、ひどく恥かしい氣がして來た、そして次には不機嫌になつて來たので、

「いや、愚痴を云つたつて始まらないやね、」と云ひながら山村は立上つた。「まあ、それよりも細君でも貰ふとするかね。そしたら……」とそれから後は口の中で「少しは幸福になれるかも知れない。今の自分の生活は、これは餘り寂し

過ぎるからな……」そこで又彼は無意識にもう一度椅子に腰を下ろして、煙草に火をつけて、考へつゞけるのである、

「自分としたことが、……あゝ、これもやつぱりこの餘りに味氣ない生活が、自分にこんな事を、こんな凡人に向つて云はせるのか？　妻、家庭、――果して自分の欲してゐるものは、自分の缺乏してゐるものは、そんなものだらうか？　あゝ、俺は貧乏人の私生兒として生れて、そして金持に學資を支給せられて、やうやう中學を卒業した、そして新聞記者になつた、――そして、今、二十五歳の今日の日まで、一體誰が俺を愛してくれたらう……」など、彼はいろ／＼と自分の惠まれない、哀れな境遇を、その出産の歴史にまで遡つて、誇張して考へた。すると、次第次第に心持が憂鬱になつて來た。そこで、思ひ切つて、「さやうなら！」と口でだけは威勢よく叫んで、彼は外に出たのである。

外はもう三時間も前から夜になつてゐるやうな景色に見えた。三々五々と、秋の夜を樂みながら、杖を振つて歩いてゐる男、連れ立つて歩いてゐる女、小鳥のやうに寄り添つて話し交して行く一組や、口笛を吹きながら散歩してゐる青年、誰も彼もが樂しさうに見えるのである。だが、氣がつくと、その晩は妙に冷たい風が吹いてゐた。それは山村に、おゝ、もう間もなく冬がやつて來るんだな、と思はした、さう思ふと、彼方此方の店屋の電燈の灯さへ、如何にも冷たさうに、赤い色をして光つてゐるやうに感じられた。

「細君も細君だが、」と山村は道を　きながら考へた、「斯うして外へ出る時は洋服でごまかしてゐるやうなものゝ、せめて銘仙の袷せ位受出しておかなければならない、それから、ぼつ／＼冬服の用意も入る譯だな。……」そんな事を色々と考へて來ると、彼は突然この町の中でカーッと大聲で呶鳴つて見たい程、絶望的な感じに襲はれた。その時、丁度いつも立寄るカフエーの前に來てゐたのである。彼は一瞬間、自分の部屋の戸棚の中に、たゞ汚れた蒲團と寢間着代りの袷がある切りで、外に一枚の着物もないことを思ひ出すのと、それからポケットの中に殘つてゐる金高を胸算用する

のとを同時にして、つとカフエーの扉を押したのであつた。

カフエーの中の光景は彼の氣分を忽ち轉換するのに効果があつた。どの卓子も殆ど客が占めてゐて、それらの客たちの話聲と、煙草の煙と、埃とが一つになつて、もや〳〵と部屋の中に立ちこめてゐる中を、山村は今先までとは別人のやうな陽氣な氣分になつて、空いてゐる卓子を見付けてそこに腰を下ろした。氣がつくと、それはガノガラ〳〵と鳴つてゐる、自動ピアノの直隣の席だつたので、彼は一層のぼせたやうな氣持になつて、ほつとしてその卓子の上に肘をつくと、新聞社のことも、給のことも、秋の晩のことも、何も彼も忘れて、忙しさうに卓子から卓子の間を飛んで廻つてゐる給仕女を物色し始めた。

「どんな女だつて、鬼も十八、蛇も二十か、若い女といふものはそれ〳〵美しい所を持つてゐるものだな、」と山村は段々妙に嬉しくなつて來た「全くさうに違ひない。だから、我々はその美しい所を發見しさへすればいゝのだ。そしたら、どんな女をでも戀することが出來る。人間といふものは、乾度そんな風に造られてゐるものに違ひない、それが乾度神樣の意志といふものであらう。……」山村は非常に重大な眞理でも發見したやうな氣持になつて、彼は思はずにやりと頰に微笑を浮かべた。「もし、誰でもいゝ、明日から、最初に自分の手近に見付けた女を、他は詳細に見詰めることだ、そして一所懸命にその女の美を探すことにしよう。」

そこで、山村廣吉は非常に愉快な氣持になつて來た。彼は心持胸を反らすやうにして、ぐつと半分になつてゐた黑珈琲を飲み干した。今や、世の中のあらゆる片隅に、彼が戀することを、例へばあの吉原の女たちのやうに、煙管に火をつけて待ち焦れてゐる女がゐるやうな氣がして來た。（それは女學生か、人妻か、未亡人か、商賣女か、或ひは黑んぼか……？）そして彼女等は、たゞ山村廣吉に見出してもらふ爲にのみ、それ〳〵彼女等自身の美を、他の誰にも見せな

いで、そつと隱してゐるやうに思はれて來た。

「さうだ、何とかして戀をしなくちやあ……」

山村はさう心の中で自分と自分に言ひ聞かせるやうに叫んで、新しい珈琲をもう一杯命じた。彼の直傍で、先から一寸も休みなしにガンガラ〳〵と鳴つてゐる自動ピアノの埃だらけの音色も、無數の客たちが煙突のやうに吐き出す煙草の煙の雲も、山村には悉く愉快極まるやうに感じられるのであつた。「時は今、戀を語るべき秋である、」といふ詩を作らうと彼は考へた。……

×

そして又何日かは過ぎたが、いつかの晩、彼がカフエーで妄想したやうな、そのやうな女は中々見當らぬのである、彼の戀を受けるどんな女も、どんな女學生も、どんな人妻も、どんな未亡人も、どんな商賣女も、そしてどんな黒ん坊も。

それで、山村は急に苛々し出したり、憂鬱になつたり、かと思ふとそれが當然なことのやうな氣がしたり、或ひはメそれに就いて色々と考へて見たりした。彼はあれかこれかと煩悶して、結局、この不幸は何に根ざすのか？と考へて見た。彼の貧乏の爲か、彼の男振りに依るのか、それとも彼の心の持ち方が惡いのか？……斯う自分と自分に問ひ詰めて行つた時、彼は到頭、いや、それは、その最も重要な原因は、つまり機會に惠まれない爲だ、と獨りで考へて獨りで結論する外はなかつた。すると、機會などといふものは、これは神樣に任すより仕樣がない、その機會を惠まれる迄、さうだ、毎日自分の仕事でも勵んでゐる外あるまい、と彼は思ふのであつた。

　だが、その毎日の仕事を摑むといふことが、中々難かしいことなのであつた。先にも言つたやうに、彼はやつぱり毎晩遲くまで彼方此方とぶらついて來て、そしていゝ加減疲れた體を引きずつて、彼の煤けた部屋に歸つて來ると、十燭の電燈の光に、例のさゝらのやうに古びた疊が淺ましく照らされてゐる外に、小さな机の上には二三冊の小說本が亂雜に置かれてある切りであつた、そしてその外には、砂漠のやうに何にもないのである。それにも拘らず、彼はそのまゝ眠つてしまふ氣にもなれない、と言ふよりも、眠らうとしたところが、不眠症の爲に到底眠れないのは分つてゐた、だから、ぼんやりと洋服も脫がずに、さて本を讀むでもなしに、机の上に一時、二時と時計が進んで行くのを聞きながら、實際文字通り何にもしないで夜を更かすのが常であつた。自然、朝目を醒ますのはいつも十時を過ぎてゐた。しかし、いくら新聞記者でも、それでは少し勤めが遲れるのであつた。それに、彼の下宿は唯部屋を借りてゐるといふだけのことになつてゐて、賄をしてくれないものだから、彼はいつも社で朝飯兼帶の晝飯を食ふことになつてゐるので顏を洗ふと、大急ぎで電車の停留所まで歩いて行くのである。その電車の中で又いろ〳〵と妄想に耽るのは言ふ迄もない、ところで、規則としては、途中で一度電車を下りて、K—警察署に立寄るのが、彼の仕事の役目の一つになつて居るのであつた。彼は空腹でひよろ〳〵しながら、その警察署の薄暗い建物の中に這入ると、そこには丁度滿員のカフエーのやうに、澤山の机に澤山の巡査が、無論こゝには珈琲も笑ひ聲もなしに、鹿爪らしい顏をして坐つてゐるのである。

「今日は——何か面白い事はありませんかね?」と、彼は愛嬌のいゝ顏を作つて、巡査どもに聞いて歩くのである。

「今日は別に何もありませんよ、」とか、「何某町に強盜が一件あるんだがね、」とか、……又或る時は斯ういふこともあつた、「ほら!」と言つて、とある巡査が顎で示す方角を見ると、そこの灰色の壁に、今の今人間を斬つたばかりといふやうな、生々しい血潮に汚れた兇器が立てかけてあつた。その側に手錠を嵌められて、眞蒼な顏をして、震へながら立

つてゐる男は、裏切つた情婦を散々斬りさいなんだ場面から未だ醒め切らないで、やがては死刑臺の上に、今の瞬間と同じやうに力の拔けた足を揃へなければならないことなど、そんな事を思ひ及ぶ間もない、その人殺しの下手人であるか？……

そして、それ等の事が夕刊新聞の記事の種になるのであるが、しかしさう毎日人殺しや强盜がある筈はないので、實際は餘り出勤の時間が朝寢坊の爲に遲れた時には、だから彼は此節では大抵電車を乘り過ごしてしまふやうになつた、そして、いつとなく圖々しくなつて、「K―警察署には一つも事件なし、」と社會部長への報告に、洒々として噓を吐くことが出來るやうになつた。それでも、流石に、もしその日K―警察の管内に何か事件があつたら、それが幾つかの、外の商賣仇の新聞の夕刊に素破拔かれる譯であるから、彼は一日不愉快で、心配で、若しそんな事になつて彼の秘密が暴露して、首になつたら、そしたら明日から何をして……？と考へると、實際、氣の小さい彼は立つてもゐてもゐられない思をしなければならぬのである。が、さういふ風にして、昨日も、一昨日も、その前の日も、そして又今日も、朝寢坊、警察署行を怠ける、夕方になつて外の新聞の社會部記事を見る迄の不安……、が、どうやらかうやら、大きな過ちもなくて、彼は一日の日を送つてゐるのであつた。

そして、彼がほツと安心した頃には、卽ち社の引ける頃で、いつの間にか日が暮れて、だん／＼深くなつて行く秋の、冷たい空氣の夜が來るのである　すると又、銘仙の袷や、冬の洋服や……そしてカフエー、そして女、そして戀……。

×

荒物屋の二階には、彼が借りてゐる六疊の部屋の外に、往來に面した方にもう一つ四疊半の部屋があつた。それは山

村のよりももつと汚くて、もつと慘めだつた。その部屋には、去年、山村がこゝに引越して來た時から、既に一人の獨身者が借りて住んでゐた。

もう四十歳に近いその獨身者は、殆ど啞かと疑はれるほど、無口な男であつた。不斷は大概手織の田舍木綿の着物を着てゐた、唯一度、それが恐らくこの男が一番着飾つた時に違ひない、山村が見たことがあるのは、多分祖父の時代から持ち越した物ではないかと思はれる、黃八丈の着物を着てゐたことがあつた。恐らく年よりも老けて見える顏に違ひないが、それに深い皺が幾本か刻まれてゐて、始終苦り切つた顏をしてゐた、山村はまだ一度もこの男の笑つた顏を見たことがなかつた。荒物屋の女房の話に依ると、彼の部屋の押入の中には、土鍋だの、俎板だの、茶碗、皿などといふ簡單な世帶道具が這入つてゐて、それで彼は自炊してゐるのだといふことであつた。さうして、彼は男やもめのやうに自分で飯を炊き、自分で辨當を詰めて、毎日朝早く何處かへ出て行つて、日暮に歸つて來る習慣であつた。

「赤野さん、」（といふのがこの男の名前で、）と或る日荒物屋の女房が、彼が汚れた白縮緬の風呂敷に包んだ、辨當の空箱を下げて、歸つて來たところをつかまへて聞いた。「あなた、どちらへお勤めですの？」

しかし、田舍木綿の着物に、擦り切れた黑い博多帶を締めた、その老獨身者は、店の上り框に腰をかけて、子供に乳を含ませながら、自分に聲をかけた此家の女房の方を見向きもしないで、

「いえ、別に……」と向ふ向いて言つた切り、彼はさつさと下駄を脫いで、二階に上つて行つた。

さういふ譯だから、いつも隣室の山村が朝寢坊をしてゐるうちに、この男―赤野は外出してしまひ、そして夜は、山村が歸つて來ない前に寢てしまふのが常であつた。だから、二人は同じ家の、同じ屋根裏の、煤けた障子一重隣同志の室に住みながら、滅多に顏を合はせることはなかつた譯である。稀に階段の途などで出遭ふことがあつても、彼等は五

ひに目禮さへも交したことがなかつた。見たところ、赤野某には、隣室の山村某の存在など殆ど感じられないのかと思はれた、否、山村の存在ばかりでなく、この世のあらゆる出來事、――世界戰爭も、講和會議も、勞働問題も、社會主義も、何事に對しても一切無關心、と言ふよりも寧ろ無感覺であるやうにさへ見えた。

一度、隣室の主人が留守の時、山村はそつと境界の襖を開けて、その部屋の中を覗いて見たことがあつた。が、彼のそんな好奇心にも拘らず、そこには小つぽけな食臺と、その上に缺けた茶碗と、硯と、習字の手本らしいものと、それにその手本に依つて手習ひしたらしい日本紙の反古が部屋の片隅に、可成り嵩張つて積まれてある外には、何一つ驚くものも、目に付くものも見當らなかつた。

「こゝもやつぱり貧乏くさいな。」と山村は聲に出して獨言ちながら、ぴしやりと襖を閉めて、元の自分の坐に戻つたが、何だかその隣室の光景は自分自身の姿を見せつけられたやうな氣がして、甚だ不愉快な氣が起つて後悔しなければたらなかつた。一體この獨身者はこの町の者とも見えないが、何をしにこの都會に出て來たのだらう、故鄕には妻や子もあるのだらうか？ 何が樂みで、そしてどんな仕事をもつて、こんな煤けた生活をしてゐるのだらう、などと山村は色々と隣人のことに就いて心配した。彼も亦變な男で、或る夜なぞはそれが非常に氣になつて、又しても隣室の方に耳を凝らして、少しでもの物音をも聞逃すまいと、一所懸命に努めて見た。が、そこからは、時々墨をする微かな音と、紙と紙とが擦れ合ふひそやかな音の外には、咳拂ひの氣配一つしなかつた。そして、結局、山村が隣人に就いて知り得たところは、荒物屋の女房の話に依つて、彼は赤野又造といふ三十九歲の獨身者で、去年この町から五十里ほど離れた、隣の隣の縣から出て來た者であることと、その故鄕には兄らしい人があつて、そこから二ケ月に一度ぐらゐ葉書が來ることと、自炊してゐるとは言ふものの、米の外には漬物と茶葉と、たまに鹽鮭を食ふ外には、殆ど買物らしい買物

なしたことがないらしいことと、そしてそれだけである。だから、到頭、流石の山村も叫んだ「いや、これは要するに不思議な男だ。……が、この男が何であらうと、何を樂みに生きてゐようと、俺の知つたことぢやない！」そして、山村にも段々この不思議な隣人の存在が、氣にかゝらなくなつてしまつたのであつた。(が、それがさうでなかつた事が、今に讀者を驚かすであらう。)

さうして、彼れ此れ一年の間、二人はこの世の中で最も近くに住み合ひながら、今だに碌に言葉を交したこともなく、又顏さへ合はすことも滅多になしに過ぎてしまつたのである。だが、或る晩、思ひがけない聲が、隣の赤野又造の部屋から聞えたので、山村は驚かされたのであつた。

×

その晩、山村はやつと質受けして來た冬服と袷とを、大きな風呂敷包にしながら、珍らしく幸福な氣持になつて、だからいつもより時間もずつと早く、荒物屋の二階に歸つて來たのであつた。そこで、久しぶりにのんびりした氣持になつて、彼は今迄の服を脱ぎ捨てゝ、早速持つて歸つて來た袷に着更へて見た。それはこの春、洗張も縫ひ直しもしないで、そのまゝ質に入れてしまつたので、少し黴臭い氣もするのだつたが、兎に角この頃の夜氣に適はしい、重い、ぽつたりとした着物に着更へたことが、何とも言へぬ快よい氣がしたのである。

その時、今まで何の話聲もしなかつた隣室で、急に聲がしたのである。

「もうお前はおやすみ……」

「未だあなたはお習字なさるの？」

その答の方は、ひそ〳〵聲ではあるが、確に女の、而もそんなに年取つたのではない、聲に違ひなかつた。始め、山村は自分の耳を疑つた、が、何と思つても、耳の聞違ひである筈はなかつた。彼はまつたく心の底から吃驚して、思はずきツと睥み付けるやうに隣室の境を振り返つた。が、汚れて、所々破れた境界の襖は、昨夜も今夜も何の變りもなく、無表情に立つてゐた。そして、後は幾ら耳を澄ましても、何の物音もしないのである。

山村は質物などを受出して來て、折角早く歸つて來て、久しぶりで多少幸福な氣持で、小說本でも讀まうと思つてゐたのに、この妙な事件の爲に、悉く心持の統一が失はれてしまつて閉口した。なアに、つまらない事だ、而も普通の場合よりずつと緣の薄い隣人の部屋の出來事が、自分に何の關係があらう、と思ひ切らうとして見ても、やつぱりどうしても氣になつて、いくら小說本の頁を繰つても、一行とその上を目が走らなかつた。赤野の細君が國許から出て來たのだらうか？　或ひは又あの四十男にもさういふ情人があつて、それが泊りに來たのであらうか？　が、何故か、いや、決してそんな筈はあり得ない、と山村は考へた。あの男を一目見た者には、實際彼に戀人や愛妻があらうといふことは、どうしても信じられないことだ、と山村は考へられてならぬのである。

「さうだ、妹でも來たんだらう、」と山村はさう思ひつくと、どうかしてさう思ひ込まうと努力した、そして氣を落着けて、眠らうと思つて、やがて電燈を消して、頭から深く夜着を被つた。しかし、蒲團の上に、夜着と彼の體の間に、或ひは直目の前に、樣々の女の幻影が、ぽかりぽかりと幽靈のやうに燃え上つて、容易に眠り入ることが出來なかつた。

翌日は一週間に一日ある、山村の定休日だつたので、彼は例によつて十時過に寢床の中で目を醒ますと、早速昨夜のことを思ひ出して、青い顔を夜着の襟から突き出して、隣室の方に注意して見た、が、何の氣配もなかつた。そこで、ふと思ひついて、例に似ず活潑に蒲團の中から跳ね起きて、顔を洗ひに、階下の臺所に下りて行つたのであつた。

彼が手拭を下げて、臺所の三和土の所に行つて、バケツから洗面器に水を移しながら、何氣なく振返ると、臺所に近い隣の部屋の端のところで、二人の女が立つたまゝ何か話をしてゐるのを發見した。その一人が此家の女房であるのは直に分つたが、今一人の方は、それは多分昨夜山村がその爲にあんなに煩悶したところの、隣室の女の客に違ひなかつた。が、今朝は、さう思つた瞬間にも、山村は不思議なほど落着いてゐる自分自身を發見した。

「山村さん、お早う。」とその時、顔を洗ひ始めた彼の後から、女房が斯う聲をかけた。

「お早う。相變らず朝寢坊しちやつて……」と山村はタオルで顔を拭きながら、半分は女房に、そして半分はもう一人の見知らぬ女に、辯解するやうに言つた。「何しろ、毎晩、明け方でなくちや眠られないものですからね。」

「どうしてですかねえ。」と女房はその色黑の、短い顔を不思議さうにひそませながら、「どういふ譯で、そんなに眠れないんですかね？ 私どもは日が暮れると直に眠くなるんですのに。」

その問答の間に、山村は昨夜とはまるで反對に、殆ど無感動な態度で、傍に立つてゐる見知らぬ女を盗み見ることが出來たのであつた。彼女は非常な美人といふのではなかつたが、然し無論醜いといふのでもなかつた。背は高い方であつた。派手な銘仙の袷を着て、何か綠色の模樣の這入つたメリンスの帶を太鼓に結んでゐる、そして俯向いてゐるので、實際はよく顔の形は分らなかつたが、薄く白粉をつけた顔の形もよく、鼻も恰好よく高かつた。一體に、田舍者らしく、垢拔けのしない所はあつたが、山村には、一目見た時に、これは美しい、と十分驚かされたものである。

「この方は、あの赤野さんのお妹さんで、」とその時女房が紹介めいた言葉で言つた、「昨日、あなたがお留守の間に、お向の方から入らつしやつたんですよ。」

その時、ふと顔を上げた女の顔を、眞正面から山村は見ることが出來たが、すると、やつぱり餘り美しくもないな、とその瞬間、彼は多少譯の分らぬ失望を感じながら、しかし、警察で署長や巡査たちに話しかける時と同じやうな笑顔を浮かべて、「僕、山村と申します、どうぞ宜しく、」と輕く、何氣なささうに挨拶した。

「どうぞ……」と女は殆ど聞えない程の聲で挨拶を返した。

すると又山村は、これは決して氣持の惡い女ぢやない、脊も高いし、顔もいゝ恰好だのに……それでは何處が惡くて、何處にどういふ缺點がある爲に、彼女が非常な美人にならないのか知ら？　などと取止めのないことを考へながら、彼は然し變に心に勇みを覺えて、二階の自分の部屋に歸つて行つた。そして、机の前に坐つて、大分無性をしてゐた髭を剃つたり、机の上の書物を整理したりしてゐるところへ、階下の女房が掃除をしてくれに上つて來た。考へて見ると、先の女が未だ隣室に戻つて來た氣配がし　いので、

「お上さん、」と山村はいつになく輕い調子で言つた。「あの赤野さんの妹といふ人、一寸いゝですね。」

「兄さんとは大違ひでせう。それに、氣質もよささうですよ、」と女房は忙しげに動かしてゐた箒の手を休めて、それから一寸聲をひそめて、

「山村さん、あなた、あの人をお嫁さんに貰つたらどう？」と冗談のやうに言つた。

「くれるなら貰つてもいゝな、」と山村も冗談らしく、しかしその底に十分思はせぶりな眞實をこめて、「僕はあゝいふ人が好きですよ。ところで年は幾つ位でせうね？」

「二十五ですつて。」

「名は?」

「まあ!」と女房は人の善さそうな笑を鼻の眞ん中に集めながら、「あなた、山村さん、そんなに氣に入つたんですか? ぢや、私からもよく言つておいて上げますわ。……常子さんといふんです。」

斯う言つて、女房はどういふのかげら〳〵笑ひ出した。で、山村も少し極りが惡くなつたので、てれ隱しにやつぱり彼女に和してげら〳〵と笑つた。その時、とん〳〵と階段に、その常子が上つて來る足音がしたので、二人は急に眞面目な顏に返つて、沈默したのであつた。

やがて、女房は掃除をざつと濟ますと、何と思つたのか、そつと山村の傍に寄つて來て、彼の耳元で、聲をひそめて言つた。「赤野さんは、いつものやうに留守だから。今のうちにあの人を口說いてごらん!」そして、もう一度、然し今度は聲を立てないで、顏中の笑ひを鼻に寄せて見せて、それから急に背中を向けて忙しさうに階下に下りて行つた。

「何を、馬鹿な!」と山村は眞赤になつて「下司女房!」と口の中で、斯う女房の後から呪つておいたが、彼女の言葉は彼の心臟をいつ迄も動悸させることに効果があつた。彼は長い間、ぢつと腕を組んで机の前に坐つてゐた。彼の心臟は打つばかりで、彼は殆ど何を考へる餘裕も持たないやうに見えた。そのうちに、少しづゝ氣が落着いて來ると共に、彼はどうかしてあの常子といふ女と話がして見たい、さうだ、それには今此家のお上が言つた通り、是非とも赤野の留守の間でなければならぬ、どうかして、どんな犧牲を拂つても、何とかしてあの女と友達にならう、と色々と苦心した。そして又數分間たつた、やがて、彼は勇氣を出して立上つて、拔足して隣室との境の襖の方に寄つて行つたが、その襖の一歩手前のところ迄來ると、折角の勇氣も忽ち挫けてしまつて彼は再び机の前に歸つて來た。そして又立上つ

た。そして又坐つた。そんな事を二三繰返した後、彼は殆ど自分の無氣力に絶望したやうな氣持になつて、がらりと、わざと力一杯に、机の前の窓を開いて、同じやうに力一杯の溜息を、今日は殊に秋らしく青々と晴れ渡つて居る大空に向つて吐き出した。

その家は高臺の端れになつてゐたので、彼の直目の下から、場末の家々の屋根が、向うの方に斜めに續いてゐるのが見えた。それ等を越えて、五六丁ばかり彼方に大きな工場があつて、そこの十數本の大煙突からは、眞黒な煙がもく〱と青空に向つて這ひ上つてゐる、風の加減か、そこで金屬を打つ雜音が、氣がつくと、隨分喧ましく彼の窓まで響いて來るのであつた。そして、それ等の色々な屋根を越えての彼方には、今日は珍しく青く光つてゐる海が廣がつて見えた。が、青く玉のやうに澄み渡つてゐる大空の下に、それ等の景色は概して靜穩な感じを與へた、それが、今の彼の躍るやうなわく〱した心に、何とも一種說明し難い、ちぐはぐな感じを與へた。すると、彼は妙に腹立たしい氣持に襲はれた。そこで、彼は今度は前よりも一層力をこめて、ぴしやりと窓を閉めたのである。その時、今迄、暫くの間、外の景色などを見て、隣室のことを忘れるともなく忘れてゐたが、彼は階段をとん〱と踏む音を聞いたやうに思つた。それは、多分、常子が階下に下りて行つたのに違ひないのである。彼はそこで俄に立上つて、誰も留守の間に、あの女がどんな物を持つて來てゐるか、彼女が來てから、赤野の部屋の樣子がどんな風に變つたか、一寸見てやらうと思ひ立つた。

彼は急いで、隣室との境の襖の傍に歩いて行つた……。だが、長い間動かされたことのない襖は、急き立つてゐる彼の心をもつてして、隨分力を入れても容易に開かなかつたのを、やつとの思ひでがらりと開けて、そこに首をもつて行つたところが、しまつた！ そこにゐない筈の常子が、そこにしよんぼりと坐つて、吃驚したやうな顏をして此方に目を

見張つてゐたのである、そして大急ぎで襖の間から顔を覗かせた山村の目と、彼女の目とが、思ひがけなくはつたりと衝突したのであつた。

「やつ！」と山村は言葉で言へぬ程狼狽してしまつた、が、さういふ時には咄嗟の智恵が出るもので、「どうも失禮しました。どうも失禮しました。あの、私の部屋からこの襖の隙間を通つて、あなた、あのげじ〳〵が其方の部屋の方に這入つたんですよ、……」

そして、一瞬間の後、相手の言ふことの意味を了解すると、常子は顔色を變へて飛び上つた「へえ！ げじ〳〵ですつて？」

「あなたは御覧になりませんでしたか、私の部屋から其方へ走つて行つたんです。」

「いえ、私、ちつとも」と彼女の顔は次第に青白めて來た。

「私も狙はなければよかつたんですが、つい逃がしてしまつたものですから……。で、失禮とは思ひましたが、あわてゝ襖を開けまして、……本當に濟みません。」といふうちに、動悸がだん〳〵鎭まつて來て、次第に落着いて來ると、山村は實際げじ〳〵がゐたかのやうな氣持にさへなつて來た。「本當に失禮しました。」

「いゝえ、」と常子も少しは落着いて來たものゝ、未だ不安で堪らないやうな調子で、「ですが、私、げじ〳〵は大嫌ひですの。それはもう蛇より何より……。」

「それが、隨分大きなやつでしてね。しかし、もう向ふでも驚いて、何處かへ逃げてしまつたでせうが……」と山村は襖の際に立つたまゝ、さもげじ〳〵を探すやうな目付で、ぢろ〳〵と部屋の中を見廻した。いつものやうに食臺と、缺けた茶碗と、硯と、そして習字の手本がある外に、常子が持つて來たらしい行李が二つと、鏡と、二三十冊の雑誌のやう

な形の書物が、部屋の隅に重ねてあつた。そしてその一つの書物の表紙には『女學校講義錄』といふ標題が付いてゐることまで、山村は見遁さなかつた。何だか部屋の中が媚めかしくなつてゐるのは、行李からはみ出してゐる赤いメリンスの布切の、その色彩の爲だと分つたのは、それから未だ暫らくぢろ〳〵見廻してゐた後のことであつた。

「本當に大きなげじ〳〵でしたよ、」と又云ふことがないので、山村はくり返した。

「私、恐いわ、」と常子は眉をしかめて、つか〳〵と山村の傍に寄つて來た。そして襖に片手をかけたまゝ、山村に彼を見せて、自分の部屋の中をかへり見た。

と、山村の口の先二三寸のところに、常子の眞黑な髮が微かに匂ふのであつた。彼はその細い頸と襟足をむさぼるやうに見詰めてゐると、次第に胸の中が沸騰して來るのを覺えた。知らず知らず、襖に掴まつた常子と山村の手が、互に觸れさうになつて來て、常子の袖口から發散する甘酸つぱいやうな暖まりが、山村の體に仄かに傳はつて來るやうな氣さへした。すると、彼の全皮膚が妙に硬ばつて來て、内からともすると溢れさうになる發力を、一所懸命に防ぎ止めることに苦心しなければならなくなつた。

「げじ〳〵がそんなにお嫌ひでしたら、どうです、暫く私の部屋の方に入らしつてゐたら？」と山村は震へる聲を努めて制しながら云つた。

「さうさせて頂けましたら……。」

「どうぞ、ちつともかまひませんから。」

山村は急にいそ〳〵として、薄つぺらな座蒲團をすゝめたりした、机の前の窓を開けたりした、窓からはやつぱり黑い煙を吐き出してゐる工場の煙突が、そして青く光つた海が見渡せるのである。

「まあ、此方は本當にいゝ眺めですこと、」と常子は云つた。「それに明るいお部屋ですね。……あら、海が見えるぢやありませんか？」

「えゝ、然し殺風景で仕様がありません、」と言ひながら、山村は窓の外を眺めてゐる女の顏を、横から盜み見た。いつの間にか、二人ともげし／＼の事などは忘れてしまつたものゝやうに見えた。常子は默つて、いつ迄も遠い海を見詰めてゐた、彼女は決して美人ではなかつた、が、何處か柔かみの缺けた、何方かといふと固い感じのする表情が、却つて男の病的な感覺を引付けるのであつた。

「これは戀人にしてもいゝな。……だが、どういふ風にして、その戀を始めたらいゝか知ら？」と山村は考へた。ふと、山村はこの女こそ　神様が彼に惠んでくれたものに違ひない、と思はれて來た。あの、海を眺めてゐる、心細さうな姿はどうだ？　あれは人間が救ひを必要とする時に表はす樣子ではないだらうか？　そしてこの女を救ふのは、即ち自分の外にはないのだ、そして自分も亦彼女に救はれなければならぬ。……

やがて、彼女は次第に山村に親んで來て、いろ／＼と親しい口をきくやうになつた。殊に都合のいゝことには、彼女は思つたよりも快活で、そんなに無暗に男にはにかまぬ質の娘であるらしいことだつた。

×

山村に尋ねられたり、或ひは問はず語りに落ちたりして、常子が話したところに依ると、赤野の勤め口に就いては、妹の彼女でさへよく知らないらしかつた、——何しろ御存知の通りの無口者で、と彼女は辯解するやうに言つた、——元來、常子は小學校を卒業して、補習教育も受けたが、何故女學校に行かなかつたかと言ふと、風儀の悪い町の寄宿舍

に入ることを、父親が嚴格で許さなかつた、だから世の中の女に遅れない爲に、「女學校講義錄」や「婦人公論」を讀んでゐる、そして今度この町に來た譯は、傍ら兄の自炊を手助けながら、せめて裁縫女學校にでも通ひたかつたので、無論父親には内所で飛び出して來たのだといふことであつた。

「父が隣村の親類に行つてる留守の間に、大急ぎで荷ごしらへをしましてね、」と常子は言葉をつゞけて、「ですから、持つて來たい着物も澤山あつたんですが、何分人目を避けた家出のことですものね、ほんの着換へだけしか持つて來ませんでした。」

「なる程ね、」と山村は眞面目な顔付で相槌を打つた、「然し、少し無謀ですね、今頃お父さんたちは、さぞ心配して入らつしやるでせう。」

「本當に、」と常子は流石に心配さうな顔をして、「私もそれを思ひますと、胸が裂けさうですわ。でも、私はどうしても都會に出たくて堪らなかつたんですもの。」

「いや、それは無理はありません、」と山村は鹿爪らしく肩を聳かして言つた。そして何故か大きな溜息を吐いた。

「私、どうしたらいゝでせう、本當に、」と常子は段々感傷的になつて來て、「始めてお目に掛つたあなたに、色んな事を申上げて濟みません、つい思案に餘つたものですから……」

「いや、面白いです、……面白いなどといふと失敬かも知りませんが、いや、新時代の婦人の誰も經驗することですよ、」と山村は鹿爪らしい調子で言つた。「私も斯うしてお話を伺ひましたからは、出來るだけのお力添えにならして頂きませう。もう一旦家出なすつたからは、この上は十分勇敢に進まなくちや無駄ですよ。」

「えゝ、えゝ、それは私も決心して居ります。それにさう仰有つて下すつたので、私は本當に心強い氣がします。兄

はあの通り、力にも頼みにゝならない人ですから、どうぞ、此上とも宜しくお願ひします。」

「いゝえ、私だつて何にも出來ない男ですが、出來るだけの事は何でも致します、」と言つてゐるうちにも、山村は次第に愉快と幸福との感じに溢れて來た、思ひがけなく、神様から惠まれた娘に、こんなに迅速に接近し得られたといふ事が、實際夢のやうな氣がするのであつた。彼は晝飯時に間がなかつたことを思ひついて、勢よく階下に下りて行つて、女房に鮨をあつらへるように賴んでおいた。

「私だつて不仕合せな男でしてね、」と常子の話を一通り聞き終ると、今度は山村が自分の歴史に就いて話す番になつたかのやうに話し出した、「私は親もなければ、兄弟もない人者なんです。」そして、彼はその爲にどんなに苦勞をして來たか、どんなに物心ついてから彼は誰にも愛されたといふ覺えを持たないか、そしてどんなに誰も彼もが哀れな彼を虐げたので、今はこの世の中に、彼は自分より外に自分の味方はないと諦めてゐるか、どんなに彼は孤立して、勇敢に戰つて行かなくてはならないか、誰の助けも待たないで、唯一人で、——そして險しい心を持ちながら、來る日も來る日も砂漠のやうな乾き切つた、寂しい生活をして行かなければならないか、そして最後に現在の新聞記者生活がどんなに面白くないか、といふやうなことを、長々と話したものであつた。

だが、不思議なことに、彼が次第に快活に、そして雄辯になつて行くのと反對に、彼女にどうしたのか段々萎れて行くやうに見えた。彼女は又しても、相手の話などに全く無關心でゐるやうに、ぼんやりと海の方に眺め入つたり、何か外の事を考へるやうに、自分の部屋との境界であるところの、煤けた襖をかへり見たりした。が、その間に一つ山村を喜ばせた事は、ふと、山村の長物語の途中で、彼女がつゝましく欠伸をしたのは惡かつたが、それを機會に、片手を後の方で疊に突いて、從つて座つた體を心もち斜めに反らせ　から、膝をくづしたことであつた、一口に言ふと、彼女の態

度が非常に悶苦しくなくなつたのであつた。

「本當にお寂しいでせうね、」と相手が話し終つたと知ると、常子は今までぽかんとしてゐた顏を、急に同情の表面にしながら、「お互に寂いんですわね。……けど、これからはお隣にあなたのやうな方か入らしやると思ふと、私、どんなに氣強いか知れません。本當に此上とも宜しくお願ひ申します。」

「いや、私こそ、あなたに慰めて頂かなくちやなりません、どうぞ宜しく……。」そして、それからどんな風に話を進めたら戀になるか、と山村は考へた。が、もう一歩だ、と思ひながら、相手の方を見ると、どうも彼女が案外白々しく、冷淡に思はれる程平靜に見えるのが、ひどく飽足りなかつた。彼は變に、口の中が渇いて來るやうな、焦燥の氣持を感じた。そして、隙さへあると、ぢつと常子の顏を注意して見てゐると、それは段々暗い影が射して來るやうに思はれてならぬのである、そして、實際、何を思案に餘つてゐるのか、やつぱり家出したことが氣にかゝるものか、どうかするとうなだれて、沈思に陷るやうに見えるのである。すると、山村の氣持も、何といふ訣なく、重い塊を呑み込んだやうになつて沈んで來るのであつた。

やがて、もう間もなく赤野が歸つて來るかも知れないからと云つて、常子は立ち上つた、そして、「あの、妙な事を云ふやうですが、どうか赤野の前では、何も知らぬ顏をしてゐて下さいね。今日お話しました事なども、……」と云つた。

「ぢや、赤野さんには、私たちがお近附きになつた事を秘密にしておくんですね？　えゝ、えゝ、」と山村は云つた。

「どうぞ、ね、」と彼女は云つた。「赤野はあんな悶苦しい男ですから、變にとるといけませんから。」

「承知しました。」と云ひながら、山村は何とも云へぬ滿足を感じた、といふのは、二人が友達になつたと云ふことを――さうだ、友達になつたばかりで、それ以上何物でもないが、然しそれを秘密にするといふことが、これが如何にも樂し

い將來を暗示するやうな氣がしたからである。

秘密、々々！　と彼は一人自分の部屋に取殘されてからも、幾度もそれを心の中で叫んで見た、何とも云へぬ甘い疲勞に全身を濡らされてゐるやうな氣がした。それは些か物足らぬやうな、然し光明の最初の觸に會つたやうな、何か知ら獨りでに微笑まれるやうな心持に違ひなかつた。と、ふと、愚かしさうに崩れてゐるに違ひない自分の顏を想像して、彼は思はずてれ隱しにきつとなつて疊の上を睥んだ、そこには食べ殘りの鮨が、煙草の灰にまみれて轉がつてゐた。

×

常子が隣室に來てから二三日の間といふものは、山村は日が暮れると直ちに社から歸つて來るやうにしたが、都合の惡いことには、夜分はずつと赤野が家にゐるので、彼女の顏を見ることが出來なかつた。だから、此頃では又元のやうに、歸りは夜更になつて荒物屋の亭主に戶を開けてもらひ、そして朝は相變らず十時過に、汚い部屋の中で貧しく目を醒ます自分を見出さねばならなかつた。が、朝起きた時は、いつも赤野が外出した後なので、彼は出社するまでの數分の時間だけ、彼女に話しかける愉快を味ふことが出來た。だから、彼は日每に彼女と親みを增して行つたが、氣がつくと、彼女は或る朝は非常に快活で馴々しいかと思ふと、又別の朝はひどく何か考へ込んでゐる風で、他所々々しく振舞ふのである、そしてさういふ朝に限つて、彼女は屹度淺黑い顏に、白粉氣もなしに、變に靑白めてゐるやうに見えた。

或る朝、山村はいつもよりも又少し寢過ごした爲に、彼女と話しかけて居る僅な時間もなかつたので、せめて顏だけでも見て行かうと思つて、隣室との境の襖をがらりと開けたところが、

「いけません、いけません、」とそこに一人しよんぼりと坐つてゐた常子は、あわてゝ立つて來て、斯う聲をひそませて呼んだ。どうしたんだらう、と思ふ間もないうちに、彼もあわてゝ、反射的にぴつしやりと元の通り襖を閉めた。と、それと殆ど同時に、階段を踏んで來る足音が聞えたのである。

「おや、赤野め、まだ家にゐたんだな、」と山村が氣が付くと、譯分らずに一層狼狽してしまつて、彼は夢中で上衣を引掛けながら、階段の下り口に出るところの、自分の部屋の障子を開けると、その時丁度階段の足音の主である赤野がそこを上り切つたところで、二人は危く鉢合せをしさうになつた。

「お早う、」と山村は思はず夢中で叫んで、盜坊のやうに階段を驅け下りた。

が、赤野は默つたまゝで、一寸目禮を返しただけだつた、そして、ぢろりと一目山村の後姿を見下ろしておいて、靜かに隣室の中に這入つてしまつた。

山村はそれから夢中で靴を穿いて、夢中で電車の停留所まで驅けた、が、やがて割合に空いた電車の腰掛の一隅に腰を下ろす時分には大分氣が落着いて來た。秋の朗らかな、然し何となく物寂しい色の日光が、窓越しに彼の頭の上に落ちてゐるのを感じても、彼は心が甚だ樂まなかつた、すると又、今日も時間が遲いので、K——警察署に寄つてゐる暇のないこと、從つて今日も亦一日、他所の夕刊新聞が出る迄、それに自分の方の新聞の記事以外の記事が出てゐない事を確める迄、厭な、苛々した時間を過ごさねばならないこと、そして、それよりも何よりも、どうして又今朝に限つて赤野が今頃まで家にゐたのだらうといふこと、常子、常子、俺は常子と是非戀をしよう、……そのうちに電車を下りて、社の門をくゞつて、彼は元氣のない顏をして編輯室に這入つて行つたのであつた。ところが、彼が誰の顏も見ないやうに、目を落として、自分の椅子に腰を下ろすか下ろさない時に、彼は慌しく自分の傍に進んで來た人間の氣配には

ッとした、それは社會部長で、

「山村君」と部長は叫んだ、「氣の毒だが一×××工場まで行つてくれませんか？」

「どうかしたんですか？」とそこで山村は忽ち職業的の敏感をもつて問いた、××工場と云へば、二三日前から數百人の職工が怠業をやるとか、同盟罷業をするとか言つて騷いで居る事件を、彼は咄嗟に思ひ出したのである。

「どうも、今日あたり愈よやりさうな形勢なんだがね、」と社會部長は半月型の顎を突き出して言つた。

「いや、面白いですね、それは面白い。ぢや、行つて來ます、」と彼は何が面白いのやら、自分でも分らないことを呼んで、笑ひ顏、といふよりは泣き顏に近い顏をして俥に飛び乘つた。俥は奇麗な本通りを過ぎて、場末の工場町に近づくに從つて、次第に埃と煤煙とが多くなつた中を走るやうな氣がした、それと共に、山村の心には常子も赤野も消えてしまつて、唯一心に、今日の仕事を巧くやらう、他所の社に引けを取らぬように、といふ熱心で、身内が燃えて來るのが感じられた。

俥を工場の門口で捨てると、彼は急いで機械場のずつと奥の、職工委員の溜り場の方に走つて行つた。ガン〳〵と耳が潰れさうな、金屬と金屬との打ち合ふ響が、今にも自分を羽交ひ締めにするやうな氣がした。彼は工場の高い、大きな諸々の鬼のやうな建物の下に、如何にも自分の姿が小さくて、虫のやうに思はれた。が、勇氣を出して、レールを飛び越えたり、ブリキ屑の散らばつてゐる間を踏みつけて、息を切らしながら走つた、が、何の爲にこんなに走らねばならないのか、と思つて、甚だ馬鹿らしい氣にもなつた、しかし又、青服を着た職工たちが、迂散さうな目をして此方を見てゐるのに氣がつくと、妙に緊張した氣持になつて、又驅け出すやうに歩いた。

「新聞屋さん、」と彼が職工委員の溜りに來た時、いきなり中から一人の人相の惡い職工が呼んだ「駄目だよ、こんな所

へ来てもらつちや困るよ、帰つてくれ給へ。」

「いや、」と山村は内心の臆病さを強ひて抑えて、わざと微笑を浮かべながら、「××工場の怠業の時の僕の新聞の記事でも分る通り、僕等の方では君たちに十分の同情を寄せてゐるんです。だから、決して君たちの為にならないやうな記事は書かないつもりです。」

「何だつて？」と今まで向ふ向きになつて、四五人の委員と何か話してゐた一人の職工が、急に山村の方に振り返つて、「君はA――新聞ぢやないか。昨日の記事は何だ、まるで会社側に買収されてるやうぢやないか？」

「昨日の記事？」

「さうだよ、」と職工はむつくり立上つて、山村の傍に寄つて来て、「我々労働者は、我々のあらゆる敵に向つて戦闘を開始するんだ、我々は自覚してるんだぞ！」

すると、五六人の青服がいつの間にか山村を取り巻いて、五六人が十数人となり、そして今は全く青ざめて、びく〳〵震へ出した哀れな新聞記者を、八方から睨みつけた。

「殴つちまへ！」とその中の誰かゞ呼んだ。山村は殺られた、と思つた。が、その時、一人の分別顔をした、一人の職工が皆の前に立ち塞がつて、

「諸君、どうぞ乱暴しないで下さい。折角、我々は秩序ある運動を開始したんです。若し新聞記者などを殴つて見給へ、それこそ我々の労働運動に汚点を残すやうなものです。我々は××の労働者に劣らないやうな、秩序ある行動をとりたいと思ひますから……」

その間に、高い檻のやうな建物の間を、小さな、哀れな山村の姿は、一所懸命に走つて、俥の待つてゐる門口まで逃

げ出したのであつた。それから、然し、彼は動悸する胸を押えながら、事務所の方に廻つたり、支配人に面會を求めたり、色々と奔走して、漸く記事になりさうな材料だけはこしらへたので、やつと安心して歸りの俥に乘ることが出來た。

歸り途の俥の上で、彼は漸く少し落着いて來て身の安全を感じると、忘れてゐた常子のことを思ひ出した。彼はあの陋屋の屋根裏に、しよんぼりと物思に沈んでゐる彼女を想像すると、あの煤けた、方々破れた襖も、あのさゝらのやうに擦り切れた疊も、机も、土鍋も、悉く彼女がある爲に明るく、樂しいやうに考へられた。さうだ、そして自分のやうなものは、自分のやうなものを、慰めてくれる人は、常子のやうな女性でなければならぬ、……それからそれと考へてゐると、いつもにも增して、彼は堪らなく常子が戀しくなつた。どうしても彼女を愛しないではゐられない、彼女は確に神樣から彼に與へられたものに違ひない、と彼は思つた。だが、どうしてそれが、彼女とあんな早速話し合ふ仲になつたやうに、戀になるにはこんなに手間がとれるのだらう……

「優しい心を持ちながら……」と彼は俥の上で、口癖の文句に節を附けて言つて見た、と、どういふ譯か、涙が力一杯の勢で、目蓋の裏を擽るのが感じられた。

×

××工場の勞働爭議も無事に解決すると、山村は大分暇になつた。

「遠くて近きは男女の仲、いつしか二人は戀を語る身となつた。」——若し山村が新聞記事で情話を書くとすると、斯ういふ簡單な文句で成立する筈の戀が、彼自身と常子の間には、十分その下地が出來上つてゐさうで、どうも巧く行かな

いのであつた。彼は到頭決心して、彼女に自分の心を打明けようと思ひ立つた。そして、若し彼女が拒んだなら、早速この下宿を引拂ふ覺悟で、先づ打明ける前の晩、彼は貧しい自分の荷物を纏めた、と言つて、至極簡單なもので、數枚の着物と書物とを一つの行李にしまつて、後は、蒲團を一包にしたら、それで總てゞあつた。その晩、彼は夜が明ける迄、殆どまんぢりともしなかつた、そして夜が明けて、赤野がいつものやうに出て行つてしふ迄が、彼には十年ものやうな氣がした。

「常子さん、」と彼はやつと思ひ切つて、腋の下にびつしより汗を搔いたが、さて後を何と言つていゝか、夜中考へておいた言葉などすつかり忘れてしまつた。彼はその時、彼女の顏をそつと伺つて見た。

どうして彼女がもう少し美人でないのだらう？　と彼は咄嗟の間に、遺憾に思つた。やつぱり、これはうつかり戀怖を打明けない方がいゝかも知れない。彼は、もつと學問のある、そしてもつと美しい娘を、いつも自分の戀人なり妻として想像してゐたのである、もう少し機會を待つて。もつと美人に會ふ迄、戀などしない方が幸福ではないか知ら？が、次の一瞬間、彼は又自分自身の哀れな、貧乏な位置が反省されて、忽ち、いや、自分は心から彼女を愛してゐるのだ、彼女こそ神樣から惠まれたものに違ひないのだ、と思つた。……

「どうなすつたの？」と常子は不審さうに山村の顏をうかゞひながら言つた。

「常子さん、」と山村は頻りに口の中の渇くのを覺えながら言つた。「變な事を聞くやうですが、あなたは戀をしたことがありますか？」

「……」彼女は袂を顏に當てゝ、俯向いてしまつた。

「常子さん、」と山村は體中がほてつて來るのを感じながら、「常子さん、どうしたんです？　お氣に障つたでんすか？」

「いゝえ、」と常子は顔から袂をとつて、そしてにつこり笑つて「いゝえ、ですけれど……」

「常子さん、」と山村はぶる〳〵震へながら、然し體中にあるだけの勇氣を出して、「あなたは、……私の心持が分つて下さるでせう？」

「……」そして彼女は抵抗しなかつた。だから、山村は震へながら、精一ぱい彼女の手の甲に接吻することが出來た。

「常子さん、どうぞ私を愛して下さい、」と彼はもう一度、かすれた聲で言つて、恭々しさうに彼女の手をとつた。

「山村さん。あなた、それは本當ですか？」と常子は再び袂を顔に當てゝ、聞えない聲で叫んだ。

「本當ですとも、本當ですとも！」そして彼は全身感動に震へながら、おい〳〵と泣き出した、が、それは快よい涙に違ひなかつた、涙自身が、幸福だ、幸福だ、と言つて滴つてゐるやうに思はれた。

「ですが、山村さん、」と暫くして常子の落着いた聲が、逆上した山村の耳元に靜かに傳はつて來た「あなたは屹度、途中で私見たいなものはお厭になるでせう、私、屹度捨てられるに違ひないんですもの。……捨てられたら、私は又どんな不仕合せを見るか知れません。」

「そんな事は、そんな事は決してありません、」と山村は一所懸命に叫んだ「そんな事を言つて、あなたは私の言ふ事を斷りたいのではありませんか？」

「まあ、いゝえ。……私こそ、あなたに始めてお目にかゝつた時から、………」

その時、山村は自分ながら大膽なのに驚いた程、もつと立入つた企てに取掛つた、が、それでも彼女はやつぱり抵抗しなかつた。………

が、次の瞬間、彼は常子を突き飛ばすやうにして起き直つて、尖つた聲で、

「あなたは‥‥あなたは、初戀ぢやないんですね！」と叫んだ。

そこで、一寸長い瞬間、二人は青蒼めた顔をして、互の顔を見詰めた。

「濟みません、濟みません‥‥」とやがて、突然常子は彼の言葉を悟つて、うめくやうに言ひながら、今度は本當に泣き伏してしまつた。そして「ですから‥‥」と身を震はして泣きながら、切れ切れに言ふのであつた。

「ですから、私は‥‥私は、あなたに愛して頂くのがもつたいないと思つたのです。ですけれど‥‥ですけれど、私は‥‥私が惡かつたのです。どうぞ、どうぞ許して下さい‥‥」そして彼女はいつ迄もすゝり泣きに泣いた。

‥‥何といふ不幸な戀だ！と山村は心の中で叫んだ。折角、惠まれたと思つた相手は決して處女でないのである、自分のやうな優しい心を持ちながら、どうしてこんな慘酷な目に遭はねばならぬのか！　さう思ふと、山村は又しても、自分を憐れむ心に、胸がふさがれるやうな氣がして、それと共に、自分の前にしよんぼりと俯向いて坐つてゐる常子が、憎くて憎くて堪らなくなつた、何も彼もが醜惡に見えて來た、常子ばかりでなく、自分自身も、机も、襖も、そしてそれ等の中で成立つた戀も‥‥‥‥。

だが、直に又別の考が取つて代つた。といふのは、このまゝ常子を見捨てゝ、再び元の孤獨に歸ることを想像するのは、彼には決して堪えられないことであつた。よし、どんなに彼女が汚れてゐようとも、又どんなに値打のない女であらうとも、一度心の奧に掴んだ女を手離すことは、そしていつ又別の女が得られようかと思ふと、それは堪えられない苦痛に違ひなかつた。彼は啜り泣いてゐる彼女の、震へる襟足を見下ろしてゐると、いつか彼女の悲みが直接彼の胸に響いて來るのが感じられるやうな氣がした。彼も亦抵抗する氣力を失つた。そこで彼はこの一切のことを是認して、燃え上つた情熱に身を任せる外はないことを知つた。

「私はもう過ぎ去つたことは、それは過ぎ去つたことなのですから、それであなたを責めやうとは思ひません。私はあなたを救ひます、その代りあなたも私を救つて下さい。……あなたが私と會はない前に、あなたが誰と戀をしたからと言つて、それは私の知つた事でも、責める事でもないのです……」そして山村は洪水のやうに喋つたのであつた、何を言つたか、後になつては彼自身も思ひ出せない程喋つたのであつた、さうする事が、彼のその時の苦い痛みを忘れる唯一つの方法に違ひなかつた。

　すると、いつの間にか女は泣き止んで、けろりとした顔をしながら、山村の手に自分の手を任せてゐた。それから、無言で、二人は長い間、窓から空を、工場の煙突を、その向ふの海を、ぼんやりと眺めてゐたのであつた。

×

　それからは、毎朝、赤野が外出した後、山村が出勤する迄の短い時間や、或ひは山村の定休日や、さては、時とすると社の勤務時間中でも、同僚の手前を何とか誤間化して下宿に歸つて來たりして、山村は富子に慰めてもらふやうになつた。數日の間、彼は幸福であつた、彼のやうな、優しい、弱い心が、浮世で虐げられる時間や度數よりも、隣人の慈人に慰めを受ける時間や度數の方が、遙かに多いかと思はれる位であつた。

「不思議な女だ、實にあの女は、」と、しかし、山村はともすると、編輯室でも、電車の中でも、又は彼女の目の前にゐる時でさへ、不審に考へられてならぬことがあつた。「まつたく、どういふ女だらう？　ひどく幼稚で、快活な娘のやうな感じのする時もあれば、又大變考へ深い、憂鬱な女に見える時もある、或ひは悧好なのか、馬鹿なのか、それさへ自分には隙々分らない……。」

だが、唯一つ確なことは、彼女が情事に於いては、特に大人であることだつた。その爲にはいつも山村は壓し潰されるやうな氣がすることがあつた。又或る時は、山村が却つて嫌惡を感じる程、彼女は驚嘆すべき態度をすることがあつた。そんな時、山村は一切の存在を渦の中に打棄てゝしまひたいやうな氣さへした。が、それにも馴れて來ると、今度はその瞬間より外には、この世に何の休息もないのかも知れない、といふやうな氣がして、そのやうな休息を、終ひには山村の方から求めて、反對に常子から拒まれるやうな事にもなつた。さういふ時、彼女は、彼女自身の、それは山村にも誰にも秘密にしなければならないところの憂鬱か、或ひは心配かゞあるかのやうに、妙に何事かに思ひ入つてゐるやうに見えた。

「何をそんなに考へ込んでるの、何か僕に隠してる心配があるの？」と山村は苛々しながら云ふのであつた。今、彼自身が求めてゐることと、彼女が考へてゐることとが、一致しないと云ふ事が、彼を一層苛々させるのであつた。「二人の間に何も秘密はない譯ぢやありませんか、云つて御覧、何がそんなに心配なの？」

優しい自分の心から出る言葉は、屹度彼女の不幸を救ふに違ひないと信じてゐる山村は、常子がそむけた目を横から覗き込むやうにして尋ねるのであつた、が、彼女は何にも云はないで、唯無意味に微笑して見せるだけであつた。

「あなたは、以前の戀人のことを考へてゐるんですね？」と暫くして山村は、然しなるべく調子を優しくして聞いた、心の底では燃えるやうな嫉妬を感じたが、そんなものは出來るだけ抑えて、此際彼女の心を慰めてやらなければならない、と一所懸命に考へやうとしたのである。これ迄にも、彼は度々、彼女が以前どんな戀を、どんな男としたかといふ事を、執念く聞いて見たことがあつたが、彼女はいつの時でも、それに就いては頑固に沈默を守つて、決してそれを明かしたことがなかつた。それは即ち彼と彼女との間を、何か深い秘密で隔てゝゐるだけに、彼に一種の神秘的な魅力を

も感じさせたが、それと共に、又しても彼女を慰めるどころか、それを穿鑿する爲に、彼女を虐げよう虐げようとさせた。それは何といふ不幸なことであらう、もし彼女が何も彼も打明けてくれて、それを彼が博大た、優しい心で慰めてやる事が出來たなら、その時こそ始めて穏かな、混り氣のない情熱が二人の間に生れるだらうに、と彼は屢々殘念に思ふのであつた。

「本當に、何も彼も胸にあるだけの事を言つてくれないか?」と彼は懇願するやうに言ふこともあつた。「ね、そして僕に慰めてもらはうとは思ひませんか、――あなたは僕をちつとも信頼してくれないんですね?」

「そんな事があるものですか?」と常子は然し氣がなさ さうに言つた、「あなた一人を、私は力にしてゐるんですもの………………」

「………」山村はしかし彼女のそんな熱のない答を聞くと、段々腹が立つて來るのを覺えた。「よし、ぢやあ、そんなに私を信頼しないのなら、仕様がない、僕にも考がある!」

が、どういふ考があるのか、實は山村にも何の見當も付かないのであつた。然し、要するに、それは全然彼女から離れて、口もきかないとか、或ひは外に戀人をこしらへるとか、さういふ脅迫の意味に外ならぬのであるが、考へて見ると、そんな事は到底彼には自信のないことであつた、さう思ふと、彼は益々苛々して來て、「僕は潔よくあなたと別れませう。そして、終ひまで僕の本當の心持を分つてくれなかつた人として、僕は遠くからあなたの幸福を祈ります。僕はもう戀人も何も入らない、やつぱり元の寂しい、慰めのない生活が僕の柄に合つてゐるのかも知れません。」

「まあ、あなたお怒りなすつたの?」と彼女は急に山村の傍に寄つて來て、「私、あなたに捨てられたら、本當に死んでしまひます。ね、あなた、どうぞ勘忍して下さい、私、あやまりますから、ね、あやまりますから。」

斯う言つて、しく／＼と泣きながら、顔の傍であやまられると、山村も譯分らずに一緒に泣き出してしまつて、それで譯分らずに一切を許さねばならなかつた。實際、それで一時は彼の心が十分滿足するのであつた、彼女が何一つ打明けなくても、彼女がどんなにその『神秘的な魅力』をもつて彼を惱まさうとも、それでよいのであつた、彼女がさうしてどんなに詫びたとても、結局は唯それだけのことで、二人の間の距てては依然として元のまゝで、少しも減つてゐない事など、山村は考へる餘裕を失つてしまふのであつた。………

そして、さういふことが、殆ど毎日のやうにつゞくのである。

×

「入らつしやい、僕はもう目が醒めてゐるんですよ、」と或朝、赤野が出て行くのを待ちかまへてゐた山村が、未だ何だか部屋の中で愚圖々々してゐる常子に向つて叫んだ。

「えゝ、一寸待つて下さいね、」と常子は答へた「私、今、國のお母さんのところへ手紙を書いてゐるんですもの。」

「手紙なんか、いつだつて書けるぢやありませんか、」と山村は不機嫌な聲で言つた「僕は直に出勤しなければならない、その留守にだつて書けるぢやないの？」

「今、直なの、ぢき書いてしまひますからね、ぢきですから……」

が、山村は益々不愉快になつた。赤野が留守で、そして山村が出勤の爲に出て行く迄の、毎朝の極く短い逢引の時間をなるべく有効に利用しようなどと、毛頭考へもしない常子を、彼は甚だ飽き足りなく思つた。「そんなに大事な手紙なの？」と山村は叫んだ。「僕に會つてくれるより大事な手紙といふのなら、多分男の戀人にでも出すんでせう？」

山村の機嫌が本當に惡くなつて來たのを知ると、常子は少しあわてゝ、境の襖を開けて、未だ床の中で何かぐづ〱言つてゐる彼の枕元に飛んで來て、「何故そんなに怒るの？　ね、勘忍して下さい。……だから、私は斯うして手紙なんか止して、ほら、この通りあなたの傍に來てるぢやありませんか？」

「それが遲いよ、」と山村は口惜しさうに叫んだ、「僕が怒り出したからさうしたんぢやないの？　あなたは自分から進んでこゝへ來たんぢやなくて、僕が、僕が……」と言つてゐるうちに、山村は益々腹が立つて來た、すると彼の心持は次第に意地惡に傾いて來て、出來るだけ彼女を苛めて、苛め拔いて、彼女の心が決して自分から離れないといふ確證を得なければ氣が濟まなくなつて來た、で、彼は彼女が色々と詫びる言葉を聞かない振をして、

「いくら、あなたがそんなに巧い事を言つたつて、僕にはもう信じられない、」と山村は叫んだ、「口はいくら上手な事を言つても、行ひが裏切つてをるんぢや、信じやうがないぢやないの？」……

實際、斯ういふ事は今日に限つた事ではないのだつた。山村が一週間に一度の休日などに、それは一日お互が傍にゐて慰め合ふことの出來る書入れ日なのに、常子は一寸用事があつて下の臺所などに下りて行くと、中々戻つて來ないことが珍しくなかつた、恐らく、彼が獨り所在なささうに、又焦れつたさうに、嘆息したり、机の上に拳を食らはせたりしてゐる何分間かの間を、彼女は下の臺所で、此家の女房と愚にも附かない世間話をして消してゐるのに違ひなかつた。そんな事、こんな事を思ひ出すと、山村は益々苛々して來た。

「それに、あなたは一寸も僕を信用してゐないんだ、」と山村は叫んだ、「その證據に、何も彼も私に隱し立てして、打ち明けてくれないぢやないの？　一體、赤野さんは何處に勤めて居るんです、何故家に居ると習字ばかりしてゐるんです？　それに、何よりも肝腎なことは、あなたの先の戀人といふのは、一體どういふ人なんです、結婚してゐたんです

か？……」

「どうぞ、山村さん。」と彼女は到頭泣き出しながら言つた。「今にみんな分ることですから、それだけはどうぞ聞かないで下さい。どうぞ私をそんなに苦しめないで下さい。」

「その苦しい事を打明けて、僕に慰めてもらはうといふ氣になれないのですか？」

けれども、いつの時でも同じであつた。彼女はこの問題が出ると、彼がどんなに怒つても、どんなに脅迫しても、頑固に默つてしまふのであつた、そして最後に泣くのであつた、すると、それで山村はいつも負けるのである。が、今日は彼は決して負けるものかと思つて、そこで、彼も亦頑固に默り込んでしまつたのである。

「あなたは、いつも優しい心、優しい心と言ひながら、私にはちつとも優しくして下さらないのね」と節子は媚びるやうに言つた。

が、彼はやつぱり答へなかつた、そして彼は心の中で考へるのであつた、――なる程、さうかも知れないな、が、優しい心などといふものは、結局人間を少しも幸福にしてくれないものと見える、殊に、こんな埃だらけの屋根裏で行はれる戀に、優しい心なんて言ふものが何の役に立つものか、それは屹度ピアノでも置いてあつて、窓から月でも射し込んでゐて、いつ何時でも珈琲や紅茶が運ばれるやうな所にこそ、乾燥花のやうに生き生きと輝くに違ひない。――

「私、一體、どうしたらいゝの？」と彼女は何甘へるやうに言つた。が、山村は床の上に仰向けに寢轉んだまゝで、やつぱり一言も返事しなかつた。「あなた、私がお厭になりましたの？」

「厭になつたんぢやない！」と山村はそこで始めて口を開いた。「だが、あなたは私を少しも幸福にしてくれないぢやないか？」

そこで、二人の間に恐ろしい程靜かな、そしてお互の心を讀み合ふやうな沈默が來たのであつた。山村は煙草ばかり立てつづけに吹かしてゐた、常子は常子できよとんとした顏でその煙を見詰めてゐた。

「いや、あなた、私を拾てちやあ厭ー」と暫くすると、突然彼女は發作でも起つたやうに斯う叫んで、山村の枕元に突伏してしまつた。すると山村の目からも、ぼろぼろと涙が迸り出て、そしてそれで慾なのである。

×

戀愛は少しも山村を幸福にしないで、却つて彼の健康を奪つて行くやうに見えた、實際、彼自身も次第に苶め、次第に神經の尖つて行くのを感じた。「あゝ、俺はあの下らない女の爲に、一日一日と心も肉體も虐げられて行くのか、」と彼は屢々嘆息した。

殆ど毎日のやうに口喧嘩をして、そしてそれが埃だらけの、屋根裏の部屋の片隅で、どういふ事に依つて結末が付くかと考へた時、彼は自分自身も、又常子の魅力も、一切が一時に醜惡で悄々しく思はれて、堪らなくなるのであつた。

「どうしてそんなに、恐い目付をして私を睨んでばかりゐるの？」と彼女は聞いた。

「あゝ、あゝ、つまらない、つまらない、」と彼は嘆息するやうに言つた。「だが、僕ももう諦めてゐます。あんたは迚も僕を慰めてくれるやうに出來てゐないんだ、それが生れつきだから仕樣がない。」

「さうでせうか？」と彼女は言つた、が、別段それを悲しまうとも、何とかしてそれを反省しようとも見えないのであつた。「私、大抵の事はあなたの言ふ通りにしてゐるつもりなんですけれど…。」

「これだから助からない、」と山村は心の中で思つた。もうもうこんな女とは別れてしまひたい、こんな女から離れ

て、淸々した生活に這入りたい。が、さう思ふ後から、彼は又彼女を他人に任してしまふことを空想すると、それは何としても堪えられない氣がするのであつた。

或の雨の降る晩、山村は珍らしく早く、荒物屋に歸つて來て、二階に上らうとすると、上り框で煙草をすつてゐた女房が「ちよいと山村さん、」と聲をかけた、「山村さん、珍らしい事があるのよ。」

「どうして？」

「今し方ね、」と彼女が言ふには、「赤野さんが歸つて來て、直に妹さんを連れて、買物に行くとか言つて出て入らつしたんですのよ。」

「へえ！」と山村も多少好奇の目を見張つて呼んだ、「それは珍しい事ですね、あの兄妹が買物に出るなんて……。」

「どうも御氣の毒樣、」と彼は後から女房に掛けられた言葉を、苦笑で受けながら、二階の自分の部屋に這入つて行つた

雨のせゐか大變寒い晩で、未だ火鉢の用意もしてない部屋の中は貧乏震ひしたい程うそ寒かつた、彼は暫くぼんやりと机にもたれて坐つてゐたが、寒いのと、ボタリ／＼と落ちる雨の音を聞いてゐると、益々氣が滅入つて來る氣がしたので、チヨツと一人で舌皷を打ちながら、押入から蒲團を引つ張り出した、そして早く寢床を敷いて、電燈を消して、その中にもぐり込んでしまつた。すると、今更のやうに常子のことが考へられたり、又さういふ戀人がありながら、自分がちつとも幸福にならないことや、それといふのも彼女が惡くて自分が慰められないからだとか、然し又考へて見ると、恐らく彼女も亦自分に少しも慰められてゐないだらうといふことや、あゝ、然し、結局彼女がどういふ女であらうとも、この世の中で彼のことを懸念してくれる女は彼女の外にはないのだといふことなど、それからそれと眞暗な中で彼は頭から蒲團を被つて考へつゞけた、すると、彼は次第に感傷的になつて來た、彼は目蓋の裏が熱くなつて來るのを感じた。どうし

ても、自分は常子と結婚しやう、と彼は思つた、それには先づ兄の赤野に打ち明けねばならぬ、だが、世界のどんな物にも殆ど無神經に見える赤野にだつて山村と彼の妹の戀を知つたら、彼だつてどんなに感動してくれるだらう、それとも：

その時、赤野兄妹が表から歸つて來て、階段を上つて來る足音がした。と、山村は何といふ事なく、急に息を凝らして耳を澄てるやうな氣になつた。やがて、隣の入口ががらりと開いて、赤野の部屋に、欄間越しにぱつと電燈が點いたのがいえた。そして、暫くの間、赤野と常子とは例に依つて無言で、部屋の中を片附けて居るらしい樣子だつたが、

「隣りの人が歸らないうちに、早く寢よう、」といふ赤野の聲が聞えた。

「俺の歸つてゐることを知らないのだな、」と思ふと、山村は今迄の感傷的な氣分は何處かへ消えてしまつて、急におどけた氣持になつて、彼等がどんな話をするか、聞いてやらうと思つた、で、益々息を凝らして、聞耳を立てゝゐた。が、隣の部屋では一頻り寢床を敷く氣配などがする外、何の話聲もしなくて、やがてかちりと電燈を消してしまふと、彼等はそのまゝ寢床に這入つてしまつたらしかつた。

そこで、山村もだん／＼氣が落着いて來て、珍しくうと／＼と眠氣を催しかけた時、ふと、隣室でひそ／＼と話し合ふ聲がしたやうに思つたのであつた。で、彼はぎくりとして、暗がり中で目を開いた。が、その時も、彼は別に大した成心があつた譯ではなかつたので、唯、あの兄妹がどんな事を話し合ふか、俺の事でも話しはしないか位に思つて、輕い氣持で、彼はそつと寢床の中から這ひ出したのであつた。彼は出來るだけ注意して、音のしないように、そつと隣室との境目の襖の傍に忍んで行つた。何分眞暗な中であるから、この邊と思ふところに止まつて、そこで、彼は體中の注意を耳に集めて、ぐつと隣室の方向に首を突き出したのである。

「何といふ態だ！　それほど常子の聲が聞きたいのか、」と彼はふと暗がりの中で、犬のやうに這つてゐる自分の姿を

想像しながら、自分ながら耻かしい氣がして來た。で、彼は慌てゝ、元の寢床のところ迄戻らうとした瞬間のことであつた、彼ははツとして息が止まつたかと思つた、體中が出來るだけの細かい、早い震動をもつて表へ出した、畳に突いた兩手が、そして兩膝が砕けはしないかと思はれた。何といふ隣室の氣配だつたらう？　次の瞬間、彼は體中が耻で眞赤になつたやうな氣がした、突然喚き出したい氣がして、何物かを、腹一ぱいの聲で叱咤したい氣がした、そして體の震へは少しも止まらなかつた。……

即ち、赤野と常子とは兄妹でなかつたのである。——哀れな山村廣吉は斷然疊を蹴つて立上りたい氣がした、が、それよりも何よりも、最早や狂ふまいと幾ら努力しても、非常な力が、自然と彼の注意を隣室の方に集中させるのであつた。そしてそれは彼には息を詰められる程、堪え難いことであつた。

「あなた！」と彼の耳元で囁くのと、同じ常子の言葉！……その時、山村は思はず、大きな咳拂ひをしたいであつた。すると、隣室では明らかに狼狽したらしく、それつ切りひつそりとなつてしまつた。山村は何と思つたか、否、殆ど無意識で、ひよろ〳〵と立上つて、かちりと電燈をともした。そして、氣を落着けようと思つて、机の前に坐つて見たが、どうもぢつとして居られないので、又寢床の中にもぐつて見た。その時ふと氣が付くと、今までその蒲團の中にもぐつてゐたのを忘れてゐたのだが、彼は洋服を着たまゝなのであつた。何でもない事なのであるが、それが變に可笑しな氣がして、思はず「ふゝゝ」と聲が出て笑つてしまつた、が、その笑ひ聲が終の方で泣き聲のやうになつたかと思ふと、實際、目の方から涙がにじみ出すやうに出て來た。

獎、厭め、厭め！と山村は心の中で叫びながら、然しどうかするとそれが口の外に出さうになるので、大急ぎで蒲

團の中にもぐり込んだが、直に又起上つて、電燈を消してから、再び蒲團を頭から被つて、口惜しいな、口惜しいな、默め、許すものか、許すものか！　と口の中で叫びつゞけた。彼はその場合、反對に赤野の立場になつて考へる餘裕など夢にも考へる事が出來なかつた。覺えてゐやがれ、明日、赤野が出て行つた後で、常子を引きずり倒して、この世の中の一番侮辱の言葉を浴びせ掛けてやるぞ、そして、どんなにその際彼女が泣いても、死んでも、決して許さないぞ！と心の中で叫んだ、そして彼は寢返りをしたり、自分と自分の體を抓つたり、「よし！」と叫んだり、「俺も[illegible]」と叫いたり、……だが、何と力んで見ても、實際腹の中に穴でも開いたやうに力がなかつた。

どうして、眠るどころではなかつた。彼は明日、彼女にどんな侮辱の言葉を浴せてやらうと思案した。だが、考へて見ると、どんな言葉を以て、たとへ彼女を切々に粉碎したところが、後に何の慰めも殘らないに違ひない、今迄彼女を苛めたり、彼女を困らしたりしたのは、結局その後に慰めを期待すればこその事に違ひなかつたのである、しかし、今度の場合は……。そして彼は汚れた蒲團の中で、蒸のやうに青蒼めながら、夜の明けるのを待つてゐた。

×

「さあ、打明けて下さい、あなたは赤野さんとはどういふ關係です、夫婦か、それとも唯の戀人か？」と山村は殆彼女の襟頸を掴むやうにして、赤野が出て行く迄堪えてゐた暴力をもつて、彼女を隣室から自分の部屋に引張つて來ながら叫んだ。

「夫婦ぢやありません、又戀でもありません、」と彼女はそんな場合に拘らず、覺悟したやうに落着いてゐて、然し血走つた目を据えて、聞きとれぬ程の聲で言つた。

「ちやあ、何です？」ともう山村は彼女がどんな驚くべき事を白状しようと、ちつとも驚かない覺悟で、破れかぶれの心持で叫んだ、が、その叫び聲の後から、彼は彼自身が絶望の極にあることを感じると、胸の中ががらん洞になつたやうな氣がした。この途端、彼は常々が何とも言へぬ悲しげな、ベソを搔いたやうな表情をしてゐるのを發見した。彼は今迄に、これ程悲しさうな顏をした彼女を見たことがなかつた、それは何の芝居氣もない、眞に情けなさを感じた時の子供の泣顏のやうであつた。實際、そして彼女は忽ち激しく止め度なく泣き出したのであつた。

「山村さん、私ほど不仕合せな者はありません、」と彼女は漸く少し泣き聲が止まつてから、決心したやうに言つた。

「今こそ、何も彼も申し上げます……」と彼女は始めたのであつた。「私、今まで色んな事を隱してゐたんですけど……」

「もう何にも聞きたくはない、」と山村は叫んだ。彼は彼女に聞かうとするよりも誰よりもこの世の中で自分が一番可哀さうなものだと考へた、彼も泣けて來たのであつた、「僕の方がよつ程不仕合せです！」と彼は叫んだ。

「いえ、いえ、」と彼女は聲を引吊らせて言つた。「私ほど不仕合せなものはありません 何故つて、何故つて、私は……」と彼女は少し言ひ淀むやうに、「私は、赤野とさへ夫婦になれない身分なのです……」

「何、それは一體どういふ事です？」と山村は叫んだ。と、常子は一瞬間口を噤んだ、そして、山村が苛々して、後を促すやうに彼女の肩に手をかけた時、彼女は涙に汚れた顏を上げて、決心したやうに言つた。

「私の身分は、戸籍謄本を見て下されば、そして少し調べたら分るんですから……ええ、どうせ遊かれ、ふられ、あなたに捨てられるのは分つてゐたんです、分つてゐたんですけど……」とそこで彼女は再び袂で顏を蔽ひ、激しく肩を震はせながら泣き出した。

そして、途切れ途切れに彼女が言つたことには、彼女は穢多なのであつた、どうして相當な農家に生れた赤野が、ふ

としたことから彼女と關係して、そして後悔したか、その爲に彼女が故郷を出奔しなければならなかつたが、又大きな居牛場の持主で、金持である家の娘でありながら、常子は好いても居なかつた赤野とそんな事になつたか――實際、彼女は少しも赤野を愛してはゐないのだが、さういふ呪はれた種族の娘に生れたといふだけで、そんな男の出來心に縋つてゞも、さういふ呪はれた身分から逃れたかつたのであつた、して見ると、恐らく穢多の娘であるといふ運命から脱け出したいと彼女が一所懸命に願ふ限り、そしてそれが彼女の兩親たちが彼女の爲に望むところである限り、彼女は何處までも、地球の果までも、赤野の一旦の過ちを種にして、彼にしがみ付いて行かなければならないといふのであつた。

「では、どうして……？」と言ひかけて、「しかしそれは本當なの？」

「どうしてこんな事を嘘を言ふものですか！」と彼女は啜り上げながら言つた。「今まで家出したとか、赤野の妹だとか言つたのは、みんな嘘なんです……」

山村はもう何とも言ふ言葉を持たなかつた、彼は全く度を失つてしまつたのであつた。では、さういふ自分の女だつたのか！と幾度も幾度も心の中で呟いてゐるうちに、然し不思議にだん〳〵心持が落着いて來るのを感じた、それと共に、彼の所謂優しい心が次第に蘇返つて來たが、彼はそれを又強ひて追ひ拂ふように努めた。だが、可哀さうな女があるものだな、」と心の底で同情する一方、「でも、まあよかつた。地球の果まで穢多の娘に追駈けられる役目が赤野ので、自分でなくてよかつた、」とも考へた、が、彼の心は次第に憂欝に沈んで來た。

「いや、よく分りました、」と彼は一所懸命の努力で言つた。「あなたの部屋にお歸り下さい。」

山村はぽかんとして、何處を見るともなく目を見張たまゝ、案外素直に彼女が隣室に歸つて行つて、そして向ふから襖を閉める音を聞いた。すると、又何とも言へぬ可哀さうな氣になつて、もう一度彼女を呼び戻して慰めてやりたいや

うな氣がしたり、又どうかすると、もう一度苛めてやりたいやうな氣も起るのであつた。ひよつとすると、今彼女の言つたことは皆嘘かも知れない、欺されて、負けてはならぬぞといふやうな氣もした。もう二度と物を言ふまい、その方がいゝ、その方がいゝ。けれども又、この世の中に唯一人、俺のことを懸念してくれる者が、それがさういふ身分の女であらうとは！　と思ふと、彼は再び激しい感動が胸の中に込み上げて來るのを覺えた。どうして、あゝ言ふ哀れな女のいふことが、嘘でなどあり得よう、さうだ、此際、何もかも忘れて、もう一度彼女を慰め、そして抱擁してやらうか、それが自分のやうな不幸な男に與へられた運命ではないか？……

いつまでも續く隣室のひそ〳〵と泣く聲を氣にしながら、山村はその日はいつの間にか酔を休むことに定めて、長い間、固くなつてぢつと坐つてゐた。

×

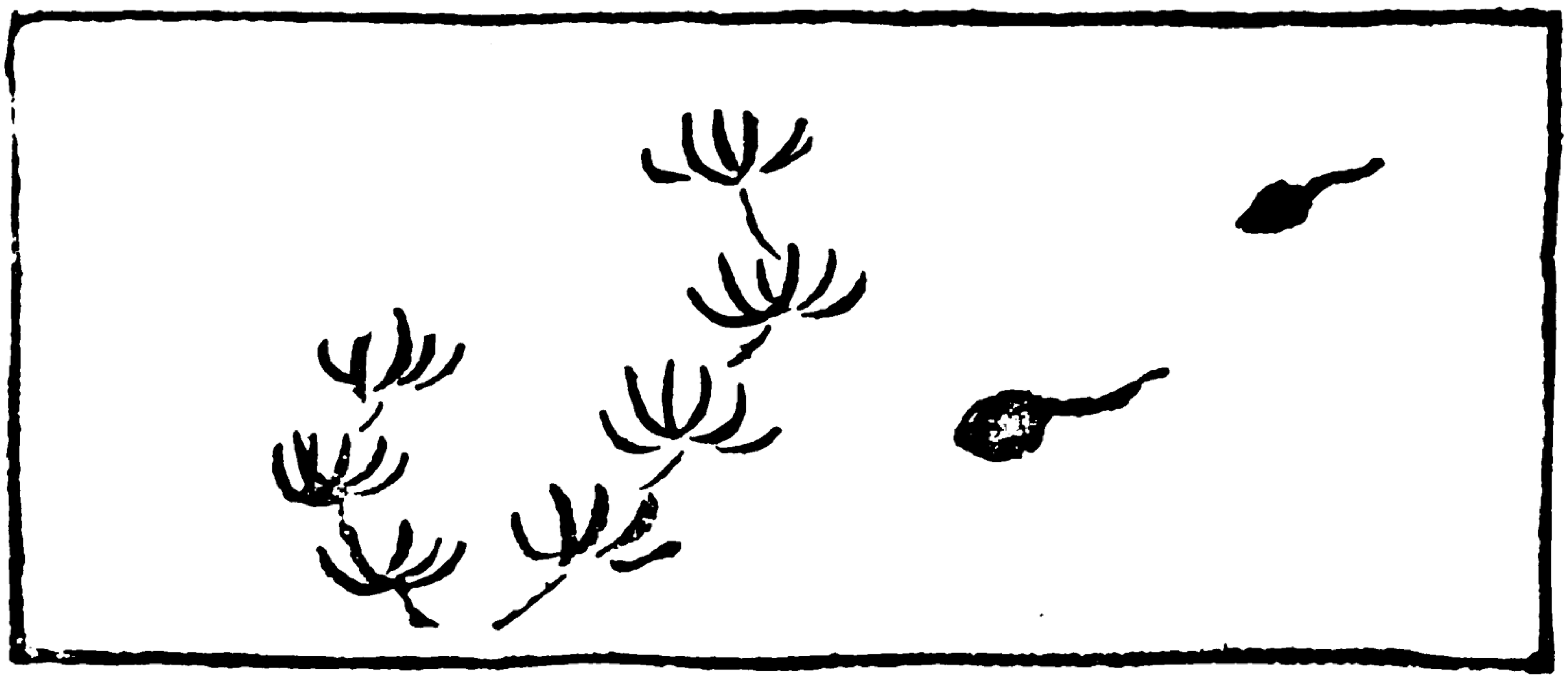
そして又、際限のない新聞記者生活の苦勞が相も變らず彼の上に戻つて來たのであつた、が、彼はその二三日は全く氣の拔けた人のやうな狀態であつた。

階段などで常子と顏を合はしても、言葉一つ掛けずに行き過ぎた。二人とも、笑はぬ視線かばつたり會ふと、あわてて目を外らしてしまつた。彼女は青蒼めた顏の額に、頭痛膏などを貼つてゐた。元より彼は無心である譯には行かなかつた。――これが二三日前まで、あんなに戀して、慰め合つたり、いがみ合つたりした二人なのか知ら？　あんな身分と聞いたら尚のこと見捨てゝはならないものではないか？　いや、いや、どんな事があつても、此際彼女を捨てゝしまはなければ、一生浮ばれない。――そして始終、彼の心の中は梅雨空のやうに晴れないのであつた、元より仕事など手

につかなかつた。そして又、忘れよう忘れようとしても、いつかの晩のあの隣室の呻き聲が時々耳元に鳴つて、その度毎に彼は激しい身震ひを禁じ得なかつた。

ところが、彼がそんなに惱んでゐるにも拘はらず、彼女はけろりとした顔をして、下の女房と無駄話をしてゐる時などは、彼は胸が張り裂けるやうに苛々しなければならなかつた。が、今更それを叱る權利もないのであつた。

「常子さんは今朝も頭痛がすると云つて寢てるんですよ、何かあつたんでせうか？」と山村が或る朝顔を洗つてゐると、下の女房がそんな事を云つた。彼はつゞいて彼女が何か下等な言葉でからかひさうにするのを、大急ぎで逃げるやうにして階段を驅け上つた。が、さうしてばつたりと倒れるやうに机の前に坐ると、忽ち隣室に頭痛がしてゐると云つて寢てゐる彼女の姿が意識に上つて來るのであつた。彼女のあらゆる吐息までが、はつきりと記憶の中に目覺めて來るのである。そこで、彼は激しく頭を振つて、まざ／＼と蘇み返つて來る執着心に反抗するやうに、「あんな女、もうあんな女に拘り合つてはならない、」と心の中で呼ぶのである。が、さうすればする程、昔より一層複雑な魅力を加へて、彼女の幻想がはつきりと頭に浮んで來るのであつた。――いつその事、此方も相手の弱點につけ込んで、彼女を散々に弄んでやらうか？　いや、弄ぶなんて云ふのは自分を欺す辯解で、實はやつぱり元のやうになりたい心か？　あゝ、いけない、いけない、とそこで彼は又激しく頭を振つて、決心したやうに立上つて、出勤する爲に押入から洋服を出してゐる時、隣室から常子のわざとらしい咳拂ひの聲が聞えて來た。すると、忽ち彼は合圖を聞いた戀人のやうに立上つた。そしてこれは彼の所謂優しい心がさうさせるのか、それとも棄鉢な心がさうさせるのか、それは彼自身にも分らなかつた、何故と云つて、「いけない、いけない！」と彼は口の中で呟きながら、いつの間にか彼の足は境の襖の方に歩いて行つて、彼の手はその襖の引手に掛つてゐたのであつた。……（十二・二）



黒髪

近松秋江

一

……その女は、私の、これまでに數知れぬほど見た女の中で一番氣に入つた女であつた。どういふ所が、そんなら、氣に入つたかと訊ねられても一々口に出して説明することは、むつかしい。が、何よりも私の氣に入つたのは、口のきゝやう、起居振舞ひなどの、わざとらしくなく物靜かなことであつた。そして、生まれながら、何處から見ても京の女であつた。尤も京の女と云へば、どこか顏に締りのない感じのするのが多いものだが、その女は眉目の邊が引締つてゐて、口元なども屢〻彼地の女にあるやうに弛んだ形をしてをらず、色の白い、夏になると、それが一層白くなつて、じつとり汗ばんだ皮膚の色が、ひとりでに淡紅色を呈して、いやに厚化粧を賣り物にしてゐるあちらの女に似ず、常に白粉などを用ゐぬのが自慢といふほどでもなかつたけれど……彼女は、そんな氣どりなどは少しもなかつたから……多くの女のする、手に暇さへあれば懷中から鏡を出して覗いたり、髮をなほしたり、又は紙白粉で面を拭くとかいつたやうなことは、ついぞなく、氣持ちのさつぱりとした、何事にでも内輪な、どちらかといふと色

貌の美しいと云つてもいゝくらゐの女であつた。

そして、何よりもその女の優れたところは、姿の好いことであつた。本當の背はさう高くないのに、ちよつと見て高く現はれるのは身體の形がいかにもすらりとして意氣に出來てゐるからであつた。手足の指の形まで、すんなりと伸びて、白いところにうす蒼い靜脈の浮いてゐるのまで、一入女を優しいものにしてみせた。冬など蒼白いほど白い顏の色が一層さびしく沈んで、いつも銀杏がへしに結つた房々とした髮の毛が細おもての兩頰をおほて、長く取つた髱が鶴のやうな頸筋から半襟の被ひかぶさつてゐた。

それは物のいひ振りや起居と同じやうに柔和た表情の顏であつたが、白い額に、いかつくないほどに濃い一の字を描いてゐる眉毛は、さながら白沙青松ともいひたいくらゐ、秀でゝ見えた。けれど私に、何時までも忘れられぬのはその眼であつた。いくらか神經質な、二重瞼の、何處までも黒い、賢さうな大きな眼であつた。彼女は、決して、人に求めるところがあつて、媚を呈したりして泣いたりなどするやうなことはなかつたけれど、どうかした話のまわり合せから身の薄命を省みて、ふと涙ぐむ時など、じつと默つてゐて、その大きな黒目がちの眼が、ひとりでに一層大きく張りを持つてきて、赤く充血するとゝもに、さつと露が潤んでくるのであつた。私は、彼女の、その時の眼だけでも命を出して彼女を愛しても悔はないと思つたのである。その頃は年もまだ二十を三つか四つ出たくらゐのもので若かつたが、商賣柄に似ぬ高踏（こうとう）な好みから、頭髮の飾りなども金あしの簪に小い翡翠の玉をつけたのをよく挿してゐた。……

二

それは、その女を知つてからもふ四年めの夏であつた。夏中を、京都に近い畿内のある山の上に過した。高い山の上では老杉の頂から白い霧が、碧い空のおもてに湧いて、八月の半ばを過ぎる頃には早くも朝夕は冷い秋めいた風を身に覺えるやうになり、それとゝもにそゞろに都會の生活が懷しくなつてきた。夏の初、山に行くまで、東京から京都に來ると、私は一ケ月あまりその女の家にゐたのであつたが、又近いうちに山を下りてゆくといふことを云つてやると、女

からは簡單な返事が來て、少しく事情があつて、まだ自由な身でないので、内證の男を自分の處に置いとくことは方々に對して憚りがある。夏の時は、一年半も會はなかつたあとのことで、あれは格別に主人の計らひで公けにさうしたのであつたが、度々といふわけにはゆかぬ。そのうち此方から何とか挨拶をするまで、京都へは來ないで、すぐ東京の方へ歸つて居つてもらひたいといふのであつた。

けれども私は、どうしてもそのまゝすぐ東京へ歸つてゆく氣にはなれなかつた。そして九月の中旬に山を下りて紀伊から大阪の方の旅に二三日を費して、佗しい秋雨模樣の、ある日の夕ぐれに、懷しい京都の街に入つてきた。夏の初山の方に立つてゆく時は女の家から立つていつたので長い間情趣のない獨り住居に倦きてゐた私は、暫くの間でも女の家にゐた間のしつとりとした生活の味が忘られず、出來ることならば近ぐ又女の處へ行きたかつたのだが、女は九月の初にそれまでゐた餘處の家の二階がりの所帶を疊んで母親はどこか上京邊の遠い親類にあづけ、自分の身が自由になるまで、少しでも餘計な錢い入るのを省きたいと云つてゐた。そのくらゐのことならば、私の方でも心配するから、夏のおはりに、自分が又山を下りてくるまでお母さんは、やつぱり此處の家へ置いて、所帶もこのまゝにして居るやうに云い置きもし、手紙でも度々そのことを繰返へしいつて越したにもかゝはらず、たうとう家は一時仕舞つてしまつたと云つて來てゐたので、私は懷かしさに躍る胸を抱きながら、その晩方京都に着くと、荷物はステーションに一時にあづけにして置き、まづ心當りの落着きのよさゝうな旅館を志して上京の方をたづねて歩いたが、どうも思はしいところがなく、さうしてゐるうちに秋の日は早くも暮れて、大分蒸すと思つてゐると曇つた灰色の空からは大粒の雨がぽつり〳〵と落ちてきた。

どこか親し味のある取扱ひをして泊めてくれるやうな處はないだらうか。女はなぜ、あの二階借りの住居を疊んでしまつたゞらう。自分は、五月から六月にかけて一ケ月ばかり彼女の處にゐる間に健康を囘して、いくらか體に肉が附いたくらゐであつた。しかし、もうあそこにゐないと云へば、これから行つてみたところで爲方もない。母親はどこにゐるのだらう。尤も女に逢はうとおもへば、すぐにでも會えないことはないが、さうして逢ふのは、つまらない。

そんなことを考へながら、ともかくも、これから暫くゆつくり滯泊するところが求めたいと思つたけれど、そのほか

に心あたりもなく、爲方なく又奥まつた處から電車の通つてゐる方へ出てくると、その電車は丁度先に女のゐた處の方にゆく電車であつたので、今はそこにゐても居なくても、やつぱりそつちの方へ引着けられてゆくやうな氣がして、雨も降つてくるので、そのまゝ電車に飛び乘つた。そして東山の方をずつと廻はつて祇園町の通りを少しゆくと、そこに彼女の居た家があるので、その近くの停留場で電車を降り、夏の前暫くゐて勝手を知つてゐる、暗い露路の中に入つていつて見たが、門は締つてゐて、階下の家主の老女もゐる氣配はせず、上の、女のゐた二階――自分もそこに一ケ月ばかり女と一つ部屋にゐた――は戸が締つて火光も洩れてゐない。

「まあ、しかし、それは明日になつてからでもよい。」

さう思ひながら、なるたけそこに近い處に宿を取りたい、暫くの間でも好きな女と一緒にゐた、懐しい場處から遠く離れたくない氣がして、そこから少し東山よりの方へ上がつていつた處にある、とある旅館にいつて泊まることにした。それといふのも、その旅館へはその女とも一緒によく泊りにいつたことのある馴染ふかい家であつたからだ。そのあたりは、そんな種類の女の住んでゐる祇園町に近いところで、三條の木屋町でなければ下河原といはれて、祇園町の女の出場所になつてゐる洒落れた土地であつた。それは東山の麓に近い高みになつてゐて、閑雅な京都の中でも取り分けて閑寂なので人に悦ばれる處であつた。

三

その前の年の冬にも東京から久しぶりに女に逢ひにいつた時にも、やつぱりその家へ泊つたが、私はその時分のことを忘れることが出來ない。急に會つて話したいことがあるから來てもらひたいといふ手紙が、女から越したので、一月の中ごろであつた。私は夜の汽車で立つていつた。スチームに暖められた汽車の中に假睡の一夜を明かして、翌朝早く眼を覺ますと、窓の外は野も山も、薄化粧をしたやうな霜に凍てゝ、それに麗かな茜色の朝陽の光が漲り渡つてゐた。雪の深い關原ケを江州の方に出抜ける、平潤な野路の果てに遠く太陽をまともに受けて淡蒼い朝靄の中に霞んで見える

比良、比叡の山々が湖西に空に連らなつてゐるのも、もう身は京都に近づいてゐることが思はれてひとりでに胸は躍つてくるのであつた。そして、幾ら遠く離れてゐても、東京に靜つとしてゐれば、諦めて落着いてゐる筈の、いろ〳〵の思ひが、汽車の進行につれて次第に募つてきて、はては悩ましいまでに不安に襲はれてくる。

「女はいゝ鹽梅に家にゐるだらうか。此間中から大阪などへ行つてゐて留守ではなからうか。大阪には一人深くあの女を思つてゐる男があるのだ。……自分が女を始めて知つた時の夏であつた。その男に招ばれて、女が向ふの座敷にいつてゐる時、ちやうど上の木屋町の床で、四五軒離れた處から、二人とも今湯を上がつたばかりの浴衣姿で、その男の傍に女が來て坐はつてゐるところを遠見に見たことがあつた。その時さながら身を熬るやうな悩ましさを覺えたことがあつた。それを思ふても、何が苦しいといつて戀ひの苦しみほど身に徹へるものはない。………どつか家に居つてくれてすぐ逢へればよいが、昨夜は、かうして、自分は汽車に一夜を明かして、はる〴〵の東京から逢ひに來たのである。女はどこへ、どんな人間の座敷に招ばれていつたらうか。まだ朝は早い。朝の遲い廓では今ごろはまだ眠つてゐるであらう。」

そんなことが綿々として、後からあとから思ひ浮んで、汽車の座席にじつとしてゐるに堪へられないくらゐになつた。私はそのあたりから頼信紙をとり出して、十一時までには必ず加茂川べりのあの家に行き着いてゐるからといふ電報を打つて置いた。そして京都驛に着いたのはまだ八時頃であつたが、どんよりとした曉霧は朝餉の炊烟と融合ひ、停車場前の廣場に立つて、一年近くも見なかつた四圍の山々を懐しく眺めわたすと、東山は白い靄に包まれて清水の塔が音羽山の中腹に夢のやうにぼんやりと浮んで見える。遠くの愛宕から西山の一帶は朝暾を浴びて淡い藍色に染めなされてゐる。私は足の踏み度も輕く、そこからすぐ先刻電報で知らしておいた加茂川べりの、とある料理屋を志していつたが、そこも廓の中にある家のことゝて、家の前に行つた時、やう〳〵店の者が表の戸をあげかけてゐるところであつた。やがて階段を上がつて、川原を見晴らす二階の座敷に通り、食べる物などをあつらへてゐるうちに、霧とも烟ともつかず、重く川原の面を立ち罩めてゐた黃色を帶びた白い川霧がだん〳〵中空をさして昇つてくる朝陽の光に消散して、四條の大橋を渡る往來の人の足音ばかり高く聞えてゐたのが、次第にちやうど影繪のやうな人の姿が見え渡つて來た。陰かな

日の影は麗々と向岸の人家に照り映えて、その屋並の彼方に見える東山はいつまでも靜かな朝霧に籠められてゐる。

女中に、少しゝたら女の聲で電話がかゝつてくるかも知れぬからと頼んで置いて、私はひとり暖かい鍋の物を食べながら、

「あゝいつて、委しい電報を打つて置いたけれど、丁度いゝ鹽梅に女が家にゐるか、ゐないか分らない、とり分け氣ばたらきのない、悠暢な女のことであるから……尤もその、しつとりとして物靜かなところがあの女の好い處であるが…………たとひ折よく昨夜の出先きから今朝もう家に戻つてきてゐたにしても、あの電報を見て、早速てきぱきと、電話口に立つてゆくやうなことはあるまい。ほんとに、人の心も知らないといふのは彼奴のことだ。」

と、そんなことを思つて、不安の念に惱んでゐると、ものゝ一時間ともたゝないうちに、女中が座敷に入つてきて、

「あの、お電話だつせ。」といふ。

私は、跳ね上がつたやうな氣がしながら、すぐさし立つて電話のところへ下りていつた。

「あゝ、もし〱、私。」と聲を掛けると、向うでも、

「あゝ、もし〱。」と呼ぶ聲がする。何といふ懷しい、久し振りに聽く女の聲であらう。振顧つて考へると、それは去年の五月から八九ケ月の間も聽かなかつた聲である。手紙こそ月の中に十幾度となく往復してゐるが、去年の五月からと云へば顏の記憶も朧ろになるくらゐである。

「あゝ、わたしよ。電報を讀んだの？」

「えゝ、今讀んだとこどす。」

「よく、家にゐたねえ。こちらは分つてゐるだらう。」

「よう分つてゐます。」

「それぢやすぐおいで。」

「えゝ、いても、よろしいけど、そこの人知つとる人多うおすさかい。私顏がさすといけまへんよつて、あんたはん、今

日そこから何處へおいでやすのだす。」

「どこへ、とは？　泊るところ？」

「えゝ、さうどす」

「それは、まだ定めてゐない。あんたに一遍逢つてからもいゝと思つて。」

それから、兎も角そんなら東山の方のとある、小隱れた料理屋で一應逢つてからのことにしよう。二時から三時までの間に兩方でそこまで行つて待合はすことにして互に電話を切らうとすると、女は、念を押すやうに、

「もし／＼、あんたはん違へんやうにおしやす。」

いくらか嗄れたやうな女の地聲で繰返へしていふ。私は、いきなり電話口へ自分の口をぴたり押付けたいほど氣になつて、

「戯談を。そちらこそ違へちやけ可ないよ。私はねえ、京都の地にゐる人と逢ふんだよ。ゆうべ夜汽車で、わざ／＼百何十里の道をやつて來たのだよ。氣の長い人だから、時間が當てにならない。待たしたら怒るよ。」さういふと、電話口で、ほゝと笑ふ聲だけして、電話は切れた。

やがてもとの座敷に戻つてくると、女中はぐた／＼煮える鍋の傍に附いてゐたが、

「來やはりやしまへんのどすか。」と訊く。

「こゝへは來ないやうだ。」

さういつて、私はそこ／＼に御飯にしてしまつた。南に向いた窓から川原の方に眼を放すと、短い冬の日はその時もう頭の眞うへから少し西に傾いて、暖い日の光は、さう思ふて見るせいか四條の大橋の彼方に並ぶ向岸の家つゞきや八坂の塔の見える東山あたりには、もう春めいた陽炎が立つてゐるかのやうである。私は約束の時間をちがへぬやうに急いでそこを出ていつた。京都の冬の日の閑寂さといつたらない。私はめづらしく、少しの酒にやゝ陶然となつてゐたので、そこから出るとすぐ居合はす俥に乘つて、川を東に渡り建仁寺の笹藪の蔭の土塀について裏門のところを曲つて、

段々上りの道を東山の方に挽かれていつた。そして靜かな冬の日のさしかけてゐる下河原の街を歩いて、數年前一度知つてゐる心あたりの旅館を訪ふと、快く通してくれた。それを緣故にして、その後も度々いつて泊つたがそこの座敷は簡素な造りであつたが、主人が風雅の心得のある人間で、金目を見せずに氣持ちよく座敷を飾つてあつた。私は厚い八端の座蒲團の上にともかくも坐はつて、女中の靜かに汲んで出した暖い茶を呑んでから、先刻女と電話で約束した會合の場所が、そこからすぐ近いところなので、時計を出して見い／＼遲刻せぬやうにと、ちよつと其處までといひ置いて、出て行つた。そこらは、もう高臺寺の境内に近いところで、蓊鬱とした松の木山がすぐ眉に迫り、節のすなほな、眞青な竹林が家のうしろに續いてゐたりした。私は、山の方に上がつてゆく靜かな細い通りを歩いて、約束の、眞葛ヶ原のある茶亭の入口のところに來て暫く待つてゐた。そこは加茂川ぞひの低地から大分高みになつてゐるので、振顧つて向うの方を見ると、麗かに照る午さがりの冬の日を眞正面に浴びた愛宕の山が金色に輝く大氣の彼方にさながら臨霞のやうに遠く西の空に渡たしてゐる。そして、あまり遠くへゆかぬやうにしてそこらを少しの間ぶら／＼してゐるところへ、此方に立つて、見てゐると細い坂道を往來の人に交つてやつて來るのは、まぎれもない彼女である。それは、去年の五月以來八九ケ月見なかつた容姿である。だん／＼近くなつてくると、向うでも此方を認めたと思はれて、嫣然してゐる。銀杏返へしに結つた頭髮を撫でもせず、黑い衿卷をして、お召の半コートを着てゐる下の方にお召の前掛などをしてゐるのが見えて、不斷のまゝである。

「私をよく覺えてゐたねえ。」と、笑ふと、

「そら覺えてゐますさ。」

「今そこで宿をきめたのだ。知つてゐるだらう、すぐそこのあの家。あそこが早く氣が付くと、すぐあそこへ來てもらうんだつた。まあ。いゝ、入らう。」さういつて、私は先に立つて、そこの茶亭に入つた。

　そして、庭の外はすぐ東山裾の深い竹林につゞいてゐる奥まつた離室に通つて、二三の食べる物などを命じて暫く話してゐた。

「こんな物が出來てえ。」と、甘えるやうな鼻聲になつて、しきりに顏の小い面皰のやうなものを氣にしてゐる。

「私、ちよつと肥りましたやろ。」

「うむ、えゝ血色だ。達者で何より結構だ。そして急に話したいことがあるから來てくれと云つたのは何の事だい？」

さういつて訊いても女は默つて答へない。重ねて訊くと、

「それは又後で話します。」と、いふ。

「ぢや、これからそろ〳〵宿の方にゆかうか。」といふと、

「私、今すぐは行けまへんの。あんたはん先き歸つてとくれやす。夜になつてから行きます。」

「なぜ今いけないの。一緒にゆかうぢやないか。」さういつて勸めたけれど、今は一寸餘處のお座敷をはづして逢ひに來たのですぐといふ譯にはいかぬといふので、堅く後を約束してそこの家を連れ立つて一緒に出て戻つた。そして旅館の入口の前で別れながら、

「一緒に御飯を食べるやうに、都合して成るたけ早くおいで。」

「えゝ、さうします。」といつて、女はかへつて去つた。

冬の夜は靜かに更けて、嚴しい寒さが深々と加はるのを、室内に取付けた瓦斯暖爐の火に温まりながら私は落着いた氣分になつて讀みさしの新聞などを見ながら女の來るのを今か〳〵と待ちかねてゐた。女はなか〳〵やつて來なかつたので、たうどう空腹に堪えかねて獨りで、物足りない夕食を濟ましてしまつた。さうしてゐても女はまだ〳〵やつて來ないので、微醺氣分でだいぶ焦れ〳〵してきて、氣長く待つ氣で讀んでゐた雜誌をも遂々そこに投げ出して、暖爐の前に褞袍にくるまつて肱枕で横になり、來ても假睡した眞似をして默つてゐてやらう。と思つてゐると、十時も過ぎて、やがて十一時ちかくになつて、遠くの廊下に靜かな足音がして、今度は、どうやら女中ばかりの歩くかとはちがふと思つてゐると、襖の外で何かいふ氣配がして、女中が外から膝をついて襖をそうつと開けると、そこに彼女のすらりとした姿が立つてゐた。そして先刻とちがひ頭髮の容もとゝのへ薄く化粧をしてゐるのですつと引き立つて見えた。かうして

みると、たしかに佳い女である。この女に自分が全力を擧げて戀れてゐるのは無理はない。こんな女を自分の物にする悦びは一國を所有するよりももつと強烈なる本能的の悦びである。

女は悠揚とした態度で入つてきながら、

「えらい遲そなりました。」と、一と口云つたきり、すこしもつべこべしたことをいはない。夕飯は濟んだかのと訊くと、食べて來たから何も欲しくないといふ。翌日は一日、寒さを恐れて外にも出ずそこで遊んでゐたが、彼女は机に凭れて、遠くの叔母にやるのだといつて頻りに卷紙に筆を走らせてゐた。櫻の花びらを、あるかなきかに、ところ／＼に織り出した黒縮緬の羽織に、地味な藍色がゝつた薄いだんだら格子のお召の着物をきて、ところ／＼紅味の入つた羽二重しぼりの繻絆の袖口の絡る白ひ纖細い腕を差伸べて左の手に卷紙を持ち、右の手に筆を持つてゐるのが、賤しい稼業の女でありながら、何となく古風の女めいて、どうしても京都でなければ見られない女であると思ひながら、私は寢床の上に燊枕しながら、女の容姿に横からつく／＼と見蕩れしてゐた。……

その時は、その晩遲い汽車で、女に京都驛まで見送られて東京に戻つてきた。それから一年ばかり。手紙だけは始終贈答してゐながら、顏を見なかつたのである。

四

その女が、自分の外にどんな人間に逢つてゐるか、自分に對して果して、どれだけの眞實な感情を抱いてゐるか。近い處にゐてさへ賣笑を稼業としてゐる者の内狀は知るよしもないのに、まして遠く離れて、しかも一年以上二年近くも相見ないで、たゞ手紙の交換ばかりしてゐて、對手の心の眞相は知られる筈もないのであるが、そんなことを深く疑へば、いくら疑つたつて際限がなかつた。時とすると堪え難ひ想像を心に描いて、殆ど居ても起つてもゐられないやうな愛着と、嫉妬と、不安のために胸を焦がすやうなこともあつたが、私は、強いて自から欺くやうにして、さういふ不快な想像を掻き消し、不安な思ひを胸から追ひ拂ふやうに努めてゐたのである。

そして、三四年につゞいてゐる長い間の此方の醜態の結果、あたりまへならば、もうとうに女の身の解決は着いてゐる筈であるのに、それがいつまで立つても要領を得ないので、後には自分の方から隨分詰問した書面を送つたこともあつたが、女はそれについては、少しも、此方を滿足せしめるやうなはつきりした返事を返さなかつた。たうとう又、やうやく一年半ぶりに女に逢ふべく京都の地に來てゐながら、私は、たゞ、あたりまへの習慣に從つて女に逢ふのが物足りなくなつて、この前の時のやうに手紙や電報で合圖をしても、それに對して一向滿足な手紙をよこさないのであつた。たゞ普通の習慣に從つて逢はうとすれば直ぐにでもあへるのであるが、女の方から進んで何とか云つてくるまでは暫く放棄つておかう。これを假りに人の事として平靜に考へてみても、向うから進んで何とか云はなければならぬ道理である。百歩も千歩も讓つて考へても、いくら卑しい稼業の女であつてもそんな譯のものではない。

さう思ひ諦めて、暫くの間、氣を變へるために私は、晩春の大和路の方へ小旅行に出掛けていつた。そつちの方は、もう長い間行つてみたいと思つてゐたところであつたが、この四五年の間私の頭の中は全部その女の爲に占領せられて、ほかのことは何も斯も後まはしにして置いた。事實のこと、私は、その女を自分のものにしなければ、何も欲しくないと思つているのであつた。名譽も財寶も入らぬ、たゞ、あの、漆のやうに眞黑い、大きな沈んだ瞳おとなしさうな顏、白沙青松のごとき、ぱらりとした眉毛、ふくりと張つた髮の毛、すらりとした容姿。あらゆる、自分の心を引着けるそんな美しい部分を綜合的に持つてゐる生き物を自分の所有にしてしまはなければ、身も世もありはせぬ。隨分身體を惡くするまでそんなに思ひ詰めてこの數年を、まるで熱病にでも罹つてゐる如き狀態で過ぎて來たのであつた。

それゆゑ私が、美しい自然や古い美術の寶庫である大和の方の晩春の中に入つて行つたのは、恰どウエルテルが悲しく傷んだ心を美しい自然の懷に抱かれて慰めようとしたと同じやうなものであつた。

そして一と月近く大和の方の小旅行をして再び京都に戻つて來た時にはもう古都の自然もすつかり初夏になつてゐた。惱ましい日の色は、思ひ疲れた私の眼や肉體を一層懊惱せしめた。奈良からも吉野からも到る處から繪葉書などを書いて送つて置いた。女から何とかいつて來るだらうと思つてゐたが、依然として知らん顏をして何のたよりもして越

さなかつた。たうとう又根負けして此方から出掛けて行つて爲方なく普通の習慣に從つてある家から自分といはずに知らすると、女はちやうど折よく内にゐたと思はれて早速やつて來た。一年半の間見なかつたのである。この前冬見た時よりも氣候の好い時分のせいか、それとも普通に招かれたお座敷にゆくので美しく化粧をしてゐるせいか。ずつと肉が附いて身體が大きくなつたやうに思はれ、もとからすらりとした、容姿女が一段引き立つて、脊が更に高く見えた。彼女達がそんな不意の座敷に招ばれてゆく時の風俗と思はれ、けば〳〵しい友禪の襦袢のうへに地味な黑縮緬の羽織を着てゐる。彼女は、階段の上り口から私の方を見たが、顏の表情は微動だもせず、ぬうつとして落着いたその態度はまるで無神經の人間のやうであつた。そして傍へ來ても「お久しう。」とも何とも云はずに默つてそこへ坐つたまゝである。どんなことがあつても彼女は決して深く巧んだ惡氣のある女とは認めないが、對手のいふことがあまり腹の立つやうなことを云つたり、くどかつたりする時にはさながら京人形のやうにその綺麗な、小い口を閉ぢてしまつて石の如く默つてしまふのである。その氣心をよく知つてゐるので、私は、こちらでも稍々暫く默つて、わざとらしく、じろじろ女の顏を見てゐたが、やつぱり遂に根まけして、

「京人形、京人形の顏を二年も見なかつたので、今そこへ來た時にはほかの人間かと思つた。」戲弄ふやうにさういふと、彼女はそれでも微笑もせず、反對に、

「あんたはんかて餘りやおへんか。」

彼女は美しい眉根を神經に顰めながら憤るやうにいふ。私は「えらい濟まんこと。」くらゐはいふであらうと思つてゐたのに、向うからそんな不足をいふので、何といふ勝手な女であらうと思つて、腹の中で少し勃然となつたが、又、そんなべたつくやうな調子の好いことをいはぬのが却つて好くも思はれる。

「一年と半とし見ないんだよ。そして一體どんな話になるのだい？　こんなに長い間顏を見たいのを堪えてゐたのも、後を樂しみにしてゐるからぢやないか。」

さういつて、今まで手紙の度に幾度となく訊ねてゐる彼女の境遇の解放について重ねて訊ねたが、女は、たゞ

「そのことは又後でいひます。」といつたきり何にもいはうとしない

「また後でいひますもないぢやないか。何年それを云つてゐると思ふ。」

二人はちやんと坐はつて向ひ合ひそんな押問答を暫く繰返してゐたが、彼女は默つて考へてゐた揚句謎のやうに、

「こゝではそのことも云へまへんから、私、かへります。」と、いふ。

私は、少し眼の色を變へて、

「妙なことをいふ。こゝで云へないて、どこでそれをいふの？」

「あんたはんがようおいでやす下河原の家へこれからいて待つてとくれやす。そしたら私あとからいきます。こゝの家から一緒にゆくのは此處の家へ對して可けまへんやろ。それから私一遍家へ去んで、あつちやから往きます。」女の持前の愛相のない調子でそんなことをいふ。

私は又女のいふことにいくらか不安をも感じたが、本來それほど性情の善くない女とは思つてゐないので、段々疑ひも解け、その氣になり、

「ぢや、さうするから、きつとあそこへ來なければ可けないよ。」と、根押しをして、その上もう餘り諄くいはぬやうにして、そこの家は體よくして、二人は別々に出て戻つた。

それから私は又、いつかの下河原の家へ行つて待つてゐた。それが日の長い五月の末の、まだ三時頃であつたが。彼女は容易にやつて來なかつた。悠暢な氣の長い女であることはよく知つてゐるので、そのつもりで辛抱して待つてゐたが、しまいには辛抱しきれなくなつて、いひやうのない不安の思ひに惱まされてゐるうちに、高い塀に取り圍まれてゐる靜かな栽庭にそろ〳〵日が影つて、植木の隅の方が薄暗くなり、暖かつた陽氣が變つてうすら寒く肌に觸るやうになつてきた。それでもまだ女の顏は見られなかつた。不安のあとから不安が襲つてきて、いろ〳〵に疑つてみたが、あんなにいつてゐたからよもや來ないことはあるまい。そんな背を向けて欺き遁げるやうな質の惡い女ではない筈である。そんなことをする女を、おめ〳〵と四年五年の長い間一圖に思ひ詰め、焦れ惱んでゐたとしたら、自分はどうして自身

の不明を耻ぢねばならぬ。義理にもそんな薄情な行爲を爲向けられるやうな事を、自分は少しもしてゐない。……今に來るにちがひない。不安の念を、さう思ひ消して待つてゐた。

しかし、それは何ともいへない好い晩春の宵であつた。この前の冬の時と同じやうに女の來るのを待つてゐる心に變りはないが、あの時とちがひ今は初夏の頃とて、私は湯上りの身體を柔かい褞袍にくるまりながら肱枕にして、寢そべり、障子を開放した前栽の方に足を投げ出して靜つと心を澄ましてゐると、塀の外はすぐ圓山公園につゞく祇園社の入口に接近してゐるので、暖かい、ゆく春の宵を惜んで、そゞろ歩きするらしい男女の高笑ひ聲が、さながら歡樂に溢れたやうに聽えてくるのである。花の季節はもう疾うに過ぎてしまつたけれど、新綠の葉が夕風のそよぎとゝもにすうつと座敷の中に流れこんで、何處で鳴いてゐるのか雛蛙の鳴く音がもどかしいほど懷しく聽えてくる。それを聞いてゐると、

「あの、喰ひ付いてやりたいほど好きですきでたまらない女は、しまいには本當に自分の物になるのか知らん。いつまでこんな不安な惱ましい思ひに責め苛まされてゐなければならぬのであらう。もう何時までもこんな苦しい思ひさせられてゐないで早く安らかな氣持になりたい。」

そこへ長い廊下を遠くの方で足音が靜かに聽えると思つて居ると、やがて女中が襖の外に膝まづきながら、

「えらい遲うおすなあ。御夕飯はどない致しまへう、もうちよつとお待ちになりますか。」

と訊く。そんなことが二三度繰返へされた後、私はたうどう待ち切れなくなつて、腹立ちまぎれに、又いつかの時のやうに、先き一人で食べてしまつたら、きつと來るだらう、早く顏を見せるまじなひに先き食べてしまはう。と思つて、

「持つてきて下さい。」と、命じた。その自分の心持には、ひとりでに眼に涙のにじむやうな悲しい憤りの感情が逆み上げてきた。それは卑しい稼業の女に飽くまでも愛着してゐる、その感情が十分滿足されないといふばかりでなく、どうして此方のこの熱愛する心持ちが向うに通はぬであらう。こちらの熱烈な愛着の感情がすこしでも靈驗あるものならば、それが女の胸に傳はつて、もつと、はき／＼しさうなのに、彼女はいつも同じやうに悠暢であつた。

そこへ女中が膳を運んできた。

一おほきにお待ちどほさん。」と、いひつゝ餉臺のうへに取つて並べられる料理の數々。それは今の季節の京都に必ずなくてはならぬ鮑の燒いたの、鮒の子膾、明石鯛のう鹽、それから高野豆腐の白醬油煮に、柔かい卵色の湯葉と眞青な菜豌豆の煮しめといふやうな物であつた。

私は、口に合つたそれらの料理を、むら／＼と咽へこみ上げてくる涙と一緒に吞込むやうにして食べてゐた。さうしてもう濟みかけてゐるところへ廊下にほかの女中とはちがふらしい足音がして、襖の陰から女がぬつと立ち顯はれた。彼女は先刻とちがひ、餘處ゆきらしい渋い金茶色の縮お召の羽織を着て、いつものとほり薄く化粧をしてゐるのが相變らず美しい。

「今まで待つてゐたけれどあんまり遲いから食べてしまつた。まだ？」

「えゝ……。」

「ぢや、お今さんすぐこしらへて下さい。このとほりでいゝ。」女中に命ずると、女に、

「入りません。食べんかてよろしい。」

「まあ、そんなことをいはないで、一緒に食べよう。待つてゐる。」

女は、私の方へは答へず、女中に向つて、

「姉さんどうぞ、ほんまに置いとくれやす。」

といつて斷はつたが、ともかくも調へて持つて來させた。けれども彼女は箸も着けようとせず、餉臺の向側に行儀よく坐つたまゝでゐる。そんな近いところから見てゐても、ちようどこんな淸々しい初夏の宵にふさはしいぱらりとした顏であつた。匂やかな薄化粧の裝ひが鮮かで、髮の櫛目が水つぽく電燈の光を反射して輝いてゐる。

女はたうどう並べた物に箸をつけなかつたが、女中が膳を引いてゆく時、

「姐さん、えらい濟んまへんけど莓がおしたら、後で持つてきとくれやす。」

自分で注文しておいて、やがて女中が退つていつたあとで、女は先刻から默つて考へてゐるやうな風であつたが——

尤も彼女はいつでも、いふべき用のない時は無愛相なくらゐ口數の少い女であつた。自分は、それが好きであつた――やがて又、彼女の癖のやうに、べちや〳〵とその理由をいはないで出拔けに、

「あんたはん、私、ちよつと歸ります。」と、謎のやうなことをいふ。

私は思はず胸をはつとさせて、凝乎と女の顔を見ながら、

「歸りますつて、お前、やつと今來たばかりぢやないか。何故そんなことをいふの。先刻の袖菊へいけば、あそこでは話がしにくい、此家へ行つてゐてくれと、あんたがいふから、私はこゝへ來たぢやないか。一體お前の體のことはどうなつてゐるの？ 私もう四年五年君のことを心配しつゞけて上げて、今日になつても、五年前と同じやうに、やつぱりする〳〵では、とても私の力には及ばない。私は、先日うちから幾度も手紙でいつてゐるとほり、今度もうあんたと遊ぶ爲めにかうして今日は來たのでない。そのことを訊かうと思つて來たのだ。君はいつまでの商賣をしてゐる氣でゐるの？」

私は腹を立てたやうな、彼女の爲めに憂ひてゐるやうななんどりした口調で訊ねるのであつた。けれども彼女は、口ごもるやうにして、それには答へず、

「それは又あとで解ります。」と、困つたやうに爲方なく笑つてゐる。

「あとでいひます云ひますつて、それが、あんたの癖だ。もうそれを云つて聽かしてくれてもいゝ時分ぢやないか。」私も爲方なく笑いにまぎらしてとひ詰める。

「こゝではいへまへん。」子供かなんぞやうに同じことをいふ。

「こゝでは云へんて、こゝで今云へなければいふ折はないぢやないか。何故かへるといふの？」

さういつて、問ひつめても、女は殊に譯をもいはずたゞ頑强に口を噤んでゐるばかりである。

明るい電燈の光をあびてゐる彼女の容姿は水際立つて見てゐればゐるほど綺麗である。そして、ふつと氣が付いてみると長い間見なかつた間にさうして坐つてゐる樣子に何となく姉さんらしい落着きが出來て、何處といつて口に云へない顔

のあたりがさすがに幾らか年を取つたのがわかる。それもさうである。はじめて彼女を知つたのが五年前の丁度今の時分で、爽やかな初夏の風が柳の新緑を吹ひてゐる加茂川ぞひの二階座敷に、幾日もいくかも彼女を傍に置いて時の立つのを惜んでゐた。向の座敷から見渡すと河原の芝生が眞青に萌え出でゝそちらにも小褄などをとつた美しい女達が笑ひ興じてゐる聲が花かに聞えきたりした。彼女はその頃よく地味な黒縮緬のたけの詰つた羽織を着て、はつきりした、すこし荒い白い立縞のお召の袷衣を好んで着てゐたが、それが一層女のすらりとした姿を引立たせてみせた。でもその頃は今から見ると女の二十といふ年から餘り遠ざかつてゐない若さがあつた。私自身にとつても、この女の爲に……まさしくこの女のためのみに纏綿思つてゐる間に、五年といふ歳月は昨日今日と流れるごとく過ぎてしまつて、彼女は今年もう二十七になるのである。さう思つて又じつとその顏を見てゐると、うすい水淺黄の襦袢の衿の色からどことなく年増らしい、しつかりしたところも見える。

女は、女中が先程持つてきた白い西洋皿に盛つた眞紅な苺の蔕を銀の匙でつゝきながら音なしく口に持つていつてゐる

「今夜ぜひ逢ふ約束でもしてゐる人があるのか？」私はさういつて訊ねた。

「ちがひます。」

「逢ふ約束の人がなければこゝにゐたつていゝぢやないか。手紙でこそ月に幾度となく話はしてゐたけれど二年近くも逢はなかつたのだから私にいろんな話したいことがあるのはあんたもよう解つてゐる筈だ。」

「そやから歸つてから、後でいひます。」

「あんた何をいつてゐるのか、私には少しも解らない。かへつてから後にいふとは。そんなら今此處でいつたら可いぢやないか。」

「ほんなら、私歸つて直ぐあとで使ひに手紙を持つてこさします。」

「折角こゝへ來て、すぐ又歸るといふのが私には解らないなあ。あんた、もう私に逢はないつもりなの？」

「ちがひます。私又あとで逢ひます。」

「なあんの事をいつてゐるのだか、私には少しも合點がゆかぬ。しかしまあ可い。それぢやお前の好きなやうにおしなさい。どんなことをいつてくるかあんたの手紙を持つてくるのを待つてゐるから。必ず使ひを越すねえ。」

「えゝこれから二時間ほどしてから俥屋をおこします。ほんなら待つとくれやす。」

　さういひ置いて、彼女は靜かに立ち上つて廊下の外に消えるやうに歸つてしまつた。私は又變な不安の念ひを抱きながら、あまり執拗に留めるのも大人げないことだと思つて女のいふがまゝにさしておいた。開放した濡れ緣のそとの、高い土塀で取り圍んだ小庭には、こんもり蓊つた植込みのまはりにしつとりとした夜霧が立ち白んだやうになつて、いくらか薄暖かい空氣の中へ爽かな夜氣が絕えず山の方から流れ込んでくる。私は食べ物の香の殘つてゐる餉臺の處から身體をずらして、そちらの小庭に近い端の方へ行つて又ごろりと橫になり、わけもなく懷しい植物性の香氣の立ち薰つてゐるやうな夜氣の流通を呼吸しながら、女の約束していつた二時間のちのたよりを、それがどんなものであるかといふ不安で堪らない中にもいひ難い樂しみに充ちた期待を以つて待つ心でゐた。

　あたりは靜かなやうでも、さすがに一步出れば、すぐ繁華な夜の賑の街に近ひところのことゝて、折々人の通り過ぎるどよみが遠音にひゞいてくる。しかし、その爲めに一入靜けさを增すかのやうに思はれる。あんまり快い氣持なので、私は肱を枕にしたまゝ、足の先を褞袍の裾にくるんで、うつら／＼となつてゐた。そこへ女中が入つてきて、

「お風召すといけまへん。もうお床おのべ致しまへうか。……あの、どこか一寸おいきやしたんどすか。」

「あゝ、お今さんか。あんまり好い心地なのでうと／＼してゐた。……いや、ちよつと、もう少し待つて下さい。」

「さうどすか。そやつたら、どうぞえゝ時およびやしとくれやす。」お今さんは、そのまゝ又靜かに退がつていつた。

　時刻は段々移つて、障子を開けてさうしてゐるのが冷すぎるくらゐに夜も更けてきた、あゝ云つていつたが、女はいつになつたら本當に使ひをよこすだらう、もう、そろ／＼こゝの家でも門を締めて寢てしまふ時分である。もしこのまゝに放棄つてしまふやうなことでもしたら、どうしてやらう、いつそ、このまゝ床を取らして寢て居らう。生半口を嘸

まして起きてゐると、そのことばかり思つて苦しくつて可けない。眠つて忘れやう。そんなことを思ひながら、又うと〱としてゐるところへ、廊下へ急ぐ跫音にふと目を覺まされると、女中が襖の外に膝をついて、

「お手紙どす。」と、いつて渡す封書を手にとつてみると、走り書きの手紙で、「先ほどは失禮いたしました。まことにむさくるしい處なれど一しよに御こし下され度候。あとはおめもじのうへにて。」と書いてある狀袋を裏返へしてみたが、處も何も書いてゐない。

「お今さん、どんな使ひがこれを持つてきた。」女中に訊ねると、

「さあ、わたし、どや、よう知りまへんけど、何でも年とつた女の人のやうどした。」

「年とつた女。まだ待つてゐるだらうな。」私にはすぐには合點がゆかなかつた。

「へえ、待つてはります。」

それで、急いで玄關の處に立ち出てみると、門の外にゐるといふので、また玄關から門のところまで、長い敷石の道を踏んで出てみると、そこには暗がりの中に彼女の母親が佇んでゐた。

「あつ、おかあはんですか。お久しうお目にかかりません。」と思はず懷かしさうにいつた。使ひが母親であつたので私はもう、すつかり安心して好い心持になつてしまつた。

「えらい御返事が遲うなつて濟まんさかい、ようお詫りをいふておくれやすいふて、あの娘がいふてゐました。」母親は、門口の、頭のうへを照らしてゐる電燈の蔭に身を隱すやうにしながらいふ、

「どうも、こんな夜ふけに御苦勞でした、ちやすぐ一緒に行き升から一寸待つてゐて下さい。私着物を着てきますから。」

私は又座敷に取つて返へして衣服に更め、女中には、都合で外へ泊つてくるかも知れぬといひ置いて急いで又出て來た。

「お待ちどうさま。さあ行きませう。」

五

私は、それから母親の先きに立つてゆく方へ後から蹤いて行つた。もう夜は十二時も疾うに過ぎてゐるので、ことに東山の畔のことゝて人の足音もふつりと絶えてゐたが、蒼白く霜の立ち罩めた空には、ちやうど十六七日ばかりの月が明るく照らして、頭を仰げて眺めるとそのまはりに暖かさうな月暈が銀を燻したやうに霞んで見えてゐる。そんなに遅く外を歩いてゐて少しも寒くなく、何とも云へない好い心地の夜である。私は母親と肩を並べるやうに懐しく傍に寄り添ひながら、

「おかあはん、ほんとうにお久し振りでした。かうと、いつお目にかゝつたきり會ひませんでした。」といつて私は過ぎたことを何斯と思ひ浮べてみた。

はじめて女を知つた當座自家はどこ、親達はどうしてゐる、兄弟はあるのかなどゝ訊いても、だれでも、人をよく見たうへでなければ容易に實のことをいふものではないが、追々親しむにつれて、親は、六十に近い母が今は一人あるきり、兄弟も多勢あつたが、みんな子供のうちにん死で、たつた一人大きくなるまでは殘つてゐた弟が、それも去年二十歳で亡くなつた。それがために母親はいふまでもなく自分までも、今日ではこの世に樂しみといふものが少しも無くなつたくらゐに力を落してゐる。叔父叔母といつても、いづれも母方の親類で、しかも母親とは腹の異つた兄弟ばかり。父親の親類といふのは何處にもなく、生命の綱とも杖とも柱とも頼んでゐた弟に死なれてからは本當の母ひとり娘ひとりのたよりない境涯であつた。彼女は、ほかの事はあまり云はなかつたが、弟のことばかりは腹から忘れられないといはれて、懐しさうによく話して聞かせた。私は、そんな身の上を聽くとすぐさま自分の思ひ遣りの性癖から「天の網島」の小春が「私ひとりを頼みの母さん、南邊に賃仕事して裏家住み。死んだあとでは袖乞ひ非人の餓え死にをなされようかと、それのみ悲しさ。」と卽ち嘆げくところを思ひ合はせて、いとさらにその女が可憐な者に思へたのであつた。

もとは父親の生きてゐる時分から上京の方に住んでゐたが、廓に奉公をするやうになつて母親も一緒に近い處に越し

てきて、祇園町の片ほとりの露地裏に佗しひ住ひをしてゐた。そこへ訪ねていつて始めて母親に會つた。そして後々の事まで話した。彼女は、こんな女にどうしてあんな鶴のやうな娘が出來たかと思はれる、むくつげな婆さんであつたが、それでゐ話しの樣子には根からの廓者でない質朴のところがあつて、

「ほんまの親一人子ひとりの頼りない身どすさかい、どうぞよろしうお願ひいたします。」といつて悲しい鼻にかゝる聲で、今のやうに零落せぬ、まだ一家の困らなかつた時分のことなどを愚痴まじりに話してきかせた。その話によると、彼女の家はもと同じ京都でも府下の南山城の大河原に近い鷲峰山下の山の中に在つたのであるが二三十年前に父親が京都へ移つてきた。故郷の山の中には田畑や山林などを相當に所持してゐたが隨分昔のことで、その保管を頼んでゐた人間が借金の抵當に入れて、すつかり取られて無くしてしまつた。

「あれだけの物があればこの子にこない卑しい商賣をさせんかて、あんたはん結構にしてゐられますのや。」母親は心細い聲でそんな古いこと迄いつてゐた。

女もそこに坐はつて、默つて母親と私との話を聽いてゐたが、大きな黒い眼がひとりでに一層大きくなつて赤く充血するとゝもに玉のやうな露が潤んだ。

「もう古い事どすやろ。」と、彼女はたゞ一口音無しく云つて、母親の話もそれきりになつた。

その後夏の終頃までも京都の地にゐる間偶に母親のところへも訪ねていつてその度ごと女の後々の事どもを繰返し話してゐたのであつた。振顧つて指を折つてみると、もうあの時から足かけ五年になる。

「おかあはん、あなたがどうして居られるか私、始終、心には掛けてゐるのです。手紙の度にあなたのことを訊ねても何處にゐるのか、少しも委しいことを知らさないものですから、一向不沙汰をしてゐました。」

「滅相もない。私こそ御不沙汰してます。あんたはんが始終無事にしとゐやすちうこと、いつもあの娘から聞いてゐしまた。ほんまに何時もお世話になりまして。お禮の申樣もおへんことどす。」

月の下の夜道をそんなことを語り合ひながら私達はもう電車の音も途絶えた東山通りを下へしもへと歩いていつた。

そして暫く行つてから母親は、とある横丁を建仁寺の裏門の方へ折れ曲りながら、

「こつちやへおいでやす。」といつて、少しゆくと、薄暗いむさくるしい露地の中へから足音をさせて入つていつた。私はその後から默つて蹤いてゆくと、すぐ露地の突當りの門をそつと扉を押開いて先きに入り、

「どうぞお入りやして。」といつて、私のつゞいて入つたあとを門を差してかた〳〵締めて置いて、又先きに立つて入口の潜り戸をがらりと開けて入つた。私もつゞいて家の中に入ると、細長い通り庭が又も一つ、やう〳〵躰の入れるだけの小さい潜戸で仕切られてゐて、幽かな電燈の火影が表の間の襖ごしに洩れてくるほかに眞暗である。母親はまたそのくゞりをごろ〳〵と開けて向うへ入つた。そして同じやうに、

「どうぞ、こつちやへずつとお入りやしとくれやす。暗うおすさかい、お氣付けやして。」

といつて中の茶間の上り框の前に立つて私のそつちへ入るのを待つてゐる。私は手でそこらを探りながら又入つて行つた。と、そこの茶の間の古い長火鉢の傍には、見たところ六十五六の品の好い小綺麗な老婦人が靜かに坐つて煙草を吸つてゐた。母親はその老婦人にちよつと會釋しながら、私の方を向いて、

「構ひまへんよつて、どうぞそこからお上りやしとくれやす。お婆さん、どうぞ御免やしとくれやす。」といつて、自分から先きに火鉢の前を通つて、すぐその三疊の茶の間のつきあたりの襖の明いてゐるところから見えてゐる。階段の方に上がつてゆく。私はそれで、やつと段々解つてきた。

「これは、此の品の好い老婦人の家の二階を借りて同居してゐるのだな。」と、心の中に思いながら自分もその老婦人に對して鄭寧に腰を折て挨拶をしつゝ、母親のあとから階段を上がつていつた。すると、階段のすぐ取付は六疊の汚れた座敷で、向ふの隅に長火鉢だの茶棚などを置いてある。そして、その奧にもう一間あつて、そちらは八疊である。

母親は階段を上がるなり、

「おいでやしたえ。」とそつちへ聲を掛けると、今まで暗い處を通つてきた眼には馬鹿に明るい心地のする電燈の輝いてゐる奧から女が先刻のまゝの姿で靜かに立つて來た。まるで先程の深く考へ沈んでゐた樣子とは別人のごとく蘇つて、

打ち融けた調子で微笑みながら、

「お越しやす。先程はえらい失禮しました。こんな、むさくるしい處に來てもらふて、済んまへんけど、あこより此處の方がきが置けいでよろしいやろと思ふて。」と、彼女は一世辭氣のない、生な調子でいつて、八疊の座敷の方に私を案内した。

私はもう、それで、すつかり安心して嬉しくなつてしまひ、座敷と座敷の境の閾のところに立つたまゝ、そこらを見廻はすと、八疊の右手の壁に添ふて高い重ね箪笥を二棹も置き並べ、向うの左手の一間の床の間には一寸した軸を掛けて、風呂釜などを置いてゐる、見たところ、もう住み古した雜な座敷であるが、それでも八疊で廣々としてゐるのと、小綺麗に掃除をしてゐるのとで何となく明るくて居心地が好さゝうに思はれる。座敷のまんなかに陶物の大きな火鉢を置いて、そばに汚れぬ坐蒲團を並べ、私の來るのを待つてゐたやうである。私は、つく〴〵感心しながら、

「これは好い處だ。こんな處にゐたのか。いつからこゝにゐたの。まあ、それでも此樣なところにゐたのならば、私も遠くにゐて長い間會はなくつても、及ばずながら心配して上げた効があつたといふものだ。うゝ好い箪笥を置いて。」私はさういひながら尙ほ立つてゐると、

「まあ、どうぞこゝへお坐りやして。」と。母子ともどもして云ふ。

やがて火鉢の脇の蒲團に座を占めて、母親は次の間の自分の長火鉢の處から新らしい宇治を煎れてきたり、女は菓子箱から菓子をとつてすゝめたりしながら暫く差向ひでそこで話してゐた。

「長いことあんたはんにもお世話かけましたお陰で私もちよつと樂になつたとことす。」

自分でもよく口不調法だといつてゐる彼女は、たら〳〵しい世辭もいはず、簡單な言葉でそんなことをいつてゐた。

私はいくらか咎めるやうな口調で、

「そんならそれと、なぜ、もつと早く此處へ來てくれ話をするとでも言つてくれなかたつのだ。一ケ月前此方へ來てからばかりぢやない。もう今年の初め頃から、あんなにやい〳〵喧しいことを云つて越したのも、それを知らぬから、入らぬ餘計な憎まれ言をいつたやうなものだつた。かうして來てみて私は安心したけれど。」

すると、母親も次の間の襖の蔭から聲を掛けて、
「この子がさういふてゐました。おかあはん、私は口が下手でよういはんさかい、あんたから、お出でやしたら、ようお禮をいふてえやちうて。……
此家のことも、もつと早うにお返事すりや好うおしたのどすけど、この子が二月に一と月ほど一寸心配するほど患ひましたもんどすさかい、よう返事も出しまへなんだのどす」
私はそちらへ頭を振向けながら、
「いや、もう、かうして來て見て、思つてゐたほどでなかつたので安心しました。」とそちらへ聲を掛けた。
ちやうど氣候の加減が好いので、いつまで起きてゐても夜の遲くなつてゐるのが分らないくらゐである。
やがてまた母親が、
「もう二時を過ぎたえ。……あんたはんもお疲れやしたろ。お休みやす。」
といつたので、やうやく氣が付いて寢仕度をした。

六

そこがあまり居り心が好かつたので、何年の間といふ長い獨棲生活に飽いてゐた私は、さうして母子の者の、出來ね中からの行きとゞいた待遇ぶりに、ついに覺えぬ、溫い家庭的情味に浸りながら一ケ月餘をうか〳〵と過してしまつた。その爲に、まだ春の寒い頃から傷ねてゐた健康をも、追々暖氣に向ふ季候の加減も手傳つて、すつかり回復したのであつた。
女は用事を仕けてその月一ぱいだけは一週間ばかり家にゐたまゝ休んだゐた。どこかへ一緒に歩いてみようかといつて誘つても、
「ほんとに商買を廢めてしまつてからにします。」とばかりで、夜遲く近處の風呂にゆくほかは一日、靜かにして家に籠

つてゐた。そして稚い女の子の氣まぐれのやうにふと思ひ出して風爐の釜に湯を沸かして、薄茶を立てゝ飲ましたりした。そして、そこにある塗り物の菓子箱を指して、

「私が二月に病氣で寢てゐる時これを持つて、見舞いに來てくれた人が、その時私を慰めさすいふてくれたんどつせ。」

「へえ、そんな深い人があるの。」

「深いことも何んもおへんげと。」

「そして引かすといつた時、あんたは何と云つたの。」

「私、すこし都合がおすさかいゝふて斷はりました。」

「その人はどんな人？何をする人。」

「やつぱり商人の人どす。」

「まだ若い人？」

「若いことおへん。もうおかみさんがあつて、子供の三人もある人どす。」

「そんな人爲方がないぢやないか。」

「そやから、どうもしいしまへん。」

「でも向うではお前が好きなのだらう。」

「そりや、どや知りまへん。」

　母親のゐない時など私達二人きり座敷で遊んでゐて、そんなことを話すこともあつた。女はいつも無口で眞面目なやうでも打解けてくると、よくとばけた戯談を云つた。

　母親がどこかへ行つてゐない時、宵のうちから私が疲れたといつて、床を取つてもらつて攣枕をして横になつてゐる傍にきて彼女は坐つてゐたが、急に眞面目になつて、

「私、あんたはんにはまだいひまへなんだけど、本當は一人子供が出來たんどつせ。」と、いふ。

私は初は疑ひながら、凝乎と女の本當らしい眼の處を見て、
「嘘だ。」といふと、
「えゝ、」と、女は頭振りをふつて、「ほんまどす。」といふ。
「それは、そんな商買をしてゐたつて、全く例のないことでもないから。本當？」
「ほんまどすたら。」
「へえ。！」と、いつてゐたが、私はむら〳〵と眞氣になつてきて、體中の血が凍るやうな心地になり、寢床の上に腹這ひに起き直つて、
「いつ？　近いこと？」と追掛けて訊ねた。
すると女はいよ〳〵落着いて、
「えゝ、ちよつと半歳ほどになります。」
「ぢや、私が一年半も來なかつた間のことだな。」といつたが、私は自然に聲が上ずつたやうになるのを、わざと心で制しながら、「ぢや、おかあはんも喜んでゐるだらう。どんな人間の子？　お前にも覺えがあるの？」
「お母はん、悦んではります。」
「さうだらうとも。それが、いつか話したお前の病氣の時殿めさすといつて來た人のこと？……そしてその赤ン坊は何處にゐるの？どこかへ里子にでも預けてあるの。」
私はもう、何も斷もさうと自分の心で定めてしまつた。さうすると胸が無上にもや〳〵して口が厭な渇きを覺えて堪らない。そして、さう思ひつゝ、寢ながら改めて女の方を見ると、いつもの通り、しつとりした容姿をして、なりも繕はず、不斷着の茶つぽい、だんだらの銘仙の格子縞の袷衣を着て形のくづれた銀杏返しの髮のほつれ毛を撫で付けもせず、すぐ傍に坐はつてゐる顏の蒼いほど色の白い、華奢な閑味を持つた頷のあたりがおとなしくて、可愛らしい。私は心の中で、

「どんな男が、この私の生命と同じい女に子を生ましたのだらう。何故私の子が生まれなかつたか。そんなことが萬が一にもあるかも知れぬからこそ、一日も早く商賣を廢めさしたかつたのだ。いよ〳〵可けないことになつてしまつた。」と、そんなことを思つてゐると、女は、

「その子を見せますか。」といふ。

「うむ、見せてくれ。どこにゐる。男の子か女の子か。」

「女の子どす。ほんなら伴れて來ます。」と、いつて女は立ち上がつた。

何處から伴れて來るだらうと思つて、私は女の背姿を睨むやうに見守つてゐると、彼女は重ね箪笥の上に置いてあつた長い箱を取り下ろして、蓋をあけて、その中から大きな京人形を取り出した。

「何あんだ、人を馬鹿にしてゐる。」私はそれで、一杯に詰まつてゐた胸が忽ち下がつたやうに輕くなつて、大きな聲で笑つた。

女もほゝと、柔和な顔をくづして靜かに笑つた。

「えゝお人形さんどつすやろ。」

私は「うゝ。」と、たゞ答へたが、その人形や塗物の菓子器の彼方にいろ〳〵な男の影が見えるやうな氣がした。

女はよく二つ並べた箪笥の前に坐つて鍵をがちや〳〵いはせてゐたが、

「あんたはんに見てもらひまよか。」といつて、衣裝戸棚の中からいろんな衣類をそこへ取擴げて見せたりした。大島紬の揃つた物やお召や夏の上布の好いものなどを數々持つてゐた。

「大變に持つてゐるぢやないか。それだけあれば澤山だ。」

「それら皆、あんたはんに頂いた物で拵へましたのどす。」母親もゐて、次の間から此方を見ながらさういつてゐたが、さうばかりでもなさゝうであつた。

「これもあんたはんので……」と、いひながら彼女は一枚〳〵脇へ取除けてゆくうちに、つい此の間の夜着てゐた金茶

の絲の入つた新調らしいお召の袷衣に手がかゝつた時、私が、

「それも？」といつて、訊くと、何故か、彼女も母親もそれには默つてゐた。

「こんなに持つてゐれば安心ぢやないか。」さういふと、母親は、

「まだ〳〵あんたはん、たんと持つてましたのですけれど、上京から祇園町へ來るやうになつた時みんな賣つてしまひましたのどす。人のために災難に罹つて、持つてた物を悉皆取られても足りまへんので、此の子にたうどうこんな所へ出てもらはんならんやうになつてしまひました。」母親の悲しさうな愚痴が又始つた。

「こつちやへ來てからかて、來た當座にはまだ大分持つてゐましたえ。」

「あんたはん、この子何でも人さんに物を上げるのんが好きどすさかい、今のとこへ來た時、あんなところへ來るやうな人皆な困つた末の人達どすよつて、ひどい人やと、それこそ着たまゝの人がおすさかい、なんでも好きなもんお着やすちうて、持つたもの皆上げてしまひましたのどす。」

「始めてそこへ來た時わたし、人が恐うおしたえ。」

「それはさうだつたらう。ずぶの世間知らずが、何方を向いても性の知れない者ばかりのところへ入つて來たのだから。……それでも體さへ無事でゐればまた先きで好い事もある。」

「ほんまに體一つ殘つてるだけどつせ。」彼女はさういつて笑つた。「殘つてるのはあの古い長火鉢と、あの掛硯だけどす。」

私は又そこらを見廻はした。簞笥の上には、いろんな細々した物を行儀よく並べてゐたが、そこには小い佛壇もあつた。私はそれに目をつけて、

「あの佛壇は？」

「あれも新しいのどす。お母はん、こつちやへ來る時古い佛壇を賣るのが惜しうて。」女はさういつて又柔和に笑つた。

私も笑ひながら立ち上つて、その小さな佛壇の扉を開けて中に祭つてあるものをのぞいて見た。一番中央に拇子の者

の墓も悲しい追憶となつてゐる、五六年前に亡くなつた弟の小い位牌が立つてゐる。そして、その脇には小い阿彌陀樣が立つてゐられる。私は何氣なく、手を差伸べてそれを取つてみようとすると、その背後に隱したやうに凭たせかけあつた二枚の寫眞が倒れたので、阿彌陀樣よりもその方を手に取り出してよく見ると、それは、どうやら、女の死んだ父親でも、又愛してゐた弟の面影でもないらしい。一つは立派な洋服姿の見たところ四十恰好の男で、も一枚の方は羽織袴を着けて鼻の下に短い髭を生した三十ぐらゐの男の立姿である。私はそれを手に持つたまゝ、

「おい、これは何うした人？」と、女の着物を疊んでゐる背後から低い聲をかけた。

すると女は、すぐ此方を振顧りながら立つて來て、

「そんなもん見てはいけまへん。」と、むつとしたやうに私の手から其等の寫眞を奪ひとつた。（をはり）



茅の屋根

（戯曲一幕）

菊池　寛

人物

細木香之進。二十八才、千三百石の旗本の嫡子。

おふみ。二十二。その情人。元は新吉原桔梗屋の遊女九重。

本多晋三郎。香之進の友人。

おかく。桔梗屋の女房。

獵師、下男女中その他二三の人物。

時及び所。

江戸の極く末期。八王子に近き秩父の山中。

舞臺情景。

江戸を脫落したる細木香之進と、その情人おふみとの侘住居、小唄の文句の如く竹の柱にてはなけれども、屋根はまさしく茅にて葺きたり。壁、天井などの様子それに準じて、みすぼらし。

おふみ、色やゝ淺黒けれども、脊高く眸美しき女。庭先にしやがみて、薪を小さく割つて居る。香之進、色白く痩形なる男、幾馬の如き服裝をなしながら、緣側に腰打ちかけ、丸藥を調合して居る。秋更けたる山家の景色、なんとなく物かなし。

おふみ　(凡てに倦きたるが如き容子)あ！　あ！　堅い薪だわねえ。乾し方が足りないのかしら。手の方が、粉々になつてしまひさうだわね。

(香之進、無言。おふみも亦、默つて割りつゞける)

おふみ　あつ！(あやまつて、少しく手指を傷けたる如く)おゝ、いたい！　いたい！　すんでのことで、大切な人指し指を斬つてしまふところだつた。おゝ、いたい！

(頻りに香之進の注意を惹かんとすれども、香之進は默つて居る)

おふみ　(香之進に、つゝかゝるやうに)おゝいたい！　貴郎、何とか云つて下さらないの。私が、先刻から、いたい〳〵と云つて居るのが、分らないの。

香之進　(冷やかに見やり)大仰だ！

おふみ　まあ！　邪慳な人。妾なんか、指の一本位無くしてもいゝと云ふの。

(香之進默つて居る)

おふみ　えゝ、無くしてもいゝと云ふの。

香之進　無くしてもいゝとは云ひやしない。だが、騷ぎ方が大仰だからさ。

おふみ　だつて、この位なことで、も、騒がなけりや、こんな山家では、外に騒ぐことなんかないぢやないかえ。（それでも、指が痛むと見え、度々脊めて居る）

香之進　（一寸不快な表情）うむ！　こんな山家か。お前は、到頭本音を吐いたね。こんな山家が、お前の鼻につきかけて居るのは分つて居る。

おふみ　（やゝ不貞くされて）だつてさ。毎日起きても寝ても同じことばかりだもの。それでも、貴郎が傍に居て下さるときは、いゝわ。貴郎を送り出して、一人ぼんやりして居るときは、本當に情なくなるわ。

香之進　そんなことは、覺悟の前ぢやないかえ。

おふみ　でも、かうまでとは、思つて居なかつたわ。手鍋下げても、いとやせぬなど云ふて、唄の文句では、粹だけれども、やつて見ると、つらいわねえ。

香之進　（やゝ沈痛に）山家丈が、鼻に付いて居るのなら、いゝのだが、この頃のお前にはこの香之進までが、鼻に付いて居るだらう。

おふみ　（開き直つて）えゝ、何ですつて。もう一度云つて下さい。

香之進　幾度でも云つてやる。この頃お前には、この香之進までが、鼻に付いて居るだらう。

おふみ　まあ！　貴郎が鼻に付いて居る。香さん、何時貴郎が鼻に付いたと云ひました。何時、妾がそんなことを云ひました。鼻に付いて居る男のために、何うしてこんな苦勞が出來るのです。貴郎と一緒だと思へばこそ、どんな苦勞でも、辛抱して居るのぢやないかえ。

香之進　うむ！　こんな苦勞か、俺が鼻に付いて居ればこそ、この暮しが苦勞になるのだ。そんな筈ぢやなかつたのだ

か。

おふみ　まあ！　ひどい！　たつた、一年や二年で、鼻に付くやうな男となら、花のお江戸を駈落して、こんな山奥へ來るものかねえ。思ふ男と晴れて添ふなら、どんな……

香之進　うるさい！　云はなくつても分つて居る。

おふみ　お前が分つて居ないから、云ふのぢやないか。

香之進　おれ達が、江戸を駈け落ちしたときの、お互の氣持はさうだつた。お前が、肯屋佐兵衛に、身請けされると云ふのを聞くと、俺はカツとなつた。お前を、人手に渡すのが、俺には堪らなかつた。お前に、心中を相談すると、お前は直ぐ死ぬ氣になつて呉れた。あのときに、死んで居ればよかつたと、今俺はつく〴〵思ふのだ。

おふみ　だつて、いざと云ふ間際になつて、未練が出たのはお前さんぢやないかえ。

香之進　うん俺だつた。おれは、お前が俺を死ぬほど思つて居て呉れると云ふことが分ると、死ねなくなつたのだ。こんなにまで、俺を愛して居て呉れる女となら、どんな山奥でゞも……。

おふみ　皆まで、云はなくつて、それで分つてるのぢやないの。妾の氣持も、貴郎の氣持も。お互にさうした氣持で、暮して行つて居るのだから、いゝぢやないの。

香之進　（悵然として）いゝ筈だつたのだ。お互の心さへ確かなら、たとひ山の奥の佗住居で、お前に手鍋を下げさせても、いつまでも樂しく、十年も二十年も、いや百年でも、千年でも、樂しく暮して行けると思つたのだ。

おふみ　思つたばかりぢやない。樂しく暮して行つて居るぢやないの。

香之進　嘘を云へ、胡魔化すな。お前が、樂しさうに暮して居たのは、茲へ落着いた當座、ホンの三月か四月の間だ

つた。俺が射つて來た山鳥を、お前が嬉しがつて、料理して小鍋で煮たり、俺が堀つて來た山の薯を、お前が馴れぬ手付で擂鉢で擂つて欣んだのは、ホンのその當座丈だつた。半年經つか經たないかに、お前はもうこの暮しが厭に付き出したのだ。今年の春、山櫻がチラホラ咲き出した頃だつた。お前は、縁側に腰をかけながら「もう、鄕でも櫻が咲いて道中がある時分だな」と、しみ〴〵云つたのを覺えて居るだらう。あの頃からだ。お前の心が、變りかけて居るのを知つたのは。お前は、それを口に出すまいとした。が、お前の身體中が、それを喋べつて居るのだ。この頃は、朝夕に二度か三度かは、鄕の話をしないことはないぢやないか。茲へ來たときに、お互ひに何と約束したのだ。一切昔の話はすまいと。お前の鄕を慕ふ心が募る毎に、お前の心が俺を離れて行くのを、感ぜずには居られないのだ。

おふみ　（急所を衝かれて、やゝタジ〳〵となりながら）まあ！　あんなことを。一年や二年で。お前から離れるやうなそんな淺墓な心だと思ひかえ。お前と一緒にお江戸を馳落するときから、世間も義理も人情も、みんな捨てゝしまつた姿ぢやぞえ。今更、お前と離れて、何處に行く所があると、お思ひだえ。鄕の話をするのが、惡いんだつて、でもこんなにする仕事も遊びもなければ、昔のことでも話しするより外、仕樣がないぢやないかえ。

香之進　（默すること、多時）うん、それだ。昔の事でも話しするより外に仕方がない。うん、それだ。お前の云ふことにも無理はない。昔の話をするお前を、とがめるのは俺が無理だ。どんな强い戀でも、それ丈けでは人間は暮していけないのかな。どんな戀人同志でも、こんな山奥ぢや、お互ひに退屈せずには居れないのかな。退屈すると云つて、お前を叱る俺が無理なのだ。いくら、俺を思つて居て吳れても、俺が毎日のやうに、同じ姿で、鉄砲を擔げて猪鹿を追ひ廻すのを見て居れば、だん〳〵俺が厭に付くのも尤もだな。

おふみ　何を、氣をお廻しだねえ。

香之進　いや、氣を廻すのぢやないこ本當のことを云つて居るのだ。まして、お前は小さい時から、廓に育ち、仇し男の數も知り、目のまはるやうな華美な暮しをして居た丈、こんな山家の暮しには、人一倍參るのだな。

おふみ　（香之進の本當の心持には同感し得ざる如く）お前は、私と一緒に暮すのが、いやにおなりかえ。

香之進　何を云つて居るのだ。だが、人間の心はもろいものだな。一緒に死なうとまで、張りつめた心が、からもろく一年も經たない裡に、參つてしまふのかな。思ひ合つた男と女とが、心中すると云ふのも、相手の心が變るのを恐れるからだ。いや自分の心が變るのを恐れるからだな。……だが、おふみ、お前も桔梗屋の九重と云つて、仲の町では誰知らぬ者もない傾城だつた女ぢやないか。二人殘した書置きに、なんと書いたのだ。たとひどんな、しがない暮しをしても、見事添ひとげて見せるとかいたぢやないか。まだ一年になるかならないかに、へこたれて、江戸へのめのめと歸る譯にも行かねえぢやないか。

おふみ　何もへこたれはしないけれども、見て下さい、この兩手を。わづか一年になるかならない裡に、こんなに荒れてしまつたぢやないかえ。それに顔だつてこんな生毛が延びて、さらさらして居るのだもの。妾は、何も日髮日風呂の暮しが、したいと云ふのぢやないけれど、時にはお前に嫌はれない丈の、身だしなみはして見たいわねえ。

香之進　何のそんな心配なら、いらぬことだ。俺の爲めに、顔や手が荒れるのだもの。何の、お前を嫌つてよいものかだが、心まで荒して呉れるな。いゝか、もう少しの辛抱だ！　もう少し世間の噂が、靜まつたら、せめて上方へでも落ちて行つて、世間並の暮しはさせてやるからな。

（老人の獵師、柴折戸の外へ近づいて來る）

獵師　旦那！　御用意は出來ましたかな。

香之進　茂重か。あゝ出來た！　先刻から待つて居た。尾臼澤の模樣はどうだ。

獵師　居りますよ。居りますよ。今道で、與兵衞に逢ひましたがな、與兵衞の悴が、昨日夕方松葉を蒐めて居ると、仔を三疋連れて、二十貫もある牝猪が、つひ目の先を通つて行つたと云ひますよ。

香之進　今朝は、鹿の鳴き聲もしきりに致して居つたな。

獵師　鹿なら、あすこ丈でも、何百頭と數へ切れますまい。

香之進　（銃を取上げながら）さうか。ぢや今日は、あぶれではないな。ぢや、おふみ行つて來るよ。

おふみ　行つていらつしやいませ。

獵師　奧さま。御免下さい。

おふみ　（二人の後を見送りながら）立派なお旗本のたつた一人の後取が、あんな苦勞をして居るのも、みんな妾のためだとは思つて見るものゝ、ほんとうに、飽き〳〵してしまふほど、退屈だな。また一昨日のやうに、富山の藥賣でも來て、江戸の噂でも聽かして呉れるといゝのだがな。

（里の小供二人、急にあはたゞしく走り出して來る。そして、柴折戸の前に止まる）

子供　あゝ鼓の家だよ。鼓の家だよ。

（旅姿をした本多晉三郎。（若き精悍なる武士）出て來る。桔梗屋の女房おかく、下男と女中とを伴に連れて出て來る。下男は荷物を持つて居る）

晉三郎　おゝ、いゝ子だ。いゝ子だ。よく敎へて呉れた。内儀、この家らしいな。

おかく（家の容子を見ながら）本當に、惚れた同志の侘住居には、お誂向きの家だね。だが、こんな家にあの華美好きな九重さんが、收つて居ようとは何うしても思はれないわねえ。（女中と下男に）ぢや、お前達は、荷物を此方へ渡して先刻の家で待つておいで。

下男と女中　畏りました。

（二人退場する。）

晉三郎　物もう。物もう。

おふみ（にはかな來客を、いぶかしみながら）どなたで御座いますか、（戸をあけて晉三郎を見て駭く）まあ！　晉さん！（しばらく言葉なし）……びつくりした。（おかくを見認める）まあ、お内儀さん！　あゝ、妾恥しい。

（急いで奥へ驅け入る）

晉三郎（彼女を追ふやうに、家の中へは入つて來ながら）何の恥しいことがあるものか。好いた同志の侘住居ぢやないか。誰にだつて、大威張で見せられるぢやないか。さあ、内儀お前も失禮しては入つて來るといゝ。

おかく　ぢや、御免なさいねえ、ふみちやん。

おふみ（仕方なさゝうに）どうぞ。

晉三郎　九重さん！　久し振りだね、ハヽヽヽヽ。

おふみ（恥しがりながらおかくに）本當に、あの節は、何と申譯してよいやら。あんなに御恩になつて居ながら、大それたことをいたしました。今茲で、お目にかゝるのは、死ぬやうにつらう御座います。本當に穴があれば、這入りたい位に思ひます。

おかく　（慰めるやうに）過ぎたことは、お云ひでない。過ぎ去つたことは過ぎ去つたことだから。

おふみ　はい。

おかく　それよりも、大層やつれたねえ。かう云つちや、わるいけれど、折角の器量を臺なしにしておいでだねえ。

晋三郎　細木は留守かね。うむ、細木もお前さんも、變りはないかい。

おふみ　はい。

晋三郎　それは、何より結構だ。

おかく　ねえ、ふみちやん。今度わたしが來たのは、何も、お前の追手として、連れ戻しに來たのではないのだよ。わたしも、お前は五つの年から、手鹽にかけて育てたから、娘同樣に思つて居るだらう。お前が、廓を出てからも、風につけ雨につけ、お前のことは忘れたことはないのだよ。いつか一度は、お前に會いたいと思つて居たのだが、つい此間八王寺から歸つて來た馬道の古道具屋さんが、店へ來て、八王寺在の山中に、旗本のお武士が、元吉原で、おいらんをして居たと云ふ美しい女と、侘住居をして居ると云ふ噂を聞いたと、話して居るのを、妾がちらりと耳にしたので、妾一人の胸に收めて、そつと本多樣に話して見ると、てつきり二人に違ない。俺は、ぜひ細木に會ひたいと思つて居る矢先だから、これから直ぐ訪ねて行くとかう仰つしやるので、妾もお前に會つて話したいことがあると云つて、お伴を願つて來た譯なの。八王寺なら、二日宿りの旅だから、無駄になつていゝと思つて、かうして訪ねて來たわけなの。

晋三郎　（ふと思ひ出したやうに）細木は何處に行つた。

おふみ　あの裏山へ行つて居ります。

晋三郎　うむ！　裏山へ、何をしにだ。

おふみ　猪を、射ちに行きました。

晋三郎　猪を射ちに、千三百石の旗本の世継が、獵師の眞似をして居るのか。ハヽヽヽヽ。ぢや、内儀！　俺が玆に居たのぢや話しにくいだらう。俺は、これから香之進に會つて、別々に話をするから。

（裏山にて、銃聲きこゆ）

晋三郎　うむあれだな。

おふみ　はい。

晋三郎　ぢや、直ぐ其處に居るのだな。それぢや、俺は直ぐ裏山へ行つて、香之進に會はう。何う行くのぢや。

おふみ（柴戸のところまで、送つて出て）あのう？　この森の中の道を、眞直に行くと、小さい鎭守のお宮がありますから、そのお宮を左にとつて、右へ／＼登つて行くと、尾白澤と云ふところへ出ます。其處に猪が來て居ると云つて先刻參つたので御座ります。

晋三郎　分つた。それぢや、山で會へなかつたら、直ぐ出歸して來るからな。

（晋三郎出て行く）

おかく　ふみちやん、今日は相談があつて來たのだがねえ。お前、もう一度江戸へ歸る氣はないかえ。

おふみ（驚いて）えゝ！

おかく　何もお前を、むりやり連れて行かうと云ふのぢやないから、安心しておくれ。たゞ、妾の云ふことを、合點したら、一緒に行つておくれでないかえ。かう、突然云つちや分るまいけれども、今玆で香さんと別れて、別々になる

方がお前の爲にも、香さんのためにも、一等爲になると思ふのだがねえ。…………………………およみよく話をしてきかせて上げるが、お前さんが駈落ちした晩の青屋の旦那の男らしさと云つたら、廓中で感心しない者はなかつたよ。私の家で、追手を出さうとすると、青屋の旦那が止めて、女の心を離れてしまつて居るのに、身體丈引き戻して何うするのぢや。身請の話が、纒つた後だから、たとひ女が逃げても、身代金は俺が立派に拂つてやるとかうお云ひのだぞえ。あの時、表沙汰にして御覧—お前は直ぐ捕つて、どんな目に逢つて居るか分らないし、香さんのお身上だつて何うなつて居るのか分からないのだぞえ。お前さん達が、こんな山の奥でも安穏に過し居れるのは、みんな青屋さんの俠氣からだと思ふのだがねえ。妾は、青屋の旦那の男らしさに感心したものだから、お前を一度でも青屋の旦那の傍へさしあげないと、妾の義理が立たないとかう思つたのよ。だが、考へて見ると、お前と香さんとは、四年越の深い仲で、お前が駈け落ちして、どんな山の奥でも添ひとげようと云ふ心意氣は、涙の出るほど嬉しかつたから、青屋さんには濟まないと思ひながら、お前のことは、そのまゝにして置いたのだ。ところが、本多さんのお話ぢや、香さんがお前と江戸を落ちたとき、香さんのお家ぢや、親類中が寄り合ふて、香さんを病氣引籠りと云ふことにして、お上へ屆けて置いたさうだが、香さんが江戸に居ないことが、段々目付衆に分つて來て、早く香さんがお家へ歸らないと、千三百石のお家が、何うなるか知れないと云ふのだよ。本多さんのお考ぢや、今何うしても香さんを連れ戻して、今度公方樣が御上洛になるお伴の人數の中へでも、お還入りになると、親御の勘氣も直り、お家も潰れないで濟むから、香之進に會つて、何うしても說き伏せて、連れて歸るとかうお云ひだから、わたしもお伴をして、九重の方は妾が納得させますと云つて、かうして一緒に來た譯だが。どうだい、香さんを一生獵師で了らせるのが、お前の本望かい。お前は旗本のお家のお世繼が、一生猪鹿を追ひ廻して居るのを傍で見て居て、心苦しく

は思はないかい。

おふみ　（さしうつむきて言葉なし）

おかく　それにかうして、しがない暮しをして居る内に、暮しが不自由だから、何かに付けて夫婦喧嘩の種が多くなるし、お前だつて五日も十日も風呂に這入らないぢや、だん〳〵器量が落ちて行つて、お前の可愛い香さんから、おしまひには鼻に付かれるのが、落ちやないかえ。

おふみ　全くねえ。

おかく　どんなに好いた同志だつて、こんな狭苦しい小屋の中で、一年も二年も、五年も十年も、二人限りで顔を見合はして居りや、お互に飽きが來るのは當然ぢやないかえ。

おふみ　それは、妾も考へないではないけれど。

おかく　（勝ちほこつた如く）　それに、青屋の旦那は、お前を妾にしようと云ふのぢやないのだよ。なくなつた奥さまの後に直さうと云ふのぢやないかえ。もうこの頃では、廓にもお見えにならず、それかと云つて後添ひをお取りになつたと云ふ噂もきこえず、何でもお前のことを、心の奥では忘れていらつしやらないと云ふ噂だよ。

おふみ　（可なり動かされて）　妾、そんなお話をきくと、どうしてよいのやら、分らなくなるわ。

おかく　分らないことはありやしない。自分のため、香さんのためを思へば、立派に分れておくれでないか。可愛い男を、一生埋れ木にしてしまふのが、男の本望かしら。それに、お前青屋樣の藏前のお屋敷を知つておいでかい。屋根はみんな銅で、葺いてあると云ふぢやないかえ。茅の屋根と銅とぢや、よつぽど段が違ふぢやないか。それに自分で、十人も三十人もの男や女に、傅かれて「奥さま〳〵」で暮すのも、同じ一生なら、孰ちらがいゝかしら。それにお

前は、胥屋の旦那を、滿更嫌つても居なかつたぢやないか。

おふみ　（心全く動きて）でも、妾の口から、香さんに切れると云ふことは云へないわ。

おかく　香さんは、本多さんがよく云ふさうだから、お前さんはたゞ別れると云ふ肚さへ、定めて置けばいゝのだよ。

えゝ、別れて呉れる。

みおふ　（默つて居る）

おかく　こんな山の奥で、そんなみぢめな風をして居ちや、女に生れた甲斐がないぢやないか。桔梗屋の九重と云へば誰知らぬもない全盛を續けたお前が、そんな襤褸を着て居ちや、どんなに人目がないと云つても、自分で恥しいとは思はないかえ。

おふみ　もう、何も云つて下さいますな。あの方のため、妾のため、思ひ切つて切れますわ。

おかく　（滿足して）おゝ、さう云つて呉れゝば、こんな山の中へ來た甲斐があつたと云ふものぢや。着換もなにもないだらうと思つて、ホンのつまらないものだけれども、用意をして來たのだぞえ。

おふみ　（久し振りの着物に心を躍らせて）まあ！　ほんとうに御親切に。

おかく　なに、ホンの間に合せの物だけれども、この小紋はお前に似合ふだらうと思つてね。この帶は、今年流行の品で、お前には少し華美かも知れないけれど。櫛も笄も一通りは持つて來ました。

おふみ　（スッカリうれしくなつてしまつて）胥屋の旦那は妾のことをまだ思つて居て下さるかしら。

おかく　何を云つておいでだね。妾が、何の酔興で、こんなに大金をかけて、お前を迎ひに來るものかねえ。

おふみ　（顔を赤くして）まあ！

（おふみが、衣類に見とれて居るときに、香之進と晉三郎と連れ立つて歸つて來る。戸外にて）

晉三郎　おい、いゝか。未練を出しちや、駄目だぞ。さつぱりと話を付けなければ。

香之進　男が一旦決心した上からは、今更未練がましいことはしない。

（二人家の中へは入る。香之進が歸つたのを見て、おふみあはてゝ衣類を隱す。香之進不快な表情をなす）

晉三郎　直ぐ見付かつた。

おかく　香さま、お久し振で御座います。

香之進　（可なり、不快な表情をして）うむ、面目ないなあ。かうしたところを、お前に見られては。

おかく　何ういたしまして。

（四人、しばらくの間、一座白ける。）

晉三郎　どうだい――内儀。お前さんの話はすんだかい。（おかく肯く）さうかい。俺の方の話もすんだから、俺達は一旦引きとるとせうか。

おかく　さういたしませうか。

晋三郎　おい！　細木。それでは、俺達は一廻りして來るからな。よく相談して置いてくれ。いゝかい、貴様の言葉を信じて居るぞ。

（香之進背くのみ。おふみ、二人を送つて戸の所で無言で別れる。おかくと晋三郎、柴折戸の外にて話す。）

おかく　ねえ、本多さん。大丈夫かしら。

晋三郎　怪しいな。細木には、未練がたつぷり在る。

おかく　おふみの方は、大丈夫だと思ひますがねえ、若しかすると心中話か双傷沙汰にならないとも限らないと思ひますがねえ。

晋三郎　うむ、やりかねないな。

おかく　そんなことをさせちや、角を矯めようとして、牛を殺すやうなものだからねえ。

晋三郎　少し、心配だな。よし俺は、引返してそつと容子を見て居よう。

おかく　ぢや、妾もあまり遠くへ行かないで居ませう。

（晋三郎、取つて返して、ひそかに家の背後にかくれる）

（晋三郎とおかくの去りたる後、おふみと香之進はしばらく無言。おふみ、もじもじして居る）

香之進　（激した聲で）おい！　おふみ、茲へ來い。

おふみ　（おどおどとして）えゝ。

香之進　その衣類はどうしたのだ。

おふみ　（默つて居る）

香之進　默つて居ては分らない。何うしたのだ。

おふみ　桔梗屋の内儀さんが、持つて來て與れたのだぞえ。

香之進　詐りを申すな。馳落した抱女の迎に、衣類を新調して來る奴があるものか。靑屋だな、佐兵衛だな。此の糸を引いて居るのは（嫉妬のために激昂してしまふ）お前は靑屋と知つて、此の香之進と別れるのを承知したのか。

おふみ　（默つてしまふ）

香之進　お前が、靑屋に引き取られると知りながら、此の香之進と別れると云つたのなら、そのまゝには差し置かないぞ。眞直に、白狀しろ。（香之進、刀架より一刀を取り下す）

おふみ　（うつむいたまゝ泣き出す）

香之進　靑屋と知つてか、靑屋と知つてか。

おふみ　（烈しく泣きながら）妾を殺して下さい。心のかはりやすい妾を。どうぞ殺して下さい。貴君に殺されて、何時までも貴君のものになつて居たい。

香之進　よし殺してやる。家のため、將軍家のため、戀を捨てようと思つたが、かうなれば意地だ。お前を殺して、香之進も死んでやる。（刀を拔きはなつ）

おふみ　（本能的に驚いて）あれ！

香之進　うろたへるな。覺悟しろ。

（習三郎、飛鳥の如く飛び込んで來る。そして香之進の背後より飛び付く）

晋三郎　馬鹿！　細木、何をするのだ。先刻あれほど云つたのが、分らないのか。

香之進　馬鹿は覺悟の前だ。放せ！　放せ！

晋三郎　細木！　その刀は、貴様が家重代の貞宗だらう。その刀を持つて居る貴様のこの腕はなんだ。千葉の道場で、小天狗と云はれた旗本第一の腕ぢやないか。この腕で、その刀で、女一人を殺すのは勿體ないとは思はないのか。馬鹿な奴だな。おれが先刻も云つた通り、俺が先刻も云つた通り、今徳川のお家は累卵の危きに在るのだ。東照神君以來、旗本八萬騎を養つたのは何のためだ。貴様が、十三の歳から武藝を磨いたのは何のためぢや。今こそこの腕で、その刀で、徳川の家を呪ふ薩長の姦賊を斬つて斬つて、斬り廻す時ぢやないか。馬鹿！　こんな山奥で、獵師の眞似、などをした揚句に女などを殺して何うするのぢや。女の方は、貴様を世に出すために、あきらめて居るぢやないか、男の癖に未練な。

香之進　おれの心は貴様には分らない。

晋三郎　分つても分らなくつてもいゝ。よせ、こんな馬鹿々々しいことは。

香之進　（漸く刀を持つた手を垂れる）別れる丈ならいゝ。だが、寄屋に……。

晋三郎　別れた女が、何うせうが、そんなことはいゝぢやないか。それを未練だと云ふのだ。

香之進　（尙刀を拔いたまゝ）が、このまゝいつまでも、暮して行くのはいゝが、俺達の戀がいつまでも續いて行くかどうか分らなくなつて來た。女の心は江戸へ歸りたさで一杯だ。自分の心も、アテにならなくなつて來た。別れ話が出たとき、刀を拔いて振り上げる位、お互に熱がある時に別れた方が、花かも知れない。かうした苦しい生活を五年十年續けて行き、お互ひに戀をあせさせてしまひ、醜い二人になりながら、喧嘩しい〳〵暮して行かねばならぬやうになる

かと思ふと行末が怖ろしい。本多！　別れるのは今だな。

晋三郎　さうとも、貴さまが、其處へ氣が付けば、細木香之進は救はれたのだ。愛する女をいだく欣びも、結構だが、その貞宗を思ひ切り振り廻すことを考へて見るがいゝ。

香之進　斬れさうだな、こいつは。

晋三郎　その切れ味のやうに、スッパリと切れてしまへ、今夜を過すと、どんな未練が出ないとも限らない。桔梗屋の内儀に、男らしく直ぐおふみを引渡してしまへ。男だ、辛抱しろ。

香之進　うむ。

（晋三郎、柴折戸よりおかくを招く。）

晋三郎　お前さんは、おふみを連れて、直ぐ江戸へ歸つておくれ。俺は細木と一足遅れて江戸へ入らう。おふみさん。最後だ。名殘りを惜しみなさい。

おふみ　（香之進に縋りながらわーと泣き伏す）

香之進　何も云はないが、俺の心は判つて居よう。

おふみ　（泣きながら頻りに肯く）

香之進　よし、たつしやで暮せ。

おふみ　はい。（烈しく泣き沈む）

晋三郎　さあ、泣いて居ないで、衣裝を更へるといゝ。奥へ入つて着換へるといゝ。

（おふみ泣きながら、衣類を持つて奥にはいる。）

香之進　抜いてしまつた貞宗のやり場に困るな。

晋三郎　何か斬つて見ろ。

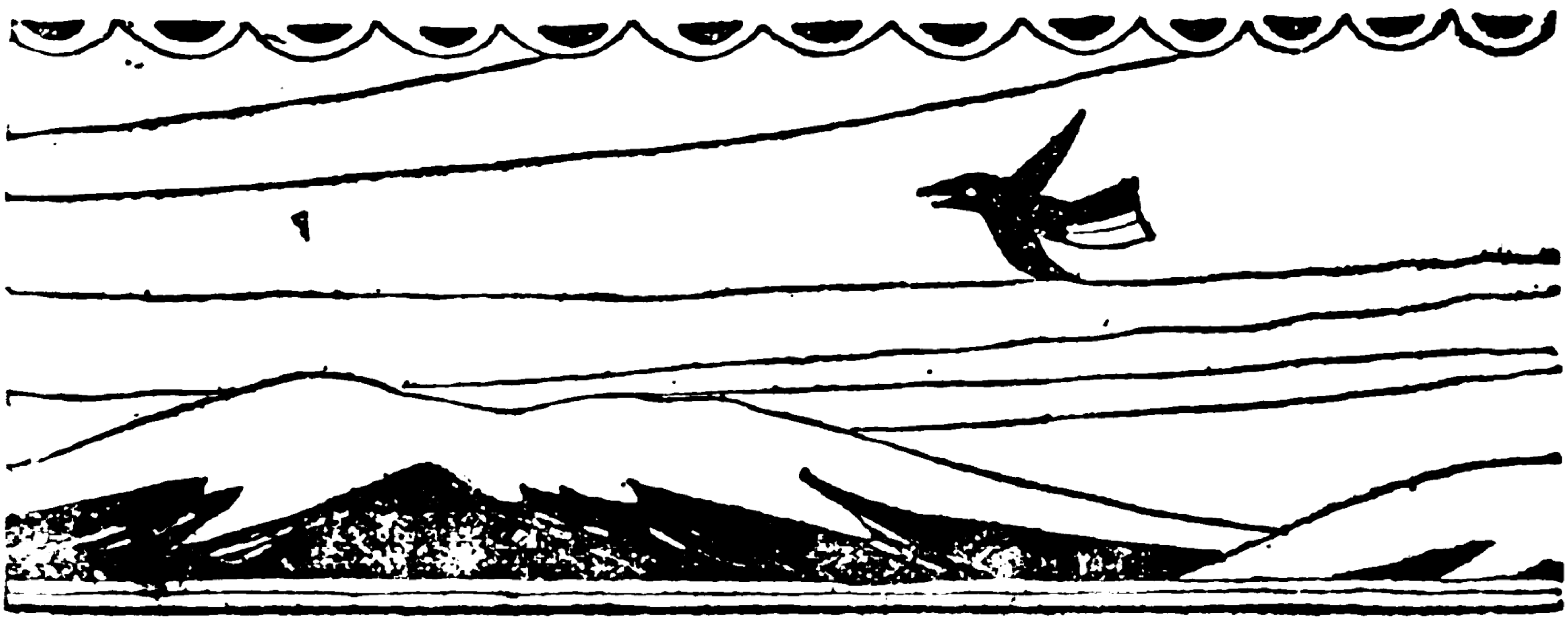
香之進　うむ！　此の按家も、今は不用だな。よし、えい！（勢よく柱に切りつける柱見事に両断きる）

晋三郎　可愛い女の身體なんかよりは、よつぽど斬りばえがするだらう。

香之進　（狂せるが如く、柱を斬り廻りながら笑ふ）ハヽヽヽヽ。

（奥にて、おふみの泣く聲がよゝと聞えて來る。香之進の笑聲とおふみ　泣き聲との奇異なる交錯の裡に——）

——幕——



暗夜行路（後篇）

志賀直哉

一

謙作の大森の生活は豫期に反し、全く失敗に終つた。彼は恐しく惨めな氣持に絶えず追ひつめられ、追ひつめられ、そして安々とは息もつけない心の狀態で來たが、不圖した氣まぐれで、一ト月程前から此京都へ來てみて、彼は初めて幾らか救はれた氣持になつた。

古い土地、古い寺、古い美術、それらに接する事が、知らず彼を其時代まで連れて行つて呉れた。しかもそれらの刺激が今までのそれと全く異つてゐた。それが現在の彼には如何によかつたか。そして如何によき逃場であつたか。然し彼は單に逃場としてゞなく、これまでさういふ物に觸れる機會の比較的少なかつた自分として、積極的な意味からも此土地に兎も角暫く落ちつく事は悪くない事だと考へたのである。

彼は丁度快癒期にある病人のやうな淡い快さと、靜けさと、そして謙遜な心持を味はひながら、寺々を見て廻はつた。

それにしろ、早く住むべき家を探さねばならぬのであるが、行く先々に何かしら見

るに足る寺々を持つた京都では、貸家探しはいつか寺廻りと變る方が多かつた。

其日も朝涼の内に嵯峨方面を探すつもりで、天氣續きにボク／＼ほこりのたつ白い道を釋迦堂から二尊院、祇王寺の方を廻はり、結局、目的の貸家は一軒も見ず、二尊院の「法然上人足びきの像」と稱する傑れた肖像畫を其日の收穫とし、滿足して午頃、川に望んだ東三本木の宿へ引き上げて來たのである。

午後中、彼は其宿の暑い小さな座敷でごろ／＼して暮らした。

そして、やがて、日が入りかけ、宿の女主が風呂を云ひに來て、風呂に入り、それから出て、晩の食事に向かつた頃には漸く河原を渡つて來る風も幾らか涼しく感ぜられた。

食事を終つた彼は敷居に腰を下ろし、團扇を使つて居た。低い欄干の下を小さい流れが氣忙はしく流れて居る。新しく出來た河原の廣い道で男女の勞働者が川底から揚げて來た砂利を大きさに從つてふるひ分けて居る。それから所々、草の生えて居る加茂川。それから日の當つた暑さうな對岸の往來、人家、その上に何本かの烟突、そして向ふに眞正面に西日を受けた大文字から東山、もつと近かく黑谷、左に吉田山、そして更に高く比叡の峰が一眸の中に眺められた。

「早く秋になるといゝな」彼は左う思つた。冷え／＼と身のしまる朝、一人南禪寺から、若王子、法然院、あのあたりに杖をひく自身の姿を想ひ浮べると、彼にはしみ／＼左う思はれるのであつた。

彼は卷烟草に火をつけ、起ち上がつて、庭へ下り、流れにかけ渡した一枚板の橋から河原へ出て見た。草いきれのした地面からの濕か味が氣持惡く裾から登つて來る。そして其所には汗と埃りで顏に隈取りをした町の子等が甚兵衛一枚の姿で未だ、ばつたを追ひ廻はして居た。彼はぶら／＼と荒神橋の方へ歩いて行つた。

軒を並べた河原の家々では、もう電燈のついた下で、向き合つて酒を飲んで居るのなどが見られた。

其一軒に多分地方から出て來たらしい病人で、近かい此邊に部屋借りをして大學病院に通つて居ると云ふ風の老人がゐた。謙作は四五日前から、一人の若い看護婦と其老人の細君らしい五十餘りの女の人のゐる其家に心づいて居た。そして今、彼は何氣なく其前へ來ると、毎時は見掛けない若い美しい女の人が其椽で土鍋をかけた七厘の下をあほいでゐるのを見た。大柄な肥つた、そして火をおこしてゐる爲めかその豐かな頰が赤く色づいてゐる、それも健康さうな快い感じで彼に映つて來た。彼は其人に惹きつけられた。普段何氣なく美しい人を見る時とは、もつと深い何かで惹きつけられ、彼の胸は波立つた。それはそれ程に其人が美しかつたと云ふのとも異ふ。彼は自分ながら初心者らしい心持になつて、もうその方を見られなかつた。そして少し息苦しいやうな幸福感に捕えられながら其前を通り過ぎた。

荒神橋の下まで行つて引き返へした。彼は遠くから注意した。その人は椽へ立つて、流れをへだてた河原の人を見下ろして話して居た。河原の人は年とつたいつもの女の人で、云ふ事はわからなかつたが、何か云つて二人が一緒に身を反らして笑ふと、若い人の聲だけが朗らかに彼の所まで響いて來た、其快活な響に思はず彼は微笑する氣持へ誘はれた。間もなく年とつた人は川べりの方へ歩いて行つた。湯上りらしく團扇を片手に持つて居る。そして若い方の人は土鍋のふたをとつて中へ入つて行つた。

その人はたすきがけで働くにしてはいゝ着物を着て居る。其日特別に手傳ひに來たらしく謙作には察せられた。そして働き方もいそ／＼とそれに興味を持つてゐるやうな所が、何か小娘の飯事遊びの働きかたに似て見えた。

彼が前まで來た時に又其女の人は椽へ出て來た。彼は少し堅くなつたが、自分でもなるべく何氣ない氣持になつて通り過ぎた。後ろから見られるやうな氣がしてから、からだが窮屈であつた。

彼は宿へ歸つてからも落ちつけなかつた。然しそれは矢張り幸福な氣持だつた。そしてそれをどうしたらいゝのか、

そして全體これはどう云ふ氣持なのか、と思つた。確かに通り一遍の氣持ではなかつた。

彼は今日もう一度通つて置かねば、明日はもう其所に居ないだらうと思つた。で、自身玄關の下駄を庭へ廻はし、再び暗い草原道へ出て行つた。其時は既に暮れ切つてゐたが、河原は却つて涼みの人達で賑はつた。彼は多少氣がひけながらその方へ歩いて行つた。

女の人は年とつた方の人と椽へ座つて涼んでゐた。室内には蚊帳が釣られ、その上に明かるい電燈が下がつて居た。並んで川の方を向いてゐる二人の顏は光りを背後から受けてゐるので見られない代りに、此方はそれを眞正面に受けねばならぬので、余り見る事が出來なかつた。女の人は湯上りらしく白い浴衣を不格好に角張らして着てゐた。そして其角張つた不格好さも亦彼には悪くなかつた。二人は團扇を使ひながら、しんみりと話込んで居た。

荒神橋まで往つてあがり、今度は對岸を丸太橋の方へ引きかへして來た。遠く影繪のやうに二人の姿が眺められた。

橋の袂から、彼は東山廻りの電車に乘つた。丁度涼み客の出盛る頃で電車は込んでゐた。彼は立つた儘、祇園の石段下まで行つて、其所で降りた。

彼は自分の心が、常になく落ちつき、和らぎ、澄み渡り、そして幸福に浸つて居る事を感じた。そして今、込み合つた電車の中でも、自身の動作が知らず／＼落ちつき、何かしら氣高くなつて居た事に心附いた。彼は嬉しかつた。其人を美しく思つたといふ事が、それで止まらず、自身の中に發展し、自身の心や動作に實際それ程作用したといふ事は、これは全くそれが通り一遍の氣持でない證據だと思はないでは居られなかつた。そして何と云ふ事なし、あの氣高い騎士ドンキホーテを想ひ出して居た。彼は大森でその本を讀み、其時はそれ程に感じなかつたが、今自身の心持から、ドンキホーテの戀もそれを彼が滑稽を演ずるだけの前提とのみ見るべきではない事に考附いた。勿論トボソのダルシニアを

今日の人に比較するのはいやだつた。然しドンキホーテの心に發展し、淨化された其戀は如何に氣高き騎士を更に氣高くし、更に勇ましくしたか、――彼には變にそれがピッタリと來た。

彼は自身のそれをどう進ます可きか、左ういふ事を考へる氣もなく、只、彼に今、起つてゐる快い和らぎ、それから心の氣高さ、それらに浸つてゐた。四條通りをお旅まで行き、新京極の雜沓を人に押されて抜けながらも彼の心は靜かだつた。そして寺町を眞直ぐに丸太町まで歩き、宿へ歸つて來た。

この事はどうしたらいゝか、彼はそれを考へ始めた。此儘に此氣持を葬る事は斷じてしまいと決心した。然し只同じ家並みにゐるといふだけで、しかも兩方が一時的に宿つてゐるのであれば尚、餘程にうまい機會を捕へない限り、この事は恐らく永久に葬られては了はないだらうか。此方から積極的に機會を作つて行くなどいふ事は考へられなかつた。同樣に自然に或る機會が來るだらうとも考へられなかつた。彼は自分が餘りに無能な氣がして齒がゆかつた。彼は彼の或る古い友達が、さういふ機會を作る爲めに其人の家の前で、故意に自分の自轉車を動かせない程度にこわし、その家に預かつて貰ひ、翌日下男を連れて取りに行き、段々に機會を作つて行つた話などを憶ひ出した。然し自分の場合では其前で偶然卒倒でもしない限り、そんなうまい機會は作れさうもなかつた。

兎も角、もう一度前まで行つて見ようと思ひ、彼は又庭から河原へ出た。未だ雨戸は閉いて居たが、電球には綠色の袋がかけられ、中はしんとしてゐた。町へでも出たか、左もなければ其人の歸るのを送つて出たか。彼は一寸淋しい氣がした。そして、第一、其人は純粹に獨身なのか、或は自身望む人でも居るのではないか、かう云ふ疑問を起こし出すと彼は甚く賴りない氣もして來た。

二

翌朝、彼が起きた時にはもう日は大文字の上に昇つてゐた。彼は顔を洗うと座敷の掃除の出來る間又河原へ出た。草の葉には未だ露があり、涼しい風が吹いて居た。彼は餘りに明かる過ぎる廣い道に當惑した。然し故意に圖々しく、自分を勇氣づけ、その方へ歩いて行つた。多分もうゐないだらう。然し若し居て呉れたら自分には運があるのだ、さう思つた。

向ふから朝涼の内にきめて運動をするらしい前にも二三度見かけたことのある四十餘りの男の人が今日も、ちやんと身仕舞ひを濟ませた小さい美しい女の子を連れて歩いて來た。其人達の無心に朝の澄んだ空氣を樂しんでゐるやうな、ゆつたりした氣持が其時の彼には一寸羨しく感ぜられた。

そして女の人は矢張り前日のやうに椽に出て居て呉れた。彼はドキリとして進む勇氣を失ひかけた。が、其人は彼の方には全く無關心に、寧ろぼんやりと、絲を持ち、手拭を姉さん被りにし、注意を奪はれ切つて其美しい女の兒の方を見て居る所だつた。此事は彼には幸ひだつた。けれども同時に其人の顔には昨日のやうな美しさがなかつた。彼は多少裏切られた。一々こんな事で裏切られて居ては仕方がないと自分で自分を食ひ止めたが、其内女の人は、ふと彼から見られて居る事を感じたらしく、そして急に表情を變へ、赤い美しい顔をして隠れるやうに急いで内へ入つて了つた。彼の胸も一緒にどきついた。そして彼は其人の其動作を大變よく思ひ、いゝ感じで、其人は屹度馬鹿でないと云ふ風に考へた。

彼は今日は家探しをやめ、午前中博物館で暮らさうと思つた。博物館は涼しかつたし、それに來た時見た物は大概陳列變へになつてゐるだらうと考へた。宿へ引きかへし、朝飯を濟ますと、直ぐ電車で博物館へ向かつた。

博物館の中は例の如く靜かだつた。分けても其日は靜かで、觀覽者としては雜作以外に一人の姿も見られなかつた。

そしてかういふ靜けさが却つて謙作を落ちつかない氣持に追ひやつた。制服を着た監視の一人が退屈さうにカッタン、コットン、故と靴で調子を取りながら腰の上に後ろ手を組み、靴の爪先を見詰めながら歩いて來た。其のカッタンコットンいふ響きが高い天井に反響し、一層退屈な、そして空虛な靜けさを感じさせる。その邊に掛けられた古い掛け物の繪までが、變に押し默つて、まわりから凝つと此方を見てゐるやうに謙作には感じられた。彼は親しみ難い、何か冷めたい氣持でそわ〳〵と急ぎ足にそれらの繪を見て廻はつた。然し不圖、如拙の瓢箪鮎魚圖の前へ來て、それは日頃から親しみを持つてゐたものだけに暫く見てゐる内にその繪の爲めに段々彼の氣持は落ちついて來た。繪から何か話しかけて來るやうな感じを受けた。

支那人の繪で南蘋風の松にも彼は感服した。氣持が落ちつくに從つて繪との交渉が起つて來ると、呂紀の虎、それから矢張り支那人の描いた鷹と金鶏鳥の大きい双幅の花鳥圖などに彼は甚く惹きつけられた。泉涌寺出陳「律宗三祖像」、顏は前日見た二尊院の肖像畫に較べて遠く及ばないやうな氣がしたが、それでも曲彔に掛けた布れとか袈裟などの美しさは感服した、總じて彼がかういふものに觸れる場合彼の氣分の狀態が非常に影響した。興に乘るといふ事は普通能動的な意味で多く用ひられるが、彼では受動的な意味でも興に乘ると乘らぬとでは非常な相違があつた。これはかういふ美術品に觸れる場合、殊に著しく感ぜられる事であつた。そして今日も最初は妙に空虛な離れ〳〵な氣分で少しも興に乘れなかつたが、段々にそれがよくなつて行くのが感ぜられた。彫刻では廣隆寺の如意輪觀音、これは四五日前太秦まで見に行つて、却つて此所へ出してある事を聞き、此前は見落してゐた事に氣附いたものであつた。

少し疲れて來た。いゝ加減にして其所を出ると、彼は歩いて西大谷の横から鳥邊山を拔け、清水の音羽の瀧へ行つた水に近かい床几に腰を下ろすと彼は何よりも先づ冷めたい飲物を賴んだ。彼は疲れた身體を休めながら、東京からす

ると一體に華美な裝ひをした若い人達の姿などを見て居た。

高臺寺の中に貸家が出來つゝあるといふ話を憶ひ出し、彼は少時して、その方へ行つた。貸家は二階建の二軒棟割りになつた家で惡くなかつた。町への出端もよく、彼は氣に入つたが、夫れから大家まで行く事が太儀に想はれ、其儘八阪神社へ出て四條通りを歸つて來た。

四條の橋を渡つた所に、川へ突き出しを作つた安値な西洋料理屋がある。それへ入つた。どの道風のない日だつたので、彼はなるべく陽に遠い空いたテーブルを選んで腰を下ろしたが矢張り先づ飲物が欲しく、椅子へ横向きにかけ、振返つてゐたが丁度立て込む時で女中は中々廻はつて來さうになかつた。

彼は不圖、自分から三つ四つへだたつたテーブルで一人、忙しくナイフとフォークを動かしてゐる男に氣がついた。まだ食つてゐる内からナイフを擧げて、

「オイ、シチウ。――わかりましたか」こんな事を太い聲で云つた。矢張り高井だつた。

謙作は自分の麥藁帽子を取上げ、起つて行つた。

「オイ」と云つて一寸肩を突くと、高井は不審さうに振り向いて眼を見張つたが直ぐ、

「オゝ」と云つて起ち上がつた

「うまく會へたね」

「本統に」と高井も嬉しさうに云つた。

二人は丁度二年振りで會つたわけである。其頃謙作は五六人の友達と同人雜誌を出さうとした。高井もその一人として、彼が洋畫家である所から、裝幀を引き受け、尚、詩や短歌等も出す筈であつたが金の事がうまく行かず、一ト先づ

雜誌は延ばす事にすると、間もなく高井は胃から來た割りに烈しい神經衰弱にかゝり、水治療法をやる神戸の衛生院に入り、其所に一年近かくゐて、殆ど全快し、それから但馬の方の郷里へ歸つてゐる、といふ事を謙作は人傳手に聞いてゐるのである。

「此頃は此方なの？」

「いや、奈良にゐる。疥からづつと奈良にゐるんだが、何所へも御不沙汰してゐる。――で、君は何時來たの？」

謙作は此地へ住まはうと思つてゐる事などを話した。

高井は自身のゐる奈良へ來る事を勸めた。

「奈良でもいゝけど、――差し當り矢張り京都へ住みたい」から云ひながら謙作は自分の問題を高井に打明け、相談して見てもいゝと考へた。

暫くして二人は其所を出、連れ立つて東三本木の宿へ歸つた。そして謙作は前日からの事を割りに精しく高井に話した

「隨分眞劍なんだね」高井は二十前後の青年かなぞのやうな初々しい謙作の感情を一寸意外に感じたらしかつた。

「僕としては純粹な氣持だ。然しこれからどう進ませるか、それは今の所一寸見當がつかない。若しこのまゝにしてゐると今までの經驗では、又、有耶無耶になりかねないが、何んとなく左うはしたくない氣があるんだ」

「積極的にやるのさ、どういふ人か調べて、誰れかに申込んで貰うんだに

「左うてきぱき行けばいゝが……」

「賴むのさ、誰れか人にやつて貰うのさ」

「うん」

「僕でも出來る事ならやりたいが、こんな書生っぽでは向ふが信用しまい」

「君にやつて貰へれば僕には最も嬉しい事だ」

「さう……。やれるかしら。やれゝば僕も喜んでやるが」高井は一寸考へてゐたが、「その家に部屋があるかね。僕がそれを借りて住む事が出來れば……、大概、人の見當はつくが……。若し君に不賛成がなかつたら、こんな事も一つの手段だね」と云つた。

謙作は賛成した。が、同時に、彼はこんな風にしてどんどん事が進んで行き、又、或る所で不意にそれが破れたりするのではないかといふ不安を感じた。それが自分の運命だといふ氣が近頃の彼には直ぐして來るのである。此反省は自身のいぢけた姿を突き附けられる點で二重に彼を暗い氣持に誘つた。然し彼の他の心はそれを反撥し、殊更、自身をさういふ氣持から超越さそうとした。

「今、ゐるかね?」と高井が云つた。

「わからないが……」と謙作は微笑しながら「見に行かうか?」と氣輕く答へた。

「僕だけ見て來よう。その方がいゝだらう」

謙作は精しく其家を教へた。高井は直ぐ庭から河原の道へ出て行つた。高井が如何にも何氣ない風で歩いて行く、そして、それとなく眼だけで其家を探して居る様子が背後から見てゐて甚く可笑しかつた。然しかうして此事が若し順調に行くものとすれば高井のあの可笑しな後姿も只笑つては居られないと思つた。それにつけても自分は自分の出生を少しも隠す事なしに、話し、向ふにその事から先づ解決して貰はねば……と考へた。

間もなく高井は笑ひながら歸つて來た。

「わからない」彼はかういつて首を振つた。

「間抜けだな」謙作も笑つた。「そんな筈はない。一緒に出よう」

「何しろ、此一丁以内にはそんな人は一人もゐない」

「それなら今ゐないんだ。兎も角出て見よう」

謙作は下駄を廻はし、帽子を被り暑い戸外へ出た。

「あの朝鮮すだれの下がつてゐる家だ」

「ふむ。左うか」

「居るぢやあないか」謙作はその方を少しも見ずに云つた。

「どれ」

「坐つてる」彼は今度は叡山の方を向いて云つた。

「わかつた」

一足後れになつた高井が背後から、

「通りからでも、どの家か分かるかい？」と訊いた。

「歸りに見て行かう」かう云ひながら謙作は振返つて、目標になる三階建ての家から、二軒、三軒、四軒目と心覺えをして置いた。

二人は荒神橋の袂から往來へ出た。謙作は自分が自分ながら可笑しい程快活な氣分になつて居る事に氣がついた。其人の家の片鱗を見たといふだけでかうも變る自分が滑稽にも亦、幸福にも感じられた。かうして此事が順調に運び、うま

く行けば、今までにない、本統の新しい生活が自分に始まるのだと思つた。實際今までは總てが暗闇に隱されてゐた。その爲めに、却つて恐ろしい黴菌が繁殖した。總ては明るみへ持ち出される。そして日光にさらされる。黴菌は絶やされる。そして、初めて、自分には、自分らしい本統の新しい生活が始まるのだ。

「それは左うと」と謙作は不意に竝んで歩いてゐる高井を顧みた。「君は奈良を引き上げてもかまわないのかい？」

「あゝ」

「然し向ふで何か描いてるんだらう」

「あるけれど、それはもう二三日やればいいんだ。それに京都で描きたい所もあるから僕の方は心配要らないよ」

二人はそれから寺の土塀について左へ折れ、狹い東三本木の通りへ入つた。そして少し行くと謙作が目標にして置いた三階建の家があり、それから數えて、其家を直ぐ知る事が出來た。

「君は先へ歸るだらう」と高井が云つた。

「今、直ぐか？」謙作は余りに氣が早過ぎる氣がしたので一寸眼を見張つた。

「かういふ事は愚圖々々してない方がいゝのだ」高井は無雜作にかう云つたが、謙作にははつきりした理由なしに、それが危ぶまれた。

「まあ、歸つて待つて玉へ」高井は輕く會釋して格子を開け狹い石疊の路次へづん／＼入つて行つた。

謙作は一人宿へ歸つて來たが、歸りながら彼は昔、或るむさくろしいなりをした大學生が上野公園で美しいお孃さんが俥で行くのを見掛け、直ぐそれを追ひかけ、俥が家へ入ると一緒に主人に面會を求め、結婚を申し込み、其場でうまく話をまとめたといふ話を憶ひ出した。それは其大學生の友達だつた國語の敎師から聽いた話なので、彼は多分本統だら

ろと思つてゐる。そしてそれを聴いた時彼は随分笑つたものゝ、何となく其男のやり方に、不快な氣持が感じられた。一つはそれだけの話では其男の率直さの程度が本統に感じられないからでもあつたが、もう一つは彼の行爲の上の趣味から云つて左ういふ奇拔さが嫌ひであり、左ういふ奇拔さに興味を持つ人が好きになれなかつたからでもあつた。然し高井のやり方が同じやうになる氣づかいはないと彼は安心しながら歸つて來た。

彼は直ぐ湯殿へいつて水で身體を拭いた。其所に高井が苦笑しながら歸つて來た。

「斷はられたよ。本統か嘘かわからないが部屋がないさうだ」

謙作も一緒に苦笑した。が、別に落膽はしなかつた。

「然し本統かも知れないよ。若し、なんなら、もう一遍此家から訊いて貰う事も出來るし」といつた。

「左うだね。最初から左うする方がよかつたかも知れない……兎に角もう一度訊いて貰はうか」

「左うしよう」

二人は部屋へ來た。宿の女主が直ぐ茶道具を持つて來た。

「東三樓ですかね。此のむかうにありますね」高井は直ぐ云ひ出した。

「へえ」女主は茶をいれながら返事をした。

「あすこは、下宿もさせるのですか？」

「へえ、よう大學や市立へ通はれる病人さんが宿られるやう聞いとりますが」

「實は今、部屋を訊いて見たんです。……」

「へえ」

「部屋がないと斷はられたんです。然しそれがぶつつけに行つたんで、斷はられたのか、實際ないのかよく分からないんです。本統の事が訊いて貰へると都合がいゝんですが……」

「早速訊ねて參りませう。あのお家は前のお方やと、極く御懇意に願ふとりましたが、一昨年代がわりになりまして、未だお馴染は薄うムりますが、自家の仕出し屋があのお家へも入りますさかい、仕出し屋に訊ねさせませう」

女主は左ういつて立つて行つた、そして直ぐ又一通の手紙を持つて、

「えらい濟みません事で、お晝頃參つとりましたを、つい忘れまして」と云譯けして謙作へ渡した。それは鎌倉の信行からの手紙だつた。要事としてかなりに重みのある手紙だつた。

三

御不沙汰してゐる。元氣な事と思ふ。お前の先日の便り嬉しく見た。京都氣に入つた由何より。いゝ家見つかつたか。これから段々よくなる時候で、樂しさうだ。いづれ家でも見つかつたら、歸つて來る事と思ふが、兎に角お前に考へて置いて貰ひたいからとお榮さんに賴まれたので此手紙を書く。

實は一昨日お榮さんから手紙が來て相談したい事があるから、上京の折り寄つて呉れとの事で昨日行つてみた。お前も知つてるだらうが此頃大森にはお才さんといふお榮さんの從妹が來てゐる。お榮さんはお才さんの前身についても余り云ひたがらないが、察するに矢張り身體で商賣をした人らしい。現在もはつきりした事は分らないが、何んでも天津で料理屋をしてゐるのだといふ事だ、料理屋といつても東京あたりの普通の料理屋とは異つた性質のものだらうと思ふ。

それでお榮さんの云ふ事は、本來ならば、お前との關係もお前にいゝ嫁さんが出來、ちやんと、新しい家庭が作れた

所で、身を退くのが本統とは思ふが、今となれば本郷の父上のおもわくもあり、どうしたものかと俺は迷つて居たと云ふのだ。これを云い出すと又お前の氣を惡くするかも知れないが、お榮さんとしたら尤もだと俺は考へる。
其所で今度十年ぶりとかでそのお才さんといふ人が歸つて來て、出來る事なら自分の仕事をお榮さんにも手傳つて貰ひたいと云ふのださうだ。勿論手助けだけではなく金の方が主なのだらうと思ふが、何しろお榮さんの方もそれには大分乘氣らしい。で、お榮さんはかういつたからとて、前に話のあつた本郷からの金を貰ひたいとか、左ういふ氣持は少しもないので、若し此事にお前でも俺でもが、不贊成でないと云ふ事なら、幸ひお前も今度京都へ住むと云ふし、此家を疊み、千何百圓かの貯金を持つてお才さんと一緒に天津へ行きたいと云ふのだ。まあ簡單に云へばこれだけの事だ。
いづれ精しい事はお前が歸つた時に話し合うつもりだが、それまでにお前も此事をよく考へて置いて貰ひたい。俺はお才さんといふ人が、どういふ人か、そして一緒にするといつてどんな仕事をするのか、そんな事も其内、はつきり聞きたいと思つて居る。
　金の事も俺は考へてゐるが、これはなるべく俺に一任して置いて貰ひたい。
お前は何日頃歸れるか。歸りに鎌倉へ寄つて吳れると好都合だ。では左樣なら。

謙作は讀みながら一寸異樣な感じがした。お榮が天津へ行つて料理屋をする、此事が如何にも突飛な氣もし、一方如何にも有り得さうな氣もした。然しそのお才といふ女がどんな女か、それにだまされるやうな事があつては馬鹿々々しいと思つた。
　兎に角、謙作にはその手紙に書かれた事は余りいゝ氣がしなかつた。自分とお榮との關係が今後どうなつて行くか、それは彼にもはつきりした考へはなかつたが、こんなにして、二人が遠く別かれて了ひ、交渉なくなつて了ふといふ事

は矢張り結局二人は赤の他人であつたといふ——余りに左う云ふ氣のされる事で彼にはそれが淋しく感ぜられた。然しどうすればいゝか、その的もなかつた。

女主が入つて來た。東三條といふ家には矢張り空間がないといふ返事だつた。

「今、表にゐられます、年寄りの病人さんが二十日もしたらお國へ歸られます筈やで、そしたら、其お座敷が空きますがちう返事でムりました」

「ありがたう」高井はかう云つた。「どうも、それでは仕方がない」

女主は歸つて行つた。

「然し訊いて見てよかつたよ」と謙作は云つた「二十日するとあの老人が居なくなる事がわかつただけでもいゝ」

「左うだ。それまでにどうかしていゝ手づるを作るんだ」と高井も云つた。

「若しかしたら兄貴に來て貰はうかしら。今手紙が來て、自家の方の事でも少し話したい事があるし。尤も僕が歸る方が早いかも知れないが、さうしてると、此方が不安心だから」

「うん、それがいゝかも知れない。左うし玉へ。兄さんは何時でも出て來られるんだね」

「大概來られるだらうと思ふ」

「早く其人が何所の人か、そしてあの老人とはどういふ關係の人か、それを確かめるといゝね」

「あの人の娘かね?」

「さあ」

「姪(めい)かね?」

二人は笑つた。

「左う觀察力が鈍くちや仕方がないな」

「眼がくらんでるんだ。――然し娘ぢやあないよ屹度」と謙作は云つた。

「兄さんへ手紙を書くなら遠慮せずに書いて呉れ玉へ。そしたら僕は一寸五條まで買物に行つて來る」かういつて間もなく高井は宿を出て行つた。

謙作は後で信行へ手紙を書いた。お榮の事それから自分の事、それを書くとかなりに長くなつた。どうせ最近會うのにこんな精しく書く必要はないのだ、左う思ひ〳〵矢張り惰性的に色々書いて了つた。彼が坐り疲れた身體を起こし、其手紙を賴みに立つて行くと、それはもう玄關の狭い廂合ひから差込んで來る西日で、いつもは薄暗い廊下の椽板が熱くなつてゐた。

彼は少時して湯に入り、又前日のやうに團扇を持つて椽へ腰を下ろしてゐた。遙か荒神橋の方から何氣ない眞顔で、急足に歸つて來る高井の姿が眼に入つた。そして前まで來ると今度は割りに大膽にその方を見てゐた。間もなく高井は一枚橋を渡つて微笑しながら歸つて來た。

「よく見た」

「だうだらう。恐らく一度で僕よりよく見たらしい」

「あれは君、鳥毛立屏風の美人だ」突然こんな事を高井が云つた。この評は割りに適評であり、謙作には大變感じのいゝ評であつた。

「ふむ、左うかな」左ういひながら謙作は自分が赤い顏をしたやうに思つた。

高井は湯へいつた。其間に謙作は又一寸河原へ出て見た。前まで行く氣がせず、遠くからそれとなく氣をつけてゐると、其人の姿は時々見へた。

其晩二人は新京極へ活動寫眞を見に行つた。「眞夏の夜の夢」を現代化した獨逸物の映畫を二人は面白く思ひ、暗くなつて二人は東三本木の宿へ歸つて來た。

四

三日目、それは珍らしく明方から雨になり割りに涼しい朝だつた。毎朝雨戸を照りつけられるので寢坊の出來なかつた謙作はよく寢て居た。其所へ夜行で來た信行がついた。

「おい、朝めしがまだゞが貰らへるかい」こんな風に挨拶よりも先に信行がいふ。

謙作は一體寢起きの不機嫌な方だつたが其日はよく眠つても居たし割りに愛想よく兄を迎へる事が出來た。

暫くして二人は雨に煙ぶる河原の景色を眺めながら朝の食事をした。

「お前の方の事をお榮さんに話したら大變喜んでられたよ。是非共といふやうな事を切りと俺に繰返して居た。それは本統に俺も嬉しい事だし、うまくやりたいと思ふ。」

「それでね、お榮さんの方の事を先に話すと、俺はね、その事が本統にお榮さんの爲めになる事かどうか、はつきりしないんだ。お榮さんといふ人も元々左ういふ空氣には親しんで來た人で、自分では他の堅い商賣よりは幾らか自信もあるらしいのだが、俺にはそれがあてにならないのだ。左うかといつて、それに不賛成をいつて、他にどうといふ、うまい考へもないとすると、一途に否定するわけにも行かず、又案外それでうまくやつて行くかも知れないとも思ふし。それからお榮さん自身はそのお才さんにすつかり勸め込まれて了つて非常に乘氣なので、此場合俺達が不賛成をいへばよすにはよ

よすだらうが落膽も隨分するに違ひない。で俺の考へとしては、お榮さんの考へ通りに總てして、つまり全く自由にして、若し、それで不成功だつた場合あとを此方でどうにもするやうにしたらいゝかと思ふんだ。一と言にいへば又金の事になるが、金は本郷からのと、お前からのがあればお前からのと、それを一つにして俺でもお前でもが保管して置く、そんな事にして置いてはどうかと思ふんだ」

「全體何をするんだらう？」

「それが、どうも余り感心はしないのだが、お才さんといふ人が天津で料理屋をしてゐるのだ、其所に所謂內藝者といふのがあるのだそうだ。藝者といつても勿論二枚鑑札だが、それを今までは兩方一緒にやつてゐたが、手が廻はりきらない爲めにその藝者の方一切をお榮さんにやつて貰ひたいといふのだそうだ。つまり、上方でいへば置き屋見たやうなものだ、それが別になつてゐずに同じ家に一緒にゐて資本は別でやつて行かうといふのだ」

謙作にも大概見當はついた。

「ひどく品の悪い商賣ぢやないか」

「其所がどうも感心しないが、煙草屋をやる、小間物屋をやるといつた所で、東京だと家賃は兎も角として雜作とかいふのが非常に高く、それだけで、もう仕入れの金も何んにもなくなる位だらう」

「左ういふ事は具體的に云へといはれると一言もないが何かもう少し品のいゝ商賣がありさうなものだ」

「何といつてもお榮さんは矢張り水商賣の人だね。幾らか昔の經驗があるから、考へがどうしても自然そつちへ入つて行くらしい。それでお才さんといふ人がどういふ か、それが信用出來る人なら、一切任せてもいゝが、其所がはつきりしない點で、此方で後の餘裕を殘しとく必要があると思ふよ」

「僕にはよく分からない。他に仕事があるものなら勿論他の仕事を探す方が賛成だが、他にないなら仕方がないし、若し又自分で急にそんな事をする必要がないといふ氣になれるやうなら、二三年これからも一緒にゐて貰つて少しも困らないがな。少しセンチメンタルかも知れないが僕はこんな風にしてお榮さんと別かれて了ふのは何んだか物足らない」

「ふむ…………」

「お父さんの方の氣兼ねの事も此間書いてあつたが、そんな事は僕が若し結婚すれば問題にはならない事だし……」

「まあ、それは……矢張り二三年後に別れるものなら、今別かれて了つた方がいゝと俺は思ふ。それはセンチメンタリズムだよ。矢張り何にでも時期と云ふものがあるよ。時期によつては生きる事柄が、それを外して、生きなくなる場合がある。」

「つまり本郷から金を貰ふ事かい？」謙作は結局信行は此事をいつてるのだらうといふ可笑しいやうな、同時に多少いら〳〵した心持もして露骨にかう云つた。

「それも一つだ」と信行は案外眞面目な顔をして答へた。「それで、そつちの方は手紙にも書いた通り一切俺に任かせる事にして、なるべくお前は立入らん事だ。お前のは脅迫觀念的に金の事をいふと損をして置きたがる潔癖がある。慾の深いよりはいゝが利口な事ぢやあない」

「そんな事あるもんか」

「それはまあ何方でもいゝが、其所でどうだらう、今いつた俺の考へにお前は賛成するか、どうか」

「お榮さんの云ひ出した通りにするといふ事かい？」

「左うだ」
「左うだな……贊成は出來ないが、仕方がないな。贊成するといへばいや〳〵の贊成だな」
「左うか。まあ、それでいゝだらう。若しいけなかつたら、又其時でどうとでも出來るんだから……」
「何時から行く氣なのかしら？」
「きまれば、早い方がいゝんだらう。なるべくならお才さんといふ人と一緒に行きたいんだらうが、もう直ぐ、お才さんは行つて了うんだらう、何しろ不贊成のない事早く知らしてやる方がいゝ。あとで電報を打つてやらう」
「…………」
「其所でお前の方の事だが、大體お前の手紙で分つてゐるが、今でも居るんだね？」
「居るだらう。あんまり通るのも變で少し遠慮してゐるが、見えたり見えなかつたりだ」
「高井君はもうあれつきりかい？」
「あゝ」
「俺は一つ考へがあるんだが、お前は山崎を知つてるかね。高等學校でボールの選手をしてた」
「知らない」
「俺の級で三部だが、寮が同じで割りに親しかつた。其山崎が、此所の大學病院にゐる筈なんだ。何科か分からないが、俺は山崎に賴んで病院の方から多少でも手蔓を作る事が出來さうに思ふ」
謙作は默つて點頭いてゐた「うまく行くものなら、そんな事でもうまく行くだらうし、……」彼はかう云つたやうな氣持だつた。彼には自分にいゝ運の向く事を信ずるのが中々困難だつた。半信半疑を、もつと疑問の方を強くして選

かないと不安心だつた。習慣的に左うなつてゐた。

「俺の手に合はなかつたら、石本を頼んで見よう」

信行がかういつたのは石本は公卿華族で京都では何かと手蔓を作る便宜が多いといふつもりなのである。

「そんな事いつてる内に京都から國へ歸つて了う」と謙作は云つた。

「なに、國によつてはもつといゝ手蔓が出來る――それは左うと今日はどうするかな。お前は何か豫定でもあるのか？」

「別に……」

「そんなら、どうしようか。山崎でも訪ねるか。それとも今日は休養といふ事にして何かうまい物でも食ひに行くか」

「何方でも」

「一日でも早く山崎に會う方がいゝかな？」

「何方でもいゝ」

「それぢやあ、矢張り山崎に會つて置かう、そして晩一緒に何所かへ行かう」

「左う。それなら、左うして貰はう」

五

謙作の結婚の話は案外うまく進みさうになつた。それは信行の學校友達の山崎といふ醫學士が丁度、其老人を診てゐる博士の助手だつた事から、急に色々な事がはつきりした。

女の人は老人の姪であると云ふ事、敦賀の在の所謂物持ちの家の人であると云ふ事、そして、京都へは老人の見舞ひ

一

を兼ね、冬物の衣裳其他を買ふ爲めに出て來たのだといふやうな事まで分つた。

それからもう一つ謙作の爲めに幸ひだつた事は其老人を博士へ紹介して寄越した市會議員のSといふ人が偶然にも石本の所謂舊臣だつた事である。此事は東三本木の宿で其人の名が何氣なく山崎の口から出た時に女主が「そのお方さんやつたら。石本さんの元の御家來やと思ふとりますが……」といつたので分つた。

兎も角恩画々々してない方がいゝ、かういふ事で信行は石本に會う爲めに歸つて行つた、謙作は自分のその事に信行が本氣で働いて呉れるのを心で感謝した。そして石本に對してゝ、前に「君達に左ういふ心配はして貰ひたくない」とか「左ういふ老婆心が不愉快なのだ」とか云つた自分が一年經たぬ内に結局その事で世話にならねばならなくなつた事を彼は面白く感じた。「それ見ろ。あんな立派な口をきゝながら到頭あたまを下げる事になつたらう」こんな風に石本が思ふかも知れない。と考へた。左う思ふなら思つてもよろしいと彼は又考へた。結局石本も信行のやうに左ういふ事が謙作に意外に早く來、そしてそれが偶然にしろ、彼自身の手に頼らねばならなくなつた事を心から喜ぶ事が知れてゐた。それ故、謙作には何の反抗心らしいものも起つては來なかつた、ばかりでなく、若し同じ事で石本でない人に手頼らねはならぬ場合を想像すると、それが偶然にしろ石本であつた事を彼は一層氣持よく感じないではゐられなかつた。

要するに自分は不幸な人間ではないと謙作は考へた。自分は全くの我儘者である。自分は自分の想ふ通りをしようとしてゐる。それを人は許して呉れる。自分は自分の境遇によつて傷つけられたかも知れない、然しそれは全部ではない、それ以上に自分は人々から愛されてゐたのだ。こんな事を思つた。

彼は相變らず寺廻りをした。そして出入りにはよく河原の路を通つた。彼は又家探しもした。彼は南禪寺の北の坊といふ所に先日高臺寺で見たよりも、更に氣持のいゝ一軒立ちの草葺屋根の家を見つけた。それは一人住ひの寓居として

は此上なくいゝ家だつた。結婚するとすれば少し狹き過ぎる氣もしたが、それを豫想して今から大きい家へ入るのも一寸變な氣がしたし、殊に貸家としてゞなく　てられた其家が彼には氣に入つた。で彼はそれを借りる事に決めた。

二三日すると石本が來た。石本は何の厭味らしい冗談も云はなかつた。それはよかつたが、そして直ぐ實際の話を始めた時に

「無論向ふの事も精しく訊くつもりだが、此方の事も出來るだけ精しく話して置く方がいゝだらうね」と石本が云つた。

「左うして呉れ玉へ」謙作は石本が「此方の事」といふのは何の程度までをいふのか不安心に思つた。多分、總てを云つて呉れるのだらうとは思つたが、自分さへ近く知つた自分の出生を、本統によく石本も知つてゐるかしら？それが疑はれた。で、彼は「つまり僕の出生の事も云つて呉れるんだね」と云つた。彼がかういつた心持は、勿論それを云つて呉れなければ……といふつもりだつたが、石本にはそれが反對に響いた。「出生の事も云つて了ふのか」から謙作が弱音を出したやうにとつた。石本は一寸いやな顏をした。そしてその事は隱さず打明けねばならぬといふ事をくど／＼と云ひ出した。

謙作は心外な氣がした。「勿論左うだよ」「初めから其つもりだつたのだ」こんな事を云つて見ても、自分ながらそれが後からの附け足しらしく聞こえ、不愉快な氣がした。そして結局石本の長談義を彼は終りまで聽いて了つた。彼は多少苛々もしたが、後で信行に云へば分る事と思ひ、其氣持の行違は到頭その儘にして了つた。

謙作がその事を信行にはつきり云つて置かなかつた事が此行違ひを作つたのである。謙作はそれを考へ／＼遂に云ひ出さなかつた。その事を先づ第一に云ふといふ事が餘りに自分らしい氣がして厭だつた。實際それは餘りに彼らしい深爺に見えたらう。それ故、彼は半ば無意識に、半ば意識しつゝそれを云はなかつた。そして此事が大森の家で信行と石

本とお榮との間で話された時に、お榮は何よりもそれを云ふ事に反對した。反對の理由は簡單で、はつきりして居た。然し石本はどうしても先づそれを云はねばならぬと主張した、それでなければ自分は間に入れないと云つた。から石本のいふ理由もはつきりしてゐた。勿論それは謙作も同じ考へであつたが、石本は「何故謙作が此事を第一に信行に云はなかつたらう？」これを疑問にしたらしかつた。行違ひは此所から發してゐた。然し幸に謙作はそれに餘り拘泥せずに濟ませた。此事はそれだけで濟んだ。

石本は麩屋町の行きつけの家へ宿を取つてゐた。そして二時から宿でS氏と會ふ筈になつてゐるからと間もなく歸つて行つた。

謙作は自分の事を向ふへ打明ける一つの方法として、自傳的な小說を書いてもいゝと考へた。然し此計畫は結局此長篇の序詞に「主人公の追憶」として掲げられた部分だけで中止されたが、其部分も何かしら對手に感傷的な同情を强ひさうな氣がして彼はそれを向ふへ見せる事をやめた。そして彼は後になつてそれを聽いたが、石本は謙作がその事について尾の道から信行へ出した、最初の手紙を持つて來てゐて、その中のお榮に關する部分だけを消して先へ見せたと云ふ事である。

お榮に關する事も打明けねばならぬと思ひながら、謙作には此事の方は、ひどく苦しかつた。何故かわからなかつた。そんな事を今いふと云ふ事が、あの美しい人に對し、冒瀆である、そんな氣持に近かつた。石本もそれには觸れようとしなかつたし、彼も或る時、打明ける機會に隱さなければいゝのだと考へ、それは殊更には云はない事にした。

日暮れ前だつた。謙作は一寸近所の古本屋を二三軒歩き、河原の路から歸つて來ると、手紙を持つた石本からの使が待つてゐた。「差支えなかつたら今夜S氏と會つて貰ひたい。此俥で直ぐ來て呉れると好都合だ」こんな事が書いてあつ

た。彼は直ぐ其俥に乘つて出掛けた。

石本は一人で彼を待つてゐた。

「本人に就いての精しい事は何も分らなかつたが、極く大體の事は聽いた」から石本は云つた。それによると、老人は明治三十年代に代議士だつた人でS氏とは同じ政黨の關係で前からの知り合ひだと云ふ事、そして其女の人は老人の妹の娘で、敦賀の女學校を二年前に出て、嫁入り前の支度旁々衣裳を貰ひに來たのだといふ事、此程度の事だつた。

で、其晩は、大した意味もないが、S氏の案内で何所かへ一緒に飯を食ひに行かうと云ふのであつた。

間もなくS氏が誘ひに來た。S氏は五十余りの額のぬけ上がつた瘠せた人で其薄い柔かな髮の毛を耳の上から一方へ一本並べに奇麗になでつけてゐた。そして石本の事を道隆といふ名で道樣々々と呼んでゐた。

すつぽん料理へ行く事にして三人はその宿を出た。そして或る所から電車に乘り北野の方へ向つた。

すつぽん屋は電車通りから淋しい横丁へ入り、片側にある寺の土塀の盡きた、突き當りにかつた。金あみをあけた暗い小行燈が掛けてあり、そして其低い軒をくゞると、土間から、黑光りのした框の一ト部屋があり、其所から直ぐ二階へ通ずる、丁度封印切りの忠兵衛が駆け降りて來さうな段々があつて、これも恐らく何百年と云ふ物らしく、黑光りのしてゐる上に、上の二三段は蟲に食はれてぼつ〳〵と穴があいて居た。それを其儘にしてあつた。これも一つの見得には違ひないが、悪くないと謙作は思つた。

すつぽんも、うまかつた。昔此すつぽん屋が、蝦蟇を捕りに來たといふ話を謙作は北野の方の池のある屋敷へ住んでゐた人から聽いた事があつたが、今はさういふ虫はないに違ひないと思ひながら食つた。

三人は別に用の事は話し合はなかつた。それに謙作の位置が憎い主從關係を忘れずに其調子で話してゐる二人の中へ

入るも何んとなく鬱だつた。Ｓ氏も石本に對すると謙作に對すると調子を變へるわけに行かず、甚く叮嚀であつた。そして同じやうに叮嚀にしようとすると謙作には何んとなく言葉がぎごちなくなるので彼はなるべく話から遠退いてゐた。それでも石本は、

「左うすると、家はもう見つかつたんだから、君は彼近此方へ引越して來るね」こんな風に時々謙作を話の中へ連れ出さうとしたりした。

其夜、Ｓ氏と別かれてから、謙作は石本と丸山の方を散歩した。

「僕は明後日用があるので、明日の夜行で歸るがね」と石本は云ふ。「そしてＳの返事によつて、一週間か十日して又來るつもりだ。それで此事には君の直接する事は何んにもないのだから、都合で何時でも歸るといゝよ」

「…………………」

「Ｓに總て一任してあるが、Ｓは大概うまく調ふだらうと云つてゐるが、左う決め込んで駄目だと落膽するからね………」

「僕も明日歸る。晩の急行で歸る」から急に謙作は云つた。

「そんなら一緒に歸らうか」

「うん」

それに決めて二人は暫くして別かれ各、自分の宿の方へ歸つて行つた。

（つゞく）

編輯を了へて

◇一生涯どうしても多忙から逝れるとの出來ぬ自分等、殊に十二月は鬼の節季のとであり、我々人間どもを苦しめたりいぢめたりして白髪と禿への道へいらぬ手引をしおる、

◇「改造」社員二十三名、四十歳以上の半禿が一人、三十五歳以上の四分の一白髪が二人花婿氣分のものが六名、すこしハニカミ屋の色氣盛りの者が六名他はまだ前途遼遠の若者たちだ、社齢は當年取つて第四歳、元氣がワイワイして。毎日角力とか腕押しとかにその日の髀肉の嘆を流しておる、しかしそれも此の頃はネタが落ちさうで中止しておる。

◇大正十年アインスタイン氏の相對性原理、ラツセル氏の社會思想は比較的に入念でそして金を使つて多大の損までして紹介した。本年も引續いてア氏の深奥なる科學を突込んで研究する、そして東洋人としての大立物でもあり、印度の救濟主のやうに思はれておる、ガンデー氏の思想や、性格も研究して見たい。しかしチト危險な所もある。

◇華盛頓では四國協商とやらが成立した、軍艦削減の比率で大分ゴタ〳〵があつたやうだが、協商成立とあれば六割か七割の間で姑息な鳬がつくのだらう。その勢で陸軍にも手をつくべきだ。そして蒼生の苦しみを塗炭の裡から拾ひ上げてくれ、カーキ色萬歳も久しいものだからな。

◇露西亞はどうなる、支那はどうなる、印度は、滿洲は、獨逸は、墺國は、愛蘭は——多忙であれよ一九二二年よ、平板であれば欠伸ばかりで仕方があるまいから。

◇陸軍對內閣、貴族院對政府、官僚對政々會それぞれ小競合があるだらうが——ナーニ大したこともあるまい何れも物欲し連中のとだから鳶の憲政會猿の國民黨もソロソロ物欲しさに堪らなくなつたらう。

◇出版小僧の傳言に「死線の中巻」は五十臺の自動車で各賣捌店へ發送された、そして其の爭鬪戰は火花を散らす凄壯さを呈した、發行十五日で百版に達し、前編以上の賣行きを示しておる、兎に角、前例のない一大新記錄だ。

◇社員室伏は正月に歸國する居縣氣分久々ぶりで何か異つた土産でもあるかしら。

◇編輯博士の大力作「レーニンの國家理論」が大半抹消され、そして同博士の「ボルヴイズム研究文獻小錄」全部登載を禁ぜられたのは遺憾千萬である、厚く筆者に御詫びする。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	八拾錢	貳錢
半ヶ年	五圓六拾錢	增大號共稅不要
壹ヶ年	拾壹圓廿錢	增大號共郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▼外國よりの御注文は壹部につき郵稅金拾錢を申受く
▲ト本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用一割增の事
▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

大正拾年拾貳月拾六日印刷納本
大正拾壹年壹月壹日發行

編輯兼發行者 東京市芝區伊皿子町四番地 平田貫一郎
印刷者 東京市京橋區西紺屋廿七番地
印刷所 秀英舍

(特價貳圓)

發行所 東京芝區櫻田備前町一 改造社
電話銀座二九五四
振替東京八四〇二

死線を越えて　中巻

太陽を射るもの

中巻出

灯は未だ路次をウロ〳〵し、旗もなく、お七五三もなく、屠蘇もなく、餅もなき彼の貧民窟にもお正月は來る、肉を離れ、靈を追究して眞の愛の世界に生きんとする彼の目まぐるしきドン底の生活の苦しき奮鬪――出刄は閃き――ピストルは飛ぶ――貧民窟のゴロ村に――幾たびも――幾十たびも――否十數年に亘りて死生の巷で泰然として動かざる彼の勇敢さと、崇高さには鬼神も泣く、婦女も泣く、國士も、紳士も襟を正しくして清き感激に袖を絞る――本書が我國人に捧げられたる最高愛の聖典で

錢 ◇送料金拾八錢◇

改造社

◇東京芝區櫻田備前町
◇振替東京八四〇二番

アインスタインと相對性理論

理學博士

特に現代と云はず、世界の驚異は絶世の大理學者アインスタイン氏の存在である。彼ニユートン引力の一たび地上に公表さるゝや、總ての理學、科學は氏の學説を以つて鐵則となし、公則となし、此のこと

石原純著〔八版〕

のみは萬代不易の原則、公理なりとして唯一人として疑を挾む者はなかつた。然るに一たびア氏の相對性原理發表さるるに及んでニュートン引力は全然其權威を失墜するに至つた、素より此學則たるや深遠幽邃にして難解の節多し、而も相對性原理の世界的權威石原博士は此の世界的大問題に向つて平明、簡易を旨として氏の學說を批評し、解說して滿天下の好學者に向つて一書を公にした、本書を手にする者はア氏が、數十年に亘りて公にしたる論文其他の著書を坐ながらにして知るの便宜もあるべく、且つ相對性原理のいかなるものであり、且ついかなる根據の上に立ちてそして其が絕體不變の眞理である事も首肯することが出來る。文明國民と稱するものは必ず此一書を通讀するの義務があると共に舊教育卽ちニュートン引力にて培はれたる我々は氏の公理の前に低頭して新規蒔直しの教育を受けなくてはならぬ。教育家、男女學生、會社員、其他あらゆる知識階級よ、來つて眞理の前に自己の時代後れの頭腦を一洗せよ。

四六版布裝函入
定價金貳圓
送料金十六錢

東京芝櫻田備前町
改造社
振替東京八四〇二

謹賀新年

書籍雜誌
大賣捌

東京堂

東京神田表神保町

書籍雜誌
大賣捌

東海堂

東京京橋區銀座二丁目

書籍雜誌
大賣捌

北隆館

東京京橋區元數寄屋町

書籍雜誌
大賣捌

至誠堂

東京日本橋區本石町

書籍雜誌
大賣捌

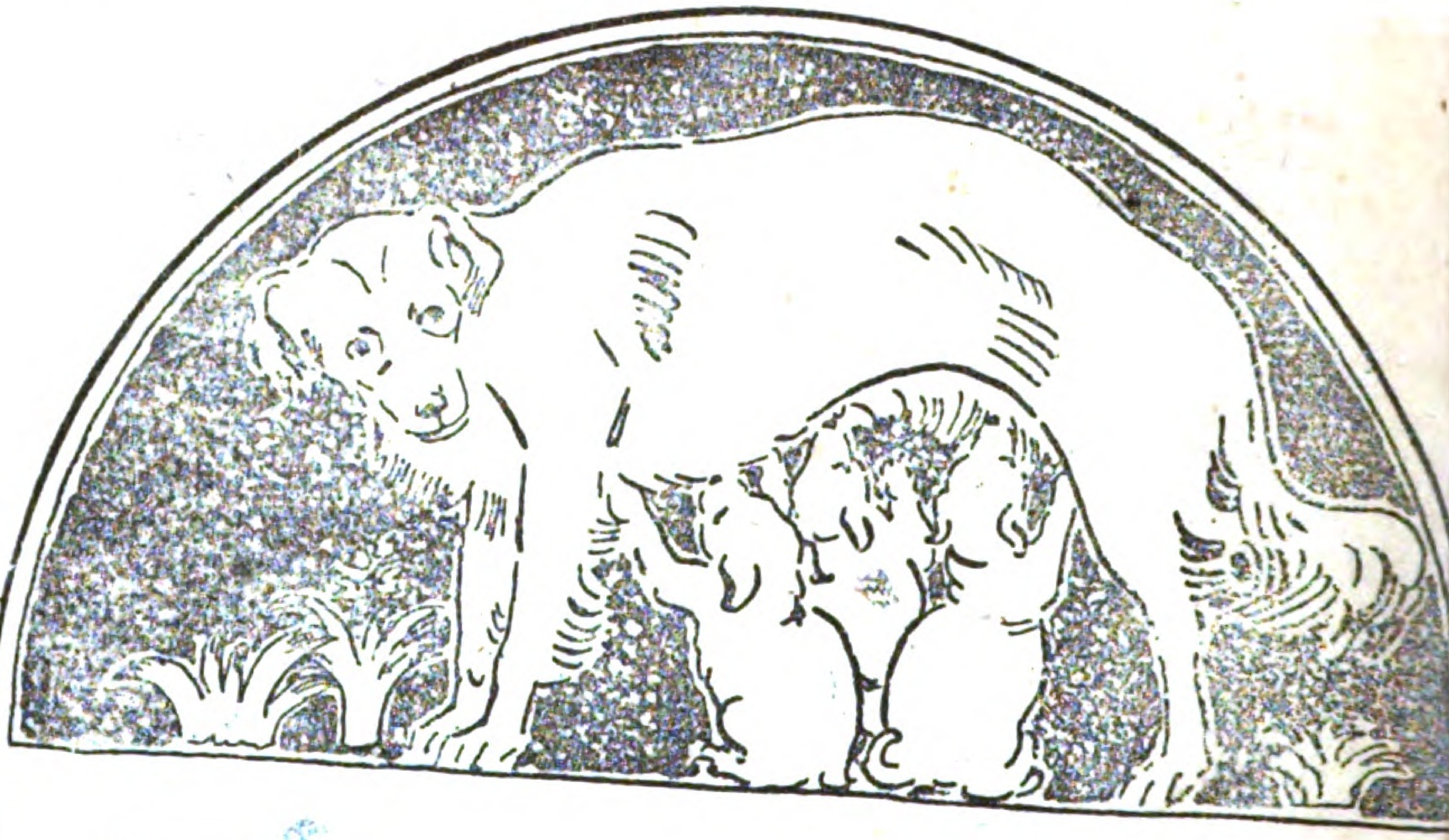
上田屋

東京神田表神保町

書籍雜誌
大賣捌

盛春堂

東京本郷春木町



E KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF
S. LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
E: EIGHTY SEN A COPY. TWELVE YEN A YEAR
CE: KAIZOSHA, 1 SAKURADABIZEN-CHO SHIBA, TOKIO (Two yen this volume only)